

飛石の砦跡・東平井塚間遺跡
東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡
西平井久保田代遺跡

県道神田・吉井停車場線改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

飛石の砦跡・東平井塚間遺跡
東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡
西平井久保田代遺跡

県道神田・吉井停車場線改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道吉井インターチェンジのアクセス道路として改良整備事業が実施されることになった一般県道神田・吉井停車場線は、昭和62年度より一部未開通となっていた藤岡市東平井・西平井地区等が事業化され、これに伴い路線上に所在する埋蔵文化財の発掘調査が、平成元年度より平成4年度にかけて当事業団により行われました。

路線上の付近には、西平井の平井城跡、東平井の飛石古墳群等著名な遺跡が所在しています。4年間にわたる東平井塚間遺跡を始めとする各遺跡の調査成果は、東平井及び西平井地域の歴史を解明する上で貴重な資料になったものと存じます。

当事業団では、これら貴重な資料を公開するための調査報告書作成業務を平成5年度に行いました。そして、それが終了しましたので、ここに「一般県道神田・吉井停車場線道路改良（B）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」を上梓することにしました。

発掘調査から調査報告書刊行に至るまで群馬県土木部道路建設課、同藤岡土木事務所、群馬県教育委員会、藤岡市教育委員会、地元関係者には、大変お世話になりました。これら関係者の皆様に衷心より感謝申し上げます、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で広く活用されることを願い序とします。

平成 6 年 3 月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

- 1 本書は一般県道神田・吉井停車場線道路改良工事に伴う「飛石の砦跡」・「東平井塚間遺跡」・「東平井官正前遺跡」・「東平井土井下遺跡」・「西平井久保田代遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 上記遺跡の概要は抄録の通りである。
- 3 事業名称は「飛石の砦跡」が『東平井土井下遺跡』である他は遺跡名称と同一である。
- 4 事業主体 群馬県（土木部道路建設課）
工事担当 藤岡土木事務所
- 5 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 調査組織は下記の通り。（「/」は理事。「*」は県派遣職員。無印は法人職員）

〔東平井塚間遺跡〕

〔事務担当〕*邊見長雄、*松本浩一、*田口紀雄、*神保侑司、*住谷 進、*巾 隆之、笠原秀樹、*小林昌嗣、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、並木綾子、今井もと子、松井美智子、角田みづほ

〔調査担当〕*下城 正、*中山茂樹、*松村和男

〔東平井官正前遺跡〕

〔事務担当〕*邊見長雄、*松本浩一、*田口紀雄、*神保侑司、*岩丸大作、*巾 隆之、国定 均、*小林昌嗣、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、並木綾子、今井もと子、松井美智子、角田みづほ、松井美智代

〔調査担当〕*飯塚 誠、徳江秀夫、*磯貝朗子

〔飛石の砦跡・東平井土井下遺跡〕

〔事務担当〕*邊見長雄、*松本浩一、*佐藤 勉、*神保侑司、*岩丸大作、*巾 隆之、国定 均、須田朋子、*船津 茂、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、並木綾子、今井もと子、角田みづほ、松井美智代、塩浦はるみ

〔調査担当〕*下城 正、石守 晃、*磯貝朗子

〔西平井久保田代遺跡〕

〔事務担当〕*邊見長雄、*近藤 功、*佐藤 勉、*神保侑司、*斉藤俊一、*巾 隆之、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、*船津 茂、*高橋定義、柳岡良宏、松下 昇、並木綾子、今井もと子、角田みづほ、松井美智代、塩浦ひろみ

〔調査担当〕桜岡正信、石守 晃、*斉藤英俊

※ 上記の発掘調査に参加した発掘作業員は以下の通り。（全遺跡分まとめ、順不同）

浅香春造、阿部イチエ、阿部きよ、阿部忠治、阿部俊次、阿部ノリ子、阿部広子、新井すみ子、新井二男、安藤きく、飯塚静枝、飯塚君子、飯間操、石田和江、石原ヒサ子、岡田いそ江、岡田和亥、岡田登志子、岡田ふじ子、小川美佐子、荻野操、折茂佳子、河西三明、金井清、金井ソノ、金井とく、金田あい子、木村茂男、久保初江、黒沢昌子、小板橋せつ子、小金沢ツヤ、小林千代子、小山ツル、駒形邦子、斎藤忠雄、斎藤敏子、斎藤初子、斎藤文子、斎藤万作、坂井アキ子、桜井康弘、塩原絹代、柴田みさお、神保和子、神保君江、鈴木日出子、須田亮治、須田シゲ子、関口いちゑ、

関口エイ、関根美枝、反町ハナ、高橋弘、高橋マスミ、滝上光代、田島靖美、田中和満、田村カメ、都築通子、中野初次郎、中村スミ江、中村ふじお、中村美知代、野口初枝、秦野真寿江、原田房子、原沢伝十郎、原沢正江、春山梅子、春山米子、樋田久恵、深沢ヨシ子、深沢ハルミ、福田とみ、藤田光夫、古口三郎、古館明、辺見良子、堀越智子、堀越みな子、堀口正雄、松井みき子、松本玲子、三木幹江、向井まさ江、矢島キク江、矢島幸一、矢島サダ子、山崎明、山崎常夫、山田タケ、湯浅京子、湯浅ヤス子、湯浅義雄、横沢早苗

8 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

9 整理組織は下記の通り

〔事務担当〕中村英一、*近藤 功、*佐藤 勉、*神保侑司、*斉藤俊一、*巾 隆之、国定 均、笠原秀樹、*船津 茂、*高橋定義、須田朋子、柳岡良宏、松下 昇、吉田恵子、今井もと子、角田みづほ、松井美智代、塩浦ひろみ

〔整理担当〕石守 晃、長沼久美子、今井サチ子、篠原富子、山崎由紀枝、南雲富子、矢野純子、大島 緑、吉沢照恵、貝瀬真弓

〔遺物写真撮影〕 佐藤元彦

〔保存処理〕 関 邦一、小材浩一、土橋まり子、樋口一之

- 10 東平井土井下遺跡のテフラ分析・プラント・オパール分析と西平井久保田代遺跡のテフラ分析については株式会社古環境研究所に委託した。また西平井久保田代遺跡2区-1号住居及び1号落ち込み出土土器の胎土分析を株式会社第四紀地質研究所に委託した。これらの分析の報告書は第7部に掲載した。
- 11 一部石材鑑定は飯島静雄氏に、縄文時代の遺物については当事業団の菊地実、陶磁器については大西雅広、板碑については同じく新倉明彦の所見によった。
- 12 上記2項以外の本書の執筆、及び本書の編集は石守晃が行った。
- 13 本報告書に掲載した全遺跡の発掘調査時に於ける遺構測量と遺構図のトレースに当たっては、その一部を技研測量設計株式会社に委託した。航空写真撮影については、東平井地区はたつみ写真スタジオに、西平井地区については有限会社青高館に委託した。
- 14 尚、発掘調査及び本報告書作成に当たっては群馬県藤岡土木事務所、群馬県高崎土地改良事務所、群馬県教育委員会、藤岡市教育委員会、藤岡市東平井地区自治会、藤岡市西平井地区自治会、岸弘氏、寺内敏郎氏、平井和午氏、平井彦三郎氏、古郡正志氏、丸山治雄氏など地元関係機関・各位に多大なご支援を賜った。記して謝意を表します。

凡 例

- 1 本書に使用した方位は座標北を示す。(国家座標第IV系)
- 2 本書に掲載した地形図は国土地理院1:50,000及び1:25,000地形図と藤岡市都市計画図1:2,500を使用した。また、一部航空写真については国土地理院所有のものを使用した。
- 3 本書に掲載した遺構図・遺物図の縮尺率については、個々の図に縮尺率またはスケールを付した。
- 4 土層及び土器類の色調のうち色調の名称の後に()を付して記号を記載したものは、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 (財)日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』昭和45年を使用した。

- 5 火山噴出テフラのうち、天明3年（1783）浅間山噴出のものについては『As-A』、天仁元年（1108）浅間山噴出のものについては『As-B』の略号を用いる。
- 6 遺構図中、焼土については点描のスクリーントーンを貼付した。また、こも編み石に貼付されたスクリーントーンは加工痕・摩耗痕を示す。
- 7 遺物番号は個々の遺構或は地区毎の通し番号であり、資料番号は当事業団遺物管理用登録番号である。
- 8 本報告書に掲載された、遺物・遺構写真・遺構図面等の第一次資料は群馬県埋蔵文化財調査センターに収納し、管理委託を受ける（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団によって管理・保存される。

報告書抄録

ふ り が な とんぴいしのとりであと・ひがしひらいつかまいせき・ひがしひらいかんしょうまいいせき・ひがしひらいどいしたいせき・にしひらいくぼたしろいせき

書 名 飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡

副 書 名 一般県道神田・吉井停車場線道路改良工事(B)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

シ リ ー ズ 名 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

シリーズ番号 第174集

編 集 者 名 石守 晃

編 集 機 関 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

編集機関所在地 ㊦377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784番地-2

発 行 年 平成6年3月31日

所 収 遺 跡 飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡

調 査 原 因 県道神田・吉井停車場線道路改良工事（バイパス道路建設）

フ リ ガ ナ 所収遺跡名	フ リ ガ ナ 所 在 地	市町村コード 事業団コード	北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積 (㎡)
とんぴいし とりであと 飛石の砦跡	ふじおか しひがしひら い あぎてろにし 藤岡市東平井字寺西	10209 10005-00375	36°14'05"	139°02'23"	1991(H3).10.18 1991(H3).12.06	1,160
ひがしひら い つか ま い せき 東平井塚間遺跡	ふじおか しひがしひら い あぎつか ま はら 藤岡市東平井字塚間・原 前・雨沼	10209 10005-00324	36°14'02"	139°02'36"	1989(H1).07.01 1989(H1).09.29	4,200
ひがしひら い かんしょうまい い せき 東平井官正前遺跡	ふじおか しひがしひら い あぎかんしょうまい 藤岡市東平井字官正前	10209 10005-00321	36°13'47"	139°02'47"	1990(H2).10.16 1990(H2).12.26	4,500
ひがしひら い ぞ い したい せき 東平井土井下遺跡	ふじおか しひがしひら い あぎきるかかわ ぞ い 藤岡市東平井字猿川・土井 した下	10209 10005-00348	36°13'53"	139°03'06"	1991(H3).09.27 1992(H4).01.20	5,440
にしひら い く ぼ た しろ い せき 西平井久保田代遺跡	ふじおか ーにしひら い あぎく ぼ た しろ 藤岡市西平井字久保田代・ 田代	10209 10005-00357	36°14'10"	139°02'10"	1992(H4).06.24 1992(H4).09.30	2,530

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構・遺 物	特 記 事 項
飛石の砦跡	包蔵地 城館址	平安時代 室町時代	溝 土坑 砦跡(堀・土塁)、キセル	
東平井塚間遺跡	包蔵地 古墳群 包蔵地	縄文時代 古墳時代 中・近世	土坑 縄文土器、打製石斧 古墳1基(周濠) 溝	
東平井官前遺跡	包蔵地 包蔵地 包蔵地	奈良時代 平安時代 中・近世	竪穴住居、坏 竪穴住居、羽釜 畠、火葬土壇、溝、井戸、内耳鍋	
東平井土井下遺跡	包蔵地 包蔵地	平安時代 中・近世	竪穴住居、水田面、羽釜、高台付碗 溝、土坑群	土壌分析 花粉分析
西平井久保田代遺跡	包蔵地 包蔵地 包蔵地 包蔵地	縄文時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 近世遺構	竪穴住居(前期)、土坑(前・中期)、石鏃 竪穴住居、長胴甕、杯 竪穴住居、溝、包含層、杯、こもあみ石 竪穴住居、土坑、高台付碗、皿、コの字甕 道、溝	土壌分析 胎土分析

目 次

序

例 言

凡 例

抄 録

第1部 県道神田・吉井停車場線改良工事に伴う埋蔵文化財の調査

第1章 調査に至る経過…………… 3

第1節 県道神田・吉井停車場線と埋蔵文化財の調査…………… 3

第2節 予定路線内の地区名称…………… 4

第3節 試掘調査…………… 4

第2章 遺跡の範囲と調査区の認定…………… 7

第1節 遺跡の範囲と設定…………… 7

第2節 調査区とグリッドの設定…………… 8

第3章 遺跡をとりまく環境…………… 9

第1節 地理的・地質的環境…………… 9

第2節 歴史的環境……………10

第2部 東平井飛石の砦遺跡

第4章 飛石の砦跡の調査……………15

第1節 調査の経過……………15

第2節 標準土層……………15

第3節 遺跡の概要……………17

第4節 発見された遺構と遺物……………18

第5節 小 結……………27

遺物観察表……………29

写真図版

第3部 東平井塚間遺跡

第5章 東平井塚間遺跡の調査……………33

第1節 調査の経過……………33

第2節 標準土層……………33

第3節 遺跡の概要……………35

第4節 発見された遺構と遺物……………36

第5節 小 結……………45

遺物観察表……………47

写真図版

第4部 東平井官正前遺跡

第6章 東平井官正前遺跡の調査……………51

第1節 調査の経過……………51

第2節 標準土層……………51

第3節 遺跡の概要……………53

第4節 発見された遺構と遺物……………54

第5節 小 結……………91

遺物観察表……………94

写真図版

第5部 東平井土井下遺跡

第7章 東平井土井下遺跡の調査……………107

第1節 調査の経過……………107

第2節 猿川地区の標準土層……………107

第3節 猿川地区の概要……………108

第4節 猿川地区の発見された遺構と遺物……………109

第5節 土井下地区の概要……………117

第6節 土井下地区の発見された遺構と遺物……………119

第7節 小 結……………135

遺物観察表……………136

写真図版

第6部 西平井久保田代遺跡

第8章 西平井久保田代遺跡の調査……………143

第1節 調査の経過……………143

第2節 標準土層……………143

第3節 遺跡の概要……………145

第4節 発見された遺構と遺物……………147

第5節 小 結……………219

遺物観察表……………222

写真図版

第7部 調査のまとめと自然科学分析の調査報告

第9章 調査のまとめと自然科学……………249

写真図版

写真図版目次

図版 1	遺跡遠景	図版19	飛石の砦全景
図版 2	東平井古墳群	図版20	飛石井関出土遺物
図版 3	平井金山城 遺跡遠景		東平井塚間遺跡
図版 4	1区トレンチ 調査設定状況 6区トレンチ	図版21	東平井古墳群
図版 5	2区トレンチ 3区深掘りセクション 4区Aトレンチ 5区深掘りセクション	図版22	2区全景図版23 2区1号墳
図版 6	7区トレンチ 9区 8・9区調査風景 10・11区トレンチ	図版24	2区ピット群 2区道の間トレンチ
	飛石の砦跡	図版25	3区全景
図版 7	遺跡全景	図版26	4区全景 4区1号溝
図版 8	1区調査前現況 土塁	図版27	4区2・3号溝 4区1号溝遺物出土状態 4区1～3号土坑
図版 9	堀・土塁 堀調査風景	図版28	5区全景
図版10	堀・礫出土状況	図版29	5区1号溝 5区1～3号土坑 2・3区調査風景
図版11	土塁全景 北から 石組	図版30	塚間遺跡出土遺物
図版12	土塁 1号溝		東平井官正前遺跡
図版13	堀・土塁セクション 集石 東から 4～6号溝	図版31	8・9区全景
図版14	2・3号溝	図版32	1号住居
図版15	ピット群	図版33	2号住居
図版16	1～5号ピット	図版34	3号住居
図版17	1～7号土坑	図版35	4号住居
図版18	7～9号土坑	図版36	5号住居
		図版37	1～9号溝
		図版38	1～8号土坑
		図版39	9・11～13号土坑 16・17号土坑 20・23号土坑
		図版40	1号井戸 2号井戸
		図版41	火葬土壇

図版42 畠

東平井官正前遺跡出土遺物

図版43 2号住居

図版44 3・4号住居

図版45 5号住居・1号井戸

図版46 1号井戸

図版47 1号井戸

図版48 1号井戸

図版49 1号井戸

図版50 1号井戸

図版51 1号井戸・8号溝

図版52 1・2号井戸、7・8号溝、2号土坑、包含層

図版53 集合

図版54 集合

東平井土井下遺跡（猿川地区）

図版55 調査前路線全景
試掘

図版56 10・11区全景

図版57 1号住居

図版58 1号住居

図版59 2号住居

図版60 2号住居図版61 2号住居

図版62 3号住居

図版63 1～4号土坑

東平井土井下遺跡（土井下地区）

図版64 12・13区全景
調査風景

図版65 12～14区トレンチ
12～14区通しセクション

図版66 14区2面

図版67 15区セクション
15区全景

図版68 14区1号住居

図版69 12区1・4号溝

14区1号溝

図版70 14区2～4号溝

15区1号溝

図版71 12区1号土坑

13区5号土坑

13区1面土坑群

13区7・8号土坑

13区1面9～12号土坑

図版72 14区1～2号土坑

15区1～6号土坑

図版73 14・15区ピット遠景 西から

14区1～7号ピット

図版74 2面旧河道

東平井土井下遺跡（猿川地区）出土遺物

図版75 1・2号住居

図版76 2・3号住居、包含層

東平井土井下遺跡（土井下地区）出土遺物

図版77 8～10・12～14号土坑、1号住居、2・3号溝、包含層

図版78 猿川・土井下遺跡集合

西平井久保田代遺跡

図版79 西平井久保田代遺跡上空

図版80 1区全景上空

図版81 1号住居

図版82 2号住居

図版83 3号住居

図版84 1区ー1 7号溝

1区ー1 1～4号土坑

図版85 1区ー1 5・6・9号土坑

1区ー2全景 西から

1区ー2包含層

1区ー3全景

図版86 1区ー3 1号落ち込み

1区ー3 調査風景

1区ー4 全景

1区—5 全景
図版87 2区上空
2区調査風景
図版88 2区1号住居全景
図版89 2区1・2号土坑
2区4号土坑（風倒木）
2区1号落ち込み
図版90 3区全景上空
3区—1全景
3区—2全景
3区—3全景
3区—4全景
図版91 1号住居
図版92 2号住居
図版93 3号住居
図版94 4号住居
図版95 5号住居
図版96 6号住居
図版97 7号住居
図版98 8・13号住居（手前8号住居、奥13号住の
カマド）
図版99 8・13号住カマド
図版100 3区9号住居
図版101 3区10号住居
図版102 3区11号住居
図版103 3区11・12号住居
図版104 3区1道1・2面
図版105 3区1道3面
図版106 3区1・2号溝
3区1・2・4・11号土坑
図版107 3区12・13・15～21号土坑

図版108 3区ピット群

西平井久保田代遺跡出土遺物

図版109 1区1・2・3号住居
図版110 1区2・3号住
図版111 1区3号住居、包含層
図版112 1区集合、包含層、2号土坑
図版113 1区1集合
図版114 2区1号住居
図版115 2区1号住居、1号落ち込み、
図版116 2区1号住居、1号落ち込み、包含層
図版117 2区集合
図版118 3区1・2号住居
図版119 3区2・3・4号住居
図版120 3区5・6・7号住居
図版121 3区8号住居
図版122 3区9号住居
図版123 3区9号住居
図版124 3区9号住居
図版125 3区10・11号住居
図版126 3区11号住居
図版127 3区11・12号住居
図版128 3区12号住居
図版129 3区13号住居
図版130 3区13号住、1・14号土坑、2号溝、1号
道3面
図版131 1・2・3区包含層
図版132 3区集合、包含層
図版133 3区集合
図版134 3区集合
図版135～図版139 自然科学分析

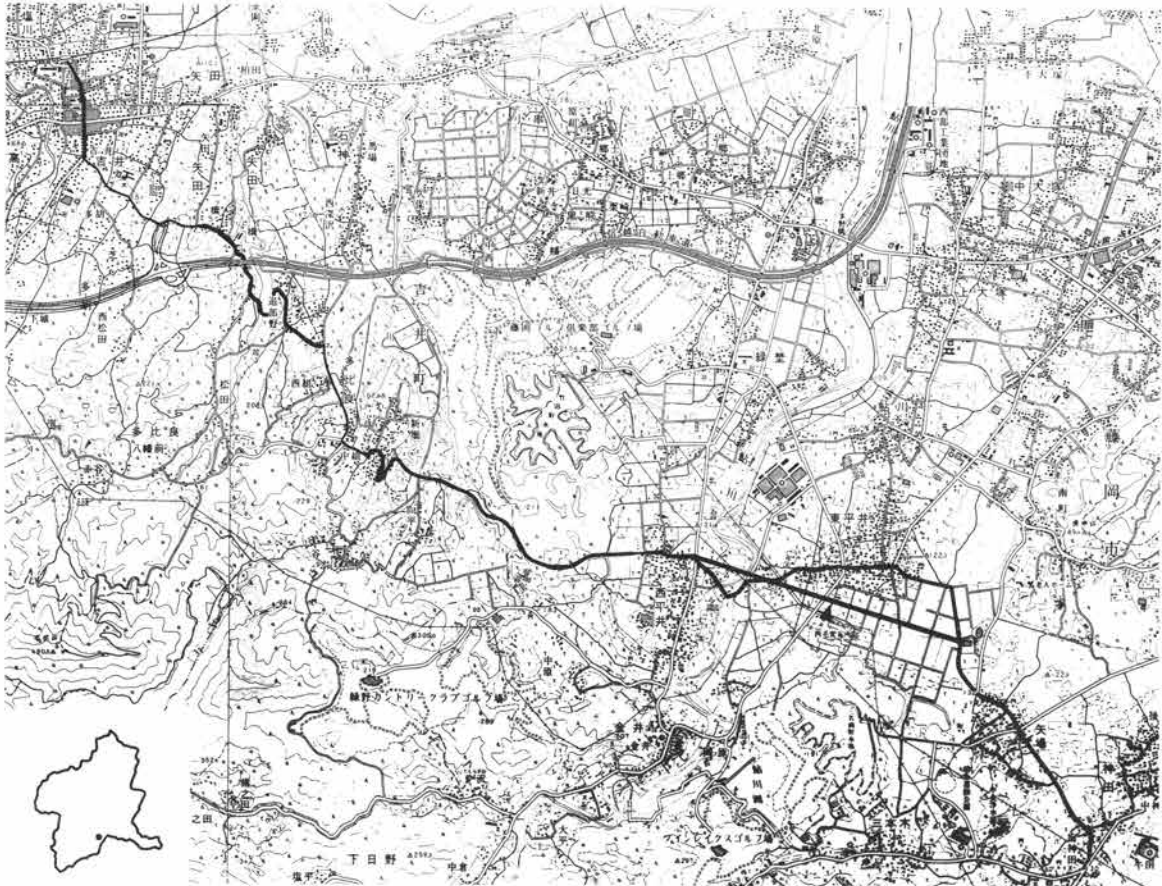
第 1 部 県道神田・吉井停車場線改良工事に伴う埋蔵文化財の調査



供用・改良工事中の県道神田・吉井線停車場遠景

第1章 調査に至る経過

第1節 県道神田・吉井停車場線と埋蔵文化財の調査



第1図 遺跡位置図（国土地理院1/2500）

一般県道265号線^{じんだ}神田・吉井停車場線は藤岡市神田を基点とし、同市^{やば}矢場・^{ひがしひら}東平井・^{にしひら}西平井・^{たの}多野郡吉井町の^{たいら}多比良・^{やた}矢田を経て上信電鉄吉井駅に至る総延長10,963.7mの道路である。この道路は多野郡^{おにし}鬼石町方面から吉井町方面に抜ける道路であるが、藤岡・吉井の市町境で整備が遅れていたため東平井または西平井付近で北に折れて国道254号線に出るのが通例であった。上信越自動車道の建設計画に伴い、鬼石方面から矢田インターチェンジへ至るアクセス道路として整備されることになり、この際、通勤時間帯に藤岡市街地方面からの車両で混雑する東平井地区付近では集落の南を通るルートで一部バイパスを通

すこととなった。

こうした中、東平井地区の予定路線の西^{あゆかわ}廻り鮎川右岸地域が東平井古墳群に含まれるため、昭和62年10月、工事を担当する藤岡土木事務所から県教育委員会（文化財保護課）に対し埋蔵文化財調査の依頼があった。県教育委員会は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に当該地区の発掘調査を依頼。翌平成元年6月、群馬県（道路建設課）と同事業団は委託契約を締結して、東平井塚間遺跡の調査に入った。その後本調査と平行してバイパス予定地域への試掘調査を実施。遺跡範囲を確定して順次本調査へ入ることとなったのである。

第2節 予定路線内の地区名称



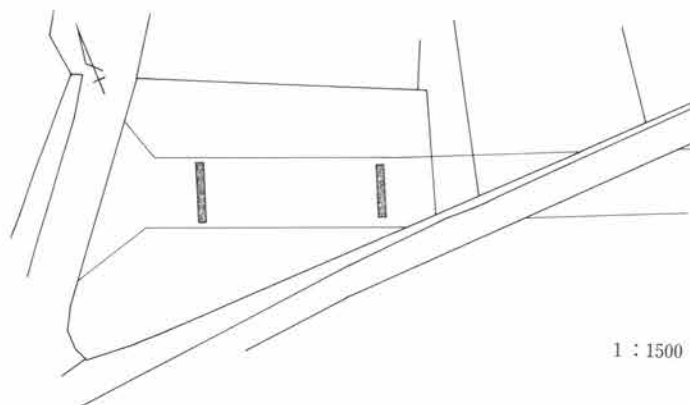
本事業は藤岡市の平野部の西南部に在る大字『矢場』『東平井』『西平井』の3地区にまたがっている。東平井は矢場の北西、鮎川を挟んで西平井の東に位置している。矢場地区で予定路線に係る小字は『道じよう上』であり、東平井は東から『土井下』『三ツ目川原』『猿川』『官正前』『雨沼』『原前』『塚間』『寺西』、

西平井では東から『町下』『久保田代』『田代』の字名を持つ土地が並んでいる。このうち東平井地区の字寺西については、ここが『飛石の砦』と呼ばれる周知の城館址であるため寺西に代わって『飛石の砦』を用いる他は、本章では上述の小字名称を用いたい。

第3節 試掘調査

本事業に於ける試掘調査は、当初から本調査に入っ
た字雨沼・原前・塚間地区（東平井塚間遺跡）を除

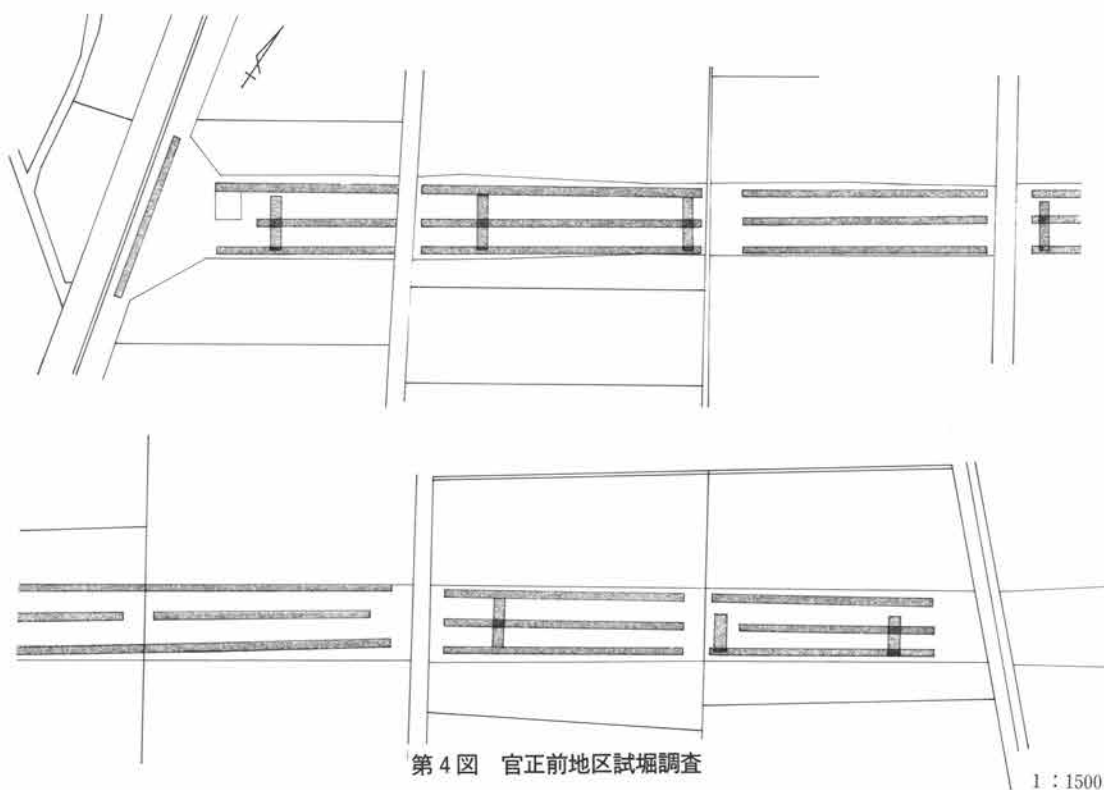
き実施している。尚、字雨沼・原前・塚間地区に対
しては土層確認の為のテストピットを掘削している。



第3図 飛石地区試掘調査

1 飛石の砦の試掘調査

飛石の砦の試掘調査は東平井塚間遺跡調査中の平成元年8月25日～31日にかけて、遺存する土塁西側地域に対するトレンチ調査で実施した。トレンチは路線を横断する方向（南北方向）で東西2本を入れ、東側のトレンチで小さい落ち込みを確認し、更に当該地域が飛石の砦の内郭に当たることを勘案して本調査の必要を報告した。



第4図 官正前地区試掘調査

1:1500

2 字官正前地区の試掘調査

字官正前地区に対する試掘調査は、東平井塚間遺跡調査中の平成元年8月30日～9月12日にかけてのもの（以下「1次試掘」とする）と、より細かい遺構の遺存状況把握のために東平井官正前遺跡調査当初の平成2年10月18日～29日にかけて実施した試掘調査（以下「2次試掘」とする）の2回実施している。

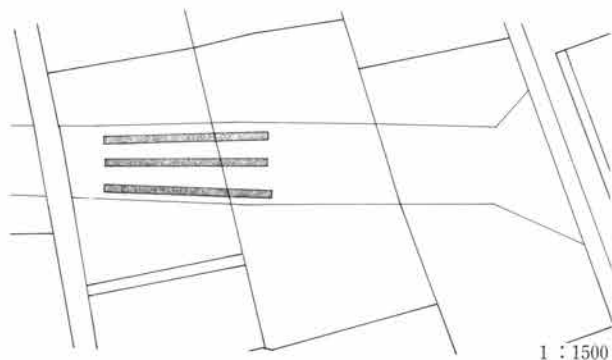
1次試掘は路線を横断する方向（南北方向）のトレンチを、後述する第6～10調査区に対し第4図のように9カ所を設定して実施した。この結果6～10区に至る6カ所のトレンチでピットや落ち込み等の

遺構若しくはその可能性を持つ状態を確認し、字官正前地区全体に本調査の必要を報告した。

2次試掘は路線の中央及び左右の路線幅に沿って3本のトレンチをほぼ全面に亘って設定した。この試掘調査の結果、6区に於いては溝（1号溝）と焼土（火葬土壌）を確認、この周囲に限定して拡張調査する方針を立てた。また、遺構の確認できなかった7区については基本的に調査対象外とし、全面に遺構の分布が認められた8～10区については全面調査の方針を固めた。

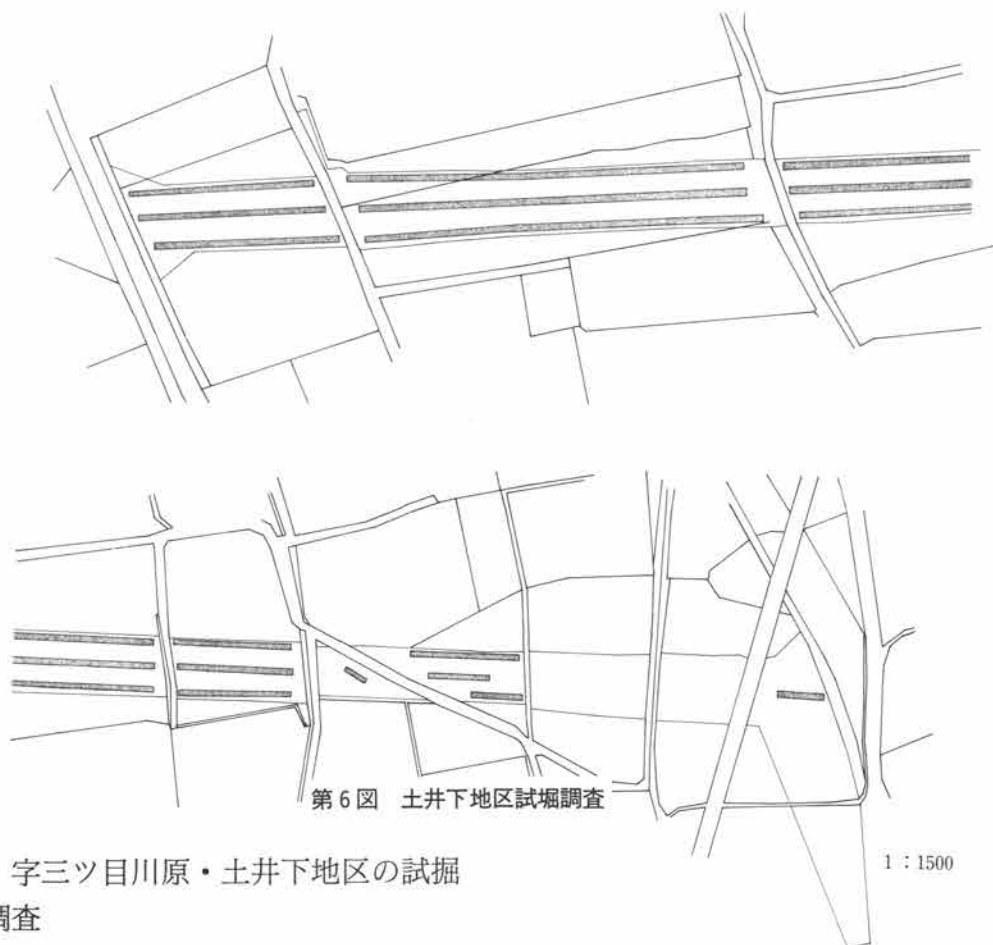
3 字猿川地区の試掘調査

字猿川地区は隣接する藤岡市教育委員会の藤岡平遺跡群の調査状況から東半部は本調査対象地域とするという方針であったが、残る西半部に対して試掘調査を実施することとなった。試掘調査は路線に平行な3本の試掘トレンチを設定して、発掘調査当初の平成3年9月27日から実施した。この結果、当該地域に遺構等の遺存が認められなかったため、西半部については調査対象外とすることとした。



第5図 猿川地区試掘調査

1:1500



4 字三ツ目川原・土井下地区の試掘調査

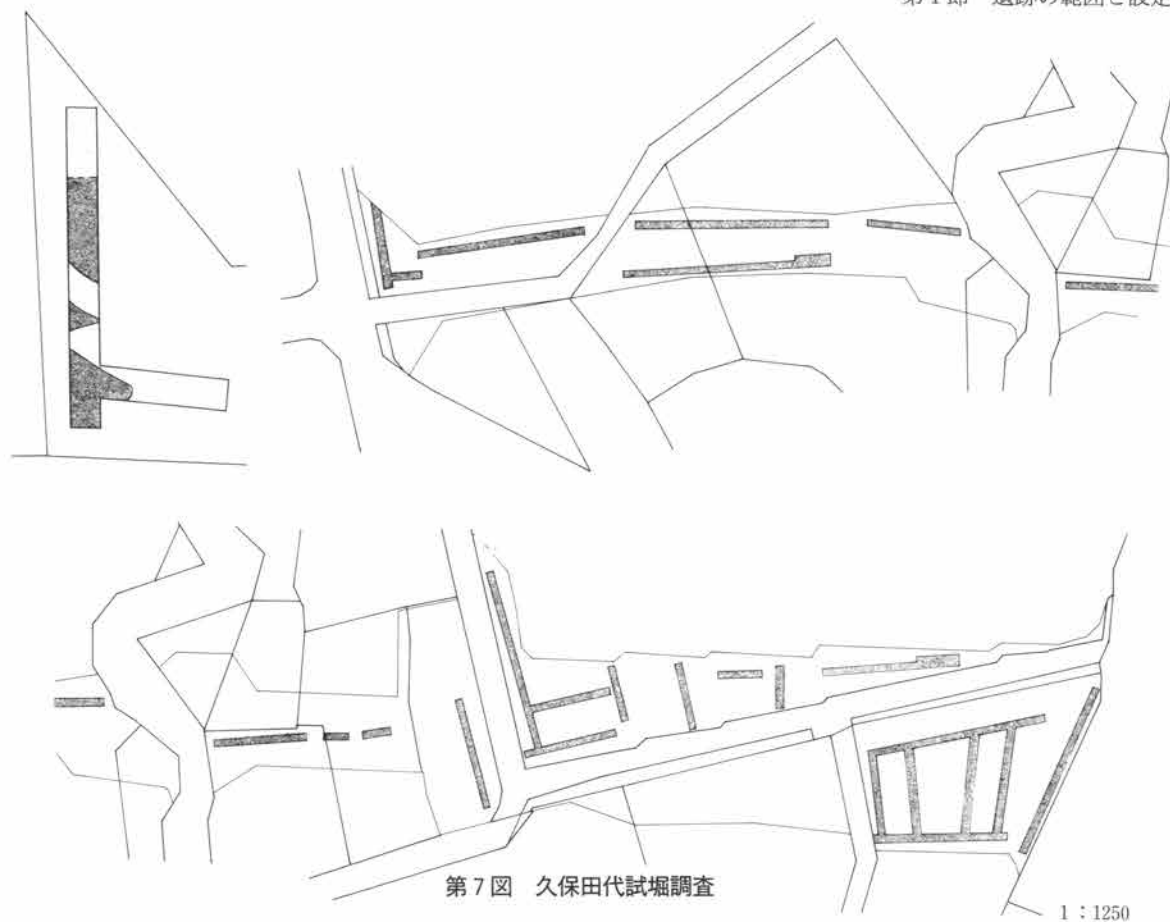
字三ツ目川原・土井下地区の試掘調査は、東平井官正前遺跡の本調査に伴って、字三ツ目川原に対しては平成2年11月26日に、字土井下地区のうち西半の水田地域（後述する調査区の11・12区）については同月16日～19日、東半の台地部以東（同じく13・14・15区）に対しては同月27日に実施した。

試掘調査は路線中央と左右にこれに沿って3本のトレンチを設定した方法で行い、諸般の事情でトレンチを設定できなかった字土井下地区の台地部分以東の一角を除き、ほぼ全面にトレンチを設定した。試掘調査の結果、字三ツ目川原地区には遺構等は確認されなかったため、同地区は調査対象外とすることとした。字土井下地区西半の水田地域には浅間山噴出B軽石（1108年噴出、As-B）の乗る水田面が確認され、東半の台地部では焼土（14区－11住居）が認められた。また、東端の低地部では谷地形に伴う水田等の遺存が予想されたため、字土井下地区については全面調査とする旨の所見を出した。

5 字町下・久保田代の試掘調査

鮎川左岸地域の試掘調査は群馬県教育委員会（文化財保護課、若林正人文化財保護主事・相京建史嘱託）によって、平林沢を境とする東側の字町下と西側の字久保田代を対象に平成3年6月20日～25日にかけて、第7図のように路線の形状等に併せ任意に巾約1mのトレンチを設定する方法で実施された。試掘トレンチの掘削は機械掘削によった。

試掘調査の結果、字町下地区に遺構等の遺存は見られなかったため、当該地区は発掘調査の対象外となった。字久保田代地区は西寄り県道金井・倉賀野停車場線際の20・21トレンチに竪穴住居（3区－2・3・4・8号住居）、また中部東寄り南側の24トレンチでは竪穴住居（3区－10号住居）や土坑等を確認した。24トレンチの北に平行する23トレンチ、20・21トレンチと23・24トレンチ間の22トレンチには遺構等を確認することはできなかったが、20・21・24ト



第7図 久保田代試掘調査

1 : 1250

レンチの遺構の遺存状況から22・23トレンチ周辺にも遺構の存在が想定された。こうしたことから字久保田代地区は発掘調査の対象地域と認定され、本調査に入ることとなった。

尚、県道金井・倉賀野停車場線以西の田代地区上

述の試掘調査段階では、諸般の事情から試掘を行うことができなかった。本来であれば本調査当初段階で試掘を実施すべきところであったが、用地幅が狭いこと、掘削当初から遺構が確認されたことなどから試掘調査を省略した。

第2章 遺跡の範囲と調査区の認定

第1節 遺跡の範囲と設定

試掘調査の成果等を受けて、発掘調査対象地区域を以下のように分割、遺跡名称を設定した。

大字東平井のうち、鮎川から右岸部、県道神田・吉井停車場線までの飛石の砦地区（大字東平井字西）を『飛石の砦跡』、県道神田・吉井停車場線から県道上日野・藤岡線までの字塚間・原前・雨沼の地域を『東平井塚間遺跡』、県道上日野・藤岡線以東の字猿川との境をなす農業用水路までの字官正前地域を『東平井官正前遺跡』とした。また、字官正前と

の境にある用水路と農道以東の三名湖に至る道路までの字猿川を『猿川地区』とし、この道路の東にある用水路から県道神田・吉井停車場線までの大字東平井字土井下と大字矢場字道上を『土井下地区』として事業年度の関係から『猿川地区』と『土井下地区』を合わせて『東平井土井下遺跡』とした。また、大字西平井の字久保田代と田代の地域は『西平井久保田代遺跡』と称することとした。

第2節 調査区とグリッドの設定

1 東平井以東地区

大字東平井・矢場地区の調査区は各遺跡共通の基準を以て設定した。調査区は路線センターライン上、飛石の砦跡西の公道上のセンター杭№73を起点として100m毎にポイントを落とし、ポイントに直交するラインで区切ってこの間を一区とした。区の名称はアラビア数字で西側から東側に向かって1区～15区とした。

各区のセンターライン西端のポイントはM-01と呼称し、それを起点として東へ5m毎にM-02・M-03というようにポイントを設定する。M-21は次の区のM-01となる。

それぞれのポイントは、次のポイントまでの地域呼称も兼ね、センターラインの北側はL、南側はRを付し、M-02の北側地域はL-02、南側地域はR-02となる。グリッドは5mグリッドであり、上述のポイントに準拠して設定される。尚、各区の基準となる第IX系を用いた国家座標は下表の通り。

区	ポイント	X 軸	Y 軸
1区	M-02	24919.517	-71401.892
2区	M-01	24890.937	-71311.293
3区	M-01	24860.852	-71545.926
4区	M-01	24830.767	-71120.559
5区	M-01	24800.683	-71025.191

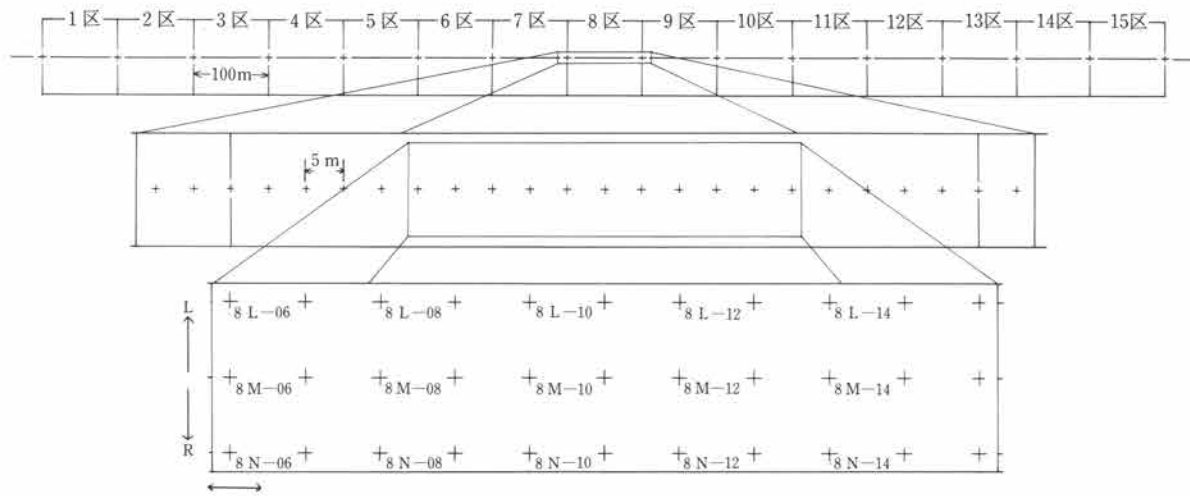
区	ポイント	X 軸	Y 軸
6区	M-17	24746.351	-70853.530
7区	M-05	74734.498	-70815.383
8区	M-01	24715.199	-70737.585
9区	M-05	24674.329	-70624.648
10区	M-01	24655.030	-70546.850

区	ポイント	X 軸	Y 軸
11区	M-01	24620.177	-70452.987
12区	M-00	00000.000	-00000.000
13区	M-00	00000.000	-00000.000
14区	M-00	00000.000	-00000.000
15区	M-00	00000.000	-00000.000

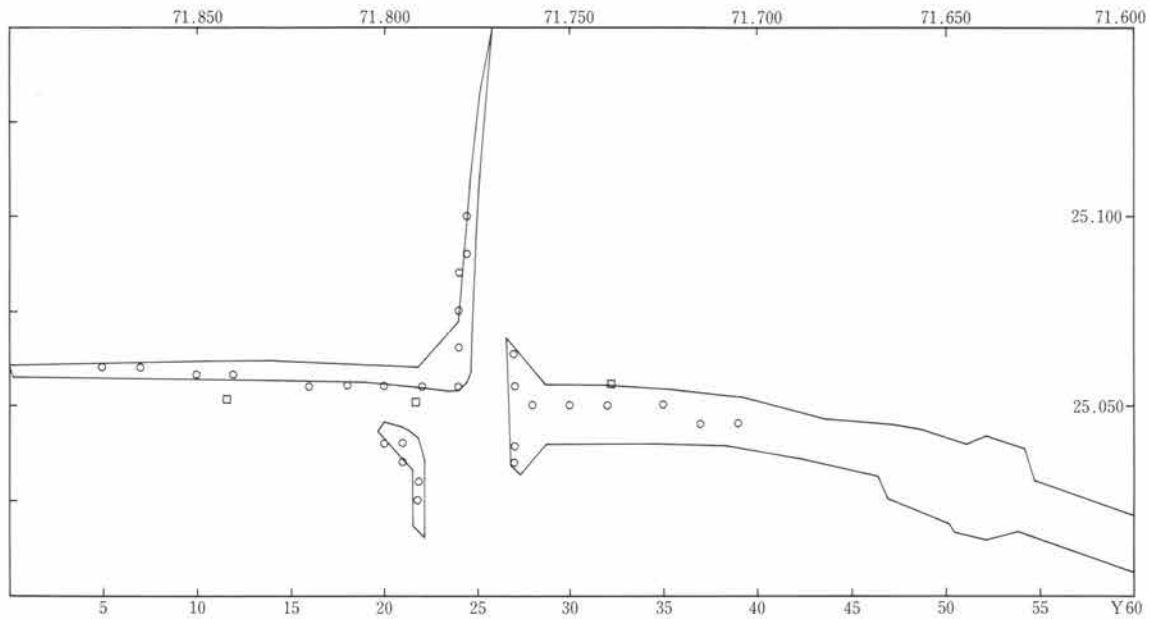
2 西平井地区

西平井地区、即ち西平井久保田代遺跡は県道等によって分断されているため、その区画を以て地区とした。県道金井・倉賀野停車場線以西で、県道神田・吉井停車場線以北を1区、以南を2区とし、県道金井・倉賀野停車場線以东を3区とした。1区と3区は市道・馬入れ・掘削順序によりさらに小区を設定し、第10図で示したように1区は西から1区-1、1区-2、1区-3、1区-3から北へ向かって1区-4、1区-5と細分した。また3区は県道寄りの市道5335号線以南を3区-1、以北を3区-2。市道5335号線以东で市道よりの北側を3区-3、他を3区-4、及び市道下（3区-5）に細分した。

グリッドは南西隅を基点とする5m方眼を設定した。路線外西南に在る国家座標第IX系X（南北）軸+25150、Y（東西）軸-71900を仮定の起点とし、この起点から5m毎にX軸は「X-」を付して北に向かって、Y軸は「Y-」を付して東に向かって算用数字を加えたグリッド名称を呼称することとした。



第8図 東平井地区グリッド設定図



第9図 西平井地区グリッド設定図

第3章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的・地質的環境

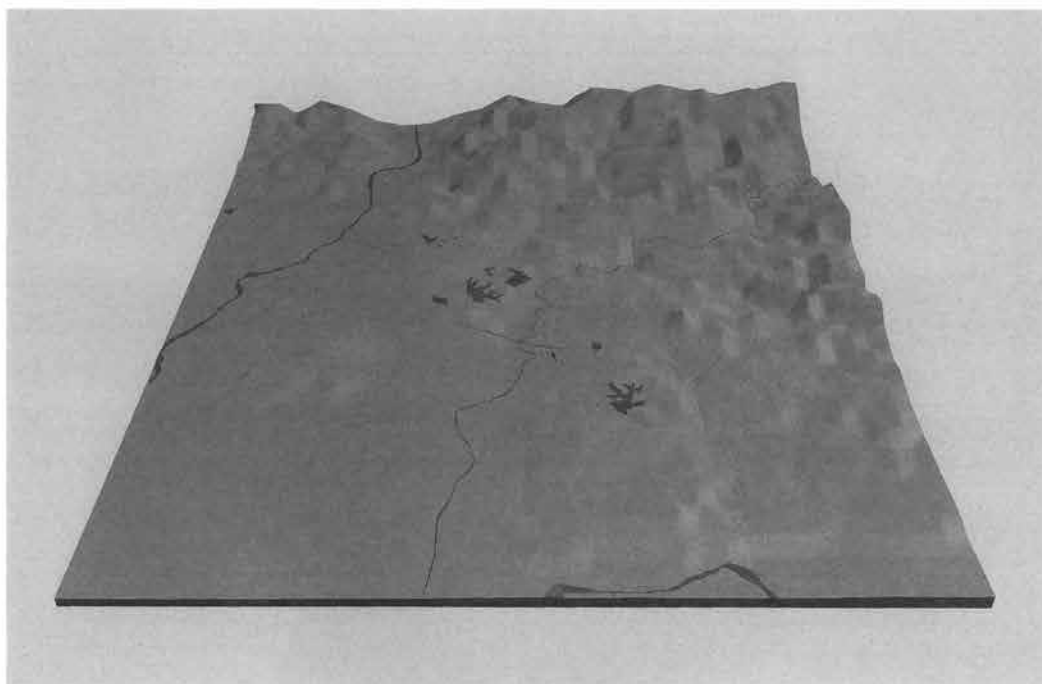
本遺跡の立地する矢場・東平井・西平井地区は藤岡市の西部、平地部と丘陵部との境付近に位置する。調査区からは東に庚申山、南に日野山地、西には吉井町との境に連なる丘陵を眺めることができるが、調査区の立地する平地部は東南角付近を除き、これらの丘陵・山地部によってほぼコ字状に画されている。日野山地から流れ出る鮎川は、このコ字状に囲われた土地の西寄りを、しっかりした谷地形を形成しながら北流している。

本地区からは、東の庚申山と日野山地に至る丘陵との間を東南方向に抜けて、鬼石町に至る道路が延び、南の鮎川沿いには藤岡市の日野地区を通して、山地部に向かう道路が延びている。また、西の丘陵部を越えて吉井町の多比良地区に向かう道があり、北に向かっては鮎川沿いに高崎市西南の山名地区や吉井町へ通じる道路が延び、その東寄りには藤岡市街地に通じる道路が走っている。このように当該地域は、現代に於いても地域に於ける交通路の分岐点

となっているのである。

地質的に見ると南部の日野山地は三波石変成帯である。平地部のうち鮎川左岸に位置する西平井地区及びその北に連なる緑埜・白石地区は、鮎川によって形成された沖積地帯である緑野面からなる。後者の地域は部分的に旧河道によって開析され、西側の丘陵麓部から鮎川に向かって緩やかに傾斜している。また、鮎川右岸の東平井地区及び矢場地区は比較的フラットな状態にあるが、これらに連なる神田・鮎川・藤岡地区などは神流川と鮎川によって形成された扇状地である藤岡面であり、庚申山の周囲には旧河道や後背湿地が認められる。尚、この旧河道の一部を東平井土井下遺跡の東端に確認した。

こうしたやや広い地域を概観した地質概要とは別に、各遺跡の土壌の観察に於いては小規模な旧河道が各所に散見されるなど一定しない堆積状況を見ることができた。これらの所見からは、複雑な土地形成の過程を窺うことができるのである。



第10図 地形鳥瞰図

第2節 歴史的環境

次に本書に報告する飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡付近の遺跡について概観し、その歴史的環境について触れてみたい。

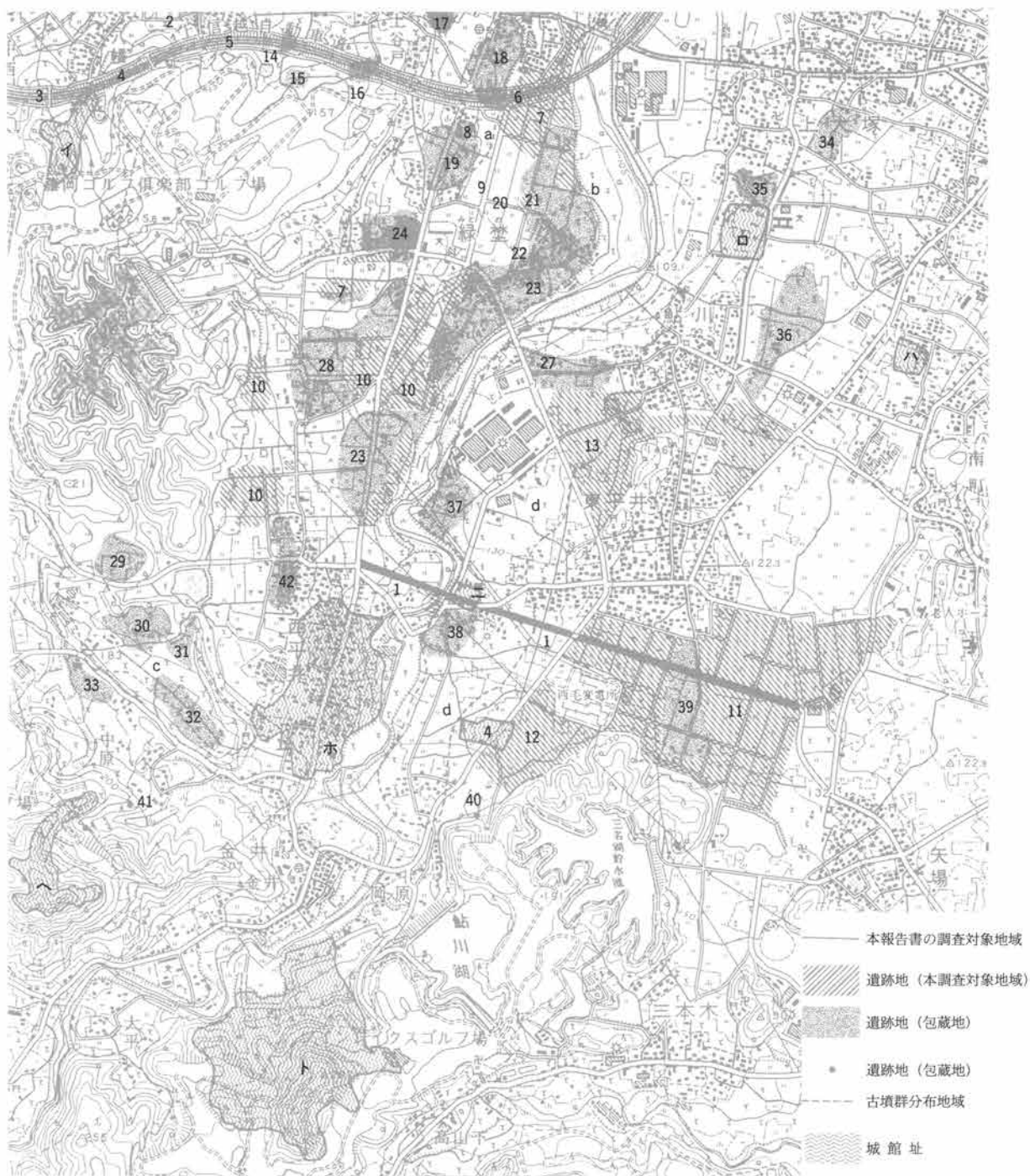
鮎川沿いの地域で、旧石器時代の遺物を出土する遺跡は現在のところあまり多くない。緑埜地区遺跡群(7)では始良・丹沢パミス層の下位よりの出土を見、一方、島遺跡(26—⑦)では同層前後からの出土を見た。また、黒熊八幡遺跡から旧石器が出土し、旧石器時代から縄文時代草創期の石器を出土する遺跡には竹沼遺跡(10)がある。

これに対し、縄文時代の包蔵地は広く分布している。草創期の遺跡としてはポイントを出土した平井地区No.33遺跡(40)があり、前期のものが知られる遺跡には黒熊八幡遺跡(3)・白石根岸遺跡(5)・緑埜地区遺跡群(7)・平井地区No.19遺跡(22)・同No.26～30遺跡(26～31)があり、鮎川左岸部に広く分布している。中期の遺跡には、黒熊八幡遺跡(3)・白石大御堂遺跡(6)・竹沼遺跡(10)・藤岡平地区遺跡群(11～13)・平井地区No.13遺跡(15)やNo.15～17

遺跡(17～19)・鍛冶谷戸遺跡(22—③)・平井地区No.22遺跡(26)・同No.28遺跡(29)や飛石A遺跡(37—⑧)を含む平井地区No.24遺跡(37)が、後期の遺跡では藤岡平地区遺跡群(F12、12)平井地区No.17遺跡(19)・鍛冶谷戸遺跡(22—③)が、晩期のものとしてはシモ田遺跡(20)・平井地区No.19遺跡(22)・島遺跡(26—④)が確認されている。このほか、平井地区No.14・31・20・24・25遺跡(16・35～38)や美土里地区No.14～16(33・34・35)から縄文時代の遺物が出土している。

弥生時代から古墳時代初頭にかけての遺跡はあまり確認されていない。黒熊遺跡群(2)からは方形周溝墓や該期の住居が発見されている。竹沼遺跡からは吉ヶ谷式・赤井戸式を含む異なる型式の遺物を伴う住居が確認され興味深い。この他、緑埜上郷遺跡からは弥生土器が出土している。

古墳時代中期の集落としては緑埜地区遺跡群(7)や緑埜水押遺跡・緑埜上郷遺跡(22—②・④)で確認されている。後期の集落は広く分布し、黒熊遺跡群(2)・白石大御堂遺跡(6)・緑埜地区遺跡群(7)・



1：神田・吉井停車場線改良工事予定地（本報告の遺跡群） 2：黒熊遺跡群 3：黒熊八幡遺跡 4：黒熊栗崎遺跡 5：白石根岸遺跡
 6：白石大御堂遺跡 7：緑埜地区遺跡群 8：薬師原遺跡 9：緑埜遺跡 10：竹沼遺跡 11：藤岡平遺跡群（F14） 12：藤岡平遺跡群（F12） 13：藤岡平遺跡群（F14）〔以上既調査遺跡、但し図中範囲は必ずしも本調査地点に一致しない〕
 14：平井地区No12遺跡 15：平井地区No13遺跡 16：平井地区No14遺跡 17：平井地区No15遺跡遺跡群 18：平井地区No16遺跡 19：平井地区No17遺跡 20：シモ田遺跡 21：緑埜水押遺跡 22：緑埜中郷遺跡 23：平井地区No19遺跡（①緑埜押出シ遺跡 ②鍛冶谷遺跡） 24：平井地区No18遺跡 25：中里遺跡 26：五領遺跡 27：平井地区No20遺跡 28：平井地区No22遺跡（④：島遺跡） 29：平井地区No26遺跡 30：平井地区No27遺跡 31：平井地区No28遺跡 32：平井地区No29遺跡 33：平井地区No30遺跡 34：美土里地区No14遺跡 35：美土里地区No15遺跡 36：美土里地区No16・平井地区No31遺跡 37：平井地区No24遺跡（飛石A遺跡） 38：平井地区No25遺跡 39：平井地区No32遺跡 40：平井地区No33遺跡 41：藤岡夜下日野・金井竈址群 42：平井地区No23遺跡
 a：白石古墳群 b：緑埜古墳群 c：南坂古墳群 d：東平井古墳群
 イ：中城（黒熊城） ロ：鮎川城 ハ：上大塚城 ニ：飛石の砦 ホ：平井城 ヘ：平井金山城 ト：高山城（天屋城・要害山城・百間築地・連鎖砦群・平城部からなる） チ：東平井の砦

第11図 周辺の遺跡

第3節 試掘調査

薬師原遺跡 (8)・竹沼遺跡 (10)・藤岡平地区遺跡群 (12・13)・平井地区Na16遺跡 (18)・緑埜上郷遺跡 (22—④)・大工谷戸遺跡 (25—⑥)・平井地区Na22遺跡 (26) に認められている。

古墳は鮎川左岸に於いては北から白石古墳群 (a)・緑埜古墳群 (b)・南坂古墳群 (c) があるが、この周辺にも古墳が散見される。西平井地区から緑埜地区の藤岡・吉井の市町境の丘陵近くには埴輪片が散布し、本報告書に掲載した西平井久保田代遺跡にも埴輪片が出土したことから当該地にも古墳群の存在が想定される。また、鮎川右岸には東平井古墳群が広がっている。これらの古墳群の営まれた期間は古墳群の位置によって異なる。即ち、白石古墳群では6世紀中葉から8世紀の間に営まれた北側の一群と6世紀後半から7世紀にかけて営まれた南側の一群がある。東平井古墳群には中心となる北・中・南の3群があるが、前者は6世紀中葉から8世紀に入るまで、中者と後者は6世紀後半から8世紀代に営まれたものである。南坂古墳群は7世紀以降に営まれたものと考えられる。

奈良・平安時代の集落は黒熊遺跡群 (2)・黒熊八幡遺跡 (3)・黒熊栗崎遺跡 (4)・白石根岸 (5)・白石大御堂遺跡 (6)・緑埜地区遺跡群 (7)・竹沼遺跡 (10)・藤岡平地区遺跡群 (11・12)・緑埜水押遺跡 (22—②)・緑埜上郷遺跡 (22—④)・平井地区Na21遺跡 (25)・大工谷戸遺跡 (25—⑥) 遺跡・平井地区Na22遺跡 (26)・平井地区Na27遺跡 (28)・平井地区Na28～30遺跡 (29～31)、美土里地区Na16・平井地区Na31～32遺跡 (35・39) に認められている。このほか土師器片・須恵器片の出土する遺跡としては平井地区Na16・18・20遺跡 (18・23・36)、美土里Na14遺跡 (33) がある。

水田址はAs-B下の平安時代のもののみが確認されているが、特に白石根岸遺跡 (5)・白石大御堂遺跡 (6)・緑埜地区遺跡群 (7・9) やシモ田遺跡 (20)・

平井地区Na19遺跡 (22) など緑埜地区周辺の現在の水田地帯に広がっている。このほか、藤岡平地区遺跡群 (12・13) や黒熊八幡遺跡でも確認されている。また、緑埜地区遺跡群 (7) では治水に拘わる溜井が発見されているほか、緑埜地区遺跡群 (9) では低地部には水田址、微高地部では畠跡が確認され地形による土地利用の状況が確認されている。

藤岡市から西接する吉井町にかけては窯の分布の多い地域であるが、本地域では日野山地に入る当たりには下日野・金井窯址群が確認されている。また、平井地区Na27遺跡 (28) では散布する遺物の状況から、窯の存在が想定されている。

中世において、本地域の城館址の中心となるのは山内上杉氏の本拠と云われる平井城 (ホ) である。平井城の南にはその要害である平井金山城 (ヘ) があり、鮎川の対岸には当地の古くからの領主であった高山氏の居城と伝えられる複合城郭群高山城 (ト) が作られている。この規模の大きい3城に対し他の城館址は小型のものであるが、地衆の居城であるものと平井城の砦と伝えられる2者に分けられる。前者のうち中城 (イ) は茂原氏や三木氏の城と云われ、鮎川城 (ロ) は高山氏の同族小林氏の城と云われる。また、城主は定かではないが上大塚城 (ハ) も同様の城と考えられる。後者のものとしては、飛石の砦 (ニ) と東平井の砦が挙げられている。

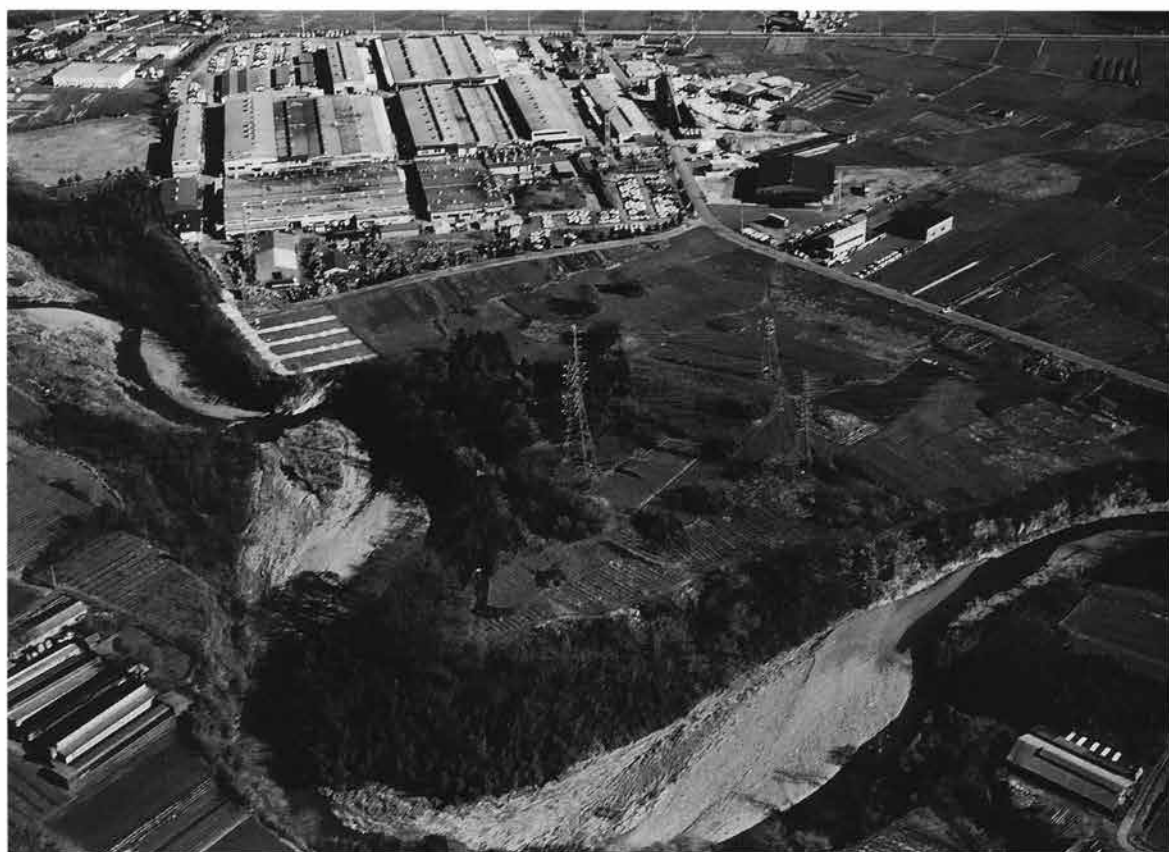
このほか中世の遺構は白石大御堂遺跡 (6) で寺院址、緑埜遺跡群 (9) では鎌倉街道と伝えられる道路遺構を調査し、緑埜押出シ遺跡 (22—①)・東平井地区の藤岡平遺跡群 (11～13) でも該期の遺構が発見されている。神社遺構では大工谷戸遺跡 (25—⑥) には中世から近世にかけての、黒熊栗崎遺跡 (4) では近世～近代のものが発見されている。尚、白石大御堂遺跡 (6) と緑埜上郷遺跡 (22—④) では近世の屋敷跡が調査されている。



10-38-6 遺跡遠景



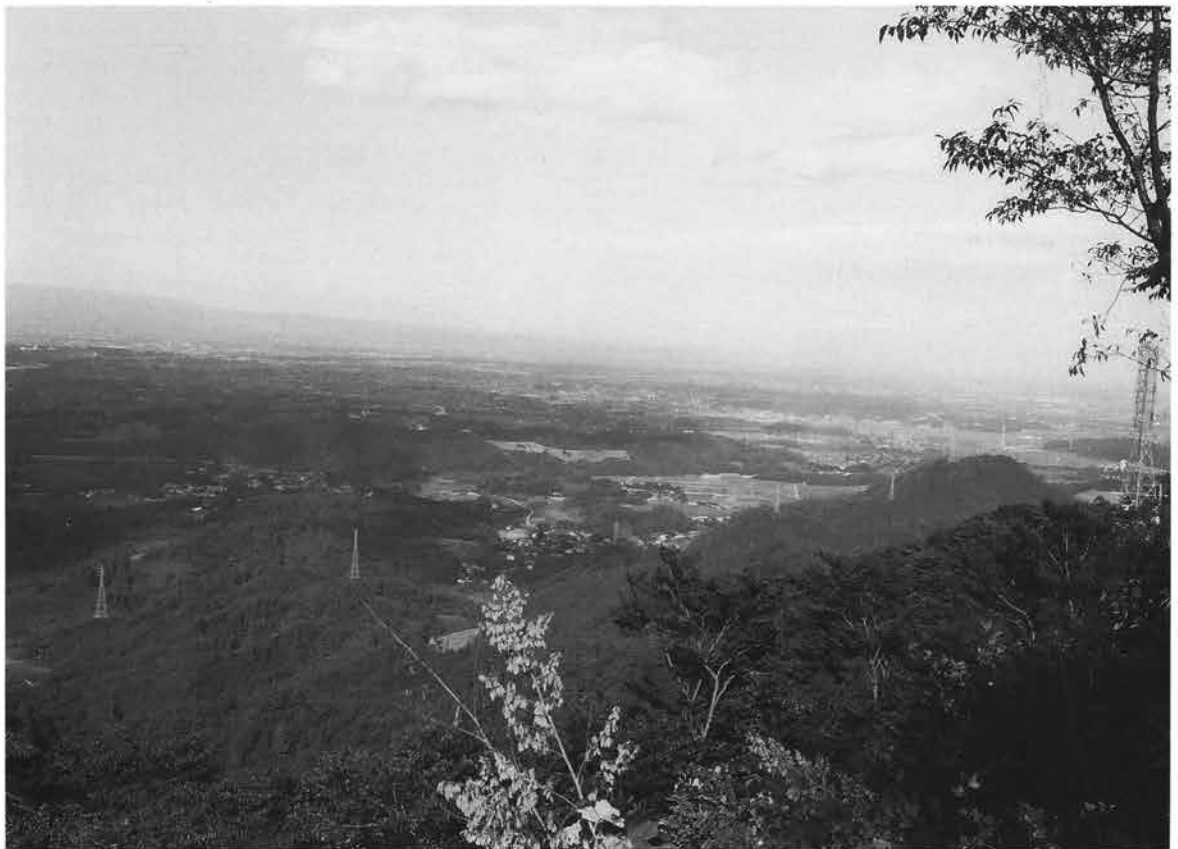
10-38-10 東平井古墳群



10-37-5 東平井古墳群



10-04-23 平井金山城



10-890014-03 遺跡遠景 牛伏山から



01-890009-035 1区L・M12トレンチ 北東から



01-890009-031 1区L・M12トレンチセクション



01-11-10 調査設定状況



01-21-3 トレンチ



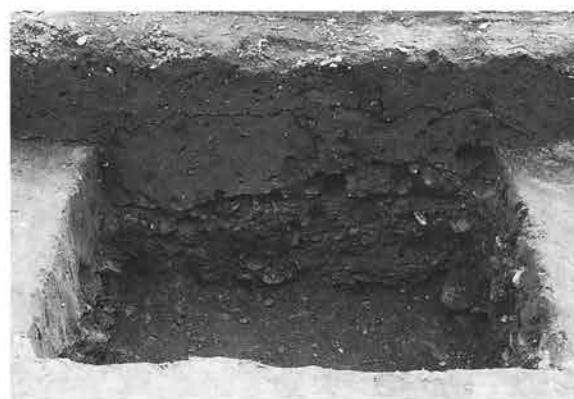
01-890014-033 6区トレンチ



01-890006-014 2区Aトレンチセクション



01-890006-018 2区Bトレンチセクション 南から



01-890008-003 3区深堀りセクション 北から



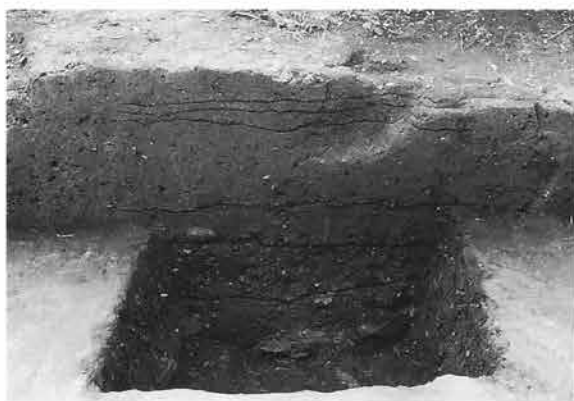
01-890005-012 4区Aトレンチセクション 北から



01-890005-016 4区Bトレンチ南壁セクション 北から



01-890002-012 5区深堀りセクション 西から



01-890002-024 5区深堀りセクション 北から



01-890002-006 5区深堀りセクション 北から



01-890014-019 7区トレンチ 北から



01-890013-005 9区 北から



01-890013-027 8区調査風景



01-890011-009 9区調査風景



01-910001-28 10・11区トレンチ 東から

第2部 東平井飛石の砦跡



飛石の砦ステレオ写真（昭和36年撮影 国土地理院「高崎」使用）

第4章 飛石の砦跡の調査

第1節 調査の経過

飛石の砦は鮎川右岸にある一辺70m程の歪んだ方形プランの単郭堡と推定されている城館跡で、北と東に高さ2.5mの土塁と幅8mの堀を持つ遺構として周知されていた。今回調査対象となったのはその南寄りの区域で、予定路線は砦跡の南部を横切るように計画されていた。尚、調査対象地では土塁の高さまで埋め立てられて駐車場として使用されていたため、土塁と僅かな堀の残欠を調査前見ることができたに過ぎなかった。(第14図)

本遺跡の発掘調査は東平井土井下遺跡と一括の事業として計画されたのであるが、砦跡は東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡を挟んで東平井土井下遺跡の調査事務所から直線で九百数十メートルの距離にある。このため東平井土井下遺跡とは異なる遺跡として認識し、土井下遺跡から別班を裂いて調査に入

ることとなった。調査は土塁・堀遺存地区以東区域の表土掘削を手初めに平成3年10月18日から開始した。続く10月23日からは遺構確認作業を行い、土塁のうちより低い南寄りの位置に土塁と堀を貫通する東西方向の試掘トレンチを掘削、引き続き土塁と堀の調査に入った。これと平行して土木機械による表土除去を行った土塁西の調査区のうち、中・西部の遺構確認作業は10月30日から入り、遺構調査は11月7日より開始した。これらの調査が完了した11月28日からは調査区西端部の掘削遺構確認を行い、一方この日、土塁を半裁し記録化し、翌29日にはこれを撤去して土塁下及び第2面の調査に入った。また西端部に対する遺構の調査は12月2日より開始した。調査は12月6日に完了。同日資材等も土井下遺跡に撤収して、工事側に当該地を引き渡した。

第2節 標準土層

本遺跡の標準土層(第12図)の把握は、土塁・堀以東の地域は作業場建設(当該地にはかつてスレート会社があり、現在は輸送会社の駐車場となっている)に伴う埋め立て等の地形が著しいと判断されたため、主として土塁以西の地域について観察した。観察は調査区の南・西・北の壁面に対して行った。

調査区の土層は大きく5つの土層群に分けられる。上位から第1・第2・第3・第4・第5層群と呼称する。尚、調査区西端部では鮎川に向かって傾斜する土壌堆積の傾向が認められた。

第1層群は戦後の地形・攪乱層であるが、特に北壁、即ち調査区の北部は調査直前まで運送会社の駐車場になっていたため、整地が施されバラスやアスファルトが敷かれた状態が観察された。

第2層群は江戸時代後期から現代に至る耕作土である。天明3年(1783)の浅間山噴出の軽石が混ざり、締まりに欠け、粘性が弱いという特徴がある。

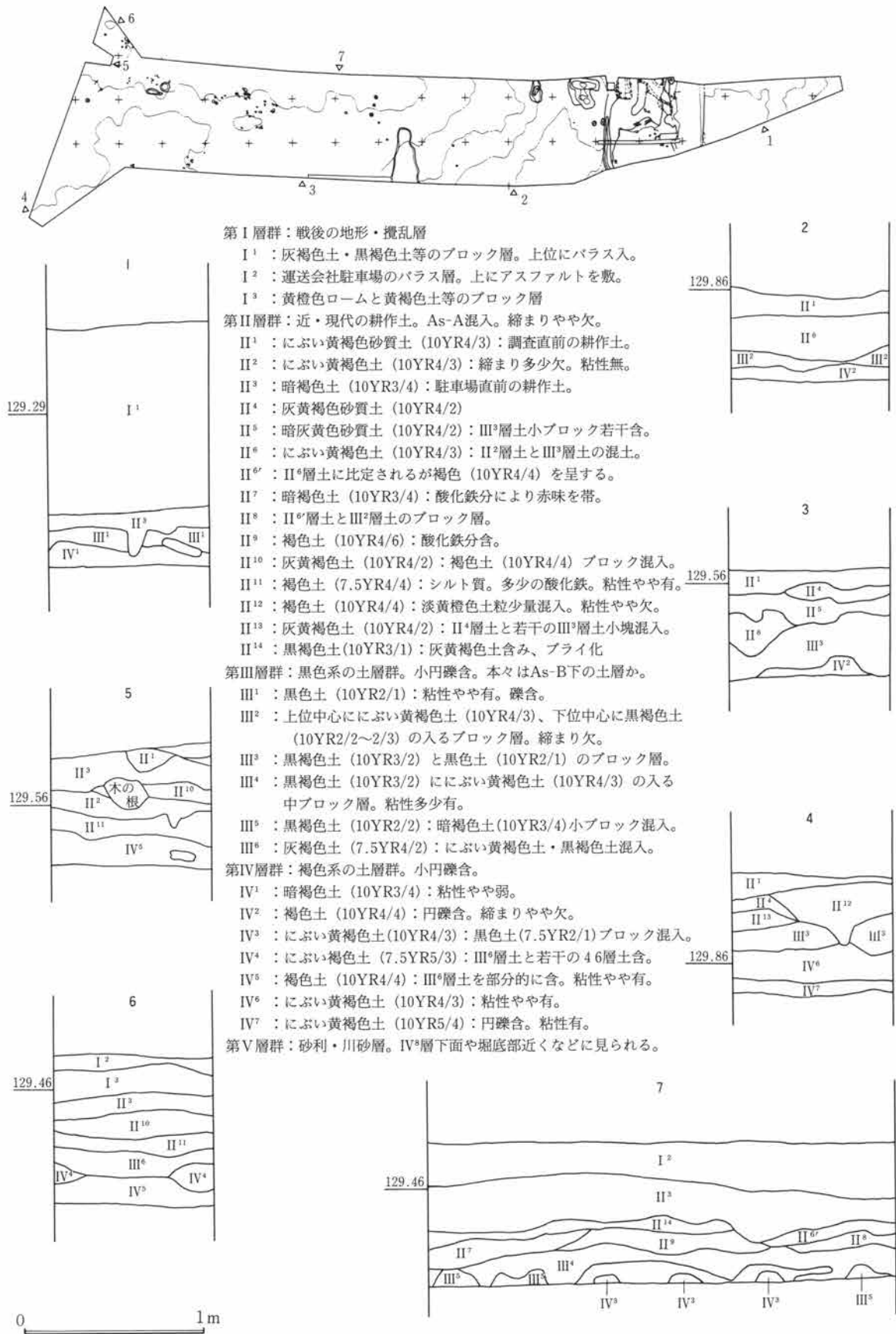
色調は灰黄褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土(10YR 4/2~4/6)や暗褐色土(10YR3/4)などである。

第3層群は小さい円礫含む黒色系の色調を持つ土層群である。本々は浅間山噴出のAs-B降下以前の土壌であると考えられる。黒色土と黒褐色土(10YR2/1~2/3・3/2)を主体とし、粘性はややあるが締まりには欠けている。にぶい黄褐色土(10YR4/3)・灰褐色土(7.5YR4/2)を含んでいる。

第4層群は小さい円礫を含む褐色系の色調を持つ土層群である。にぶい黄褐色土・褐色土(10YR4/3~4/4)を中心とするが、にぶい褐色土(7.5YR5/3)やにぶい黄褐色土(10YR5/4)のものもある。全体的に粘性は有り、層により円礫や黒褐色土、或はローム質の土などを含んでいる。

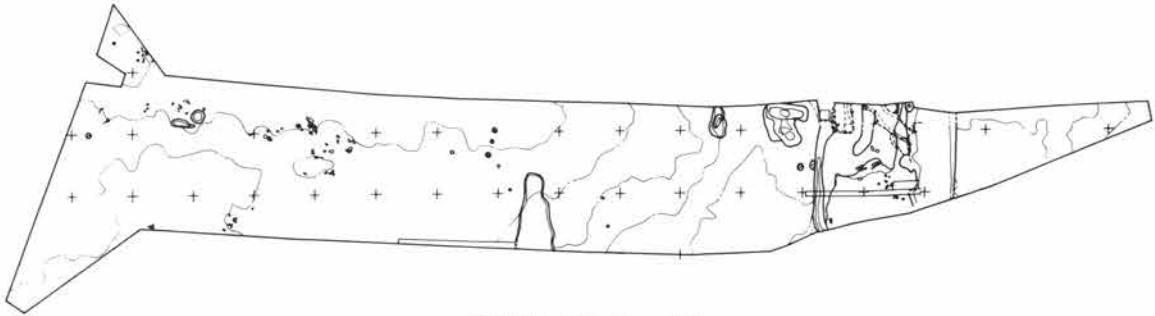
第5層群は調査区で確認できた最下層に当たる砂利・川砂層である。片岩質の礫を含む、4層群下面、或いは堀や2号溝下位などに見ることができる。

第4章 飛石の砦跡の調査



第12図 飛石地区標準土層

第3節 遺跡の概要



第13図 飛石地区全体図

調査区は東平井地区の1区に当たる。1区は更に、飛石の砦の防御遺構である堀・土塁を境に最東部に当たる堀東の区域、土塁・堀の区域、その西側に当たる区域の3つの区域に分けることができる。以下それぞれの区域の概要を述べたいと思う。

堀の東の区域は飛石の砦の郭外に当たるが、当該地域には現代の1m以上の盛土によって埋め立てられていた。盛土には大きな河原石を含んでおり、そうした影響か、その下面は圧縮され、所々に攪乱が見られるなど、かなり荒れた状態になっていた。遺構を確認することはできなかった。また特段の遺物の出土も見られなかった。

次に堀・土塁の残る区域であるが、土塁は現在、運送会社の東側の管理施設がある一角と西側の駐車場の境に土止のような状態で遺存している。その南端が調査区に含まれるのであるが、調査前段階に於いては(第14図)に示したように、土塁はその北側では上幅約1.3m、基底幅約2.7m、高さ約1.2mを測る比較的良好な遺存状態を示していた。尤も南側は大きく削平されたような状態で見られるだけで、高さ数10cmの高まりが残るに過ぎなかった。また堀は、現代の埋め立てに会わなかった中・南の部分が上幅約3.0m、最深部で50cm程の浅い窪地として僅かに残るに過ぎなかった。堀と土塁については後述のような調査成果があったのであるが、特に堀については周知せられていたような8m幅には遠く及ばないものであることが確認された。また、土塁のうち削平のある南側とそれに続く堀の部分には江戸時代の出

入路が確認された。土塁の西にはこれに西接する小さい溝が1条調査された。また土塁の盛土を除去した下面からは、調査区北端で平安時代と推定されるしっかりした掘り方の溝の端部を含む2条の溝が出土した。また河原石の集中する部分も認められた。

調査面積の多くを占める土塁西側の区域は、砦の内郭に当たる区域である。当該区域からは溝3条、土坑や小ピット15基などの遺構が発見・調査したが、直接砦のものと特定できる遺構は確認できなかった。土塁に近い東寄りの地域は黒色土層面とその下位の砂礫層面の2枚を確認面としたが、黒色土層面では北端近くでは溝1条の端部を、砂礫層面では北端近くで溝1条の端部と、これと切り合う(切り合い関係不祥の)土坑1基、土塁寄りの一角では小さな土坑2基を確認・調査した。中央部以西では黒色土～砂礫層を確認面とした。中央部南寄りには浅い溝を1条調査した。その周囲には柱穴様の浅い小土坑や小ピット9基を調査したが、これらの遺構から建物等を推定することはできなかった。西寄りには柱穴様の小土坑と小ピット3基と、9世紀第4四半期と思われる須恵器坏などを出土する土坑1基を確認・調査した。このうち柱穴様の遺構は、位置的には北寄りの小ピット2基は近接するが、小土坑は離れており建物等を想定することはできなかった。

尚、鮎川段崖縁部は調査対象外であり、且つその調査は断崖に接して危険であるため行い得なかった。そして、ボーリング棒による探査や断崖面の観察でも顕著な遺構を確認することはできなかった。

第4節 発見された遺構と遺物

1 土塁・堀・1号溝

土塁・堀は飛石の砦跡に直接関連する遺構であり、1号溝もこれらに伴うと思われるので、以下一括して報告する。

① 土塁（第15図、図版9・11・12）

概要 土塁は10m程を調査したが、比較的遺存状態の良い北半部と削平されたような南半部に分かれる。土塁の主軸はおおよそ北々東を指すが、中央を境に南部の走行は1m程西にずれており『折れ』をもつプランであったことが推定される。

規模 上幅：90～100cm 下幅：550～620cm

基底幅：620～780cm 残存高：110cm

構造 北半部の観察から土塁は5号溝の覆土である15層等の上に設置され、堀から最大100cm程離れた位置より堀側（東側）から積み上げて構築されている。土塁を構成する土層群は礫を多く含む砂質土で、版築がなされた痕跡などは確認できなかった。また、堀側の北端の土塁中、基底近くには土塁の走行に沿う位置に石列が見られた。これは土塁使用時のふる時点で土留あるいは境界を示す石積として設置されたものではないかと推定される。尚、中央部の基底

近くには、礫の集中する部分があった。

② 堀（第15・16図、図版9・10・20）

規模 上幅：300～410cm 下幅：270～310cm

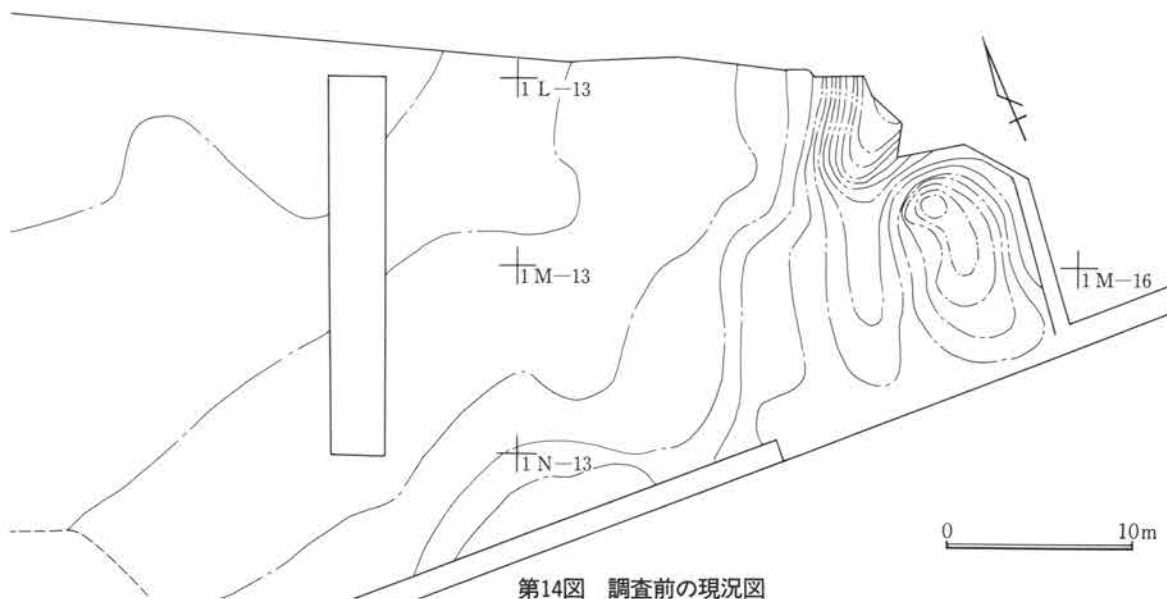
残存高：70cm

概要 堀は調査区東端部の現代の埋土下面及び5号溝の覆土に連なる16層の上面から掘り込まれ、全体で8m程を調査した。覆土中に礫を多量に含み、後述の『抉れ』以北では堀底近くに水平的な分布をなし、『抉れ』の南からトレンチの付近では堀の上位を中心に礫層できるほどに密集して出土している。

構造 東壁面の傾斜は鋭くプランも直線的で北々東を向く。西壁面は緩傾斜で北端は北々東、それ以外は北に向き、中程で幅205cm、奥行115cmの弧状の抉れを持ち、南側トレンチの中では以北のラインに対し西へ80cm程ずれるため、トレンチの北接部分は東方への張り出すようなプランになっている。

出土遺物 『抉れ』前面の堀底からは『皇宋通寶』が、礫密集区の上面付近からは18世紀以降と推定されるキセルの吸い口が出土し、覆土中からは軟質陶器の大型の鉢が出土している。

③ 1号溝（第15図、図版11・12）



第14図 調査前の現況図

概要 1号溝は土塁西縁に接する小型の溝であり、8m程を調査した。北端は調査区外から入るU字溝に伴うコンクリート升の付設によって破壊されているが、前述のU字溝自体が1号溝を改良したものと考えられるので1号溝は土塁に沿ってこれを区切るように掘られ、従って土塁の西側を区画したものであろうと推定される。また、出土遺物などの遺構の時期を特定できる資料は得られなかった。そのため掘削時期は特定できなかったのであるが、その位置からして土塁に伴う遺構であろうと考えられ、雨水等の導水路として使用されたのではないかと推定される。その掘削が飛石の砦の使用時期にまで溯る可否かは特定できなかった。

規模 上幅：55～90cm 下幅：15～30cm

残存高：20～30cm

構造 1号溝は小型の溝であるが、およそ箱掘りに近い形態を呈している。

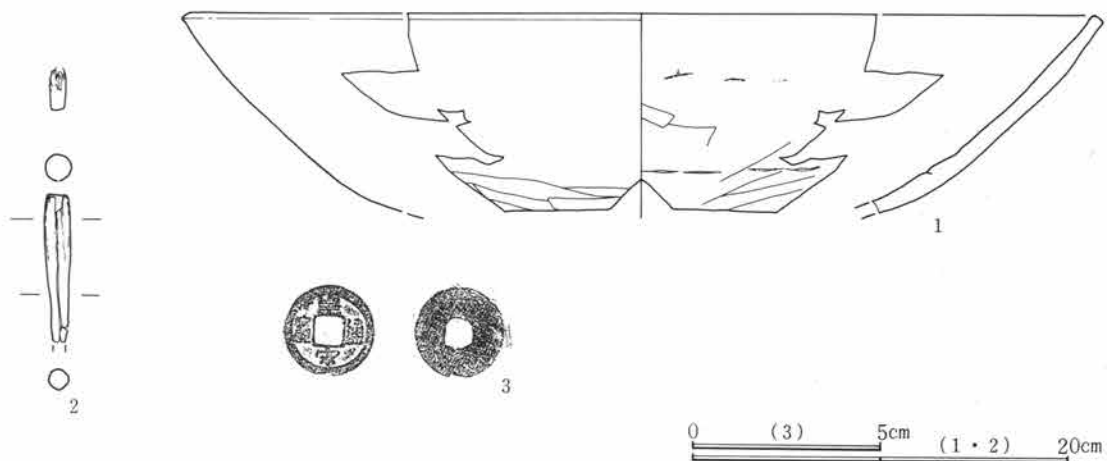
④ 小 結

土塁・堀の正確な構築或は使用期間等は出土遺物も極端に少なく特定することはできなかったが、堀の底部から『皇宋通寶』の出土を見たことから、およそ中世の城郭とできるものと思慮される。

土塁については北壁セクションに分層したもののうち1～6層は近代以前に、8層は現代に至って崩落したものと判断される。従ってこれらの土層を加えた土塁の断面の面積はおよそ約9.5㎡、土塁の上幅

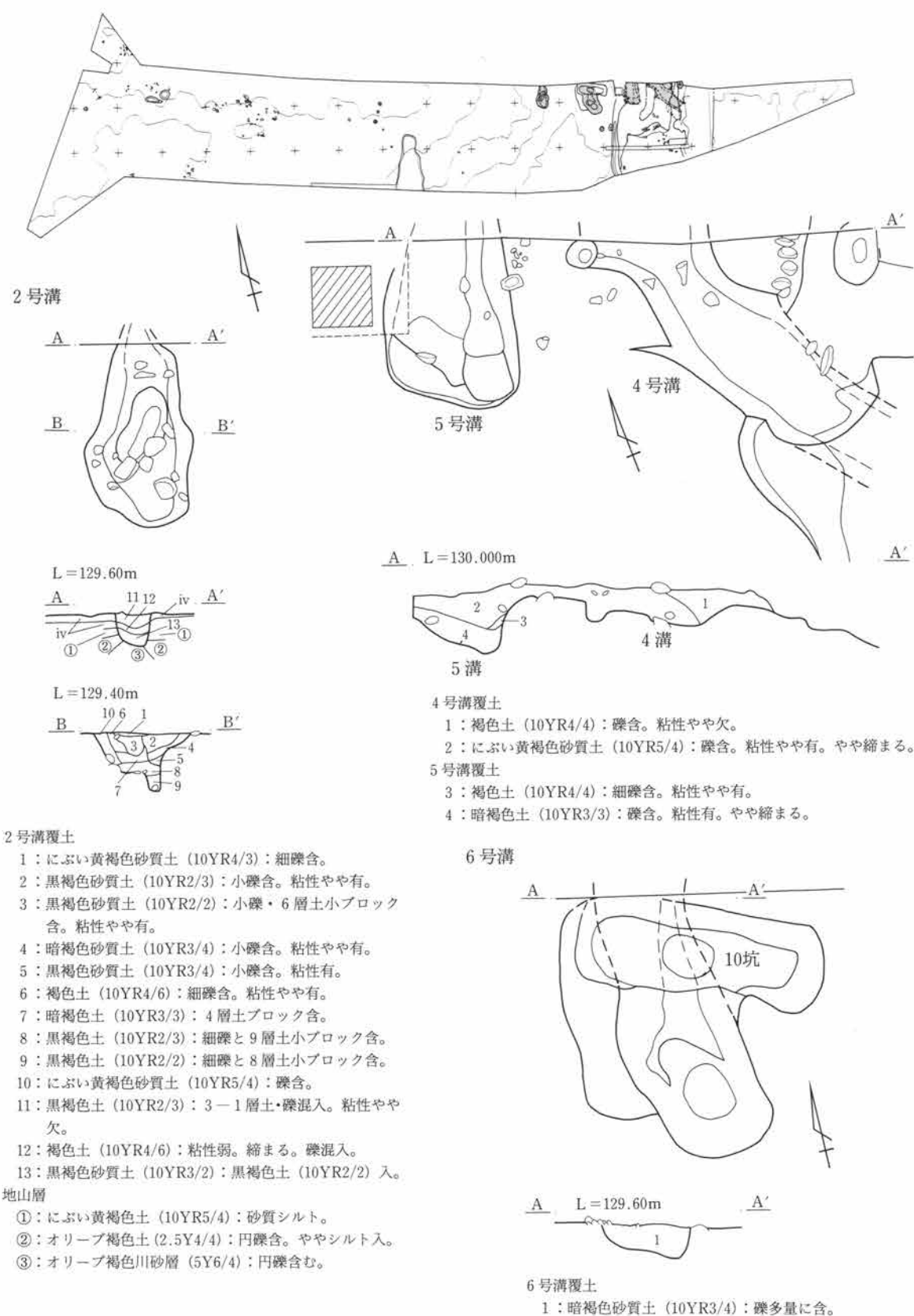
を1m、基底幅を7mと仮定すると当初の土塁の高さは2.4m程になるものと推定される。一方堀は深さ70cmを測るが、この深さは土塁の基底のレベルからほぼ当時の深さを示している。これらのことからこの堀の断面積は約2.3㎡と推定されるが、土塁の断面積に比べると4分の1に過ぎず、堀掘削時の排土だけで土塁が構築されたとは考えられない。当該地区は東平井古墳群の中に在り、土塁基底近くの集石や堀覆土中の多量の礫は本遺跡の基盤層が砂礫層であることを考慮してもなお多く、これが古墳の葺石であった可能性を考慮することもできることから、この土塁は東平井古墳群を形成していた古墳を取り込むか、その土砂を利用して構築されたものであろうと推定される。

ところで、土塁の南半部には削平されたような状態であったが、ここに接する堀には左右に扶れを伴う礫を多く含む土橋状の遺構が見られた。ここからは18世紀以降のキセルが出土しているので、少なくとも江戸時代後期にはここが出入り口として利用されていたものと判断される。従って土塁は単純に江戸時代に削平されたとも考えられるが、郭内への出入路としてこの位置が江戸期に入っても意識され続けていたとすれば、土塁がこの直ぐ北の位置で走行を1m程西にずらしていることから、ある種の柵形のような構造を持った戸口であったとも考えられるのである。

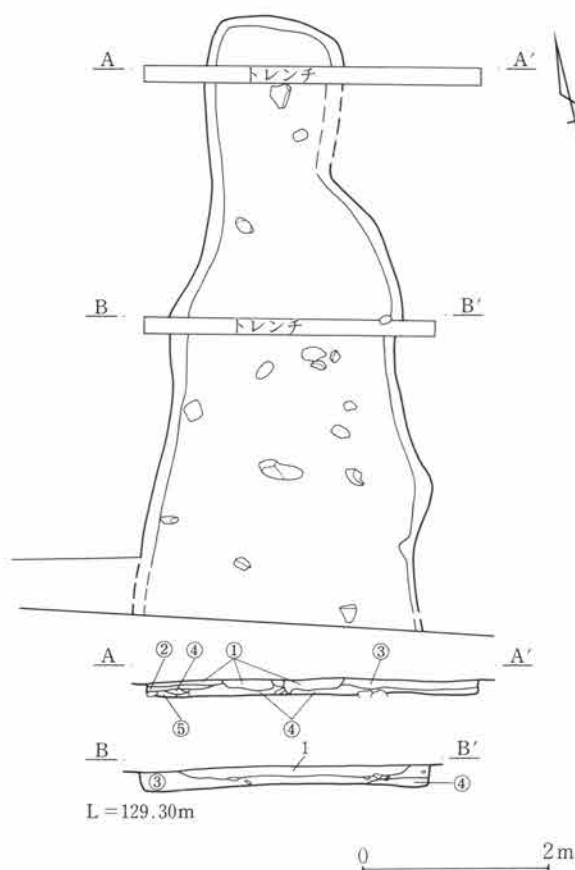
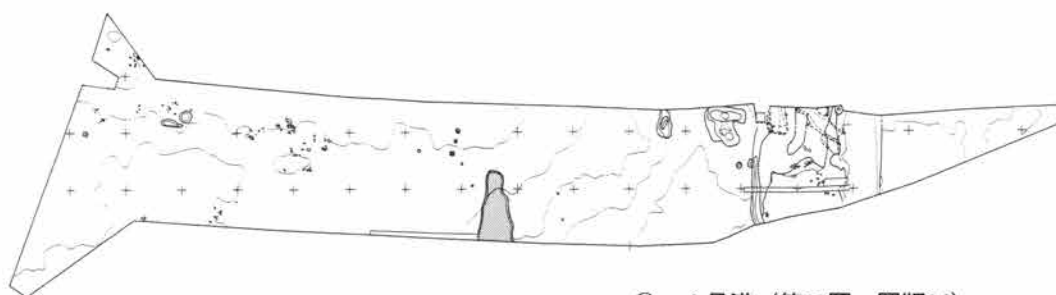


第16図 堀出土遺物

第4章 飛石の砦跡の調査



第17図 2・4・5・6号溝



3号溝覆土

1：黒褐色土（10YR3/2）：褐色土小ブロック・細円礫多く含。

地山層

①：にぶい黄褐色土（10YR5/3）：細軽石・円礫含。

②：黒褐色土（10YR2/2～2/3）：円礫多く含。細軽石少量含。

③：暗褐色土（10YR3/3）：細円礫若干含。細軽石少量含。

④：黒褐色土（10YR2/3）：細軽石含。円礫若干含。

⑤：褐色土（10YR4/4）：細軽石・円礫若干含。

第18図 3号溝

2 土塁西区域の溝

覆土と堀込み面から、何れも古代の所産と思われるが、2・3号溝は中世頃である可能性も持つ。

① 2号溝（第17図、図版14）

概要 長さ2.5m程を調査した。土坑の可能性も残るが、本来基底幅30cm強の溝であったと思われる。

規模 上幅：78～150cm 残存深さ：42cm以下

構造 形態的には湧水を利用した特殊な井戸に伴う溝に似るが、砂質層に達するため用途不明。

② 3号溝（第18図、図版14）

概要 6.4mの長さを調査した南北走行の溝で、底部付近の残欠のようである。時期・用途は特定できなかった。

規模 上幅：130～300cm 残存深さ：19cm以下

構造 遺存状況が悪く、構造等は詳かでない。

③ 6号溝（第17図、図版13）

概要 3m強を調査した。路線北寄りに端部を持ち、北壁際で10号土坑と切り合うが、新旧関係は不明。

規模 上幅：140～172cm 深さ：90cm以下

構造 しっかりした掘り方の溝で、箱堀に近い。

3 土塁基底下の溝

何れも砦築城以前の所産である。

① 4号溝（第17図、図版13）

概要 北側から弧を描いて東に抜けている。約3.6m程を調査した。

規模 上幅：110～160cm 深さ：11cm以下

構造 底部は丸みを持ち、東に向かって落ちている。

② 5号溝（第17図、図版13）

概要 路線北寄りに端部を持ち、北に抜けている。長さ2.2m程を調査した。須恵質の甕の体部破片を出土している。

規模 上幅：110～160cm 深さ：11cm以下

構造 東よりに中心を持ち、断面構造はやや葉研堀気味である。

1 L-08

2号坑

3号坑

4号坑

1号坑

1号ピット

1 M-09

3号溝

6号土坑

1号溝

6号坑

8号坑

1 M-14

トレンチ

A

A'

i

ii

L=129.60m

8号土坑

A

A'

A

A'

L=129.00m

2号ピット

3号ピット

号土坑

A

A'

A

A'

1

2

L=129.20m

2号土坑

A

A'

A

A'

1

2

3号土坑

A

A'

A

A'

1

2

4号土坑

A

A'

A

A'

1

2

5号土坑

A

A'

A

A'

1

2

号土坑覆土

1: 褐色土 (10YR4/4): 円礫若干含。軽石含。やや締まる。

2: 暗褐色土 (10YR3/3): 円礫若干含。粘性やや有。

号土坑覆土

1: 暗褐色土 (10YR3/3): 円礫含。やや締まる。

号土坑覆土

1: 暗褐色土 (10YR3/3): 褐色土 (10YR4/4) 小ブロック・円礫含。

号土坑覆土

1: 褐色土 (10YR4/4): 細円礫含。

2: 暗褐色土 (10YR3/4): 1層土粒を有。粘性やや有。

5号土坑覆土

1: 暗褐色土 (10YR3/3): 細軽石含。地山に比し粘性欠。

6号土坑覆土

1: i 層土・にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) ブロックの土層: 下層中心に礫多。

6号土坑自然堆積層

i: 黒褐色砂質土 (10YR2/2): 礫含む。

ii: 灰オリブ色砂 (7.5Y5/3)

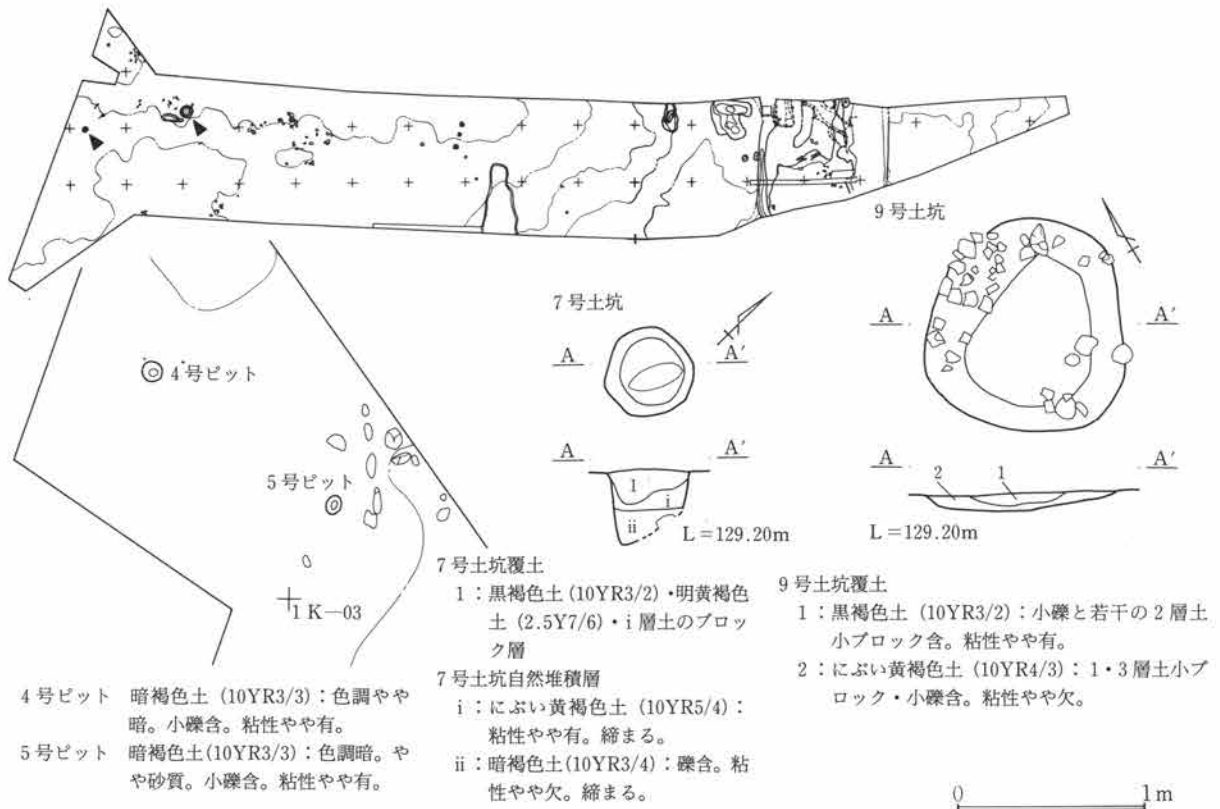
小ピット覆土

1号ピット 褐色土 (10YR4/4): 色調明。軽石含。

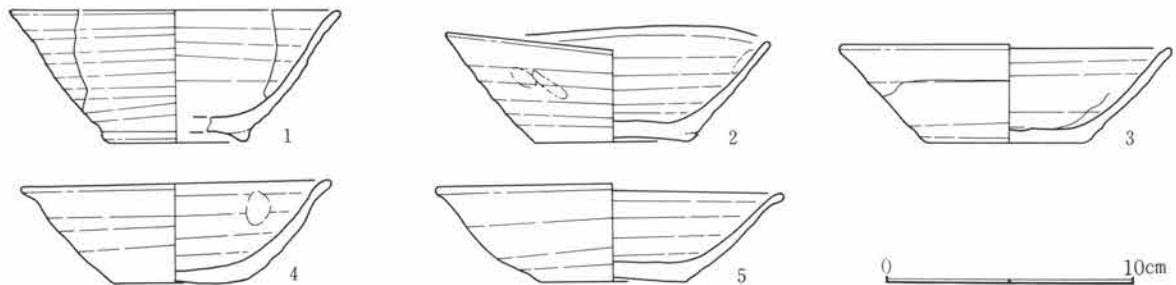
2号ピット 暗褐色土 (7.5YR3/4): 円礫含。粘性やや有。

3号ピット 暗褐色土 (10YR3/3): 細礫含。ピット2に比し粘性欠。

A horizontal line representing a beam of length 1 m. The left end is labeled 0 and the right end is labeled 1 m.



第20図 7、9号土坑・4、5ピット



第21図 9号土坑出土遺物

4 土坑・ピット

① 1～5号土坑・1～3号ピット (第19図、図版16・17)

概要 1～5号土坑と1～3号小ピットはピット群を形成し、何れも黒色系の土を掘り込んでいるため、中世以降の所産と思われる。また、発掘時点で土坑として処理した4・5号土坑は小ピットである。建物等の配列を特定することはできなかったが、2号土坑と4号土坑、1号ピットと4号土坑または5号土坑、2号ピットと3号ピットは柵列としての配列

を想定することができる。

規模 1号土坑 径：40×40cm、深さ：36cm

2号土坑 径：42×32cm、深さ：38cm

3号土坑 径：50×46cm、深さ：26cm

4号土坑 径：22×20cm、深さ：24cm

5号土坑 径：22×18cm、深さ：30cm

6号土坑 径：22×18cm、深さ：30cm

1号ピット 径：36×30cm、深さ：6cm

2号ピット 径：22×18cm、深さ：18cm

3号ピット 径：22×20cm、深さ：12cm

構造 1～5号土坑・1～3号ピットはいずれも掘

第4章 飛石の砦跡の調査

り込みが浅く、規模は小さい。4・5号土坑は方形、他は円形を基本とするプランを呈する。

② 6・8号土坑（第19図、図版17・18）

概要 6号土坑は1号溝と切り合い関係にあり、1号溝は6号土坑より新しい。8号土坑は6号土坑の西に近接する。

規模 6号土坑 径：30×26cm以上、深さ：30cm

8号土坑 径：52×44cm、深さ：28cm

構造 6・8号土坑は、いずれも方形を基本とするプランを呈する。

③ 7号土坑（第20図、図版18）

概要 7号土坑は小型の土坑で柱穴と思われるが、単独で遺存している。

規模 径：48×48cm、深さ：11cm

構造 円形を基本とするプランを呈する。

④ 9号土坑（第20・21図、図版18・20）

概要 調査区の西部に単独で位置している。掘り込みは浅く、土坑の底部付近のみが遺存したものと思

われる。9号土坑からは第4四半期の須恵器坏・碗が5個体出土している。

規模 径：114×110cm、深さ：7cm

構造 隅丸方形を呈し、浅い掘り込みをなす。

⑤ 10号土坑（第17図、図版13）

概要 10号土坑はやや大型の土坑で、既に述べたように6号溝と切り合い関係にある。

規模 径：180×61cm、深さ：70cm

構造 長方形を呈し短軸方向は垂直に近く、長軸方向は比較的緩やかに掘り込まれる。

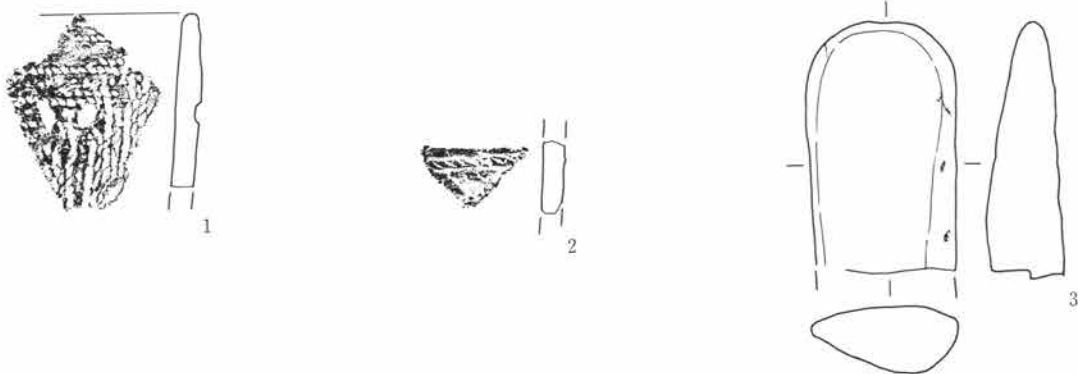
⑥ 4・5号ピット（第20図、図版16）

概要 調査区西端の北拡張部に位置する。4・5号ピットは南北に約1.2m隔たって位置する。この2つのピットについて柵列等を構成していた可能性を考慮することはできる。

規模 4号ピット 径：16×14cm、深さ：12cm

5号ピット 径：24×22cm、深さ：14cm

構造 円形を基本とするプランを呈する。



第22図 包含層出土遺物



第23図 昭和36年撮影の航空写真に見られる飛石の砦の遺溝

第5節 小 結

以上のように本遺跡の遺構は決して多くなかったが、種々の成果を得た。本遺跡では平安時代等の遺構も調査しているが、そのまとめとして「飛石の砦」について若干の考察を試みたいと思う。

① 「飛石の砦」の形状について

既に述べたように「飛石の砦」は鮎川右岸の段崖上に造られた小城郭である。その残存遺構は北側と東側の土塁と堀のみで、その形状については山崎一先生が単郭方形と推定して縄張図を示されている⁽¹⁾⁽²⁾。現在、当該地は砦跡を含む広い区画が駐車場等になり、遺構の残存状況も悪く、砦周囲の細かい地表観察はほぼ不可能な状態である。従って上記縄張図の検証を行うに現地の状態は良好ではないため、発掘した遺構と昭和36年撮影の航空写真(ステレオ写真)を使用し乍ら砦の検討を行うこととした。尚、第23

図は航空写真をもとに作図したものである。

砦の東側は調査前、第14図に示したように堀の痕跡が僅かに見られ発掘調査で堀を確認したが、その上幅は4.1mで北側堀の半分の幅しかないものであった。攪乱が見られたものの、堀の東部には土壌等の観察から浅い谷地形の存在が窺われた。航空写真でも第23図に示した窪地らしいものが見られ、その北側にも浅い窪地様が1・2カ所、また、その延長線上の畑地では現況で地表が浅く落ちるような様子が見られる。恐らくは当時見られた南北走行の浅い谷状の地形を利用して、その肩部に土塁を、その沿いの谷地形部分に堀を掘削したものと思われる。

砦南辺の遺構は全く破壊されている。ところで、鮎川の断崖縁部に砦付近で3カ所の判りの入る箇所が認められ、北のものは北側の堀に一致することから判りは堀が崖面に堀抜かれ結果生ずるもので、堀

の位置を示すものと考えられた。位置的に南の割り
が南側の堀の位置を示すものと推定し、この位置を
基点として東角は古墳に接触しないものと仮定し
て、堀のラインを第23図のように推定した。尚、中
央の割れははっきりし過ぎているので寧ろ自然のも
のと思われるが、或は堀の存在する可能性も残る。

西辺は比高差14m程を測る鮎川の断崖であって、
現況では樹木が生い茂って見通しは悪いが、対岸の
字町下を見下ろすことができる。一段上の字久保田
代も見渡せるが、久保田代は砦とほぼ同レベルで且
つ平井城外となるので砦の崖際には低土居程度の構
造物は設けられたものと思われる。尚、南東方向に
平井城の総郭があるが、仮に樹木が無くても総郭の
方が5m程高いのでその内部を伺うことは難しい。

砦の北側は堀と土塁によって限られている。この
土塁と堀は現在も見られるが、堀幅は6mと山崎先
生の観察時より狭まり、範囲も限られている。航空
写真では土塁の延長が東の土塁の北端に当たるた
め、第23図に示した推定ラインの設定を行った。

以上のように、その形状は山崎先生の縄張図とほ
ぼ同様となった。虎口については南側とされている
(山崎, 1978) が、発掘調査では東辺の南端近くに
江戸時代後期に入り口として使われた部分がある。
これが砦使用時まで遡れば虎口は南東コーナー近く
にくることになるが、類例としては藤岡市森の『森
東城』の内郭(方形)で南コーナー近くに在る例が
あるが極めて希であり、従来説と併せて現時点で虎
口を特定することはできなかった。

② 「飛石の砦」の占地について

「飛石の砦」の性格について山崎先生は『この砦
の任務は堰堤に近いことと河岸に位置し、城の対岸
であることから一応堰堤の援護であると思うが、砦
の北側に鎌倉街道があることから、渡河点の防護と、
城からの出陣を掩護する橋頭保とも考えられる』と
二つの用途を示している。

前者の説である堰堤は川を堰止めて氾濫状態を作
り出す総社長尾氏系の築城法で、対岸の『平井城』

にも用いられ、東平井の字川破の西縁中位と字塚間
の西端を東岸の端点として鮎川に造られたと想定さ
れている。(第2図参照)しかし、砦内からは図上で
も堰堤の東寄り部分は見通せない。つまり防御すべ
き堰堤全体は見渡せず、且つ近い位置でも270m程離
れているため砦内から弓を射るのは難しく、また即
時の対応は難しかったと思慮されるので堤の防御に
使用されたものという説には疑問を持つ。

後者については、何らかの伝承があったのか砦跡
の北に近接する農道(第34図—⑩)が充てられてい
るが、最も近くを通る鎌倉街道の推定ラインは字猿
川と三ツ目川原境を通して南北に抜けるもので、こ
れが現状定説となっている。⁽³⁾更に先の農道は断崖に
達するので、渡河点として適当ではない。明治18年の
陸軍測地図によると平井橋の両側から北に僅かに
寄る位置で河原に降りた地点(第34図—⑪)が渡河
点となっている。後述の第7部で述べるように平井
城使用時もこの地点が渡河点だったと思われるが、
砦からの見通しは良いがやはり多少距離があるた
め、渡河点の防護に向かないように思われる。

さて東平井の字本宿・中宿・雨沼には県道神田・
吉井停車場線沿いに短冊形の地割(第34図—⑨)が
並んでいる。この地割の形成時期は不明だが、後代
街道が通らなかったことなどを考えると戦国期に遡
れるものと思われる。道路は字原・原前と原・寺西
の境を鍵形に通るあたりを除き、ほぼ県道神田・吉
井停車場線沿いに、途中虎口の疑いを持たれる砦の
東南隅を経由して前述の渡河点に至っている。この
点から「飛石の砦」は街と渡河点との交通を監視す
る、あるいは街を統括する施設として設置されたの
ではないかと考えるのである。

註

- (1) 山崎 一 『群馬古城址の研究(下巻)』 1978 94・95頁(解
説)、312頁(付図)
- (2) 藤岡市史編纂委員会 『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』
1993 渡河点部分の記載を除き(1)をほぼ追認している。
- (3) 群馬県教育委員会 『歴史の道調査報告書 鎌倉街道』1983
38頁(地図)、51・52頁(解説)

飛石砦出土遺物一覧

1 堀出土遺物

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第16図 図版20	10-000001	軟質陶器鉢 (口縁～体部破片)	口径 24.5 底径 — 器高 5.5	腰部外面左回転方向の削り 他はナデ調整	①酸化焰・普通 ②褐色等 (7.5YR6/1～6/3) ③細砂粒
2	第16図 図版20	40-000001	鉄製キセル (吸い口)	長さ3.9 径0.7×0.7	肩は付かない。銅が巻かれ た痕跡有り。	木製の部品付属。小泉(1985) IV類以降(18世紀以降)
3	第16図 図版20	40-000002	銅銭 『皇宋通寶』	径 2.4 厚さ 0.075	模範銭の可能性あり。	堀埋土礫層中より出土

2 土壘出土遺物

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000010	須恵器甕	1	40	取上番号：4	4	11-000020	軟質陶器	1	40g	取上番号：4
3	11-000011	須恵器碗	1	20	取上番号：7	5	11-000030	擂鉢	2	110	取上番号：4,6

3 5号溝

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000008	土師器甕	1	10g		2	11-000009	須恵器甕	1	40	取上番号：9

4 9号土坑出土遺物

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第21図 図版20	10-000002	須恵器高台付碗 (破片)	口径(13.2) 底径(5.8) 器高 5.2	右回転クロコ整形	①還元焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③細砂粒
2	第21図 図版20	10-000003	須恵器坏 (完形)	口径 13.1 底径 5.2 器高 4.5	左回転クロコ整形 一側面に圧平される	①還元焰 ②灰白色(2.5Y7/2) ③細砂粒・片岩含
3	第21図 図版20	10-000004	須恵器坏 (3/4)	口径 13.3 底径 6.5～ 6.8 器高 3.9	左回転クロコ整形 回転糸切	①酸化焰・普通 ②にぶい褐色 (7.5YR5/3)③細砂粒・片岩含
4	第21図 図版20	10-000005	須恵器坏 (4/5)	口径 12.4 底径 5.2 器高 4.0	右回転クロコ整形 回転糸切	①還元焰・普通 ②にぶい橙色 (5YR6/3) ③粗砂粒・片岩含
5	第21図 図版20	10-000006	須恵器坏 (1/2)	口径 13.0 底径 38.0 器高 6.0	一側面圧平。右回転クロコ 整形。回転手切痕	①還元焰・普通 ②灰白色(10 YR7/1)③細砂粒・片岩含
6	— 図版20	10-000000	須恵器坏 (1/2)	残存長 11.4 残存幅 10.8 残存高 4.5	底面剝離。回転クロコ整形	①還元焰・やや弱 ②灰白色 (2.5Y7/1) ③粗砂粒・片岩含

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
7	11-000001	土師器坏碗	25	150g	取上番号：27・14 28・5・6・23・29	9	11-000003	須恵器坏碗	22	210	取上番号：6・7・3 2・4・12・9・11・25
8	11-000002	土師器碗甕	61	140	取上番号：9	10	11-000004	須恵器坏碗	36	100	
						11	11-000028	土師器高坏脚	2	40	取上番号：6

5 包含層出土遺物

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第22図 図版132	10-000007	縄文土器 (口縁破片)	器厚 0.9	縄文施文 原体はR { $\frac{1}{2}$ で 羽状前期後半黒浜式	①良 ②にぶい橙色 (7.5YR 7/4) ③細砂粒
2	第22図 図版132	10-000008	縄文土器 (胴部破片)	器厚 0.9	器面は←横位施文後刻目をも つ波状文前期後半諸磯式	①良 ②にぶい橙色 (7.5YR 6/6) ③中粒の砂を混入
3	第22図 図版20	20-000001	摩石 (一方端部欠損)	残存長 102 幅 60 厚さ 30 重量 186g	自然石の一面を摩耗	石材：牛伏砂岩
4	— 図版20	10-000009	土師器小型甕 (底部)	残存5.0×4.9	外面下方への寛ケズリ、内 面寛ナデ	①酸化焰・普通 ②明赤褐色 (2.5YR5/8) ③細砂粒
5	— 図版20	10-000010	須恵器碗 (破片)	残存7.0×3.2	回転クロコ整形、外反	①還元焰・やや硬 ②にぶい褐 色(7.5YR6/3) ③細砂粒

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
		L・M-05グリッド						M-10グリッド			
6	11-000014	土師器甕	6	50g	第1層	7	11-000019	弥生土器	1	20g	表土
						8	11-000026	埴輪	1	5	

第4章 飛石の着跡の調査

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
M-10、L・M-12					
9	11-000018	須恵器甕	3	140	確認面
L・M-12グリッド：第1層					
10	11-000033	縄文土器	3	80	第1層
11	11-000032	陶器	2	20	第1層
L・M-13グリッド					
12	11-000031	陶器	1	5	
土塁					
13	11-000007	縄文土器	1	40	取上番号：4
堀					
14	11-000025	縄文土器	2	100	下層
5号溝					
15	11-000005	縄文土器	8	120	
16	11-000005	縄文土器	8	120	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
17	11-000005	縄文土器	8	120g	
18	11-000015	土師器甕	2	10	
19	11-000027	磁器	2	40	堀東部確認面
1区					
20	11-000016	土師器甕	6	20	
21	11-000017	須恵器坏碗	5	70	取上番号：34
22	11-000021	内耳鍋	3	60	
23	11-000024	縄文土器	7	130	
24	11-000006	縄文土器	2	100	取上番号：37、38
25	11-000012	須恵器坏	1	2	取上番号：35
26	11-000013	軟質陶器	1	20	取上番号：39
27	11-000022	縄文土器	1	10	取上番号：38
28	11-000029	須恵器碗	2	80	

6 石 器

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	21-000001	フレーク	6	610g	



01-910011-15 遺跡全景 西から



01-910030-16 遺跡全景 東から



01-890009-016 1区調査前現況 西から



01-910012-23 土塁北辺



01-890009-006 1区調査前現況 東から



01-890009-010 1区調査前現況 南から



01-910032-04 L+10-02+4 付近セクション



10-910009-05 堀（礫出土状況）・土塁全景 東から



10-910015-10 堀・土塁全景 東から



10-910007-08 堀・土塁 東から



10-910015-03 堀・土塁 東から



01-910013-07 試掘調査風景



01-910010-25 堀（礫出土状況） 北から



01-910012-33 堀全景 北東から



10-910017-04 堀（礫除去後） 北から



10-910017-08 入口左側部 東から



01-910014-32 入口右側部 東から



10-910013-06 土塁全景 北から



10-910012-10 土塁全景 南から



10-910013-10 土塁折部分（右1号溝）



10-910023-07 石組 東から



01-910024-02 土塁（等高線） 東から



01-910028-03 土塁南北セクション 東から



01-910028-01 土塁南北セクション 西から



01-910014-10 土塁東西セクション 北から



01-910029-33 土塁東西セクション 南から



01-910032-11 土塁底面 北から



01-910032-12 土塁底面 東から



01-910025-05 1号溝セクション 南から



01-910025-31 1号溝 南から



01-910014-19 堀・土塁セクション 北から



10-910023-05 集石 東から



10-910020-06 集石 東から



10-910019-09 4号溝全景 南から



01-910029-17 5号溝全景 北から



10-910019-05 5号溝セクション



10-910020-02 6号溝全景・10号土坑 南から



01-910032-14 東壁直下の石列有無の確認状況 南から



01-910029-10 2号溝 北から



01-910012-20 南壁 3号溝部分



10-910015-04 3号溝 南から



01-910021-04 3号溝セクション A-A' 南から



01-910021-09 3号溝セクション B-B' 南から



10-910012-06 ピット群全景 東から



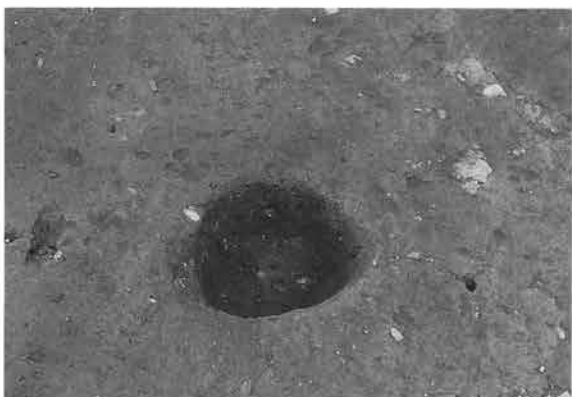
10-910014-09 ピット群全景 西から



10-910015-09 ピット群 西から



01-910031-31 5号ピット西端部北張り出し部分



01-910027-27 1号ピット 西から



01-910021-36 1号ピットセクション 南から



01-910027-28 2号ピット 西から



01-910027-29 3号ピット 西から



01-910032-01 4号ピット西端部北張り出し部分



01-910032-02 5号ピット西端部北張り出し部分



01-910027-22 1号土坑 東から



01-910021-21 1号土坑セクション 南から



01-910027-23 2号土坑 南から



01-910027-24 3号土坑 西から



10-910002-04 4号土坑 西から



01-910027-26 5号土坑 東から



10-910018-05 6号土坑 東から



10-910018-01 7号土坑 東から



01-910028-16 7号土坑セクション 東から



10-910018-08 8号土坑 東から



10-910022-07 9号土坑 東から



01-910034-03 9号土坑遺物出土状態



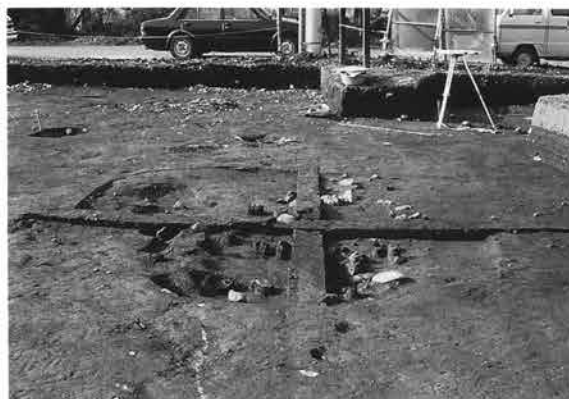
01-910034-02 9号土坑遺物出土状態 東から



01-910034-06 9号土坑遺物出土状態



01-910034-04 9号土坑遺物出土状態



01-910028-34 9号土坑セクション 東から



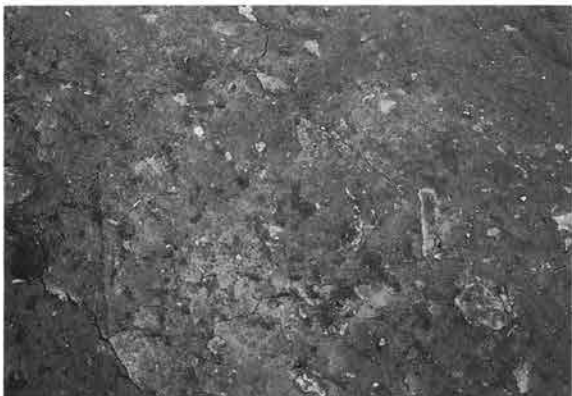
10-910024-02 北西張り出し部分 石列か 南から



01-910026-22 版築様土壌堆積状況 西から



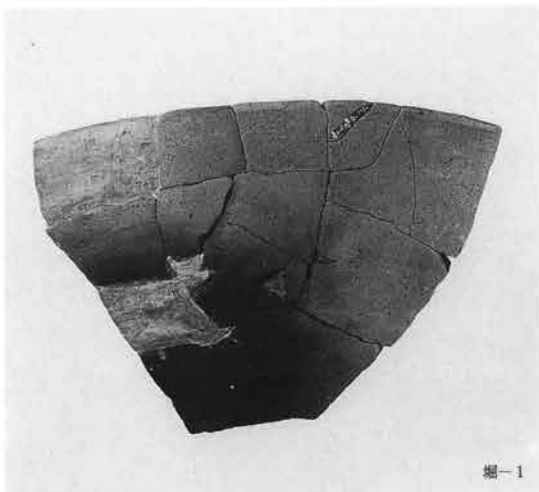
1-910024-05 北西張り出し部分 石列か 東から



01-910026-23 版築様土壌堆積状況 (アップ)



10-38-3 飛石の砦全景



慰靈塔（土塁上）

第 3 部 東平井塚間遺跡



共用後の県道神田・吉井停車場遠景（東一塚間遺跡附近）

第5章 東平井塚間遺跡の調査

第1節 調査の経過

本遺跡は県道神田・吉井停車場線の改良工事事業の計画に当たり、遺跡地内が東平井古墳群に含まれていたため当初より本調査が施されることになった。静岡県埋蔵文化財調査事業団では平成元年7月1日に調査事務所を設置し、同月5日の2区表土掘削から本格的調査に入った。その後順次各区の調査に着手し、8月31日に至って一部測量を除く作業を終了。翌9月1日測量業務も完了し調査本体を終了した。この間、8月25日～31日には飛石の砦地区（1区）の、8月30日からは官正前遺跡地区（6～9区）のそれぞれ試掘調査を行っている。9月に入ってから図面等の基礎整理及び調査区の埋め戻し（27日完了）と官正前遺跡地区の試掘調査中心の作業を行い、25日からは撤収作業に入り29日完了。全ての調査を終了した。本遺跡の各区の調査経過概要は以下の通りである。

2区の調査は平成元年7月5日～同月21日に表土掘削を行い、同6日より試掘、28日よりプラン確認に入った。8月7日に遺構調査に着手し、同11日か

らは1号古墳の調査に着手した。同月16日より遺構測量・写真撮影等を実施。18日全景写真を撮影して、24日より一部埋め戻しを行い、月末の31日に調査を完了した。

3区の調査は8月22日の表土掘削より開始。同月28日より遺構確認。引き続き各遺構の調査に入り、同31日に全景写真を撮影し調査を終了した。埋め戻し作業は9月12・13日に行った。

4区は7月21日の表土掘削で調査開始。同25日プラン確認を行い、1号道から遺構の調査に着手した。8月10日に全景写真を撮影し、同月17日より部分的に埋め戻しに入り、同31日に調査を終了した。

5区については、7月21日からの上物の抜根・表土掘削で調査を開始した。同月27日より溝、8月8日からは土坑・風倒木痕を調査。同月10日よりプラン確認作業を加え、同17日より遺構調査に入り、8月22日に全体写真を撮影した。同31日に調査終了。9月18日より埋め戻し作業に入り、同月21日に完了した。

第2節 標準土層

東平井塚間遺跡は現地形に於いてはほぼ平坦であるが、土壌堆積状況を確認した地点毎の土層には差異があり、単純化した標準土層を示すことはできないが、以下標識的な土層の状況を示してみたい。表層は現代の耕作土である第Ⅰ層群とした褐色系統の土壌で、基本的にAs-Aを包含している。

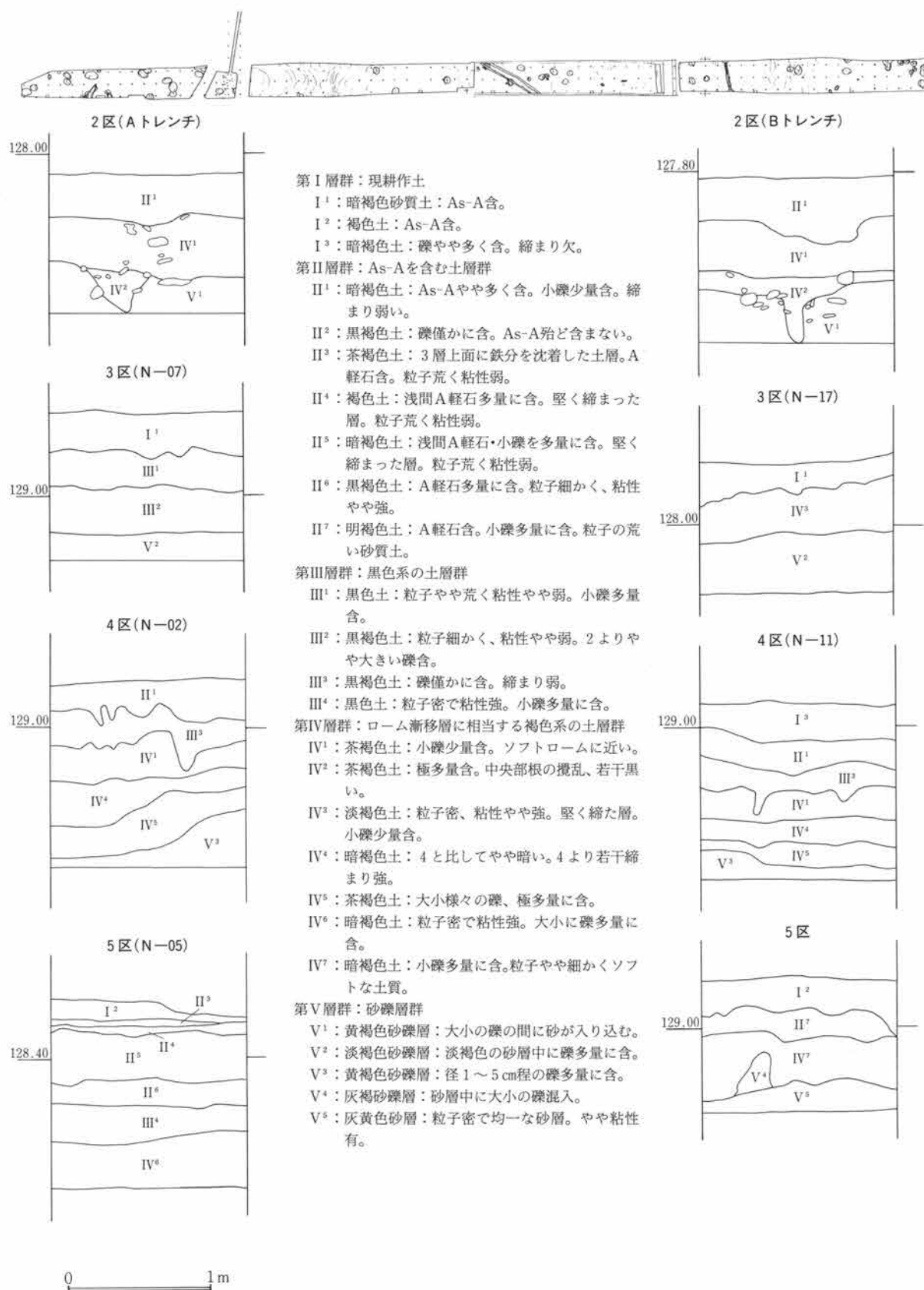
その下位層は第Ⅱ層群としたものでAs-Aを包含する土層群である。As-Aを包含することが示すように、この層群はAs-A降下の1783年(天明3年)以降、第Ⅰ層群形成以前の土壌である。その色調は黒褐色から褐色までと幅があるが、これは個々の地点に於ける下位層の遺存状況に関連するものである

と判断される。

第Ⅲ層群は第Ⅱ層群の下位層に当たる黒色系の土層群で、粒子の大小、粘性の強弱等に於いてバラエティーがあるが、量の多少はあるものの礫を含むという共通性を持っている。

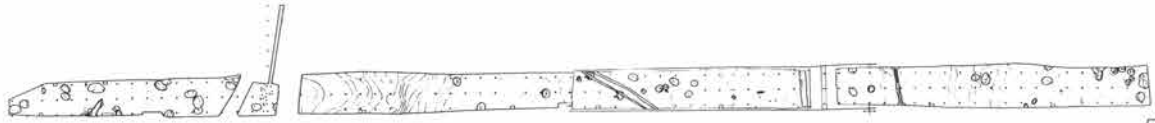
第Ⅳ層群は第Ⅲ層群の下位、第Ⅴ層群の上位に相当する土層群でローム漸移層に相当する。色調は茶褐色または暗褐色を中心とするが、概ね粒子は細かく粘性を持っている。

第Ⅴ層群は砂礫層である。本土層群は流水によって形成されたものと考えられるが、確認できた範囲では基盤層と把握されるものである。



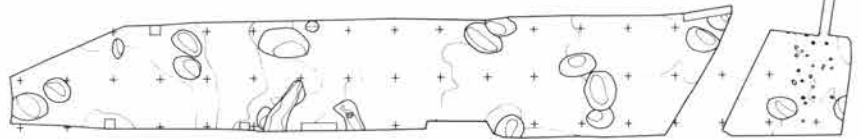
第24図 標準土層

第3節 遺跡の概要



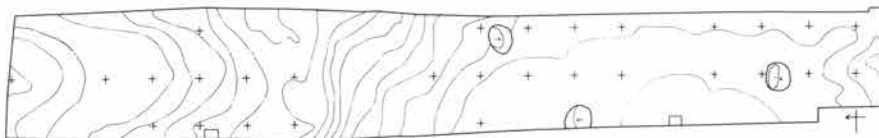
調査区は、県道神田・吉井停車場線と県道藤岡・上日野線の間には有り、東平井地区の2区から5区に相当する地域である。全体に風倒木痕が分布するも

の調査域に対する遺構の遺存状況はやや希薄である。尚、各区覆土中からは打製石斧等の石器が出土している。



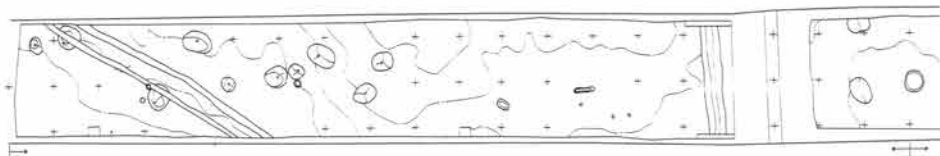
2区では調査区をやや西より、南壁近くに古墳の周溝が発見された。また、調査区の全面に互って14基の風倒木痕が認められたが、倒木の方向は北東6

基、南西3基、北西2基、西2基、南1基であった。調査区の東部にはピット群が見られたが、東端の北部に延びるトレンチに遺構は確認されなかった。



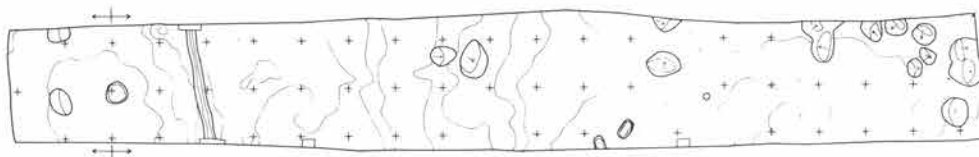
3区に特段の遺構は発見されなかったが、調査区の東半には3基の風倒木痕が認められた。これらの倒木の方向は東方向2基、西方向1基である。尚、

3区は全体に南から北に緩傾斜するが、08～09杭付近は3区西端に対し70cm、中央付近に対し90cm程低く谷状となっている。



4区は現代の土地区画に沿う北西・南東走行の2条の溝と、南北走行の溝1条が認められた。また前者の溝に隣接する2基の小ピット、縄文時代中期の

土器を伴うものを含む土坑3基を確認・調査している。尚、11基の風倒木痕を確認している。倒木の方向は南西4基、北東3基、北西2基である。

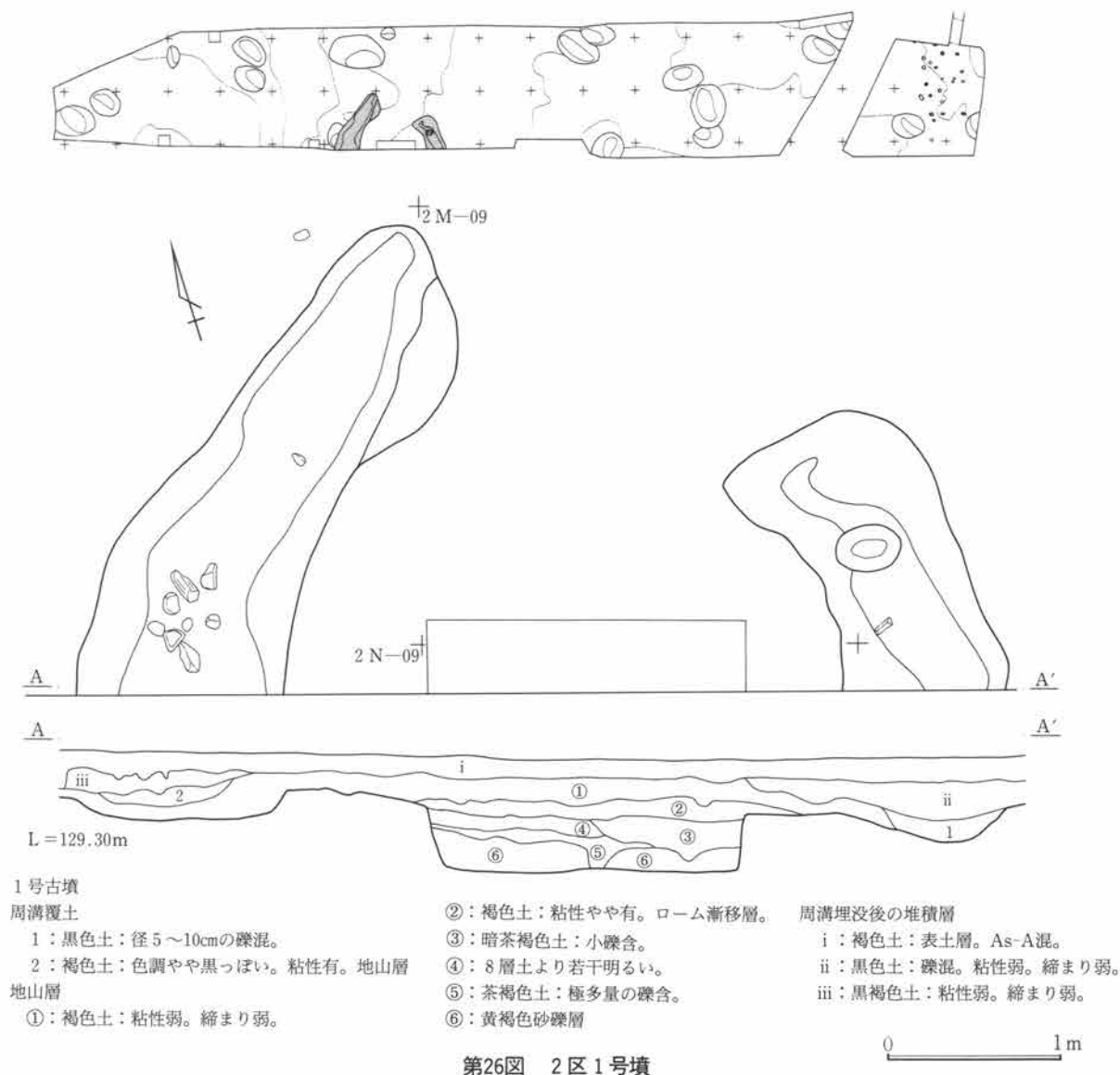


5区では西よりの畠と畠の地境に溝1条を確認・調査している。溝以外の遺構では西よりに1基、東よりに3基の土坑が調査されているが、それぞれに

関連性は無い。このほか5区東端を中心に13基以上の風倒木痕を確認している。倒木の方向は南東及び東方向2基、北方向1基がある。

第25図 塚間地区全体図

第4節 発見された遺構と遺物



1 1号古墳（第26図、図版23）

概要 1号古墳は、2区西よりに南壁から突き出すように周濠の一部のみが確認・調査された。この古墳は本来、東平井古墳群を形成する古墳の一つと考えられる。南北に延びる古墳群の中では中位の東端に位置しているが、南側路線外に想定される主体部は調査段階では畠となっており、墳丘等は認められなかった。また遺構は全体的に遺存状態が悪く、僅かに周濠を確認できたに過ぎない。この周濠は地山褐色土を掘り混んでおり、東西2条に分かれるが何れも浅い掘り込みである。東側の濠で1.5m、西側の濠

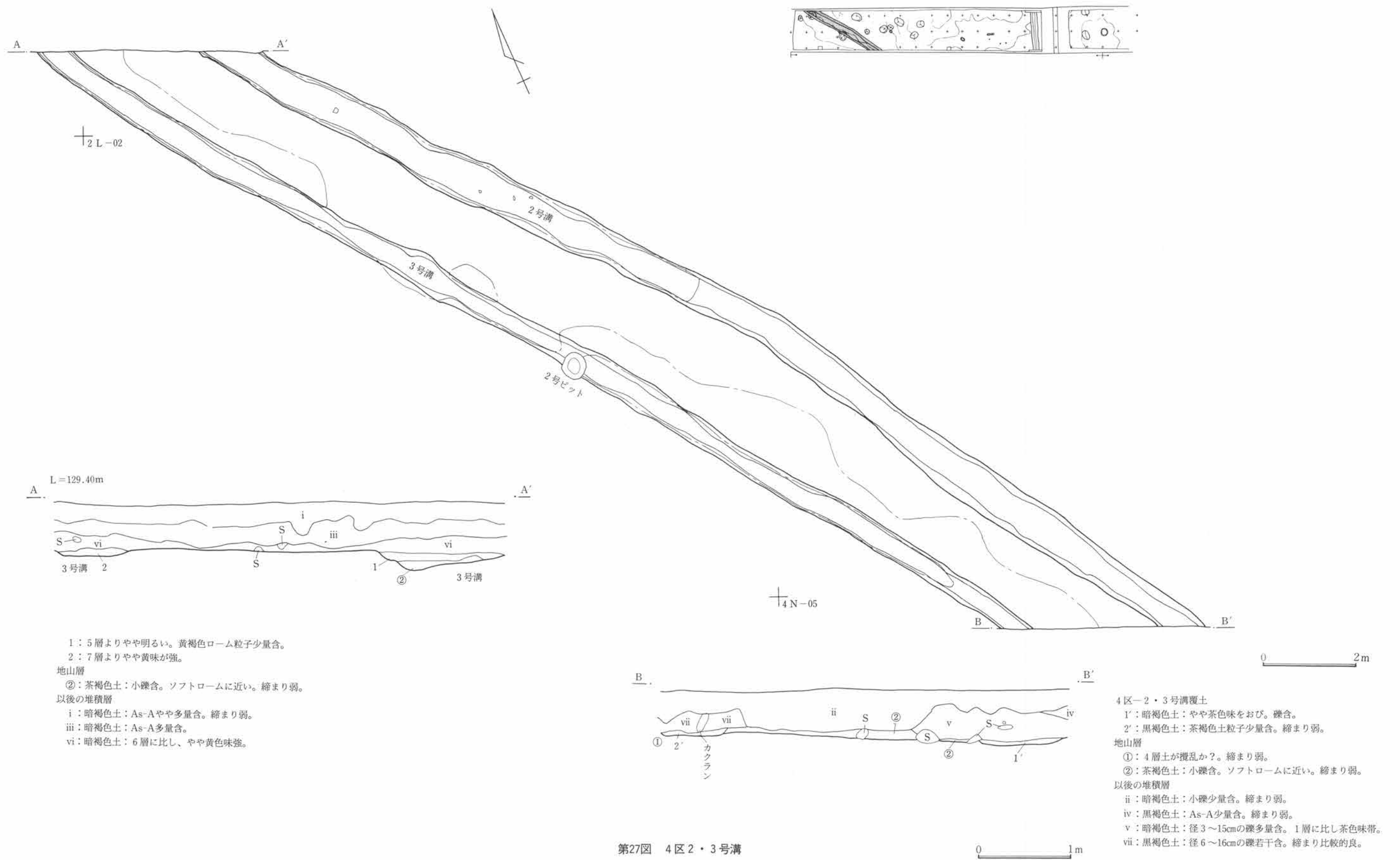
で1.9mを調査したが、特に出土遺物等は認められなかった。

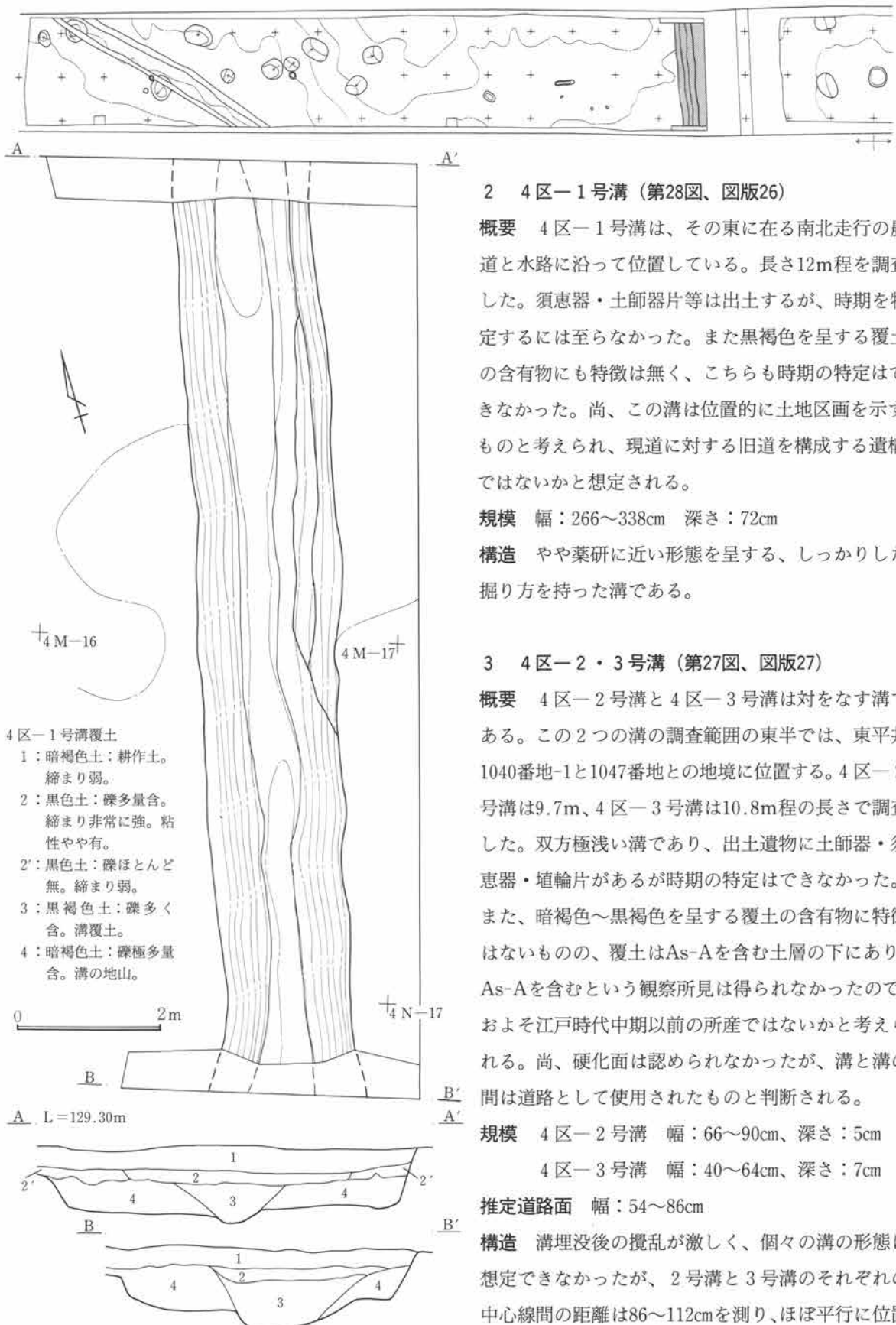
規模 古墳周濠推定径 3.6m

濠（東側） 幅64～72cm、深さ30～40cm

濠（西側） 幅48cm以下、深さ20cm

構造 小型の古墳であったことが推定される。主体部の形態や墳丘の構造等是不明である。濠の端部は東側ではやや急に立ち上がり、西側では緩やかに立ち上がる。東西の濠の間は北端付近で1.6m程隔たっているが、この部分が土橋状を呈していたか否かは特定できない。





第28図 4区1号溝

2 4区-1号溝 (第28図、図版26)

概要 4区-1号溝は、その東に在る南北走行の農道と水路に沿って位置している。長さ12m程を調査した。須恵器・土師器片等は出土するが、時期を特定するには至らなかった。また黒褐色を呈する覆土の含有物にも特徴は無く、こちらも時期の特定はできなかった。尚、この溝は位置的に土地区画を示すものと考えられ、現道に対する旧道を構成する遺構ではないかと想定される。

規模 幅: 266~338cm 深さ: 72cm

構造 やや葉研に近い形態を呈する、しっかりした掘り方を持った溝である。

3 4区-2・3号溝 (第27図、図版27)

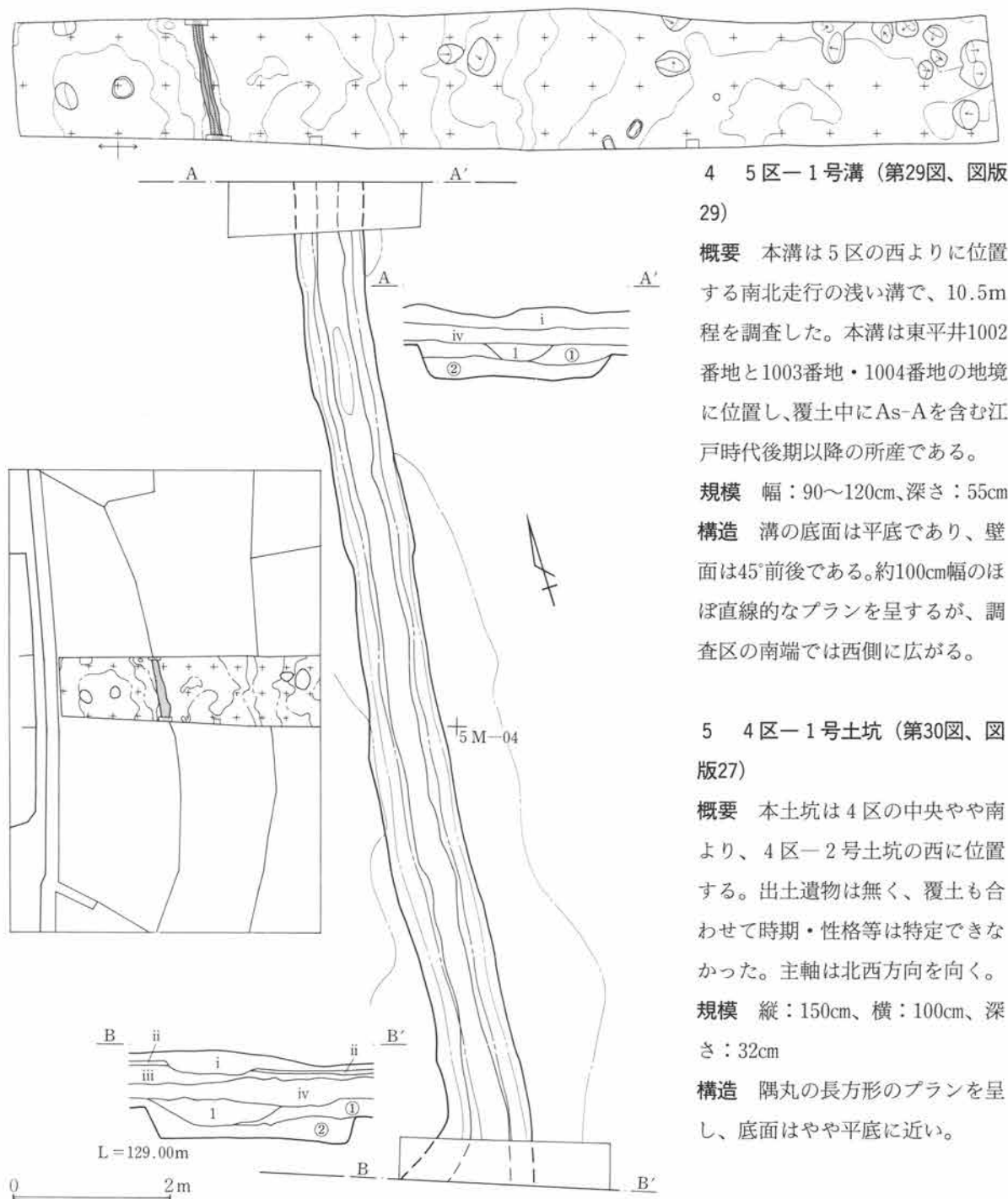
概要 4区-2号溝と4区-3号溝は対をなす溝である。この2つの溝の調査範囲の東半では、東平井1040番地-1と1047番地との地境に位置する。4区-2号溝は9.7m、4区-3号溝は10.8m程の長さで調査した。双方極浅い溝であり、出土遺物に土師器・須恵器・埴輪片があるが時期の特定はできなかった。また、暗褐色~黒褐色を呈する覆土の含有物に特徴はないものの、覆土はAs-Aを含む土層の下にあり、As-Aを含むという観察所見は得られなかったため、およそ江戸時代中期以前の所産ではないかと考えられる。尚、硬化面は認められなかったが、溝と溝の間は道路として使用されたものと判断される。

規模 4区-2号溝 幅: 66~90cm、深さ: 5cm

4区-3号溝 幅: 40~64cm、深さ: 7cm

推定道路面 幅: 54~86cm

構造 溝埋没後の攪乱が激しく、個々の溝の形態は想定できなかったが、2号溝と3号溝のそれぞれの中心線間の距離は86~112cmを測り、ほぼ平行に位置するプランを呈している。



5区-1号溝覆土

1: 暗褐色土: As-Aと少量の小礫・細粒子含。粘性やや有。

地山層

①: 黒色土: 細粒子・小礫やや含。粘性やや有。

②: 黒褐色土: 細粒子・小礫多量に含。粘性やや有。

溝埋没後の堆積層

i: 表土

ii: 茶褐色土: iii層上面の鉄分沈着。

iii: 褐色砂質土: As-A多量に含。

iv: 褐色土: As-A・小礫含。やや砂質。堅く締まる。

第29図 5区1号溝

4 5区-1号溝 (第29図、図版29)

概要 本溝は5区の西よりに位置する南北走行の浅い溝で、10.5m程を調査した。本溝は東平井1002番地と1003番地・1004番地の地境に位置し、覆土中にAs-Aを含む江戸時代後期以降の所産である。

規模 幅: 90~120cm、深さ: 55cm

構造 溝の底面は平底であり、壁面は45°前後である。約100cm幅のほぼ直線的なプランを呈するが、調査区の南端では西側に広がる。

5 4区-1号土坑 (第30図、図版27)

概要 本土坑は4区の中央やや南より、4区-2号土坑の西に位置する。出土遺物は無く、覆土も合わせて時期・性格等は特定できなかった。主軸は北西方向を向く。

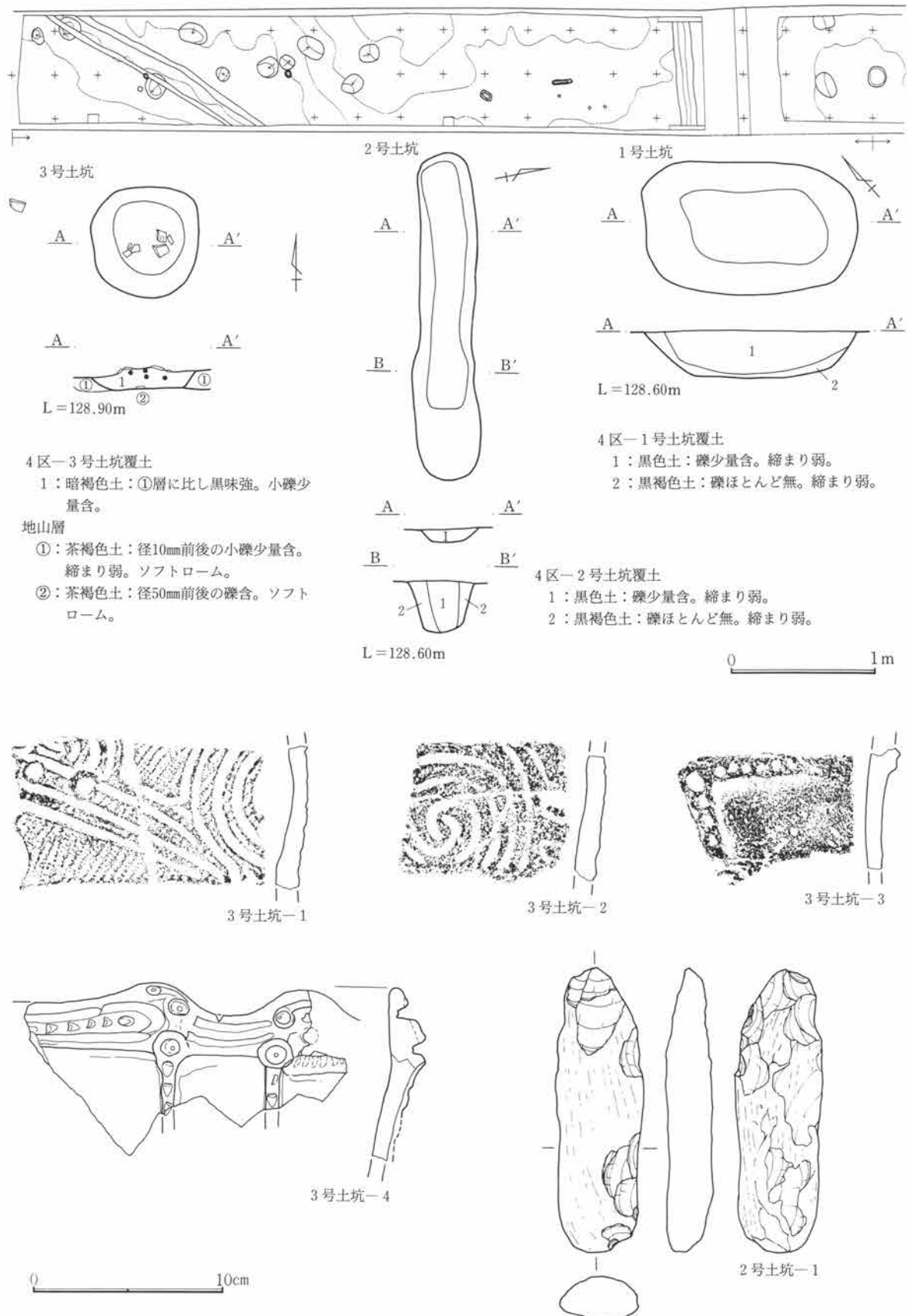
規模 縦: 150cm、横: 100cm、深さ: 32cm

構造 隅丸の長方形のプランを呈し、底面はやや平底に近い。

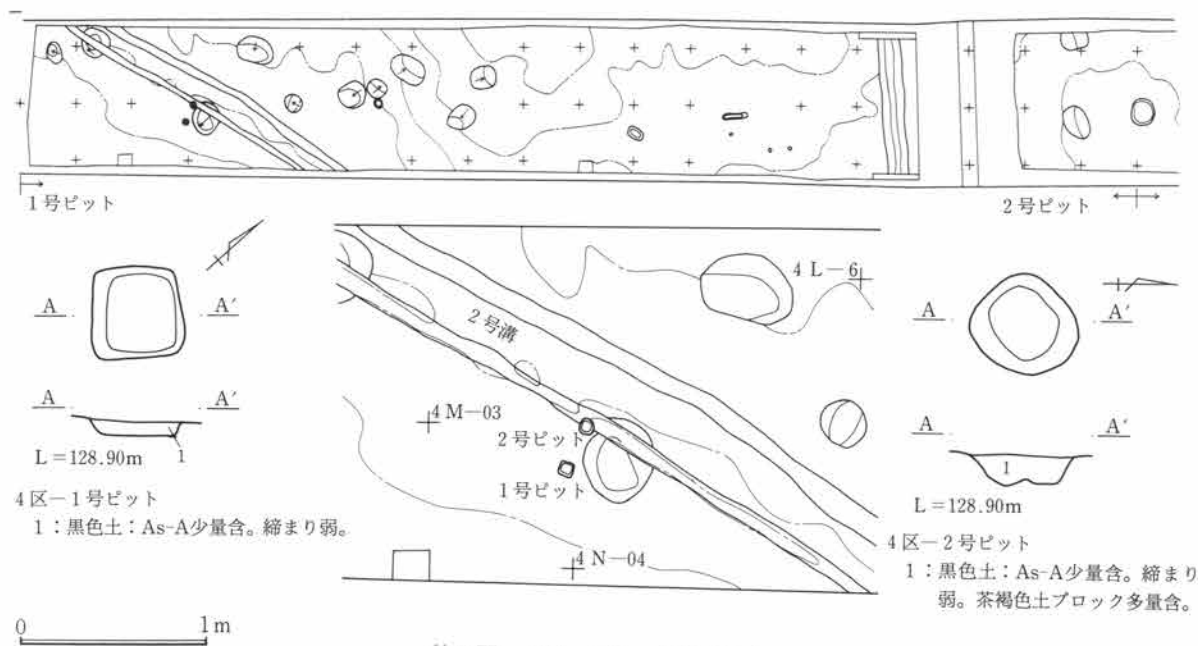
6 4区-2号土坑 (第30図、図版27・30)

概要 本土坑は4区の中央、やや東よりに在る。覆土は4区-1号土坑に類似し、出土遺物もなかったため、時期・性格等は特定できなかった。東西方向に主軸は向く。

規模 縦: 230cm、横: 50cm、深



第30図 1～3号土坑及び出土遺物



第31図 4区-1号・2号ピット

さ：35cm

構造 細長い方形プランを呈す。底面はやや丸底気味で、南・西・北の壁面の傾斜は鋭く東面は緩い。

7 4区-3号土坑 (第30図、図版27・30)

概要 本土坑は4区の西より、4区-2・3号溝の東に位置する。縄文土器深鉢の口縁部破片等縄文時代中期初頭の土器片を確認面及び土坑底部から出土する。該期の土坑と判断される。

規模 縦：70cm、横：70cm、深さ15cm

構造 隅丸方形のプランを呈する。底面は平底であるが、残存深さが浅いので全体の構造は不明。

8 4区-1号ピット (第31図)

概要 本ピットは、4区-3号溝と4区-2号ピットの南に近接して位置する。黒色を呈する覆土はAs-Aを含むので江戸時代後期(天明3年)以降の所産と考えられる。掘り込みは浅いがやや大きめのピットである。4区-2号4ピットと併せて何らかの構造物を構成していた柱穴であった可能性を持つ。

規模 縦：60cm、横：40cm、深さ7cm

構造 方形のプランを呈する。残存深さが浅いので全体的構造は不明である。

9 4区-2号ピット (第31図)

概要 本ピットは4区-3号溝の南肩付近で切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。南に近接する4区-1号ピットと覆土及び基本プランが類似するため、同時に掘削された可能性を持ち、何らかの構造物を造る柱穴であったと推定される。

規模 縦：50cm、横：50cm、深さ16cm

構造 隅丸方形のプランを呈する。4区-1号ピット同様残存状況が悪く、全体的構造等は不明である。

10 5区-1号土坑 (第32図、図版29)

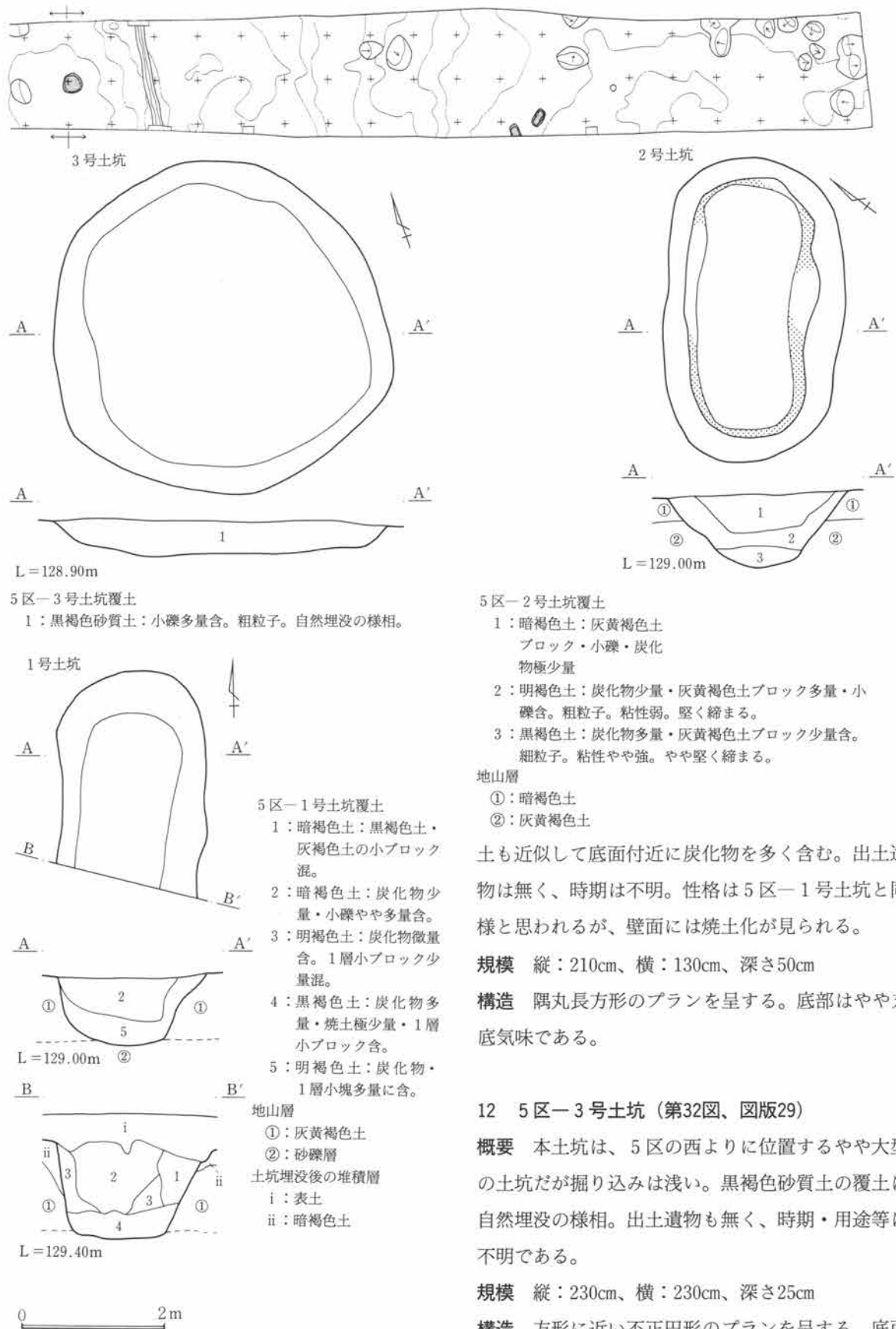
概要 本土坑は5区の中央やや東より、5区-2号土坑の南西に近接する。遺構の過半は南側の路線外に出る。出土遺物は無く時期は特定できないが、覆土中、特に底面近くに炭化物を多く含む。土坑内での燃焼が考慮されるが、焼土は微量であり、一過性の使用とも考えられる。

規模 縦：150cm、横：120cm、深さ67cm

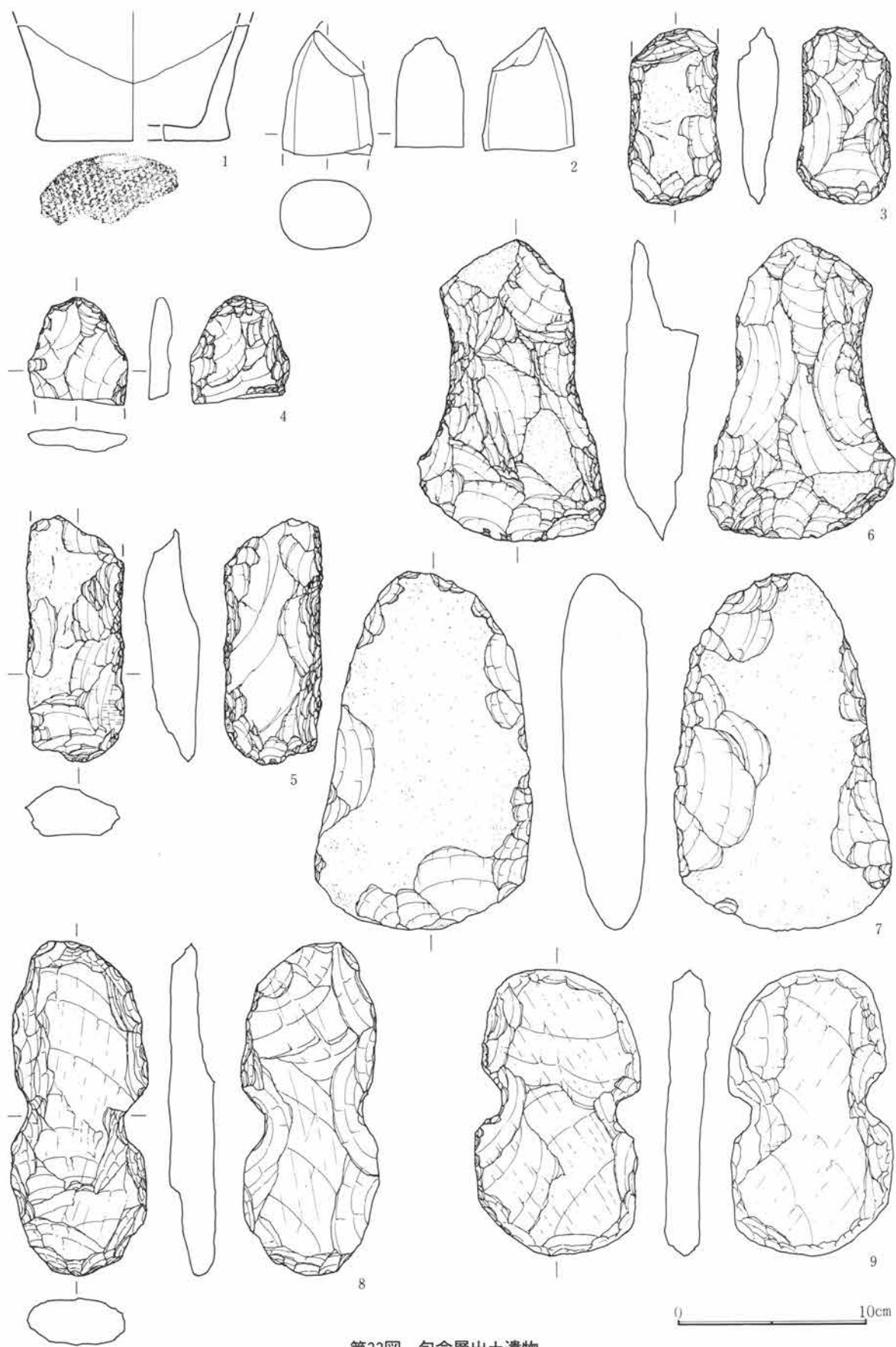
構造 隅丸の長方形のプランを呈すると推定される。底部は平底に近い。

11 5区-2号土坑 (第32図、図版29)

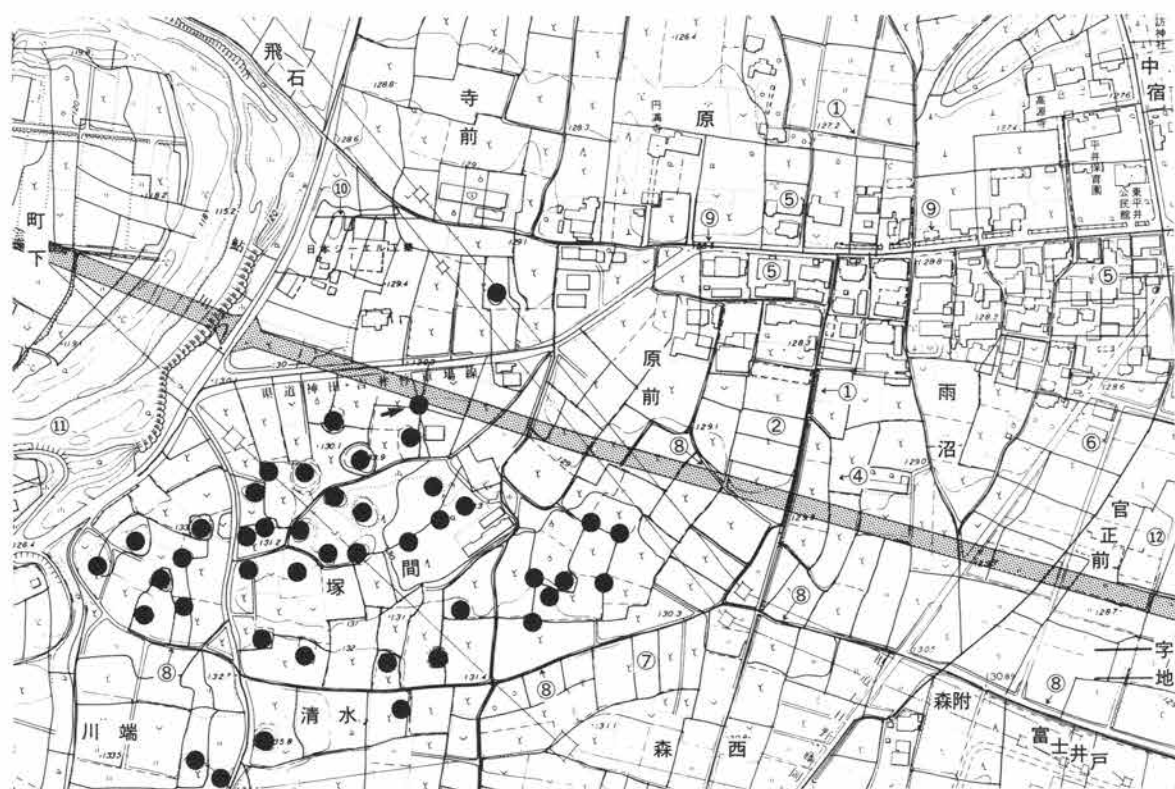
概要 本土坑は5区-1号土坑の北東に近接し、覆



第32図 5区-1～3号土坑



第33図 包含層出土遺物



第34図 東平井古墳群分布状況（K-137～K-179古墳のまとまり）

第5節 小 結

以上東平井塚間遺跡の調査成果について報告してきたのであるが、本遺跡のまとめとして以下3点について若干を延べてみたいと思う。

① 1号墳について

本遺跡付近には東平井古墳群のうち、同古墳群の3カ所の大きなまとまりのうち中部のまとまりであるK-137～K-179古墳が分布している。このまとまり（塚間支群）を構成する古墳は現在に於いても遺存状況が比較的良好で、墳丘がそこそこに見られ、文字どおり『塚間』の地名を表している。この塚間支群の造営時期は6世紀後半から8世紀にかけてであると考えられている。本遺跡の2区で調査した1号墳はこのまとまりの東寄りの北端付近（第34図『→』印）に位置している。

本遺跡の調査の発端も本遺跡が東平井古墳群に含まれるということから始まったのであるが、1号墳以外に古墳を確認することはできず唯一調査された

1号墳の遺存状況も不良であり、調査前は平坦な耕作地であって墳丘等は認められなかった。主体部も路線外に在り、遺構の状況を適確に把握することはできなかったのであるが、1号墳の発見は同古墳群の未確認の古墳の存在を示すと共に東平井古墳群の塚間支群の範囲が更に広がる可能性を示しているものと思われる。本遺跡の西寄り地域（2区）は古墳時代後期には古墳の営まれる地域であったと判断されるのである。

③ 中・近世の概況について

本遺跡では4条の溝遺構を確認・調査した。このうち4区-1号溝は天明3年（1783）以前のものでそれ以上の時期の特定はできなかったが、県道神田・吉井停車場線（第34図-⑨）と垂直に近い状態で交叉し、道水路と一部地境によって大字東平井の中西部北半をほぼ南北に縦断するライン（第34図-①）の西側に沿って遺存していた。この付近の耕

作土の直下には本遺跡で近世後期以降の土層の下に見られる黒色土があり、溝上の範囲では礫が多く非常に硬くなっている。礫は両側の黒色土層にはほとんど含まれず、且つ同層の締まりは弱い。これは両側部分が耕作地であって、そこから出る礫を硬化部分に投棄したものと考えられ、硬化部分は何らかの地堺と考えられるのである。硬化部分の幅は254～325cmと広いことから、現道の旧道に当たるものであろうと判断している。中・近世の道路は側溝をもつものが多く、幹線道路は中世で2.5m～4m幅、近世で1.5～2.5m幅、中世の村落間連絡道路は1.5m幅⁽¹⁾であるので、その幅は幹線道路並である。但し側溝は見られない。県道神田・吉井停車場線旧道の南、①のラインの西側には一定の形状の区画が並んでいる(第34図②)。この区画内に特段の遺構を確認することはできなかったのであるが、この区画は或いは街屋の区画を示すものと思われる。尚、4区-1号溝はこれに先行する、やはり土地区画に伴うものと判断される。

4区-2・3号溝は北々西方向から南々東方向に向かって走行する溝で、天明3年(1783)段階には少なくとも底部付近は埋まってしまっているが、近世の所産と推定している遺構である。この2条の溝は道路遺構に伴うものと判断している。該地は字原前の字雨沼よりに在り(第34図③)、現況は畠地であり、地境など直接溝の存在を示唆する地形や区画を認めることはできない。しかし、溝の走行を直線的に延長すると北々西は字寺西・塚間・原西の地境付近に至り、南々東は4区-1号溝と関連付けられる現道とその西側の区画がやや西寄りに曲がる屈曲部及び地境に至っている。これらの状況から18世紀中葉以前には飛石の砦前から4区-1号溝東の道路を結ぶバイパスのような道路が存在したのではないかと想定されるのである。

4区-1号溝と道水路を挟んで東側に凡そ平行に走る5区-1号溝は、耕地と耕地の地境(第34図④)に乗る溝である。この溝は天明3年降下の軽石(As-A)を含んでいるので江戸時代後期以降の所

産と考えらる。一方、土層観察の所見では現在の耕作土の下には18世紀末以降の耕作土が認められている。5区-1号溝の調査所見を勘案すると、本調査地域に於いては少なくとも江戸時代後期以降は現在とほぼ同様の土地区画によって地割が行われ、土地利用がなされていたものと推定される。

部分的所見から全体を考察するのは適当ではないと思われるが、以上の点から、本遺跡の区画は4区-2・3号溝のような多少現在の地割とずれるものもあるが、基本的には少なくとも近世には現在の区画に近い地割が施されていたものではないかと判断されるのである。

③ 風倒木

本遺跡の遺構分布状況は全体的に希薄であり、残存する遺構の状態を勘案しても、その分布は元々多く無かったものと判断される。そうした中で風倒木は遺跡全体に広く分布し、その確認数は41基以上で本報告書に掲載した他の4遺跡と比較して極端に多く、本遺跡の特徴とできるものである。

風倒木は3区西半と4区-1号溝の西側と5区-1号溝の東側部分を除き分布している。このうち前者は谷地に当たる部分であり、中者は上述の1号溝西側の区画に一致し、後者は前2者に対し幅が狭い。調査期間等の関係から掘削や細部の記録化を行うことはできず時期等を特定することはできなかったのであるが、風倒木の分布が見られない3区の谷地部分と4区-1号溝西の区域の土地利用の状況や意識が他の区域と異なっていたことが考えられる。また、他の遺跡に風倒木がほとんど見られず、一方他の遺跡に見られる古代の集落や耕作遺構が見られないことから、本遺跡全域の土地利用の状況や土地に対する意識が他の遺跡とは異なっていたことが考えられる。

註

- (1) 坂井隆『東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴』『叡群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要-6-』1989 64頁。今井道上遺跡等で発掘した遺構の所見や測定値による。

東平井塚間遺跡出土遺物一覧

1 4区-1号溝

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000018	土師器	1	10g	
2	11-000019	縄文土器	1	20	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000020	瓦	2	230g	
4	11-000028	縄文土器	1	60	取上番号：2

2 4区-2号溝

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000012	土師器	4	20g	取上番号：1,3,4,5

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000013	須恵器甕	1	6g	取上番号：2

3 4区-3号溝

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000017	須恵器甕	2	80g	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考

4 4区-2号土坑出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第30図 図版30	20-000001	こもあみ石	長さ 14.7 幅 4.6 厚み 2.45	先端部・側縁部に剝離見られる	石材 雲母石英片岩

5 4区-3号土坑出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第30図 図版30	10-000001	縄文土器深鉢 (胴部破片)	器厚 0.8~1.3	内面横方向調整。沈線による渦巻斜位。原体はL { R 後期掘之内	①やや良 ②にぶい黄橙色(10 YR6/4) ③中粒砂混入
2	第30図 図版30	10-000002	縄文土器深鉢 (胴部破片)	器厚 0.7~0.9	内面横方向調整 沈線による渦巻文 器面荒れる 後期	①不良 ②にぶい黄橙色(10 YR6/4) ③中粒砂混入
3	第30図 図版30	10-000003	縄文土器深鉢 (口縁破片)	器厚 0.7~1.2	横位垂下する隆帯上に円形刺突文施文 後期初頭	①やや良 ②にぶい黄橙色(10 YR6/4) ③中粒砂混入
4	第30図 図版30	10-000004	縄文土器深鉢 (口縁破片)	器厚 0.7~1.0	内面横方向調整沈線による2区画、円形刺突文 後期	①やや良 ②にぶい黄橙色(10 YR4/7) ③中粒砂混入

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
5	11-000021	土師器甕	1	40g	取上番号：1
6	11-000022	縄文土器	2	60	
7	11-000025	軟質陶器	3	50	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
8	11-000027	縄文土器	2	60g	取上番号：1,5
9	11-000029	縄文土器	3	80	

6 包含層出土遺物

① 2区出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第33図 図版30	10-000006	縄文土器深鉢 (底部破片)	底径推定 11.0	内面丁寧な調整 網代底	①やや良 ②にぶい橙色(7.5 YR7/3) ③中粒砂混入
2	第33図 図版30	20-000002	磨製石斧 (二折断片)	残存長 65 幅 4.75 厚み 3.6	刃部研磨	石材：変質安山岩
3	第33図 図版30	20-000003	打製石斧	長さ 9.1 幅 4.5 厚み 2.1	短冊形、一面に自然面残す	石材：硬質泥岩
6	第33図 図版30	20-000005	打製石斧	長さ 21.05 幅 13.2 厚み 5.25	鉄斧様の形態を呈する。一部に自然面残す	石材：硬質泥岩
7	第33図 図版30	20-000009	打製石斧	長さ 18.65 幅 11.4 厚み 4.55	刃部のみ調整。自然面を多く残す	石材：変玄武岩
8	第33図 図版30	20-000006	打製石斧	長さ 17.4 幅 7.05 厚み 2.4	分銅形。一部を除く刃部と挟れ部に摩耗痕残す。	石材：雲母石英片岩
9	第33図 図版30	20-000004	打製石斧	長さ 14.9 幅 8.5 厚み 2.1	分銅形。刃部全体と挟れ部に摩耗痕残す	石材：雲母石英片岩

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
	11-000001	土師器	10	115g	取上番号：4,9、10,12,17,18,20
	11-000002	土師器	3	60	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
	11-000003	縄文土器	8	280g	
	11-000005	軟質陶器火鉢	1	20	

② 3区出土遺物

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
	11-000004	土師器	3	20g			11-000010	土師器	3	50g	
	11-000006	埴輪	2	70	第1層		11-000014	縄文土器	1	10	第1層
	11-000007	縄文土器	2	120	取上番号：3		11-000015	須恵器	1	20	取上番号：3
	11-000008	土師器	1	30	取上番号：1		11-000016	埴輪	1	60	取上番号：2
	11-000009	土師器	6	60	第1層		11-000026	染付	1	10	第1層

③ 4区出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
4	第33図 図版30	20-000008	打製石斧 (一方の先端部)	残存長さ 5.6 幅 5.2 厚み 1.2	分銅形か	石材：細粒安山岩

(4区-LM-05グリット)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
	11-000023	陶器	10	110g	4区-3土坑周辺		11-000024	播鉢	8	220g	第1層

④ 遺跡全域よりの出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
5	第33図 図版30	20-000007	打製石斧	長さ 12.8 幅 5.1 厚み 2.9	短冊形	石材：砂質泥岩
10	— 図版30	10-000005	瓦 (破片)	残存 6.0×7.5	凹面編目押凸面剝離	①還元焰・やや軟 ②灰黄色 (2.5YR6/2) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
	11-000011	縄文土器	5	20g	

7 石 器

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	21-000001	フレーク	1	60g	2区	2	21-000002	フレーク	1	30g	4区



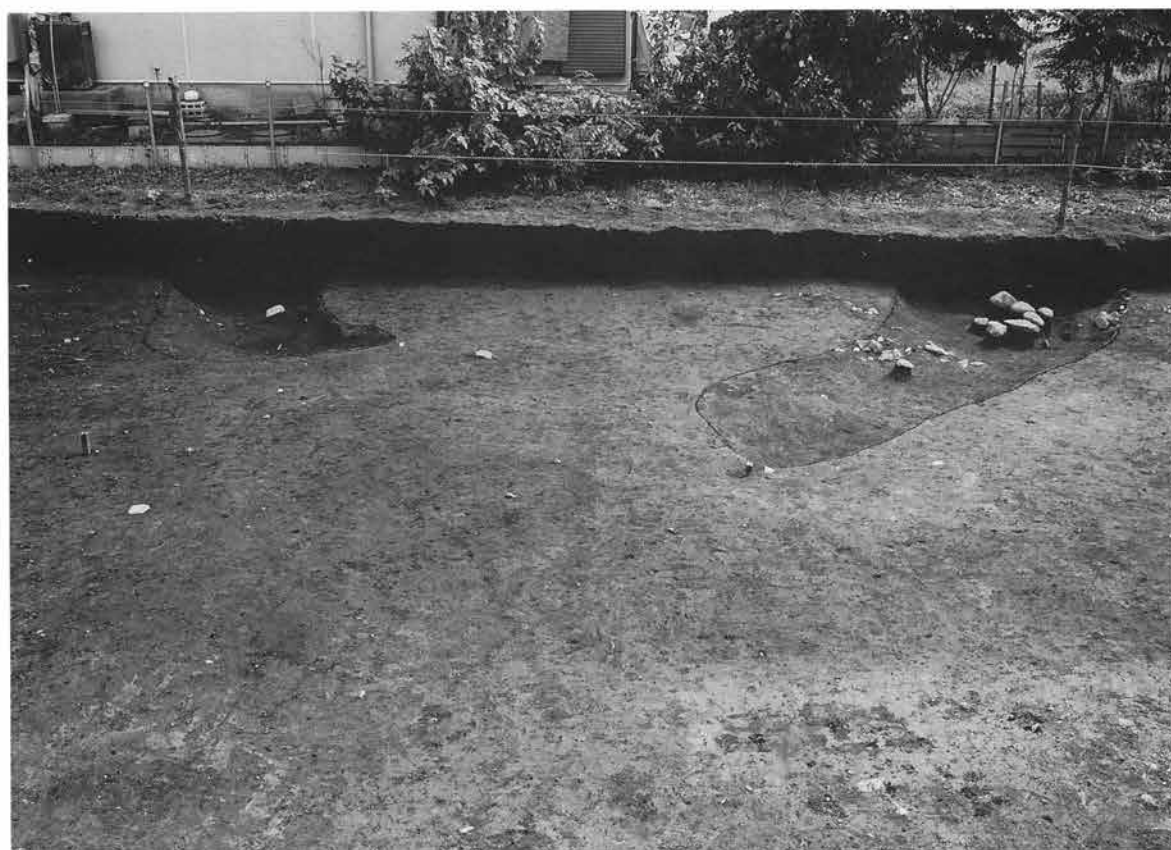
10-38-6 東平井古墳群



10-890008-02 2区全景 東から



10-890004-02 2区全景 西から



10-890007-02 2区1号墳全景 北から



10-890007-05 2区1号墳セクション 北から



10-890007-08 2区1号墳セクション 北から



01-890004-011 2区1号墳セクション 北から



01-890004-017 2区1号墳セクション 北から



10-890005-02 2区ビット群



01-890004-035 2区道の間トレンチ 南から



01-890006-012 2区道の間トレンチ落ち込みセクション



10-890016-07 3区全景 東から



10-890016-03 3区全景 西から



10-890002-05 4区全景 西から



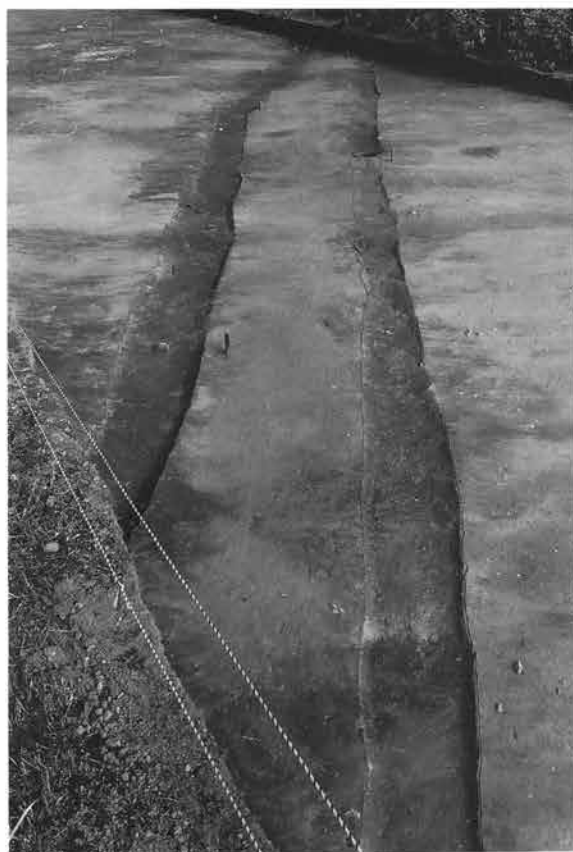
10-890010-07 4区1号溝全景 北から



10-890011-02 4区1号溝全景 南から



10-890012-05 4区2・3号溝全景 南東から



10-890012-02 4区2・3号溝全景 北西から



10-890010-08 4区1号溝遺物出土状態(瓦)北から



10-890009-03 4区1号土坑全景 東から



10-890006-02 4区2号土坑全景 東から



10-890001-02 4区3号土坑全景 東から



10-890003-08 5区全景 東から



10-890003-03 5区全景 西から



01-890001-008 5区1号溝全景 南から



01-890002-021 5区1号土坑セクション 北から



01-890002-027 5区2号土坑全景 北東から



01-890009-003 5区3号土坑全景 南から



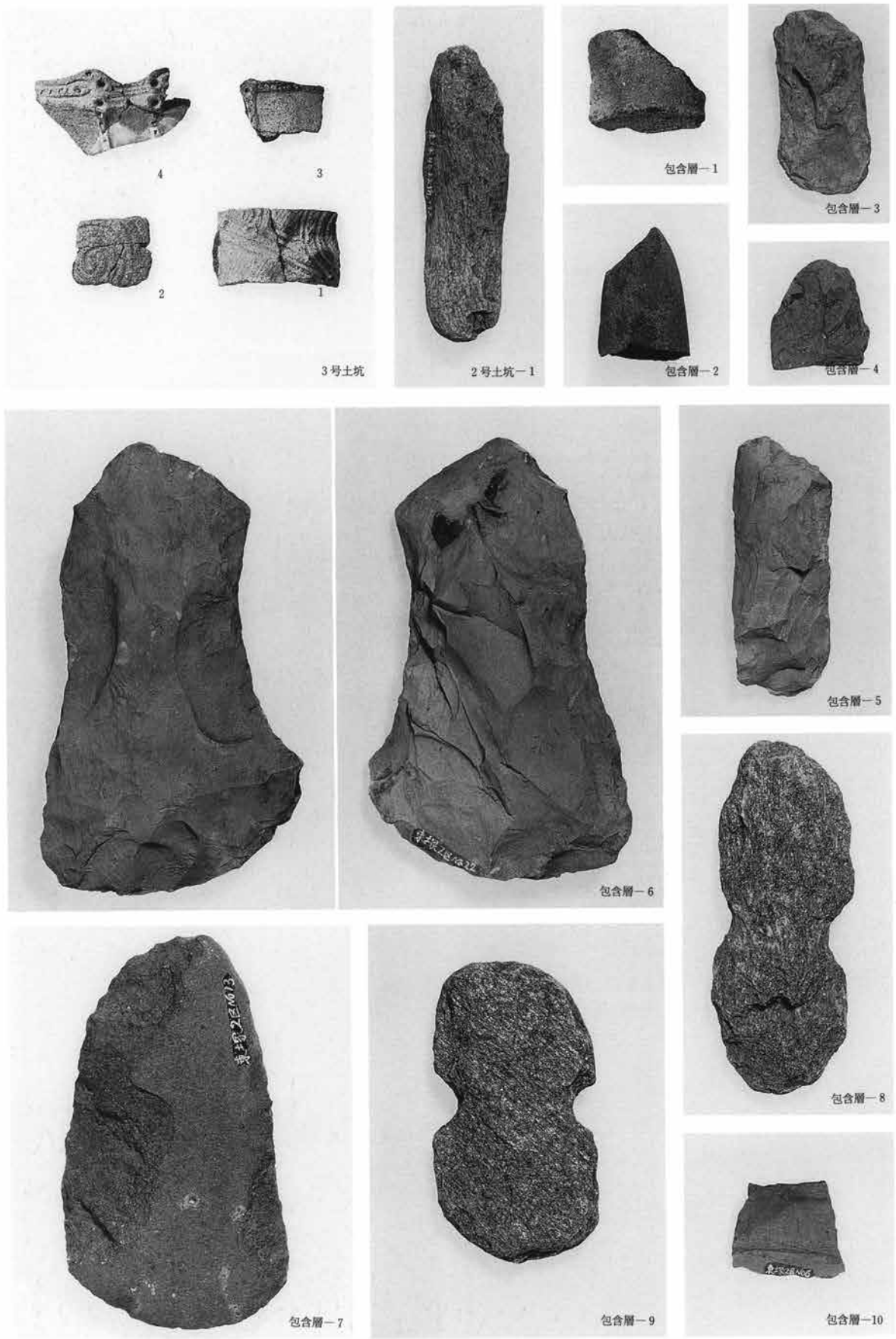
01-890004-001 2区調査風景 北から



01-890008-005 3区調査風景 西から



01-890010-033 3区調査風景 東から



第4部 東平井官正前遺跡



1号井戸出土 内耳鍋と摺鉢

第6章 東平井官正前遺跡の調査

第1節 調査の経過

本遺跡の調査は平成2年10月16日に着手した。調査区のうち6区と7区の一部についてはトレンチ拡張の方式を取り、8～10区についてはほぼ全面発掘を行った。調査は測量を除き12月25日までに完了。翌26日中には測量作業も完了した。この間、猿川遺跡地区を除く字三つ目川原・土井下地区に対する試掘調査を11月16日から同27日にかけて実施した。12月25日には調査と並行して資材の撤収に入り、同26日を以て撤収を完了した。官正前遺跡の本遺跡各地区の調査経過概要は以下の通り。

6区については、10月22日にL～M-09付近を拡張し、前年度確認の1号火葬土壌を10月30日～11月7日の間調査。10月29日～11月1日にトレンチ調査を行い、1号溝を確認。11月22日より同溝周辺地域の表土を除去して調査に入り、同月27日調査を完了している。

第2節 標準土層

東平井官正前遺跡の調査区は、ロームを基盤とする微高地、旧川道に伴う沖積地などが複雑に入り交じり、その堆積層も一定ではない。その土質を観察するとおよそ7グループの土層群に分けられるが、これらの組み合わせは、上述の理由から掘削箇所によって異なり全体として均質化するのには難しい。

最上位は現在の耕作土であり調査区全面に見られる。およそ暗褐色を呈する砂質土でAs-Aを混入する。またその下面に乾田を示唆する酸化鉄分層が沈着する面もある。

この第1層群の下位には、黒色系で粒子が粗く粘性の低い第2層群が入る。この土にAs-Aは含まれない。尚、箇所によって相対的所見から第2層群に比定される土層には色調が褐色系であったり、砂質など土質の異なる土-第2-2層群としたものが入

7区のトレンチ調査は10月18日～29日に実施。遺構の遺存は見られず調査を終了した。

8区のトレンチ調査は10月19日に実施。遺構を確認したため、11月16日より表土掘削・遺構確認作業に入った。11月27日の竪穴住居跡の掘削より本格的調査に入る。順次遺構調査を進め、12月25日の土坑の遺物取り上げで測量を除く調査を終了。翌26日測量作業も完了した。

9区のトレンチ調査は10月22日～24日の間実施。11月1日より重機による掘削を開始し、同5日より遺構確認作業に入った。同7日の1・2号溝から順次遺構調査に入り、12月25日の7号溝の遺物取り上げ作業等で調査を終了した。

10区は10月23日～25日の間にトレンチ調査。11月8日東側よりピットの調査に入る。12月10日掘削作業を終了した。

る場合もある。

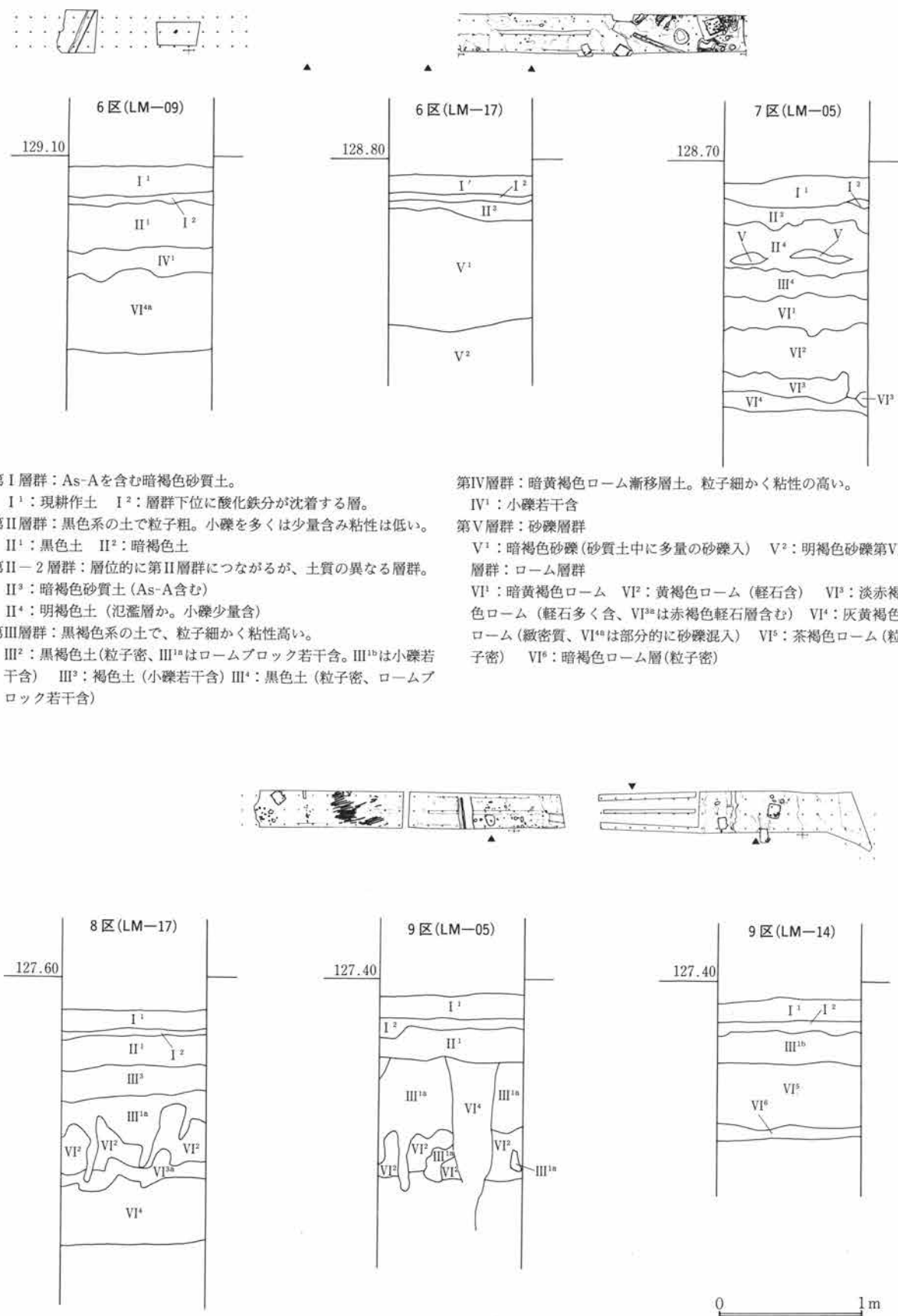
第2層群の下位には粒子が細かく粘性の高い、黒褐色系統の色調を持つ第3層群が入る。この土層群は混入物をあまり含まない。

第3土層群の下位は模式的には微高地部はローム漸移層とローム層、沖積部は砂礫層が入る。しかしこれらの土層群は個々の掘削位置によって複雑に入り組み、全体としては統一性に欠けている。

第4層群はローム漸移層土である。暗黄褐色を呈し、粒子は細かく粘性が高い。

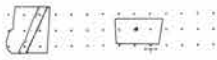
第5層群は砂礫層群であり、砂質土中に多量の砂礫の入る暗褐色または明褐色の層群と灰黄褐色の砂礫層に大別される。

第6層群はローム層群であるが、黄褐色系統の色調のものを中心に、軽石を含むものが多い。



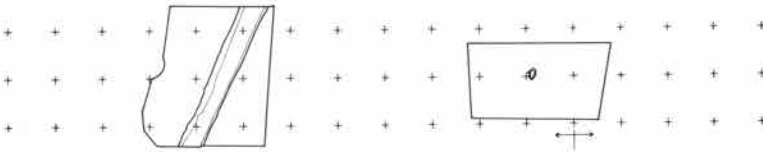
第35図 標準土層

第3節 遺跡の概要



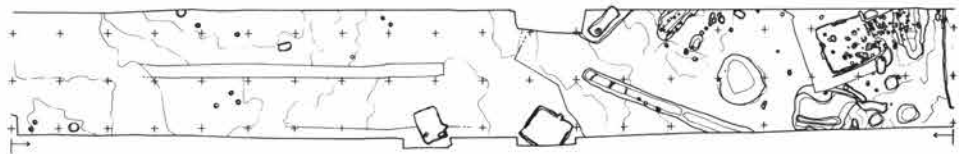
調査区は東平井地区の6区から10区の一部（字官正前部分）を包括する。このうち6区については試掘成果に基づいてトレンチを拡張して溝1条と火葬土壌1基の部分で調査対象とした。また、6区の拡張

区に含まれた部分を除く7区は、調査対象外として除外した。8区・9区と、10区の一部については全面を発掘対象区域とし、現道の一部を除き調査をおこなった。



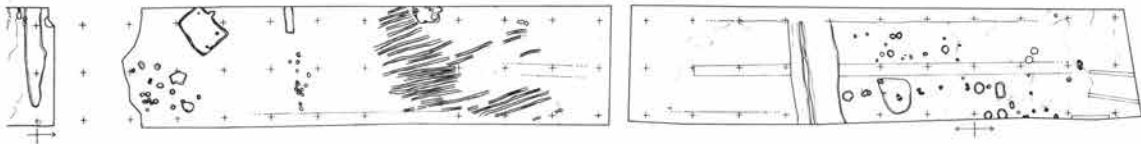
6区では7区の一部を含めた2カ所を部分的に拡張し、この拡張区に限って本調査を実施した。調査対象となったのは区中部に位置する溝1条とその周辺地域、東部7区寄りに発見された火葬土壌周辺地

域である。この2つの遺構周辺は十分な広さを確保して拡張区域を設定したのであるが、2つの遺構以外に確認された遺構はなく、8区の状態も勘案すれば遺構の分布は極めて薄いと言えよう。



8区では竪穴住居3軒と、井戸2基、溝3条、土坑・ピット群が確認調査されているが、これらの遺構群は調査区の東よりに集中して遺存し、9区西端部の遺構群の区域に続いている。これらの遺構群の

中で注目されたのは2つの井戸遺構である。何れも掘り方は浅くさして大きいプランも持たないが、特に1号井戸からは多量の内耳鍋・摺鉢等の軟質陶器片が出土している。

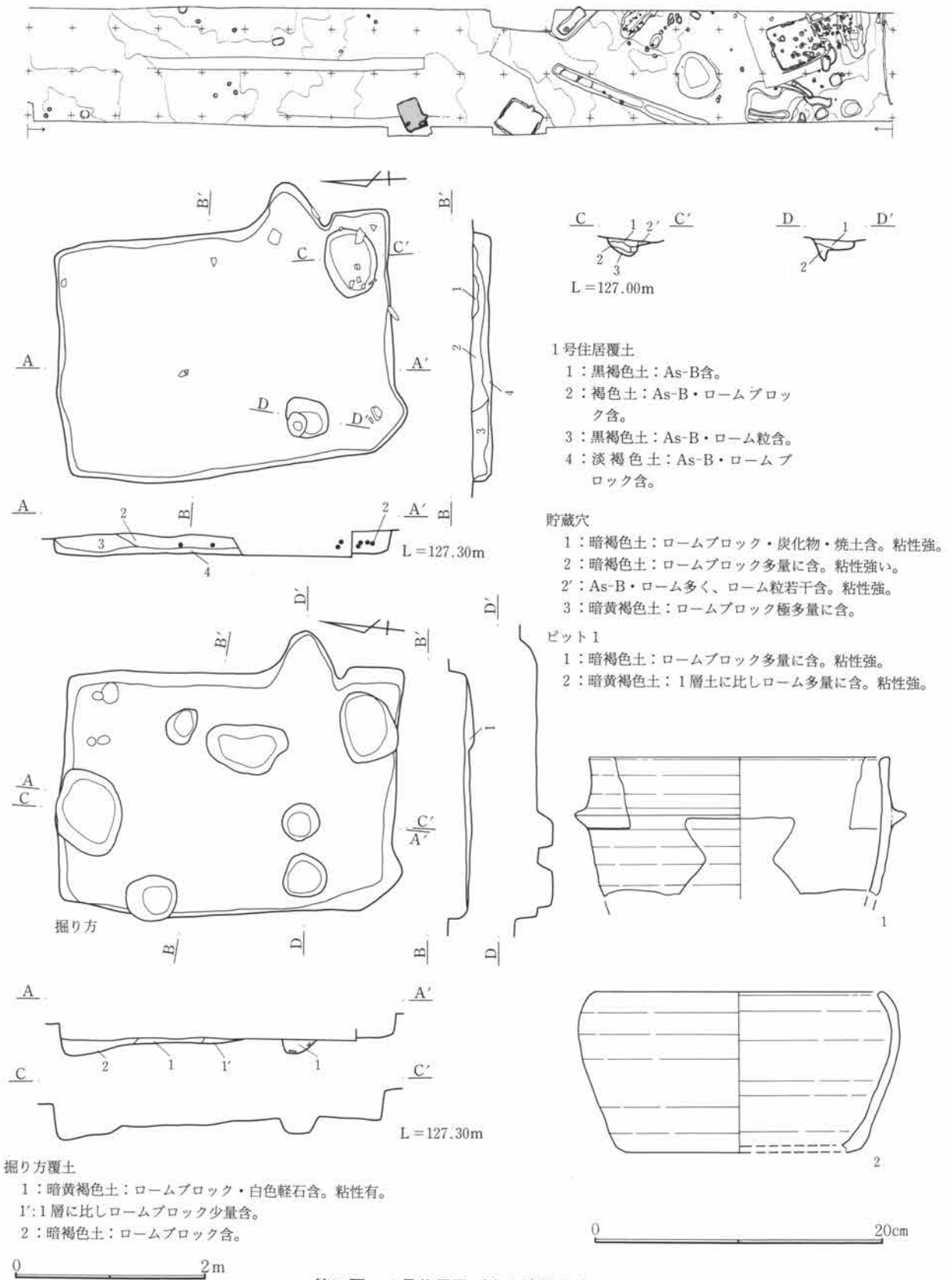


9区・10区の遺構群は、9区中・西部一群と9区東端から10区にかけての一群に大別され、両者の間は25m程は遺構が遺存していない。前者の遺構群は西側から8区との区境にある溝1条、土坑・ピット

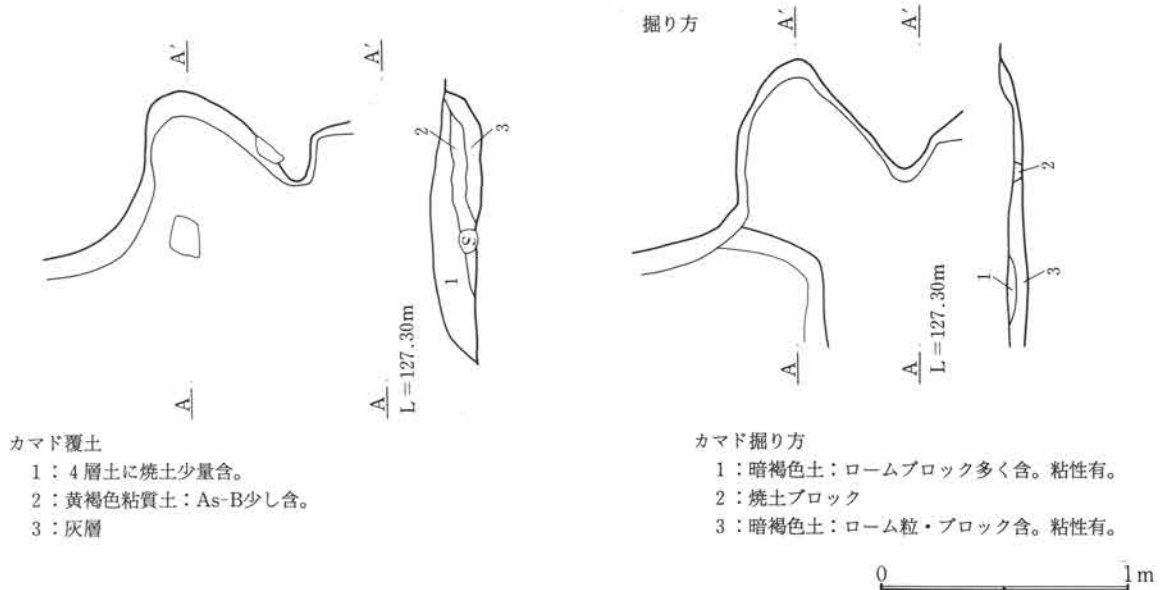
群と竪穴住居1軒、土坑・ピット群、竪穴住居1軒とサク状遺構1面が確認され、調査された。後者の遺構群は西端に南北走行の溝2条が並んで遺存し、その東には土坑・ピット群が展開している。

第36図 官正前地区全体図

第4節 発見された遺構と遺物



第37図 1号住居及び出土遺物(1)



第38図 1号住居カマド(2)

1 1号住居 (第37・38図、図版32・43)

概要 1号住居は8区中央の南壁沿い、2号住居の西側に位置する。東にカマドを持つ小型の竪穴住居跡である。調査に当たっては住居南西コーナー部分が南壁に入っていたため、可能な限り路線幅に近い位置まで拡張して調査を行い、かろうじて住居全体を記録化することができた。

カマドは廃棄された時に壊されたのか遺存状況が悪く左袖を確認することはできなかったが、右袖は確認することができた。カマドの埋土には若干のAs-Bを含んでおり、平安時代末頃以降に埋没する比較的新しい時期の竪穴住居であることが分かる。また、後述する住居の掘り方面に確認された5つの土坑は何れも性格等は不明であるが、中央東寄りの大きめの床下土坑はカマドの北西に近接しており、位置的に見て所謂床下粘土坑に相当するものの可能性がある。

出土遺物は多くないが、貯蔵穴付近を中心に須恵質・土師質の土器片の出土が見られた。特徴的な遺物としては、酸化焰焼成の所謂吉井型の羽釜(1)と還元焰焼成の大きめの鉢(2)があるが、11世紀前半の所産と考えられる。

規模 住居 縦: 250cm 横: 358cm 残存深さ: 20

cm、

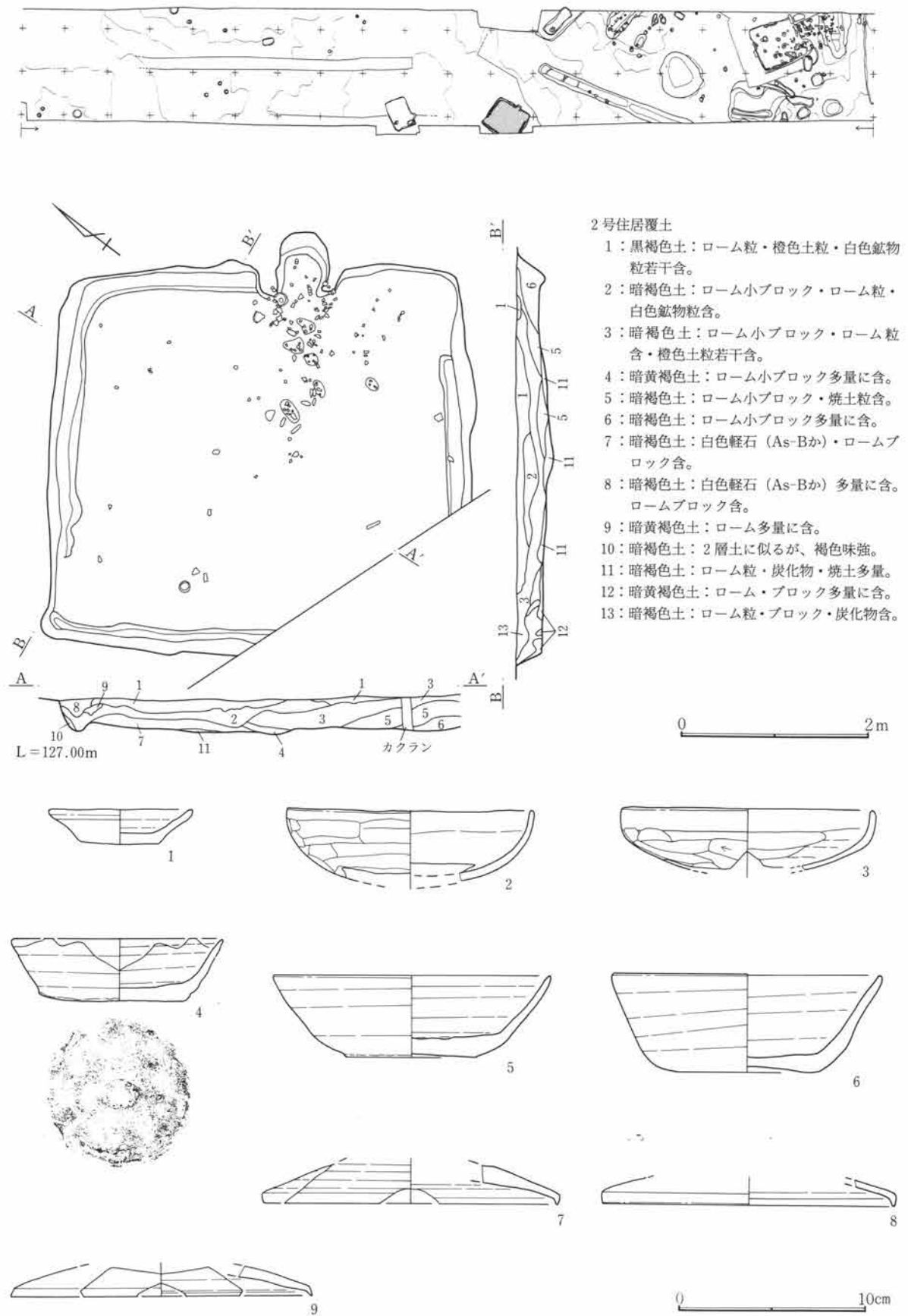
貯蔵穴 縦: 70cm 横: 54cm 深さ: 24cm

ピット1 縦: 43cm 横: 44cm 深さ: 24cm

カマド 幅: 推定95cm 奥行き: 57cm 右袖幅: 18cm 長さ: 18cm

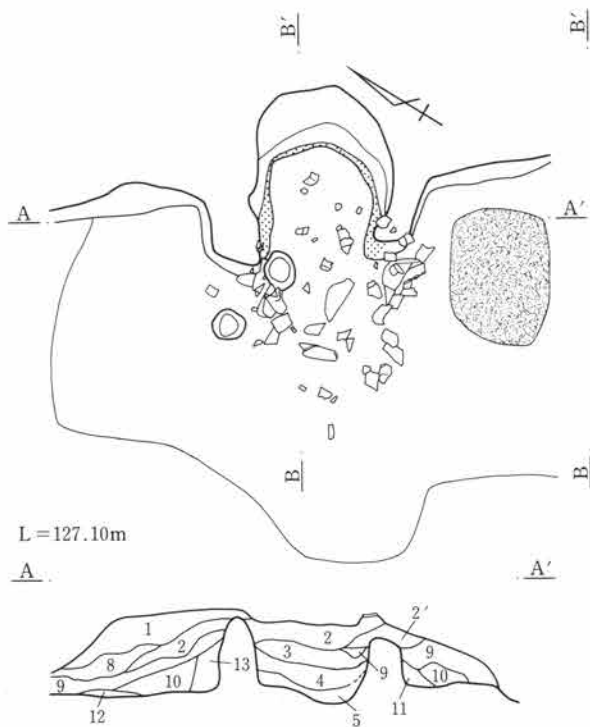
構造 1号住居はカマドに対して横長の長方形のプランを呈する。1号住居は掘り方を持ち、住居の掘り方には北壁・西壁際とカマド右側手前の柱穴の東側に各1基、中央東寄りに1基、その西に1基の計5基の床下土坑が掘られている。床面はロームブロックを含む暗黄褐色の土で構築されている。住居床面のカマド右側手前には貯蔵穴があり、柱穴を想定できるピットは僅かに南西(カマドに対して右側手前)のピット1を見ることができるほかは特に記すべき遺構などは見られなかった。貯蔵穴は方形を意識した楕円形のプランを呈し、ピット1は方形のプランを呈するが、何れも掘り込みは浅い。

カマドは東に造られ、詳細な構造は詳かでないが、燃焼部は壁のラインをまたいで作らたと推定され、短い袖を造っていたものと考えられる。煙道の形態・規模等は不明である。カマドの掘り方は、カマド左側に対して右側部分と煙道側部分が若干落ちる以外に特段の落ち込み等は確認できなかった。



第39図 2号住居及び出土遺物(1)

第4節 発見された遺構と遺物

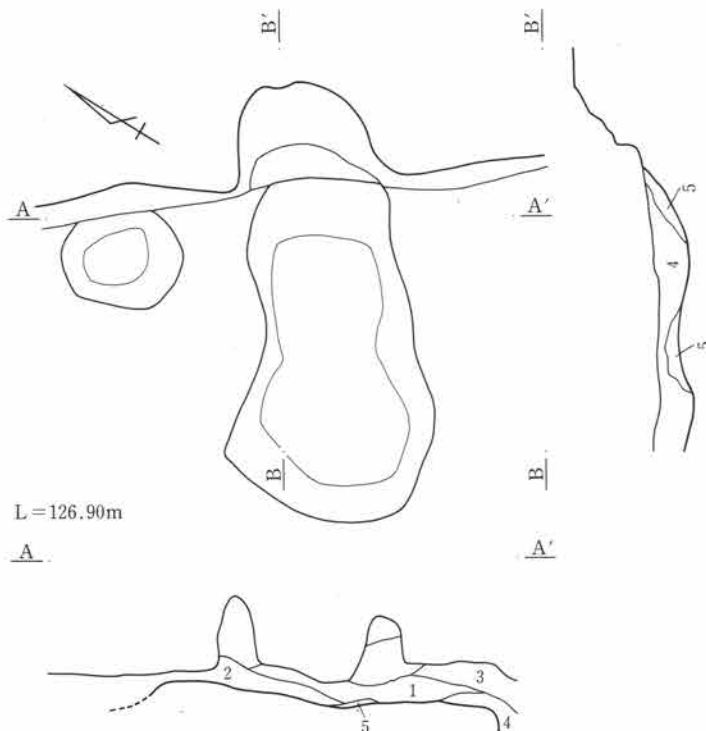


カマド覆土

- 1：暗褐色土：ローム粒・焼土小ブロック・白色軽石若干含。
- 2：暗褐色土：ロームブロック多量・焼土粒・白色軽石少量含。
- 2'：暗褐色土：ロームブロック・焼土粒含。
- 3：暗褐色土：2層土に比しロームブロック少量含。
- 4：暗褐色土：ローム粒・ロームブロック・焼土小ブロック混。
- 5：暗褐色土：焼土小ブロック多量含。
- 6：暗褐色土：ロームブロック多量含。
- 7：暗褐色土：ローム粒・炭化物・焼土粒含。
- 8：暗褐色土：ローム・焼土ブロック多・ローム粒含。
- 9：暗褐色土：2層土に比し多量のロームブロック含。
- 10：暗褐色土：7層に似る。ロームブロック多。
- 11：暗褐色土：焼土・ロームブロック、炭化物含。
- 12：暗褐色土：焼土ブロック多量に含。
- 13：褐色土：ロームブロック・軽石含む。
右袖上部：焼土混入多。

カマド袖

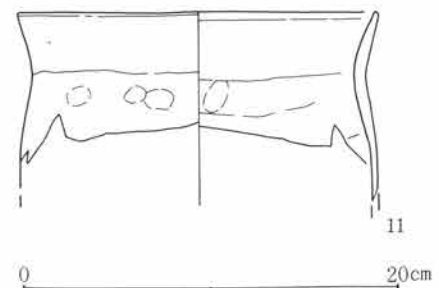
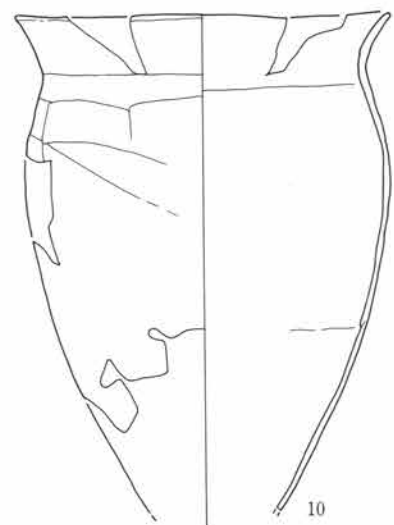
- 左袖右：ロームブロック多量含。
左袖左：褐色土：ロームブロック・軽石含。



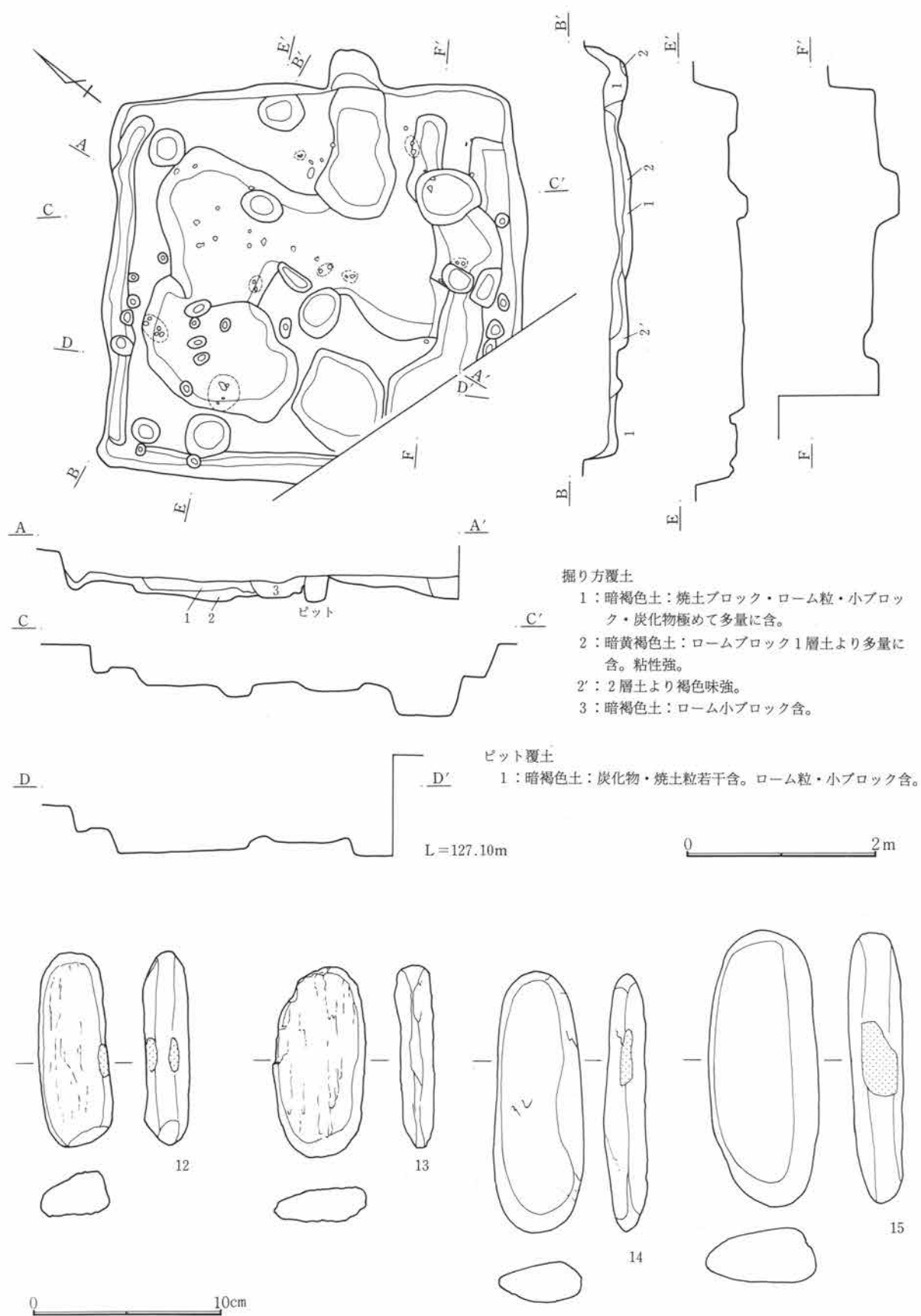
カマド掘り方

- 1：褐色土：ロームブロック・焼土ブロック多量含。
- 2：暗黄褐色土：ロームブロック・焼土ブロック含。
- 3：暗褐色土：ロームブロック・焼土ブロック・炭化物含。
- 4：暗褐色土：焼土ブロック・ロームブロック多量含。炭化物含。
- 5：褐色土：ロームブロック多量・白色軽石含。

0 1m



第40図 2号住居カマド及び出土遺物(2)



第41図 2号住居・出土遺物(3)

2 2号住居(第39・40・41図、図版33・43・44)

概要 2号住居は8区中部の南壁寄り、1号住居の東に位置する中型の竪穴住居跡である。2号住居は1号住居同様、南のコーナー部分(カマドに対して右側手前のコーナー部分)が確認できなかったため、可能な限り路線幅に近い位置まで拡張して調査を進めたのであるが、南コーナー部分は路線外に在り、住居の全体像を明らかにすることはできなかった。

住居の床面には東部と西部の一部を除き周溝が残されていたが、貯蔵穴・柱穴は確認できなかった。ただし、北側(カマド左側奥)を除く、柱の設置と予想される付近の住居掘り方底面には、柱穴を示唆するような土坑または柱穴状の掘り込みが認められた。

出土遺物はカマド正面付近を中心に出土が見られる。この中には中世のカワラケ(1)なども含まれているが、中心となる遺物は9世紀段階の土器などで、土師器の坏(2・3)や甕(10・11)、須恵器の蓋(7・8・9)や坏(4・5・6)などが中心である。また、カマド正面の住居の中心付近からは、こもあみ石(12・13・14・15)も出土している。

又、カマド右袖の右横から手前側にかけては炭化物の分布が見られた。この他、掘り方からも土師器甕などの破片が住居全体に広い分布が見られる。

規模 住居 縦：413cm 横：447cm 残存深：35cm

周溝 幅：22cm以下

カマド 幅：85cm 奥行き：76cm 左袖幅：29cm

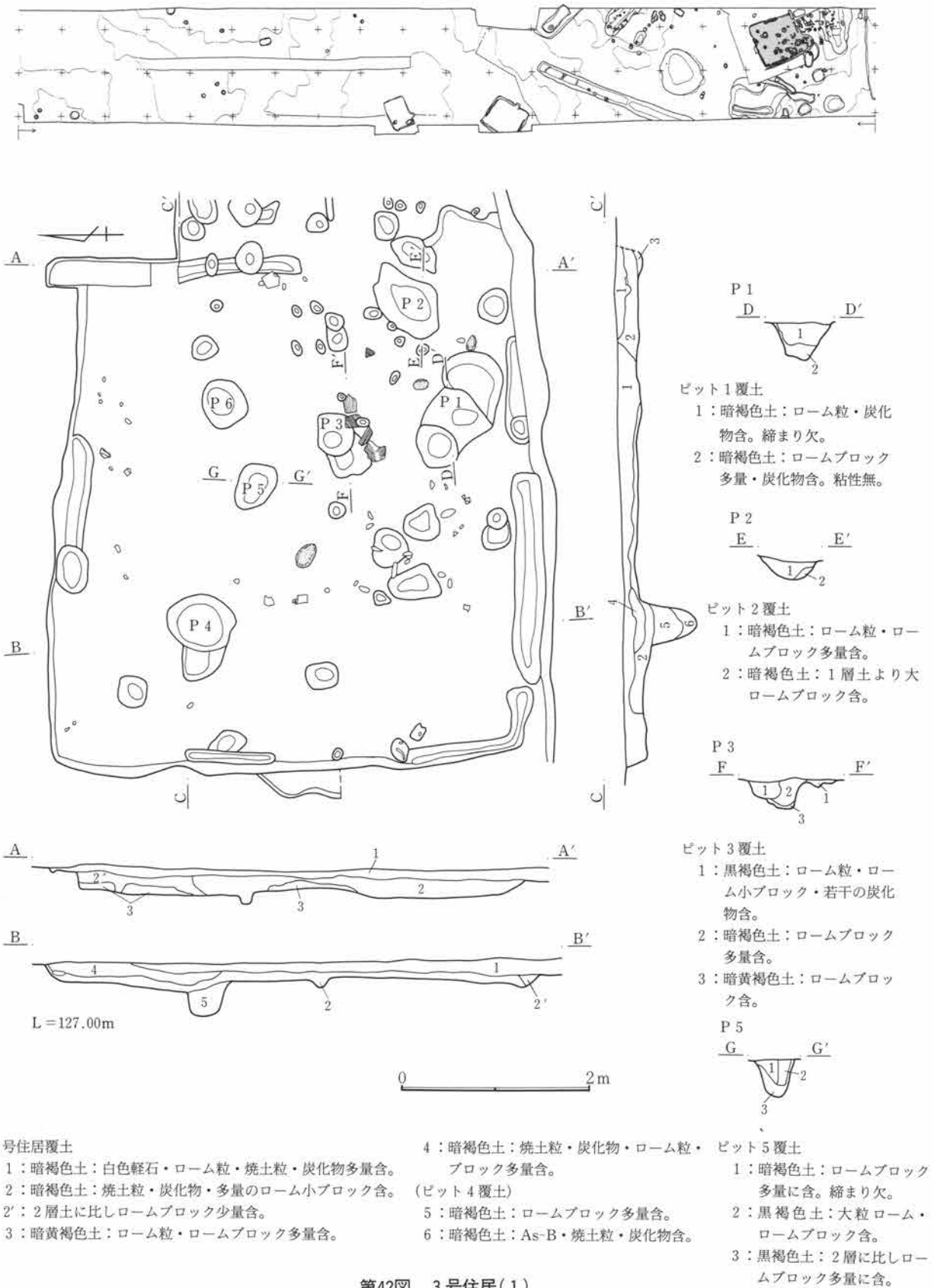
長さ：35cm 右袖幅：19cm 長さ：35cm 掘

り方凹部幅：85cm 深さ：6cm以下

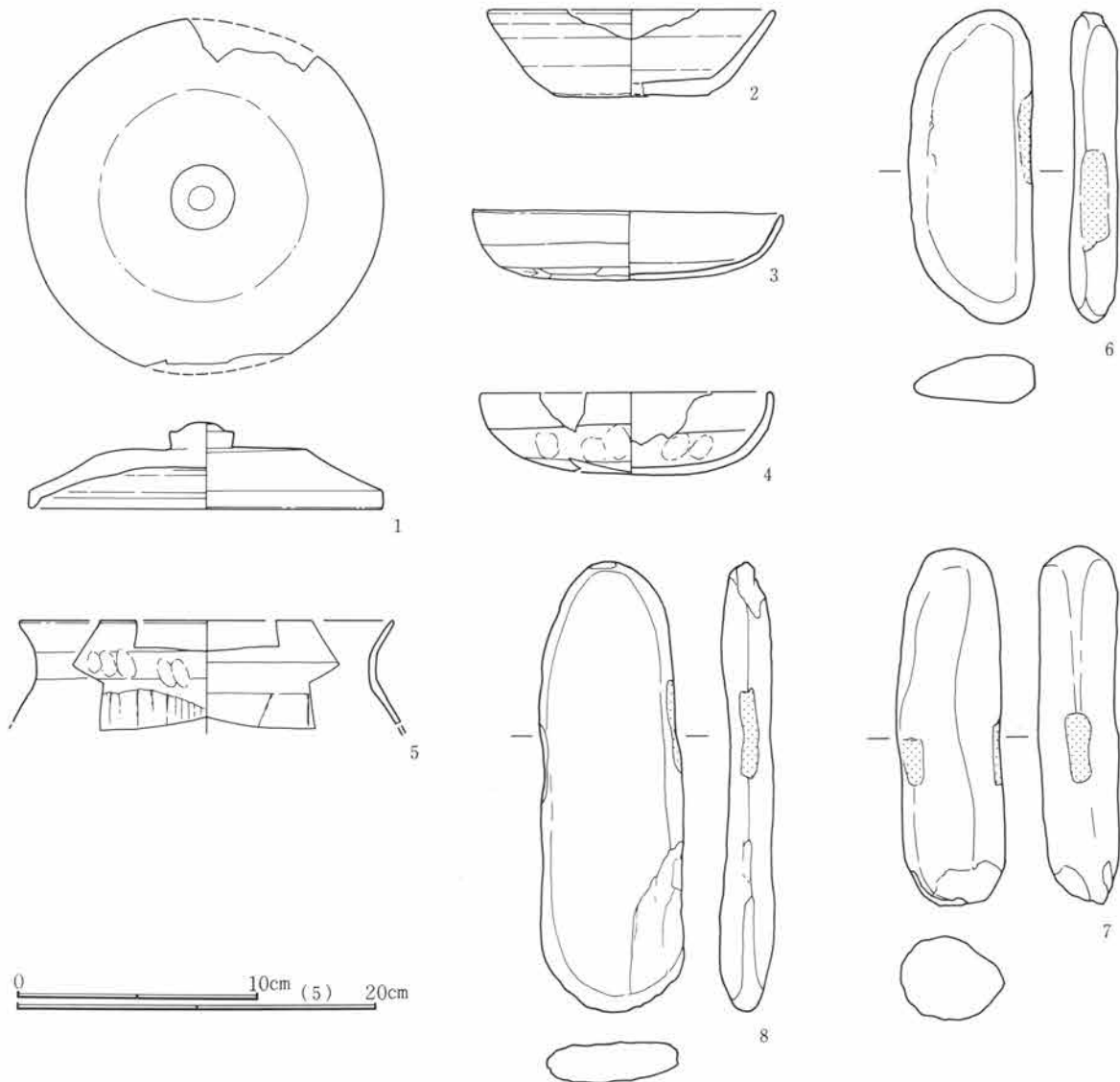
構造 2号住居はカマドに対して正方形に近い方形のプランを呈するが、住居プランは北に対しおよそ45°東に傾いている。2号住居は掘り方を持つが、掘り方は壁際に帯状に高い掘り残しがあり、その内側が低くなり何カ所かは更に深く掘られている。特に南東側の掘り残し部に沿ってその内側は、深く溝状に掘られているものや、西側(カマドに対して左手前側)の不整楕円形の土坑状の掘り込み、これに対応するような東側(カマド右側奥)の柱穴状のものや

南側(カマド南側手前)の土坑状の掘り込みなどが目立つ。このほか掘り方には柱穴状の掘り込みが、壁際の掘り残しの帯状部分や上述の深い掘り込み部分の内側に散見される。床については、特に貼床のようなものは見られなかったが、掘り方を埋め戻した焼土やロームのブロック、或は炭化物を含む暗褐色又は暗黄褐色の土で造られている。住居床面の壁際、カマド左袖の外側に接した位置から北東壁下、北西壁(カマド左側の壁)下の西よりで浅くなるまでと、路線外で確認できない部分を除く南西壁(カマドに対する壁)下から北東寄り部分を除く東南の壁(カマド右側の壁)下には周溝が掘られている。尚、カマド右側の北東壁下には周溝を確認することはできなかった。

カマドは住居北東壁の中央のやや右より、カマドに対して前後に長軸を持つひょうたん形プランを呈するやや大きめの土坑状の掘り方の上に造られている。袖石は使われず天井石も確認できなかったが、前後に短いプランを持つ小さい袖はロームブロックを多く含む土で構築されており、カマドの燃焼部は壁のラインよりやや内側に設定して作られている。左右袖の内側から壁のラインのやや外側にかけて半円形に外周を残すカマド、燃焼部の壁面は強い焼土化が見られる。



第42図 3号住居(1)



第43図 3号住居出土遺物(2)

3 3号住居 (第42・43・44, 図版34・44)

概要 3号住居は8区東部の北壁際に位置する、大型の竪穴住居跡である。当該付近は攪乱等が激しく、また本住居は8区のピット群のただ中に在るため、遺構の遺存状態はかなり悪い状態であった。出土遺物等からカマドの存在が想定されたが、確認することができなかった。南・西・北側の壁が確認できること、後述する東側の周溝とピット2の間にはカマドの設置が想定される。

攪乱の激しい東壁近くで中世のカワラケが出土しているが、出土遺物の大半、特に覆土の比較的厚い

あたりでは、9世紀段階の所産と考えられる遺物を中心に、須恵器の蓋(1)や坏(2)、土師器の坏(3・4)やコの字状口縁の甕(5)などの土器、あるいはこもあみ石(6・7・8)を住居中央の南北ラインや西及び北壁下を中心に出土している。

規模 住居 縦：538cm 横：530cm 残存深：36cm、ピット1 径：130×70cm 深さ：38cm

ピット2 径：73×56cm 深さ：20cm

ピット3 径：76×45cm 深さ：33cm

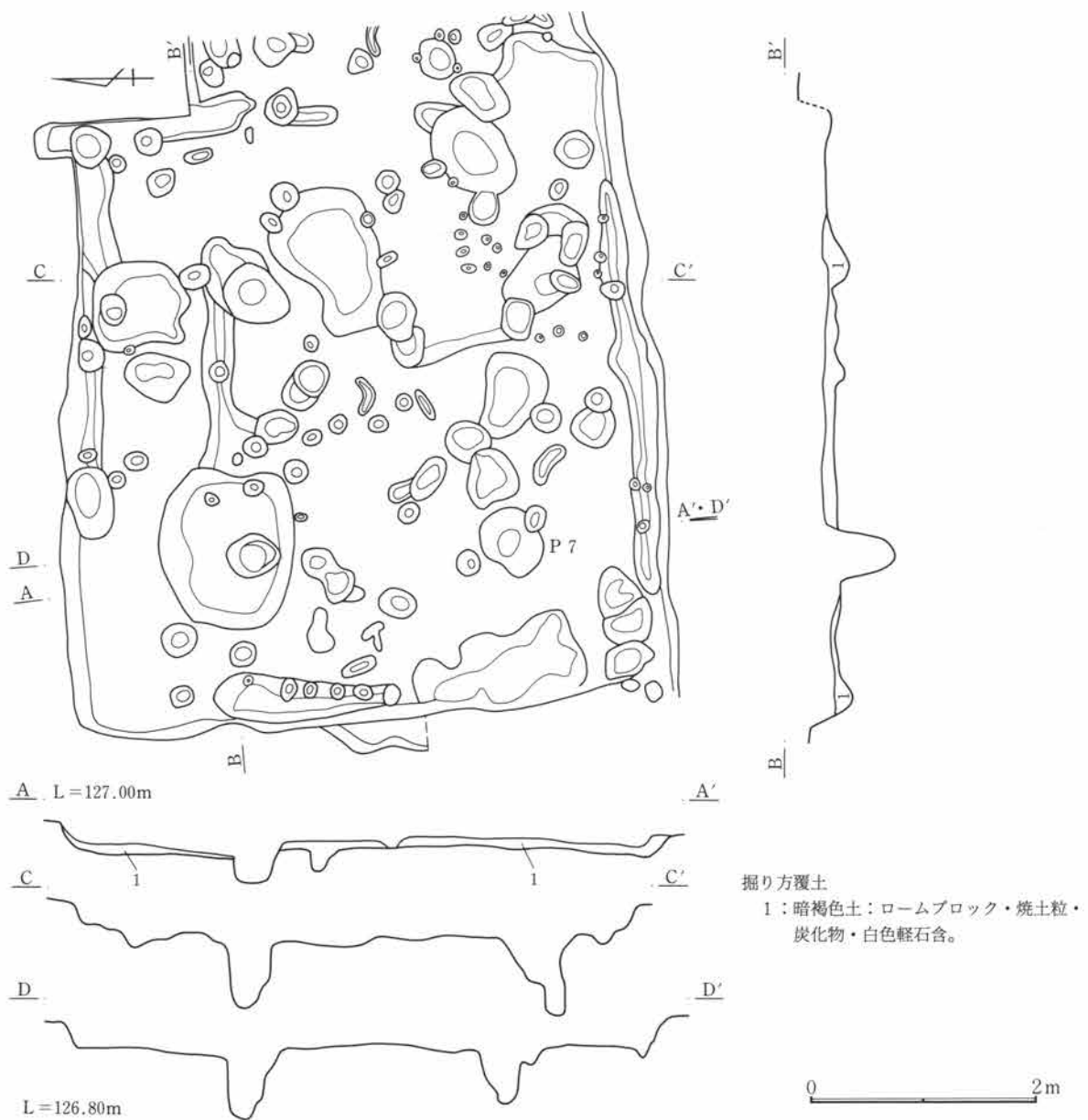
ピット4 径：90×70cm 深さ：78cm

ピット5 径：47×43cm 深さ：40cm

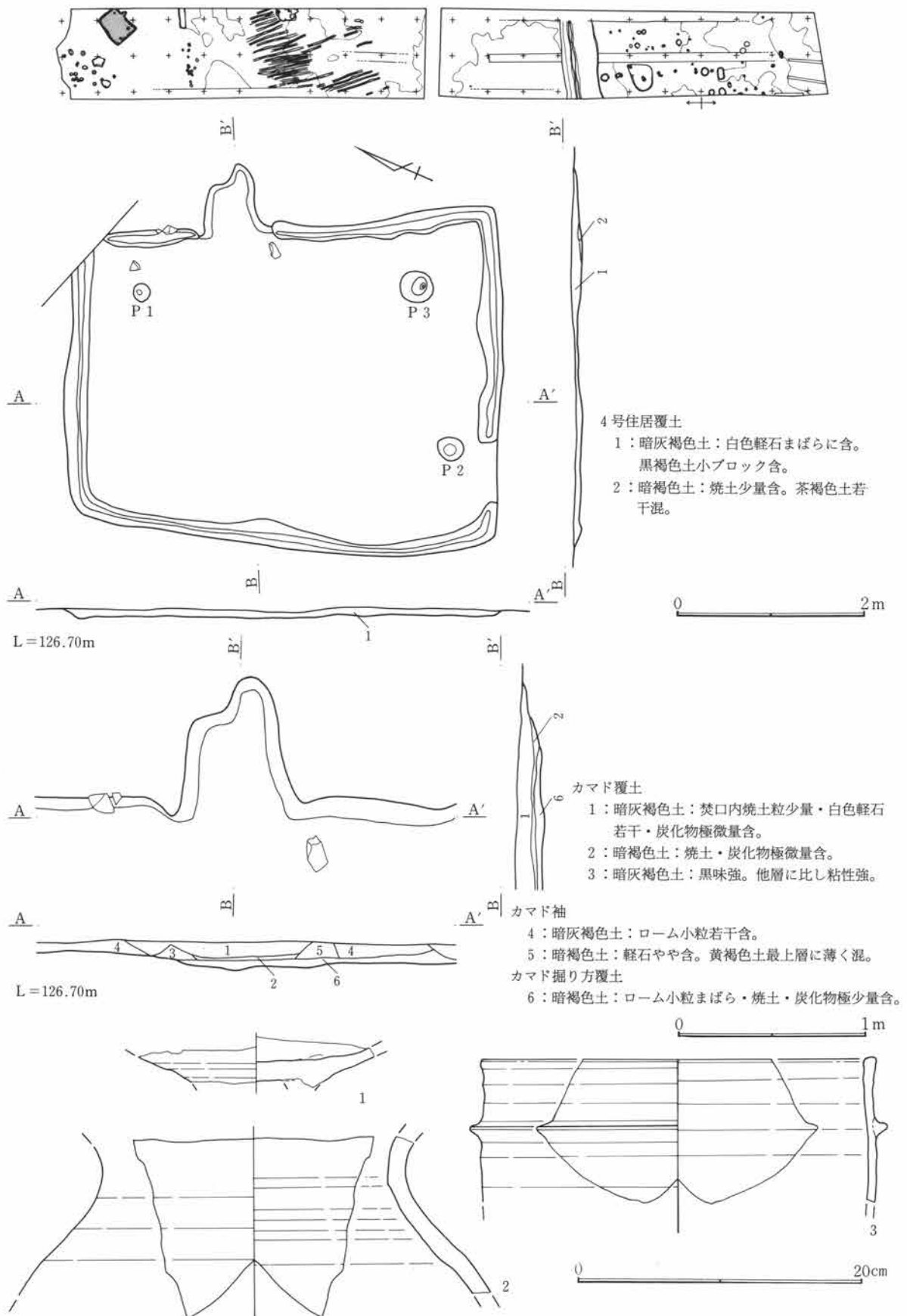
ピット6 径：49×45cm 深さ：66cm

構造 3号住居は正方形に近い方形のプランを呈し、東西に主軸方向を持つ竪穴住居である。3号住居は掘り方を持つが、掘り込み面は住居床面と大差無い。薄くロームブロックを含む暗褐色土を薄く乗せて床面を構築している。床面には幾つものピットが掘られているが、本住居の支柱穴の可能性と考えられるのはピット4、ピット6であり、貯蔵穴の可能性を持つものではピット2がある。また、掘り方に見ら

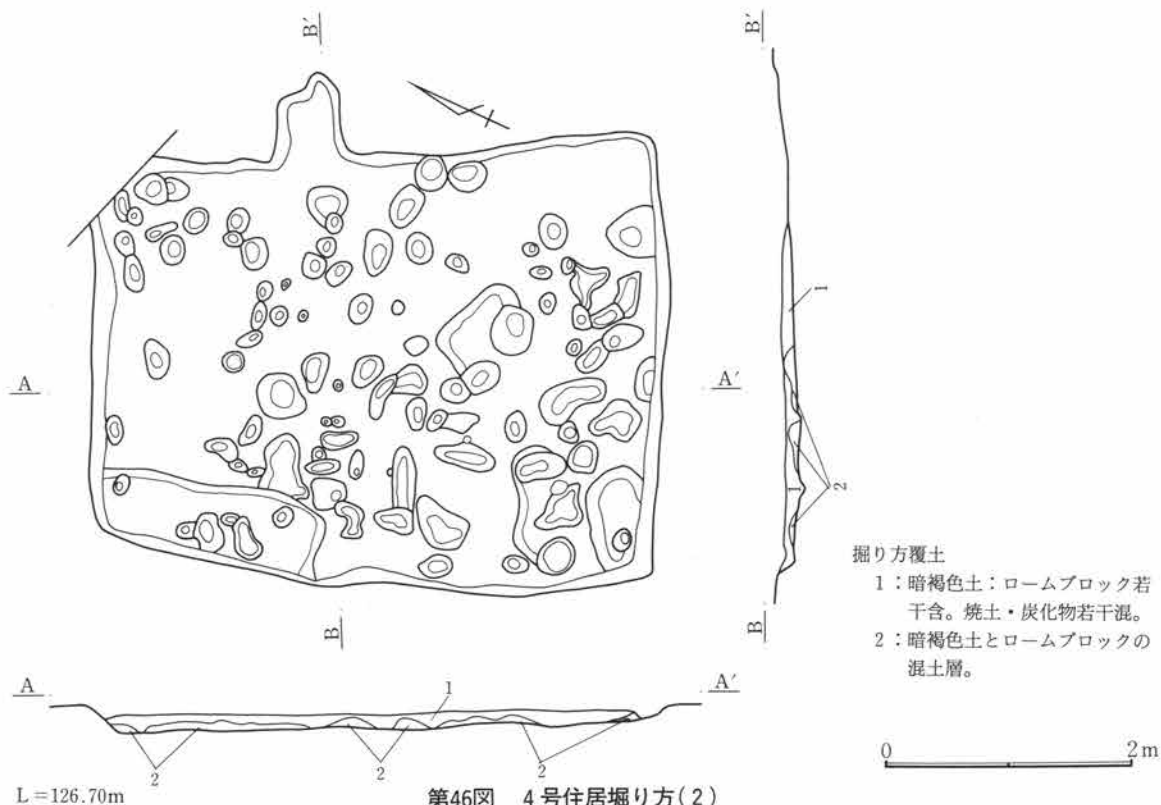
れる掘り込みの多くは床面で観察されるピットと同じものであるが、ピット7は位置的に柱穴になるものと想定される。一方、全ての壁面に部分的に周溝が認められ、掘り方に於いても確認することができる。特に掘り方では細い杭状の小ピットが、2基1組のものが南側では周溝内側の面で、北側では周溝内の周溝両端近くに、また西側の周溝内側の面には連続する4孔が認められ、壁面の保護等に拘わる構造物の存在が想定される。



第44図 3号住居掘り方(3)



第45図 4号住居及び出土遺物(1)



第46図 4号住居掘り方(2)

4 4号住居 (第45・46図、図版35・44)

概要 4号住居は9区の西端近く、北壁に接する位置にある。3号住の東に近接するこの住居は、カマドを伴う小型の竪穴住居である。住居は北東側を向き、この点に於いては2号住居に類似する。北側コーナー(カマド左側のコーナー)は路線外のため調査することはできなかったが、ほぼ全体の様相は把握することができた。

尤も、4号住居は大きく床上は削平されており、北東を向くカマドの遺存状態も良くないが、本住居は周溝の残りは良好で、北西側(カマド左手前側)を除く柱穴も小ぶりではあるが確認でき、プランとしては整った状態である。

遺物は少なく、カマド付近から土器片が出土するにすぎなかった。遺物としては須恵器甕底部片(1)、クの字状の断面を呈する土師器甕頸部の破片(2)、所謂吉井型の羽釜の口縁から頸部の破片(3)が出土している。住居としては10世紀以降の所産と判断される。

規模 住居 縦: 350cm 横: 446cm 残存深: 10cm

周溝 幅: 22cm以下 (8~10cm中心)

カマド 幅: 64cm以上 奥行き: 70cm以上

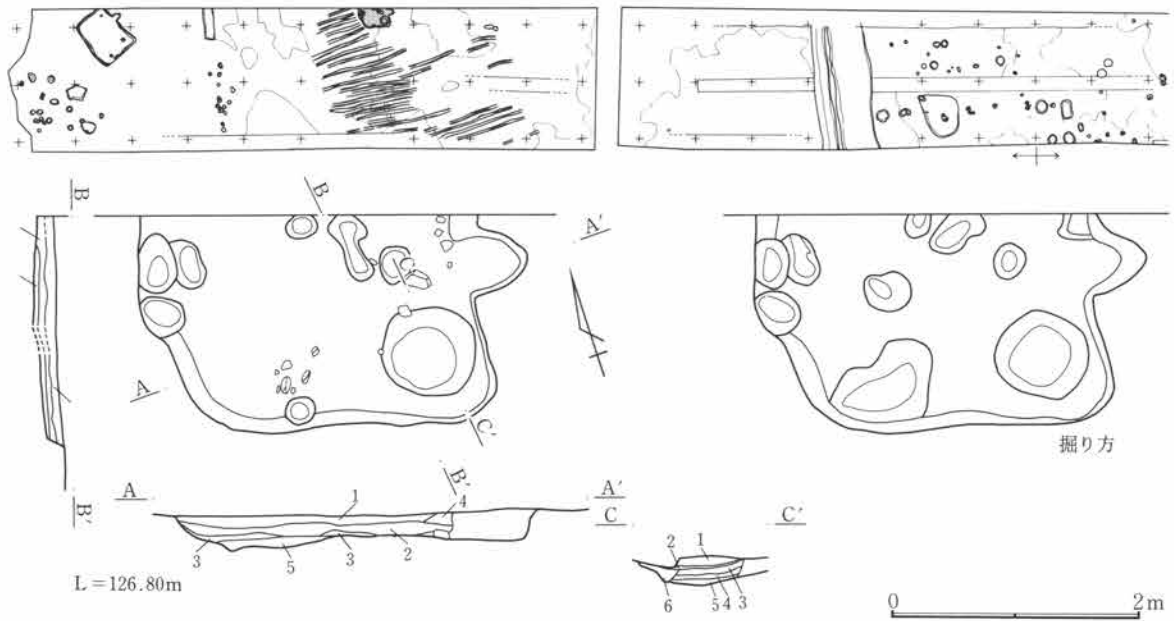
ピット1 径: 19×17cm 深さ: 10cm

ピット2 径: 16×14cm 深さ: 9cm

ピット3 径: 35×32cm 深さ: 24cm

構造 4号住居は、北北西方向を主軸とするやや長い台形を呈する。浅い掘り方を持ち暗褐色土とロームブロックで構成される土で埋め戻して床面としてゐる。掘り方は中央でやや深くなる傾向があるが、特段の遺構等は認められない。床面にはカマド左奥側と右の手前側・奥側の3カ所に浅い小型の柱穴が認められる。或は床面成型以前の柱の立て方があったものとも考えられる。尚、カマド左手前側の位置には床面に於いても掘り方面に於いても柱穴は確認されなかった。また、未確認の北側コーナーを除くと、カマドとカマド右手前側コーナー近くの南側壁下を除き周溝が巡っている。

カマドは東北東の壁面中央より西側に設置されているが、破損が著しく、構造等の詳細は確認できなかった。



5号住居覆土

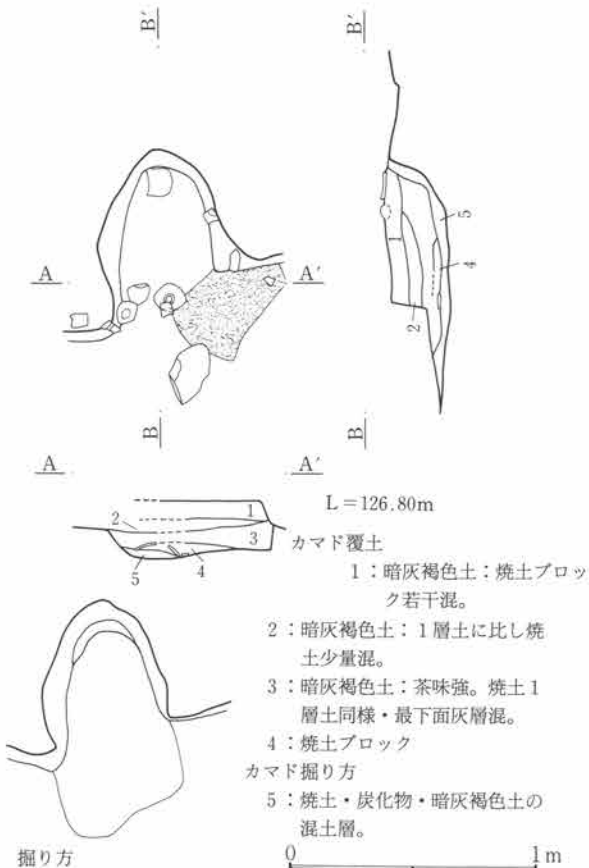
- 1：暗褐色土：やや灰色味帯。上層に白色軽石・ローム小粒をまばら含。粘性有。
- 2：暗褐色土：1層土に類するが軽石・ローム極端に少量。
- 3：暗灰茶色土：粘性有。
- 4：暗褐色土：1層土と同様。焼土粒混。

掘り方覆土

- 5：暗灰茶色土：やや粘性有。

貯蔵穴覆土

- 1：暗灰褐色土：ローム粒少量混。
- 2：灰層
- 3：暗茶褐色土：灰褐色土小ブロック混。
- 4：暗茶褐色土：1層土に類するが灰褐色小ブロック混。
- 5：暗褐色土：灰褐色土小ブロック混。
- 6：暗灰褐色土・灰褐色土小ブロックと灰の混土層。



第47図 5号住居及びカマド(1)

5 5号住居(第47・48図、図版36・45)

概要 5号住居は9区の中程、1号島と切り合う位置に北壁に接している小型の竪穴住居である。住居はその北半分(カマド左側)が路線外に出るため、その全体像を知ることはできなかった。また、遺構の上位は掘削が進んでいる。尚、本住居は1号島より古いものであろうと推定される。

カマドは住居の東側に造られているが、住居廃絶時の破却のせいか遺存状態は悪く、袖等の構造を示す遺構は確認できなかった。床面には土坑・ピットが8基以上残されている。この中で貯蔵穴と認定されるものはカマドの右手前側に確認されたが、柱穴と想定できるものは認められなかった。掘り方面の観察でも同様の所見が得られる。或は南壁下に見られるピットは入り口遺構に拘わるものである可能性を有するが、貯蔵穴に比定できるものを除き、これらの土坑・ピットはほぼ住居に伴うものではないと判断される。

出土遺物はさして多くはないがカマド周辺を中心

第6章 東平井官正前遺跡の調査

に出土しており、10世紀段階に比定される須恵器の回転ロクロ整形の坏(1~4)、高台付椀(5・6)、所謂吉井型の羽釜(7・8・9)などが出土している。

規模 住居 縦：270cm 横(残存長)：172cm 深さ27cm

カマド 燃烧部残存幅：38cm 奥行き：51cm

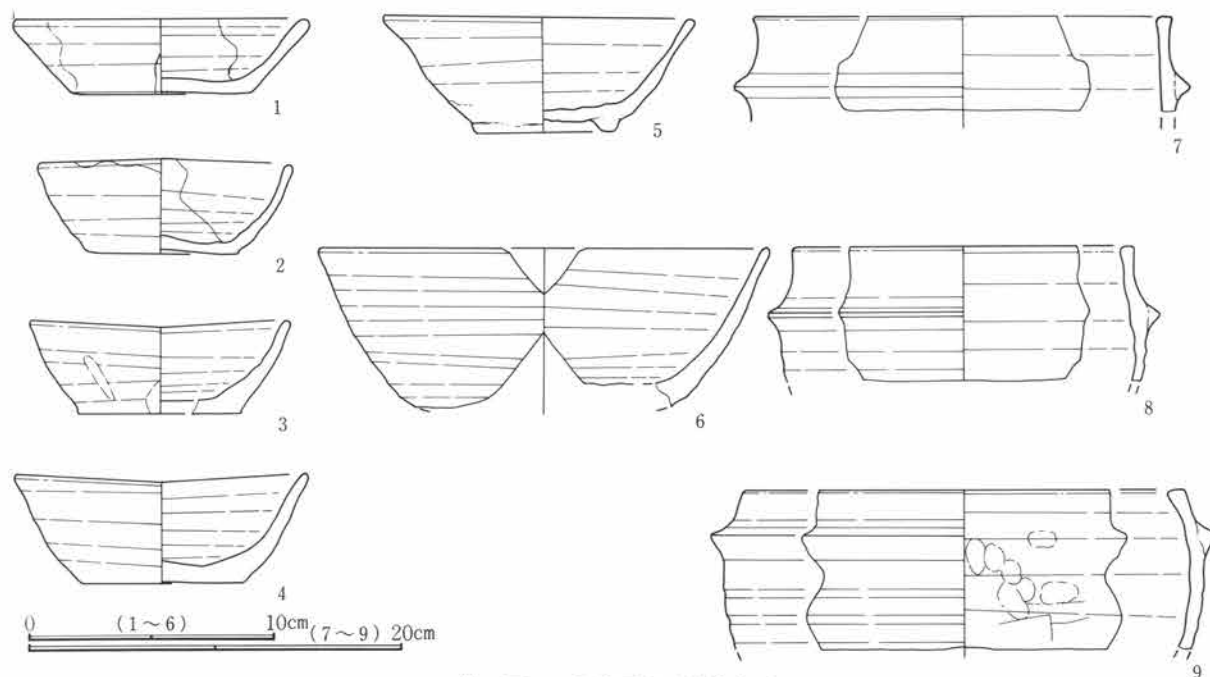
掘り方凹部幅：81cm 奥行き：52cm 深さ：4cm

貯蔵穴 縦：75cm 横：70cm 深さ：23cm

構造 5号住居全体のプランは不明だが、隅丸方形を呈する。プランは北に対し僅かに東に傾いている。掘り方は周囲に向かって掘り込まれる浅いもので、

この部分についてはやや粘性のある暗灰茶色土で埋め戻して床面としているが、住居中央付近は地床である。貯蔵穴はカマド右手前側に掘られている。貯蔵穴は方形を意識したプランを呈しており、主軸は東を向いて住居の主軸と方向を異にしている。

カマドは、壁面を掘り込んだ燃烧部の径に合わせて、手前側を方形に延ばしたプランで浅く掘り込んだ掘り方の上に構築されている。カマド本体の構造は、破損がひどいため詳しくはできなかったが、住居壁面のラインより外側に掘られる燃烧部は幅に対し奥行きがある。従って燃烧部は地山側に中心があり、袖は短かったものと推定される。



第48図 5号住居出土遺物(2)

6 6区-1号溝(第49図、図版37)

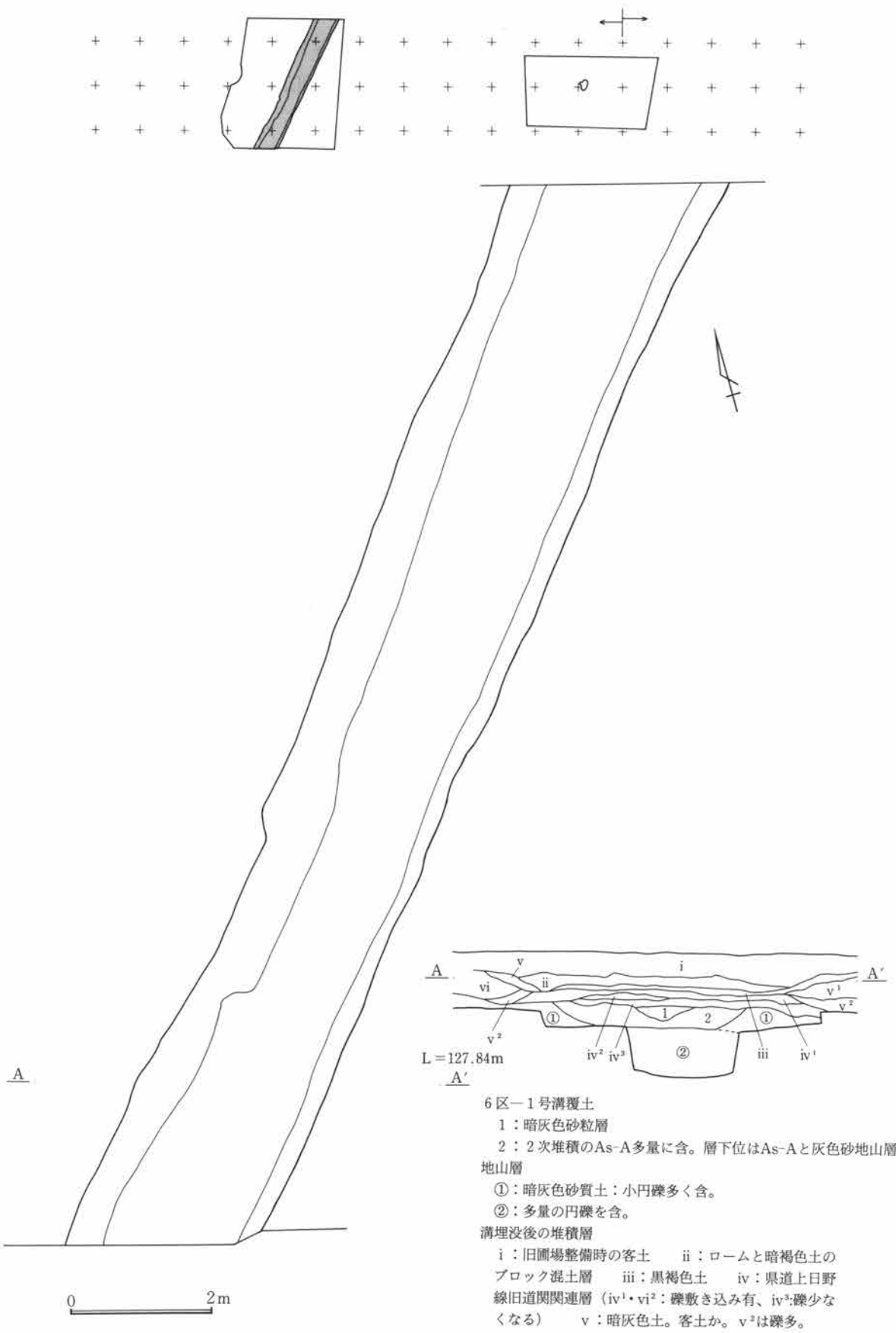
概要 6区-1号溝は6区の中央やや東寄りに位置し、北々東・南々西方向に走行する。県道上日野・藤岡線の旧道に沿っていたものと判断される。旧道に関連すると思われる礫を敷き込んだ土層の下に、掘り込まれており、18m程を調査した。

特段の遺物は見られなかったが、覆土(第2層)にはAs-Aの2次堆積が、特に層下位にはAs-Aと灰色砂が薄く互層をなしているのが確認された。これ

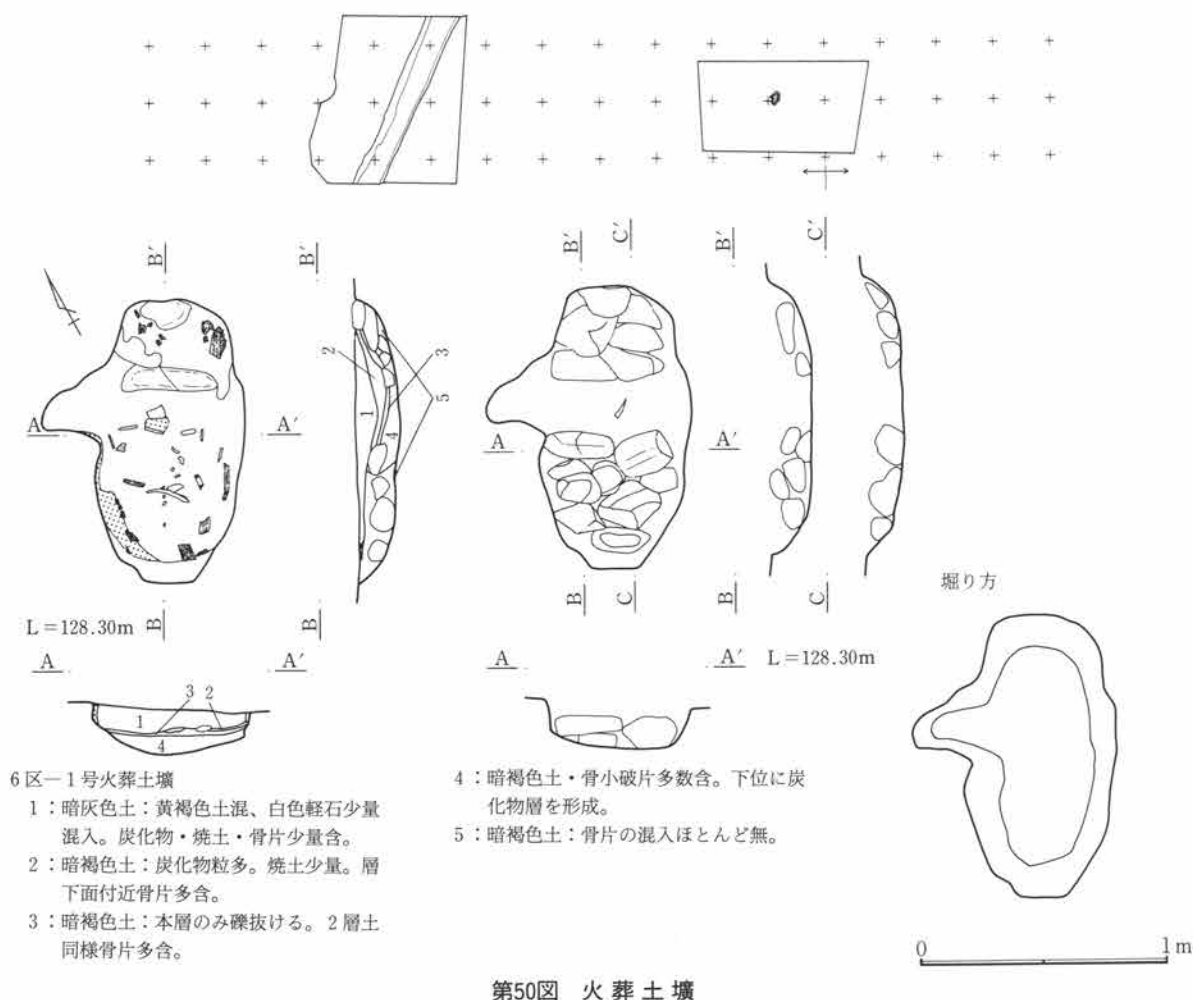
により、この溝がAs-Aが降下した江戸時代後期の時点(天明3年)では機能しており、その直後に通水していたことが想定される。埋没年代は不祥。

規模 幅：208~262cm 深さ27cm

構造 6区-1号溝は暗灰色の砂質土を掘り込み、円礫を多く含む土層の上面付近が底面となっている。溝の西側壁面は緩やかな傾斜をなし、東側壁面は多少急な傾斜を示している。底面は円礫の露出でゴツゴツしているが、基本的には底面は平底である。



第49図 6区1号溝



第50図 火葬土壌

7 1号火葬土壌(第50図、図版41)

概要 1号火葬土壌は路線センターライン下の7区との境界近くに位置する。煙道と考えられる突出部を持つ。典型的な火葬土壌である。

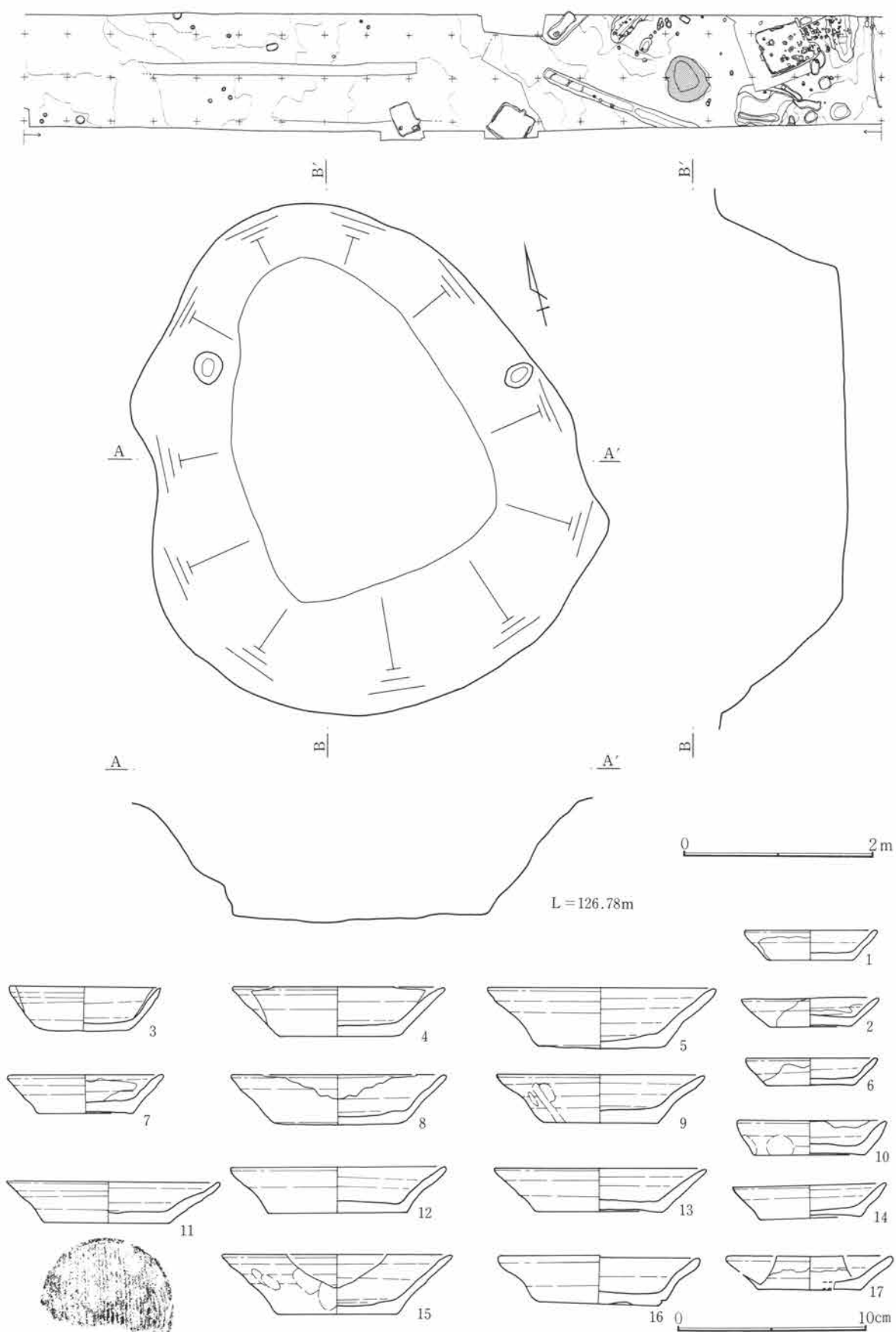
覆土は中位層に人骨と判断される焼骨を多く含むが、その下位層は突出部のある中央付近とその両側で異なる。即ち中央付近では人骨片を多く含み、特にその下位には炭化物層が見られるのに対し、両側部では人骨の出土がほとんど無く、大きめの礫が配置されている。覆土の状態から突出部の延長線上で木質の燃料を焼き、遺体は礫の上に配置して火葬に伏したものと思われる。

出土遺物はなく、時期等は特定できないが、形態的特徴から中世の所産と考えられる、この種の遺構としては特徴的な遺存状態を示す好例である。

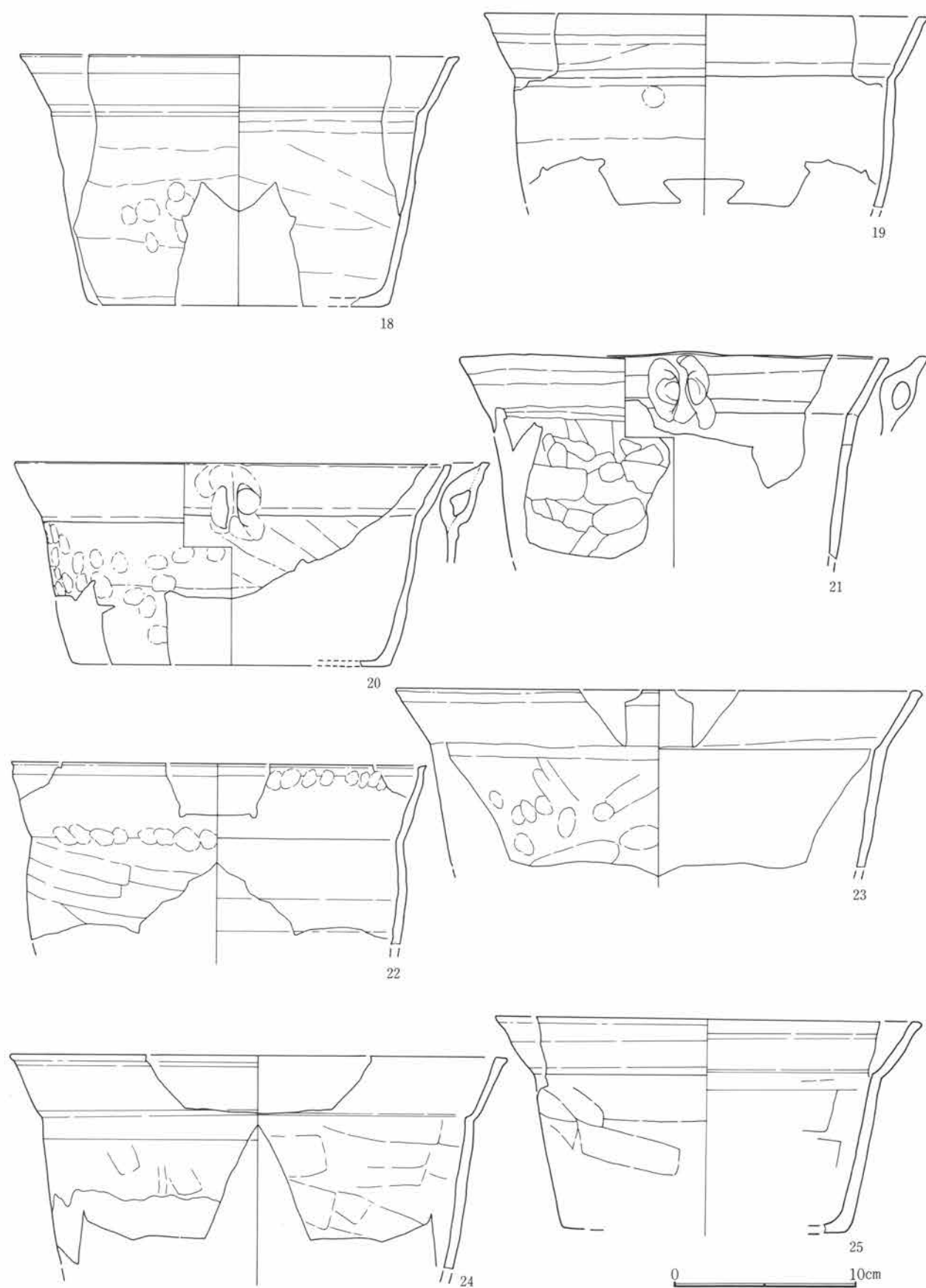
規模 本体 縦:113cm 横:61cm 残存深さ:29cm
 突出部 幅:32cm 長さ:27cm 残存深さ:14cm
構造 楕円形に近い隅丸の長方形のプランを呈し、主軸はおよそ北東を向く。掘り込みは緩やかで、底面は丸底気味である。突出部を造り出しているが、その底面は本体部側から徐々に高くしてゆき、先端部で立ち上げている。この突出部の延長上の幅20cm程の間を除き、その両側には長さ30cm以下、径20cm以下の大きめの礫を敷き詰めるように配置している。

8 1号井戸(第51~58図、図版40・45~54)

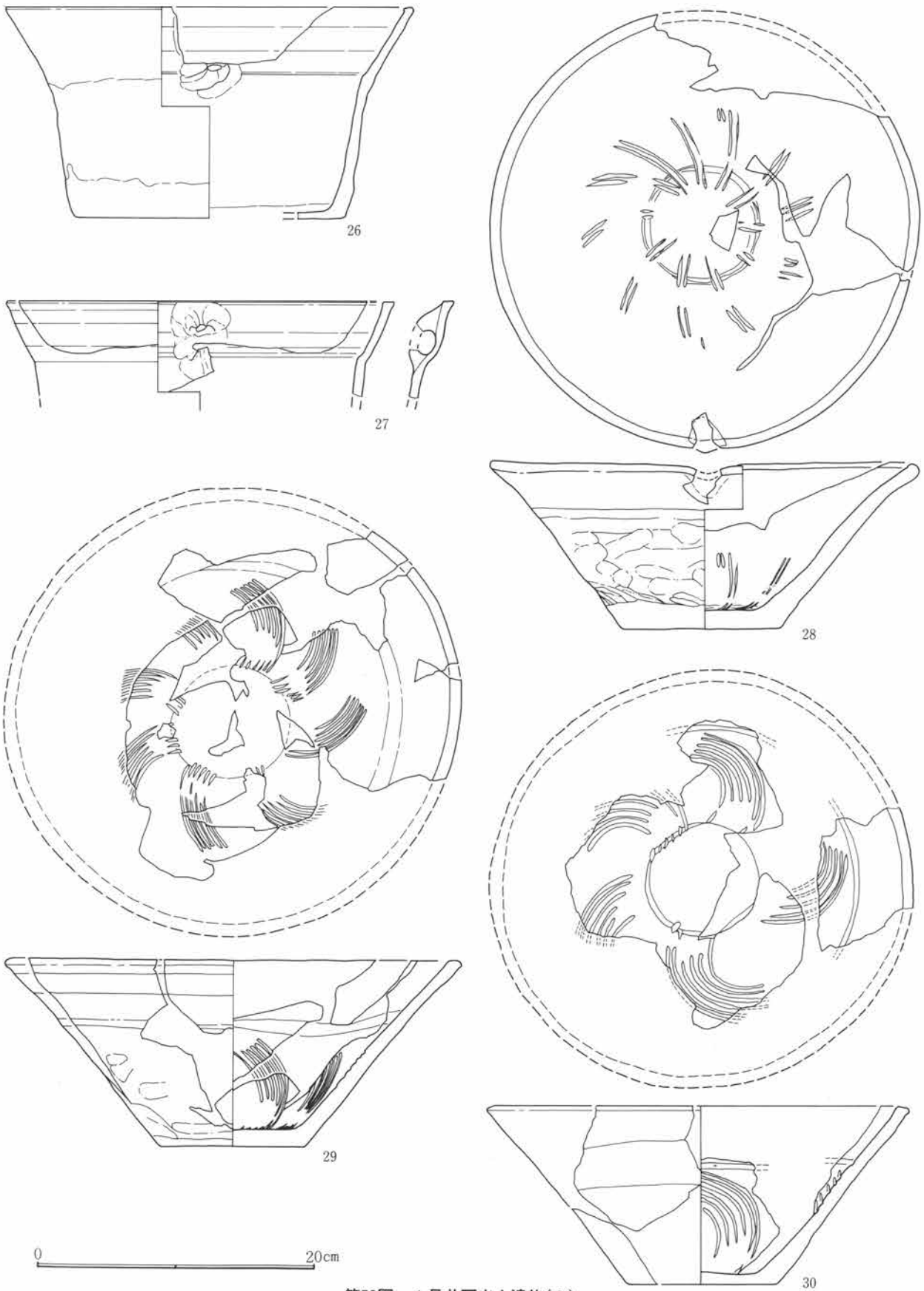
概要 1号井戸は8区東寄りに位置する大きめのプランを呈するが、掘り込みの浅い摺鉢状の井戸遺構である。本井戸にはアグリなどの、湧水や溜水などの状態を示す遺構の状況などは認められなかった。



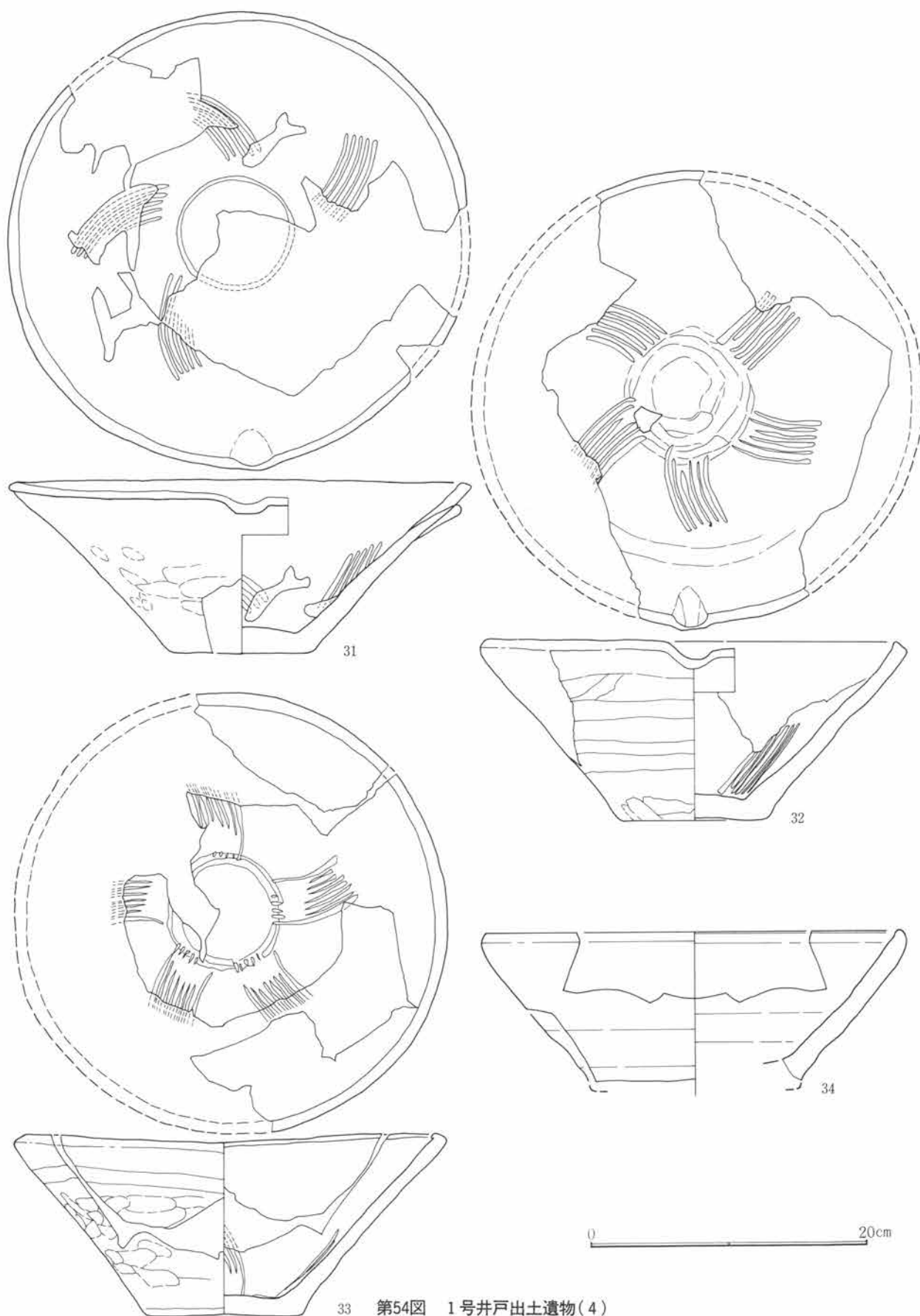
第51図 1号井戸及び出土遺物(1)



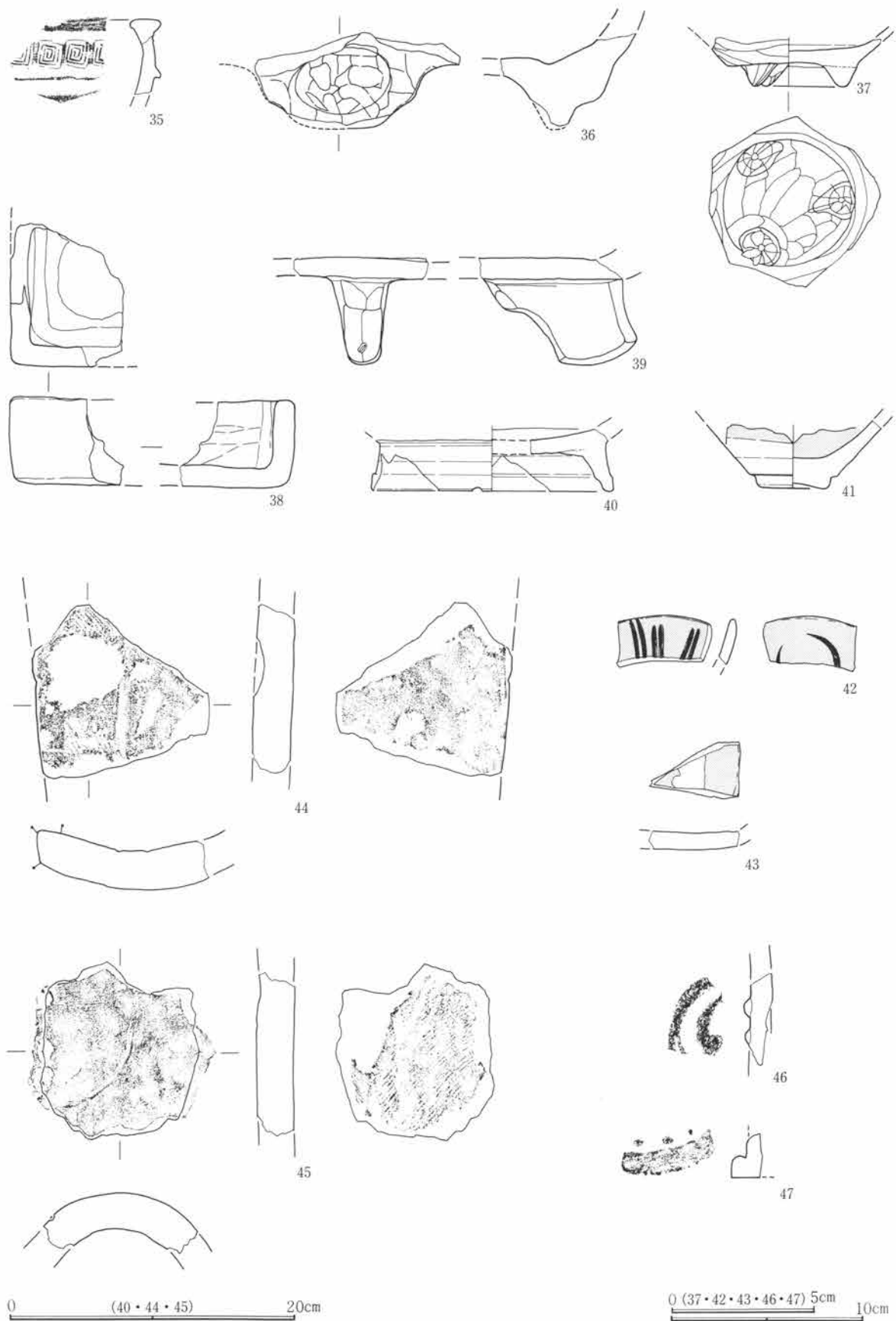
第52図 1号井戸出土遺物(2)



第53図 1号井戸出土遺物(3)



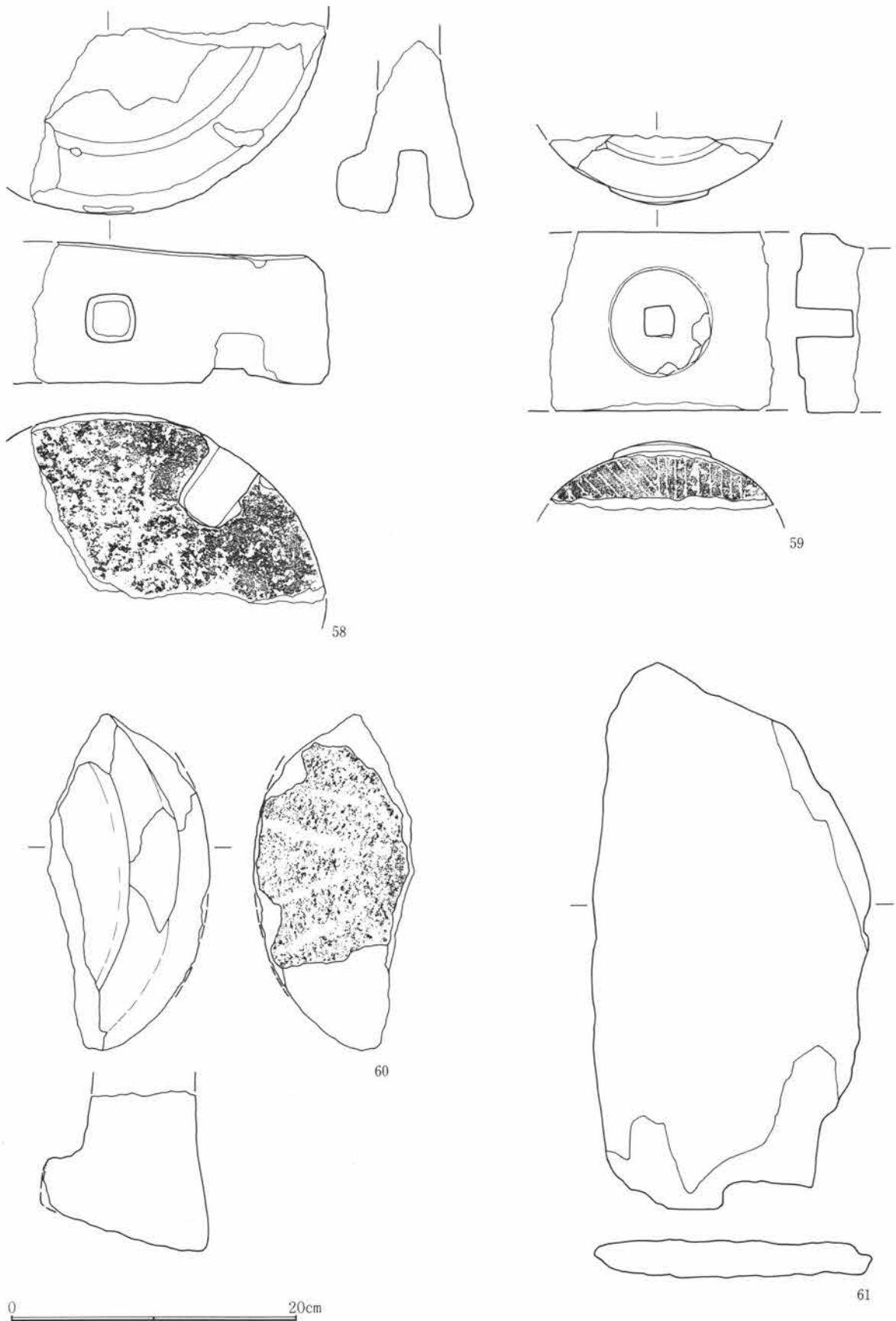
33 第54図 1号井戸出土遺物(4)



第55図 1号井戸出土遺物(5)



第56図 1号井戸出土遺物(6)



第57図 1号井戸出土遺物(7)



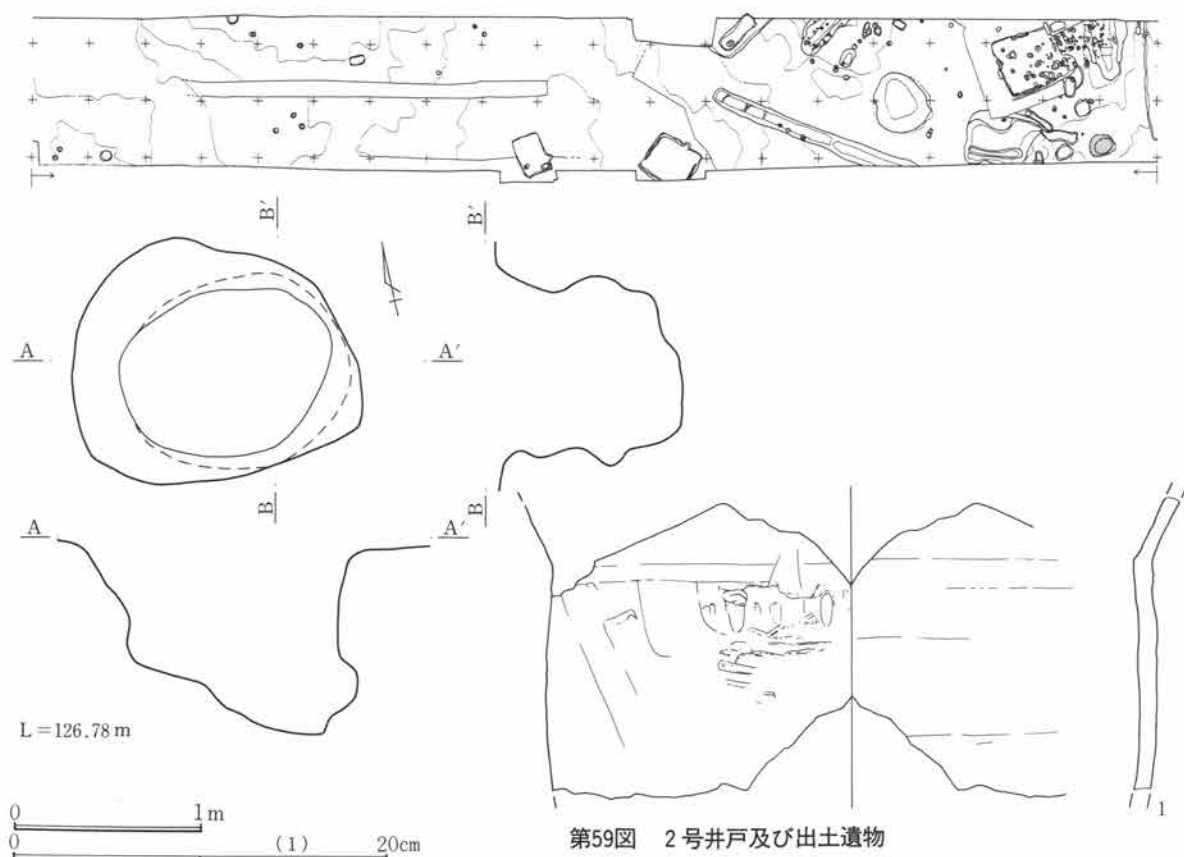
1号井戸の特徴的なのは種類の多い遺物が、多量に出土したことである。これらの遺物には古代のものも含まれるが、多くは15世紀後半の所産と考えられる遺物である。これらの遺物については、出土位置の上下による時期差等の状況は認められなかった。出土遺物には、カワラケ(1~17)や内耳鍋(18~27)、軟質陶器の摺鉢(28~33)や鉢(34)、角型火鉢(38)、火鉢の口縁(35)、火鉢の脚部(36・39)、香炉(37)、甕(40)陶器(41・42・43)また、

平瓦(44・45)、軒丸瓦(46・47)、その他、石製品では砥石(48~52)、板碑転用の砥石(53~56)、石製鉢(57)、石臼(58・60)、茶臼(59)板碑(61~64)、などがあるが、特に内耳鍋片と摺鉢片の出土が多い。

規模 径：528×480cm 深さ：120cm

構造 梵鐘状のプランを呈し、主軸は北を向く。壁面は摺鉢状に緩やかに立ち上がるが、部分的に底面近くで垂直に落ちるところもある。底面は平底である。

第58図 1号井戸出土遺物(8)



第59図 2号井戸及び出土遺物

9 2号井戸 (第59図、図版40・52)

概要 2号井戸は8区の東南角近くに在り、1号井戸の東に位置する。井戸としては通常の大きさのプランであるが、やはり掘り方の浅い井戸である。下位の礫の多い土層を涌水層としており、この位置付近にはアグリが見られる。

出土遺物は少なく、1号井戸と好対照をなしている。特徴的遺物としては、内耳鍋の体部の破片(1)が出土している。時期の特定は難しいが、ほぼ8区—1号井戸と同じ時期と思われる。

規模 長軸：460cm 短軸：690 深さ：150cm

確認面からのアグリの深さ：85cm・110cm

構造 確認面では隅丸の台形、底部では楕円形のプランを呈し、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平だが、東側に向かって傾斜して落ち込んでいる。確認面から80～140cmの間に礫の多い通水層があり、これを水源としている。アグリは確認面から85cm付近に見られるが、部分的に110cmの位置にもできている。

10 1号土坑(第60図、図版38)

概要 本土坑は1号井戸の北西に位置し、主軸は北東を向く。覆土中の最上層にAs-A、第2層以下にAs-Bを見るため、中世から近世の所産と考えられる。

規模 長軸：174cm 短軸：110cm 深さ：53cm

構造 隅丸の長方形のプランで、底面は丸底である。

11 2号土坑 (第60図、図版38)

概要 本土坑は1号土坑の北西に位置し、主軸は東西方向を向く。覆土中にAs-Aを含む天明3年以降の所産と考えられる。

規模 長軸：388cm 短軸：137cm 深さ：30cm

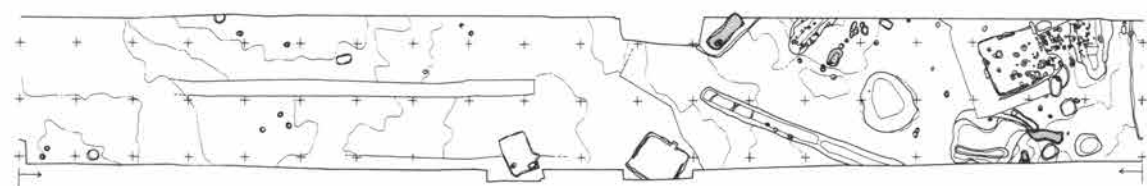
構造 隅丸方形を呈し、底面は多少丸底気味である。

12 3号土坑 (第60図、図版38)

概要 本土坑は3号住居の南に位置し、主軸は東西方向を向く。覆土に特色は無く、時期は不明である。

規模 長軸：310cm 短軸：103cm 深さ：13cm

構造 不整方形を呈し、底面は平底気味である。



2号土坑

1号土坑

3号土坑



13 4号土坑 (第60図、図版38)

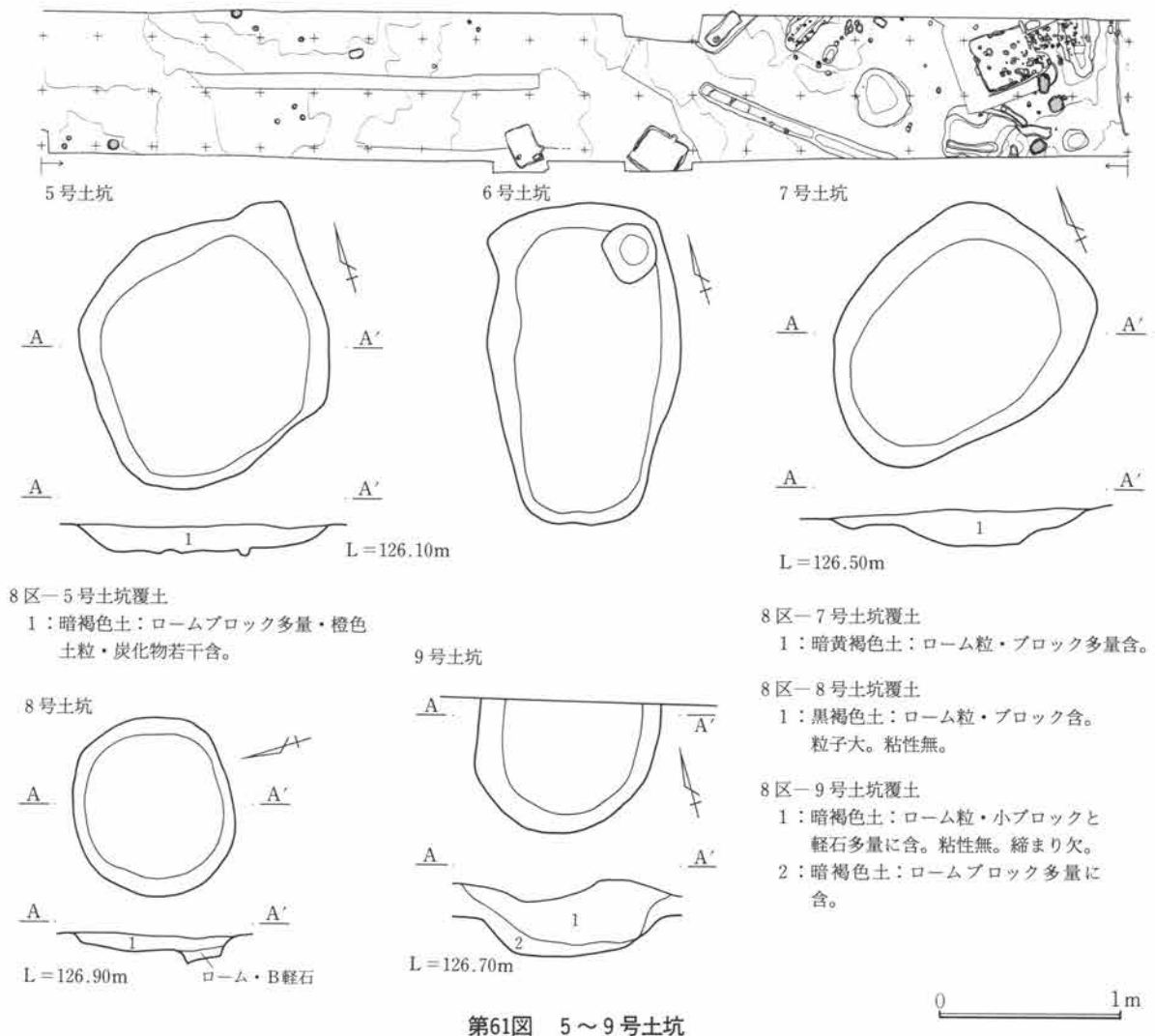
概要 本土坑は3号住居の南に位置し、南半分が路線外に出る円形と想定される土坑である。深さ10cm程の楕円形状の土坑と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。出土遺物や覆土から時期等を推定することはできなかった。

規模 確認される最大幅: 54cm 深さ: 76cm

構造 プランは円形を呈するものと推定される。底面はおよそ平底を呈する。

第60図 1～4号土坑

0 1m



14 5号土坑 (第61図、図版38)

概要 本土坑は6号土坑の南に位置する、浅い掘り込みの土坑である。覆土には炭化物を混入するが、時期・用途等は不明である。

規模 長軸:144cm 短軸:135cm 深さ:13cm

構造 方形を基本とするプランを呈し、底面は平底気味である。

15 6号土坑 (第61図、図版38)

概要 本土坑は3号住居の東南に近接する、掘り込みの浅い土坑であり、時期・用途等は不明である。

規模 長軸:175cm 短軸:107cm 深さ:16cm

構造 長方形を基本とするプランを呈し、底面は平である。

16 7号土坑 (第61図、図版38)

概要 本土坑は4号土坑の東に近接する、掘り込みの浅い土坑であり、時期・用途等は不明である。

規模 長軸:142cm 短軸:133cm 深さ:20cm

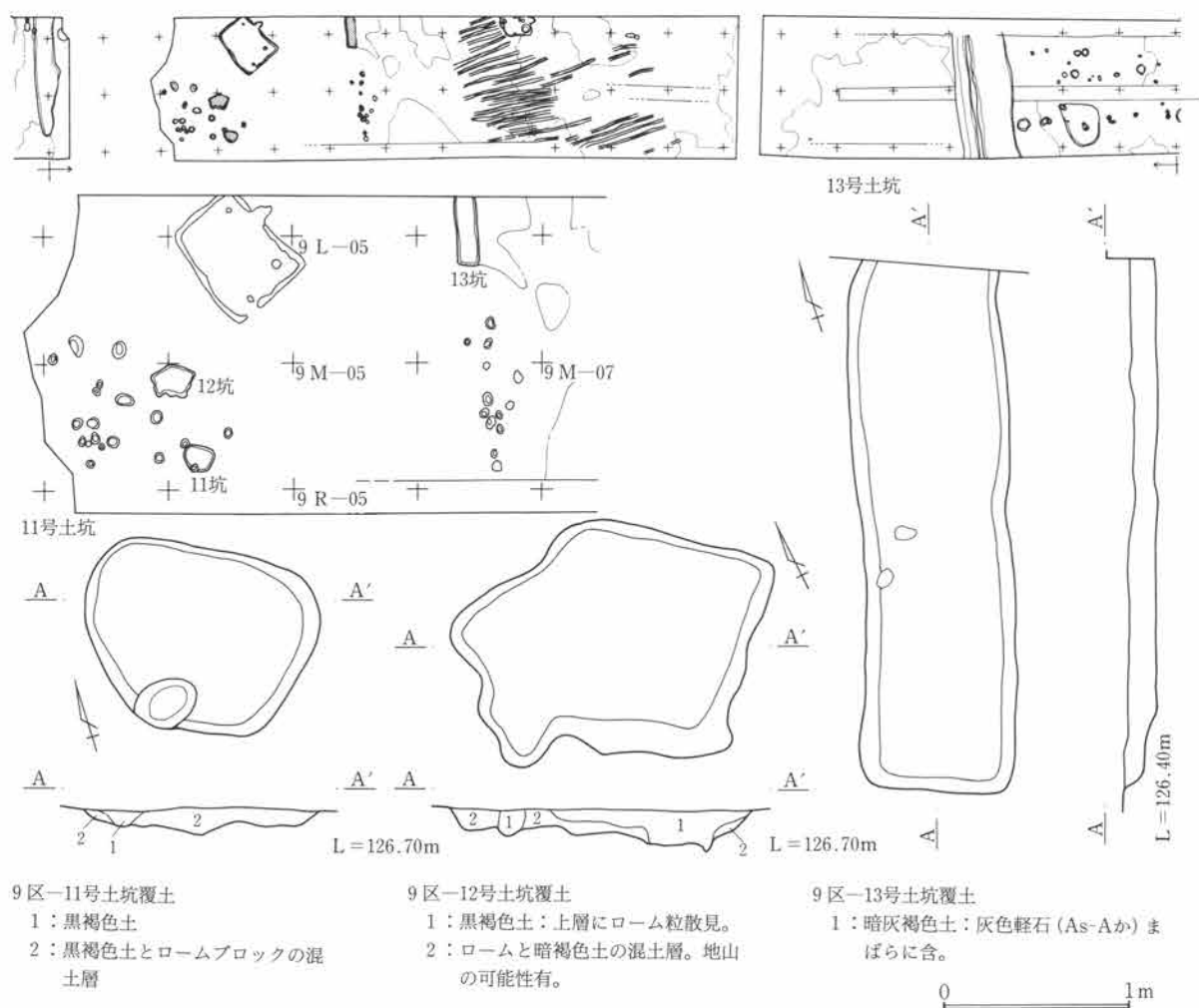
構造 楕円形を基本とするプランを呈し、底面は丸底気味である。

17 8号土坑 (第61図、図版38)

概要 本土坑は8区の西端近く、南壁に近接して位置する、掘り込みの浅い土坑であり、時期・用途等は不明である。

規模 径:98cm×89cm 深さ:13cm

構造 円形を呈し、底面は丸底気味である。



第62図 11～13号土坑

18 9号土坑 (第61図、図版39)

概要 本土坑は8号土坑の北東に位置し、北半は路線外に出る。覆土にはローム・軽石等を多く含むが時期・用途等は不明である。

規模 径:100cm 深さ:38cm

構造 全体の形態は確認できなかったが、円形のプランを呈すると思われる。壁面は傾斜をもって立ち上がり、底面は平底気味である。

19 11号土坑 (第62図、図版39)

概要 本土坑は9区、4号住居の南に在る。掘り込みの浅い土坑であり、時期・用途等は不明である。

規模 長軸:125cm 短軸:100cm 深さ:13cm

構造 隅丸の台形のプランを呈する。底面は凹凸が見られる。

20 12号土坑 (第62図、図版39)

概要 本土坑は4号住居の南、11号土坑の北に位置する掘り込みの浅い土坑であり、時期・用途等を特定することはできなかった。

規模 長軸:163cm 短軸:123cm 深さ:23cm

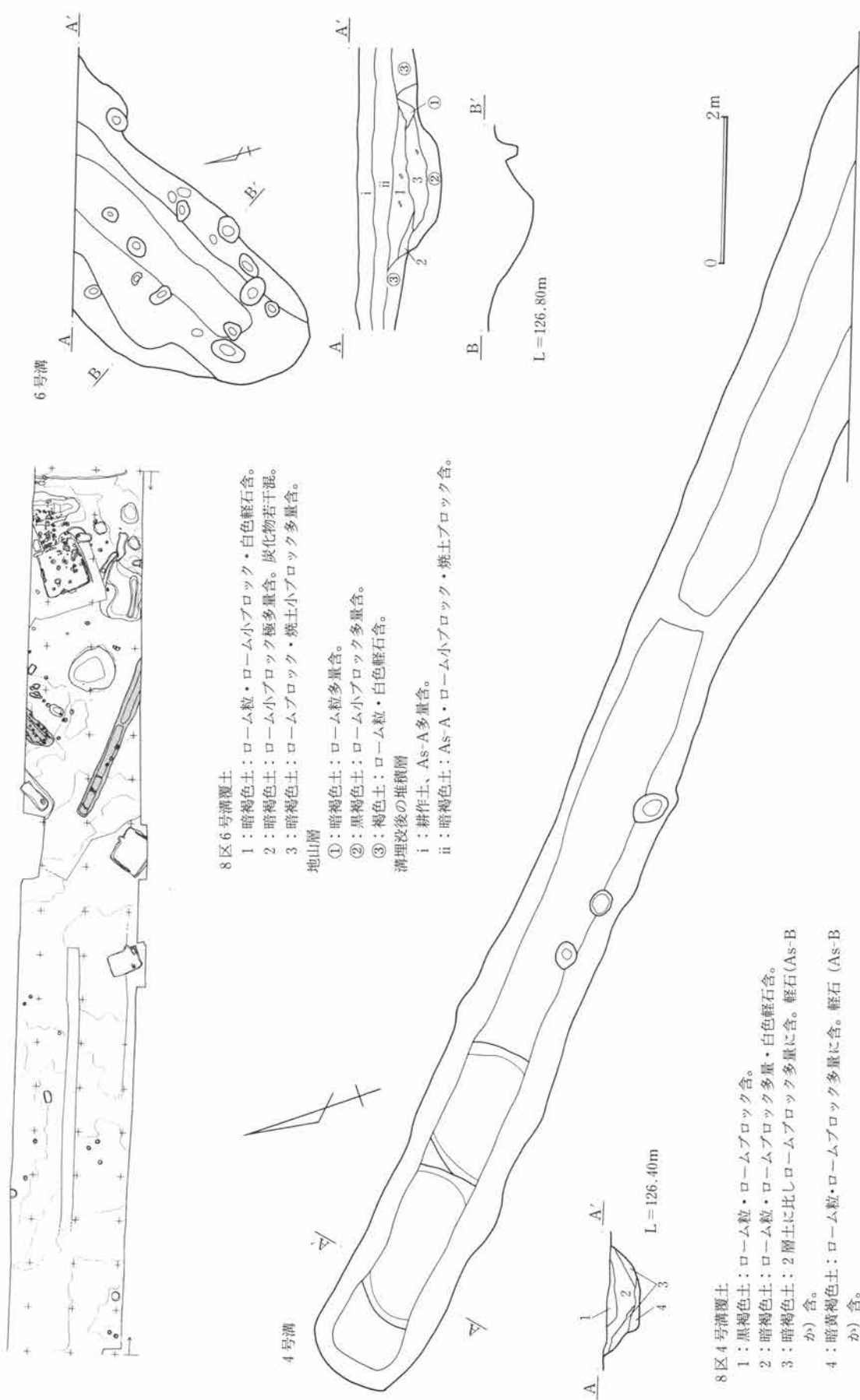
構造 不整形のプランを呈する。形状が縮まる可能性を持つ。底面は一樣ではない。

21 13号土坑 (第62図、図版39)

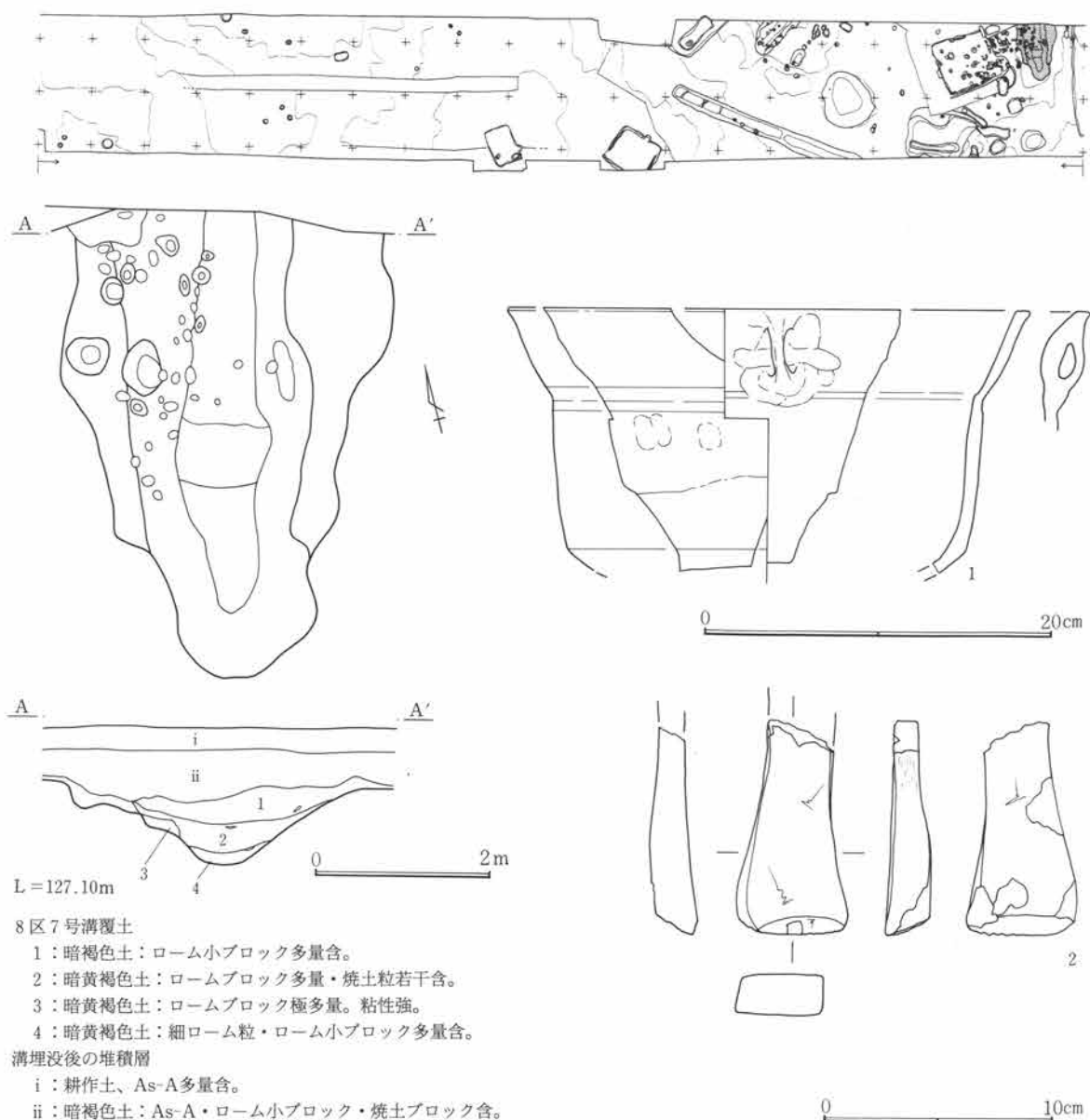
概要 本土坑は4号住居の東に在る浅い土坑である。北部は路線外に出る。覆土中にAs-A様の軽石を含む。

規模 残存長:175cm 短軸:48cm 深さ:23cm

構造 方形のプランを呈し、底面は平である。



第63図 4・6号溝



第64図 7号溝及び出土遺物

22 4号溝 (第63図、図版37)

概要 本溝は8区中位の端部から東北東に延びる溝で、18m程を調査した。軽石 (As-B) を含む。

規模 幅: 127~170cm 深さ: 43cm

構造 約132cm幅の直線的プランの箱堀状を呈する。

23 6号溝 (第63図、図版37)

概要 本溝は8区東寄り北壁近くの端部から北東に延びる溝で、約4mを調査した。土師器片等を出土。

規模 幅: 120~234cm 深さ: 112cm

構造 約230cm幅の直線的な溝で、箱堀状を呈する。

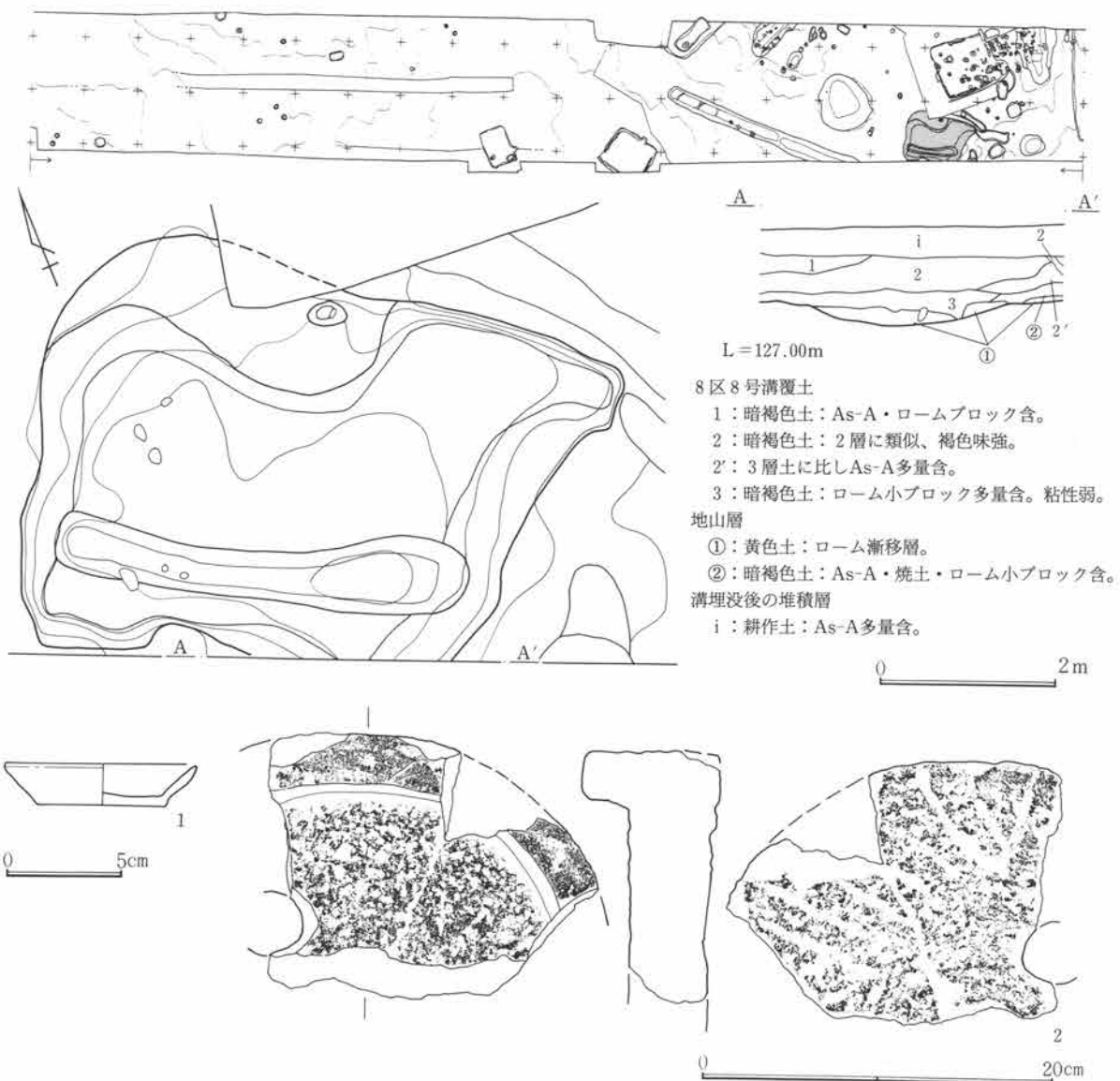
24 7号溝 (第64図、図版37)

概要 本溝は8区の東端に在り、調査区内の端部から北方に延びる溝で、約5.3mを調査した。

覆土中から15世紀後半と考えられる内耳鍋 (1) と砥石 (2) を出土している。

規模 幅: 164~374cm 深さ: 80cm

構造 約300cm幅の直線的な溝で、薬研堀状態の形態を呈する。



第65図 8号溝及び出土遺物

25 8号溝 (第65図、図版37)

概要 8号溝は8区の東部、3号住居の南に位置する遺存状態の悪い溝である。南北に近い方向で走行する溝であったと推定されるが、残存状態が非常に悪いため、平面的に確認できたのはその底面付近の一部であろうと判断される。従ってその形状は不明であるが、幅の広い浅い掘り込みの溝でなかったかと推定される。尚、8号溝の内側には東西方向の細長い掘り込みがあるが、これが8号溝に伴うものか別遺構であるかは不明である。仮に8号溝に伴うものであるならば、或は堰のような構造を想定するこ

とができるものと思われる。

溝はAs-Aを含む土を掘り込んでおり、覆土中にもAs-Aを含んでいるので天明3年以降の新しい時期の溝であると解釈されるが、覆土中より15世紀後半に比定されるカワラケ(1)と、石臼の破片(2)が出土している。

規模 残存幅: 222~1448cm 残存深さ: 33cm

溝内掘り込み 長さ: 912cm 幅: 52~88cm

深さ: 10cm

構造 底面が平面的である以外、全体的構造は不明である。



9区9号溝の覆土

- 1: 暗褐色土: As-A・ローム小ブロック・焼土ブロック含。
- 2: 8区-7号溝3層土に類似。As-A含。ロームブロック少く、ローム粒多量に含。

溝埋没後の堆積層

- i: 耕作土、As-A多量含。

第66図 9号溝

26 9号溝 (第66図、図版37)

概要 9号溝は8区と9区との境に在り、7号溝の東に平行して南北走行する、掘り込みの浅い溝であ

り、約11.8mを調査した。遺構の遺存状況は悪く、確認された遺構は底面付近のみであると考えられる。調査区の北から延びてくるが、削平により周囲の確認面に対する底面のレベルが徐々に高くなり、南壁近くに至っては削平は底面にまで及んで遺構を確認できなくなる。9号溝は現道の西側にこれと平行に走っているが、何らかの土地区画に伴って掘られたものではないかと推定される。

覆土にはAs-Aが含まれており、天明3年以降の所産である。細かい掘削時期などは特定しにくい、As-Aが覆土最下層に多いことが注意される。

規模 幅: 116~214m、深さ: 80cm

構造 溝の幅が約170cm以上ある。直線的なプランを呈する溝であったものと推定される。底面はやや丸底気味である。

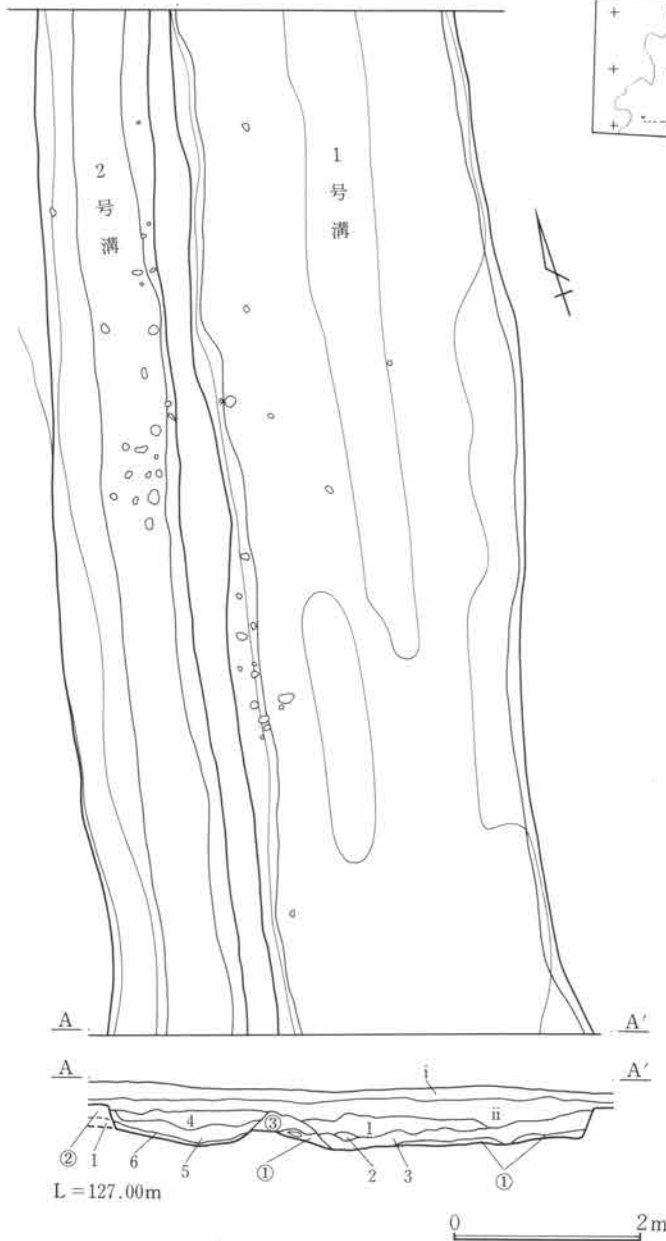
27 1号溝・2号溝 (第67図、図版37)

概要 1号溝・2号溝は並列に南北走行する溝で、9区の10区寄りに位置する。およそ18mの間を調査した。形態は後述のように異なるが、覆土中何れも層の上位にはAs-Aを含んでいる。覆土の状態からこの溝はAs-A降下前後(江戸時代後期)以降の所産であろうと思われる。また、両者の新旧関係等は不祥だが、米軍による昭和22年撮影の航空写真等を検討した結果、耕地整理前の地境に位置する溝であろうと判断される。通水の有無は確認できなかった。

規模 1号溝 幅: 316~350cm 深さ: 60cm

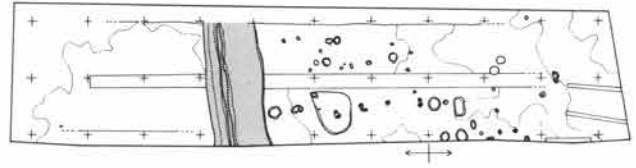
2号溝 幅: 120~150cm 深さ: 60cm

構造 1号溝・2号溝何れも直線的なプランを持つ溝で、1号溝は約320cm幅で底面の平らな箱堀状の掘り方を呈し、2号溝は約135cmの幅で半円形の形態の掘り方を呈する。



- 9区1号溝覆土
- 1：灰茶褐色土：2層に比し茶色味強。As-A若干含。粘性有。
 - 2：灰茶褐色土：ローム小ブロック・As-A含。
 - 3：暗茶褐色土：ローム粒・ブロック若干・炭化物粒含。堅く締まる。
- 2号溝覆土
- 4：灰褐色土：As-A・ローム粒若干含。鏝かけ時表面ボソボソする。
 - 5：灰褐色土：ローム粒・ローム小ブロック含。粘性・締まり有。
 - 6：暗茶褐色土：ローム粒・小ブロック含。粘性有。若干締まり欠。
- 地山層
- ①：茶褐色土：ローム漸移層。
 - ②：暗茶褐色土：黒味がかかる。5層土に比し暗。As-A・ローム粒若干含。粘性弱。堅く締まる。
 - ③：暗茶褐色土：As-A・ローム粒・炭化物粒若干含。
- 溝埋没後の堆積層
- i：表土。現耕作土。
 - ii：灰(茶)褐色土：As-A主体。ローム粒混。サクサクする。

第67図 1・2号溝



28 1号畠 (第68図、図版42)

概要 1号畠は9区の西部に位置する。東西走行のサク状遺構群である。遺構の範囲は路線幅を越えているが削平が、厳しいため遺構の西側は全く削り取られており、東側も消えている。遺構として把握された一面も削平が強く、確認された溝の深さも2cm以下と極めて浅い。従ってその全容を明らかにすることはできなかったが、長さ約16.8m、(路線)幅約12.3mの範囲を調査することができた。

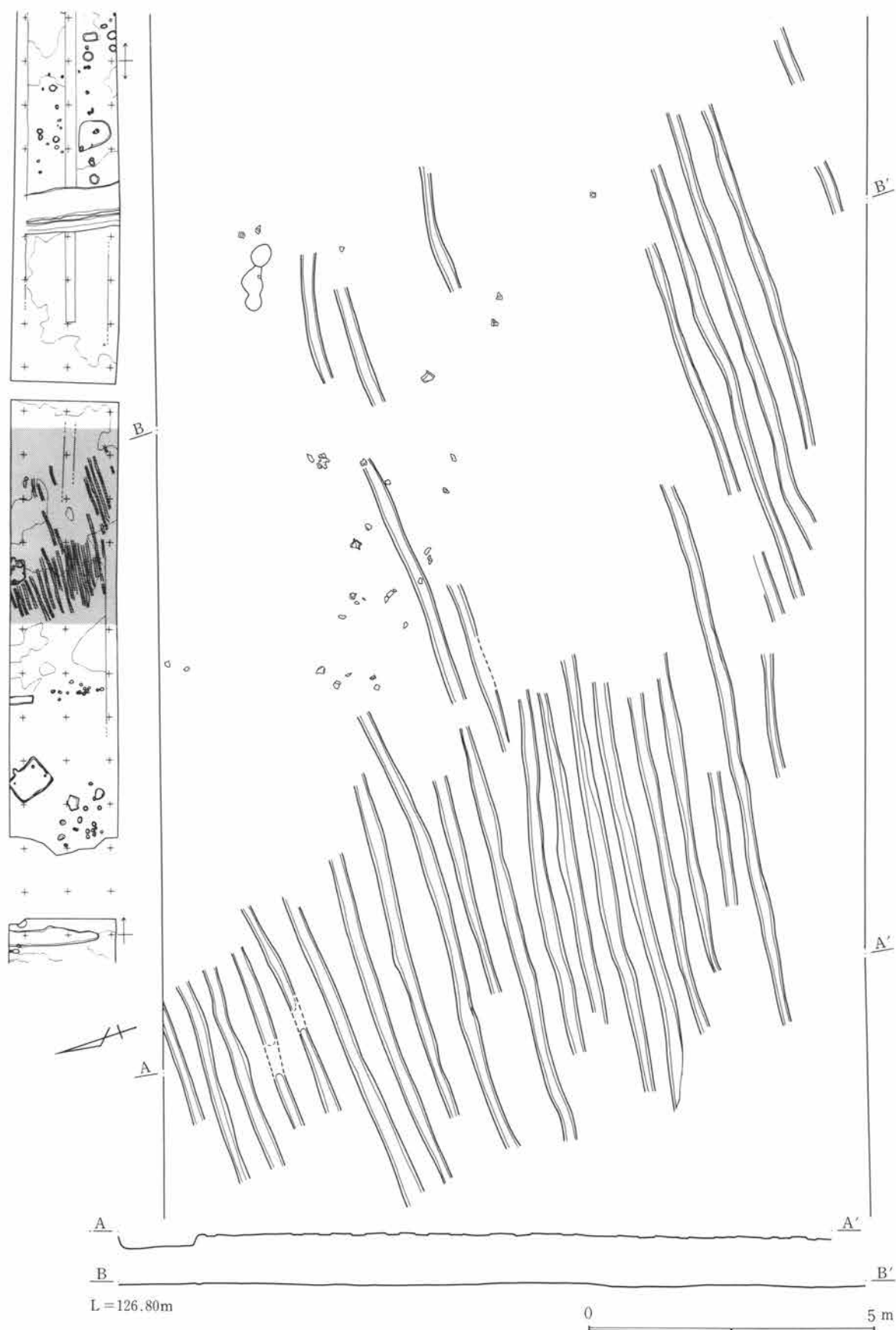
確認面に羽釜や土師器等の破片が見られたが、畠に伴うと特定されず、覆土からはAs-A降下前後より古い段階の所産であることは断定されるものの、より詳細な時期の特定は難しい。尚、5号住居と位置的に重なるが、その新旧関係は削平が著しく、特定しにくいものの本遺構の方が新しい可能性がある。

1号畠是一群のものと把握されるが、サクとサクの間隔、走行の方向等により北半のもの(以下『A群』とする)と南半南部のもの(以下『B群』とする)及び南半北部のもの(以下『C群』とする)に分けることができる。サクとサクの間隔はA群・B群に対し、B群・C群はやや南東方向に傾いてから東向きに走行の方向が変更している。

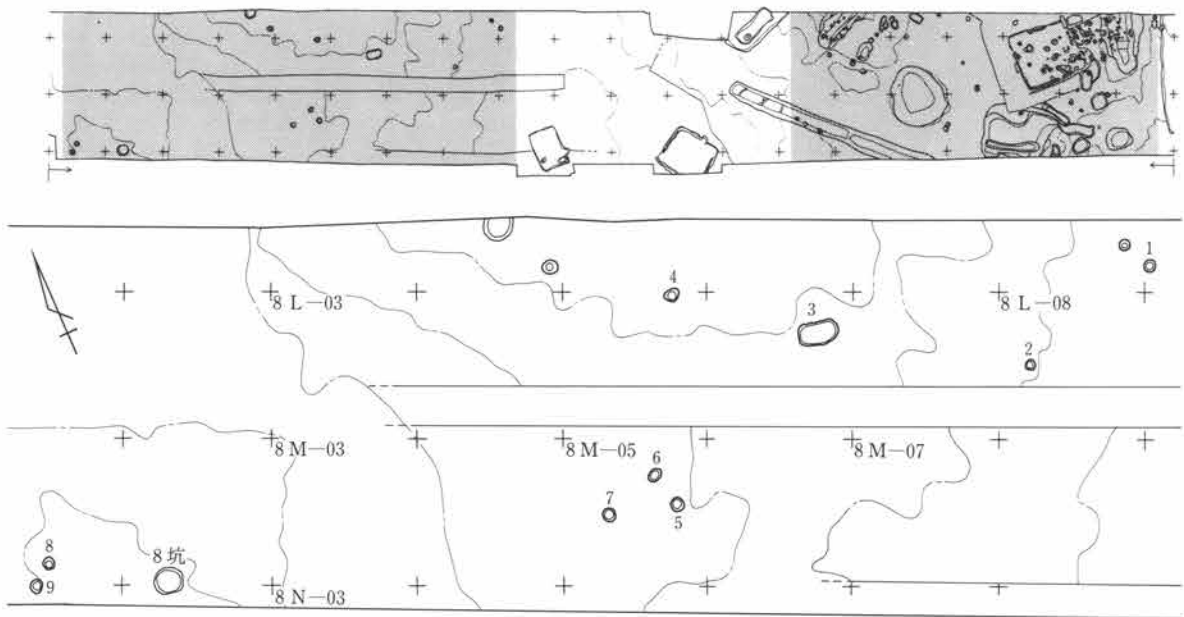
規模 長さ：18.6m以上 幅：16～36cm

サクの間隔(中心から中心の距離) A群：48～88cm B群：48～68cm C群：32～60cm

構造 サクはおおよそ幅24cmのもので、A群では72cm、B群では60cm、C群では50cm程を基準として掘削されている。底面はほぼ平である。



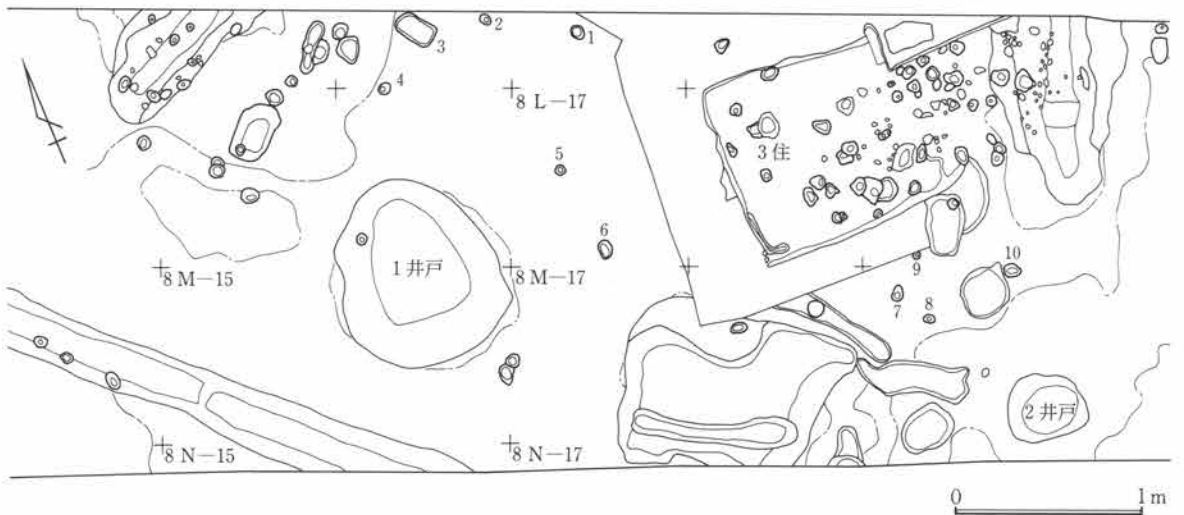
第68図 畠



8区-第1ピット群

- 1号ピット：暗褐色土。ロームブロック含。
- 2号ピット：暗褐色土。白色軽石。ローム小ブロック含。
- 3号ピット：暗褐色土。ロームブロック含。
- 4号ピット：暗褐色土。ローム粒ブロック含。
- 5号ピット：上層：暗褐色土。白色軽石含。
下層：茶褐色土。ロームブロック多量含。

- 6号ピット：上層：黒褐色土。白色軽石含。
下層：茶褐色土。ロームブロック含。
- 7号ピット：上層：暗褐色土。ローム粒含。
下層：暗黄褐色土。
- 8号ピット：褐色土。ローム粒多量含。
- 9号ピット：褐色土。ローム粒多量含。



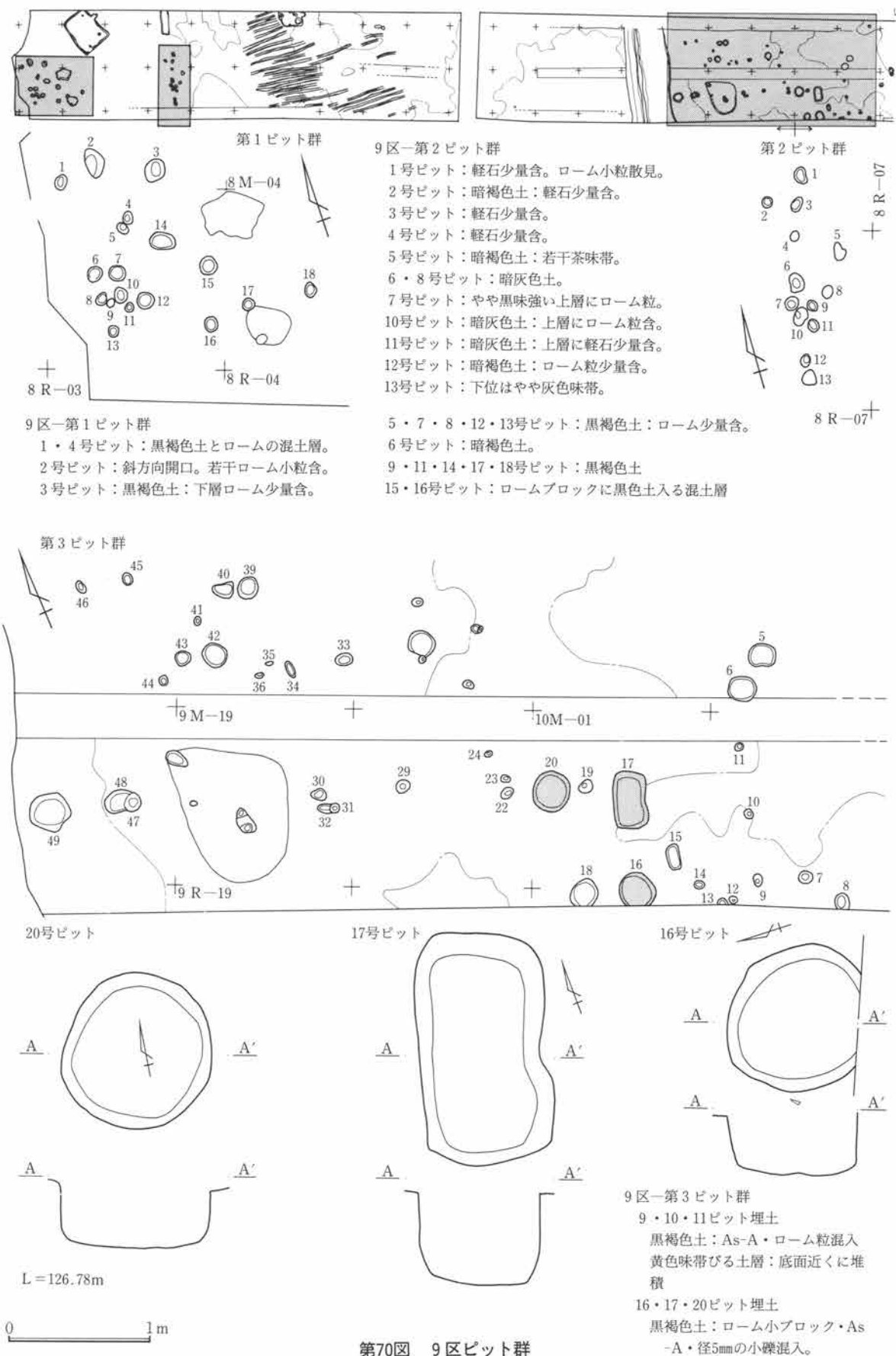
8区-第2ピット群

- 1号ピット：暗褐色土。白色軽石・ロームブロック含。
- 2号ピット：茶褐色土。ローム小ブロック・焼土含。
- 3号ピット：暗褐色土。白色軽石ローム粒含。
- 4号ピット：暗黄褐色土。ローム粒多量含。
- 5号ピット：暗褐色土。ローム粒・軽石ブロック含。
- 6号ピット：暗褐色土。ロームブロック含。

- 7号ピット：上層：暗褐色土。 下層：ローム。
- 8号ピット：上層：黒褐色土。ロームブロック多量含。
下層：ソフトローム。
- 9号ピット：上層：暗褐色土。ロームブロック混。
下層：ローム。
- 10号ピット：右層：褐色土。ロームブロック混。
左層：ローム。

第69図 8区ピット群

第4節 発見された遺構と遺物



29 8区一第1ピット群 (第69図、図版31)

概要 本ピット群は、8区西部に位置する。9つのピットと8・9号土坑を合わせた11の土坑・ピットで構成されている。

覆土の観察を行い得たものには、特定できるテフラを含むものは見られなかった。また、平面的な分布は全体的に分散する傾向を示し、建物の配列等を特定することはできなかった。

30 8区一第2ピット群 (第69図、図版31)

概要 本ピット群は8区東部に所在し、土層観察を行った10基のピットと3号住居等の遺構の中に確認されるものを含め、50基程度以上のピットで構成されている。また本ピット群内には土坑も多く有る。

平面的に西半は粗く、東半は密度の濃い分布状態を示す。5・6号ピットと3号住居内西側の2つのピットなど可能性をもつものはあるが、建物等の配列を特定することはできなかった。

31 9区一第1ピット群 (第70図、図版31)

概要 本ピット群は9区西端部南よりに在り、11号土坑内のものを含め19基のピットで構成される。

平面的分布状態は集中する傾向にあるが、建物等の配列を特定することはできなかった。尚、11・12

号土坑も本ピット群に含まれる。

32 9区一第2ピット群 (第70図、図版31)

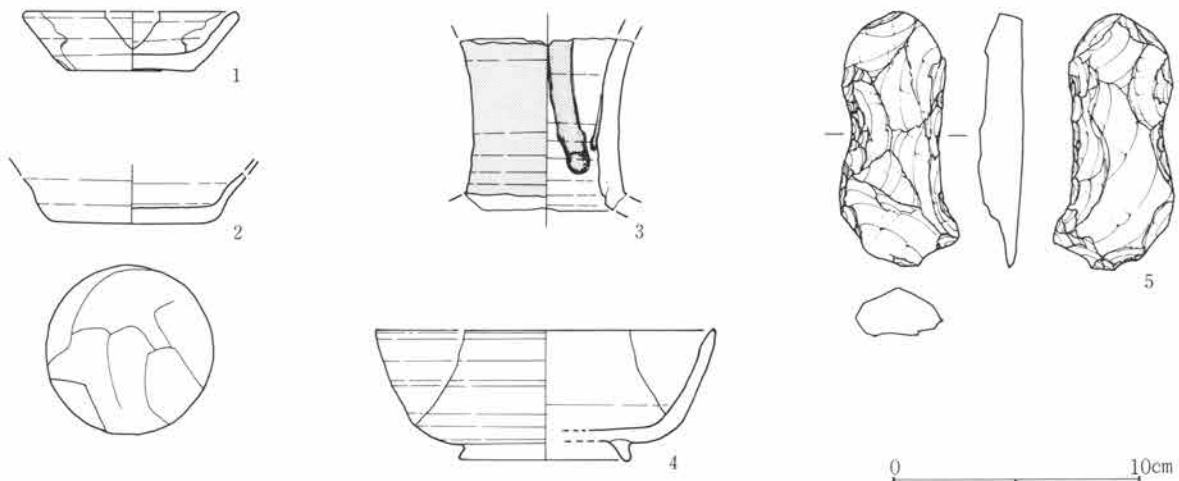
概要 本ピット群は9区の西部、9区一第1ピット群と1号畠の間に位置する。ピット群は13基のピットで構成されている。

建物等の具体的なプランを想定することはできなかったが、ピット群全体として南北に長い平面的分布状況を呈しているため、このピット群が何回かの作り替えを行った柵列の痕跡である可能性が考慮される。

33 9区一第3ピット群 (第70図、図版31)

概要 本ピット群は9区東端近くから、10区にかけて位置し、大小50基のピットで構成されている。

その平面的分布は、比較的均質に分散する傾向が有る。さて、このうち東部南部に在る9・10・11号ピットは形態と覆土が類似するので一連の建物或は柵等を形造ったものと想定されるが、7又は14号ピットはこれにつながる可能性を持っている。また中南部に在る19・22・29・30号ピット、或は東部南に在る大形の16・17・20号ピットもこうした構造物を構成する可能性を有している。



第71図 包含層出土遺物

第6章 東平井官正前遺跡の調査

東平井官正前遺跡土坑・ピット一覧表

1 8区-1号ピット群

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
1号土坑	110cm	65cm	51cm	隅丸長方形	
2号土坑	238cm	75cm	44cm	隅丸長方形	
3号土坑	202cm	53cm	20cm	不正長方形	
4号土坑	68cm	18cm	54cm	半 円 形	
5号土坑	105cm	78cm	54cm	不 整 方 形	
6号土坑	108cm	63cm	—	隅丸長方形	
7号土坑	98cm	73cm	18cm	楕 円 形	
8号土坑	63cm	53cm	14cm	円 形	
9号土坑	63cm	45cm	22cm	半 円 形	
1号ピット	22cm	7cm	38cm	円 形	
2号ピット	20cm	20cm	20cm	円 形	
3号ピット	85cm	43cm	10cm	隅丸長方形	
4号ピット	59cm	23cm	48cm	不 整 円 形	
5号ピット	28cm	25cm	24cm	円 形	
6号ピット	28cm	23cm	39cm	円 形	
7号ピット	25cm	25cm	15cm	円 形	
8号ピット	23cm	23cm	9cm	円 形	
9号ピット	30cm	25cm	—	円 形	

2 8区-2号ピット群

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
1号ピット	25cm	20cm	15cm	楕 円 形	
2号ピット	20cm	18cm	20cm	円 形	
3号ピット	70cm	38cm	7cm	隅丸長方形	
4号ピット	23cm	18cm	7cm	円 形	
5号ピット	18cm	18cm	10cm	円 形	
6号ピット	33cm	23cm	21cm	楕 円 形	
7号ピット	28cm	15cm	12cm	楕 円 形	
8号ピット	20cm	15cm	15cm	楕 円 形	
9号ピット	15cm	13cm	22cm	円 形	
10号ピット	33cm	23cm	12cm	不 整 方 形	

3 9区-1号ピット群

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
11号土坑	80cm	60cm	35cm	不 整 円 形	
12号土坑	110cm	78cm	11cm	不 整 方 形	
1号ピット	26cm	20cm	64cm	楕 円 形	
2号ピット	53cm	26cm	39cm	楕 円 形	
3号ピット	27cm	26cm	64cm	円 形	
4号ピット	24cm	20cm	22cm	円 形	
5号ピット	22cm	15cm	19cm	楕 円 形	
6号ピット	28cm	23cm	7cm	楕 円 形	
7号ピット	30cm	25cm	7cm	楕 円 形	
8号ピット	23cm	20cm	24cm	円 形	
9号ピット	18cm	13cm	27cm	円 形	
10号ピット	25cm	23cm	36cm	隅丸長方形	
11号ピット	18cm	15cm	8cm	円 形	
12号ピット	30cm	28cm	12cm	円 形	
13号ピット	18cm	18cm	12cm	円 形	
14号ピット	48cm	30cm	23cm	楕 円 形	
15号ピット	30cm	28cm	16cm	円 形	
16号ピット	28cm	25cm	12cm	円 形	
17号ピット	23cm	18cm	31cm	円 形	
18号ピット	25cm	23cm	32cm	円 形	

4 9区-2号ピット群

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
13号土坑	175cm	48cm	23cm	長 方 形	

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
1号ピット	28cm	18cm	26cm	不整楕円形	
2号ピット	18cm	18cm	17cm	円 形	
3号ピット	25cm	15cm	22cm	楕 円 形	
4号ピット	18cm	15cm	23cm	楕 円 形	
5号ピット	30cm	18cm	29cm	不整楕円形	
6号ピット	33cm	23cm	28cm	隅丸長方形	
7号ピット	23cm	20cm	17cm	円 形	
8号ピット	23cm	20cm	22cm	円 形	
9号ピット	20cm	15cm	19cm	楕 円 形	
10号ピット	30cm	23cm	56cm	楕 円 形	
11号ピット	23cm	18cm	20cm	楕 円 形	
12号ピット	23cm	18cm	44cm	楕 円 形	
13号ピット	28cm	23cm	49cm	不 整 円 形	

5 9区-3号ピット群

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
1号ピット	38cm	33cm	59cm	楕 円 形	
2号ピット	28cm	25cm	54cm	円 形	
3号ピット	35cm	25cm	58cm	楕 円 形	
4号ピット	15cm	15cm	23cm	円 形	
5号ピット	45cm	35cm	7cm	隅丸長方形	
6号ピット	50cm	43cm	7cm	円 形	
7号ピット	30cm	25cm	9cm	楕 円 形	
8号ピット	25cm	23cm	11cm	円 形	
9号ピット	23cm	18cm	70cm	楕 円 形	
10号ピット	18cm	18cm	—	円 形	
11号ピット	18cm	15cm	57cm	円 形	
12号ピット	15cm	13cm	8cm	不 整 円 形	
13号ピット	20cm	13cm	11cm	半 円 形	
14号ピット	18cm	15cm	22cm	楕 円 形	
15号ピット	43cm	25cm	7cm	隅丸長方形	
16号ピット	63cm	55cm	47cm	不 整 円 形	
17号ピット	100cm	53cm	66cm	隅丸長方形	
18号ピット	48cm	48cm	13cm	円 形	
19号ピット	25cm	20cm	53cm	不 整 円 形	
20号ピット	68cm	65cm	42cm	円 形	
21号ピット	48cm	18cm	14cm	不整楕円形	
22号ピット	28cm	20cm	26cm	楕 円 形	
23号ピット	18cm	13cm	19cm	不 整 円 形	
24号ピット	15cm	13cm	18cm	楕 円 形	
25号ピット	20cm	13cm	18cm	楕 円 形	
26号ピット	20cm	15cm	37cm	楕 円 形	
27号ピット	18cm	13cm	27cm	楕 円 形	
28号ピット	55cm	43cm	23cm	瓢箪 形	
29号ピット	25cm	20cm	15cm	不整楕円形	
30号ピット	28cm	18cm	15cm	不整楕円形	
31号ピット	18cm	18cm	70cm	円 形	
32号ピット	23cm	15cm	16cm	楕 円 形	
33号ピット	30cm	20cm	36cm	楕 円 形	
34号ピット	30cm	13cm	9cm	隅丸長方形	
35号ピット	13cm	8cm	12cm	楕 円 形	
36号ピット	15cm	8cm	11cm	楕 円 形	
37号ピット	13cm	8cm	10cm	楕 円 形	
38号ピット	40cm	25cm	18cm	楕 円 形	
39号ピット	35cm	35cm	16cm	不 整 円 形	
40号ピット	38cm	25cm	6cm	不整長方形	
41号ピット	18cm	13cm	17cm	楕 円 形	
42号ピット	43cm	43cm	9cm	円 形	

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
43号ピット	28cm	25cm	7cm	不 整 円 形	
44号ピット	15cm	15cm	14cm	円 形	
45号ピット	20cm	20cm	54cm	円 形	
46号ピット	23cm	18cm	20cm	楕 円 形	

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
47号ピット	33cm	30cm	75cm	不 整 円 形	
48号ピット	55cm	33cm	20cm	楕 円 形	
49号ピット	70cm	63cm	22cm	不 整 円 形	

第5節 小 結

① 遺跡西半部（6・7区）について

以上述べてきたように東平井官正前遺跡の遺構は平安時代以降のものを主とし、その分布状況は時代の故何を問わず東半の8・9・10区に偏っていて、西半の6・7区では僅かに溝1条と火葬土壇1基が確認されたに過ぎなかった。この西半部の遺構分布の粗な状態は、前述した東平井塚間遺跡の遺構分布状況に引き続くものと思われるが、試掘調査等の結果では風倒木は確認されていない。

この中で拡張調査を行った6区—1号溝は、県道上日野藤岡線の旧道に沿ったものと判断される溝である。本遺跡付近の県道上日野・藤岡線の旧道は少なくとも明治8年段階には東平井と日野を結ぶ里道であり、字雨沼と字官正前の境をなしている。地籍図⁽¹⁾ではこの道路の西側には方形区画が5～6区画程並んでいる（第34図—⑥）のが確認されている。この区画は県道神田・吉井停車場線沿いに見られる短冊形の区画と異なり長方形を呈しているがほぼ同規格であることから、この区画は東平井塚間遺跡4区—1号溝に伴う区画と同様の或る種の街並等の区割を示すものではないかと考えている。尚圃場整備後の現況では、この区画の中央を県道藤岡・上日野線が通っているが、この道路を境として東側は西側より一段低くなっている。

② 遺跡東半部（8～10区）について

東半部の中で遺構の多く分布するのは8区東半部から9区西半部にかけての地域である。この地域では5軒の竪穴住居跡を調査したが、これらは9世紀から11世紀にかけての平安期のものである。何れも東カマドであるが住居の配置等に規則性はあまり認められず、集落としての分布状況もあり密ではな

い。9区に在る5号住居の上には畠が耕作されていることから、当該地では集落廃絶後は耕地として使用されたことが知られるが、これは東半部全体がこうした変遷をたどったことを示唆するものと想定される。

東半部の地域で特徴的だった遺構は8区に在る1号井戸であった。既に述べたように1号井戸は径5m程と平面的には大きい、深さは確認面から1.2mと浅く、また2号井戸と違いアグリ等の使用痕跡は認められなかった。しかし、この井戸からはかなりの量の遺物が出土している。調査段階では凡そ上層・中層・下層という3区分で遺物を取り上げているが、整理作業の結果これら上・中・下各層間に時期的差異は無く、15世紀後半という年代感が与えられている。2号井戸等中世以降の遺構に遺物が少ないのに対し1号井戸は極端に遺物が多いこと、内耳鍋・摺鉢等の同一器種の日用雑器が多く見られ、かなり使用されていることなどを併せて考えると、1号井戸への遺物の投棄は一気に行われ、且つ遺物をまとめて投棄しなければならない事情があったのではないかと判断されるのである。遺物の時期と判断される15世紀後半という時期は、享徳の乱（1454～1478）や長尾春景の乱などの騒乱が相次いだ時期である。享徳の乱は関東管領上杉憲忠が足利成氏に殺害されたことが契機となるが、上杉房顕が山内上杉氏を継いで上野守護になり平井城に入ったものの、当時の上杉方の中心人物は白井の長尾景仲であり、公方方の攻略目標は総社長尾氏の本拠である蒼海城（前橋市元総社町）や白井長尾氏の本拠である白井城（子持村白井）、或は武蔵の五十子陣（埼玉県本庄市）であり平井は戦略拠点としては弱かったのではないかと考えられる。また15世紀前葉は比

較的安定していたようであるので、騒乱のために投棄が行われた可能性は少ないように思われる。寧ろ平井城下の土地の使用者の急な変更や、区画の変更、城下の拡張といったことが考えられるのである。

③ 地名『官正前』について

本遺跡の大半は字『官正前』に含まれるが、その名称から官衙或は館址などに関連する名称ではないかとして調査段階から注目してきた。この字名は、恐らくは本遺跡の西の地域に見られる『原』に対する『原前』（第2図）と同様に、『官正』に対する『官正前』であったと思われる。

ところで、『官正』については文字通りであれば長官の意味である。また近似したものとしては政治——我国に措いては太政官庁における「政」——のことである『官政』があり、「かんしょう」という読みによれば太政官最下の役職で『官掌』がある⁽⁴⁾。古代或は中世に於いては役所、即ち公的事項の執行機関は（代理人を含む）その長たる役人の居住地と同一となることが多いことから、何れにせよ『官正』は役所として把握しうるものではないかと考えられるのである。従って『官正前』は役所の前の地という意味であろうと思われる。この場合の役所はその語源の故何に拘わらず公的機関という認識で捉えられ、換言すれば私的な機関ではないというニュアンスがあったのではないと思われる。

それでは『官正前』に対する『官正』が存在したと仮定した場合、『官正』はどこに在ったのであろうか。『官正前』の周囲の字名は、東は『猿川』、南は『向山』・『富士井戸』、西は『雨沼』、北は『本宿』であり『官正』の地名は無い。また更に周辺地域にも見られない。そこで『官正』＝役所の位置について若干の考察を試みたいと思う。

古代に於いては和名抄に緑埜郡に11郷が見られ、このうち浮図郷を本遺跡の位置する鮎川兩岸の藤岡市平野部の西南部に比定する説もあるが確定していないため、本遺跡付近に官衙の存在を考慮することは難しいと思われる。平安時代末近くには藤岡市の

平野部という広い範囲が高山御厨となっている。高山御厨の領主は伊勢神宮であるが在地領主としては秩父氏系の高山・小林両氏があり、中世に於いて高山御厨は高山・小林両氏の勢力下にあった。その中心地は高山氏の本拠地である高山地区・下日野地区と、小林氏の本拠地である藤岡市街地南西の小林であったと考えられている。高山・小林両氏は凡そ鎌倉・室町時代を通じて地頭職にあったと思われるが公務はそれぞれの館に於いてなされていたと考えられ、本遺跡を含む東平井地区は高山・下日野地区に接し距離的に近すぎるので、山内上杉氏が平井地区を拠点とする以前の時期において敢えてここに出先機関的施設を設置したとは考えにくい。また当時の商業の拠点となる宿は、西上州では鎌倉街道沿いに高崎市の山名宿や、南北朝時代より暫の間上野守護の守護所が置かれたと言われる安中市の板鼻宿が知られているが、東平井地区にやはり平井築城以前に宿が設置されたということは——必然性も無く——なかったと思われる。従って、こうしたものを統括する機関も必要ないのである。このように上杉氏が入る以前の東平井地区に『官正』を示唆するような施設の設置は想定しにくいのである。

「役所」の設置の可能性は、関東管領上杉憲実が関東公方足利持氏から逃れて平井に入った永享10年（1438）以降、特に管領を継いだ上杉顕定が平井城の大改修を行ったとされる応仁元年（1467）以降のことであると思われる。平井城は当初、平井城の本丸・二の丸・笹郭と呼ばれる平井城南部の一画と詰めの城としてその南の平井金山城、即ち鮎川左岸の西平井に設定されていた。しかし城域の拡大と実質的管領府となったことなどから城下として東平井地区が設定されてきたと考えられるのである。明治43年刊行の多野郡誌によると「譜代ノ家人ハ河西ニ住シ河東ニハ近國幕下ノ士住セシカ」とある⁽⁶⁾。真偽の程は確認できないが、そうした伝承があったものと思われ、東平井地区にも「近國幕下ノ士」の居住した城館或は屋敷などの存在が想定される地割も残る。また、戦国期の元龜3年6月14日付けの武田家

朱印状に「東平井市之事」として市日を3・8・13・18・23・28日とするものがあり、当時市が設けられていたことが分かる。市がどこまで遡るかは不明だが、東平井地区が城下と整備されていたことが推定されるのである。平井城は西平井にあり、鮎川のやや深い谷を挟んで対岸に在る城下を管轄する出先機関の存在が推測されるのである。

それでは、そうした機関——施設はどこに設置されたのであろうか。これについては第2部で述べた「飛石の砦」や、日野へ向かう道路の沿いにあった「東平井の砦」に充てることもできようが、地名として考えた場合には『官正前』に近接した地域に求られると考えたいので、地籍図を元に検討してみたい。

『官正』の平面形態は不明だが館址を示唆すると思われる方形区画について見ると『官正前』付近では字官正前の中、県道藤岡・上日野線の旧道の東に1か所(第34図—⑫)、第2図に見られる県道神田・吉井停車場線北側に在る字中宿の東端部の凸部手前、県道に沿って見られる短冊状の土地区画の奥(北側)に見られるものがあり、同図中下の東京電力西毛変電所東南角近く、丘陵の直下に南東角が切られ北辺がやや乱れる区画が字富士井戸にも見られる。前者はその直ぐ南を調査区が横切る位置にあり、県道藤岡・上日野線の改良工事に伴う圃場整備によって既にその区画は見られなかったが、図上ではおよそ東西66m、南北72m四方の規模を持つもので、上述の1号井戸はその南辺付近の70m程東に位置している。中者は東平井の街中に在り、東西78m、南北79m程を測り、北辺西側に折れがあって東辺が張る平面形態を呈している。この区画は地籍図の上ではっきり見られるが、現在でも周囲を道路が巡っていて周囲の区画と区切られている。区画の殆どは周囲の土地と同レベルであるが、北東部は田圃等である外周の土地から一段高くなっている。後者は東京電力西毛変電所ですべてほとんどが壊されているので微細な地形の検討はできなかったが、東西105m、南北105m以上を測る。

これらの区画のうち前者は県道神田・吉井停車場

線沿いに見られる短冊形の地割、即ち街場推定地に近接しその統括に適しているが、字官正前に含まれている。中者は字猿川と三目川原の間を走る、何れ中世に遡ると思われる鎌倉街道推定道⁽⁸⁾から分岐し、後述する平井城の追手へ通じていたと考えられる字官正前・富士井戸境の道路から見ると『官正前』はその手前側になる。また中者は、上述の短冊形の区画をもつ字『中宿』にあった東の字『新町』に接していて前者と同様「街場」の統括には適している。字『中宿』の南には字『本宿』がありその南に『官正前』が位置しているが、『本宿』・『中宿』・『新町』といった地名が短冊形の地割の誕生によって生じたとするならば、当該地区の旧名称の存在の可能性が考えられる。後者は『官正前』に南接する字富士井戸に所在しており、丘陵下にあるが北側に傾斜する東平井地域にあつては比較的高い位置にあるので、ある程度東平井地域を見渡すことができる。街場と推定される地域からは離れるが、前述の推定鎌倉街道から分岐して平井城に向かう道路に近接しており、その通行を監視することができる。こうしたことから、『官正』は、中・後者の何れかに所在したのではないかと想定されるのである。

註

- (1) 群馬県文化事業振興会 『上野国郡村誌 7 多野郡』 1981 知事官房『多野郡村誌』(1875)の復刻版 95頁
 - (2) 本稿の検討には昭和16年頃作図の地籍図を使用している
 - (3) 諸橋轍次 著 鎌田正・米山寅太郎 改定 『大漢和辞典』 大修館書店 1984 第3巻
 - (4) 国史大辞典編纂委員会 『国史大辞典』 吉川弘文館 1983
 - (5) 角川地名大辞典編纂委員会 『角川地名大辞典 10 群馬県』 1988
 - (6) 多野郡教育会 『多野郡誌』 1910 文献出版社による復刻版(1978)の101頁
 - (7) 群馬県 『群馬史 資料編 7 中世 3』 1986 691頁 文書番号2709 「武田家朱印状」
 - (8) 第2部 小結 註(3)に同じ
- 参考文献
群馬県 『群馬通史編 3 中世』 1989
山崎 一 『群馬古城址の研究(下巻)』 1978

第6章 東平井官正前遺跡の調査

東平井官正前遺跡出土遺物一覧

1 1号住居出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第37図 図版43	10-000001	羽釜 (破片)	口径 推定21.0	肩部ナデ調整	①酸化焰・やや軟 ②橙色(7.5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
2	第37図 図版43	10-000002	須恵器鉢 (1/4)	口径 推定19.9 底径 16.8 器高 11.0	口縁へ体部ケズリ後ナデ。	①還元焰・普通 ②黄褐色(2.5Y5/3) ③粗砂粒(片岩)
3	— 図版54	10-000091	須恵碗 (破片)	残存8.0×2.1	全体回転クロコ整形。やや外傾	①還元焰・やや硬 ②灰白色(2.5YR7/1) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000001	土師器甕	4	70g	取上番号：1,3,4,7	8	11-000008	陶器	1	10g	
5	11-000002	須恵器甕	3	80	取上番号：5,6,12	9	11-000004	須恵器	2	30	掘り方
6	11-000006	羽釜	2	120		10	11-000003	土師器坏	3	25	
7	11-000007	羽釜	13	80		11	11-000005	土師器甕	1	20	貯蔵穴

2 2号住居出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第39図 図版43	10-000003	かわらけ (1/2)	口径 推定7.6 底径4.2×4.0 器高1.8	体部指頭痕腰部左回転糸切	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙色(5YR7/4) ③細砂粒
2	第39図 図版43	10-000004	土師器坏 (1/4)	口径 推定13.0	全体内面中心に器面やや荒れる。口縁横ナデ。	①酸化焰・やや軟 ②橙色(7.5YR6/6) ③細砂粒(長石・雲母)
3	第39図 図版43	10-000005	土師器坏 (破片)	口径 推定13.4 器高 推定3.7	底部底面欠、左方向への寛ケズリ	①還元焰・普通 ②橙色(7.5YR7/6) ③細砂粒(片岩)
4	第39図 図版43	10-000007	須恵器坏 (1/4)	口径 推定11.2 底径 7.7 器高 3.2	全体外面荒れる。右回転クロコ整形	①還元焰・普通 ②灰白色(5Y7/1) ③細砂粒
5	第39図 図版43	10-000008	須恵器坏 (3/4)	口径 推定14.6 底径7.0 器高 4.3	底部右回転糸切、多少台を持つ。	①酸化焰・やや軟 ②浅黄色(2.5Y7/4) ③粗細砂粒(片岩)
6	第39図 図版43	10-000010	須恵器坏 (3/4)	口径 17.4 底径 7.2 器高 51.5	全体に器面荒れる。底部右回転糸切。	①還元焰・やや軟 ②灰白色(5Y8/1) ③粗砂粒(片岩)
7	第39図 図版43	10-000006	須恵器蓋 (破片)	口径 推定15.6	全体クロコ整形。蓋部に指頭痕残る。	①還元焰・やや硬 ②灰色(7.5YR5/1)
8	第39図 図版43	10-000009	須恵器蓋 (破片)	口径 推定15.4	全体に器面荒れる。	①酸化焰・やや軟 ②にぶい黄褐色(10YR7/3) ③細砂粒
9	第39図 図版43	10-000011	須恵器蓋 (破片)	口径 推定16.0	全体に器面荒れる。	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5YR5/8) ③細砂粒
10	第40図 図版43	10-000012	甕 (1/4)	口径 10.2 器高 26.0	全体に内外面摩滅。口縁外反し横ナデ。肩部寛ケズリ	①— ②にぶい橙色(5YR6/4) ③細砂粒
11	第40図 図版43	10-000013	甕 破片 (破片)	口径 推定19.2	器面荒れる。口縁横ナデ。肩部へ体部外面ケズリ痕有	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5YR6/6) ③細砂粒(長石・雲母)
12	第41図 図版44	20-000001	こもあみ石	長さ 10.1 幅3.7 厚さ 2.4	中央縁部に凹部造られる	石材：黒色片石
13	第41図 図版44	20-000002	こもあみ石	長さ 9.9 幅 4.8 厚さ 2.0	—	石材：黒色片石
14	第41図 図版44	20-000003	こもあみ石	長さ 13.5 幅4.8 厚さ 2.2	中央縁部若干凹む	石材：雲母石英片岩
15	第41図 図版44	20-000004	こもあみ石	長さ 14.3 幅5.7 厚さ 2.9	中央縁部に凹部造られる	石材：緑色片岩
16	— 図版54	10-000085	須恵器蓋 (破片)	残存 5.2×5.0 底径 4.5	全体回転クロコ整形。つまみ貼付。ナデ	①酸化焰・やや硬 ②鈍い橙色(5YR6/4) ③細砂粒(片岩)
17	— 図版54	10-000086	土師器蓋 (破片)	残存 4.8×2.5	口端部平。口唇下方に引き出される。	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙色(7.5YR7/4) ③細砂粒(長石)
18	— 図版54	10-000087	須恵器蓋 (破片)	残存 6.6×4.6	回転クロコ整形。蓋部ナデ調整	①還元焰・普通 ②褐灰色(7.5YR7/1) ③細砂粒(片岩)
19	— 図版54	10-000088	土師器蓋 (破片)	残存 3.8×2.6	回転クロコ整形。口端平	①酸化焰・普通 ②にぶい赤褐色(5YR5/4) ③細砂粒(片岩)
20	— 図版54	10-000089	須恵器坏 (破片)	残存 10.0×5.0	回転クロコ整形。口縁直線的で口唇部引き出される。	①還元焰・やや軟 ②灰白色(5Y8/1) ③細砂粒(片岩)

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
21	— 図版54	10-000090	須恵器坏 (破片)	残存 8.8×4.8	器面風化。左回転クロコ整形	①還元焰・軟 ②灰白色(5Y 7/1) ③細砂粒(長石)
22	— 図版54	10-000092	土師器坏 (破片)	残存 3.9×4.6	口縁短く横ナデ。頸部左方への笥ケズリ	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5YR5/6) ③細砂粒(雲母)
23	— 図版54	10-000093	須恵器碗 (1/4)	残存 4.3×4.7×3.4	全体右回転クロコ整形。口縁外反 底部回転糸切	①還元焰・硬 ②灰色(7.5YR 6/1) ③細砂粒(片岩)
24	— 図版54	10-000094	土師器甕 (破片)	口径 15.0 残存 15.0×5.3	全体器面荒れる。口縁ややコ字。器肉薄	①酸化焰・普通 ②赤褐色(2.5YR4/6) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
25	11-000009	土師器甕	131	970g	取上番号：2,18 35、44、51、57、 60、67、109、116、 117、118、125
27	11-000010	土師器甕	15	300	
28	11-000011	土師器甕	3	140	取上番号：3、 17、121
29	11-000012	土師器坏	4	40	取上番号：21、 38、39、58
30	11-000013	土師器甕	9	95	取上番号：9、 112、24、29、43、 67、99、128
31	11-000014	須恵器甕	6	150	取上番号：23、 48、69、112、119、 126
32	11-000015	須恵器坏	1	10	取上番号：81
33	11-000017	須恵器蓋	1	5	取上番号：18
34	11-000018	土師器甕	3	40	
35	11-000032	土師器坏	5	30	
36	11-000034	土師器甕	151	420	
37	11-000035	土師器甕	4	20	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
38	11-000036	土師器甕	19	150g	
39	11-000036	土師器甕	19	150	
40	11-000037	土師器甕	36	200	
41	11-000038	土師器甕	3	80	
42	11-000039	須恵器坏	3	25	
43	11-000040	須恵器坏	2	20	
44	11-000218	土師器坏	1	30	取上番号：8
45	11-000019	土師器坏	3	5	カマド
46	11-000020	土師器甕	2	30	カマド
47	11-000022	土師器甕	9	40	カマド
48	11-000023	土師器甕	95	310	カマド
49	11-000024	土師器甕	58	310	掘り方
50	11-000025	土師器甕	3	10	掘り方
51	11-000026	須恵器甕	1	10	掘り方
52	11-000027	土師器坏	2	20	掘り方
53	11-000029	土師器甕	2	20	掘り方
54	11-000030	土師器坏	2	10	掘り方
55	11-000031	須恵器坏	2	20	掘り方
56	11-000033	土師器坏	2	10	掘り方

3 3号住居出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第43図 図版44	10-000014	須恵器蓋 (ほぼ完形)	径 14.7×14.8 器高 3.5 鈕径 2.7	器面荒れる。右回転クロコ整形。外周笥ケズリ	①還元焰・やや軟 ②灰白色(7.5YR8/2) ③粗砂粒(片岩)
2	第43図 図版44	10-000015	須恵器坏 (1/4)	口径 11.8 底径 6.6 器高 3.5	回転クロコ整形。底部回転糸切後指ナデ	①還元焰・やや硬 ②灰色(N 5/) ③粗砂粒
3	第43図 図版44	10-000016	須恵器坏 (3/4)	口径 12.6 器高 2.8	一方向に圧平される。口縁横ナデ。	①還元焰・普通 ②にぶい赤褐色(5YR5/4) ③細砂粒(片岩)
4	第43図 図版44	10-000017	土師器坏 (3/4)	口径 12.2×12.05 器高 3.4×3.3	器面荒れる。口縁横ナデ。底部笥ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②橙色(5YR6/6) ③粗砂粒(細い)
5	第43図 図版44	10-000018	土師器甕 (破片)	口径推定21.0	器肉薄い。コ字状口縁。肩部左横方向への笥ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②にぶい黄橙色(10YR6/4) ③細砂粒
6	第43図 図版44	20-000005	こもあみ石	長さ 13.0 幅5.1 厚 2.0	中央よりやや偏った位置の縁部に凹部造られる	石材：黒色片岩
7	第43図 図版44	20-000006	こもあみ石	長さ 14.7 幅 3.3 厚 3.5	中央よりやや偏った位置の縁部に凹部造られる	石材：黒色片岩
8	第43図 図版44	20-000007	こもあみ石	長さ 18.6 幅 6.0 厚 2.3	一側面中央、一側面やや偏る位置に凹部造られる	石材：黒色片岩
9	— 図版53	10-000095	須恵器坏 (破片)	残存 11.0×10.8	左回転クロコ整形。回転糸切痕。指頭痕残	①酸化焰・硬 ②にぶい橙色(7.5YR5/4) ③細砂粒
10	— 図版53	0-000096	土師器坏 (破片)	残存 5.3×3.7	器肉薄い。口縁短く内湾し横ナデ。底部丸味を持つ	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5YR5/6) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
11	11-000042	土師器甕	78	180g	
12	11-000043	土師器坏	2	40	
13	11-000044	土師器甕	130	700	
14	11-000045	土師器甕	12	210	
15	11-000050	須恵器坏	1	5g	
16	11-000051	須恵器甕	3	20	
17	11-000055	土師器甕	2	30	
18	11-000058	土師器坏	4	60	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
19	11-000046	土師器甕	11	80g	
20	11-000047	須恵器甕	8	110	取上番号：20
21	11-000048	須恵器甕	5	50	
22	11-000049	須恵器壺	1	100	取上番号：21
23	11-000057	土師器坏	2	60g	取上番号：9
24	11-000058	土師器甕	1	20	
25	11-000059	須恵器坏	1	10	取上番号：14

第6章 東平井官正前遺跡の調査

4 4号住居出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第45図 図版44	10-000019	須恵器甕 (腰部～底部破片)	—	腰部外面ケズリ痕有、底部 内面に釉残る、台脚欠損	①酸化焰・硬 ②黄灰色(2.5 Y5/1) ③細砂粒(片岩)
2	第45図 図版44	10-000020	土師器甕 (脛部～体部破片)	—	肩部～体部外面ナデ	①還元焰・軟 ②にぶい黄橙色 (YR7/2) ③粗砂粒(含片岩)
3	第45図 図版44	10-000021	羽釜 (口縁～脛部破片)	口径推定27.8	体部左方横位のナデ	①還元焰やや・軟 ②灰白色(5 Y8/1) ③細砂粒(片岩)
4	— 図版54	10-000097	羽釜 (口縁破片)	残存4.1×6.0	口縁内傾、口端平で内側に 引き出す。肩部横位のナデ	①還元焰・普通 ②浅黄色(2.5 YR7/3) ③細砂粒(雲母)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
5	11-000061	土師器甕	1	40g	掘り方出土

5 5号住居出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第48図 図版45	10-000022	かわらけ (1/4)	口径 推定11.9 底径 推定 7.2 器高 3.0	口縁～底部ナデ	①酸化焰・やや軟 ②明褐灰褐色 (7.5YR5/6 4/2) ③細砂粒
2	第48図 図版45	10-000023	須恵器坏 (1/4)	口径 推定10.25 底径 6.2×6.4 器高4.0	横位にやや扁平する体部内 面煤付着	①還元焰・やや軟 ②にぶい黄 橙色(10YR7/3) ③細砂粒
3	第48図 図版45	10-000024	須恵器坏 (1/2)	口径 推定10.55 底径 推定6.5 器高 推定3.7	器面荒れる。右回転クロ 整形。回転糸切り痕	①酸化焰・やや軟 ②にぶい黄 橙色(10YR6/4) ③細砂粒
4	第48図 図版45	10-000025	須恵器坏 (1/4)	口径 推定11.8 底径 推定6.4 器高4.35	器面荒れる。肩部内面に黒 色処理様の痕跡	①酸化焰・やや軟 ②橙～明褐 色 ③粗砂粒(片岩)
5	第48図 図版45	10-000026	須恵器椀 (2/3)	口径 12.45×12.2 底 径 5.6×6.2 器高4.7	器面荒れる。底部内面一方 向への修整痕	①酸化焰・やや軟 ②にぶい褐 色 ③粗砂粒(片岩)
6	第48図 図版45	10-000027	須恵器椀 (破片)	口径 推定18.0	回転クロ整形。何度か引 直し有り。口縁やや外傾	①還元焰・普通 ②灰白色(5 Y8/2) ③細砂粒
7	第48図 図版45	10-000028	羽釜 (破片)	口径 推定22.4	器面荒れる	①酸化焰・やや軟 ②明黄褐色 (10YR7/6) ③粗砂粒(片岩)
8	第48図 図版45	10-000029	羽釜 (破片)	口径 推定18.2	器面やや荒れる	①酸化焰・やや軟 ②にぶい黄 橙色 ③粗砂粒(片岩)
9	第48図 図版45	10-000030	羽釜 破片 (破片)	口径 推定23.6	口縁内面ナデ。頸部～肩部 寛ナデ。指頭痕残る。	①酸化焰・やや軟 ②浅黄色 (2.5YR7/3) ③細砂粒
10	— 図版54	10-000098	羽釜 破片 (破片)	残存 6.3×11.4	輪積痕残る。体部外内面下 方への寛ケズリ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい黄 橙色 ③粗砂粒(片岩)
11	— 図版54	10-000099	須恵椀 (底部片)	残存 8.0×6.7 底径6.0	全体回転クロ整形。高台 貼付時のナデ	①酸化焰・やや軟 ②灰白色 (10YR8/1) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
12	11-000062	土師器坏	1	10g	取上番号：5
13	11-000065	須恵器甕	1	5	取上番号：2、7、 9、13、16、19、21、 22
14	11-000066	須恵器甕	1	5	
15	11-000067	須恵器羽釜	1	20	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
16	11-000068	須恵器甕	1	20g	取上番号：17
17	11-000063	土師器甕	2	20	
18	11-000064	土師器甕	6	30	取上番号：24
19	11-000069	土師器甕	4	30	貯蔵穴
20	11-000070	須恵器甕	1	20	貯蔵穴

6 1号井戸出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第51図 図版45	10-000031	かわらけ (破片)	口径 推定6.9 底径 4.4 器高 1.5	左回転クロ整形。回転糸 切痕。口縁外面煤付着	①酸化焰・やや硬 ②にぶい黄 橙色(10YR6/4) ③細砂粒
2	第51図 図版45	10-000032	かわらけ (1/2)	口径推定7.2 底径4.3 器高1.5	全体内外面一部煤付着、底 部左回転糸切	①還元焰・普通 ②にぶい黄橙 色(10YR7/3)③細砂粒(片岩?)
3	第51図 図版45	10-000033	かわらけ (1/3)	口径 推定7.9 底径 4.6 器高 2.1	左回転クロ整形。口縁外 面に陵。回転糸切	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙 色(7.5YR6/4) ③粗砂粒
4	第51図 図版45	10-000034	かわらけ (1/4)	口径 推定11.2 底径 6.4 器高 25.5	回転クロ整形。器面やや荒 れる。底面糸切後寛ナデ。	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (10YR3/5) ③細砂粒
5	第51図 図版45	10-000035	かわらけ (3/4)	口径 12.0 底 径 6. 9×6.7 器高 31.5	左回転クロ整形。器面荒 れる。回転糸切	①酸化焰・軟質 ②にぶい橙色 (5YR7/3) ③細砂粒(片岩)
6	第51図 図版45	10-000036	かわらけ (破片)	口径 推定7.8 底径 4.5 器高 1.4	左回転クロ整形。腰部外 面煤？付着。回転糸切痕	①還元焰・やや硬 ②暗灰黄色 (2.5Y4/2) ③粗砂粒

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
7	第51図 図版45	10-000037	かわらけ (3/4)	口径 推定8.2×8.2 底径5.0×4.9 器高2.0	左回転クロコ整形。内面煤 付着口縁内湾、体部反。回 転糸切	①還元焰・普通 ②褐灰色(10 YR5/1) ③細砂粒
8	第51図 図版45	10-000038	かわらけ (1/2)	口径 推定11.3 底径 6.8 器高 2.6	回転クロコ整形。器面荒れ る。底面糸切後ナデ	①酸化焰 ②橙色(7.5YR7/6) ③細砂粒
9	第51図 図版45	10-000039	かわらけ (1/4)	口径 推定10.9 底径 5.95×5.9 器高 2.45	回転クロコ整形。器面荒れ る。体部外反	①酸化焰・やや軟 ②橙色(5 YR6/8) ③細砂粒(片岩)
10	第51図 図版45	10-000040	かわらけ (完形)	口径 7.85×7.8 底径 5.8×5.8 器高 1.9	回転クロコ整形。器面荒。口 縁内湾。体部外反。回転糸切	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙 色(5YR7/4) ③細砂粒
11	第51図 図版45	10-000041	かわらけ (2/3)	口径 11.5 底径 6.65 器高 2.3	器面やや荒れる。底面(回転 糸切後?)静止糸切	①酸化焰・やや軟 ②にぶい褐 色(7.5YR5/4) ③細砂粒
12	第51図 図版45	10-000042	かわらけ (1/3)	口径 推定11.3 底径 7.2 器高 2.35	右回転クロコ整形。回転糸 切	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (5YR6/4) ③細砂粒(片岩)
13	第51図 図版46	10-000043	かわらけ (3/4)	口径 11.1 底径 7.2×6.8 器高 2.2	回転クロコ整形。器面荒。 一方に開く形態。回転糸切	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙 色(5YR7/4) ③細砂粒
14	第51図 図版46	10-000044	かわらけ (2/5)	口径 7.8 底径 4.2 器高 1.7	口縁内傾 体部外反 底部糸 切後寛ナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい褐色 (7.5YR6/3) ③細砂粒
15	第51図 図版46	10-000045	かわらけ (1/4)	口径 推定12.0 底径 推定6.5 器高 3.1	左回転クロコ整形 体部に 指頭痕。底面回転糸切痕	①酸化焰 ②にぶい橙色(5YR 7/4) ③細砂粒(長石・雲母)
16	第51図 図版46	10-000046	かわらけ (完形)	口径 10.6 底径 6.4 器高 2.6	器面荒。体部外反し口縁内 傾。底面回転糸切後ナデ	①還元焰・やや軟 ②にぶい褐 色(7.5YR6/3) ③細砂粒
17	第51図 図版46	10-000047	かわらけ (1/4)	口径 推定8.8 底径 推 推5.4 器高 1.8	回転クロコ整形。底部糸切 後ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙 色(7.5YR6/4) ③細砂粒
18	第52図 図版46	10-000061	内耳鍋 (破片)	口径 推定30.6 底径 22.0 器高 18.1	口縁やや外傾し口端平。頸 部内面に段	①還元焰・普通 ②褐灰色(5 YR5/1) ③細砂粒(片岩)
19	第52図 図版46	10-000052	内耳鍋 (破片)	口径 32.0	口縁外傾。横ナデ。外面下 位に煤付着	①還元焰・やや硬 ②明緑灰色 (7.5GY8/1) ③粗砂粒(片岩)
20	第52図 図版46	10-000050	内耳鍋 (破片)	口径 27.0 器高 4.0	口縁外傾。口端平で内には み出。内耳貼付時の指ナデ	①還元焰・普通 ②灰色(5Y 5/1) ③細砂粒(片岩)
21	第52図 図版46	10-000049	内耳鍋 (1/5)	口径 15.6 器高 14.3	左回転クロコ整形。口縁端 部平。頸部くびれる	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (7.5YR6/4) ③細砂粒(片岩)
22	第52図 図版46	10-000051	内耳鍋 (破片)	口径 推定30.0	口縁外傾。端部平、外面端部 下に陵、横ナデ。内面横ナデ	①酸化焰・普通 ②暗オリーブ 色(5Y4/3) ③粗砂粒(片岩)
23	第52図 図版46	10-000066	内耳鍋 (破片)	口径 38	口縁外傾。端部平で外面端 部下に凹線。体部内面ナデ	①還元焰・普通 ②暗灰黄色 (2.5Y5/2) ③粗砂粒(片岩)
24	第52図 図版47	10-000067	内耳鍋 (破片)	口径 36.0	口縁外傾斜。端部平。端部 下に指ナデ凹線	①還元焰・やや硬 ②灰色(10 Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
25	第52図 図版47	10-000056	内耳鍋 (破片)	口径 推定30.8 底径 21.0 器高 15.1	口縁横ナデ。頸部内面に陵。 底部平底。粗造化を見る	①— ②暗灰黄色(2.5Y4/2) ③細砂粒(片岩)
26	第53図 図版47	10-000058	内耳鍋 (破片)	口径 推定30.0 底径 推定19.6 器高 15.1	口縁端部平、内にはみ出す。 脛部内耳貼付時の指ナデ	①還元焰・普通 ②灰色(5Y 5/1) ③細砂粒(片岩)
27	第53図 図版47	10-000057	内耳鍋 (破片)	口径 推定28.0	口縁横ナデ。端部平、唇部外 に出。内耳貼付時の指ナデ	①還元焰・普通 ②灰黄褐色 (10R5/2) ③細砂粒(片岩)
28	第53図 図版47	10-000053	軟質陶器擂鉢 (完形)	口径 30.9 底径 11.7 器高 12.4	左回転クロコ整形。内面強 く摩滅。口端部やや丸まる	①還元焰 ②灰色(10Y5/1) ③細砂粒
29	第53図 図版47	10-000054	軟質陶器擂鉢 (1/4)	口径 33.0 底径 10.3 器高 13.3	回転クロコ整形。口縁外面 に指頭痕残る	①還元焰・やや軟 ②灰色(7.5 Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
30	第53図 図版47	10-000062	軟質陶器擂鉢 (1/3)	口径 30.5 底径 11.0 器高 12.8	左回転クロコ整形。口縁部 縁端平。底面回転糸切	①還元焰・普通 ②灰色(7.5 Y1/4) ③粗砂粒(片岩)
31	第54図 図版48	10-000059	軟質陶器擂鉢 (2/3)	口径 推定33.6 底径 10.5 器高 12.5	片口。器面やや荒。体部5条 1単位のはっきりした節目	①酸化焰・やや軟 ②橙色(5 YR6/8) ③粗砂粒(片岩)
32	第54図 図版48	10-000060	軟質陶器擂鉢 (破片)	口径 推定32.5 底径 10.2 器高 12.9	右回転クロコ整形。内面摩 滅。口端部平	①還元焰・やや硬 ②灰色(10 Y6/1) ③細砂粒(含片岩)
33	第54図 図版48	10-000048	軟質陶器擂鉢 (2/3)	口径 推定31.9 底径 11.5×11.5 器高 13.2	左回転クロコ整形。口端部 平で内側にはみ出る	①還元焰・やや軟 ②黒褐色 (10YR3/1) ③粗砂粒(片岩)
34	第54図 図版48	10-000055	軟質陶器鉢 (破片)	口径 30.0 器高 10.0	器面荒れる。口縁やや内傾。 内面に浅い溝一条	①還元焰・やや軟 ②黄灰色 (2.5Y6/1) ③細砂粒
35	第55図 図版47	10-000068	軟質陶器火鉢 (胴部破片)	残存 7.4×5.45	口縁外面に雷文を付する	①— ②黄灰色(2.5Y4/1) ③細 砂粒
36	第55図 図版47	10-000069	軟質陶器丸型火鉢 (脚部破片)	残存 10.8×5.0 脚部高 2.6	脚貼付時の指ナデ、ケズリ	①還元焰・やや軟 ②灰色(7.5 Y4/1) ③粗砂粒(片岩)

第6章 東平井官正前遺跡の調査

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
37	第55図 図版48	10-000070	軟質陶器香炉 (底部・脚部)	残存 8.9×8.9 脚部高 1.1	左回転クロク整形。回転糸切後三脚貼付時のナデ	①還元焰・普通 ②褐色(10YR5/1) ③細砂粒(長石・雲母)
38	第55図 図版48	10-000071	軟質陶器角型火鉢 (体部破片)	残存 7.5×6.0 体高 4.5	底部外面縁部面取。内面底縁部指ナデ	①- ②明赤褐色(2.5YR5/8) ③細砂粒(片岩)
39	第55図 図版48	10-000073	軟質陶器角型火鉢 (底部・脚部)	残存 8.2×7.95 脚部高 4.5	底部上面指ナデ。脚部ケズリによる面取	①還元焰・やや軟 ②灰色(N5/) ③細砂粒(片岩)
40	第55図 図版48	10-000065	須恵器甕 (底部・脚部)	底径推定17.0×16.9 脚部高 2.7	脚有段。底部底面右回転クロク整形・上面煤付着痕	①還元焰・やや軟 ②赤灰色(2.5YR4/1) ③細砂粒(片岩)
41	第55図 図版48	10-000072	天目茶碗 (底部付近)	残存高 3.2	施釉陶器。高台削り出。	②赤黒色(2.5YR1.7/1) 瀬戸・美濃系。14・15世紀か
42	第55図 図版48	10-000074	青磁碗 (破片)	残存 4.9×2.4	口縁～頸部釉やや厚	②オリーブ灰色(10Y6/2) 中国明代(14世紀か)
43	第55図 図版48	10-000075	青磁皿 (破片)	残存 4.75×3.75	—	中国明代(14・15世紀)
44	第55図 図版49	10-000063	女瓦(平瓦) (破片)	残存 12.0×11.4 厚み 2.6	凸面ナデ調整。凹面布目痕。縁部窪調整	①還元焰・やや軟質 ②にぶい橙色(7.5YR7/4) ③粗砂粒(片岩)
45	第55図 図版49	10-000064	男瓦(丸瓦) (破片)	残存 12.4×11.1 厚み 2.5	凸面ナデ調整。凹面糸切り痕残る	①還元焰・軟質 ②灰黄色(2.5Y7/2) ③細砂粒
46	第55図 図版49	10-000076	鍍瓦(軒丸瓦) (縁部破片)	残存 9.2×3.6×2.1	周縁に沿って連珠文が見られる	①還元焰・軟質 ②浅黄褐色(10YR8/4) ③細砂粒
47	第55図 図版49	10-000077	鍍瓦(軒丸瓦) (中央部破片)	残存 7.0×5.2×1.9	右回りの巴文が見られる。尾は長いものと判断される	①還元焰・軟質 ②浅黄褐色(10YR8/3) ③細砂粒
48	第56図 図版49	20-000008	砥石	長さ 97 幅 33 厚み 21 重量 80g	ノミ状の形態で、表裏・左右に計5面の研磨面を持つ	石材：砥沢石
49	第56図 図版49	20-000009	砥石 (欠損品)	長さ 残存74 幅 35 厚み 25 重量 85g	ノミ状に近い形態で、表裏左右先端に研磨面6面	石材：砥沢石
50	第56図 図版49	20-000010	転用砥石 (両端欠損)	長さ 69 幅 37 厚み 34 重量 60g	表裏と一方の側面に研磨面を持つ	陶器甕口縁転用の砥石
51	第56図 図版49	20-000011	砥石 (欠損品)	長さ 残存50 幅 残存25 厚み12 重量20g	表裏と一方の側面に研磨面を持つ	石材：ホルンフェンス
52	第56図 図版49	20-000012	砥石 (欠損品)	長さ 14.5 幅 7.0 厚み 2.4 重量 400g	表裏と一方の側面に研磨面。一方の縁面に切斷・研磨痕	石材：珪質頁岩
53	第56図 図版49	20-000014	転用砥石	長さ 151 幅 147 厚み 16 重量 360	板碑の転用品。一辺の縁部研磨	石材：片岩
54	第56図 図版49	20-000015	転用砥石	長さ 117 幅 107 厚み 18 重量 310	板碑の転用品。両側縁部を使用	石材：片岩
55	第56図 図版49	20-000016	転用砥石	長さ 113 幅 70 厚み 16 重量 150	板碑の転用品。一片の縁部研磨	石材：片岩
56	第56図 図版49	20-000017	転用砥石	長さ 126 幅 120 厚み 15 重量 370g	板碑の転用品。一片の縁部研磨	石材：片岩
57	第56図 図版49	20-000013	茶臼下臼部 (欠損品)	残存(径 13.4×4.1 厚み 64 重量 340g)	欠失部分多く詳細不詳	石材：粗粒安山岩
58	第57図 図版50	20-000018	石臼上臼部 (欠損品)	残存(径 13.2×20.8 厚み95 重量2,500g)	挽手穴は方形	石材：粗粒安山岩
59	第57図 図版50	20-000019	石臼上臼部 (欠損品)	残存(径 15.5×12.4 厚み12.4 重量950g)	挽手穴は方形。座は一重の円	石材：粗粒安山岩
60	第57図 図版50	20-000020	石臼上臼部 (欠損品)	残存(径 15.5×12.4 厚み12.4 重量950g)	底面くぼむ	石材：牛伏砂岩
61	第57図 図版51	20-000021	板碑 (上半部)	長さ 残存379 幅 195 厚み25 重量2,950g	主尊・紀年銘は滅失のため不明	石材：黒色片岩
62	第58図 図版51	20-000022	板碑 (上半部)	長さ 残存393 幅 残存240 厚み29 重量4,120g	主尊キリーク。浅い竹彫りの蓮座。二条線・紀年銘不詳	石材：黒色片岩15世紀の創立か
63	第58図 図版51	20-000023	板碑 (上半部)	長さ 残存376 幅 197 厚み 15 重量 2,440g	碑面の摩滅著しく、主尊・紀年銘不明	石材：緑色片岩
64	第58図 図版50	20-000024	板碑 (完形)	長さ 448 幅 146 厚み 24.5 重量 3,100g	小型板碑。碑面の摩滅著しく、主尊・紀年銘不明	石材：緑色片岩
65	— 図版54	10-000105	軟質陶器鉢 (1/10)	残存 14.0×7.3	口縁内傾し、口唇部内側にはみ出る	①還元焰・普通 ②灰色(10Y5/1) ③細砂粒
66	— 図版54	10-000106	軟質陶器鉢 (口縁～頸部破片)	残存 9.8×12.6	口縁内湾し、口唇部内側に出る	①還元焰・やや硬 ②灰色(10Y5/1) ③細砂粒

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
67	— 図版54	10-000107	軟質陶器片口土器 (口縁～頸部破片)	残存 8.7×7.0	口唇部内側に引き出される。片口部指頭痕残る	①還元焰・硬 ②灰色(10Y5/1) ③細砂粒(片岩)
68	— 図版54	10-000108	軟質陶器鉢 (口縁～頸部破片)	残存 9.0×7.6	口唇部内湾	①酸化焰・やや軟 ②にぶい黄 橙色(10YR5/3) ③粗砂粒(片 岩)
69	— 図版54	10-000109	軟質陶器擂鉢 (腰～底部破片)	残存 13.0×8.7	外面の一部に煤付着。5本 1組の卸目が弧状に入る	①酸化焰・普通 ②にぶい黄橙 色(10YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
70	— 図版54	10-000110	軟質陶器擂鉢 (腰部破片)	残存 17.6×8.3	8本1組の卸目が若干弧状 に入る	①酸化焰・やや硬 ②にぶい黄 橙色(10YR5/3) ③粗砂粒
71	— 図版54	10-000111	内耳鍋 (1/10)	残存 14.5×13.1	口縁やや膨らむ。端部平 口 唇部外に若干尖る	①酸化焰・やや硬 ②灰黄褐色 (10YR5/2) ③粗砂粒
72	— 図版54	10-000112	内耳鍋 (口縁～体部破片)	残存 17.7×9.6	全体外面に煤付着。口縁端 部平に近い	①還元焰やや軟 ②褐灰色(10 YR6/1) ③細砂粒(長石)
73	— 図版54	10-000113	内耳鍋 (口縁部破片)	残存 18.4×6.5	口端部平。口唇部外にはみ 出る	①酸化焰・普通 ②にぶい黄橙 色(10YR7/4) ③細砂粒(長石)
74	— 図版54	10-000114	軟質陶器鉢 (口縁部破片)	残存 19.5×5.9	口縁端部平。若干内側には み出る。内外面ナデ	①還元焰・普通 ②灰色(5Y5/ 1) ③細砂粒(片岩)
75	— 図版54	10-000115	軟質陶器鉢 (腰～底部破片)	残存 11.2×7.0	底部やや丸底気味	①還元焰・やや硬 ②黄灰色 (2.5YR5/1) ③細砂粒
76	— 図版54	10-000116	内耳鍋 (腰～底部破片)	残存 12.7×3.6×5.3	被熱の痕跡。平底。ナデ調 整。(15世紀後半・乗付)	①還元焰・普通 ②黄灰色(2.5 Y6/1) ③細砂粒(片岩)
77	— 図版54	10-000117	内耳鍋 (腰～底部破片)	残存 14.3×6.7	底部被熱痕有り。外面腰部 煤付着	①酸化焰・普通 ②にぶい橙 色(7.5YR6/4) ③細砂粒(片岩)
78	— 図版54	10-000118	内耳鍋 (底部破片)	残存 17.2×5.1	底部被熱痕やや強い。腰部 外面煤付着	①酸化焰・普通 ②赤褐色(2.5 YR4/6) ③細砂粒(片岩)
79	— 図版54	10-000119	軟質陶器片 (内耳鍋底部片か)	残存 3.3×2.9	平底。弧状の篋書き土師質。	①酸化焰・普通 ②明赤褐色 (2.5YR5/6) ③細砂粒
80	— 図版54	10-000120	内耳鍋 (底部破片)	残存 9.4×3.8	強い被熱の痕跡あり。平底	①酸化焰・やや軟 ②にぶい褐 色(7.5YR5/3) ③粗砂粒
81	— 図版54	10-000121	内耳鍋 (底部破片)	残存 22.0×4.0	全体底部に被熱痕有り。底 部平底。内面回転方向のナデ	①還元焰やや硬 ②灰白色(10 YR7/1) ③細砂粒(片岩)
82	— 図版54	10-000122	内耳鍋 (底部破片)	残存 24.2×8.8	全体底部に被熱痕有り。平 底。内面左回転方向のナデ	①還元焰やや硬 ②褐灰色(10 YR6/1) ③細砂粒(長石)
83	— 図版53	10-000123	内耳鍋 (口縁～頸部破片)	残存 12.3×8.5	口端部平。僅かに口唇外側 にはみ出。耳貼付時のナデ	①還元焰・普通 ②褐灰色(10 YR5/1) ③細砂粒(片岩)
84	— 図版53	10-000124	内耳鍋 (口縁～頸部破片)	残存 18.0×9.4	口縁端部平。口唇部若干両 側へはみ出る。	①還元焰・普通 ②褐灰色(10 YR6/1) ③細砂粒(片岩)
85	— 図版53	10-000125	内耳鍋 (1/6)	残存 19.8×12.9	全体内外面上半を除き煤の 痕跡。口端部平に近い	①還元焰・普通 ②褐灰色(10 YR6/1) ③細砂粒(片岩)
86	— 図版53	10-000126	内耳鍋 (口縁～体部破片)	残存 19.5×9.5	体部外面下位に煤付着	①酸化焰・やや硬 ②橙色(7.5 YR6/6) ③細砂粒
87	— 図版53	10-000127	内耳鍋 (口縁～頸部破片)	残存 12.4×10.6	外面一部に煤付着。口縁端 部平。口唇外にはみ出す	①酸化焰・普通 ②灰黄色(2.5 Y6/2) ③細砂粒(雲母)
88	— 図版53	10-000128	内耳鍋 (口縁～頸部破片)	残存 16.3×10.2	口端部平。口唇若干外へ引 き出す。左方向への篋ナデ	①還元焰・普通 ②褐灰色(7.5 YR6/1) ③細砂粒(片岩)
89	— 図版53	10-000129	内耳鍋 (口縁～頸部破片)	残存 11×9.6	頸部く字状。口縁直立気味 口端部。内耳欠。頸部ナデ	①還元焰・普通 ②褐灰色(7.5 YR4/1) ③細砂粒
90	— 図版53	10-000130	内耳鍋 (口縁～頸部破片)	残存 15.2×8.3	外面に一部煤付着。口縁端 部弱い凹をもつ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい褐 色(7.5YR6/3) ③細砂粒(片 岩)
91	— 図版53	10-000131	内耳鍋 (口縁～体部破片)	残存 18.7×13.0	口縁やや内湾ぎみに開く。 口端部平。	①還元焰・普通 ②褐灰色(10 YR4/1) ③粗砂粒(片岩)
92	— 図版53	10-000132	内耳鍋 (口縁～頸部破片)	残存 19.7×10.7	口縁開く。外面煤付着	①酸化焰・普通 ②灰黄色(2.5 Y6/2) ③細砂粒(片岩)
93	— 図版53	10-000133	内耳鍋 (口縁～体部破片)	残存 18.7×15.5	口縁やや短く外反。口端部 平で口唇部内側にはみ出る	①還元焰・やや軟 ②にぶい黄 褐色 ③粗砂粒(片岩)
94	— 図版53	10-000134	内耳鍋 (口縁～体部破片)	残存 20.3×12.7	口縁多少内湾気味。口端部。 口唇部若干内へはみ出る	①還元焰・やや軟 ②にぶい黄 橙色(10YR5/3) ③細砂粒(片 岩)
95	— 図版53	10-000135	内耳鍋 (口縁～頸部破片)	残存 15.9×14.3	口縁部の開き弱。口端部平。 口唇部外にはみ出る	①還元焰・やや軟 ②灰黄褐色 (10YR5/2) ③粗砂粒(片岩)

第6章 東平井官正前遺跡の調査

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
96	— 図版53	10-000136	内耳鍋 (口縁～頸部破片)	残存 18.7×12.3	体部直立。口縁部内湾気味に開、口端部平。体部ケズリ	①還元焰・やや軟 ②褐灰色(10YR4/1) ③細砂粒(片岩)
97	— 図版52	10-000137	内耳鍋 (口縁破片)	残存 23.3×4.8	口端部外側にはみ出る。内外面ナデ調整。被熱痕あり	①還元焰・普通 ②褐灰色(10YR4/1) ③細砂粒(片岩)
98	— 図版52	10-000138	内耳鍋 (腰～底部破片)	残存 17.2×6.0×2.3	腰部煤付着。平底。ナデ調整	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5YR5/6) ③細砂粒(石英)
99	— 図版52	10-000139	内耳鍋 破片 (腰～底部破片)	残存 20.0×6.5×2.8	腰部煤付着。平底。ナデ調整	①還元焰・やや硬質 ②明赤褐色(5YR6/5) ③細砂粒(片岩)
100	— 図版52	10-000140	かわらけ (1/6)	残存 4.8×6.5	やや器面荒れ、外反気味に立ち上がり、口縁若干内湾	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR6/6) ③粗砂粒(石英)
101	— 図版53	10-000141	須恵器壺 (頸部)	残存 8.5×5.5	三角突帯。叩目消す	①還元焰硬 ②灰色(10Y5/1) ③粗砂粒(石英)
102	— 図版53	10-000142	女瓦(平瓦) (破片)	残存 13.3×9.2	凸面ナデ調整。凹面布目痕縁部ナデ調整	①酸化焰・普通 ②にぶい黄橙色(10YR7/4) ③細砂粒(片岩)
103	— 図版53	10-000143	長頸壺 (肩部破片)	残存 4.5×6.2	肩部ヘラ刻み、沈線2条	①還元焰普通 ②褐灰色(10YR6/1) ③粗砂粒(片岩)
104	— 図版53	10-000144	軟質陶器香炉 (口縁～体部破片)	残存 3.5×6.8	膨らみ乍ら立ち上がり、口縁内湾、外面丁寧な磨き	①還元焰・普通 ②褐灰色(10YR5/1) ③細砂粒
105	— 図版52	10-000145	かわらけ (1/6)	残存 6.5×5.0	器面やや荒れ、体部外反気味に立ち上がる。	①酸化焰・やや軟 ②橙色(5YR6/6) ③細砂粒(片岩)
106	— 図版53	10-000146	内耳鍋 (口縁破片)	残存 20.8×45.0	口端部平。口唇やや外部にはみ出る。	①還元焰・やや軟 ②灰黄褐色(10YR4/2) ③細砂粒(長石)
107	— 図版53	10-000147	盤 (脚部破片)	残存 7.6×7.5×5.1	坏底部内面指ナデ、脚部内面貼付時の割れ	①還元焰・硬 ②黄灰色(2.5Y5/1) ③粗砂粒(片岩)
108	— 図版53	10-000148	土師器高坏 (坏底部～脚部片)	残存 5.4×4.0×6.5	坏身底部～脚部半載。脚上部にしぼり	①酸化焰・軟 ②橙色(7.5YR6/6) ③細砂粒
109	— 図版54	20-000028	転用砥石	長8.5 幅4.0 厚1.5 重量80g	板碑の転用品。縁部に3.5cm長の研磨面を持つ	石材：黒色片岩
110	— 図版54	20-000029	転用砥石	長12.2 幅8.5 厚3.0 重量310g	板碑の転用品。縁部に6.5cm長の研磨面を持つ	石材：黒色片岩
111	— 図版54	20-000030	転用砥石	長13.8 幅9.55 厚2.0 重量330g	板碑の転用品。縁部に2.1cm長の研磨面を持つ	石材：黒色片岩
112	— 図版54	20-000031	転用砥石	長12.4 幅10.55 厚2.7 重量470g	板碑の転用品。縁部に2.3cm長の研磨面を持つ	石材：雲母石英岩
113	— 図版54	20-000032	転用砥石	長11.3 幅8.0 厚2.2 重量270g	板碑の転用品。縁部に3.9cm長の研磨面を持つ	石材：雲母石英岩
114	— 図版53	40-000001	スラグ	縦8.6 横9.4 高3.5 重量310g	—	鉄分多。
115	— 図版53	40-000002	スラグ	縦4.3 横6.15 高2.4 重量60g	—	—
116	— —	10-000149	軟質陶器香炉 (口縁～体部破片)	残存 6.8×3.5	口縁部内湾する。口縁部やや尖る	①還元焰・普通 ②灰白色(7.5Y7/1) ③細砂粒(雲母)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
117	11-000091	かわらけ	73	650g		134	11-000117	内耳鍋	44	270	
118	11-000092	かわらけ	32	160		135	11-000118	内耳鍋	18	550g	
119	11-000094	内耳鍋体部	9	270		136	11-000119	内耳鍋	100	1800	
120	11-000096	かわらけ体部	8	20		137	11-000120	内耳鍋	163	2900	
121	11-000097	内耳鍋底部	8	40		138	11-000121	内耳鍋	136	2700	
122	11-000101	かわらけ	4	60		139	11-000122	内耳鍋	44	1050	
123	11-000103	埴輪	1	100		140	11-000123	内耳鍋	10	180	
124	11-000104	軟質陶器	2	10		141	11-000124	内耳鍋	4	180	
125	11-000105	瓦	4	100		142	11-000125	内耳鍋	11	310	
126	11-000106	鉢	5	300g		143	11-000126	内耳鍋	28	480	
127	11-000110	内耳鍋体部	218	4250		144	11-000127	内耳鍋	240	3730	
128	11-000111	内耳鍋	93	1850		145	11-000128	内耳鍋	240	3400	
129	11-000112	軟質陶器片	67	1250		146	11-000129	内耳鍋	240	2500	
130	11-000113	内耳鍋	19	400		147	11-000130	内耳鍋	285	2950	
131	11-000114	内耳鍋	225	1780		148	11-000131	内耳鍋	200	3740	
132	11-000115	内耳鍋	3	40		149	11-000132	内耳鍋	200	2350	
133	11-000116	内耳鍋	9	220		150	11-000133	内耳鍋	219	2480	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
151	11-000137	瓦	2	240	
152	11-000138	土釜	18	1200	
153	11-000139	軟質陶器鉢	9	990	
154	11-000140	軟質陶器擂鉢	4	300	
155	11-000142	羽釜	2	50	
156	11-000144	軟質陶器	9	400	
157	11-000145	内耳鍋	3	120	
158	11-000146	内耳鍋	3	120	
159	11-000147	壁体か	5	230	
160	11-000156	かわらけ	5	40	
161	11-000158	軟質陶器擂鉢	10	380	
162	11-000159	軟質陶器鉢	5	360	
163	11-000160	瓦	8	800	
164	11-000162	壁体か	63	1820	
165	11-000166	陶器	8	220g	
166	11-000167	羽釜	1	60	
167	11-000169	軟質陶器	38	2340	
168	11-000172	軟質陶器擂鉢	6	92	
169	11-000173	羽釜	3	200	
170	11-000175	埴輪	3	160	
171	11-000176	瓦	19	1340	
172	11-000177	壁体か	37	500	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
173	11-000178	内耳鍋	103	3130	硬質、煤付着
174	11-000179	内耳鍋墨硬	105	2790	
175	11-000180	内耳鍋硬	40	1130	
176	11-000181	内耳鍋口縁	175	3880	
177	11-000182	内耳鍋底部	114	3100	
178	11-000183	内耳鍋底部	172	1600	
179	11-000184	内耳鍋	57	1600	
180	11-000213	内耳鍋	274	4000	
181	11-000214	内耳鍋	105	2500	
182	11-000215	内耳鍋	240	3800	
183	11-000216	内耳鍋	250	3250	
184	11-000217	内耳鍋	202	2200	
185	11-000220	軟質陶器擂鉢	1	100	
186	11-000221	内耳鍋	50	800	
187	11-000222	内耳鍋	4	280	
189	11-000223	内耳鍋	27	540	
190	11-000224	内耳鍋	60	1570	
191	11-000245	内耳鍋体部	8	140	
192	11-000246	内耳鍋口縁	1	5	
193	11-000247	内耳鍋頸部	6	40	
194	11-000248	内耳鍋底部	2	20	
195	11-000165	かわらけ	20	380	

7 2号井戸出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第59図 図版52	10-000078	内耳鍋 (6/8)	—	体部上方へのケズリ(?)後 右方向横位の筥ナデ	①還元焰・やや軟 ②にぶい黄 褐色(10YR4/3) ③細砂粒 (片岩)

8 1号溝出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	— 図版54	10-000103	土師器甕 (破片)	残存8.9×4.8	内面煤付着、回転底部糸切 り痕、内面ナデ	①酸化焰・硬 ②明赤褐色(2.5 YR6/6) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000071	内耳鍋	1	10g	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000072	須恵器甕	3	20	

9 2号溝出土遺物

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000073	土師器甕	2	60g	

10 3号溝出土遺物

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000074	陶器擂鉢	1	100g	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000075	陶器甕	1	40	

11 4号溝出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	— 図版54	10-000104	擂鉢 (1/6)	残存13.2×12.7	口唇部に下方に引き出され る。口端指ナデ	①酸化焰・やや硬 ②橙色(7.5 YR6/6) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000076	土師器甕	2	50g	
3	11-000077	軟質陶器土釜	1	80	
4	11-000078	内耳鍋	3	80	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
5	11-000080	須恵器甕	3	210g	
6	11-000081	土師器坏	1	20	
7	11-000082	瓦	1	140	

12 5号溝覆土

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000083	土師器甕	5	30g	
2	11-000084	土師質土器甕	1	60	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000085	須恵器甕	2	80g	

第6章 東平井官正前遺跡の調査

13 6号溝覆土

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000191	内耳鍋体部	3	60g	
2	11-000192	埴輪	1	80	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000193	土師器	2	40g	
4	11-000086	軟質陶器揃鉢	1	60	

14 7号溝出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第64図 図版52	10-000079	内耳鍋 (破片)	口径 推定30.2	口唇外に尖る。内耳貼付時の指ナデ。内耳外面指頭痕	①酸化焰・やや硬 ②暗灰黄色(2.5Y4/2) ③細砂粒(片岩)
2	第64図 図版52	20-000025	砥石 (欠損品)	長さ 残存91 幅 47 厚み 18.5 重量 100g	パチ様の平面形態を呈する 切断部を除く5面に研磨面	石材：砥沢石

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000149	内耳鍋	10	200g	
4	11-000150	須恵器甕	5	90	
5	11-000151	揃鉢	2	40	
6	11-000152	土師器甕	2	20	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
7	11-000153	内耳鍋	2	40g	
8	11-000154	埴輪	3	20	
9	11-000148	内耳鍋	3	120	

15 8号溝出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第65図 図版52	10-000080	かわらけ (完形)	口径 8.2 底径 5.5 器高 1.8	左回転クロコ整形。底面回転糸切後指ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(5R6/6) ③細砂粒(破片岩)
2	第65図 図版51	20-000026	石臼上臼部 (破片)	残存 14.8×17.7×7.9 重量 1900g	座は一重の円	石材：粗粒安山岩
3	— 図版54	10-000102	内耳 (耳部)	残存 10.0×8.2	口縁く字に開く、口唇部下方にはみ出す。	①酸化焰・普通 ②灰色(7.5Y6/1) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000087	土師器甕	6	60g	
5	11-000088	土師質土器	1	80	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
6	11-000089	内耳鍋口縁	7	250g	
7	11-000090	内耳鍋体部	28	410	

16 2土坑出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	— 図版52	10-000100	甕 (破片)	残存8.6×8.4	全体内面に輪積痕残る。外面ケズリ後ナデ、内面ナデ	①還元焰・硬 ②暗灰色(N3/) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000209	土師器甕	2	35g	取上番号：1,2

17 13号土坑覆土

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000210	土師器甕	1	10g	

18 その他各地区出土遺物

① 6 区

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
7	11-000225	縄文土器	1	20g	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
8	11-000190	土師器か	9	50g	火葬土坑周辺

② 7 区

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
9	11-000226	須恵器甕	1	80g	試掘トレンチ
10	11-000227	土師器	2	20	試掘トレンチ

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
11	11-000228	縄文土器	1	40g	試掘トレンチ

③ 8 区

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
包含層						
1	第71図 図版52	10-000081	かわらけ (1/2)	口径 推定8.2 底径5.1 ×5.1 器高 推定2.35	全体内外面煤痕残。口縁多 少外反。底部右回転糸切り	①酸化焰・やや硬 ②褐灰色(5 YR4/1) ③細砂粒
2	第71図 図版52	10-000082 (1/3)	須恵器坏	底径6.8	底部回転糸切り後竈ナデ	①還元焰・やや軟 ②橙色(7.5 YR6/6) ③細砂粒(片岩)
3	第71図 図版52	10-000083	施釉陶器 古瀬戸 瓶子(脛部破片)	—	回転クロ整形 外面施釉	①還元焰 ②灰オリーブ色(7.5 Y5/3) ③精製砂 中世
5	第71図 図版52	20-000027	打製石斧	長9.9 幅4.8 厚1.8	分銅型	石材：硬質泥岩

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2号住居					
12	11-000016	縄文土器	9	200g	取上番号：4,5,6, 19,28,33,113, 118,122
15	11-000021	縄文土器	9	60	カマド
16	11-000028	縄文土器	2	10	掘り方
17	11-000041	縄文土器	16	160	
3号住居					
18	11-000053	縄文土器	9	140	取上番号：20,23
19	11-000060	内耳鍋	1	10g	取上番号：7
20	11-000054	埴輪	17	240	
21	11-000052	軟質陶器	2	60	取上番号：20
4号溝					
22	11-000079	縄文土器	5	60	
23	11-000093	土師甕口縁	18	80	
24	11-000095	土師器	15	20	
25	11-000098	土師質塊	16	50	
26	11-000099	土師器高坏	1	10	
27	11-000100	土師質塊	4	30g	
28	11-000102	縄文土器	6	330	
29	11-000107	須恵器甕	10	600	
30	11-000108	須恵器甕	11	900	
31	11-000109	須恵器甕	55	3400	
32	11-000134	須恵器甕	53	3520	
33	11-000135	須恵器甕	25	1900	
34	11-000136	土師器	24	1170	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
35	11-000141	須恵器甕	13	510	
36	11-000143	土師器甕	5	230	
37	11-000155	須恵器甕	33	2500	
38	11-000157	土師器	37	160	
39	11-000161	須恵器甕	10	1640	
40	11-000163	須恵器坏	7	50	
41	11-000164	須恵器	3	180	
42	11-000168	須恵器壺	1	40	
43	11-000171	須恵器甕	59	3900	
44	11-000170	土師器	48	280g	
45	11-000174	縄文土器	2	80	
46	11-000185	土師器	9	80	
47	11-000186	須恵器甕	6	500	
48	11-000189	縄文土器	1	80	
49	11-000219	土師坏	1	20	
2号井戸					
50	11-000188	埴輪	4	50	
そ の 他					
51	11-000232	須恵器甕	2	30	
52	11-000235	磁器	1	5	グリッド
53	11-000231	陶器	1	20	グリッド
54	11-000230	土師器	3	20	トレンチ
55	11-000229	縄文土器	8	190	トレンチ
56	11-000233	内耳鍋	4	30	トレンチ
57	11-000236	縄文土器	3	30	トレンチ
58	11-000234	瓦	1	40	トレンチ

④ 9 区

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
包含層						
4	第71図 図版52	10-000084	須恵器椀 (1/5)	推定口径13.1 底径7.0 器高5.2	左回転クロ整形。腰部張 張る	①- ②灰色(6/1) ③細砂粒 (石英)
M-12グリッド No 1						
6		10-000101	羽釜 (破片)	残存6.4×8.5	口縁多少内傾。口唇外へ引。 横位のナデ。鈔やや薄	①酸化焰やや硬 ②灰色(7.5 Y4/1) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
第3ピット群-23号ピット					
59	11-000211	須恵器?	1	100g	
第3ピット群-40号ピット					
60	11-000212	土師器甕	1	40	
K-10グリッド					
61	11-000205	土師器坏	5	10	取上番号：1,2,3
62	11-000201	土師器甕口縁	1	10	取上番号：1
L-10・M-11グリッド					
63	11-000202	土師器甕体部	9	100	取上番号：1,3, 4,8,13,30,31

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
L-10グリッド					
64	11-000195	縄文土器	2	100	
65	11-000196	土師器甕体部	20	100	
66	11-000194	土師器坏	1	20	
67	11-000198	羽釜口縁	1	50	
68	11-000199	須恵器甕体部	33	560	
69	11-000200	内耳鍋	1	20	
L-10～11グリッド					
70	11-000204	縄文土器	2	100	取上番号：5,7
71	11-000207	須恵器甕	2	10g	取上番号：7

第6章 東平井官正前遺跡の調査

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
L-21グリッド					
72	11-000203	土師器羽釜	1	40	取上番号：1
M-11グリッド					
73	11-000206	土師器甕	1	10	取上番号：2
L-14・L-10グリッド					
74	11-000208	須恵器甕	26	500	取上番号：1,2,3,4,5,6,9,12,15,16,17,18
M-3グリッド					
75	11-000197	土師器甕口縁	1	100	

④ 10区（トレンチ）

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
	11-000243	土師器	1	30	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
トレンチ					
76	11-000239	内耳鍋	1	20	
77	11-000240	内耳鍋	2	50	
78	11-000241	土師器	10	70	
79	11-000242	縄文土器	2	40	
そ の 他					
80	11-000237	縄文土器	1	30	
81	11-000238	須恵器甕	3	90	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
	11-000244	縄文土器	1	10	





10-31-3 9区全景 西から



10-30-9 8・9区全景 東から



10-36-7 1号住 西から



01-3-3 1号住南北セクション 西から



01-5-14 1号住カマド



01-7-19 1号住貯蔵穴 西から



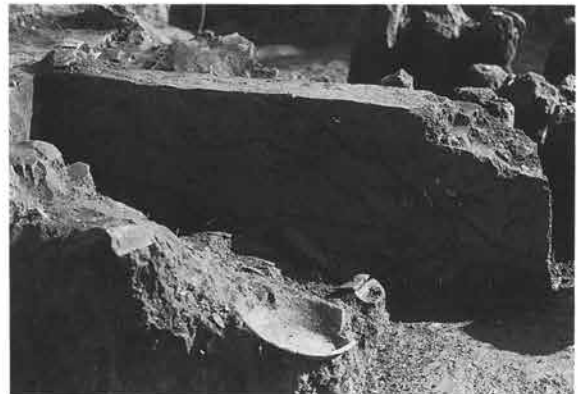
01-12-28 1号住掘り方 西から



10-25-8 2号住 西から



01-3-17 2号住セクション 西から



01-3-27 2号住カマドセクション 南から



10-26-1 2号住遺物出土状態 西から



01-10-3 2号住カマド 西から



10-29-2 3号住 北から



10-29-10 3号住遺物出土状態



01-29-8 3号住遺物出土状態



10-36-1 3号住掘り方 北から



10-26-4 4号住 西から



01-4-35 4号住カマドセクション 西から



01-8-2 4号住カマド 西から



01-16-14 4号住掘り方 西から



10-34-7 5号住



10-35-8 5号住掘り方



01-15-18 5号住カマド



01-16-19 5号住カマド掘り方



10-24-1 1・2号溝 北から



10-25-3 3号溝 南から



10-28-3 4号溝 北から



01-10-27 6号溝 南から



01-19-25 7・9号溝 北から



01-19-23 8号溝 東から



01-7-11 1号土坑



01-10-20 2号土坑



01-9-34 3号土坑



01-9-31 4号土坑



01-11-15 5号土坑



01-16-24 6号土坑



01-11-13 7号土坑



01-14-22 8号土坑



01-14-18 9号土坑



01-15-11 11号土坑



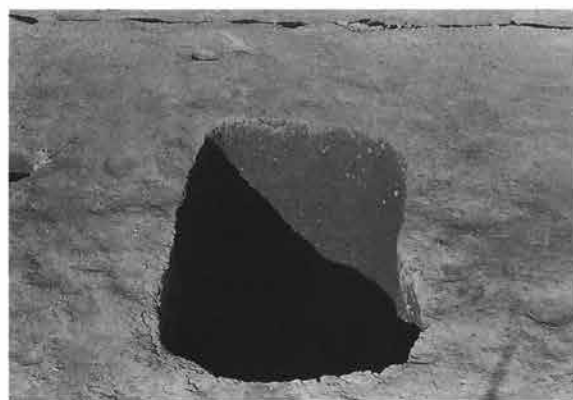
01-15-13 12号土坑



01-15-8 13号土坑



01-1-30 16号土坑



01-4-3 17号土坑



01-4-10 20号土坑



01-15-32 23号土坑



10-27-5 1号井戸



01-17-25 2号井戸



01-6-13 1号井戸調査風景



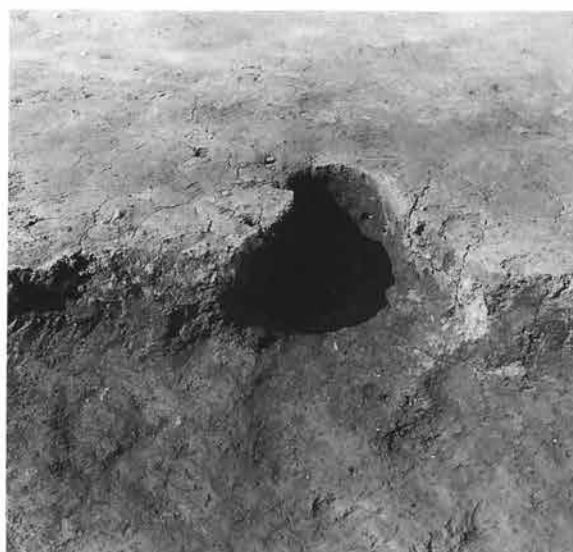
01-6-31 2号井戸セクション



01-23-22 火葬土坑



01-22-5 火葬土坑



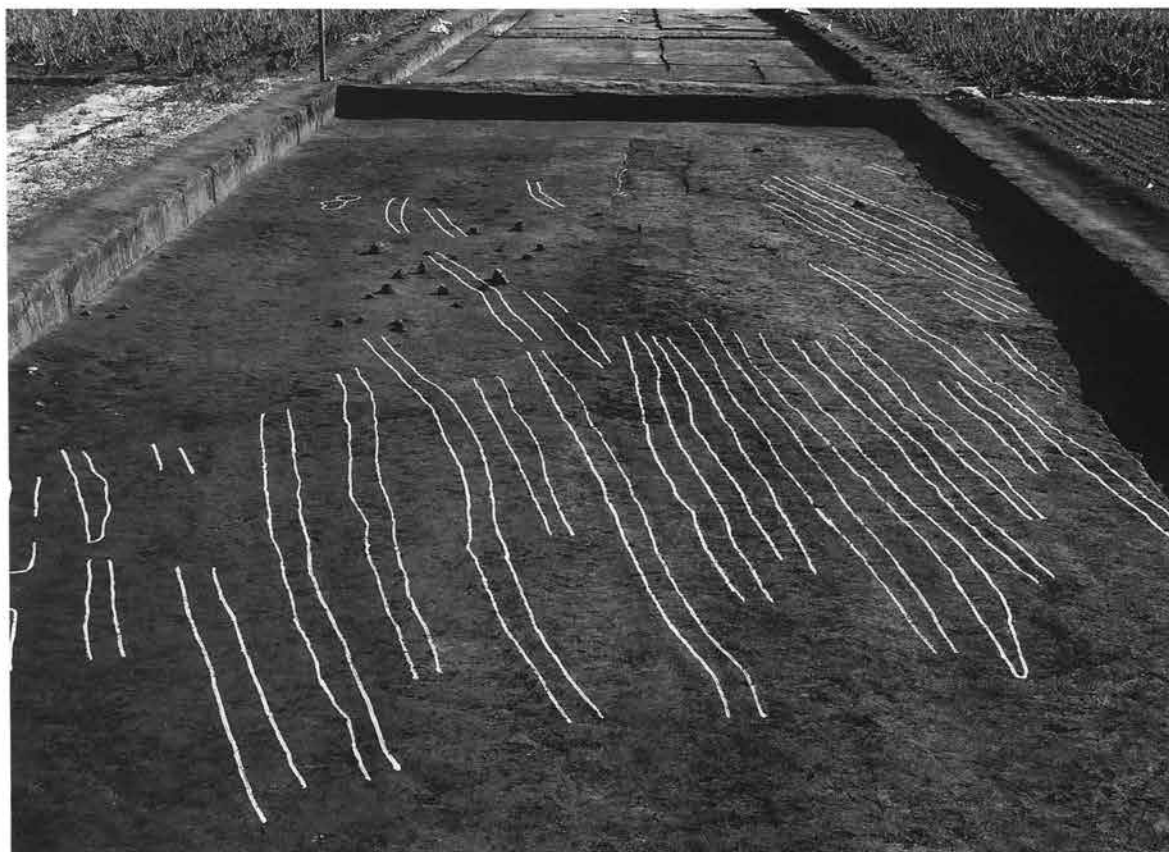
01-22-6 火葬土坑



01-23-24 火葬土坑



10-32-6 畠 東から



10-27-2 畠 西から



1号住-1



1号住-2



2号住-1



2号住-7



2号住-2



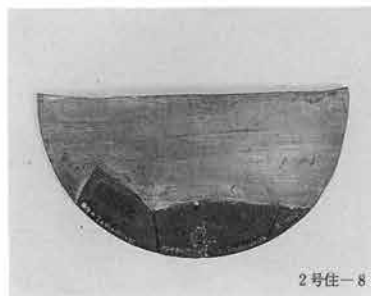
2号住-3



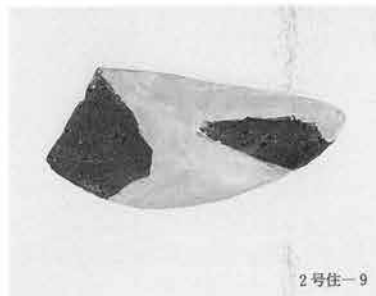
2号住-4



2号住-5



2号住-8



2号住-9



2号住-6



2号住-11



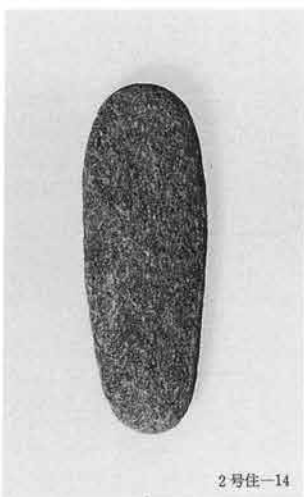
2号住-10



2号住-12



2号住-13



2号住-14



2号住-15



3号住-1



3号住-2



3号住-3



3号住-4



3号住-5



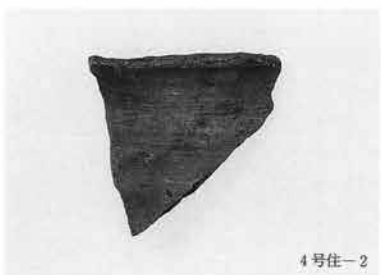
3号住-6



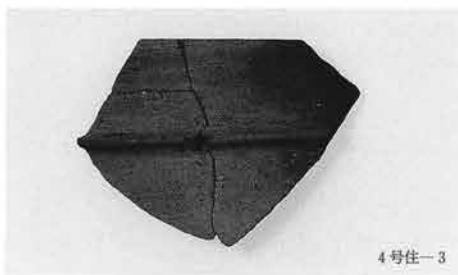
3号住-7



4号住-1



4号住-2



4号住-3



3号住-8



5号住-1



5号住-2



5号住-3



5号住-4



5号住-5



5号住-9



5号住-6



5号住-7



5号住-8



1号井戸-1



1号井戸-2



1号井戸-3



1号井戸-4



1号井戸-5



1号井戸-6



1号井戸-7



1号井戸-8



1号井戸-9



1号井戸-10



1号井戸-11



1号井戸-12





1号井戸—24



1号井戸—25



1号井戸—26



1号井戸—28



1号井戸—27



1号井戸—29



1号井戸—35



1号井戸—36



1号井戸—30





1号井戸-44



1号井戸-46



1号井戸-47



1号井戸-45



1号井戸-50



1号井戸-52



1号井戸-49



1号井戸-51



1号井戸-48



1号井戸-55



1号井戸-54



1号井戸-53



1号井戸-56



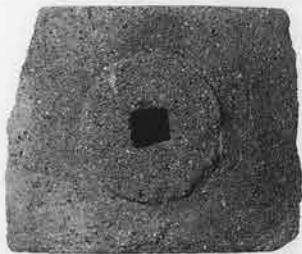
1号井戸-57



1号井戸-58



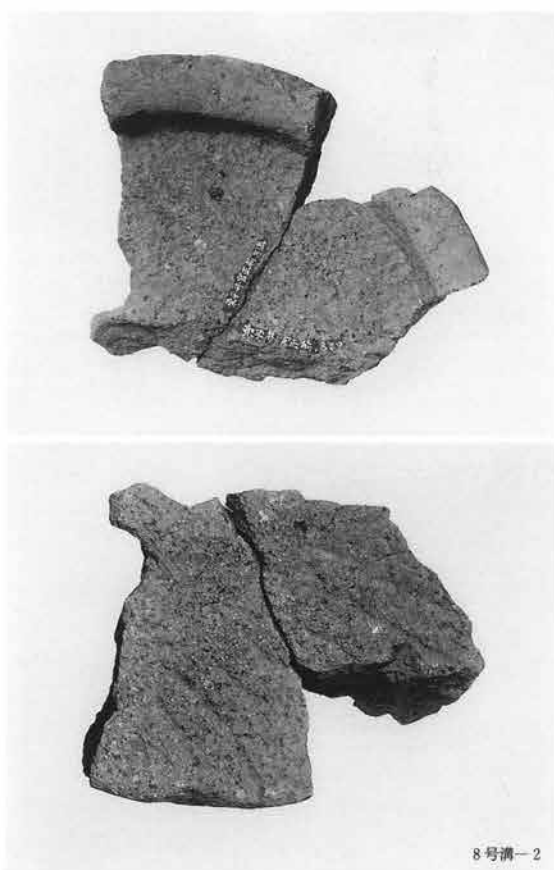
1号井戸-60

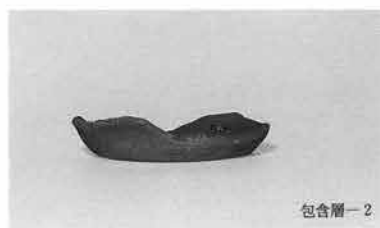


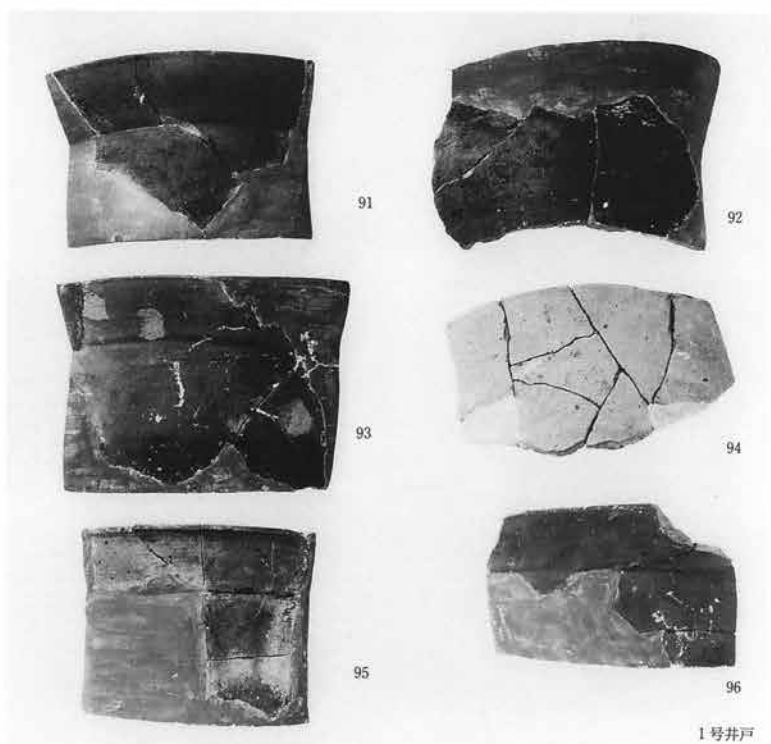
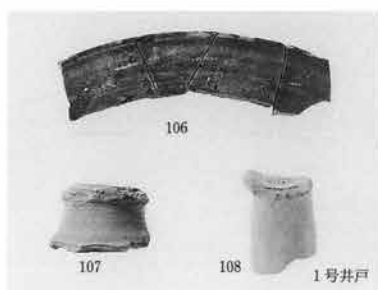
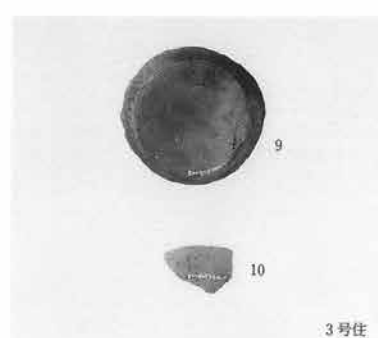
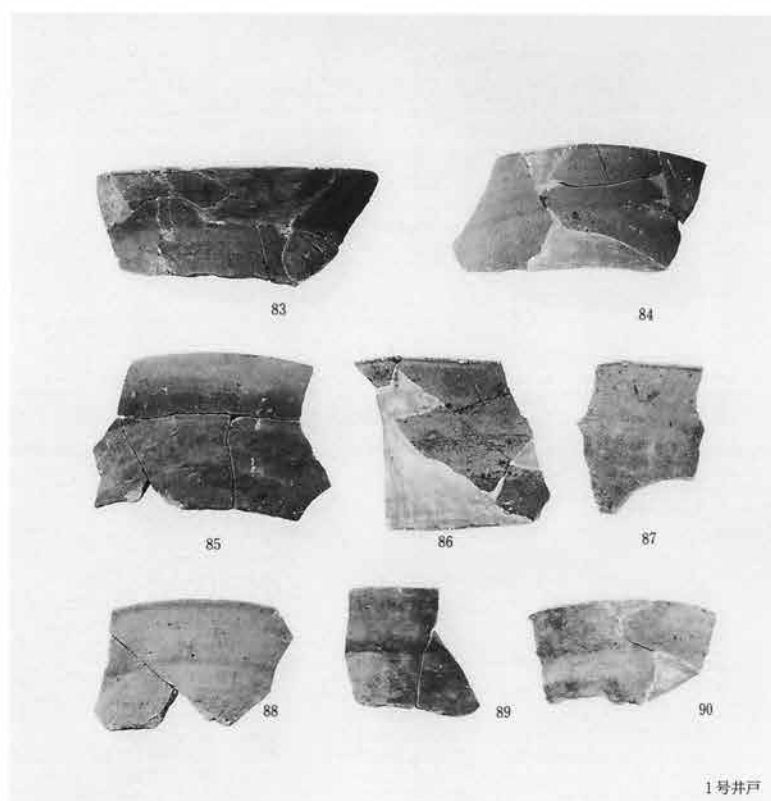
1号井戸-59

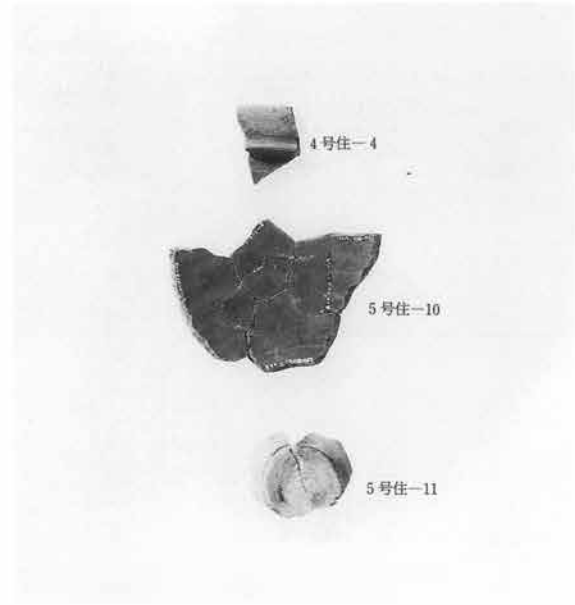
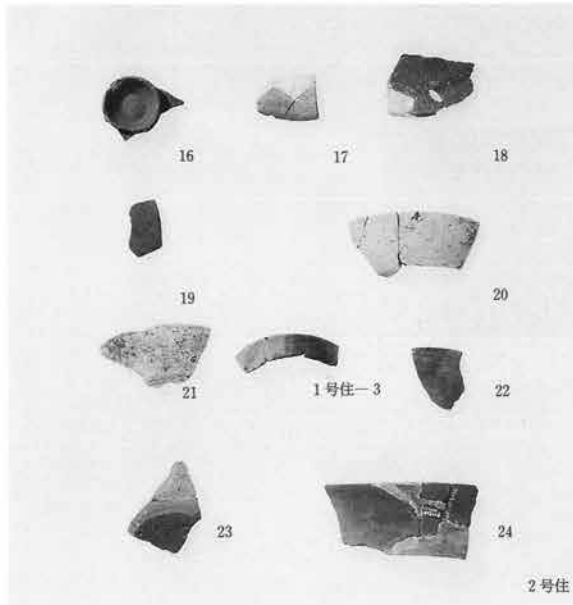
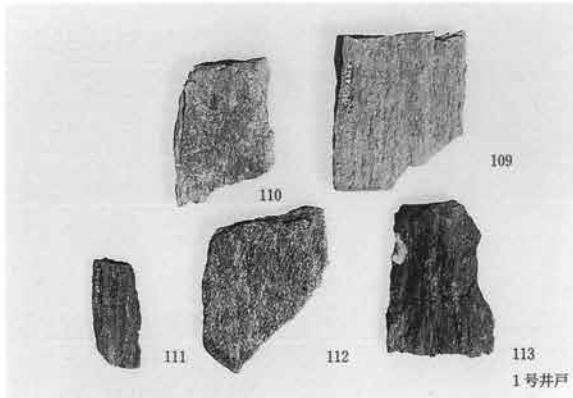
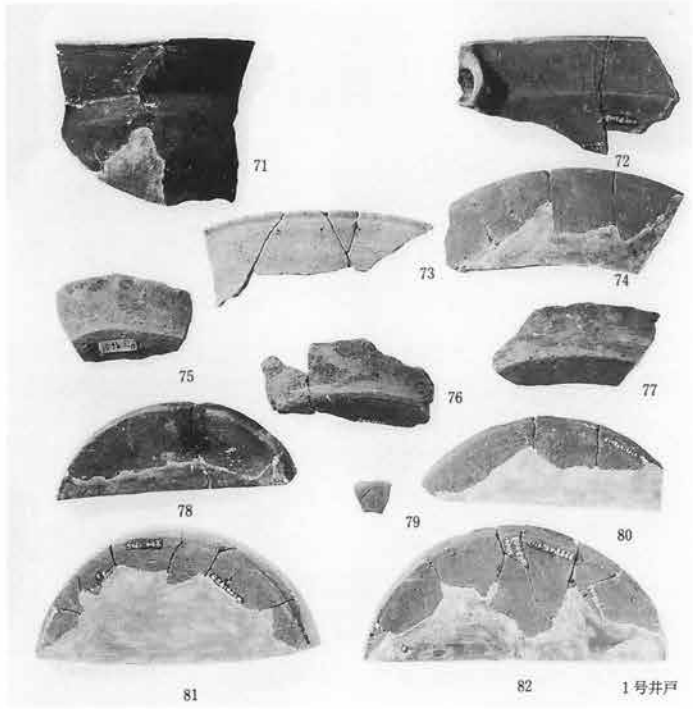
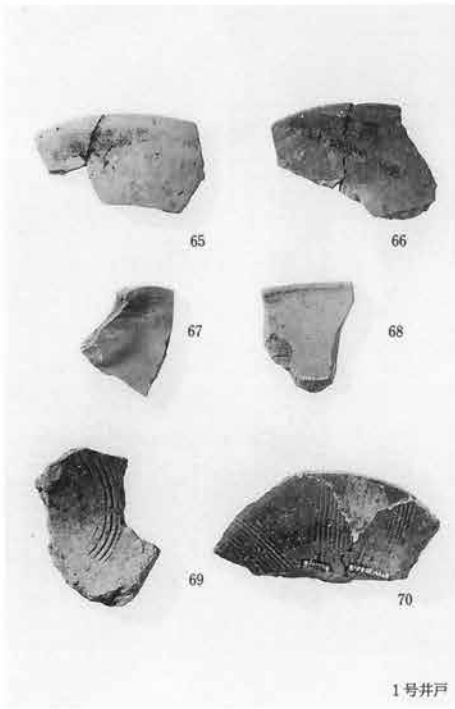


1号井戸-64





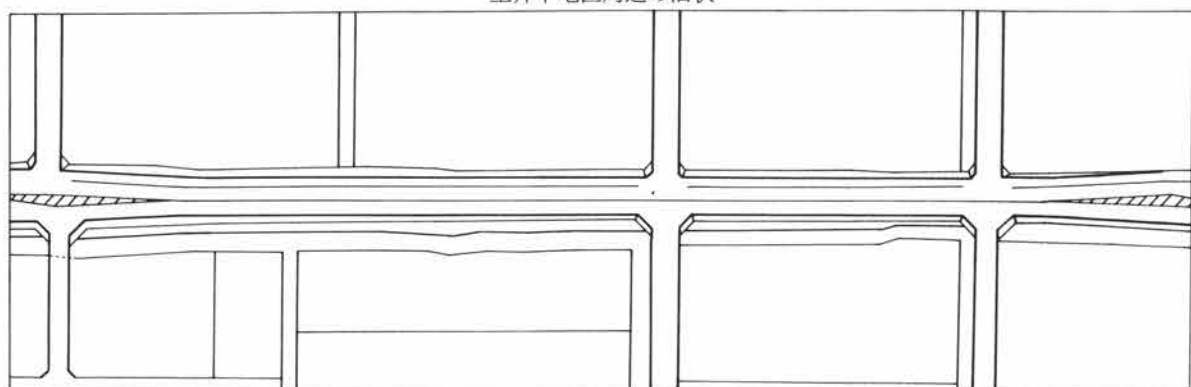




第5部 東平井土井下遺跡



土井下地区周辺の旧状



県道神田・吉井停車場線と圃場整備竣工後の土井下地区周辺

第7章 東平井土井下遺跡の調査

第1節 調査の経過

本遺跡の調査は平成3年9月27日の猿川地区の試掘調査で開始。平成4年1月22日に土井下地区の調査の終了、翌23日の撤収で完了した。尚、10月18日～12月6日には別動班を設けて飛石の砦の調査を実施した。猿川・土井下両地区の調査経過は以下の通り。

1 猿川地区

猿川地区は試掘調査に引き続く10月14日、10区東半と11区の表土掘削を実施した。このうち10区の遺構調査は同18日から11月19日にかけて行った。尚、10区南端は藤岡市教育委員会の調査区（F14藤岡平地区遺跡群）と接し、両者にまたがる竪穴住居（3号住居）については、市教育委員会の了解を得て両調査区にまたがるベルトの除去を行った。

11区は10区と併せて本調査を実施した。また、同25日には工事用車両搬入路の残地部分の掘削・遺構確認を行ったが、遺構は確認されず、翌26日写真撮影後これを引き渡した。

2 土井下地区

土井下地区の各区の調査経過は以下の通りである。尚、12月17・18日には土層確認の為のグリッドの掘削を行い、同18日には土壌分析のためのサンプル採取を行った。また、当時フィリピンのパナツボ火山

の噴火があり、このテフラの影響で午前10時頃でも日の出直後のような日照状態であった。このため撮影したポジカラーフィルムは赤味がかかっている。

12区は、11月11日より表土掘削を開始。12月9日より遺構調査に入った。同19・20日には下位層の遺構確認のための12・13区でトレンチ調査を実施した。明けて平成4年1月16日にはトレンチ調査で確認された2面4号溝の調査に着手、翌17日に完了した。

13区は12区に引き続き表土を除去。平成3年11月19日から遺構確認後、遺構の調査に入った。12月6日には東半微高地部においても遺構の調査に入り、また、12区と同時に低地部の試掘調査を行っている。

14区では11月19日から表土掘削、同21日から遺構確認を行い、12月6日より遺構の調査に入った。12月17日に第2面の掘削を開始、同年12月24日から翌平成4年1月8日に遺構確認。同10日より遺構の調査に入り、1月20日調査を完了した。

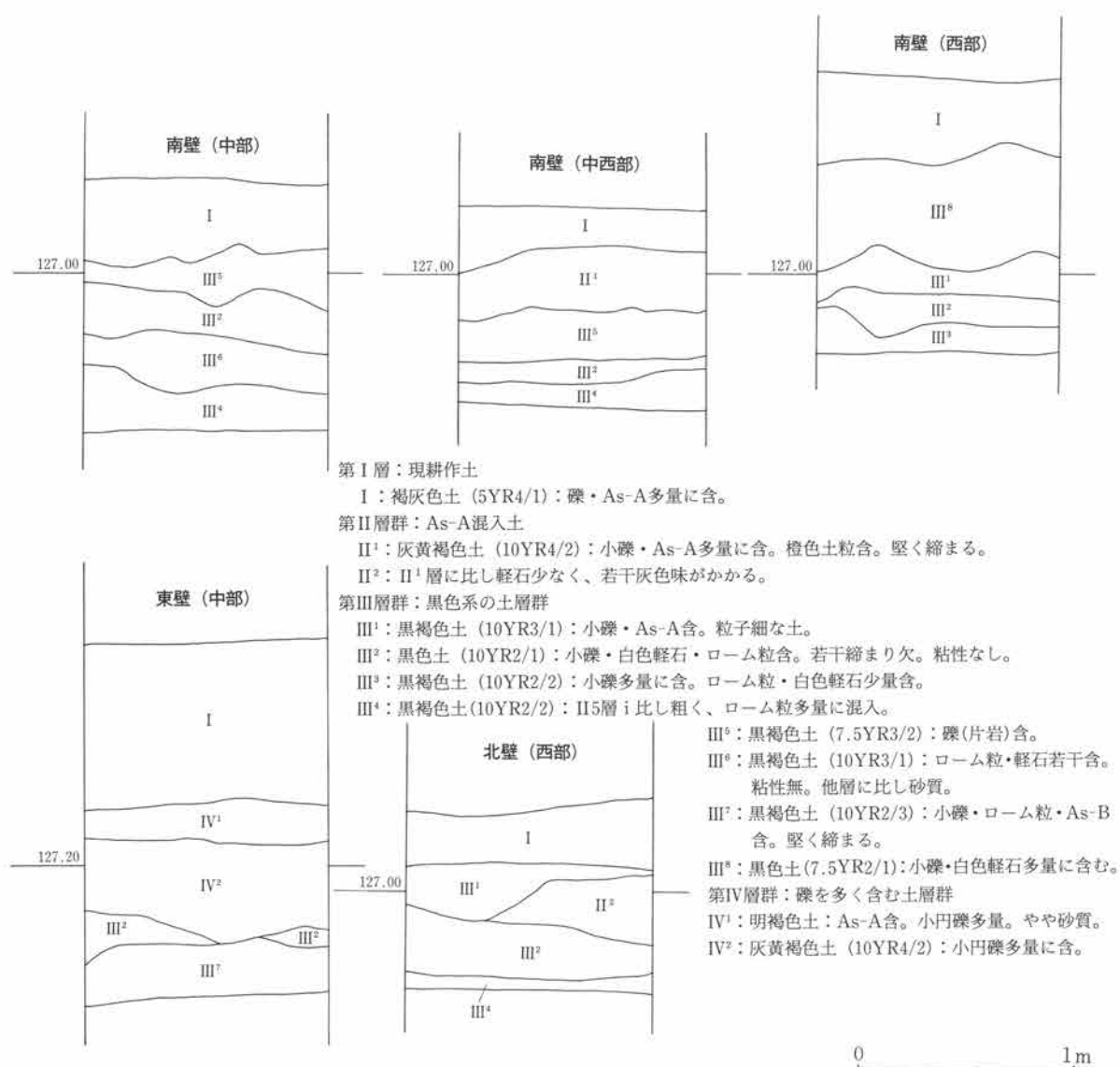
15区は平成3年11月20日より表土を掘削。同26日より遺構確認、翌12月6日より遺構の調査に入った。12月24日からは下位層調査のためトレンチ調査を実施。同日図化を終了して埋め戻しに入り調査を完了した。

第2節 標準土層

猿川地区に於いては地点による差異はあるが、概ね第I層とした現代の耕作土を表土とし、その下位層としてAs-Aを含む色調の明るい第II層群、更に黒色・黒褐色系の小礫を含むやや砂質のことが多い第III層群の堆積が確認された。また、第III層群を切つて礫を多く含む明るい色調の層が10区東よりに見られ、小河川が北流していたことを想定させる。

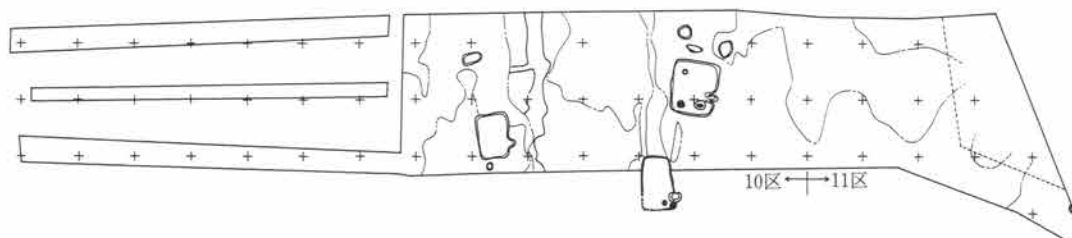
土井下地区の土層は地点によって異なるが、全体としては概ね色調の明るい粘質土である第IV層群が

あり、その上に砂礫又は砂礫混入の第III層群、更にAs-Bを混入する第II層群、そしてAs-A混入する第I層群が堆積している。ただしこれらの土層群も確認出来るのは東側の低地部分である15区だけであり、西よりの低地に在る12区付近では第III層群は確認されず、当該地区に見られる第II層群は東に向かって確認できなくなる。また、13区から微高地を中心とする14区付近では第II・III層群共に確認することはできなかった。尚、14区に於いては第I



第72図 標準土層（猿川地区）

第3節 猿川地区の概要

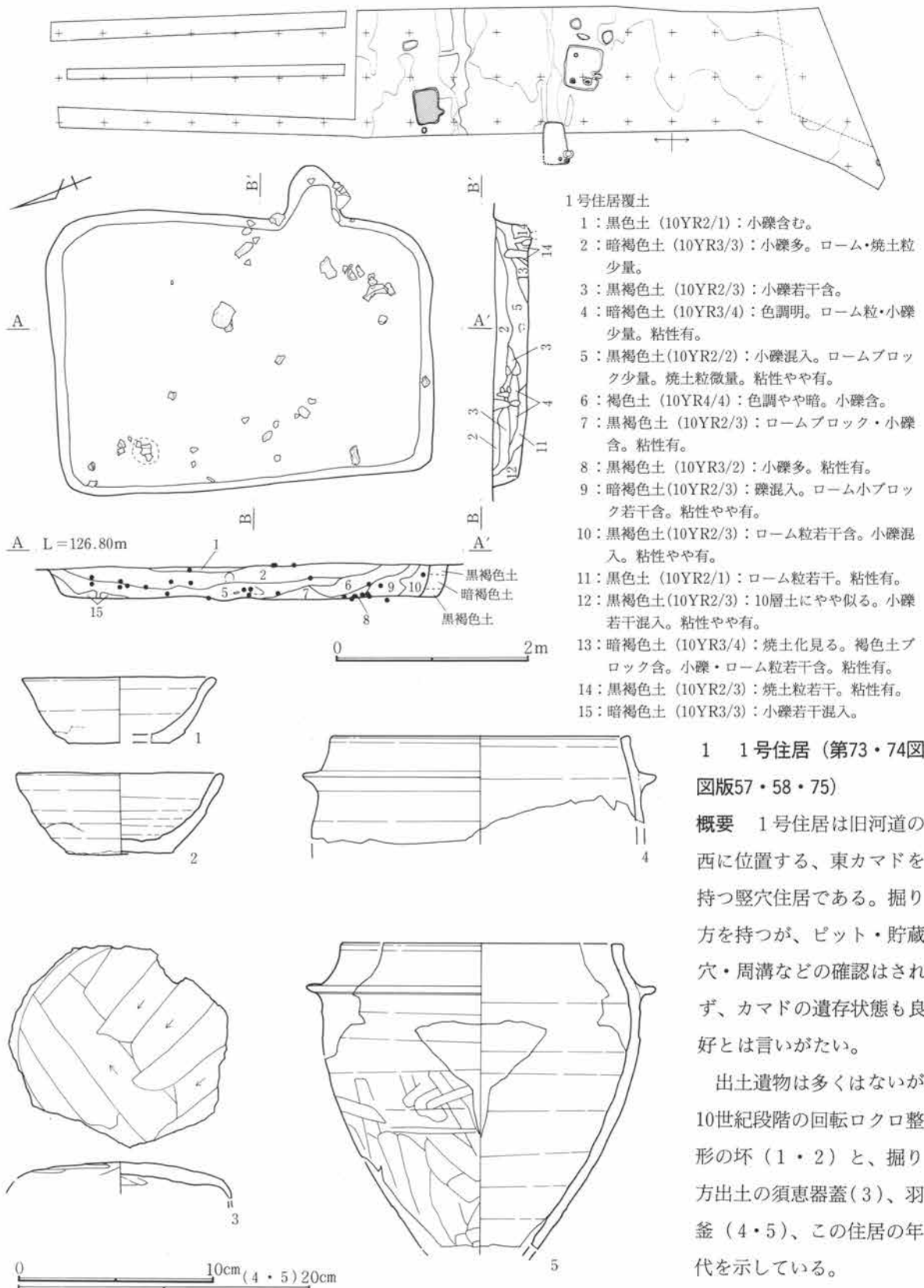


層群と第IV層群の間層に、また15区に於いては第IV層群下に砂質土である第V層群が確認されている。

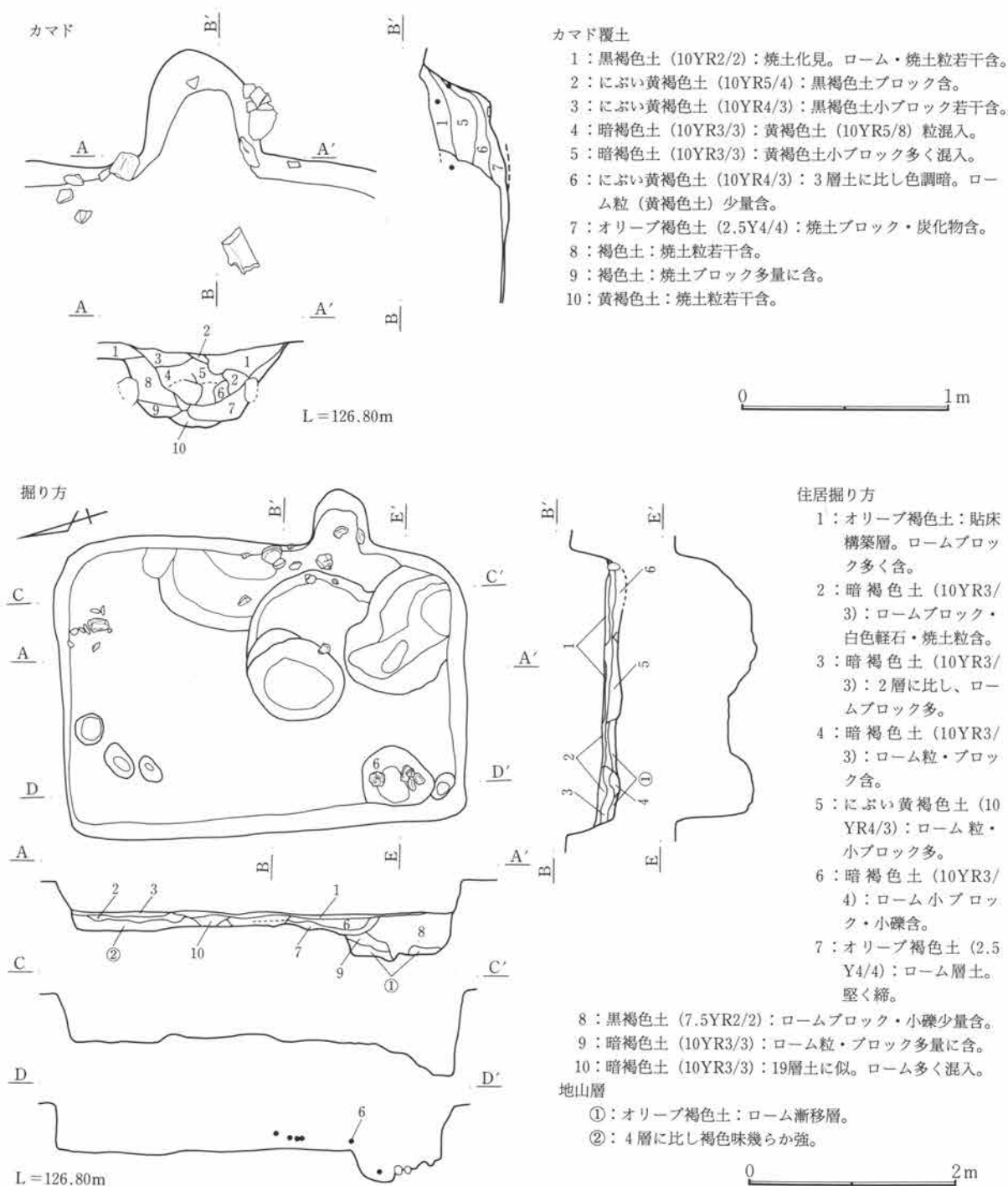
猿川地区は、東平井の10区の東部と11区の西端部を含んでいる。調査区は中央やや西よりに時期の特定できない旧河道が南北に走行し、調査区を分断し

ている。遺構はこの旧河道の両側に集まっており、平安時代の竪穴住居3軒と土坑6基が確認・調査されている。この付近以外には遺構は殆ど無く、僅かに東端の11区の東壁際にピットが1基確認されているに過ぎない。

第4節 猿川地区の遺構と遺物



第73図 猿川1号住居及び出土遺物



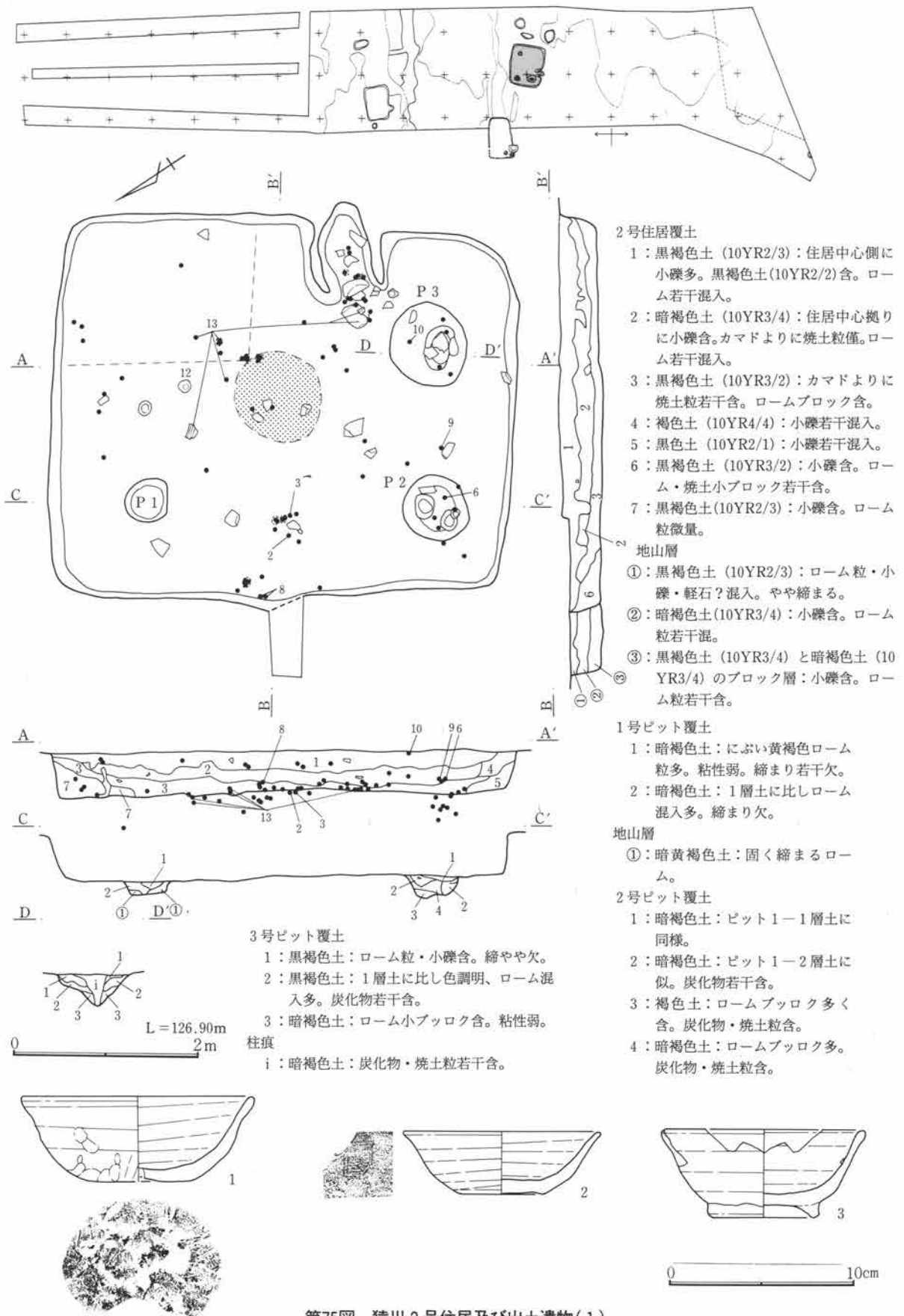
第74図 猿川1号住居(2)

横: 390cm 深さ: 80cm

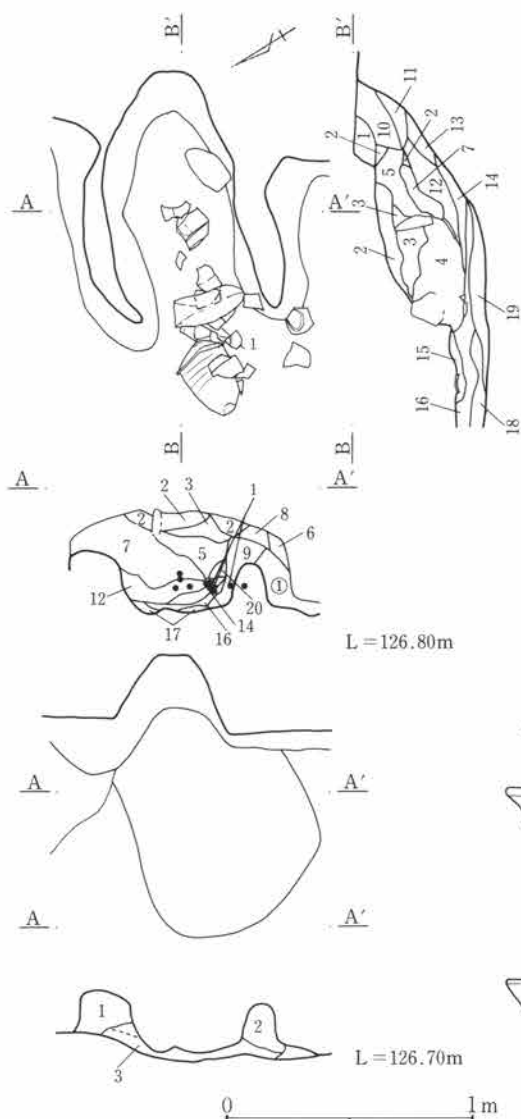
カマド 幅: 推定70cm 奥行き: 60cm

構造 掘り方のカマド左右にはそれぞれ土坑状の掘り込みが見られ、特に右側のものは住居の中程まで広がっている。カマド手前には床下粘土土坑に相当する掘り込みが残り、南西のコーナー部分にはピット

状の掘り込みが見られる。この掘り方を埋めて、ロームブロックを多く含むオリーブ褐色土で貼床を貼っている。カマドは深さ10cm以下の掘り方を持ち、この上にカマドを構築したと推定されるが、本体の構造は明らかではない。ただ、燃烧部は壁を掘り込んで造り出されている様子が確認される。



第75図 猿川2号住居及び出土遺物(1)

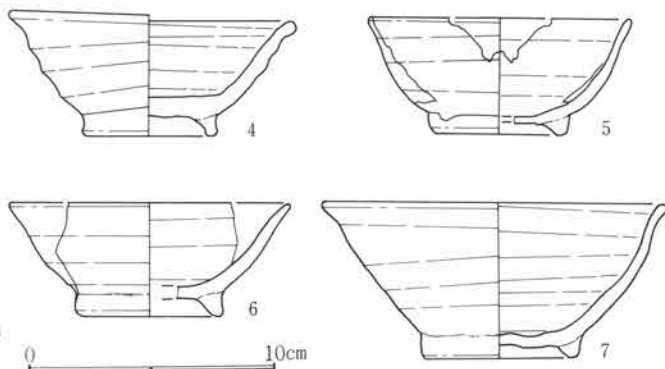


カマド覆土（全体に締まり・粘性有。但し10層は他層に比し粘性やや欠。）

- 1：暗褐色土（10YR3/4）：ローム小ブロック含。
- 2：黒褐色土（10YR2/3）：住居1層土に似。ローム小ブロック・焼土粒若干含。
- 3：にぶい黄褐色土（10YR5/3～4/3）：2層土小ブロック含。ローム小ブロック若干含。
- 4：にぶい黄褐色土（10YR4/3）と黒褐色土（10YR3/2）のブロック層：ローム小ブロック若干、焼土粒少量含。
- 5：にぶい黄褐色土（10YR5/4）：ローム質のブロック層。1層土小ブロック含。
- 6：暗褐色土（10YR3/3）：弱い焼土化。
- 7：黄褐色土（10YR5/4）：やや焼土化。1層土ブロック・焼土小ブロック含。
- 8：黒褐色土（10YR3/3）・明黄褐色土（10YR6/6）の中ブロック層：全体に弱く焼土化。部分的に強く焼土化。
- 9：褐色土（10YR4/4）：焼土化見られる。1層土小ブロック混。
- 10：褐色土（10YR3/3）：焼土化進行。10層境中心に焼土粒混。
- 11：にぶい黄褐色土：軽石・焼土粒含。
- 12：にぶい黄褐色土：焼土ブロック含。
- 13：暗黄褐色土：ローム粒・焼土ブロックの含。13層に比し焼土少。
- 14：にぶい黄褐色土：ロームブロック多。
- 15：褐色土：焼土・白色軽石多く含。
- 16：暗褐色土：ローム粒・ブロック多。灰含。
- 17：暗褐色土：ローム・焼土ブロック・白色軽石多。炭化物粒含。
- 18：暗褐色土：ローム・焼土ブロック・白色軽石多。焼土ブロック含。
- 19：褐色土：ローム粒・小礫・白色軽石・焼ブロック含。
- 20：黒褐色土：（10YR2/2）：弱い焼土化が見られる。

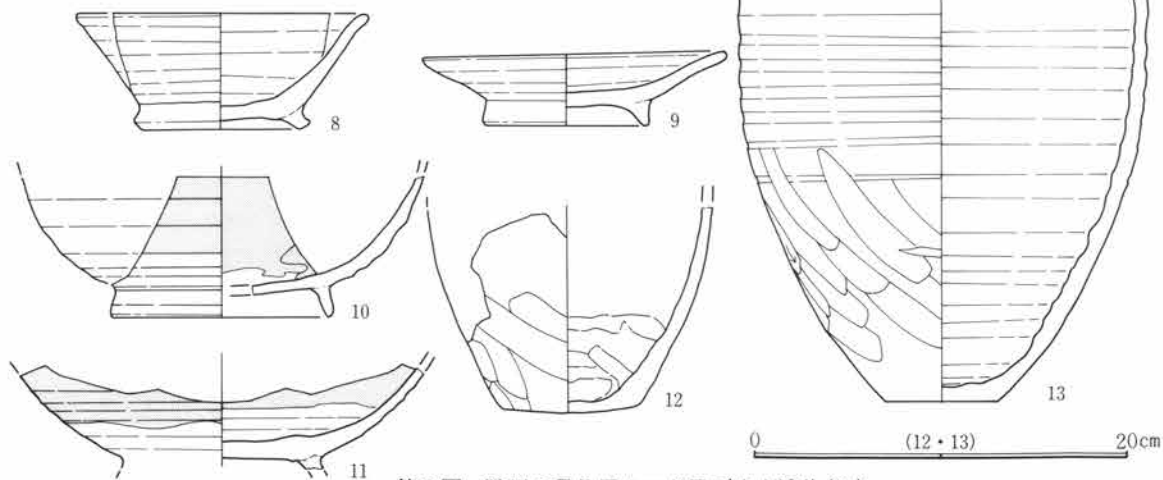
地山層

- ①：暗褐色土：ローム小ブロック・小礫含。

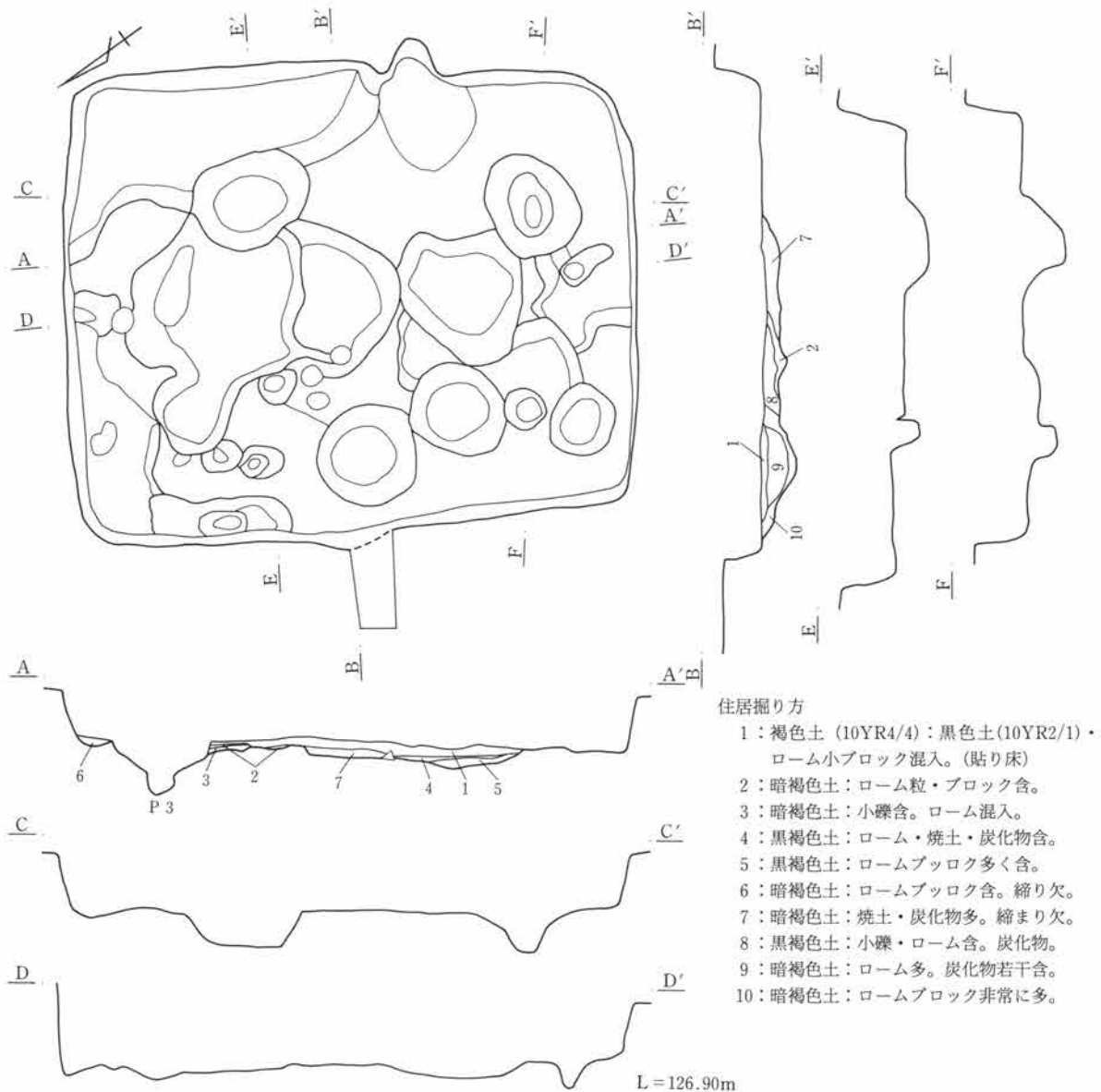


カマド袖

- 1：黒褐色土（10YR4/4）：弱い焼土化。
- 2：黒褐色土：ローム小ブロック・小礫含。
- 3：にぶい黄褐色土・焼土ブロック含。



第76図 猿川2号住居カマド及び出土遺物（2）



第77図 猿川2号住居掘り方(3)

2 2号住居 (第75～77図、図版59～61・75・76)

概要 2号住居は旧河道の東に位置する、東カマドを持つ竪穴住居である。床面では北東のものを除く柱穴を確認した。貯蔵穴は確認されなかったが、カマドの遺存状況は比較的良好である。尚、北東の柱穴に比定されるもの(ピット4)が、掘り方面に於いて認められる。カマドの直ぐ左側手前には、焼土が見られる。

遺物はカマドを中心に住居全体に分布し、回転ロクロ整形の坏(1・2)、碗(3～10)、羽釜(13)のほか、灰釉陶器碗(11)、土師器甕(12)などがある。

規模 住居 縦:410cm 横:495cm 深さ:60cm

ピット1 径:23×23cm 深さ:13cm

ピット2 径:71×66cm 深さ:24cm

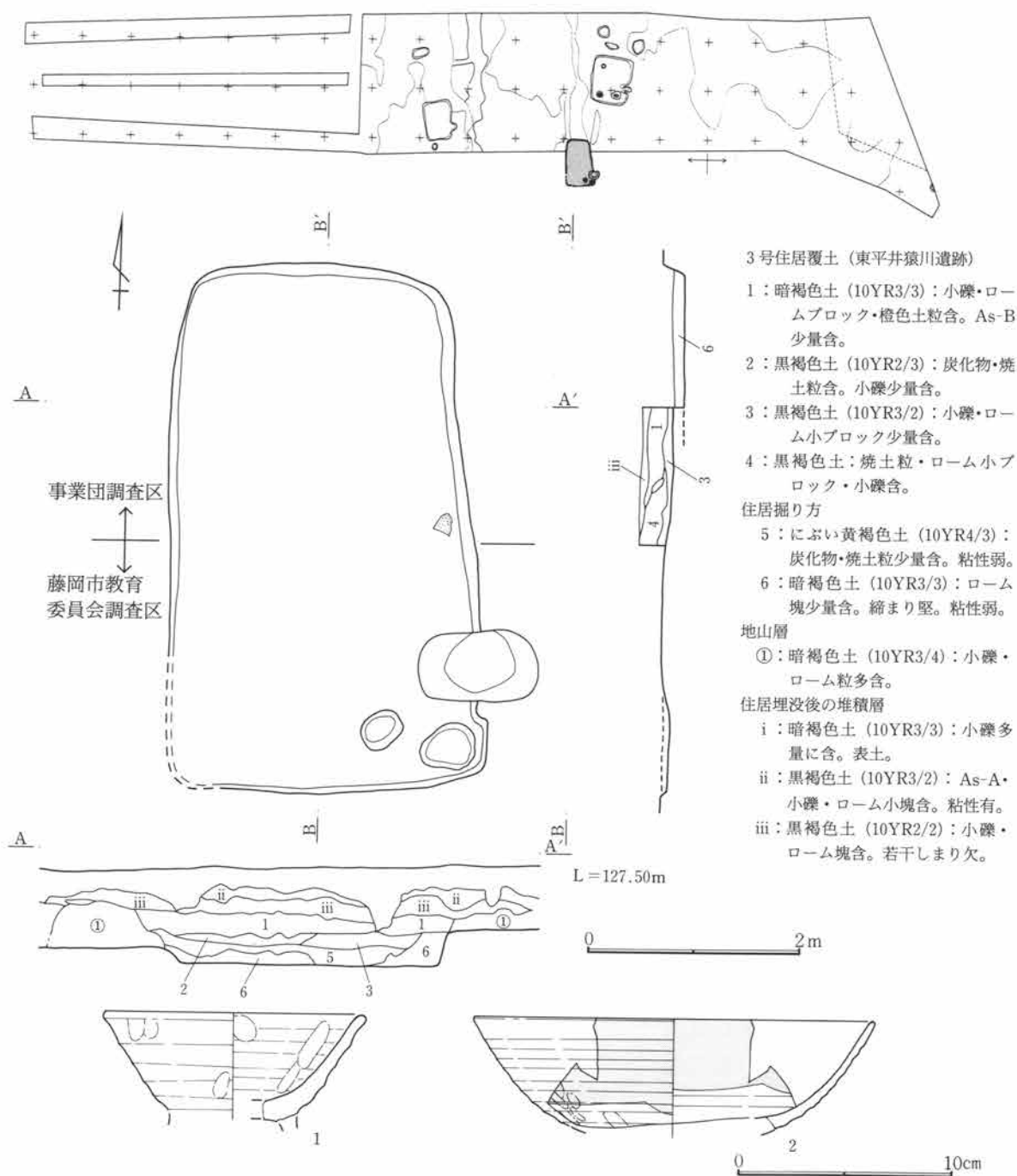
ピット3 径:84×81cm 深さ:42cm

カマド 幅:推定90cm 奥行き:107cm

左袖 幅:28cm 長さ:64cm

右袖 幅:28cm 長さ:83cm

構造 2号住居は横長の隅丸方形を呈する。複雑に掘り込まれた掘り方を持ち、これを埋め戻して褐色土で貼り床を造っている。カマドは壁面への掘り込みが浅く、細長い袖の間を燃焼部としている。



第78図 猿川3号住居及び出土遺物

3 3号住居（第78図、図版62・76）

概要 3号住居は2号住居の南に位置する東カマドを持つ竪穴住居である。北半分を当事業団が、南半分を藤岡市教育委員会が調査した。藤岡市教育委員会側の調査番号は『57号住居』である。この南半部はカマドを含んでおり、また貯蔵穴も見られる。

当事業団側の出土遺物には、10世紀段階に比定さ

れる回転ロクロ整形の椀（1・2）が出土している。

規模 住居 縦：280cm 横：485cm 深さ：30cm以下

構造 3号住居はかなり横長の隅丸方形を呈する。掘り方を持ち、これを埋め戻して貼り床を造っている。尚、全体的構造は藤岡市教育委員会の調査報告を待ちたい。



第79図 猿川1～6号土坑

4 1号土坑 (第79図、図版63)

概要 旧河道の西に在り、主軸は東西を向く。

規模 長軸：175cm 短軸：95cm 深さ：16cm

構造 隅丸方形のプランを呈し、底部は平底である。

5 2号土坑 (第79図、図版63)

概要 2号土坑は旧河道の東に在り、底部付近に大きな礫が入る。時期・用途は特定できなかった。

規模 長軸：105cm 短軸：95cm 深さ：60cm

構造 円形のプランを呈し、底部は平底である。

6 3号土坑 (第79図、図版63)

概要 本土坑の主軸は東西方向にある。

規模 長軸：147cm 短軸：57cm 深さ：15cm

構造 片側を圧平された細長い長円形のプランを呈し、底部は平底である。

7 4号土坑（第79図、図版63）

概要 3号土坑の東に在り、掘り込みは浅い。

規模 長軸：140cm 短軸：115cm 深さ：12cm

構造 隅丸の五角形のプランを呈する。

8 5号土坑（第79図）

概要 3号土坑の東に在り、掘り込みは浅い。

規模 長軸：140cm 短軸：115cm 深さ：12cm

構造 隅丸の五角形のプランを呈する。

9 6号土坑（第79図）

概要 11区東壁に在り、東半は調査区外に出る。

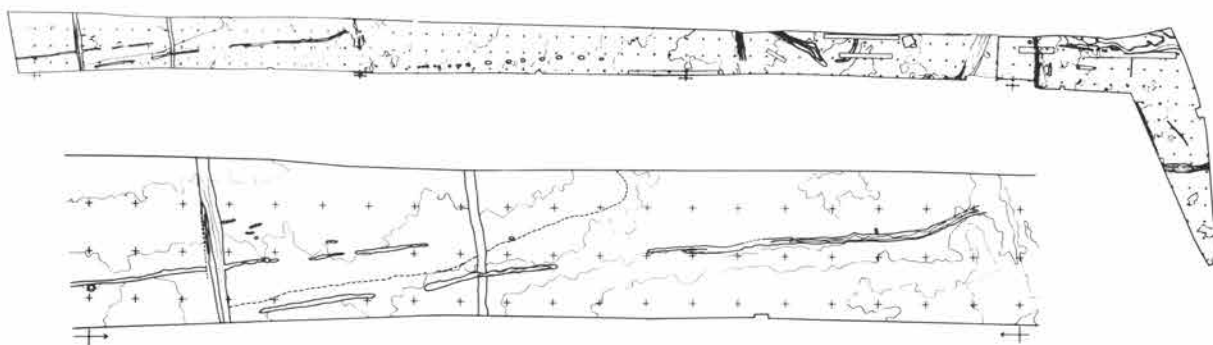
規模 径：60cm 深さ：37cm

構造 円形プランを呈するものと推定される。



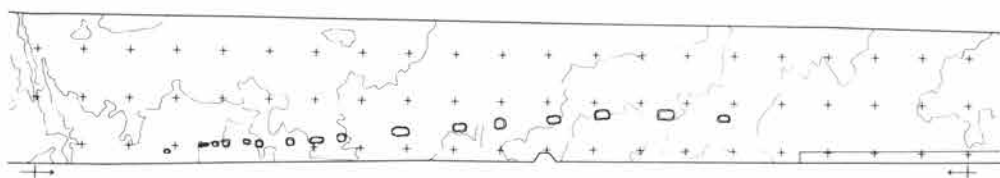
第80図 猿川包含層出土遺物

第5節 土井下地区の概要



11・12区は低地部に当たり、調査前に於いても水田地帯であった。第1面では破線より西側にAs-B下の水田面が確認され、11・12区全体についてみると東に向かってやや北上がりの溝の痕跡が2条、これ

に直行する溝の痕跡3条が確認された。また、11区から12区西端にかけて掘り込みの浅い小土坑が散見された。第2面に於いては、旧河道の痕跡が確認された以外、遺構は認められなかった。



13区も11・12区同様低地部に当たる。その第1面にあつては特段の水田面などは確認できなかったが、第1面で特徴的だったのは、13区南半部に東西に近い方向で直線的に配列する16基の土坑からなる土坑

群である。これらの土坑には、何れも2次堆積のAs-A純層を含んでいる。第2面では11・12区同様旧河道が見られたが、第1面で確認できなかったはっきりした掘り方の溝1条を確認し調査した。



14区の西端部は11～13区同様の低地部であり、遺構などは確認できなかった。14区の多くを占める微高地部に於ける第1面には、低地部との境を画する溝を確認した他は遺構を確認することはできなかった。第2面に於いては、竪穴住居1軒、溝3条、土坑1基などを新たに確認し調査した。

尚、便宜上、調査段階では低地部の出土遺物は13区で、また高地部については後述する15区の範囲も14区の遺物として処理している。

15区は「┐」形をしており、西端は14区から続く微高地があり、明瞭な段差を持って低地部に落ちる。低地部旧河道群の沖積地であり、南部において段差

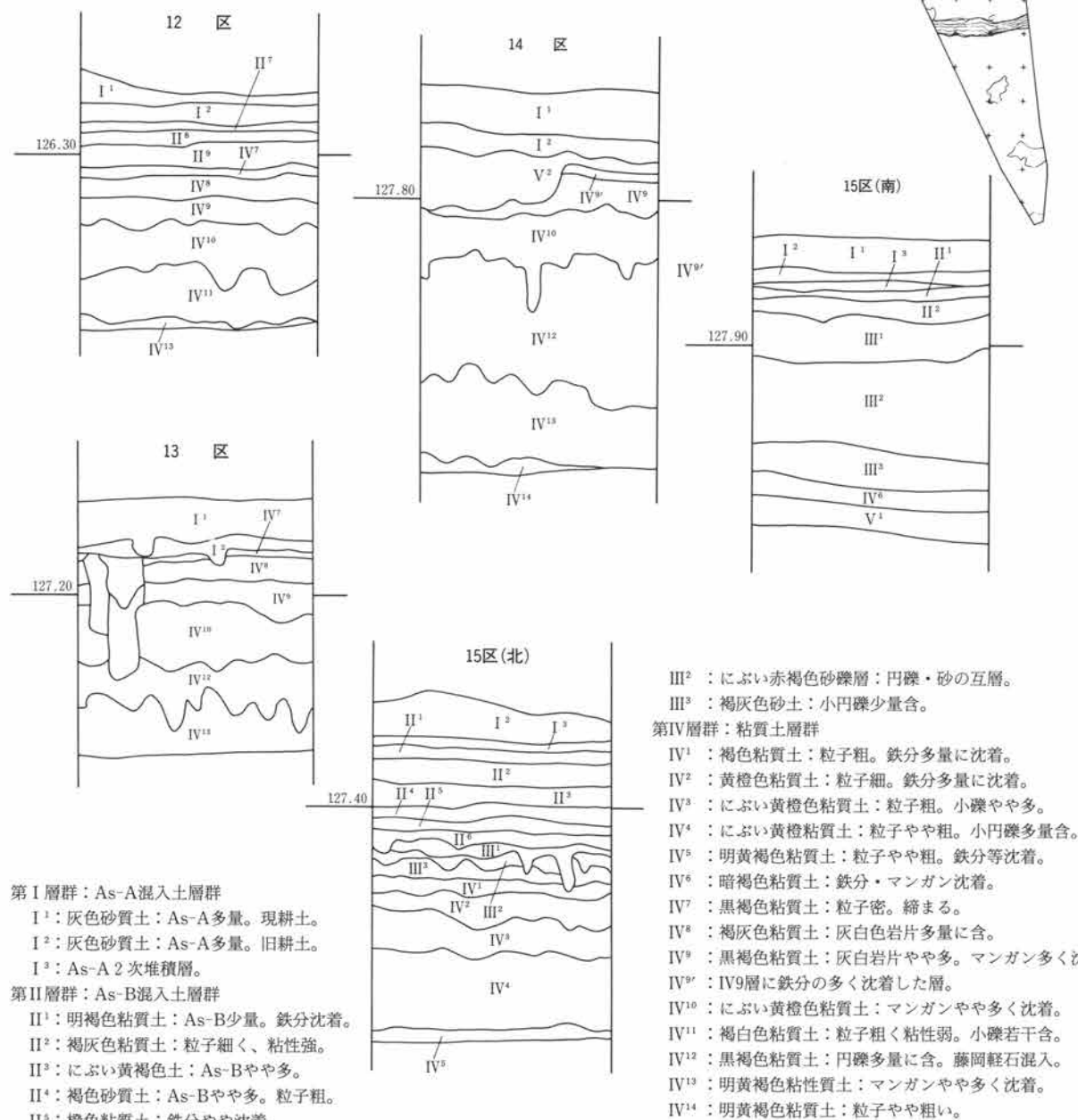
第81図 土井下地区全体図

第7章 東平井土井下遺跡の調査

を持って高くなる。微高地部ではピット1基を調査した。低地部では北部に於いて極めて浅い掘り込みの大きめの溝の痕跡が1条、小さめの溝が1条。10基の土坑・ピットを確認・調査した。一方南半部では溝の痕跡1条を確認した。



第82図 土井下地区15区全体図



第I層群：As-A混入土層群

- I¹：灰色砂質土：As-A多量。現耕土。
- I²：灰色砂質土：As-A多量。旧耕土。
- I³：As-A 2次堆積層。

第II層群：As-B混入土層群

- II¹：明褐色粘質土：As-B少量。鉄分沈着。
- II²：褐灰色粘質土：粒子細く、粘性強。
- II³：にぶい黄褐色土：As-Bやや多。
- II⁴：褐色砂質土：As-Bやや多。粒子粗。
- II⁵：橙色粘質土：鉄分やや沈着。
- II⁶：にぶい黄褐色砂質土：粘性やや強。
- II⁷：明黄褐色粘質土：鉄分多量に沈着。
- II⁸：明黄褐色粘質土：As-Bやや多く含。
- II⁹：暗灰黄色粘質土：As-Bやや多く含。

第III層群：砂礫層・砂礫混入層群

- III¹：にぶい黄褐色砂質土：粘性やや強。

III²：にぶい赤褐色砂礫層：円礫・砂の互層。

III³：褐灰色砂土：小円礫少量含。

第IV層群：粘質土層群

- IV¹：褐色粘質土：粒子粗。鉄分多量に沈着。
- IV²：黄褐色粘質土：粒子細。鉄分多量に沈着。
- IV³：にぶい黄褐色粘質土：粒子粗。小礫やや多。
- IV⁴：にぶい黄褐色粘質土：粒子やや粗。小円礫多量含。
- IV⁵：明黄褐色粘質土：粒子やや粗。鉄分等沈着。
- IV⁶：暗褐色粘質土：鉄分・マンガン沈着。
- IV⁷：黒褐色粘質土：粒子密。締まる。
- IV⁸：褐灰色粘質土：灰白色岩片多量に含。
- IV⁹：黒褐色粘質土：灰白岩片やや多。マンガン多く沈着。
- IV⁹'：IV9層に鉄分の多く沈着した層。
- IV¹⁰：にぶい黄褐色粘質土：マンガンやや多く沈着。
- IV¹¹：褐白色粘質土：粒子粗く粘性弱。小礫若干含。
- IV¹²：黒褐色粘質土：円礫多量に含。藤岡軽石混入。
- IV¹³：明黄褐色粘質土：マンガンやや多く沈着。
- IV¹⁴：明黄褐色粘質土：粒子やや粗い。

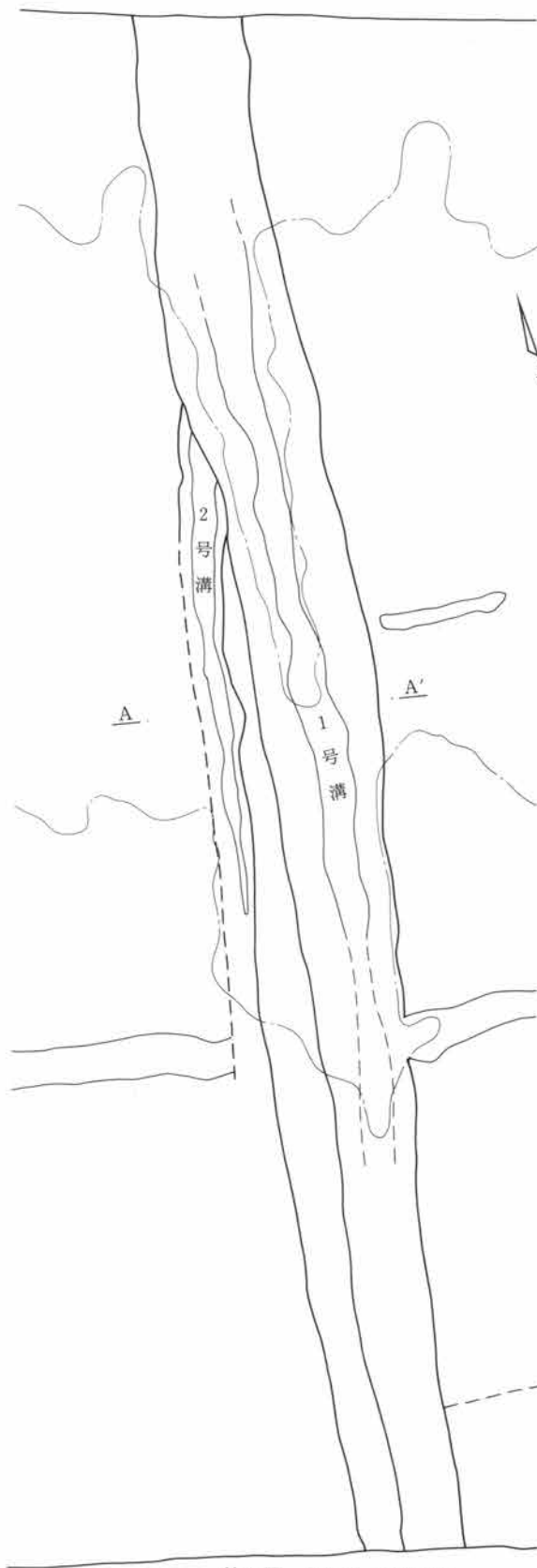
第V層群：砂質土層群

- V¹：暗褐色砂質土：粘性やや強。マンガン沈着。
- V²：褐灰色砂質土：鉄分多く沈着。

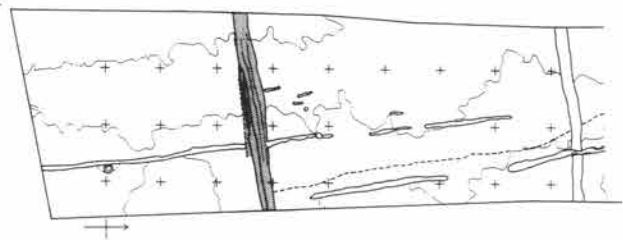
第83図 標準土層（土井下地区）

0 1m

第6節 発見された遺構と遺物



第84図 12区1・2号溝



A ——— 1 ——— A'
L=126.44m

12区—1・2号溝覆土

1：黒褐色土:AS-B多量含。上部鉄分沈着有。

0 ——— 2m

1号土坑



A ——— 1 ——— A'
3 4 2
L=126.44m

12区—1号土坑覆土

1：黒色土(7.5YR2/1)：As-B・鉄分含。褐色土ブロック含。

2：黒色土(10YR2/1)：1層よりAs-B少量。褐色土ブロック多量含。

3：黒褐色土(10YR3/2)：As-B・褐色土ブロック含。粒子粗。

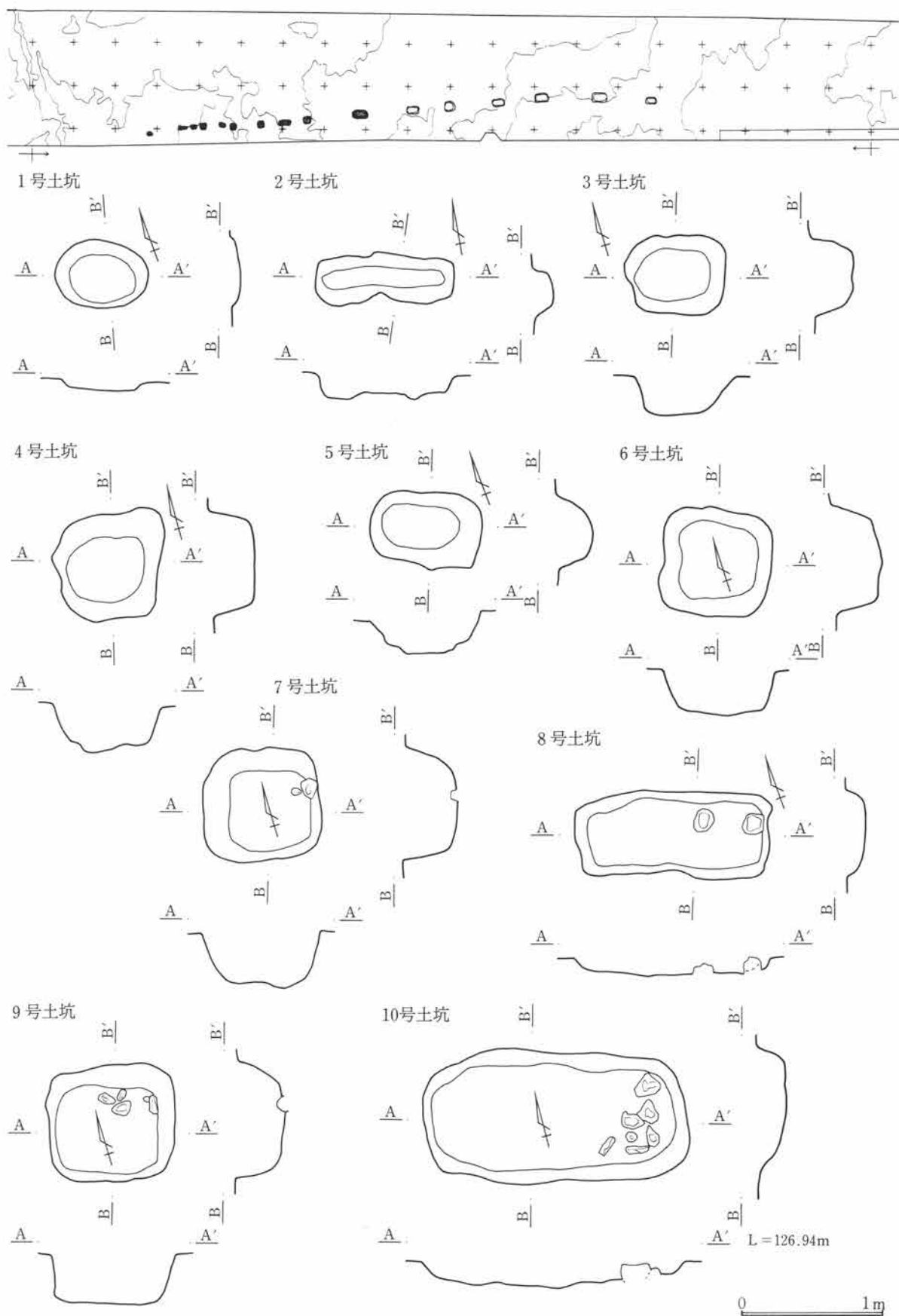
4：黒褐色土(10YR3/2)：As-B殆ど含まれず、地山より色調暗い粘質土。

第85図 12区1号土坑

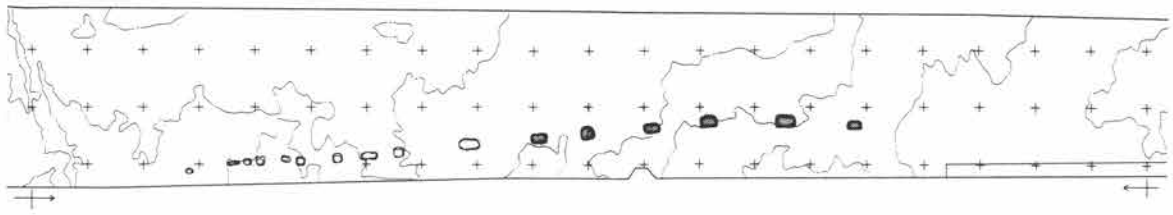
0 ——— 1m

1 12区—1・2号溝 (第84図、図版69・70)

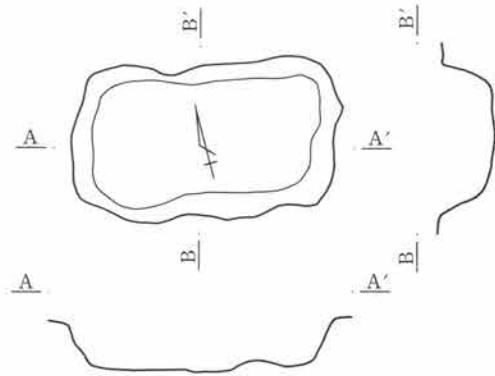
概要 12区—1・2号溝は12区の西部に位置し、ほぼ南北方向に走行する溝遺構である。1号溝は17.5m、2号溝は5.2mを調査したが、この2つの溝は切り合い関係にあり、遺構確認時の観察では1号溝の方が新しい。共に大きく削平されたかのように遺存状況は悪く、調査区の中央付近を除いて壁面を確認することができなかった。1・2号溝は走行が平行若しくは重なることから、同一の性格を持つ溝であろうと判断される。1号溝の覆土中にはAs-Bが多く含まれるので、この溝はAs-Bに覆われ、12区に広く確認されている水田に伴う可能性を有する。この場



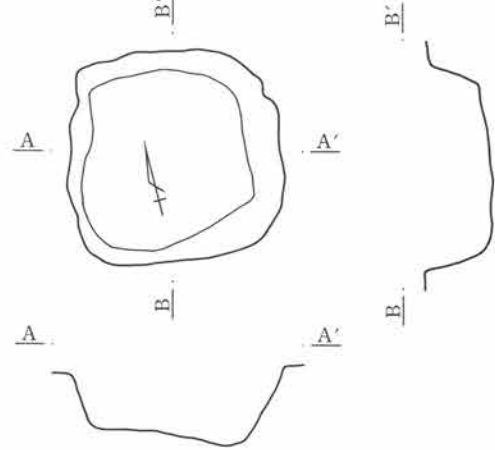
第86図 13区 1～10号土坑



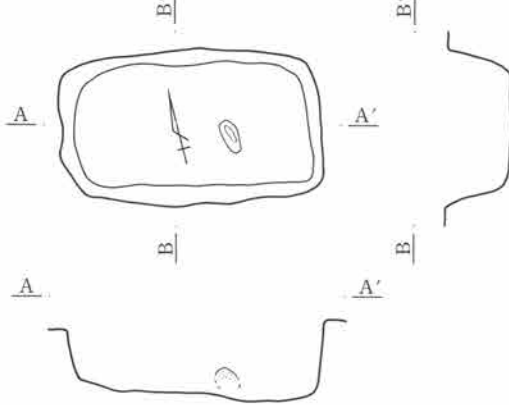
11号土坑



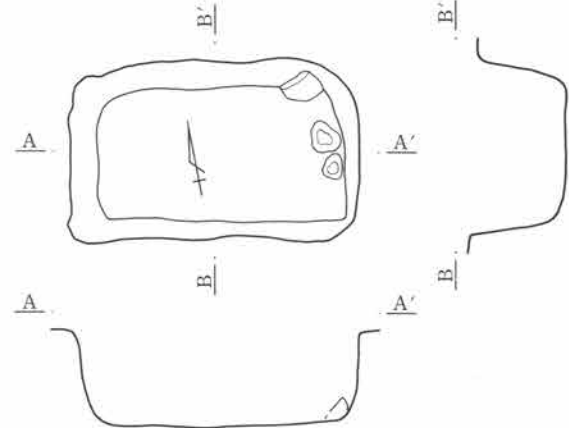
12号土坑



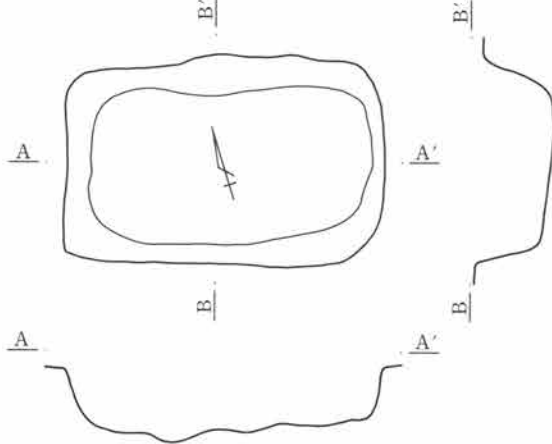
13号土坑



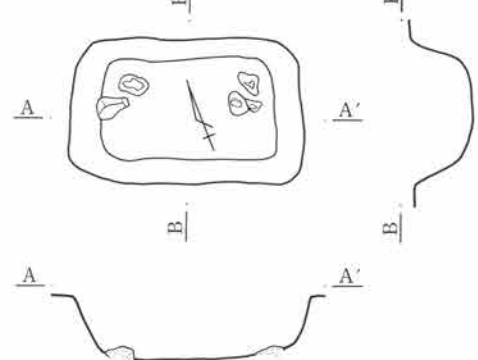
14号土坑



15号土坑



16号土坑



0 1m

第87図 13区11~16号土坑

L = 126.94m

合1号溝は非常に掘り方の浅い溝と想定される。

1・2号溝は水田面を区画すると考えられる12区全域に確認された。東西走行の溝に直交し、その北側の溝と切り合い関係にあるものの、1・2号溝に加え、東西走行の溝の遺存状況がなお悪いため新旧関係を確認することはできなかった。

規模 1号溝 幅：110～160cm 残存深さ：20cm

2号溝 幅：40cm以下 残存深さ：7cm以下

構造 遺存状況が悪く、全体的構造は詳かではないが、2号溝はおよそ22cm幅の溝であり、調査区北部でやや東に振れる以外は北に向かって直線的なプランを持ち、丸底気味の底面を呈している。1号溝はこの2号溝を切って掘削される幅150cm程の溝で、2号溝との切り合い部分で西に寄る以外は南北走行の直線的なプランを呈する。底面は、両壁より緩やかに中央に向かって傾斜している。

2 12区—1号土坑（第85図、図版71）

概要 本土坑は12区西端部南よりに位置し、位置的には東西に走行する溝の北側の溝に重なるが、当該の溝の遺存状況が悪いため新旧関係は確認できなかった。また、周辺に土坑・ピット等の遺構は確認されず、性格を特定することもできなかった。

1号土坑は覆土中にAs-Bを含み、一方、As-Aが認められなかったため、As-B降下（1108年）以降、近世後期（天明3年）以前の所産であると考えられるが、より詳細な時期の特定はできなかった。

規模 径：76×75cm 深さ：20cm

構造 方形を基本とするプランを呈し、丸底気味の底部を持つ。

3 13区—土坑群（13区—1～16号土坑、第86・87図、図版71）

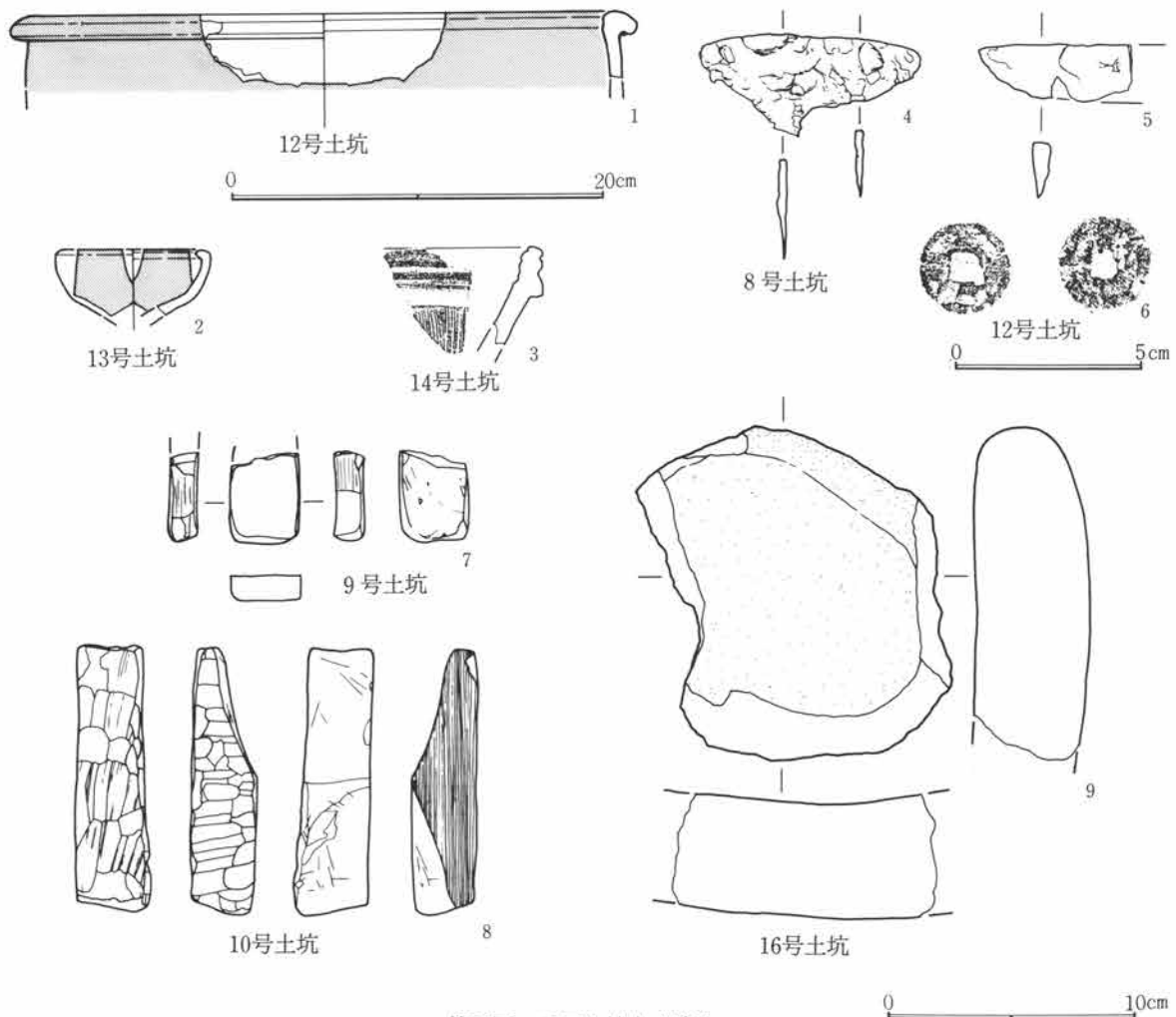
概要 本土坑群は13区の南部に位置し、多少弧を描くが東西のライン上に60m以上にわたって配列する16基の土坑から構成される。土坑群の乗るラインは、東平井29番地と30番地の水田の境界線に平行し、境界線よりやや29番地の耕地の内側によっている。各土坑の中心と中心の間隔は1mから7mとばらつきがあり一定していない。しかし、こうした状況と後述する覆土の状況から、これらの土坑は同時に存在したものと解釈される。

次に、覆土の特徴について述べる。土坑群に特徴的だったのは、何れも覆土として2次堆積のAs-Aの純層が入っていたことである。As-Aの流入については、降下したAs-Aを集めてこれらの土坑に投棄したものと解釈されるが、降下時点で土坑が開口していたかどうかは特定できない。また、これらの土坑が地境近くに連続的に掘削されていることから、As-A降下後に降下したAs-Aを投棄するため一時期に掘削されたものとも考えられる。

これらの土坑からは近世以降と考えられる陶器・瓦などが出土しているが、詳細な時期を特定することはできなかった。また、7～10号土坑及び14・16号土坑の底面近くからは大きめの礫が出土した。

規模・構造 （第1表 13区土坑一覧参照）

土坑群全体の規模と構造などを外観すると、全体としての統一した規格性は認められない。しかし、それぞれの土坑と土坑の距離の相対的に短い西寄りのもののプランは正方形を意識したものが多く、土坑と土坑の距離の相対的に長い東寄りのものは長方形を意識したプランをもつものが多い。



第88図 13区土坑出土遺物

4 14区—1号住居 (第89図、図版68・78)

概要 本住居は小型の竪穴住居であり、本住居より新しいと思われる14区—1号土坑と切り合っている。

本住居に掘り方は確認されず、また、ピット等も見られない。僅かにカマドの焼土面から燃焼部を推定することができた。

出土遺物は少なく、1号土坑との境に回転ロクロ整形の坏底部(1)が出土する。

規模 住居 縦：367cm 横：315cm 深さ：17cm

カマド 燃焼部 残存幅10cm 残存奥行き：53cm

構造 住居はほぼ方形のプランを呈し、カマドは浅い掘り方(カマド第5・6層)を埋め戻して造る。袖の形状は不明だが、カマド第3層がこれに相当する可能性がある。

5 14区—1号溝 (第90図、図版69)

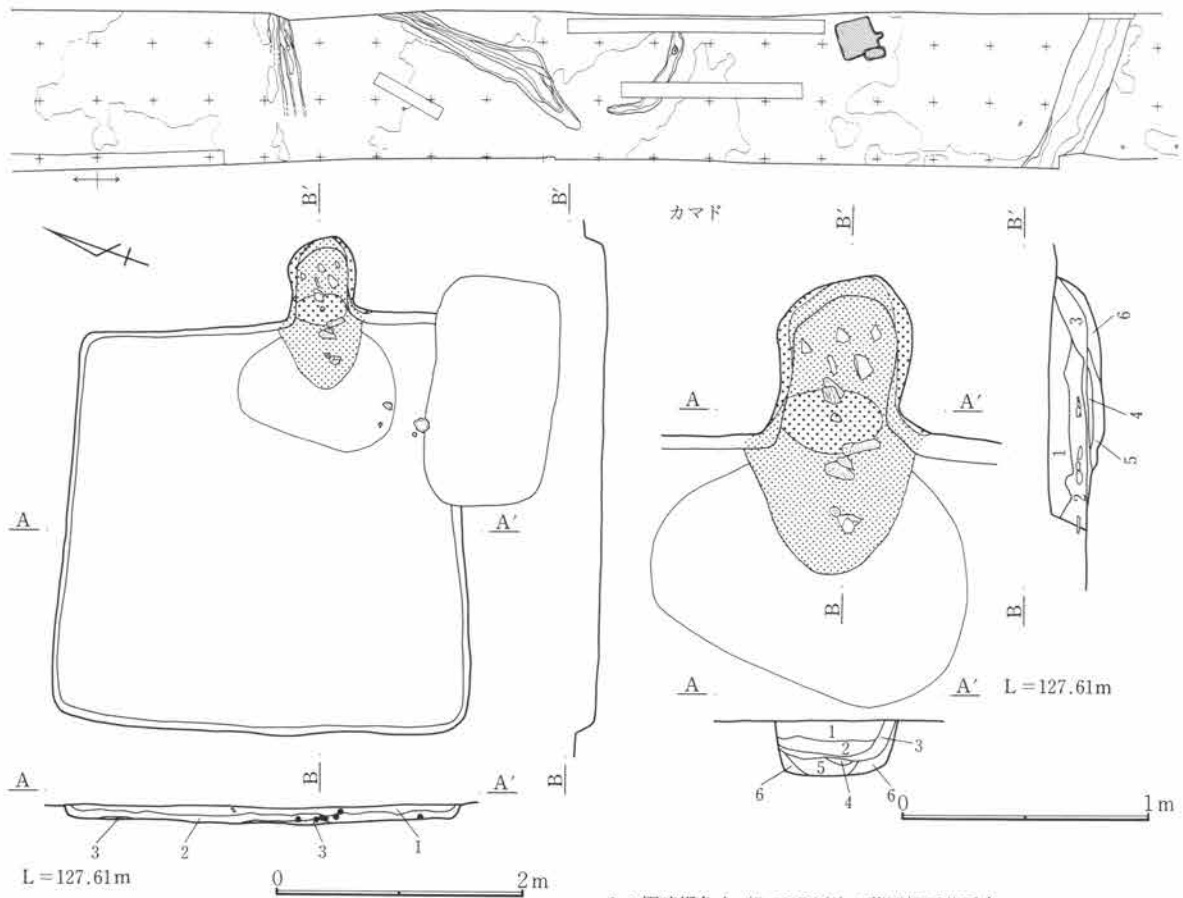
概要 本溝は14区西寄りの微高地部と、低地部との境に位置し、掘り方の浅い溝である。遺構はおおよそ南北走行であるが、僅かに東に傾く。この位置には調査前まで道路が乗っており、本溝の性格を示唆するものと思われる。

本溝は東半の1・2層土を覆土とするもの(『2期』とする)と、西半の3・4層を覆土とするもの(『1期』とする)の2条に分けられ、2期の方が新しい。この2条の溝は北部では接するが、中・南部では27cm以下の隔たりを持つ。

規模 幅 1期：57cm 2期：52cm

深さ 1期：16cm 2期：12cm

構造 1期・2期共に直線的なプランを持つ。



14区-1号住居覆土

- 1：暗褐色土 (7.5YR3/4)：白色軽石・ローム粒含。焼土小ブロック若干含。
- 2：黒褐色土 (10YR2/3)：粒子細。1層に比し白色軽石・ローム粒小。

- 3：極暗褐色土 (7.5YR2/3)：藤岡軽石若干含。

カマド覆土

- 1：黒褐色土 (10YR2/3)：粒子細。1層に比し白色軽石・ローム粒小。
- 2：暗褐色土 (7.5YR3/4)：白色軽石・ローム粒含。焼土小ブロック若干含。
- 3：極暗褐色土 (7.5YR2/3)：藤岡軽石若干含。
- 4：褐灰色土：構築材と思われるロームブロック・焼土ブロック・炭化物含。
- 5：褐灰色土：焼土若干含。灰を含。
- 6：灰褐色土：焼土・小ブロック・藤岡軽石含。

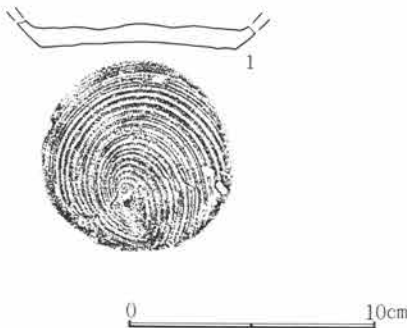
6 14区-2号溝 (第90図、図版70)

概要 本溝は14区-1号溝の東に在り、北西方向から南東に延びて南壁近くで消えている。本溝は現道の東肩に沿って位置しており、現道の西側に溝は無いが、道路に付随した遺構であろうと判断される。

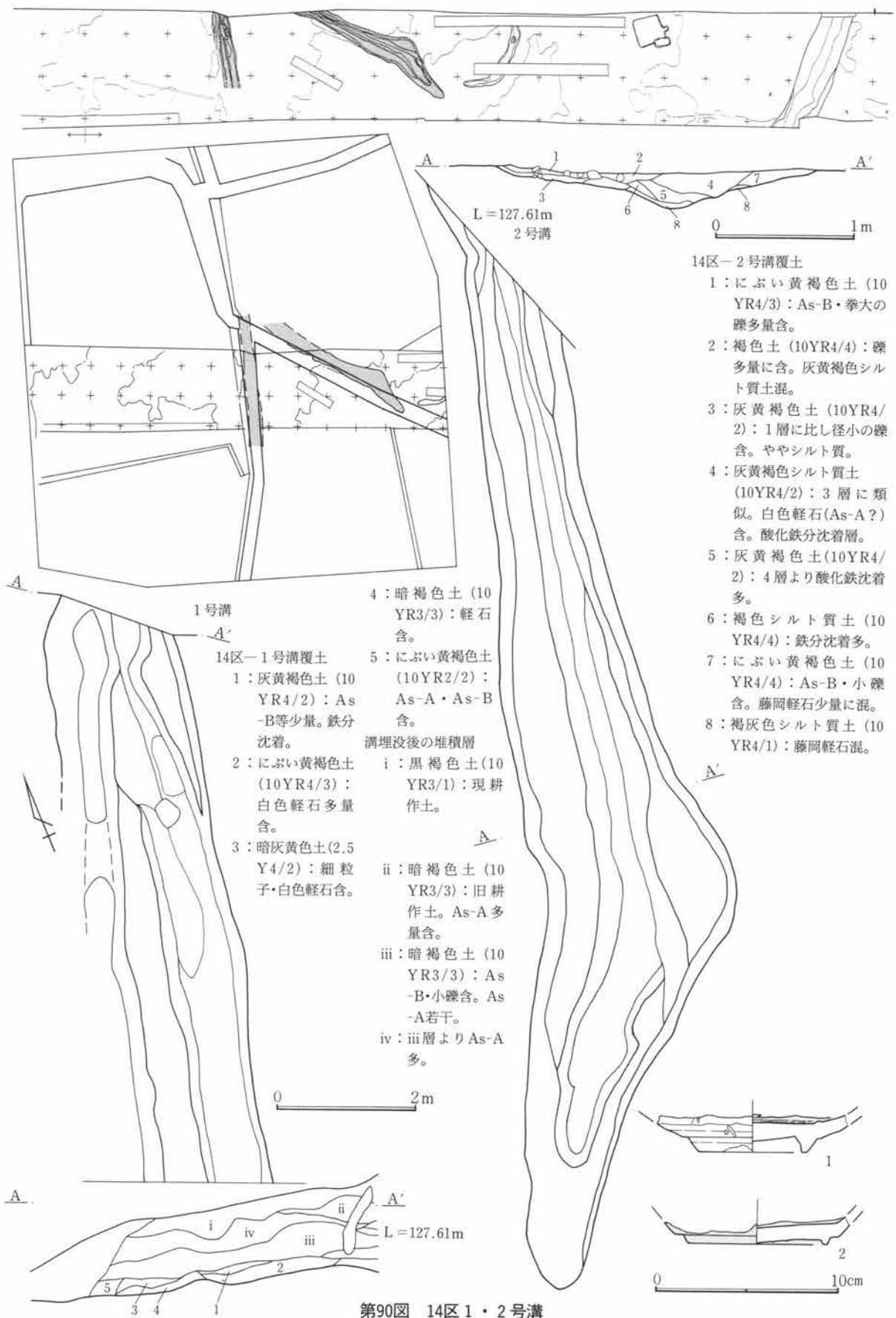
本溝からは18世紀代の瀬戸・美濃系の陶器皿などが出土しており (1・2)、覆土中にAs-Bが見られるもののAs-Aが認められないことから、18世紀前・中葉頃の所産であろうと推定される。

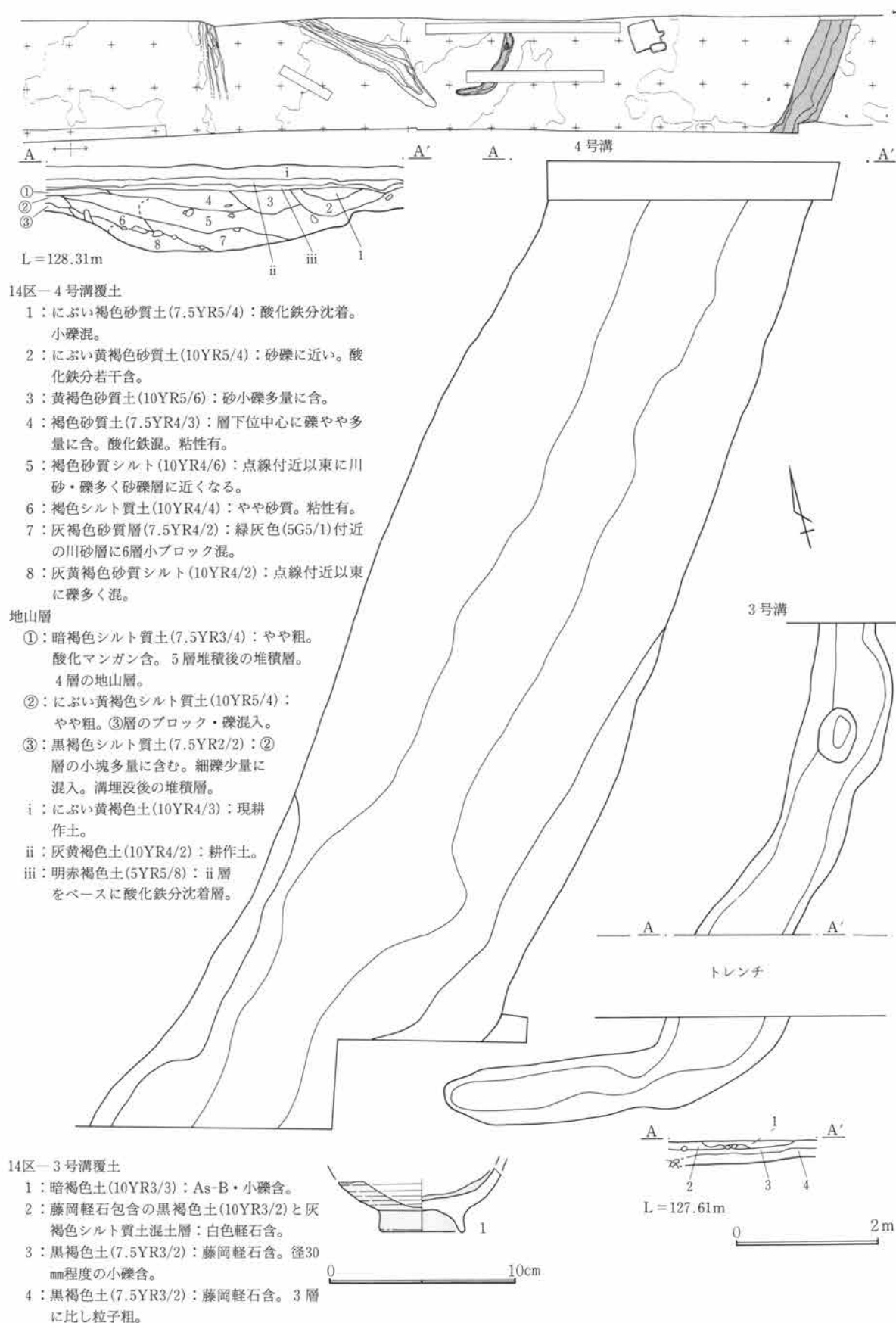
規模 幅：80～170cm 深さ：55cm

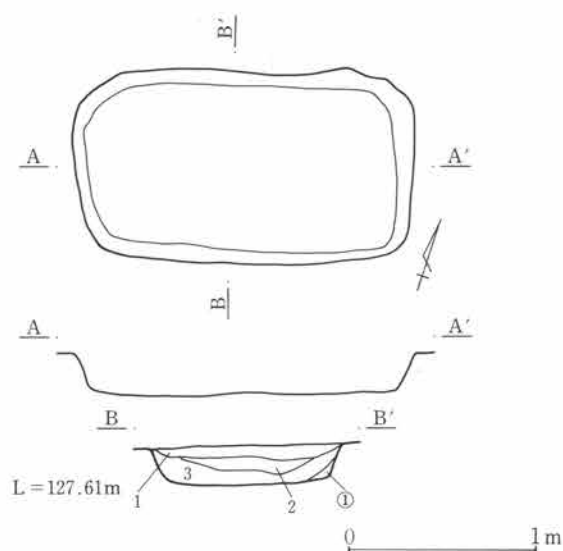
構造 およそ280cmの幅を有する、直線的なプランで掘削されている。側寄りの壁面は極めて緩やかな傾斜であるが、中央付近ではこれに比して壁面の傾斜がややきつくなり、全体として横長の薬研堀のような断面形態を呈している。



第89図 14区 1号住居及び出土遺物







14区-1号土坑覆土

- 1: 黒褐色土(10YR2/3): As -B・白色軽石と若干のローム粒若干含。
 2: 黒褐色土(10YR3/2): As -B・径10mmの小礫含。
 3: 灰黄褐色土(10YR4/2): As -B含。粒子の粗い層。
 ①: 黒褐色土(10YR2/2): 藤岡軽石若干含

第92図 14区1号土坑

7 14区-3号溝 (第91図、図版70・77)

概要 本溝は14区中位やや西寄りに位置する浅い溝で、長さ約5.5mを調査した。溝は北から入り、時計回りに4分の1回転する。

溝の覆土はAs-Bを含む一方As-Aは見られず、また18世紀の陶器碗(1)が出土することから、この溝は18世紀前・中葉頃の所産であろうと推定される。

規模 幅: 80~172cm 深さ: 5.5cm

構造 遺構の全容は不明だが、溝は140cm程度の幅で掘削され、底面は緩やかな窪みを持っている。

8 14区-4号溝 (第91図、図版70・78)

概要 本溝は14区の東端に位置し、北東から南西に走行する浅い溝で、約33mを調査した。覆土の観察から4回の掘り直しが確認され、幅広の最初の溝(『1期』とする)が埋まり(8層)地山層(②層)が堆積する中で、幅広の溝(『2期』とする)が掘り直される。2期の溝が埋没し(5~7層)地山層(①層)の新たな堆積があった後に、やや幅狭の浅い溝(『3期』とする)が掘られ、3期の溝の埋没(4層)後

に東寄りに幅狭の溝(『4期』とする)が掘られ、これが埋没(3層)した後、更に東に寄って幅狭の溝(『5期』とする)が掘られている。覆土は全体に砂礫を多く含み、各溝共に水路であったものと判断される。

出土遺物や覆土から時期は特定できなかったが、現代の土地区画に合致しないことから、近世以前の所産ではないかと推定される。

規模 幅 370~430cm (1期: 402cm 2期: 467cm 3期: 225cm以上《推定350cm》 4期: 109cm以上《推定185cm》 5期: 140cm)

深さ 33cm (1期: 62cm 2期: 75cm 3期: 33cm 4期: 34cm 5期: 40cm)

構造 確認面では約420cmの幅で、ほぼ直線的なプランを呈する。壁は緩やかに広がり、底面はやや丸みを帯びた構造を持つ。

9 14区-1号土坑 (第92図、図版72)

概要 14区-1号土坑は14区-1号住居と切り合うが、As-Bが本土坑に含まれ14区-1号住居に含まれないことから、本土坑が新しいものと判断される。

本土坑の主軸は東側でやや北に寄る東西に近い方向に有る。

規模 長軸: 178cm 短軸: 98cm 深さ: 22cm

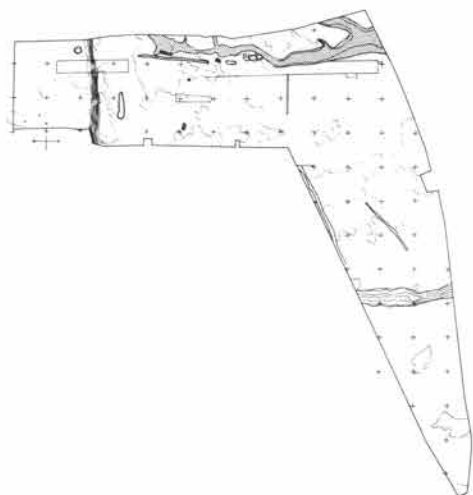
構造 隅丸の長方形のプランを呈し、底面は平底の状態である。

10 15区-1号溝 (第93図、図版70)

概要 本溝は15区の低地部北壁近くに在る極めて浅い掘り方の溝で、約35mを調査した。中心となる溝(『1-1溝』とする)はおおよそ東西に走行するが、蛇行も見られ、東端近くでは北西方向から入る溝(『1-2溝』とする)と合流する。1-1・1-2溝に新旧関係があるか否かは不明だが、その形態から本溝は自然の流路である可能性もある。

覆土中にはAs-Bとこれに伴う小豆大の火山灰を含むため、本溝は平安時代末頃の所産と判断される。

規模 1-1溝 幅: 40~314cm 深さ: 8cm



1-2 溝 幅：150～160cm 深さ：10cm

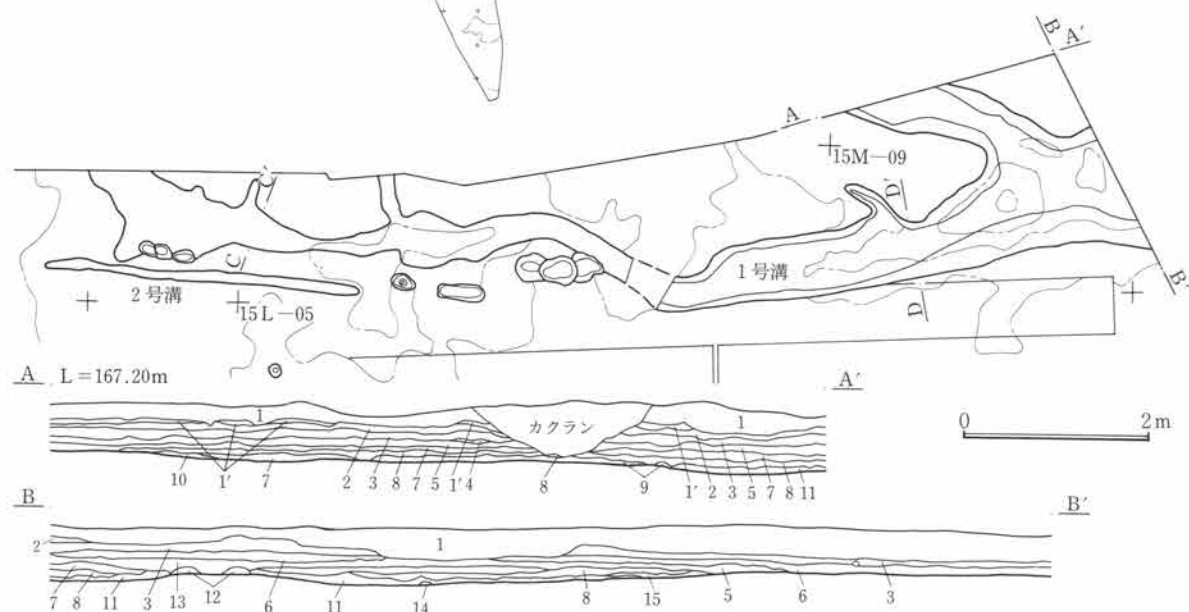
構造 1-1 溝はおおよそ190cm、1-2 溝は160cm以下の幅で掘削され、底面はやや丸味を持つ。

12 15区-2号溝 (第93図)

概要 本溝は15区の低地部西寄り、15区-1号溝の南に位置する掘り方の極めて浅い溝であり、10.60mの全長を測る。尚、時期等は特定できなかった。

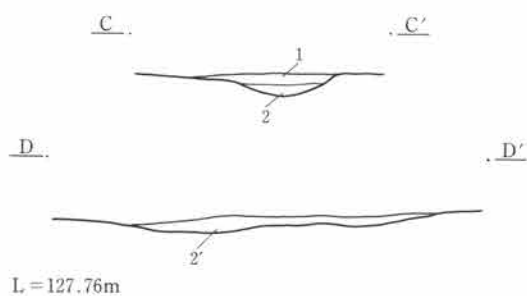
規模 幅：22～38cm 深さ：6cm

構造 幅35cm程の直線的プランを呈する溝である。



15区-1号溝覆土 (北壁セクション)

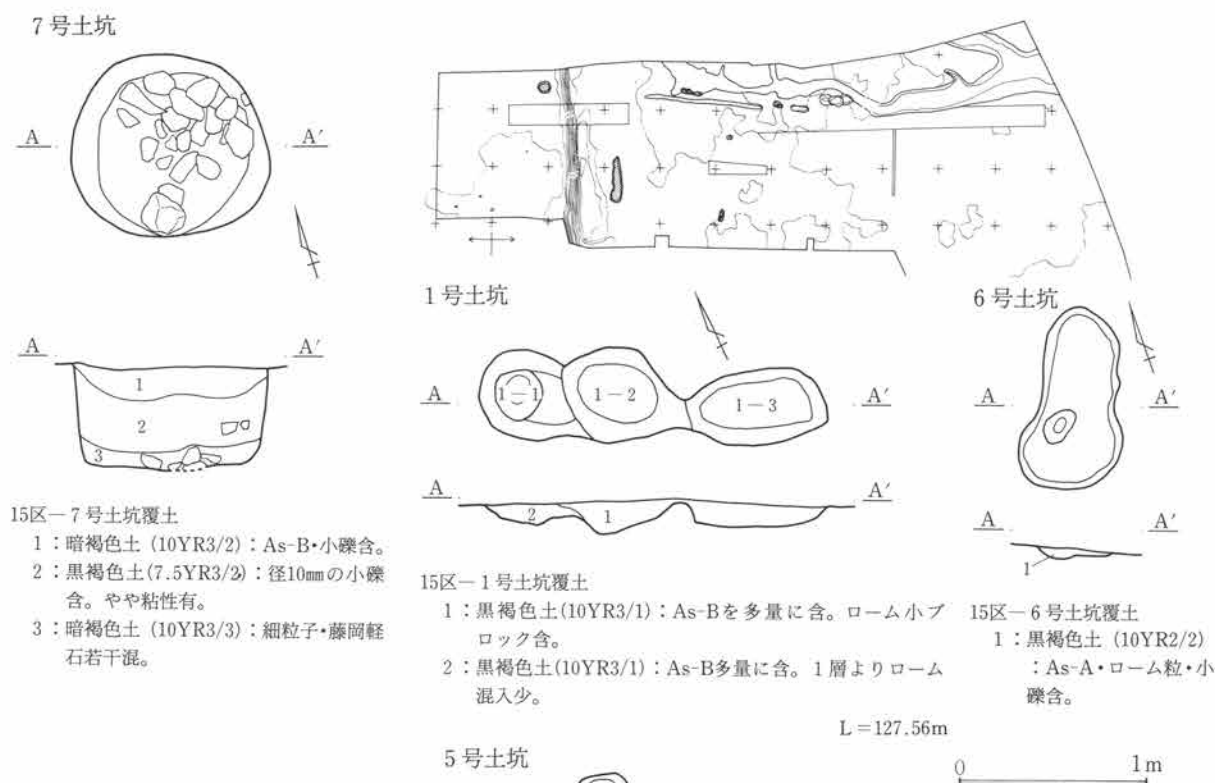
- 1：現耕作土：As-A多量含。
- 1'：1層よりAs-A多量含。砂質層。
- 2：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：As-A含。少量の鉄分沈着。
- 3：暗褐色土(10YR3/3)：As-A含。鉄分は2層に比し少い。若干のAs-B含。
- 4：暗褐色土(10YR3/3)：As-A多量に含。鉄分は3層に比し少。砂質層。
- 5：黒褐色土(10YR2/3)：As-A・As-B同量含。鉄分沈着有。
- 6：暗褐色土(10YR3/3)：5層より軽石少混。鉄分の沈着少。風化した片岩含。
- 7：黒褐色土(7.5YR3/2)：As-B多量に含。主に細粒子の風化した片岩の小礫含。
- 8：黒褐色土(7.5YR3/2)：As-B極多量に含。純層に近いブロック状になる部分有。
- 9：黒褐色土(10YR2/2)：As-B・純層に近い層。
- 10：黒褐色土(10YR2/2)：9層に比しAs-B少。灰混入するか。
- 11：As-B純層：上部に小豆色の火山灰層有。
- 12：黒褐色土(10YR2/2)：As-B多量に含。シルト質の細粒子土。
- 13：黒褐色土(10YR3/1)：9層に近い。As-B極多量に含。
- 14：黒色土(10YR2/1)：細粒子シルト質層。
- 15：褐灰色土(7.5Y4/1)：As-B含。小豆色の火山灰を多量含。鉄分沈着有。やや粘質土。



15区-1号溝覆土

- 1：黒色土：As-B多量含。
- 2：As-Bのほぼ純層：小豆色の灰含。
- 2'：A-A'の2層：下部に灰が堆積。

第93図 15区 1・2号溝



13 15区-1号土坑 (第94図、図版72)

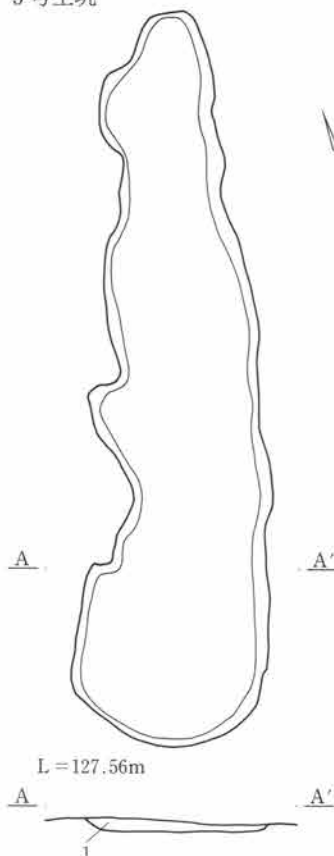
概要 本土坑は15区-1号溝・2号溝の間に在り北西-南東に並ぶ3つの土坑(西から『1-1土坑』『1-2土坑』『1-3土坑』とする)からなる。

何れもAs-Bを多量に含み、As-B降下後、あまり時を経ずに掘削されたことが想定される。

規模 全長:188cm 1-1土坑 長軸:52cm以上 短軸:47cm 深さ:10cm 1-2土坑 長軸:50cm 短軸:48cm 深さ:17cm 1-3土坑 長軸:73cm 短軸:49cm 深さ:13cm

構造 1-1土坑は長円形、1-2土坑は方形、1-3土坑は隅丸長方形のプランを呈し、底面形態は前2者は丸底気味をなし、後1者は平底を呈する。

5号土坑



15区-5号土坑覆土

1: 黒褐色土: As-A多量含。鉄分の沈着有。

第94図 15区1・5～7号土坑

14 15区-5号土坑 (第94図、図版72)

概要 本土坑は15区の低地部と微高地境の段差の直下に位置する。土坑主軸はやや東に振れる北方を示す。

覆土にAs-Aを多量に含み、江戸時代後期の所産と判断される。

規模 長軸:392cm 短軸:102cm 深さ:6cm

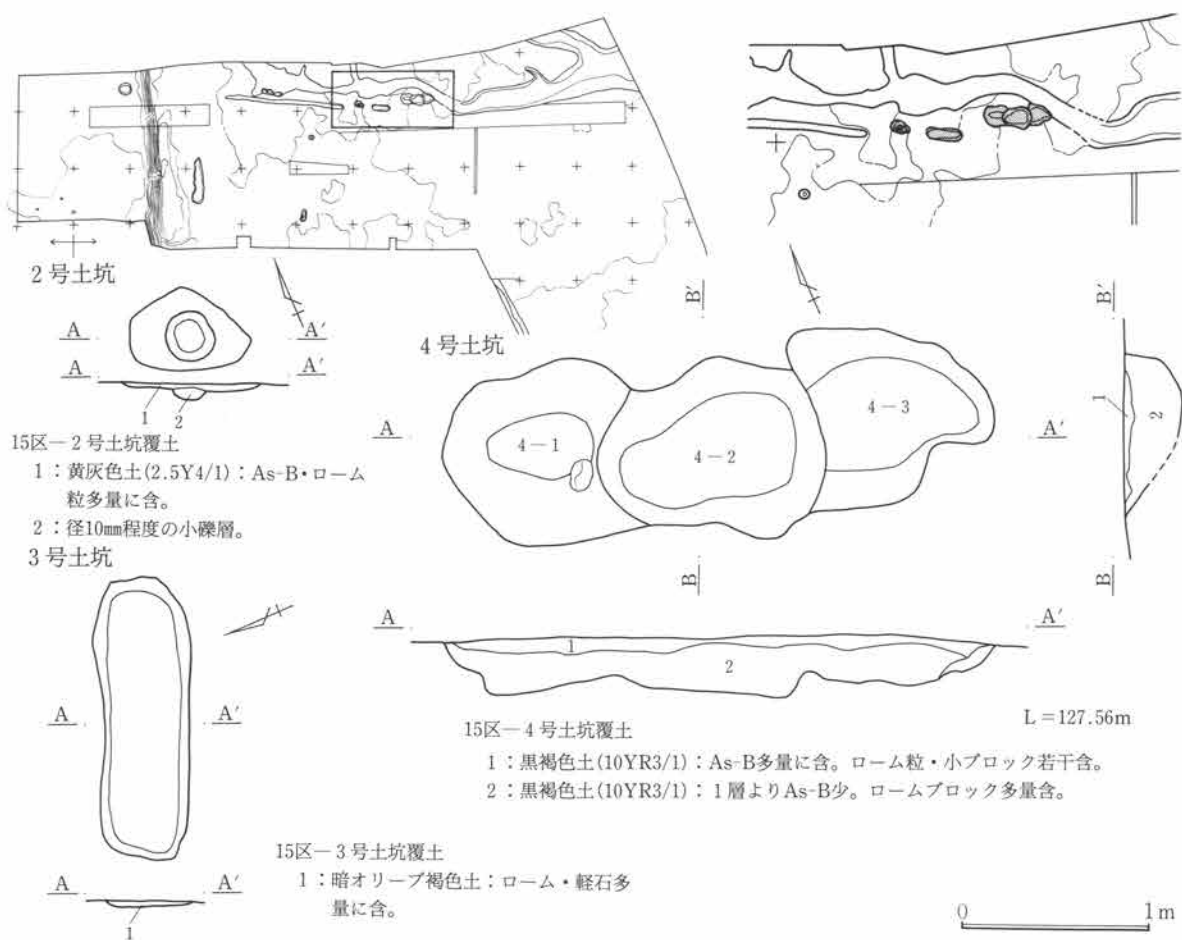
構造 不整形のプランを呈し、底部形態は平底である。

15 15区-6号土坑 (第94図、図版72)

概要 本土坑は15区の低地部西寄りに位置し、土坑の主軸はやや北東を示す。覆土にはAs-Aを含んでいる。

規模 長軸:96cm 短軸:54cm 深さ:6cm

構造 不整形のプランを呈し、底部形態は丸底気味である。



第95図 15区2・3・4号土坑

16 15区-7号土坑 (第94図)

概要 本土坑は15区微高地部の東端、北壁寄りに位置するしっかりした掘り方の土坑である。

底面には過半の範囲に、およそ20cm以下の礫が敷かれるように配置されている。用途不詳、時期を特定することはできなかったが、覆土中にAs-Bが含まれることから中世遺構の所産と判断される。

規模 径:105×96cm 深さ:55cm

構造 円形のプランを呈し、しっかりした掘り方を持つ。底面は平底である。

17 15区-2号土坑 (第95図、図版72)

概要 本溝は15区1号溝の南、15区-2号溝の東に位置する。不整形のプランの土坑であるが、中央に小ピットが掘られている。

15区-1号土坑同様As-Bを多量に含むが、小ピット部分には含まれない。

規模 長軸:74cm 短軸:52cm 深さ:9cm

小ピット 径:17×15cm 深さ:7cm

構造 不正形のプランを呈し、中央に隅丸方形の小ピットを伴う。底部は平底。小ピットは丸底である。

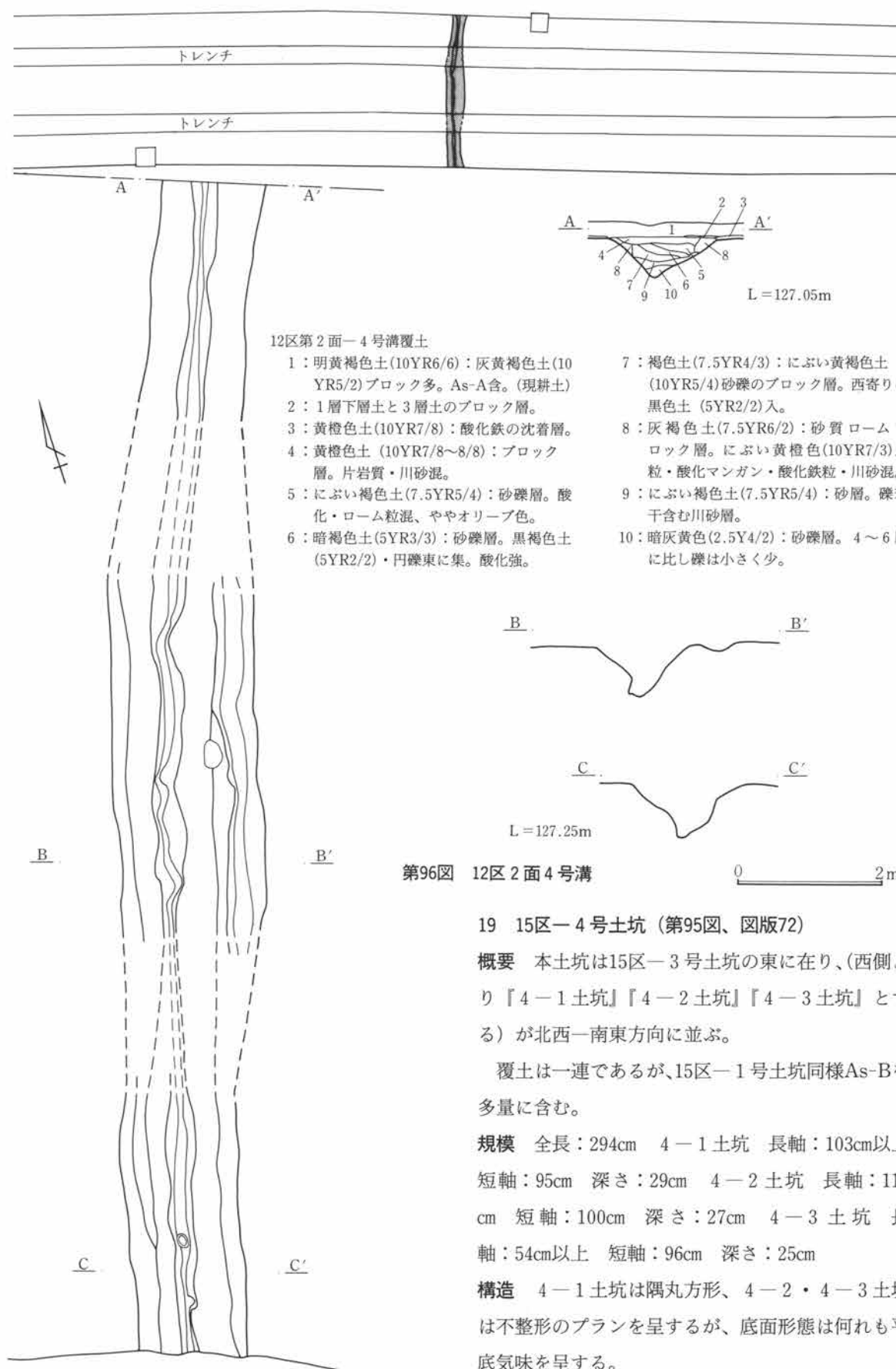
18 15区-3号土坑 (第95図、図版72)

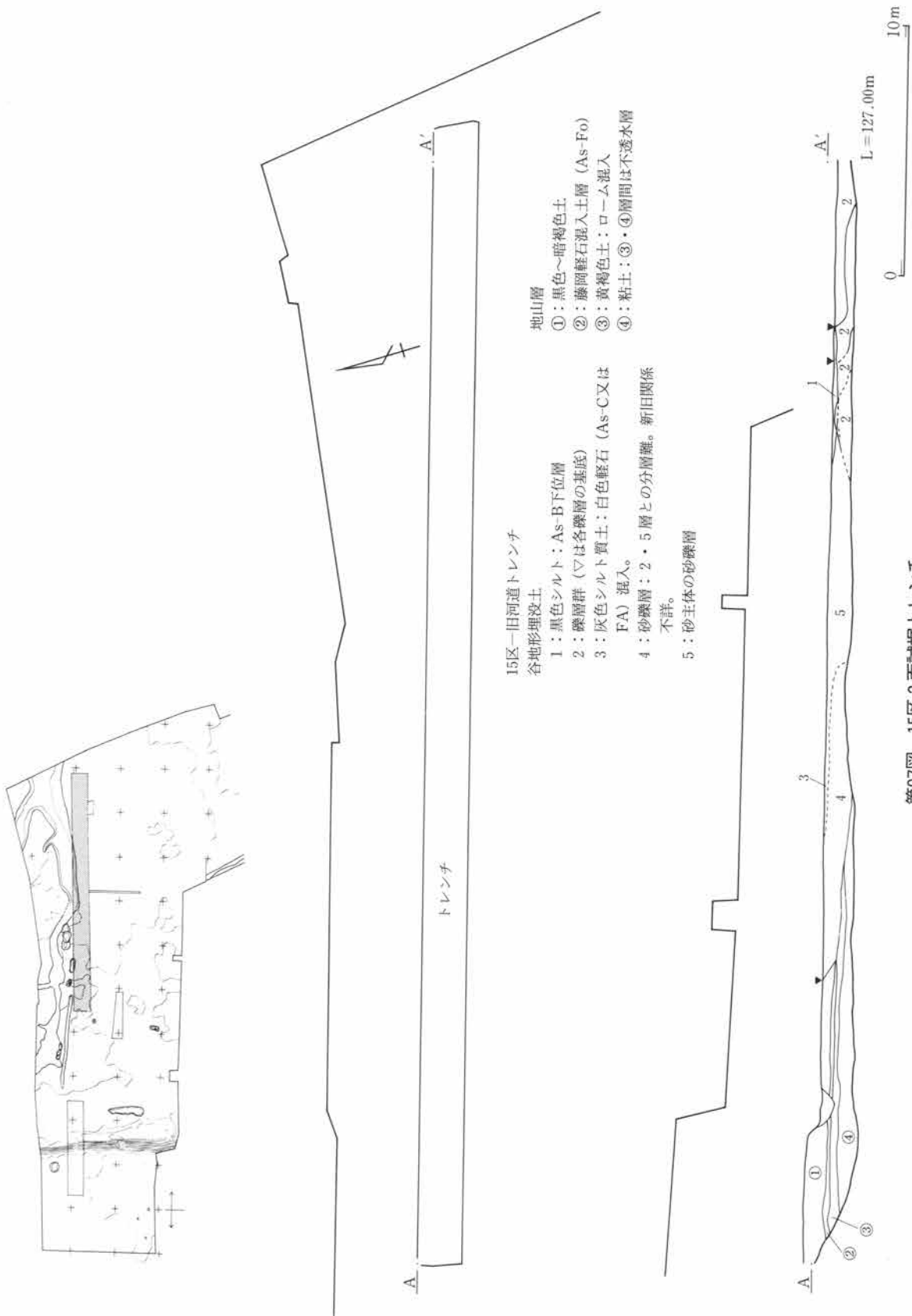
概要 本土坑は15区-2号土坑と15区-4号土坑の中間に位置する、長軸は東側がやや南に傾く東西走行の浅い土坑である。

覆土から時期等を特定することはできなかった。

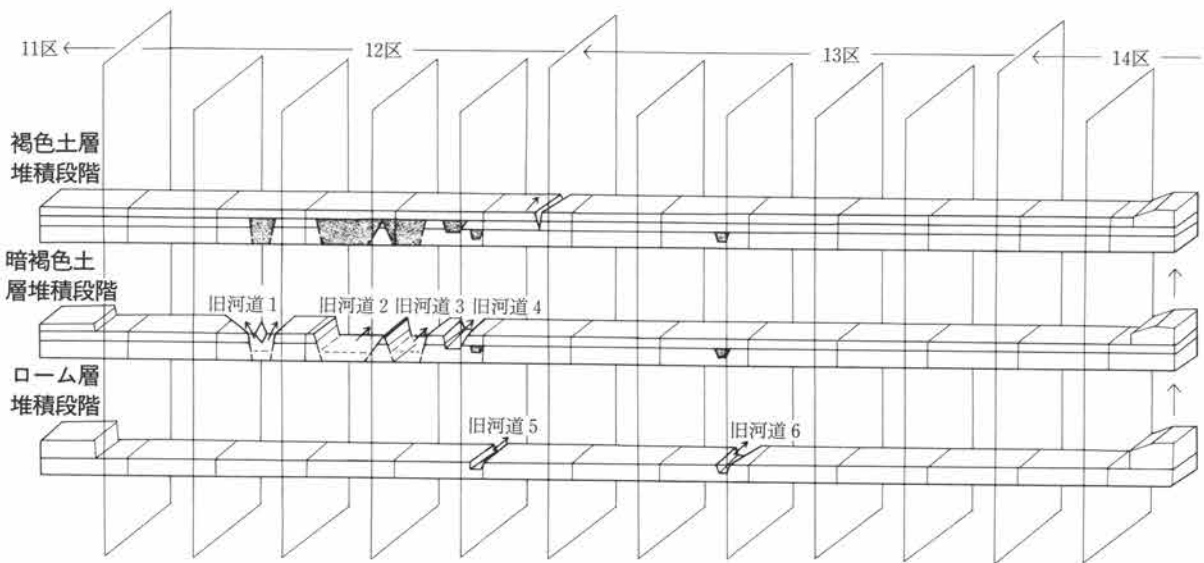
規模 長軸:148cm 短軸:52cm 深さ:5cm

構造 全体的構造は詳かでないが、隅丸の長方形を呈し、底部形態は平底を呈する。





第97図 15区2面試堀トレンチ



第98図 旧河道概念図

20 12区2面—4号溝 (第96図)

概要 本溝は本来第1面で調査されるべき溝であったが、12区第2面への試掘調査時点で確認された溝であり、約16mの長さを調査した。走行は北北東—南南西を示す、しっかりした掘り方の薬研の堀である。覆土中には川砂・礫を多く含み、水流によるアグリののような状態が観察されることから、流水の形跡が認められる。

時期等は特定できなかったが、形態等から中世の所産ではないかと思われる。尚、溝の性格については本溝が低地部の水田地帯に位置していること、また通水の痕跡が見られることから、農業用水としての使用を考えられるが、一方東平井の東端に近い位置に在ることと薬研の堀で通水には適さないと判断されることから、平井城下の範囲を区画する性格を持つものとも考えられる。

規模 幅：130～210cm 深さ：148cm

構造 約170cm幅の薬研の堀である。壁面の傾斜はやや緩い傾向がある。

21 11～14区—旧河道 (図版74)

概要 11区から14区にかけての低地部に対しては、下位面（第2面）の遺構確認のため試掘調査を行った。当該地域の土層堆積はローム層を基盤とし、その上に暗褐色系統、更に褐色系統の土が乗るという

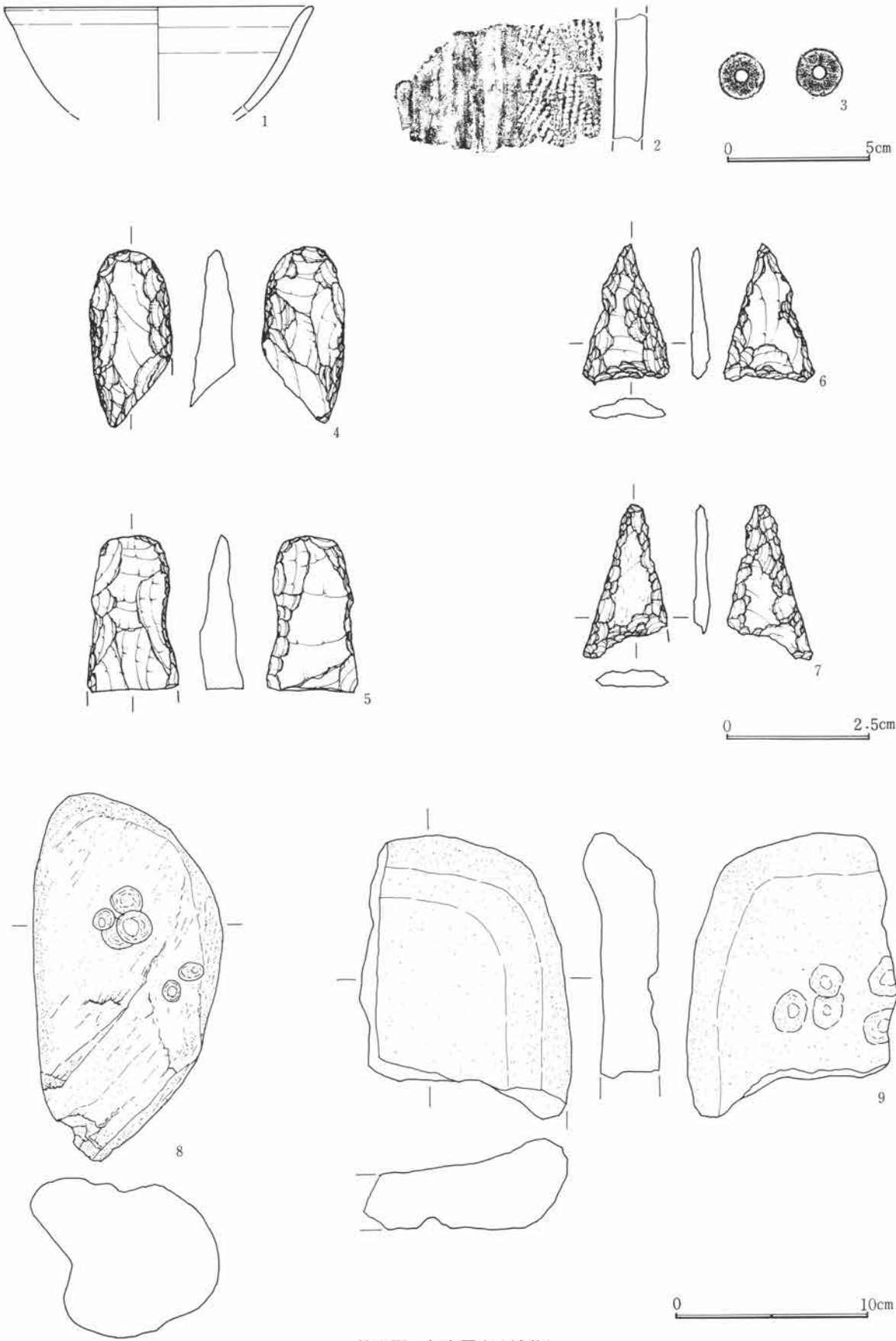
堆積状況を示していた。この試掘調査では最上層の褐色土面に掘り込んだ12区2面—4号溝が確認されているが、この他にも旧河道や風倒木痕・樹木痕等を何カ所かで確認している。

このうち旧河道は砂礫層として見られるものであるが、何れもその規模は余り大きくないものであった。これらの旧河道は第98図の概念図に示したように、ローム層を削り込むものが12区と13区に各1カ所、この上に堆積した暗褐色土を削り込む河道が12区に5カ所確認されている。これらの河道は完新生成に形成されており、その時期は特定できなかったが、これらの河道が埋没した後にその上を褐色土が覆いAs-B下の水田面が形成されることになる。

22 15区—旧河道 (第97図)

概要 15区の第2面に対する試掘調査で確認された。試掘調査に於いて、微高地にはAs-Fo（藤岡軽石）を含むローム大地が形成され、これを削って6本以上の旧河道が確認される。旧河道は何れも砂礫層からなるが、2・4・5層がこれに当たり、実線・破線で区画される河道群が構成されている。

これらの形成時期は特定できないが、4層上面にはAs-CまたはFAと思われるテフラを包含する灰色シルトが、また2層の上位層はAs-Bに当たるので、完新生の古墳時代以前に形成されたものである。



第99図 包含層出土遺物

第7節 小 結

以下、本遺跡のまとめとして、土地の形成と土地利用について若干述べたいと思う。

① 土地の形成

本遺跡は全体として低地に属し水田部分が多いが、猿川地区と三ツ目川原地区、及び土井下地区14区付近が微高地となっている。テフラ分析の所見（第7部参照）によれば、このうち土井下地区14区付近の微高地では、下位層に藤岡軽石（As-Fo、約8,200年前）の堆積が見られ、中位層では部分的にC軽石（As-C、4世紀初頭）、上位層ではB軽石（As-B、1108）が、更に上位にA軽石（As-A、1793）が確認されている。また（分析報告では調査事務所西の工事現場となっている）猿川地区では下位層に板鼻黄色軽石（As-YP、1.3～1.4万年前）が確認されている。これらのテフラは何れも浅間山噴出のものであるが、微高地部分の基底層は更新世から完新世の早い段階で形成されていたことが分かる。この上にテフラの降下を受け乍ら板鼻黄色軽石と藤岡軽石降下の間、藤岡軽石とC軽石降下の間、C軽石とB軽石降下の間の3回に亘って旧河道を示すと考えられる砂礫層も見られ、本報告書に掲載した東平井各遺跡と同様複雑な土地形成の過程が伺われる。

これに対し低地部では、土井下地区の12・13区付近でB軽石降下以前に地形の形成が行われていたことが確認できたほか、前述の分析所見によって、東端の15区では微高地の藤岡軽石層を切ってC軽石降下前までに大きな谷地形の形成がなされ、その後中世に入る前に少なくとも2回の谷地形の形成と埋没の痕跡が確認されたということである。

② 土地利用について

次にこうした自然地形に対する遺構分布の状況を見てみたい。調査件数は僅かであったが、猿川地区と土井下地区14区付近双方の微高地部分には竪穴住居を確認・調査することができた。このうち猿川地

区は土師器片と須恵器片の散布が確認されている平井地区No.32遺跡に含まれているが、その範囲は字猿川のほとんどと三ツ目川原の一部を含んでいる。本遺跡付近では住居等遺構の分布範囲は東半部西寄り付近に限定されている。また、土井下地区では1軒を確認できたに過ぎなかった。近世に至ってはこの台地部分には現代の土地区画に符合する溝等は見られるが、平安時代以前に特定できる遺構は竪穴住居以外には認められず、該地の土地利用の状況は詳かでは無い。

一方低地部のうち、12・13区付近ではB軽石に覆われた水田面が確認されている。この水田面は全体に遺存状況は悪く、東方及び南方に向かって消えてしまっているため全体的形態などを把握することはできなかったのであるが、プラント・オパール分析所見（第7部参照）によるとB軽石直下と混入層からは広い範囲に亘って稲作の行われていたことが推定できるということである。15区の同時期の土地利用状況については、特段の遺構が発見されなかったことから特定できなかった。一方、12・13区付近の低地部では流水の痕跡のある2面—4号溝が発見・調査されている。この溝の形態は葉研堀であり中世の所産と推定されるが、対応する溝が発見されなかったことから館址等に伴うものである可能性は少く、用水堀であるか、何らかの土地区画のために掘削されたものと推察される。尚、現在の地籍には特定できるものが無く、平井地区の中世の土地利用とからめて興味深い遺構である。

以上述べてきたように本遺跡は微高地部と谷地部があるが、現代に於いてはその状況に拘わり無く、主に該地は水田として利用されている。こうした状況は近世まで遡りえるものと思われるが、中世には異なった土地利用のあったことが窺える。また、平安期に於いては、微高地は住居を含む土地利用があり、低地部に於いては水田を中心とする土地利用のあったことが確認された。

第7章 東平井土井下遺跡の調査

東平井土井下遺跡遺物一覧

I 猿川地区出土遺物

1 1号住居

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第73図 図版75	10-000001	須恵器坏 (破片)	口径 推定9.9 底径 5.1 器高3.35	器面荒れる。右回転ロクロ 整形。底部回転糸切	①酸化焰・硬 ②内外面黒褐色 (2.5Y1/3) ③粗砂粒
2	第73図 図版75	10-000002	須恵器坏 (3/4)	口径 10.6 底径 5.3 ×5.6 器高 4.2	右回転ロクロ整形。底部 回転糸切	①還元焰やや・硬 ②黄灰色 (2.5Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
3	第73図 図版75	10-000003	蓋 (1/4)	底径 推定10.0 器高 1.9	回転ロクロ整形 外面2群 の筥ケズリ	①還元焰 ②灰白色 (7.5Y 8/1) ③細砂粒
4	第73図 図版75	10-000004	羽釜 (破片)	口径 推定20.6	口縁やや内傾 口縁～肩部 内外面横ナデ	①還元焰・やや硬 ②にぶい黄 褐色 (10YR5/4) ③粗砂粒
5	第73図 図版75	10-000005	羽釜 (破片)	口径 推定19.4	外面上半ナデ。下半下方向 への筥ケズリ後一部ナデ	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5 YR5/6) ③粗砂粒(片岩)
6	— 図版78	10-000022	羽釜 (破片)	残存19.2×5.5	器面荒れる。口縁内傾。鈐 やや薄手	①還元焰・普通 ②にぶい黄橙 色 (10YR6/3) ③粗砂粒(片岩)
7	— 図版78	10-000023	須恵器坏 (1/6)	残存6.8×5.1	口縁外反。体部膨らむ。	①還元焰・普通 ②灰色(5Y 6/1) ③細砂粒(片岩)
8	— 図版78	10-000024	羽釜 (1/6)	残存13.6×13.5	口縁内傾、口唇部立つ 体部 横位のナデ 鈐薄い	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5 YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
9	— 図版78	10-000025	羽釜 (破片)	残存12.5×10.8	口縁内傾、口唇部立つ。鈐 断面三角 体部横位のナデ	①還元焰・普通 ②褐灰色(7.5 YR4/1) ③粗砂粒(片岩)
10	— 図版78	10-000026	土師器甕 (破片)	残存9.5×12.5	底部底面筥調整。内面指ナ デ	①酸化焰・普通 ②明褐色(5 YR5/6) ③粗砂粒(片岩)
11	— 図版78	10-000030	小型甕 (破片)	残存6.2×5.5	口縁外反。肩部丸味を持つ 体部筥ケズリ後ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙 色 (7.5YR6/4) ③細砂粒
12	— 図版78	10-000031	土師器碗 (破片)	残存3.7×4.9	口縁外反ぎみに立ちあがる 腰部膨らむ 横位のナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (7.5YR5/4) ③細砂粒

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
13	11-100001	土師器坏	9	80g	
14	11-100002	土師器甕	1	10	
15	11-100003	土師器碗	2	20	
16	11-100004	須恵器坏碗	2	25	
17	11-100005	土師器甕	2	100	

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
18	11-100006	羽釜	70	1000g	
19	11-100007	須恵器坏	1	20	
20	11-100008	須恵器碗	2	80	
21	11-100009	土師器	5	20	カマド
22	11-100010	羽釜	1	70	カマド

2 2号住居出土遺物

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第75図 図版75	10-000006	須恵器坏 (2/3)	口径 13.8×13.8 底径 6.2×6.0 器高 6.3	右回転ロクロ整形。底面回 転糸切後丁寧なナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい黄 橙色 (10YR7/4) ③細砂粒 (片岩)
2	第75図 図版75	10-000010	須恵器坏 (1/2)	口径 10.6 底径 4.6 器高 3.3	右回転ロクロ整形。口縁外 反。底部回転糸切	①還元焰・やや軟 ②黄灰色 (2.5Y4/1) ③細砂粒(片岩)
3	第75図 図版75	10-000013	須恵器碗 (1/4)	口径 10.8 底径 6.0 器高 4.7	(右回転)ロクロ整形。底部 回転糸切後高台縁ナデ	①還元焰・普通 ②にぶい黄橙 色 (10YR6/4) ③細砂粒(片岩)
4	第76図 図版75	10-000011	須恵器碗 (1/2)	口径 11.5 底径5.8× 5.5 器高 5.05	右回転ロクロ整形。回転糸 切後丁寧なナデ	①還元焰・普通 ②灰白色 (10 YR7/1) ③細砂粒(片岩)
5	第76図 図版75	10-000009	須恵器碗 (1/3)	口径 10.5 底径 5.2 器高 4.6	(右回転)ロクロ整形。底部 回転糸切後丁寧なナデ調整	①酸化焰・普通 ②にぶい赤褐 色 (5YR5/4) ③粗砂粒(片岩)
6	第76図 図版76	10-000015	須恵器碗 (1/4)	口径 推定11.2 底径 2.9 器高 4.5	(右?)回転ロクロ整形。 底部糸切後ナデ	①酸化焰・やや硬 ②明赤褐色 (5YR5/6) ③粗砂粒(片岩)
7	第76図 図版75	10-000008	須恵器碗 (1/2)	口径 推定12.4 器高 4.5	全体が雑な作り 右回転ロ クロ整形 底部筥ケズリ	①還元焰・普通 ②にぶい黄橙 色 (10YR6/4) ③細砂粒
8	第76図 図版75	10-000014	須恵器碗 (破片)	口径 推定11.6 底径 推定7.0 器高 4.5	(右回転)ロクロ整形。 口縁外反	①還元焰 ②灰白色 (5Y7/2) ③粗砂粒(雲母・長石)
9	第76図 図版75	10-000012	須恵器皿 (完形)	口径 12.1 底径 6.7 器高 3.0	(右回転)ロクロ整形。底部 回転糸切後丁寧なナデ調整	①還元焰・やや軟 ②浅黄褐色 (10YR8/3) ③細砂粒(片岩)
10	第76図 図版75	10-000007	須恵器碗 (底部)	底径 推定8.8	回転ロクロ整形。灰釉	①還元焰・硬 ②灰白色 (5Y 7/1) ③細砂粒

第7節 小 結

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
11	第76図 図版76	10-000016	灰釉陶器碗 (破片)	底径 推定8.0 残存 7.4×8.1	右回転ロクロ整形。口縁 ～頸部釉掛け	①還元焰・やや硬 ②灰黄色 (2.5Y7/2) ③精製砂
12	第76図 図版76	10-000017	土師器甕 (破片)	底径7.2×7.0	体部横ナデ 底部内面指ナ デ外面篋ケズリ	①- ②にぶい赤褐色(5YR 5/4) ③粗砂粒
13	第76図 図版76	10-000018	羽釜 (1/4)	口径 推定17.4 底径 6.0 器高 推定25.4	右回転ロクロ整形。体部 ～腰部外面ロクロ後篋ケズ リ	①- ②赤灰色(YR5/1) ③粗砂粒
14	— 図版78	10-000027	羽釜 (破片)	残存 8.6×16.4	口縁内傾。鈐断面三角。横 位のナデ	①還元焰・普通 ②にぶい褐色 (7.5YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
15	— 図版78	10-000028	羽釜 (破片)	残存 16.5×10.9	口縁内傾。鈐断面三角。縦 位の篋ケズリ後横位のナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい褐色 (7.5YR6/3) ③粗砂粒(片 岩)
16	— 図版78	10-000029	羽釜 (破片)	残存 11.0×14.5	口縁内傾から直立ぎみ。鈐 断面三角。横位のナデ	①還元焰・普通 ②にぶい黄褐 色(10YR7/3) ③粗砂粒(片岩)
17	— 図版78	10-000034	土師器環 (1/6)	残存 4.8×8.9	体部やや膨らみ、口縁外反	①還元焰・普通 ②黄灰色(2.5 Y4/1) ③粗砂粒(片岩)
18	— 図版78	10-000035	土師器小型甕 (1/10)	残存 6.0×5.5	脛部く字。口縁外反。口縁 横ナデ、体部縦位篋ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい赤 褐色(5YR5/3) ③細砂粒(片 岩)
19	— 図版78	10-000036	土師器小型甕 (1/10)	残存 7.3×4.2	脛部く字。口縁短く外反。 口縁横ナデ。体部縦位篋ナデ	①酸化焰・やや硬 ②明褐色 ③粗砂粒(片岩)
20	— 図版78	10-000037	羽釜 (破片)	残存 19.2×13.8	口縁内傾。鈐断面三角	①酸化焰・普通 ②灰黄色(2.5 Y7/3) ③粗砂粒(片岩)
21	— 図版78	10-000038	羽釜 (破片)	残存 14.0×13.0	口縁内傾。鈐断面三角で上 面平	①還元焰・普通 ②灰黄色(2.5 Y7/3) ③細砂粒(片岩)
22	— 図版78	10-000039	羽釜 (破片)	残存 5.0×8.1	No21同様内面炭化物付着	①還元焰・硬 ②浅黄色(2.5 Y7/3) ③細砂粒(片岩)
23	— 図版78	10-000040	灰釉陶器碗 (破片)	残存 5.1×2.5	底部片、貼付高台 口縁～腰部釉掛け	①還元焰・硬 ②灰白色(10Y 8/1) ③精製砂
24	— 図版78	10-000041	灰釉陶器碗 (破片)	残存 6.1×4.7	釉掛け	①還元焰・硬 ②灰白色(10Y 8/1) ③精製砂

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
25	11-100011	須恵器碗	8	340g	
26	11-100012	須恵器碗	22	220	
27	11-100013	須恵器小型甕	1	20	
28	11-100014	須恵器甕	2	70	
29	11-100015	羽釜	25	1370	
30	11-100016	羽釜	122	380	
31	11-100017	羽釜	5	160	ビット2
32	11-100018	須恵器碗	2	20	ビット3

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
33	11-100018	須恵器碗	2	20g	ビット3
34	11-100019	羽釜	1	40	ビット3
35	11-100020	羽釜	13	520	カマド
36	11-100021	羽釜	11	400	カマド掘り方
37	11-100022	羽釜	3	200	カマド掘り方
38	11-100023	羽釜	10	220	掘り方
39	11-100039	灰釉陶器碗	4	20	

3 3号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第78図 図版76	10-000019	須恵器碗 (破片)	口径推定12.3	右回転ロクロ整形。口縁持 上げ時の変形有	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙 色(2.5Y6/3) ③細砂粒
2	第78図 図版76	10-000020	灰釉陶器碗 (破片)	口径推定18.2	口縁～体部釉つけ掛け	①還元焰・やや硬 ②灰白色 (5Y7/2) ③精製砂

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-100024	土師・須恵環	6	70g	
4	11-100025	須恵器甕	1	70	
5	11-100026	灰釉環	1	10	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
6	11-100027	羽釜	25	540g	
7	11-100028	土師器塊	1	10	

第7章 東平井土井下遺跡の調査

4 包含層出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考
1	第80図 図版76	10-000021	縄文土器 深鉢 (破片)	口縁 器厚0.4	口縁外反。口唇内折。楕円 形隆帯貼付。平行沈線内	①非常に良 ②褐灰色(7.5YR 6/1) ③細砂粒 ④後期
2	第80図 図版76	20-000001	打製石斧	長 18.7 幅 8.4 厚さ 2.5 重量 640g	側縁四方敲いて作り出して いる。短冊形に分類される。	石材：緑色片岩
3	第80図 図版76	20-000002	台石	長 23.8 幅 17.9 厚 10.5 重量 7.3kg	一方端部欠損、使用面浅い 凹みを持つ。側下面敲痕有	石材：粗粒安山岩
4	第80図 図版76	20-000003	台石	長 13.5 幅 14.55 厚 13.8 重量 4.3kg	下面剝落、両端欠損。上・ 両側面磨られ平滑	石材：粗粒安山岩
5	第80図 図版76	40-000001	鉄片	長 4.05 幅 4.25 厚さ 0.6	薄い鉄板片で円形を呈する	用途不祥。

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1号井戸トレンチ					
6	11-100029	土師器坏甕	6	60g	
10区上層					
7	11-100030	羽釜	7	80	
8	11-100031	灰釉	1	20	
9	11-100035	縄文土器	1	10	
10	11-100036	弥生土器	2	10	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
11	11-100037	縄文土器	5	80g	
10区10層					
16	11-100033	土師器甕	20	140	
その他					
12	11-100032	土師器坏	12	20	
13	11-100034	土師器椀	20	1211	
14	11-100038	縄文土器	1	20	

5 石 器

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	21-000001	フレーク	1	260g	13区
2	21-000002	チャート	1	10	10区

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	21-000003	板碑片か	1	1400g	片岩

1 12区2面4号溝出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	図版78	10-000032	須恵器甕 (破片)	残存 6.5×13.0	体部内外面叩き目	①還元焰・やや硬 ②灰白色 (7.5Y7/1) ③-
2	図版78	10-000033	軟質陶器鉢 (破片)	—	口縁やや内湾気味に立ち端 部やや丸味を持つ	①還元焰・やや軟 ②灰色(5Y 4/1) ③細砂粒

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000002	土師器甕	3	100g	
4	11-000003	土師器甕	32	210	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
5	11-000004	須恵器甕	1	40g	
6	11-000005	縄文土器	1	120	

2 12区1面

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000009	土管?	2	10g	

3 13区土坑群

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
13区—8号土坑						
4	第88図 図版77	40-000001	刀子	長2.7 幅5.95 厚0.2	腐食進行、刃部か	—
13区—9号土坑						
7	第88図 図版78	20-000001	砥石	長3.6 幅2.75 厚1.2 重量19.5g	—	石材 砥沢石
13区—10号土坑						
8	第88図 図版77	20-000002	砥石 (完形)	長10.6 幅3.0 厚2.6 重量120g	—	石材 砥沢石
10	図版78	10-000011	軟質陶器鉢 (破片)	—	口縁端部平、口唇部外側へ 尖。やや内湾気味に立つ	①還元焰やや軟 ②灰色(5Y 4/1) ③細砂粒

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
13区―12号土坑						
1	第88図 図版77	10-000002	練り鉢 (破片)	口径推定33.6	――	①施釉陶器 ②浅黄色(5Y7/3) ③精製砂
6	第88図 図版77	40-000003	銭 (ほぼ完形)	直径2.5×2.5	錆、腐食やや進む。	寛永通寶か
13区―13号土坑						
2	第88図 図版77	10-000003	燭 (破片)	推定口径6.2 器高2.6 残存 3.1×3.0	口縁内湾	①施釉陶器 ②黒色(7.5YR1.7/1) ③精製砂
11	図版78	10-000010	縄文 (破片)	――	――	①- ②にぶい黄橙色(10YR7/4) ③細砂粒
13区―14号土坑						
3	第88図 図版77	10-000004	播鉢 (破片)	――	内面体部に御目	①酸化焰・硬 ②赤黒色(7.5R2/1) ③細砂粒
12	図版78	10-000012	瓦 (破片)	残存 7.7×7.0	両面・縁部ナデ調整	①還元焰・やや軟 ②灰色(5Y4/1)。近世・近代
13区―15号土坑						
13	図版78	10-000015	不祥 (破片)	残存 9.9×5.8 厚さ 0.8	円筒形をなす。内面黒色。	①酸化焰・硬 ②明赤褐色(2.5YR5/6) ③精製砂
13区―16号土坑						
9	第88図 図版77	20-000003	台石	長13.0 幅11.35 厚4.5 重量1.18kg	欠損品。上面に使用面有	粗粒安山岩
4 13区その他						
No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	図版78	10-000016	瓦 (破片)	残存 7.8×5.9	――	①還元焰・普通 ②灰色(5Y4/1)。近世・近代

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000010	土師器	11	80g	
3	11-000011	縄文土器	5	100	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000012	羽釜	1	10g	

5 14区―1号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第89図 図版77	10-000001	須恵器坏 (底部)	底径 7.8 器高 0.95	右回転クロコ整形。底部回転糸切痕	①還元焰・やや硬 ②灰黄色(2.5Y6/2) ③粗砂粒(石英)
2	図版78	10-000014	土師器甕 (破片)	残存 7.0×4.1	コ字状口縁か。器肉薄い。肩部外面横位の笥ケズリ	①酸化焰・普通 ②赤褐色(2.5YR4/8) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000001	土師器及び須恵器甕	8	100g	

6 14区―2号溝出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第90図 図版77	10-000005	陶器皿 (破片)	底径推定5.7	施釉陶器 重ね焼き痕有	①還元焰 ②オリーブ黄色(5Y6/4) ③精製砂
2	第90図 図版77	10-000006	陶器碗 (破片)	底径推定7.45	施釉陶器 内外面トチン痕有り	①還元焰 ②にぶい黄色(2.5Y6/3) ③精製砂

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000006	内耳鍋	4	80g	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000007	青磁	2	20g	

7 14区―3号溝出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第91図 図版77	10-000007	陶器碗	底径4.6×4.55	施釉陶器	①還元焰 ②浅黄色(2.5Y7/4) ③精製砂

第7章 東平井土井下遺跡の調査

8 14区—4溝

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
1	11-000008	縄文土器	19	380g	

9 14区その他

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
1	11-000013	土師器高坏他	8	140g	第1面他
2	11-000014	須恵器甕他	11	280	確認面
3	11-000015	埴輪	1	20	確認面

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
3	11-000016	罎鉢	2	50g	
4	11-000017	ほうろく	1	30	

10 14・15区

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
	11-000018	陶器	18	180g	1面

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
2	11-000019	磁器	5	50	

11 15 区

No	図面番号 図版番号	資料番号	名称 (残存部位・状況)	測定値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備考 ①焼成 ②色調 ③胎土
5	第88図 図版132	40-000002	刀子	長 1.5 幅 5.1 厚 0.45	刃部先端破片 細身か	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
15区1面					
	11-000020	土師器	87	600g	
	11-000021	須恵器甕	19	160	
	11-000022	羽釜	1	20	
	11-000023	内耳鍋	2	40	
	11-000024	土器?	1	10	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
	11-000025	縄文土器	10	320g	
15区覆土					
	11-000026	土師器	80	250	
	11-000027	須恵器	10	60	
	11-000028	土師器甕	12	80	

12 包含層出土遺物

No	図面番号 図版番号	資料番号	名称 (残存部位・状況)	測定値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第99図 図版77	10-000008	碗 破片 (破片)	口径 推定16.2	全体器面ひどく荒れる	①やや軟 ②にぶい橙色(7.5 YR7/4) ③細砂粒
2	第99図 図版77	10-000009	縄文土器深鉢 (胴部破片)	器厚 1.5	内面横方向調整。隆帯垂下 縄文 中期加曾利E3式。	①良 ②にぶい橙色(5YR7/4) ③中粒砂混入
3	第99図 図版77	40-000004	鉄銭	直径 1.7×1.7	表面腐食	寛永通寶か
4	第99図 図版77	20-000004	打製石斧	長さ 9.2 幅 4.3 厚み 2.05 重量 87g	短冊形に分類されるが長円 形を呈す	石材：硬質泥岩
5	第99図 図版77	20-000005	打製石斧	長さ 8.1 幅 4.8 厚み 23.15 重量90g	短冊形に分類されるが両側 多少挟れる	石材：ホルンフェルス
6	第99図 図版77	20-000006	石鏃	長さ 2.35 幅 1.5 厚み 0.3 重量 1.1g	片側線がややいびつで基部 は極く浅い鞍形	石材：チャート
7	第99図 図版77	20-000007	石鏃	長さ 2.65 幅 1.3 厚み 0.3 重量 0.7g	左右対称で基部は浅い鞍形	石材：黒耀石
8	第99図 図版77	20-000008	多孔石	長さ 17.75 幅 9.85 厚み 7.7 重量 1.6kg	一面に6カ所の凹み	石材：黒色片岩
9	第99図 図版78	20-000009	石皿	長 12.6 幅 10.55 厚み 4.1 重量 710g	浅い使用面を持ち、裏面は 多孔石として使用	石材：牛伏砂岩



10-890015-07 調査前路線全景



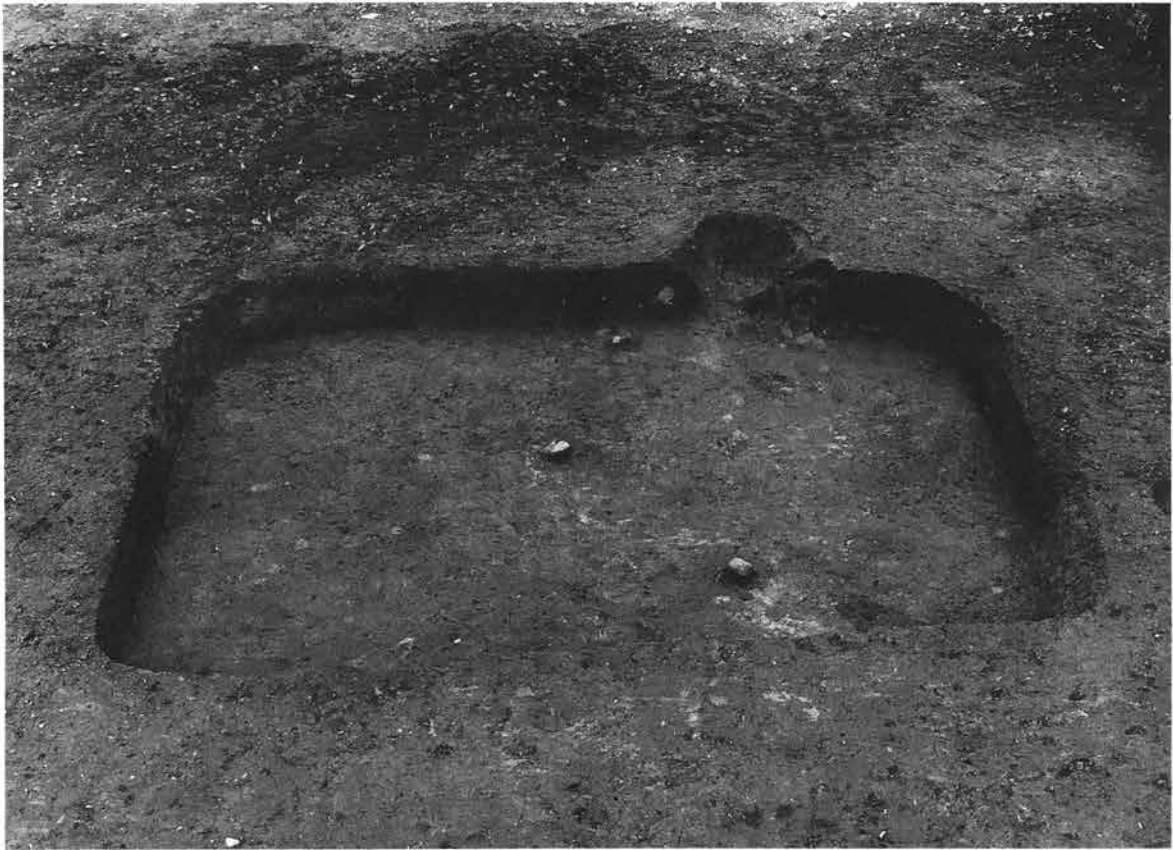
01-910044-17 試掘グリッド



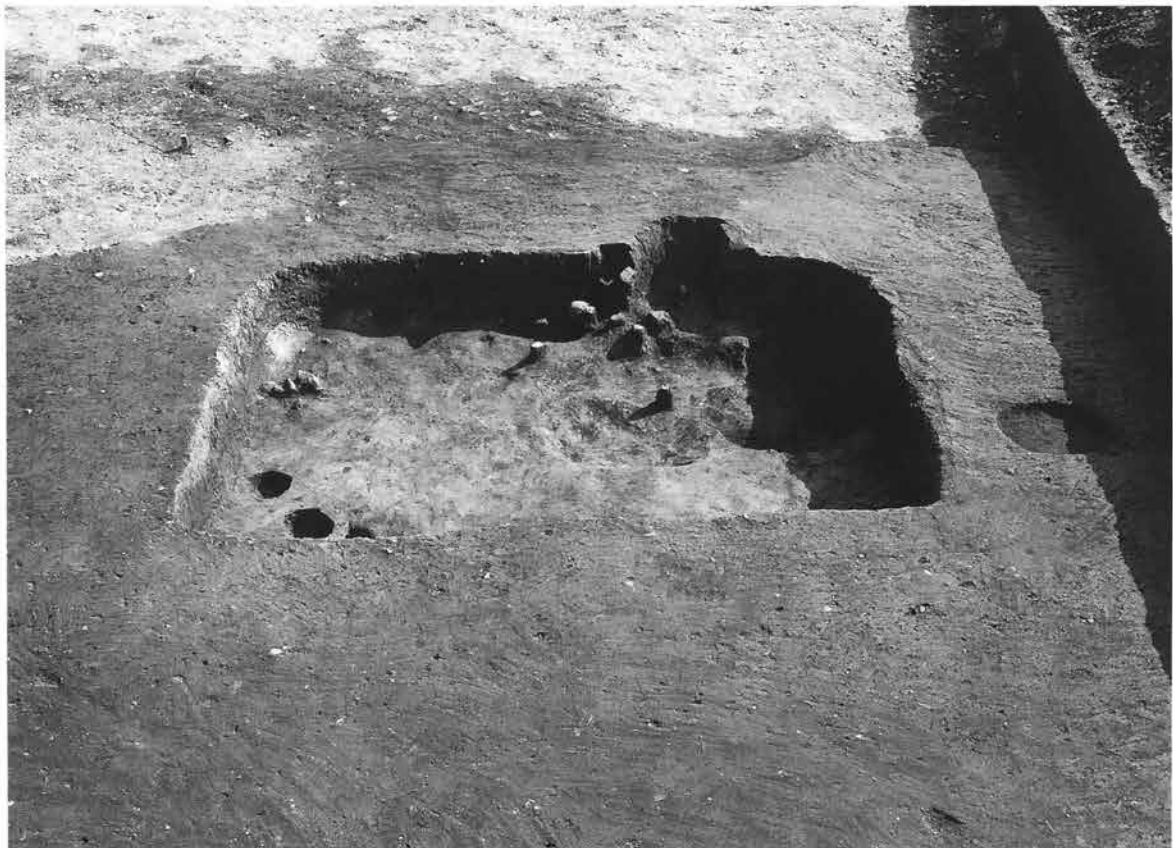
10-910007-02 10・11区全景 東から



10-910007-06 10・11区全景 西から



01-910006-18 1号住全景 西から



10-910006-06 1号住掘り方全景 西から



01-910004-21 1号住遺物全景 西から



01-910005-10 1号住遺物出土状態 北から



10-910004-07 1号住カマド全景 西から



01-910005-22 1号住カマド遺物出土状態 西から



10-910006-10 1号住カマド掘り方 西から



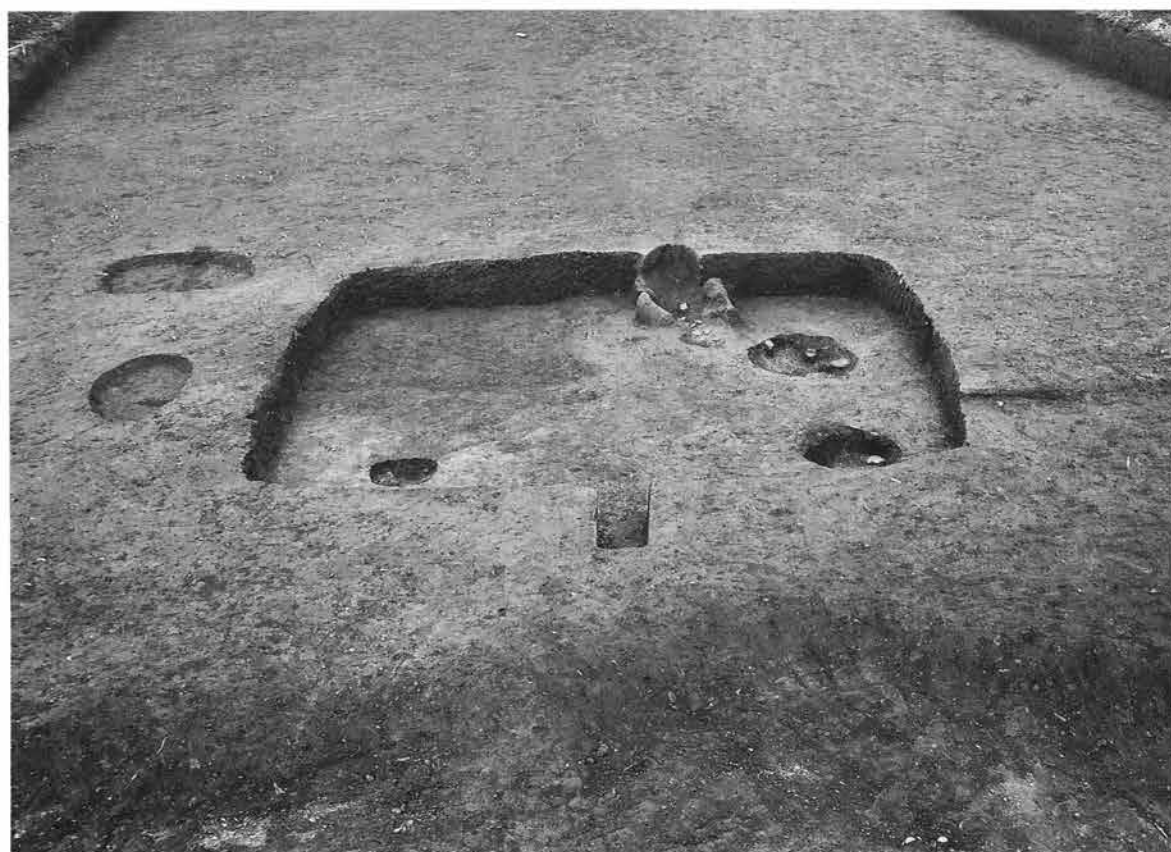
01-910009-24 1号住貯蔵穴遺物出土状態 北西から



01-910003-19 1号住セクション 南から



01-910007-23 1号住掘り方東西セクション 南から



10-910005-03 2号住全景 西から



10-910002-09 2号住遺物全景 西から



01-910004-04 2号住セクション 西から



01-910004-31 2号住遺物出土状態 東から



01-910004-34 2号住カマド遺物出土状態 西から



01-910007-02 2号住カマド全景 西から



01-910008-33 2号住カマド掘り方セクション 西から



01-910009-31 2号住カマド掘り方全景 西から



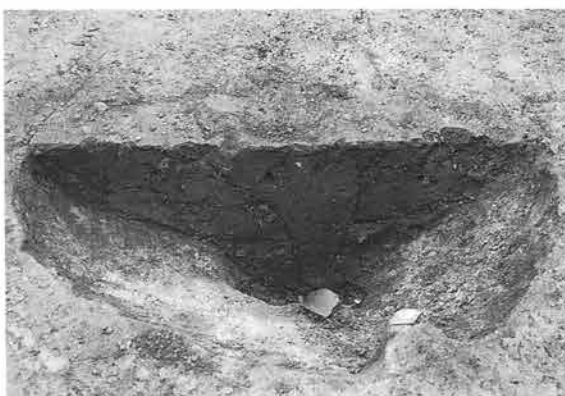
01-910006-25 2号住2号ピット全景 西から



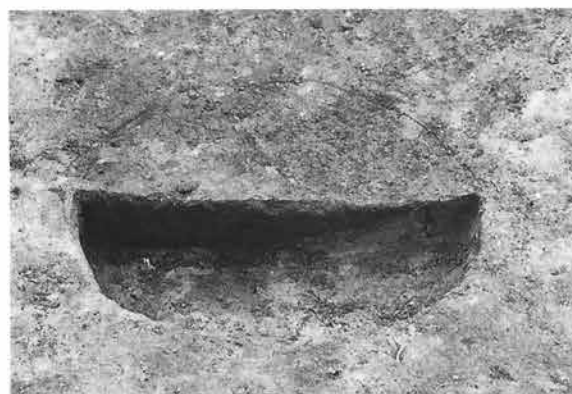
01-910006-06 2号住2号ピットセクション 西から



01-910006-33 2号住3号ピット全景 西から



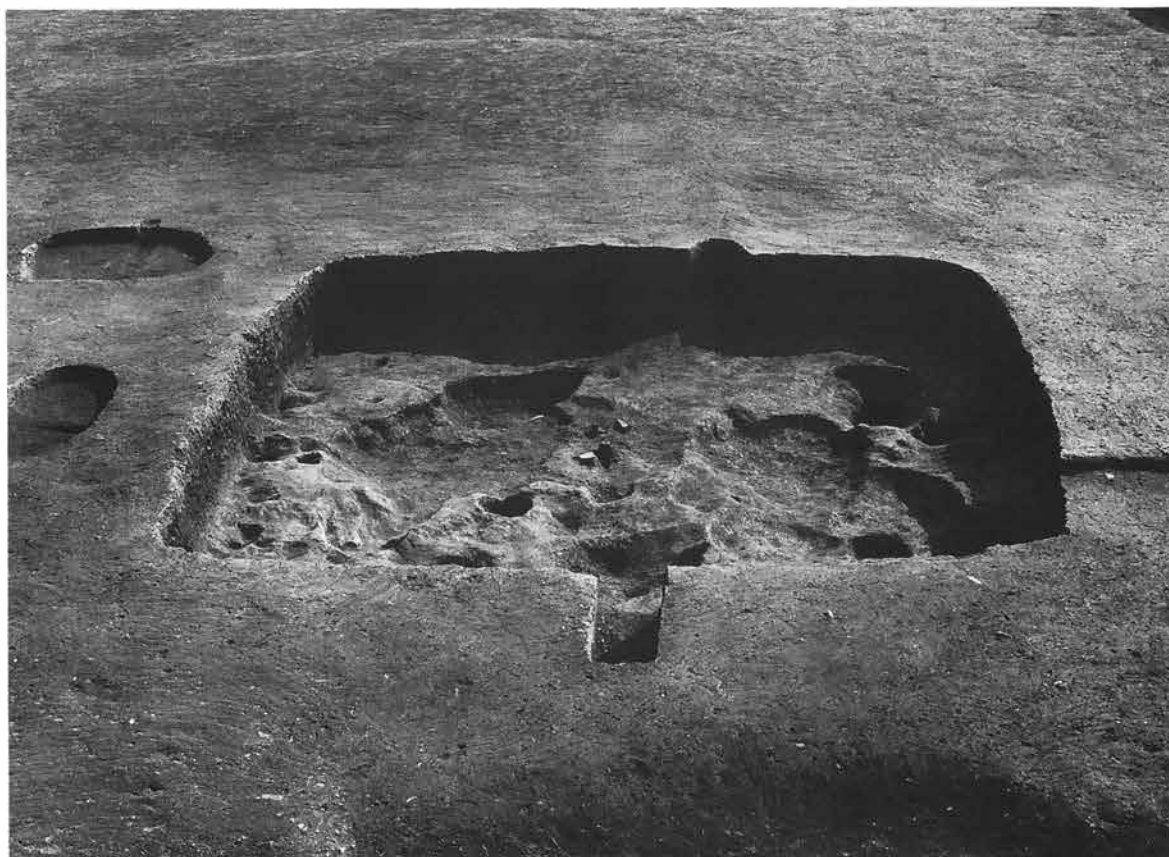
01-910006-14 2号住3号ピットセクション 西から



01-910006-03 2号住1号ピットセクション 西から



01-910008-21 2号住掘り方セクション 東西から



01-910009-03 2号住掘り方全景 西から



10-910016-02 3号住 西から



01-910005-28 3号住東西セクション 北から



01-910016-05 3号住南北セクション(近撮)西から



01-910005-32 3号住南北セクション 西から



01-910005-35 3号住南北セクション 西から



01-910002-35 1号土坑 西から



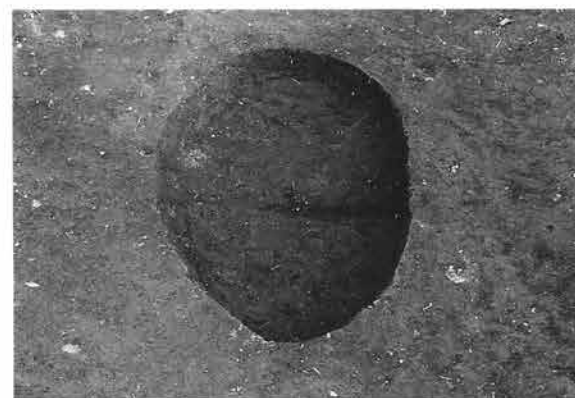
01-910002-22 1号土坑セクション 西から



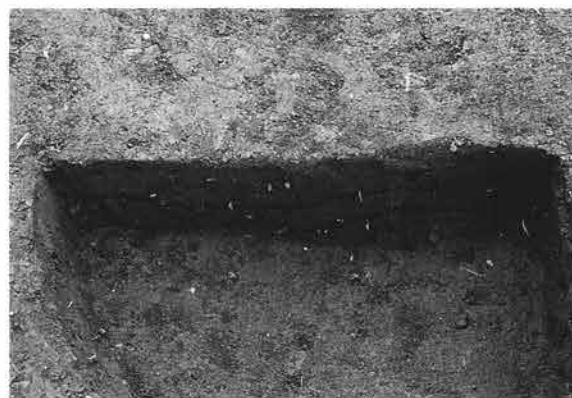
01-910003-04 2号土坑 東から



01-910002-23 2号土坑セクション 南から



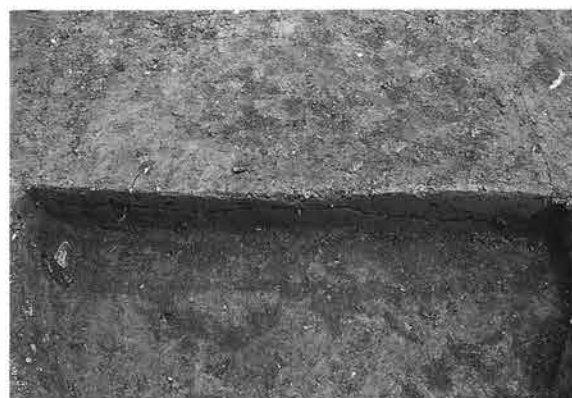
01-910003-07 3号土坑 西から



01-910002-28 3号土坑セクション 西から



01-910003-12 4号土坑 南から



01-910002-29 4号土坑セクション 南から



10-910029-09 12・13区全景 西から



01-910045-07 調査風景 西から



01-910042-30 12-14区1・2号トレンチ 西から



01-910043-06 12-14区通しセクション



01-910049-07 14区2面 東から



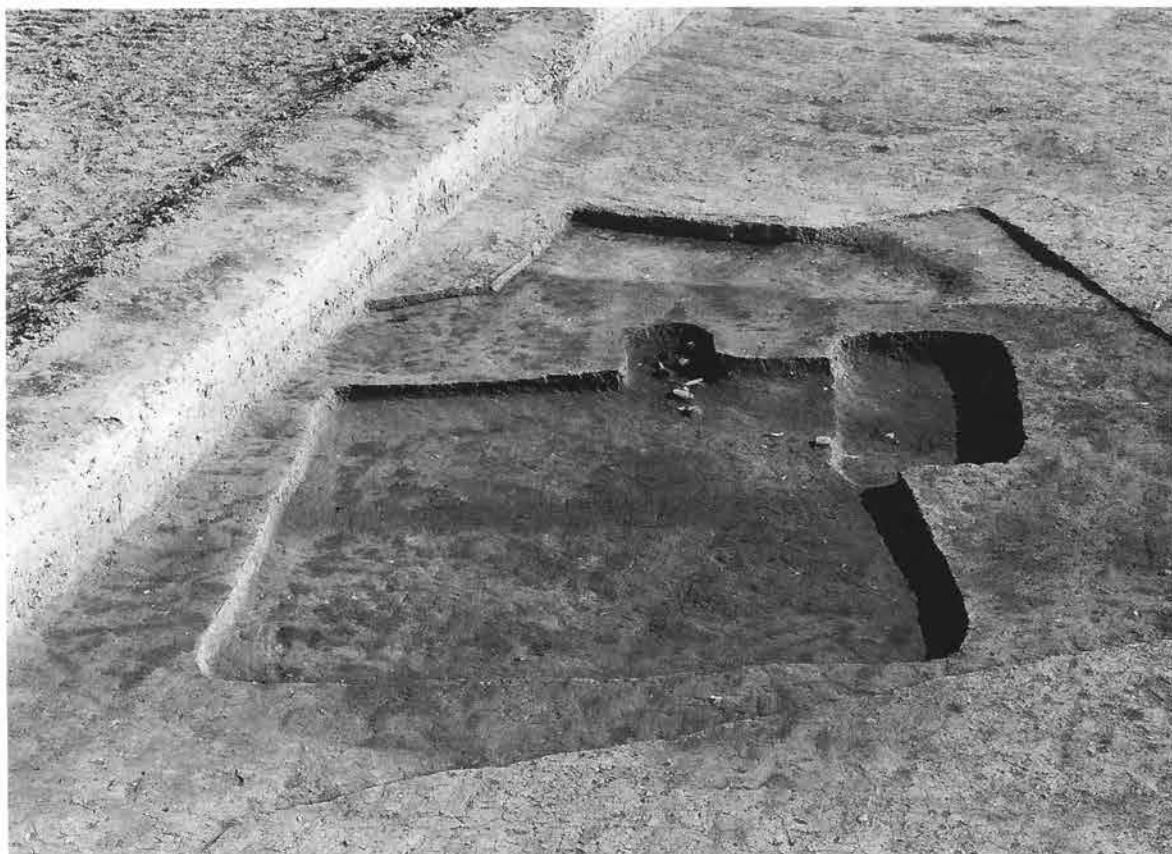
10-910027-03 14区2面 東から



10-910032-02 15区セクション 西から



10-910028-04 15区全景 東から



10-910035-06 14区1号住 西から



01-910047-22 1号住カマドセクション 西から



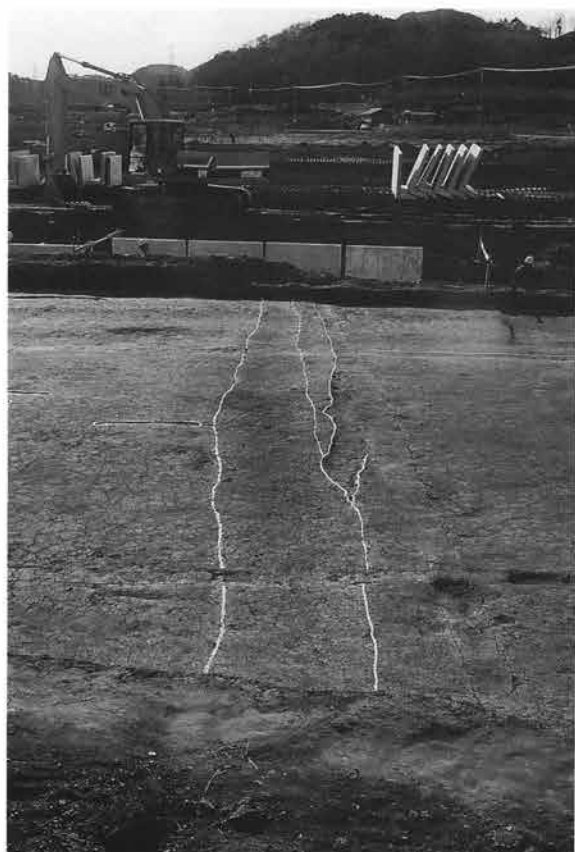
01-910049-20 1号住カマド遠景・南西から



10-910036-03 1号住カマド全景 西から



01-910051-03 1号住カマド掘り方 西から



10-910030-06 12区1号溝 北から



10-910037-07 12区4号溝 南から



01-910050-04 12区4号溝セクション 南から



10-910033-06 14区1号溝 南から



01-910047-07 14区1号溝セクション 南から



01-910048-24 14区2号溝 南から



01-910047-15 14区2号溝セクション



01-910048-28 14区3号溝



01-910049-36 14区3号溝セクション 南から



10-910034-06 14区4号溝 南から



01-910051-08 14区4号溝セクション 西から



01-910033-02 15区1号溝セクション A-A' 南東から



01-910033-07 15区1号溝セクション B-B'



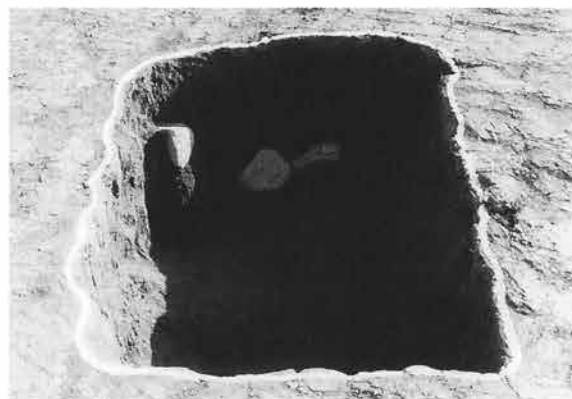
01-910040-33 12区1号土坑南から



01-910036-25 12区1号土坑セクション 南から



10-910030-03 13区1面土坑群



01-910040-27 13区5号土坑



10-910025-10 13区7・8号土坑



01-910040-18 13区1面9号土坑(A軽石) 南から



01-910040-24 13区1面12号土坑



10-910036-06 14区1号土坑 西から



10-910036-08 14区2号土坑 南から



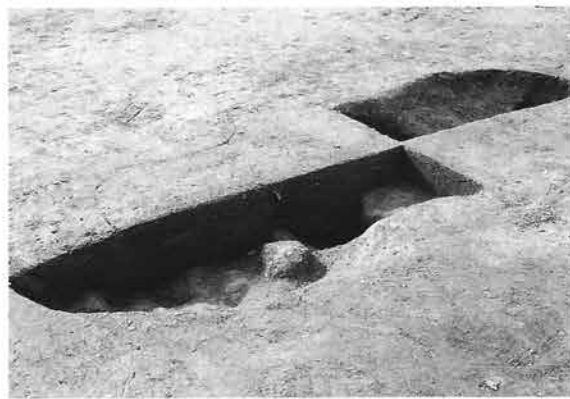
01-910032-19 15区1号土坑セクション 南から



01-910032-25 15区2号土坑セクション 南から



01-910032-27 15区3号土坑セクション 西から



01-910032-36 15区4号土坑セクション 北東から



01-910033-18 15区5号土坑セクション 南から



01-910033-21 15区6号土坑セクション 南から



10-910026-08 14・15区ピット遠景 西から



01-910033-26 14区1号ピット 南から



01-910033-30 14区2号ピットセクション 南から



01-910033-32 14区3号ピットセクション 南から



01-910033-35 14区4号ピットセクション 南から



01-910037-03 14区5号ピットセクション 南から



01-910037-06 14区6号ピットセクション 南から



01-910037-08 14区7号ピットセクション 南から



01-910044-29 2面旧河道 南から



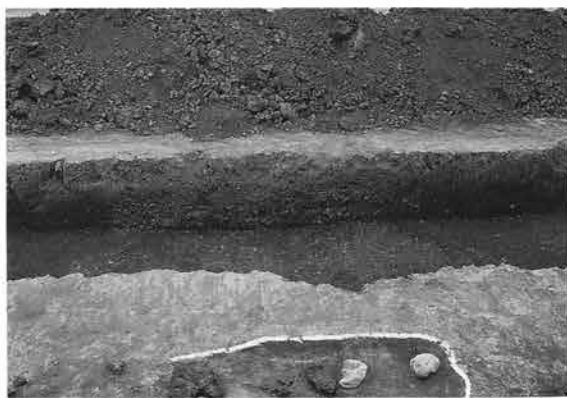
01-910044-31 2面旧河道 南から



01-910044-28 2面旧河道



01-910046-31 2面旧河道トレンチ 北から



01-910046-20 2面旧河道



猿川1号住-1



猿川1号住-2



猿川1号住-3



猿川1号住-5



猿川1号住-4



猿川2号住-1



猿川2号住-10



猿川2号住-7



猿川2号住-2



猿川2号住-4



猿川2号住-5



猿川2号住-3



猿川2号住-8



猿川2号住-9



猿川2号住-6



猿川2号住-11



猿川2号住-12



猿川2号住-13



猿川3号住-1



猿川包含層-1



猿川3号住-2



猿川包含層-2



猿川包含層-3



猿川包含層-4



猿川包含層-5



12号土坑-1



13号土坑-2



14号土坑-3



8号土坑-4



9号土坑-7



10号土坑-8



12号土坑-6



1号土坑-1



2号沟-1



2号沟-2



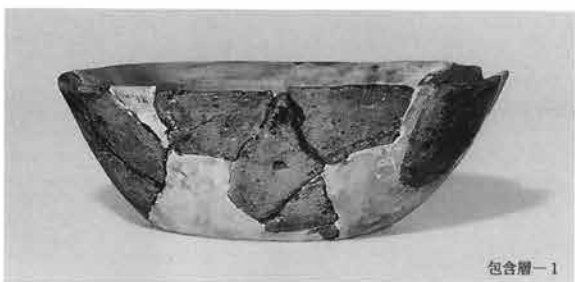
16号土坑-9



包含层-2



2号沟



包含层-1



包含层-3



3号沟-1



包含层-4



包含层-5



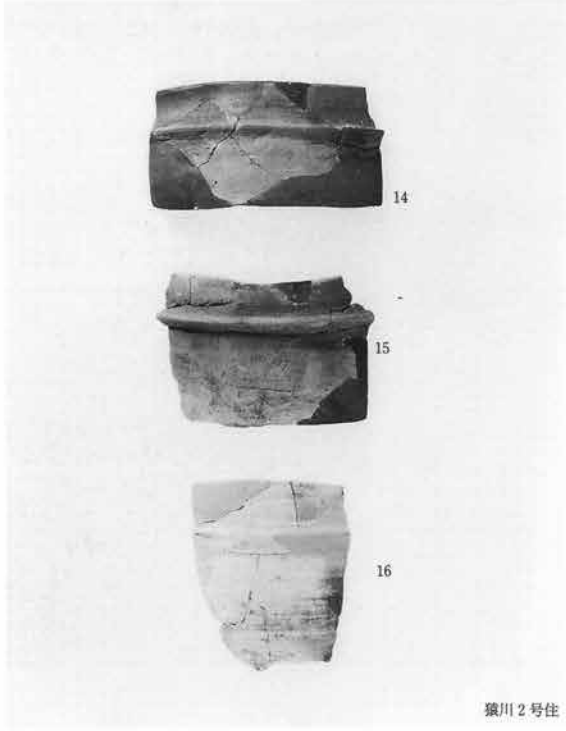
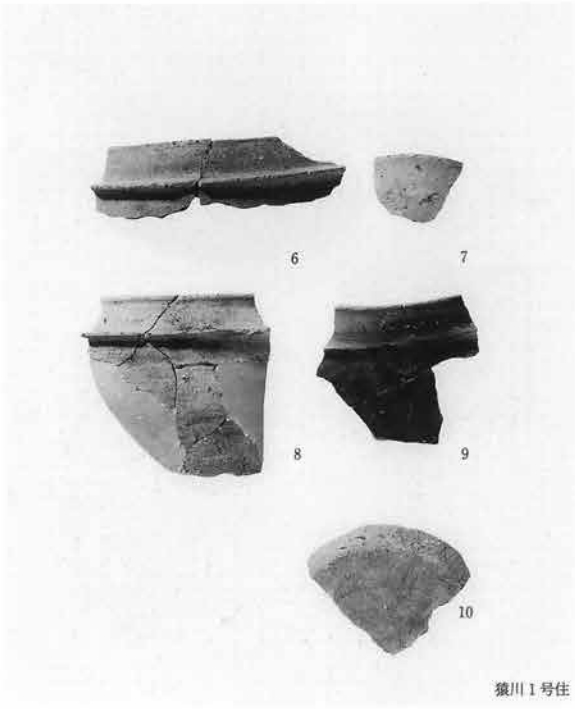
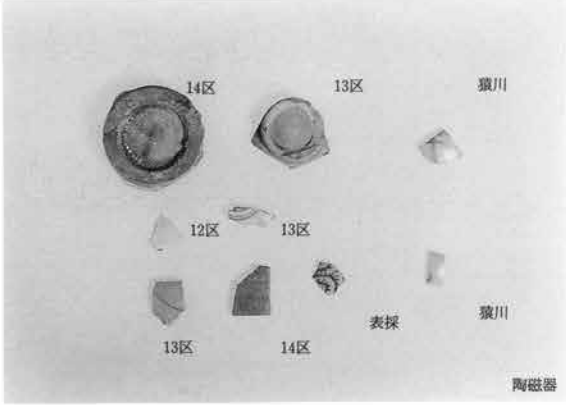
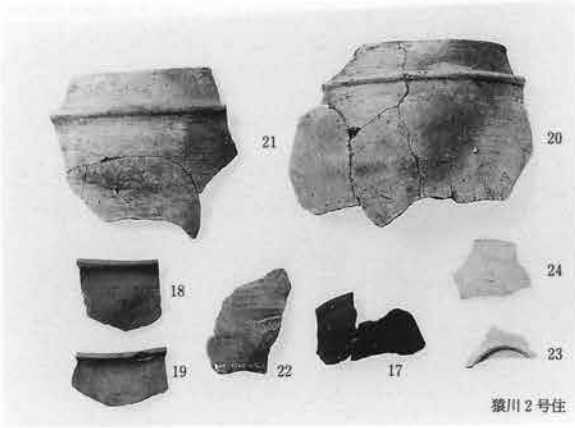
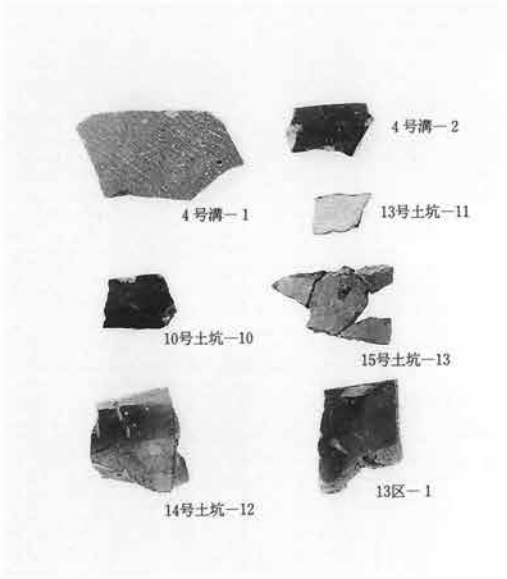
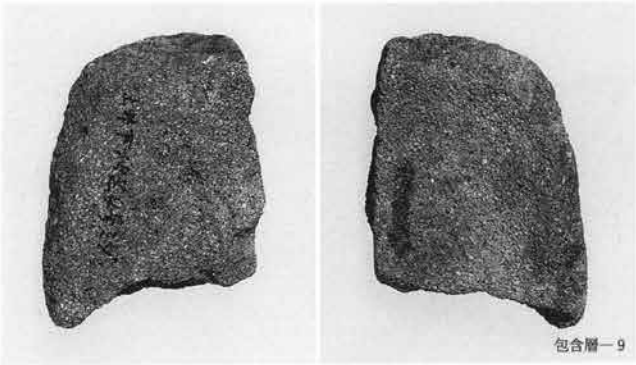
包含层-6



包含层-7



包含层-8



第 6 部 西平井久保田代遺跡



2区-1号住居 2区-1号落ち込み出土土器

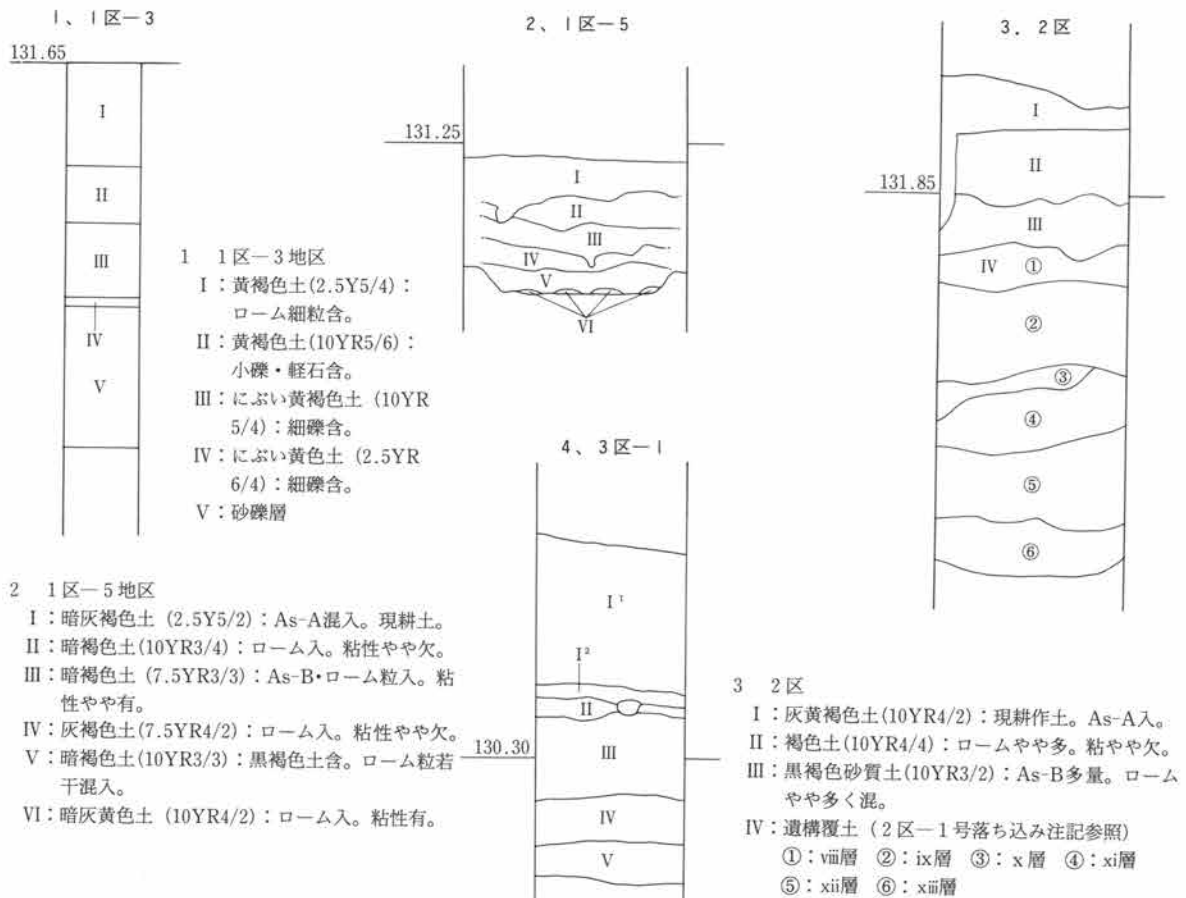
第8章 西平井久保田代遺跡の調査

第1節 調査の経過

本遺跡の調査は、平成4年6月24日調査事務所を3区-4地区に開設して調査に入った。翌6月25日から西端の1区-1地区より1区の表土除去を開始。6月29日に2区及び3区-1・2・3地区の表土除去に入った。引き続きこれらの地区に対する遺構確認を行い、7月7日より順次遺構の調査に入っている。7月14日水道仮設。8月17日までに西半の一部を除く3区-2地区と、3区-3地区の調査を完了し、翌8月18日より当該地への埋め戻し作業に入

た。当該地への事務所移転と市道5335線の切り返し工事等を経て、同26日より3区-4地区の表土除去に入った。翌同月27日より遺構確認を実施し、翌9月2日より当該地の遺構調査に着手している。また、3区-4地区の表土掘削等の完了後の同9日からは市道5335線下の3区-5地区に対する表土除去を行い、同10日より遺構確認、同15日より遺構の調査に入った。9月25日にすべての調査を完了。同29日より埋め戻しに入り、翌30日現場での作業を完了した。

第2節 標準土層



第100図 標準土層(1)

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

4・5 3区-1地区

I¹: 現代の盛土。

I²: I-1層以前の耕作土。におい
い黄褐色土。As-A混入。

II: 黒褐色土 (7.5YR3/2): As-A
含。軽石混入。やや粘性に欠。

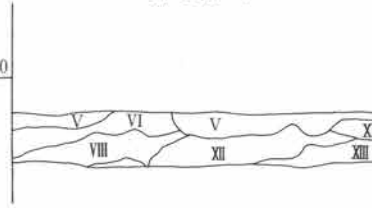
III: 灰褐色土 (7.5Y4/2~5/2): 少
量の軽石混入。粘性有。

IV: 黒褐色土 (10YR3/2): 軽石や
や多く混入。粘性やや欠。

V: 暗褐色土 (10YR3/3~3/4): 軽石やや多く混入。粘性やや
欠。VI層土小ブロックを混入。

VI: 暗褐色土 (10YR3/3) と黒褐色土 (10YR2/2) 中ブロック
の混土层: 若干軽石混入。やや粘性有。

5、3区-1



VII: 黒褐色土 (10YR2/3): 少量のローム粒・軽石
混入。粘性有。

VIII: 褐色土 (10YR4/4): 細砂と少量のローム・軽
石混入。粘性有。

(IX: 灰黄色砂質土 (2.5YR6/2): 若干の軽石と円
礫混入。砂質だが粘性有。)

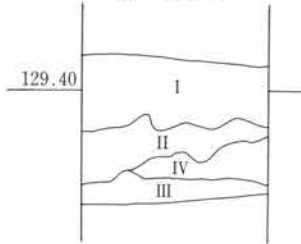
(X: 褐色土 (10YR4/4): 軽石・ローム細粒・円礫
混入。粘性欠。)

XI: 暗褐色土 (10YR3/4): 軽石・ローム細粒・黒
褐色土小ブロックと若干の円礫混入。粘性有。

XII: 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2): 円礫・軽石・褐色土小ブロック
混入。粘性やや有。

XIII: 灰オリーブ色砂質土 (5Y6/2): XII層に比し砂の割合多。拳大
の円礫多く混。砂質だが粘性有。褐色土の小ブロック混。

6、3区-2



6 3区-2地区 (西寄り)

I: 黒褐色土 (10YR3/1): 白色・褐色粒少量。粘性弱。堅く締る。

II: 黄褐色土 (2.5Y5/3): 白色細粒微量含。全体に砂質。

III: 暗灰黄色土 (2.5Y4/2): 2層に類似。大小の礫多量に含。

IV: 黒褐色土 (10Y3/1): 大小の礫多量に含。全体に締めりなし。

7・8 3区-2・5地区 (東寄り)

I: 黒褐色土 (7.5YR3/1): 白色軽石多量に、褐
色粒少量含。

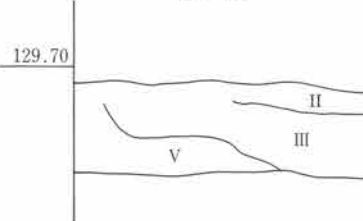
II: 黒褐色土 (7.5YR3/1): 白色・褐色細粒多量。

III: 黒褐色土 (7.5YR3/1): 2層に似るが白色・
褐色粒少なく、4層土を微量に含。粘性強。

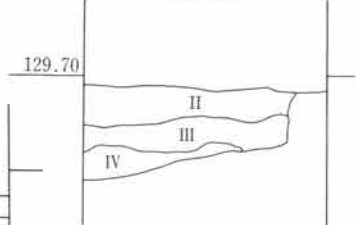
IV: 灰黄色土 (2.5Y6/2): 白色粒微量に含。

V: 黒褐色土 (7.5YR3/2): 3層土と小礫を主体
とする。

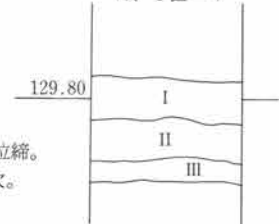
7、3区



8、3区



10、3区-4



9 3区-4地区 (西寄り)

I: 黒褐色土 (10YR3/2): 円礫混入。層上位締。

II: 黄褐色土 (2.5Y5/4): 円礫混入。粘性欠。

III: 灰黄褐色土 (10YR5/2): 円礫・ロー
ム粒含。粘性欠。

IV: 褐灰色砂礫質土 (10YR4/1): 褐灰
色土は粘性やや欠。

V: におい黄色土 (2.5YR6/3): 円礫や
や多。

VI: 浅黄色シルト質層 (5Y/4): 粘性欠。

VII: 砂礫層: 灰黄褐色土 (10YR5/2) 混
入。

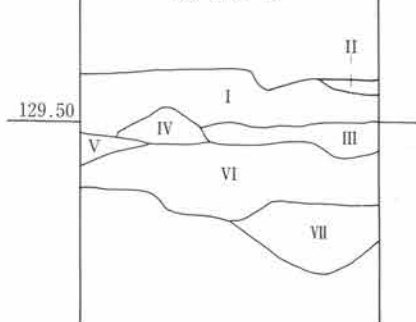
10 3区-4地区 (東寄り)

I: 黄褐色土 (2.5Y5/3): As-A混入。粘性
欠。現耕作土。

II: 黒褐色土 (10YR2/3): ローム粒混入。粘
性やや欠。

III: 黒褐色土 (7.5YR3/2): ローム粒混入。
粘性やや有。

9、3区-4



第101図 標準土層(2)

西平井久保田代遺跡に於いては、谷地、微高地、旧河道などが複雑に入り、全体として一定の標準層序を示すことはできなかったのであるが、以下各地点における土壌堆積の概要を示したいと思う。

1区は1区-2地区を挟んで西の1区-1地区と東の1区-3地区はローム層を確認面としている。共に現耕作土のほぼ直下に確認されているが、1区-3地区では砂礫層上に礫を含む黄褐色系の水性ローム層群が確認されている。このローム層は2区に伸び、また北側では潜り込んで、1区-5地区では暗灰黄色の上に暗褐色系の土壌が表土まで堆積し、間層にはAs-Bも確認されている。尚、谷地である1区-2地区は黒褐色土又は暗褐色土で覆われるが、中位の堆積時期は奈良時代前後と推定される。

3区の西端部は谷地形が認められ、西南端の3区-1地区では2区南部東端部までつながると推定さ

れる谷地が概ね暗褐色あるいは黒褐色を含む土壌で覆われている。3区-1地区の東端では礫を多く含む灰オリーブ褐色等の砂質土等が見られるが、これは北側の3区-2地区中程の砂礫を主体とする黒褐色土につながるものと判断される。3区-2地区のその西側は褐色土の上に茶褐色土、更に暗褐色土が乗る土壌の堆積があり、東側は灰黄褐色の上に黒褐色の土層群が乗っている。この状態は3区-4地区東端部近くまで続くが、途中3区-3地区付近の確認面では礫を多く含む土層が南北に帯状に露出している。これは流水の痕跡と考えられる。3区-4地区の表土は黄褐色の耕作土であるが、東端近くでは下位層に変化が見られ、砂礫層上に浅黄色のシルト質の土壌、灰黄褐色土が乗っているが円礫をやや多く含むにぶい黄色褐色土が切っており、流水のあったことを伺わせている。

第3節 遺跡の概要

1区はローム台地である1区-1地区と1区-3・4・5地区、これと谷地に当たる1区-2地区に区分される。遺構は1区-1地区でやや集中する傾向が見られ、1区-3地区では全体に確認されるが1区-2地区にはほとんど確認されず、1区-4・5地区では全く認められなかった。

1区-1地区には、奈良時代の竪穴住居と土坑2基を始め多数のピット群。サク状

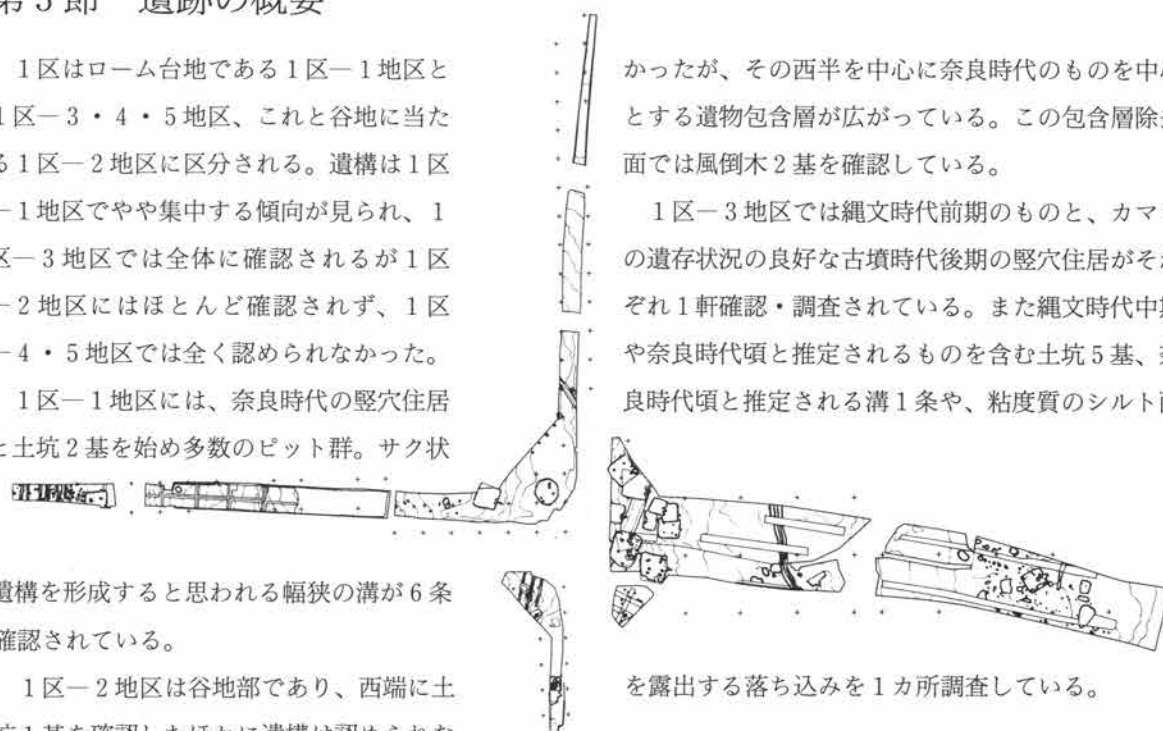
遺構を形成すると思われる幅狭の溝が6条確認されている。

1区-2地区は谷地部であり、西端に土坑1基を確認したほかに遺構は認められな

かったが、その西半を中心に奈良時代のものを中心とする遺物包含層が広がっている。この包含層除去面では風倒木2基を確認している。

1区-3地区では縄文時代前期のものと、カマドの遺存状況の良好な古墳時代後期の竪穴住居がそれぞれ1軒確認・調査されている。また縄文時代中期や奈良時代頃と推定されるものを含む土坑5基、奈良時代頃と推定される溝1条や、粘度質のシルト面

を露出する落ち込みを1カ所調査している。



第102図 遺跡全体図



2区は、基本的に1区-3地区に連なるローム台地である。遺構の分布は北部の土坑群と、南部の遺構群に区別される。

北部には3基の土坑と、現代に続く畠のサク3条が見られる。

南部には平安時代の竪穴住居1軒と、住居の北には、互いに切り合い関係にある5基以上の密集した土坑・ピット群（1号落ち込み）が見られる。この竪穴住居と土坑・ピット群からは回転クロ整形の椀・皿などが多数出土している。（↓）

特に3区-2・5地区から3区-3と3区-4西部にかけての遺構の分布は希薄である。

3区-1地区には土坑1基と12基のピットが分布している。

3区-2・5地区の西半部には古墳時代後期3軒、奈良時代4軒、平安時代2軒を含む竪穴住居10軒。このほか竪穴住居の上位面では近世の道路遺構1条を調査した。東半部は西半部に比べて遺構の分布は薄い、平安時代末期の竪穴住居1軒、江戸時代後期以降の溝2条のほか土坑5基を確認した。

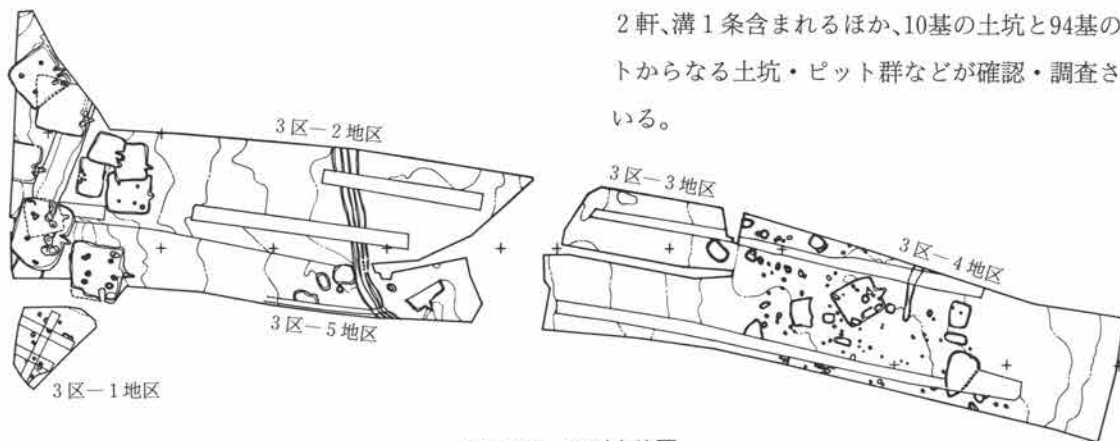
3区-3地区では縄文時代前期の土坑1基を調査した。

3区-4地区では3区-5地区から続く遺構分布の薄い西端部と、平林沢に落ち込む東端の傾斜部に



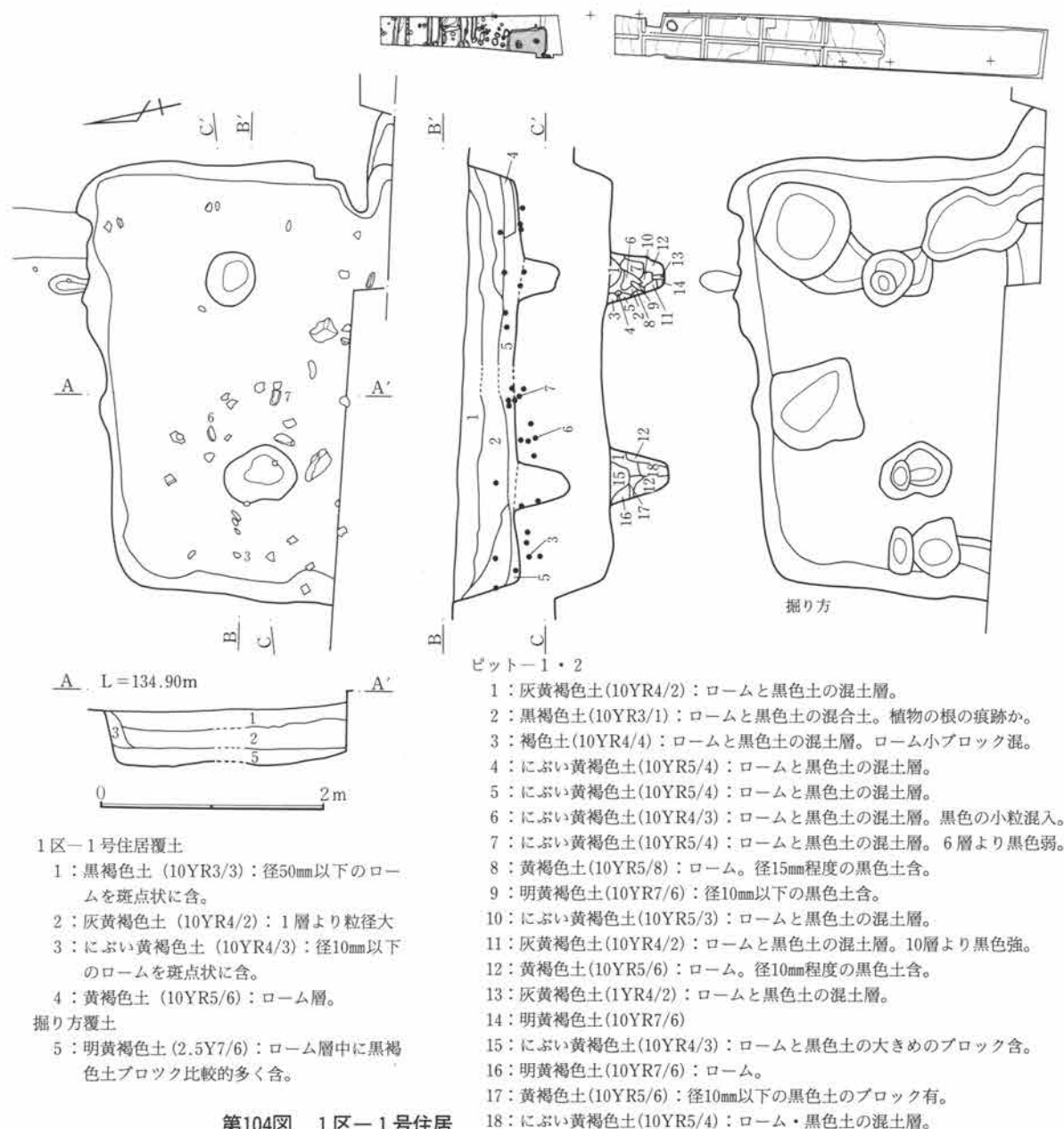
3区の遺構は、谷地形に落ちつつある3区-1地区、3区-2・5地区の西半部、3区-4地区の中部と東部に遺構のまとまりがある。（ノ）

近い区域では遺構の確認はできなかったが、この部分を除く地区全面に遺構が平均的に分布していた。これらの遺構には、平安時代のものを含む竪穴住居2軒、溝1条含まれるほか、10基の土坑と94基のピットからなる土坑・ピット群などが確認・調査されている。



第103図 区別全体図

第4節 発見された遺構と遺物



1 1区-1号住居 (第104・105図、図版81・109)

概要 本住居は、1区-1地区の東端部に位置する。東カマドの竪穴住居跡であるが、本住居の東は1区-2地区の谷地部に落ちて行く。住居の南半部は県道神田・吉井停車場線及びその北側に沿う側溝の下に潜っており、カマド部分はぎりぎりまで調査したが、側溝の倒壊の危険があったため住居全体として拡張を行うことはできなかった。

本住居はカマドを含め南半を調査することができなかったもので、全容は明らかにできなかったが、遺構の掘削或いは構築はしっかりしており、調査部分は全体として良好な遺存状態であった。

出土遺物は西側の柱穴2付近を中心に散見され、8世紀前半頃と思われる土師器の坏5点(1~5)と、こもあみ石2点(6・7)などが出土している。

規模 住居 縦267cm 残存幅：386cm 深さ：35cm

カマド 残存幅：50cm 奥行き：95cm

左袖 幅：41cm 長さ：37cm

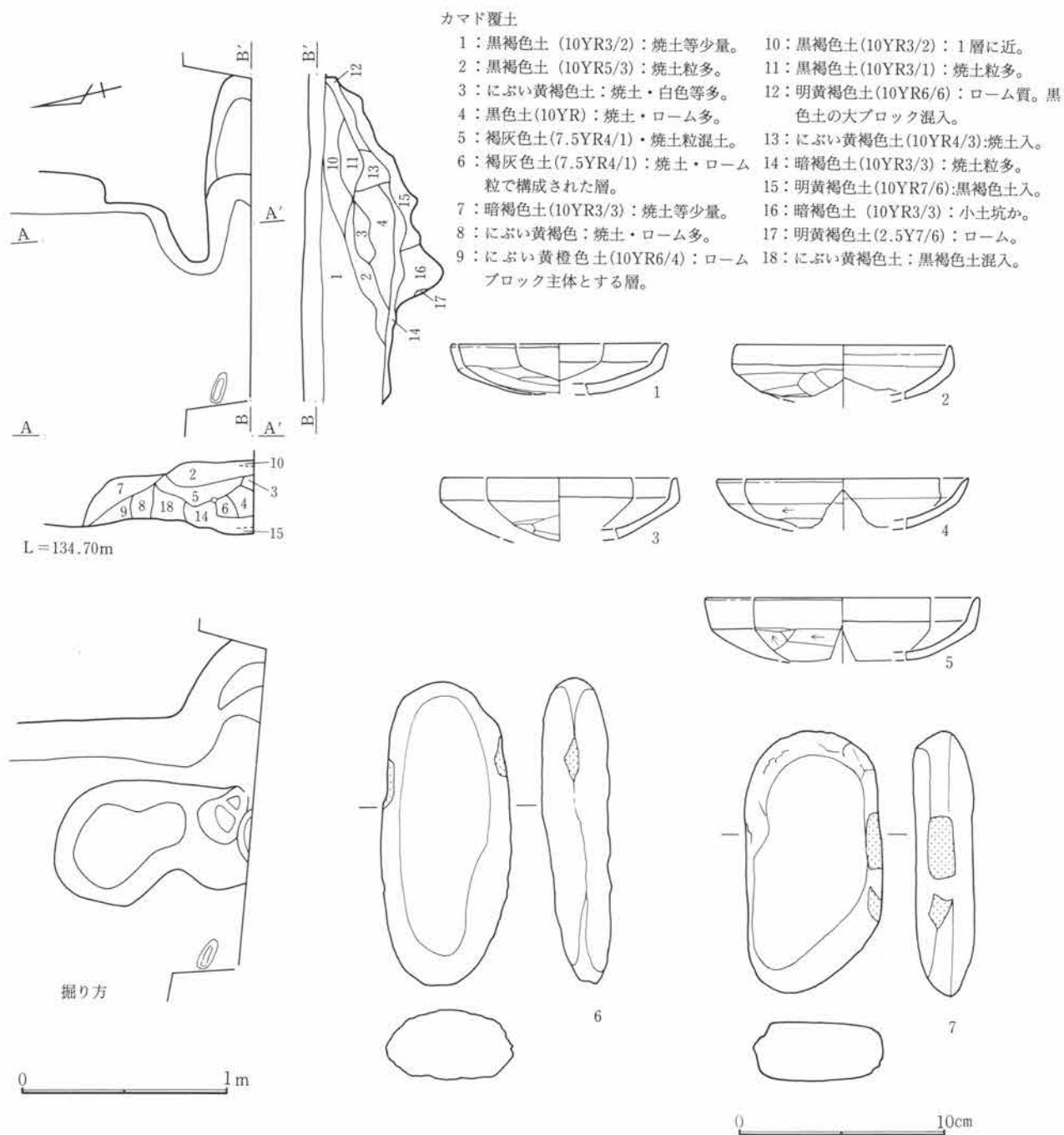
燃烧部奥行き：48cm

柱穴1 径：50×42cm 深さ：50cm 柱痕径：22cm

柱穴2 径：61×55cm 深さ：49cm 柱痕径：14cm

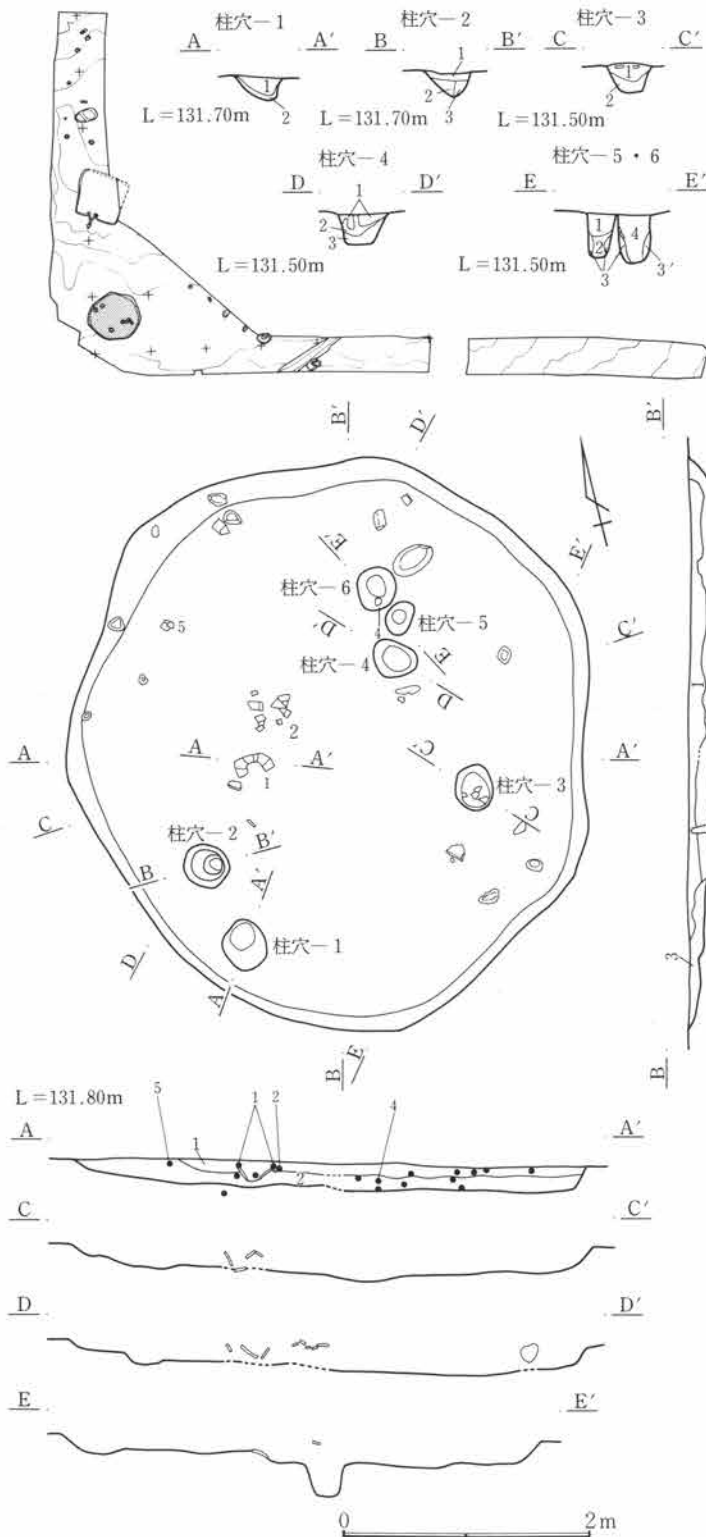
構造 住居南半が調査対象外のため、住居全体の構造は明らかではないが、住居は隅丸方形のプランを呈すると推察される。北壁の中央と東コーナーに方

形の掘り込みがあるなど、幾つかのピット・土坑様の浅い掘り込みを持つ掘り方を有し、これをロームを中心とする土で埋め戻して床としている。恐らくは方形プランを基本とする柱穴を有する。カマドは不定形の掘り方を埋め戻して構築している。袖はにぶい黄褐色土で造られた短いもので、燃烧部の中心は壁のラインより内側に設けられ、煙道はやや緩やかな傾斜で上がっている。



第105図 1区-1号住居カマド及び出土遺物

第4節 発見された遺構と遺物



1区-2号住居覆土

- 1：黒褐色土(7.5YR3/1)：白色・褐色細粒多量に含。
- 2：黒褐色土(7.5YR3/2)：1層に比し白色・褐色細粒少。地山黄褐色土を小ブロック状に少量含。
- 3：黒褐色土(7.5YR3/2)：2層に似るが地山黄褐色土ブロックを多量に含。
- 4：黒色土(7.5YR1.7/1)：黒色土をブロック状に含。

柱穴-1

- 1：褐色土(10YR4/4)：大きなロームブロック・酸化鉄で明褐色化した大ブロック含。
- 2：にぶい黄褐色土(10YR5/4)：ローム粒混入。粘性1層よりやや強。

柱穴-2

- 1：黒褐色土(10YR3/2)：ローム粒と酸化鉄の小ブロック少量含。粘性弱。
- 2：にぶい黄褐色土(10YR5/4)：径20mm以下のローム含。粘性有。
- 3：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：径10mm以下のロームブロック含。1・2層より粘性強。

柱穴-3

- 1：黒褐色土(10YR2/2)：径10mm以下のローム・酸化鉄を含。粘性有。
- 2：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：径5mm以下のローム粒。酸化鉄含。粘性有。

柱穴-4

- 1：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：ローム粒・軽石少量含。粘性やや弱。
- 2：黒褐色土(10YR2/3)：植物の根の痕跡か。
- 3：灰黄褐色土(10YR4/2)：ローム粒・酸化鉄混入。粘性1層に比し強。

柱穴-5・6

- 1：にぶい黄褐色土(10YR4/39)：ローム粒・軽石含。酸化鉄含。粘性有。
- 2：暗褐色土(10YR3/3)：ローム細粒・酸化鉄含。粘性1層に比し強。
- 3：黒褐色土(10YR3/2)：ローム粒・酸化鉄含。粘性は2層同様強。
- 3'：黒褐色土(10YR3/2)：3層に類似。
- 4：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：ローム小ブロック・炭化物小粒・軽石混入。粘性有。

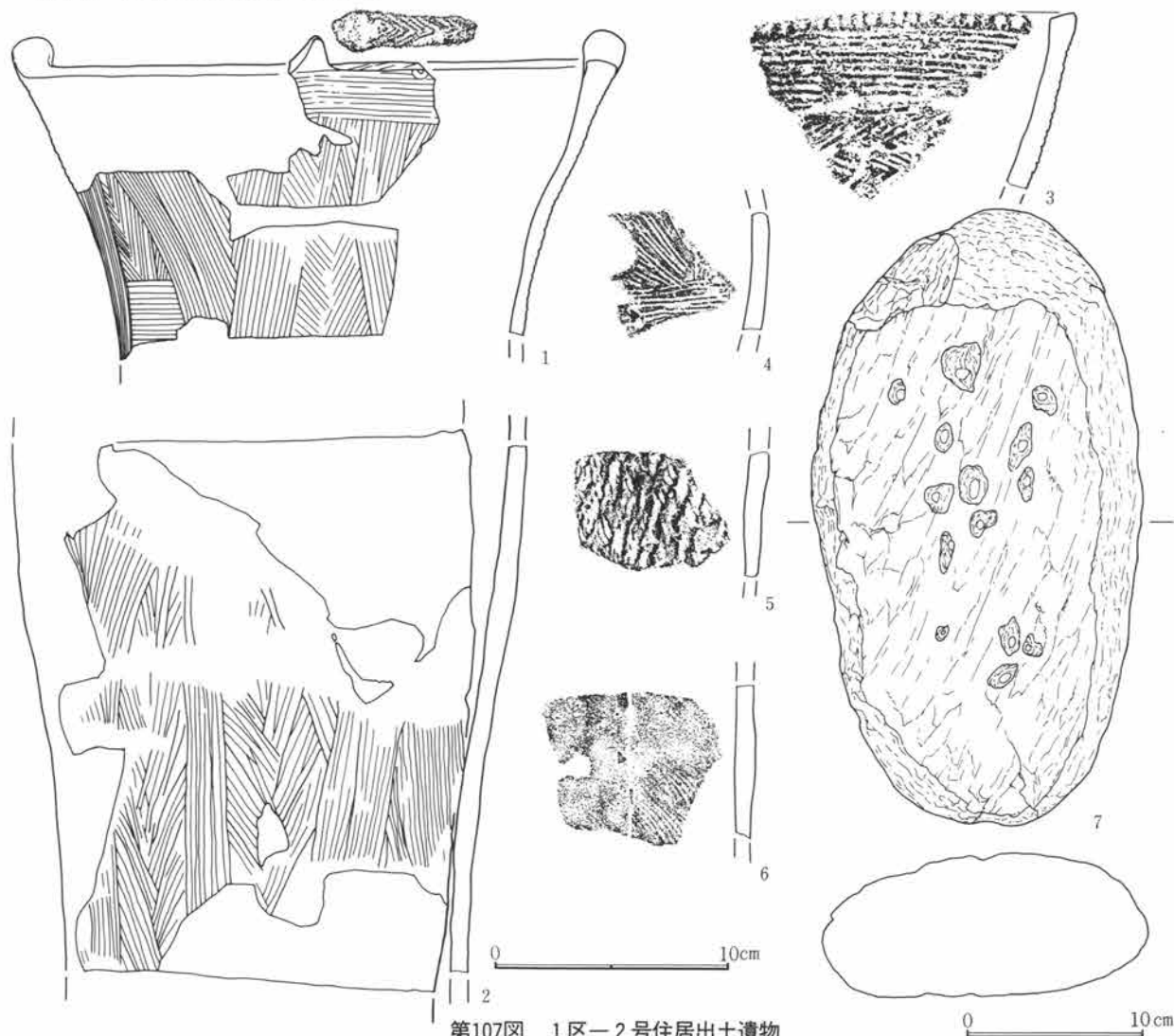
埋蔵



埋蔵セクション

- 1：暗褐色土(7.5YR3/3)：ローム粒・軽石混入。粘性有。
- 2：褐色土(7.5YR4/3)：酸化鉄のブロック混入。粘性は1層より強。
- 3：黒褐色土(7.5YR2/2)：粘性有。ローム粒含。
- 4：暗褐色土(10YR3/3)：ローム粒・軽石入。粘性有。
- 5：にぶい黄褐色土(10YR5/4)：ローム粒・軽石混入。粘性4層に比し強。
- 6：暗褐色土(10YR3/4)：酸化鉄と明褐色土(7.5YR5/8)の大ブロック含。粘性強。
- 7：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：酸化した土の小粒少量含。粘性強。
- 8：黒褐色土(10YR3/2)：粘性有。
- 9：暗褐色土(10YR3/3)：粘性有。ローム粒入。

第106図 1区-2号住居



第107図 1区-2号住居出土遺物

2 1区-2号住居 (第106・107図、図版82・110・132)

概要 本住居はローム台地である1区-3地区の南西部に位置する円形に近いプランを呈する竪穴住居である。遺構の遺存状況はあまり良好とは言えず、丁度床面付近が確認面と重なったため、床面もほとんど確認することができなかった。

本住居は縄文時代前期の諸磯C式に比定される住居で、縄文土器深鉢(2)やその破片(3~6)が出土し、また深鉢(1)を用いた埋甕炉を伴う。柱穴は6カ所に確認されたが、このうち主柱穴としては柱穴2・3・6が配列するものと想定される。

規模 住居 長径：446cm 短径：417cm 深さ：不明 掘り方深さ：27cm

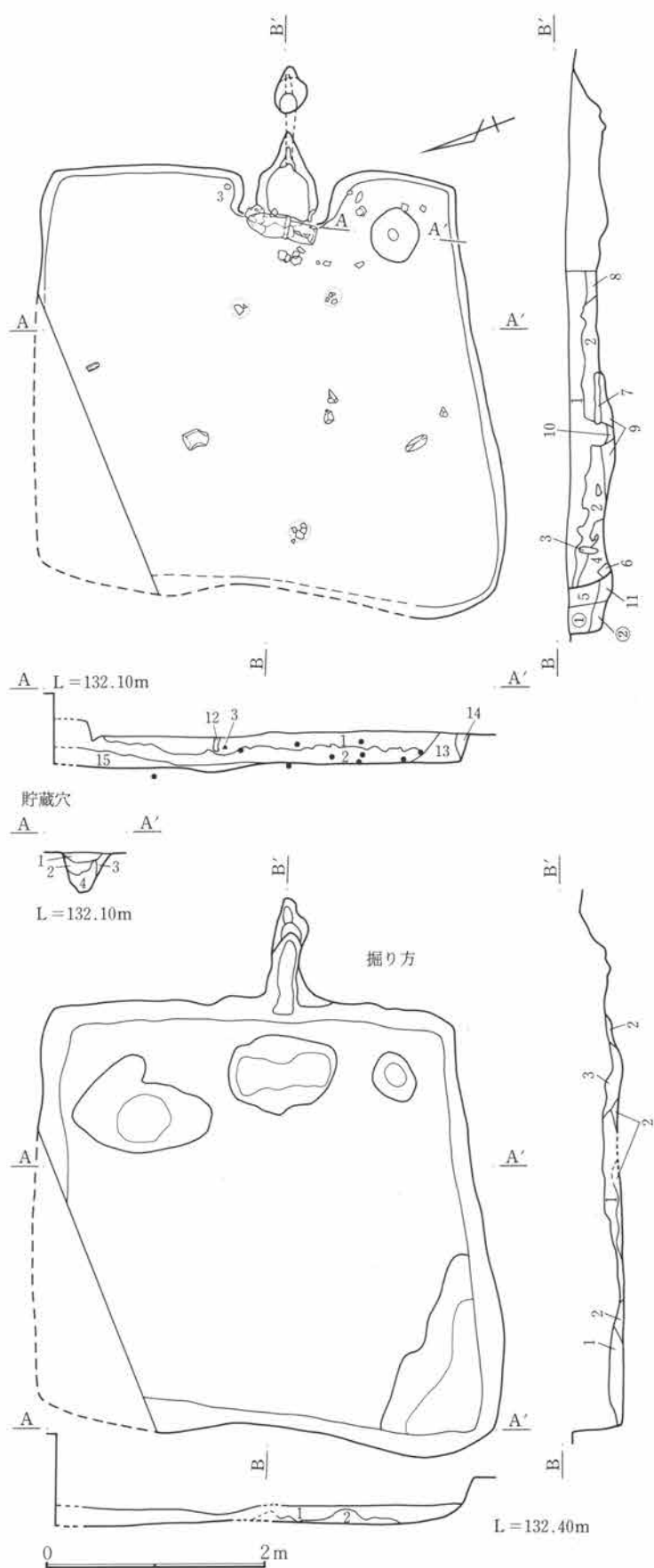
炉 径：30×18cm以上 深さ：10cm 掘り方径：18

cm 掘り方深さ：11cm

柱穴1 径：37×34cm 深さ：21cm 柱穴2 径：36×32cm 深さ：22cm 柱穴3 径：34×29cm 深さ：34cm 柱穴4 径：33×29cm 深さ33cm

柱穴5 径：25×20cm 深さ：38cm 柱穴6 径：34×30cm 深さ：38cm

構造 本住居はやや北東・南西方向に長い、多角形に近い円形のプランを呈する。掘り方を持ち、黒褐色土で埋め戻して床を貼っている。炉は長軸方向やや南西寄りに位置し、円形の掘り方を掘って深鉢を付設した埋甕炉である。柱穴の掘り方はあまり深くないが、柱穴4が隅丸の三角形を呈する以外は、小型の柱穴5と柱穴1、主柱穴に比定される柱穴2・3・6何れも隅丸方形のプランを呈している。



1区-3号住居覆土

- 1：暗褐色土 (10YR3/2)：軽石・ローム粒含。粘性やや有。
- 2：黒褐色土 (10YR3/3)：1層に比し軽石少なく粘性は強。
- 3：黒褐色土 (10YR2/3)：軽石・ローム粒含。粘性は2層同様。
- 4：黒褐色土 (10YR3/2)：ローム・黒色土・炭化物小ブロック含。粘性有。
- 5：暗褐色土 (10YR3/4)：軽石・ローム粒含。粘性有。
- 6：暗褐色土 (10YR3/3)：ローム粒・炭化物小粒含。粘性有。
- 7：暗褐色土 (10YR3/4)：もぐらの穴か。粘性強。ローム粒含。
- 8：褐色土 (10YR4/4)：ローム粒・炭化物小粒含。粘性やや弱。
- 9：にぶい黄褐色土 (10YR5/4)：20mm以下のローム含。酸化鉄ブロック少量含。粘性有。
- 10：暗褐色土 (10YR3/4)：ローム粒含。粘性有。
- 11：暗褐色土 (10YR3/4)：ローム粒・炭化物小粒含。粘性有。
- 12：黒褐色土 (10YR3/1)：径3mm以下の炭化物混入。粘性弱。
- 13：褐色土 (10YR4/4)：径10mm以下の焼土・軽石小粒含。粘性弱。
- 14：黄褐色土 (10YR5/6)：黒色土小ブロック・軽石混入。粘性有。
- 15：黒褐色土 (10YR3/2)：径10mm以下の炭化物含。粘性有。

地山層

- ①：暗褐色土 (10YR3/3)：住居覆土5層と同。
- ②：暗褐色土 (10YR3/3)：住居覆土11層と同。

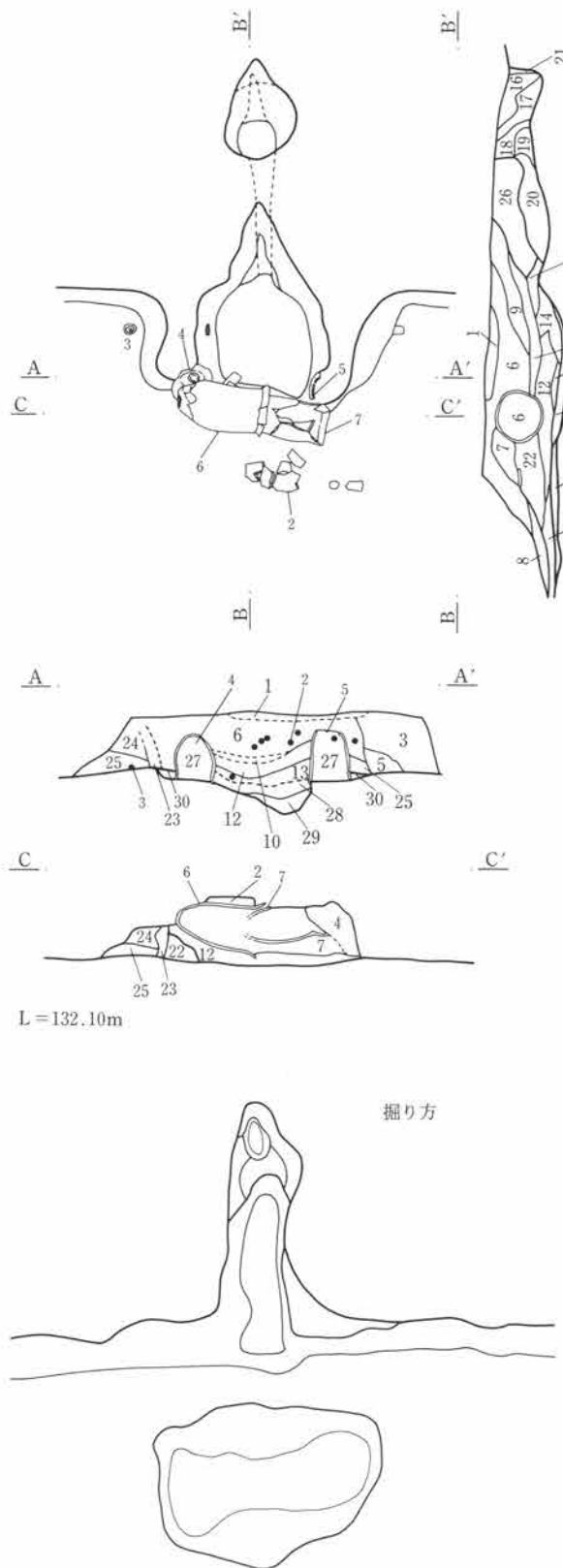
貯蔵穴覆土

- 1：オリーブ褐色土 (2.5Y4/4)：焼土粒・径10mmの炭化物・ロームブロック混入。粘性やや強。
- 2：暗灰黄色 (2.5Y4/2)：焼土粒・1層比小粒の炭化物粒混入。粘性やや強。
- 3：黄褐色土 (2.5Y5/4)：酸化鉄、赤褐色・黒褐色土ブロック含。粘性やや強。
- 4：暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)：ロームブロック・酸化鉄含。粘土ブロック少量。粘性強。

掘り方覆土

- 1：暗褐色土 (7.5YR4/3)：地山層土の小ブロック少量含。粘性強。
- 2：橙色土 (7.5YR6/8)：地山ブロック層。
- 3：灰褐色土 (7.5YR4/2)：焼土・炭化物多量に含。地山ブロック微量。カマド掘り方か。

第108図 1区-3号住居(1)



カマド燃焼部・煙道部覆土

- 1：褐色土（10YR4/4）：軽石・径10mm以下の焼土含。粘性有。
- 2：暗褐色土（10YR3/3）：褐色土（10YR4/6）ブロック混入。粘性やや弱。
- 3：暗褐色土（10YR3/3）：径20mm以下の焼土混入。粘性有。
- 4：褐色土（10YR4/4）：軽石・ローム小ブロックと径10mm以下の焼土粒含。粘性有。
- 5：暗褐色土（10YR3/3）：径10mm以下の焼土と炭化物粒・粘土ブロック含。粘土やや強。
- 6：にぶい黄褐色土（10YR4/3）：粘土小粒と少量軽石・焼土粒含。粘性有。
- 7：褐色土（10YR4/4）：軽石含みローム粒・焼土粒（橙色）少量含。
- 8：にぶい黄褐色土（10YR4/3）：径10mm以下の焼土含。ローム粒少量含。粘性有。
- 9：にぶい黄褐色土（10YR4/3）：径10mm以下の焼土と粘土粒少量含。粘性有。
- 10：褐色土（10YR4/4）：20mm以下の焼土（橙色、7.5YR6/8）多く含。粘性やや強。
- 11：にぶい黄褐色土（10YR5/4）：炭化物粒僅かに含。粘性強。
- 12：にぶい黄褐色土（10YR5/4）：ローム粒・径10mm以下の焼土・炭化物少量含。粘性やや強。
- 13：明赤褐色焼土（2.5YR5/8）：粘性やや弱。
- 14：オリーブ褐色土（2.5Y4/3）：径10mm以下の明赤褐色小ブロック（焼土か）とローム粒少量含。粘性有。
- 15：暗褐色土（10YR3/4）：径10mm以下の焼土少量含。炭化物混入。粘性やや強。
- 16：にぶい黄褐色土（10YR4/3）：軽石・ローム粒混入。炭化物小片・焼土粒僅かに含。
- 17：灰黄褐色土（10YR4/2）：軽石・ローム粒若干混入。粘性やや強。
- 18：にぶい黄褐色土（10YR4/3・5/4）ブロック層：径10mm程度の焼土微量に含。粘性やや強い。
- 19：暗褐色土（10YR3/3）：炭化物粒・径10mm以下の焼土・にぶい黄褐色土小ブロック混入。粘性やや強。
- 20：にぶい黄褐色土（10YR4/3）：炭化物粒・焼土小粒微量に含。粘性強。
- 21：褐色土（10YR4/4）：明黄褐色土小ブロック含。粘性やや強。

袖・天井覆土

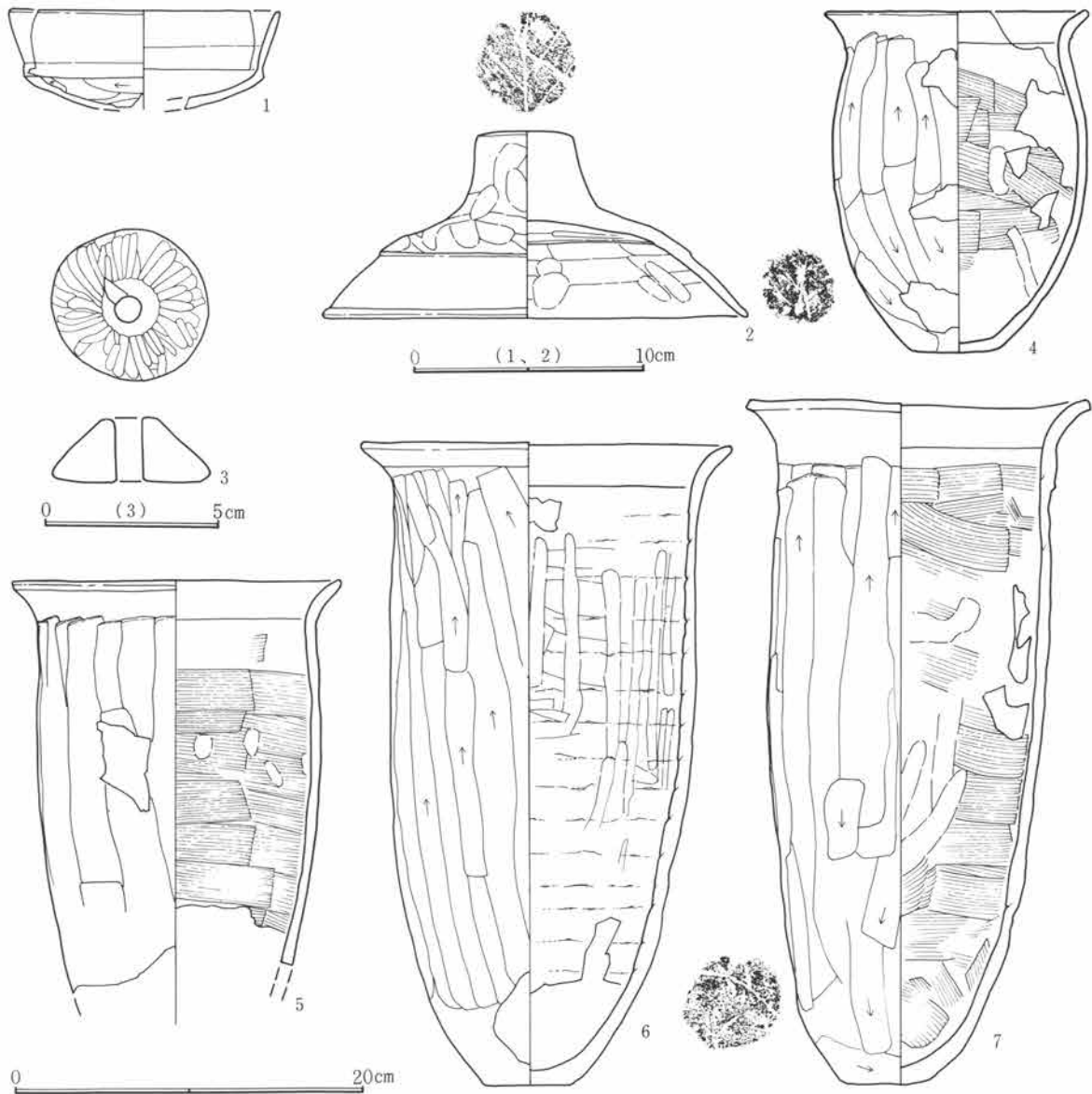
- 22：褐色土（10YR4/4）：径10mm程度の焼土含。粘性有。
- 23：黒褐色土（10YR3/1）：褐色土ブロック混入。粘性有。
- 24：にぶい黄褐色土（10YR4/3）：焼土粒混入。5層土に比し粘性弱。
- 25：褐色土（10YR4/4）：焼土粒・ローム粒混入。粘性有。
- 26：にぶい黄褐色土（10YR5/3）：褐色土（10YR4/1）小ブロック少量含。粘性やや強。
- 27：にぶい黄褐色土（10YR5/4）：地山灰白色土粒多量に、白色土細粒・褐色土粒少量含。

カマド廻り方覆土

- 28：灰褐色土（7.5YR4/2）：焼土粒・白色土細粒少量含。
- 29：褐色土（7.5YR4/3）：地山ブロック多量に、焼土細粒微量に含。粘性強。
- 30：褐色土（7.5YR4/3）：29層土に似るが地山層土ブロック少量。

0 1 m

第109図 1区-3号住居カマド(2)



第110図 1区-3号住居出土遺物(3)

3 1区-3号住居(第108~110図、図版83・110・111)

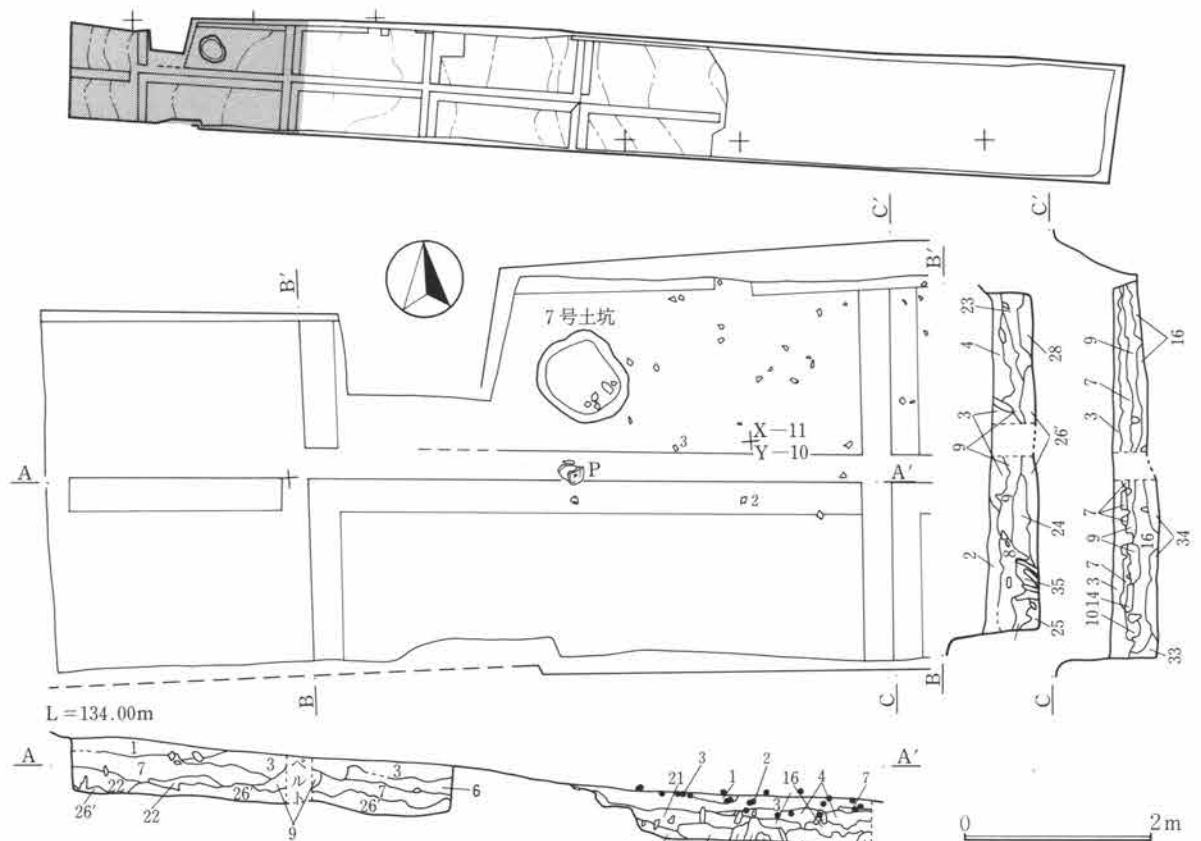
概要 本住居は1区-3地区中程に在る、東カマドの竪穴住居である。住居覆土と地山層が似るため特に西半は調査しずらく、また北西隅部は路線外のため調査できなかった。カマドの遺存は良好で貯蔵穴は確認できたが、柱穴は確認できなかった。

6世紀後半の遺物を出土するが、土師器甕は袖材(4・5)または天井材(6・7)として使用され、この他土師器坏(1)や石製紡錘車(3)、蓋としたが高坏の可能性を持つ異形の土師器(2)がある。

規模 縦:384cm 幅:370cm 深さ:43cm

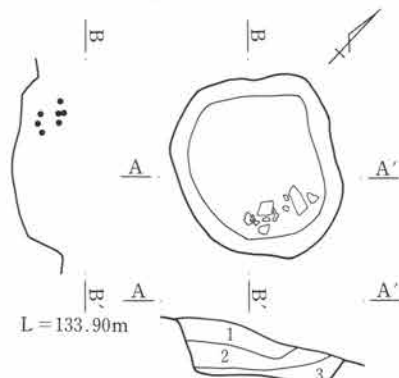
カマド 幅:94cm 奥行き:136cm 煙道部長:78cm
煙道径:10cm以下 右袖 幅:29cm以上 長さ:42cm
左袖 幅:32cm 長さ:38cm
燃烧部 幅:38cm 奥行き:48cm

構造 住居は方形のプランを呈し、掘り方を埋め戻して柔らかい床面を作る。円形プランの貯蔵穴はカマド右側に掘られ、カマドは手前側に長方形プランの掘り方を持つ。土師器甕を各1個を逆位に置いて袖材とし、2個をついで天井材とする。燃烧部は壁面より手前側に設定され、これよりやや高い位置にトンネル状の煙道を掘り、端部で垂直に立ち上げる。



自然堆積層

- 1：暗褐色土 (10YR3/4)：軽石含。粘性弱。
- 2：黒褐色土 (10YR3/2)：にぶい黄褐色土ブロック斑点状に混入。軽石少量含。粘性有。
- 3：暗褐色土 (10YR3/3)：軽石・ローム小ブロック混入。粘性やや弱。
- 4：黒褐色土 (10YR3/2)：褐色土中ブロック混入。軽石少量。粘性有。
- 5：褐色土 (10YR4/4)：軽石・ローム細粒斑点状に含。粘性弱。
- 6：褐色土 (10YR4/4)：少量の軽石・ローム粒混入。粘性有。締まりに欠。
- 7：暗褐色土 (7.5YR3/3)：少量の軽石とローム粒混入。
- 7'：7層土に軽石を混入し、ローム粒を斑点状に含。
- 8：黒褐色土 (10YR2/3)：にぶい黄褐色土ブロック斑点状に混入。粘性やや強。
- 9：極暗褐色土 (7.5YR2/3)：軽石・ローム粒とにぶい黄褐色土の小ブロック混入。粘性有。
- 10：黒褐色土 (10YR2/3)：軽石・ローム粒少量含。粘性有。
- 11：黒褐色土 (10YR2/3)：軽石・ローム粒を入。粘性やや強。
- 12：黒褐色土 (7.5YR)：ローム粒斑点状に混入。粘性やや強。
- 13：暗褐色土 (10YR3/4)：軽石混入。粘性有。12層に比定。
- 14：黒褐色土 (10YR23/2)：10層より軽石・ローム粒多。粘性やや弱。
- 15：暗褐色土 (10YR3/4)：軽石少量含。粘性有。(156頁に続く)



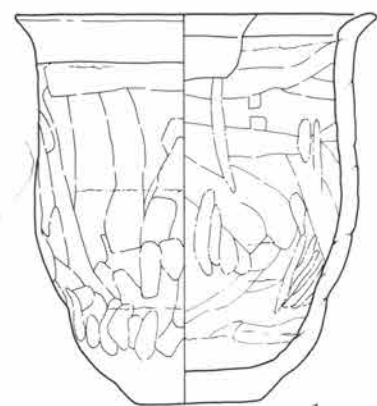
1区-9号土坑

- 1：黒褐色土 (7.5YR3/1)：ローム粒・焼土粒微量に含。しまり弱。
- 2：黒褐色土 (7.5YR3/1)：ローム小ブロック・焼土粒ブロックをやや多く含。
- 3：黒褐色土 (7.5YR3/1)

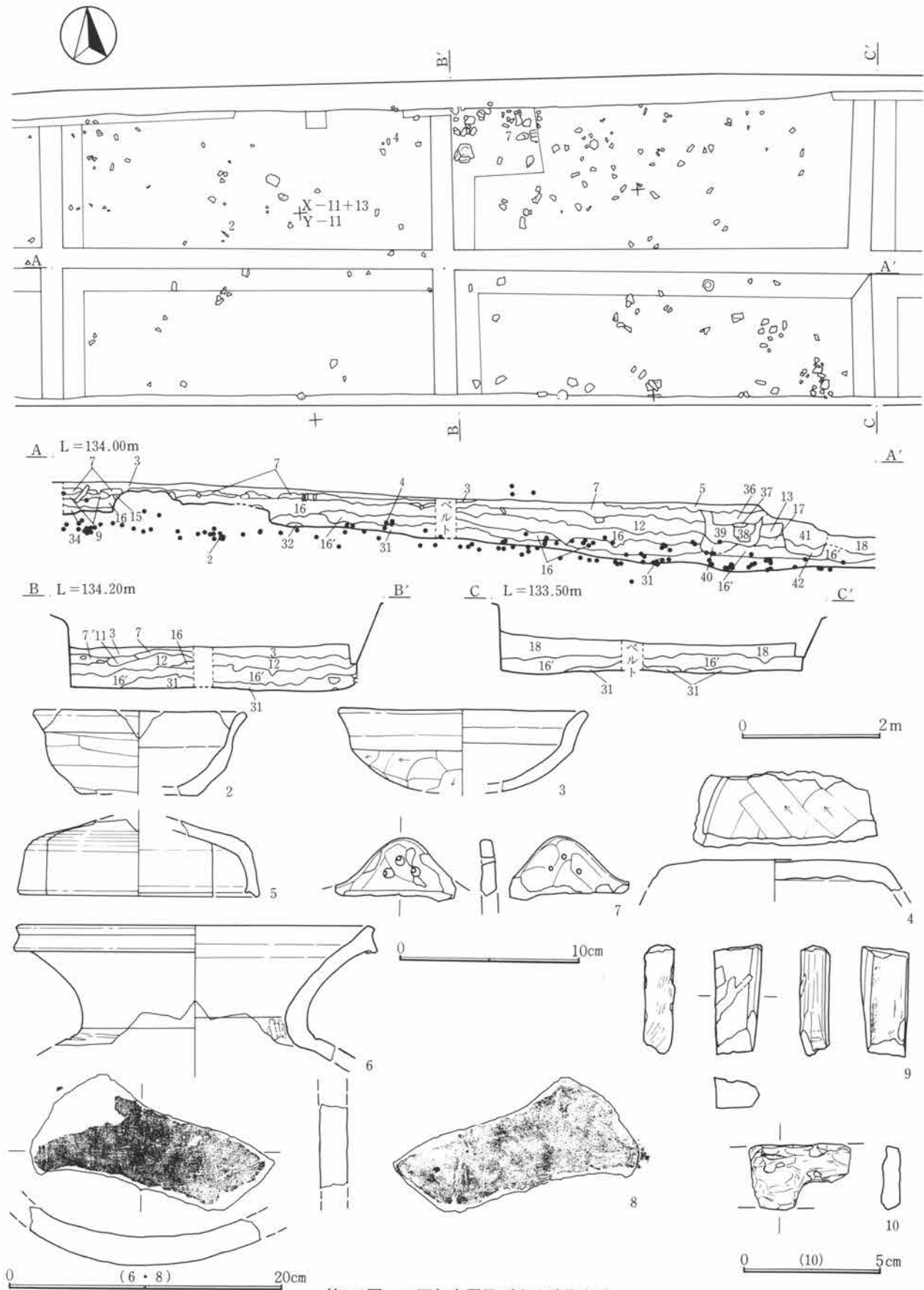
遺物包含層

- 1：暗褐色土 (10YR3/4)：地山層。

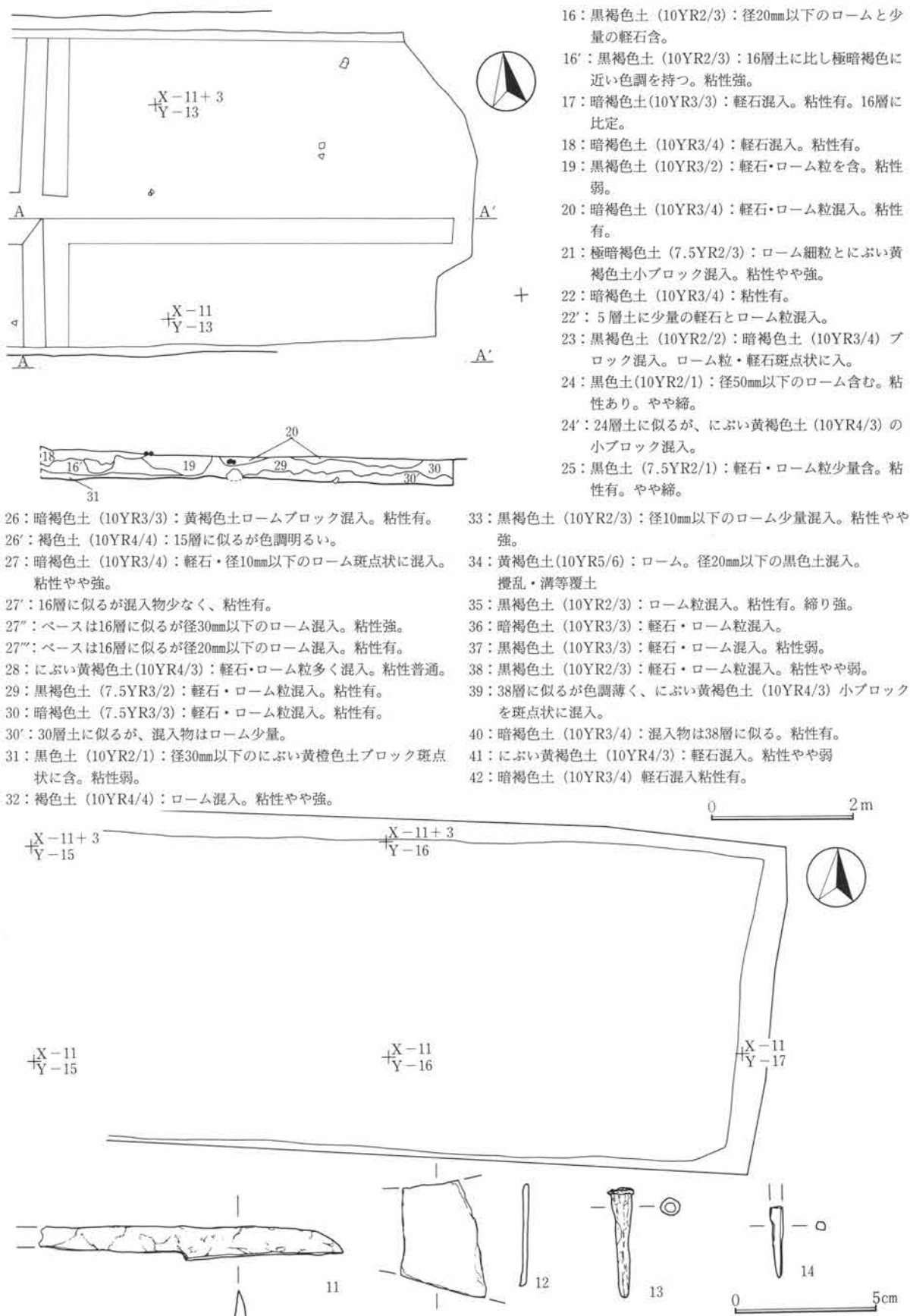
0 1m



第111図 1区包含層・9号土坑及び包含層出土遺物(1)



第112図 1区包含層及び出土遺物(2)

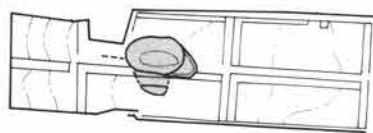


第113図 1区包含層及び出土遺物(3)

4 1区一遺物包含層(第111～113図、図版85・113・117・132)

概要 この包含層は1区一2地区に所在し、谷地形を埋める黒色或いは暗褐色等の色調の暗い土壤による堆積土中に認められる。土器を中心とする遺物は合計94点を数えたが、時間的に古代から中世までのかなりの時間的幅を有するものであった。この中には6世紀後半の土師器坏(3)や須恵器蓋(5)、9世紀後半の回転ロクロ整形の碗(2)や蓋部外面にヘラ調整のある須恵器蓋(4)、須恵器甕(6)が見られるほか、軟質陶器の把手(7)、縄目痕のある平瓦(8)、砥石(9)、刀子(11)、角釘(13)などの遺物も出土してきているが、概ね中心となるのは古墳時代から平安時代にかけての時代の遺物である。

この中で特徴的だったのは、後述の1区一9号土坑の南に近接して出土した西暦600年前後と推定される土師器甕(1)である。この甕はほぼ完形に近いもので、正位に設置されたものが傾斜し、転倒したような状態で出土している。当初は1区一8号土坑と併せて竪穴住居の存在を想定して調査を進めたが遺構は確認できず、また土器の周囲の土壤も遺物包含層の土壤と同じであることが確認されたため、遺構に伴わないものと判断された。正位に設置されていたものと推定されるが、該地が谷地形への傾斜変換点に当たることも併せて、何らかの意図を以て立てられていたものと思慮される。



0 1m

5 1区一9号土坑(第111図、図版85)

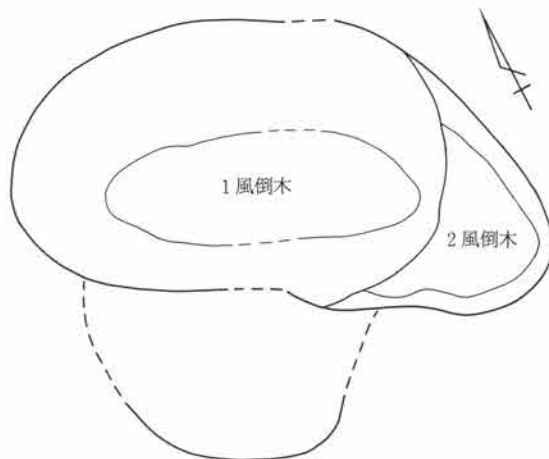
概要 本土坑は調査時点では1区一2一7号土坑と呼称した土坑である。1区一2地区の西寄り、ローム台地に近い遺物包含層西端付近に位置する。覆土に焼土を含むことなどから、当初本土坑付近にカマドの可能性を想定し、住居の存在を考えたが住居を確認することができなかったため、単独の土坑として処理した。本土坑は上述のように遺物包含層の範囲内に位置し、覆土が基本的には遺物包含層と近似する土壤で覆われており、出土遺物からも遺物包含層と時期的に符合する。

規模 長軸：92cm 短軸：87cm 深さ：30cm

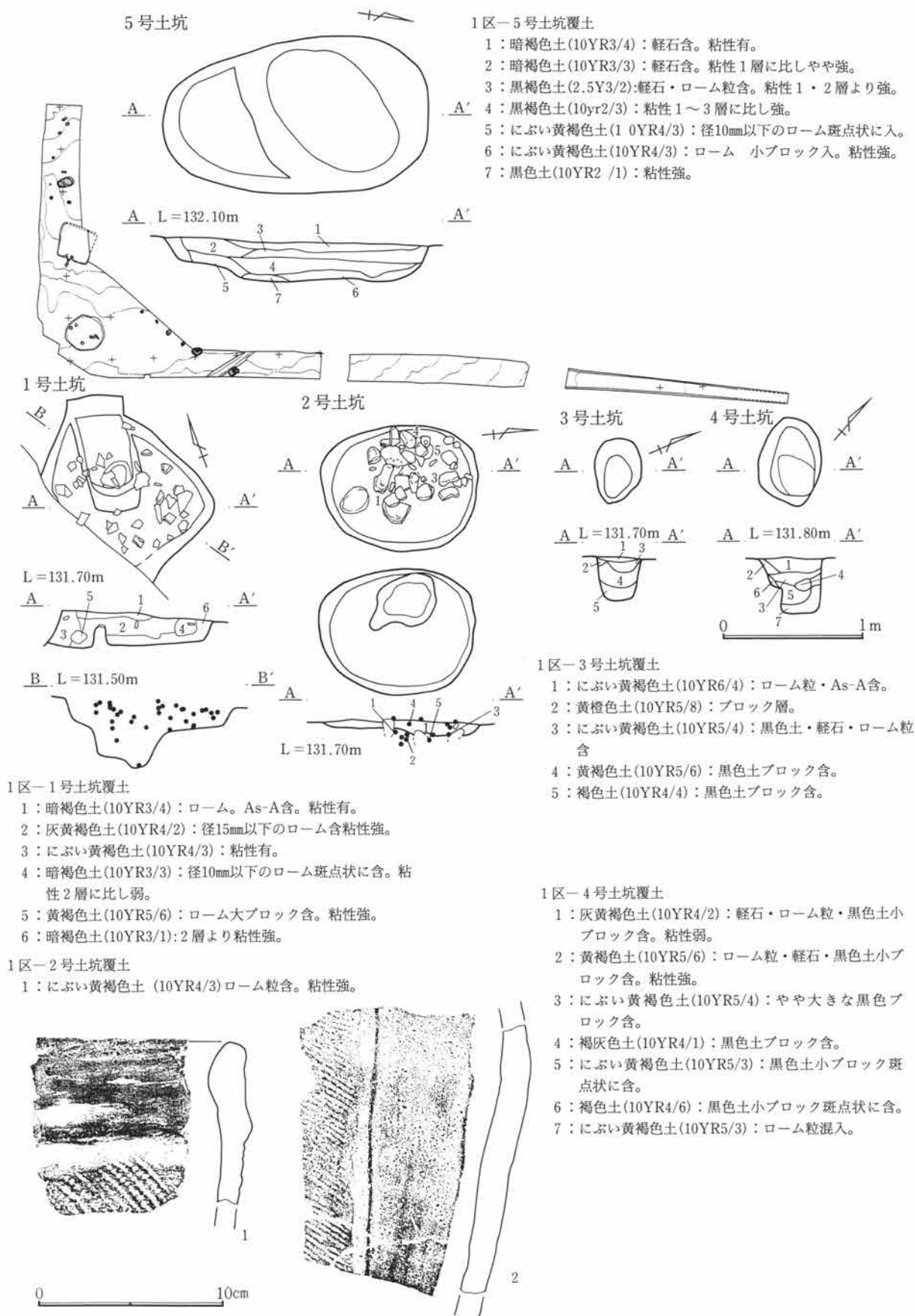
構造 方形を意識したプランを有し、底面には多少凹凸が見られるが、緩傾斜面に設置されるにも拘わらず水平に保たれている。

6 1区一1・2号風倒木痕(第114図)

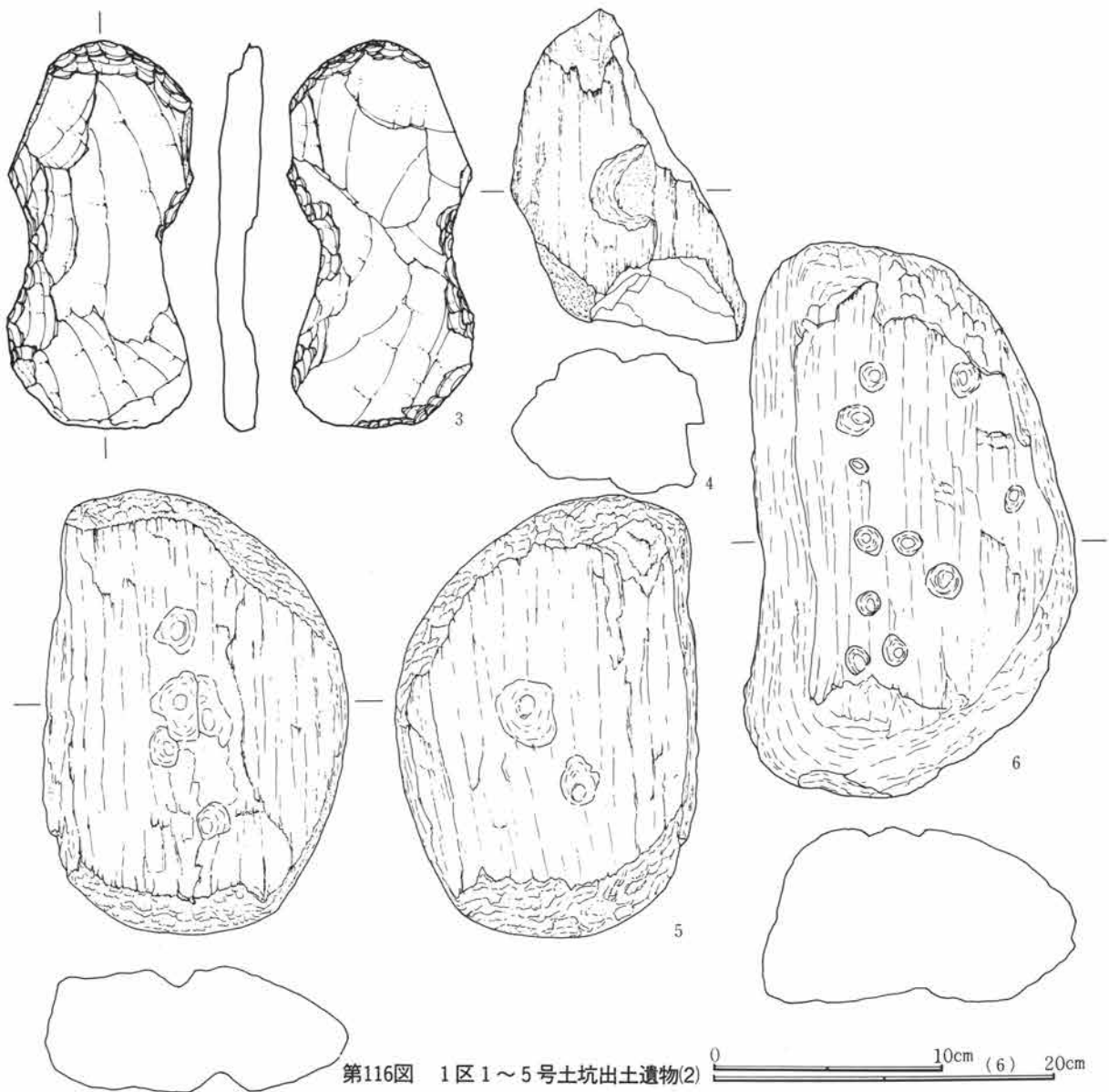
概要 この2つの風倒木痕は1区一2地区の遺物包含層の下位に対する、最終確認のための掘削を行った際に発見された楕円形のプランを呈する小型の風倒木痕である。この2基の風倒木痕は1区一2地区の遺物包含層から40cm程下位に確認されたもので、1号風倒木痕が2号風倒木痕を切っている。時期等は古墳時代以前としか報告できないが、断面観察から北側の1号風倒木痕は北側に、南側の2号風倒木痕は西側に倒れたものと判断される。



第114図 1区一1・2号風倒木痕



第115図 1区-1～5号土坑及び出土遺物(1)



第116図 1区1～5号土坑出土遺物(2)

7 1区-1号土坑 (第115図、図版84・113)

概要 本土坑は1区-3地区北よりに位置し、一辺を1区-7号溝に切られ、北側から現代の攪乱が入り込んでいる。

須恵器・土師器の甕の破片などを多く出土するが時期等の特定は難しいが、奈良時代に比定されるものと思われる。

規模 長軸：120cm 短軸：80cm以上 深さ：17cm

構造 長方形のプランを呈するものと判断される。底面はフラットに近い。

概要 本土坑は1区-7号溝の南、調査区の西壁寄りに位置する土坑である。上面が掘削されて底面近くが遺存するのみで、全体の形状等は不祥である。

底部付近に礫に混ざって、縄文時代中期の土器片(1・2)や打製石斧(3)、凹石(4)、多孔石(5・6)などが出土している。

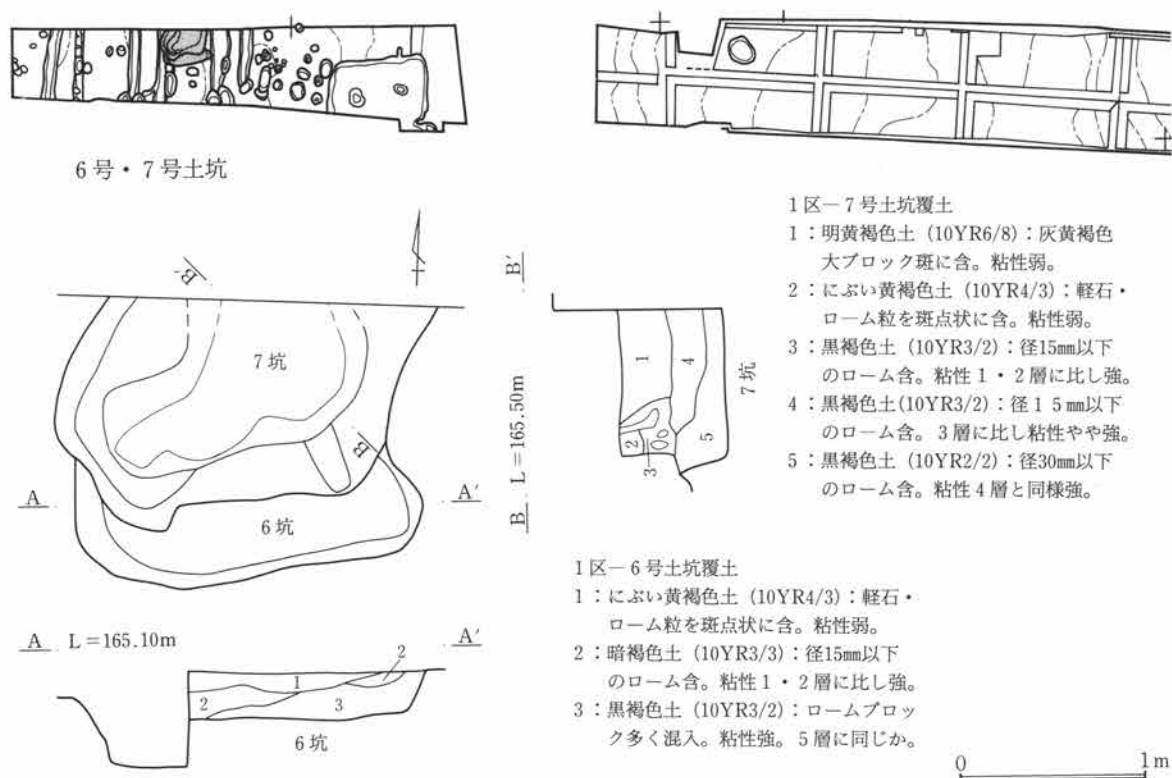
規模 長軸：110cm 短軸90cm 深さ：7cm

構造 楕円形のプランを呈し、底面は概ねフラットである。

9 1区-3号土坑 (第115図、図版84)

概要 本土坑は1区-2号土坑の南西、調査区西壁

8 1区-2号土坑 (第115・116図、図版84・112)



第117図 1区6・7号土坑

近くに位置する小土坑である。

恐らく柱穴になると思われる遺構で、覆土にAs-Aを含む。江戸時代後期以降の所産である。

規模 径：40×30cm 深さ：31cm

構造 崩れた方形のプランを呈する。底部はやや丸底気味である。

10 1区-4号土坑（第115図、図版84）

概要 本土坑は1区-3号土坑の南西、調査区西壁寄りに位置する小土坑で、1区-3号土坑同様柱穴になるものと判断される。

覆土に軽石が見られるものの、時期等を特定することはできなかった。

規模 長軸：58cm 短軸48cm 深さ：37cm

構造 長方形を基本とするプランを呈し、底部は平底である。

11 1区-5号土坑（第115図、図版85）

概要 本土坑は1区-3号住居の西、1区-2地区

の谷地部に寄った位置に在る。

覆土に軽石が確認されるものの時期等は特定できなかった。

規模 長軸：188cm 短軸：110cm 深さ：26cm

構造 やや西に傾くが主軸は北に向く。遺構は南にすぼまる楕円形のプランを呈し、南側にテラスを持つ。底面はほぼ平底を呈する。

12 1区-6・7号土坑（第117図）

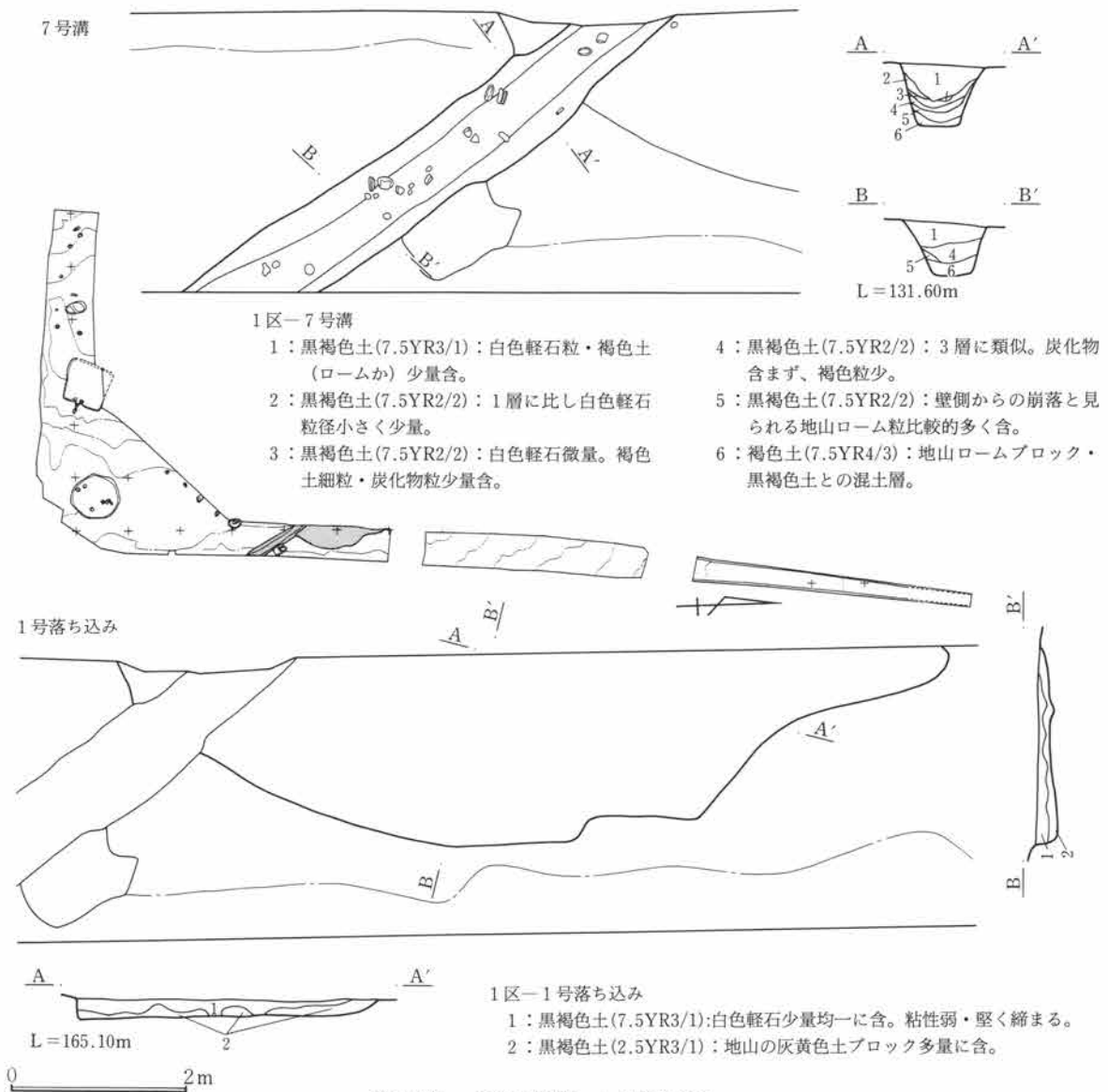
概要 1区-6・7号土坑は1区の中位に位置する。7号土坑が6号土坑を切っており、7号土坑は北側が路線外に出ているため、双方共全体の状態などは明らかでない。

覆土中に古墳時代後期の遺物を含むが、時期等を特定することはできなかった。

規模 1区-6号土坑 長さ：180cm 深さ：37cm

1区-7号土坑 長さ：180cm 深さ：47cm

構造 何れも形状は不明であるが、底部はフラットである。



第118図 1区7号溝・1号落ち込み

13 1区-7号溝 (第118図、図版84・113)

概要 本溝は1区-3地区北寄り位置し、1区-1号土坑及び1区-1号落ち込みを切るしっかりした掘り方の堀である。5.1m程を調査したが、遺構の遺存状況は良好で、流水の痕跡は認められなかった。

遺構の用途は特定できず、出土遺物等からも時期は特定しづらいが、およそ1区-1号溝との時間的隔たりは少ないものと考えられる。

規模 幅：80～98cm 深さ：72cm

構造 幅95cm程の直線的なプランを呈するしっかりした箱堀状の掘り方を持つ。底面はきれいな平底で、直線的に開く壁面を有する。

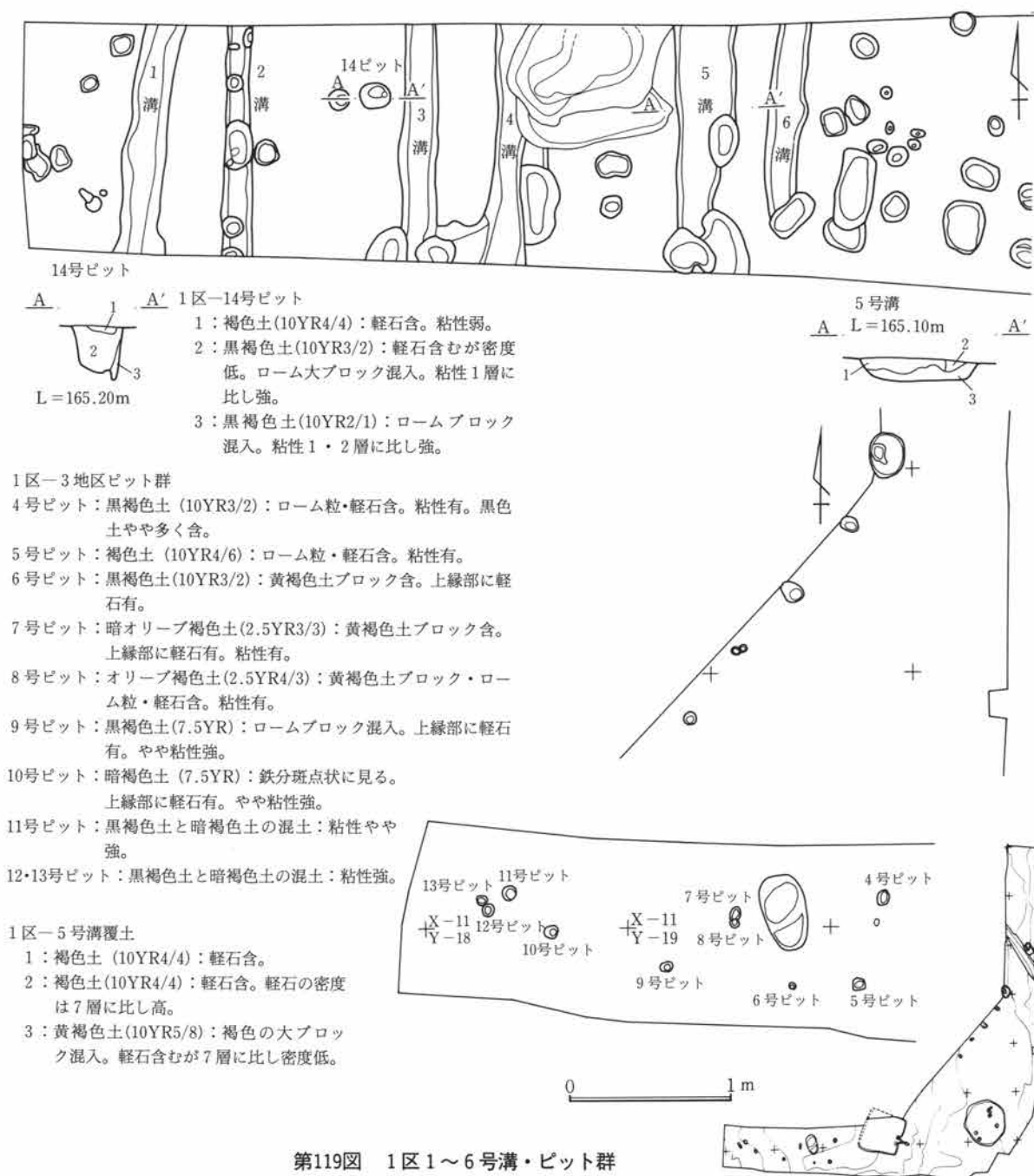
14 1区-1号落ち込み (第118図、図版86)

概要 本遺構は1区-3地区北部に在り、7号溝に切られている。覆土は黒褐色土で、シルト質の土を若干掘り込んで露出させているのが特徴である。カマド用材掘削に伴う遺構の可能性も考慮される。

覆土中にAs-Bが含まれているが、本遺構は7号溝より古い遺構なので攪乱による混入と判断される。本遺構の時期は特定できなかったが、奈良時代以前の所産である。

規模 残存幅：469cm 残存厚：106cm 深さ：12cm

構造 プランは円形に近いものと推察される。底面は全体としては平底であるが、凹凸が見られる。



第119図 1区1～6号溝・ピット群

15 1区-1～6号溝 (第119図)

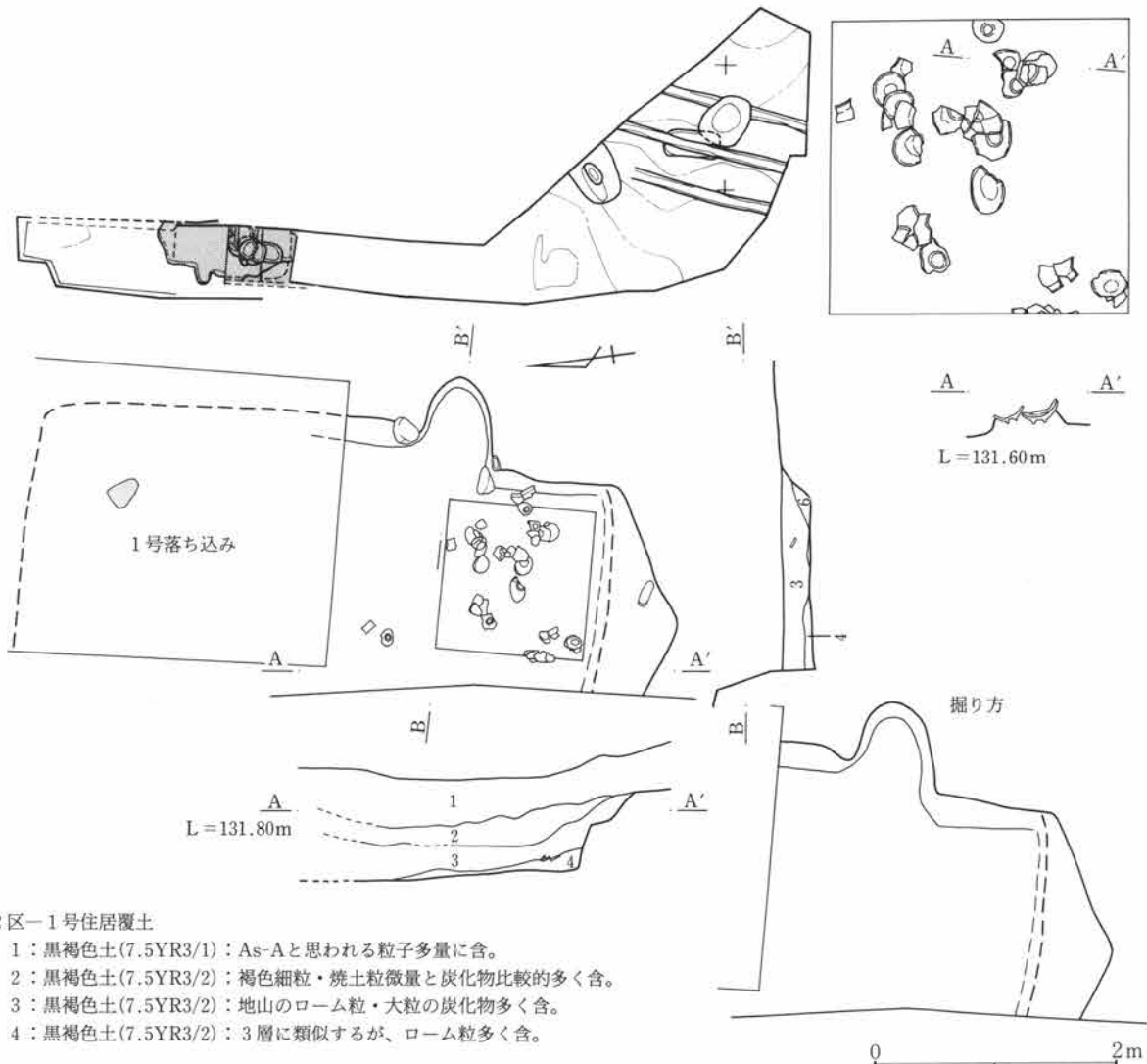
概要 1区-1地区の6条の溝は、それぞれ165～170cm隔たる1・3・5号溝と2・4・6号溝の2群に分けられる。前者は40～50cm、後者は30～40cm程の幅の溝からなり、双方の群は55cm程隔たる。何れも現代に至る同一の畠のサク状遺構と判断される。

16 1区-1地区のピット群 (第119図)

概要 1区-1地区では、40基以上の小土坑・ピットからなるピット群を調査した。このピット群に建物等は想定できず、時期の特定もできなかった。

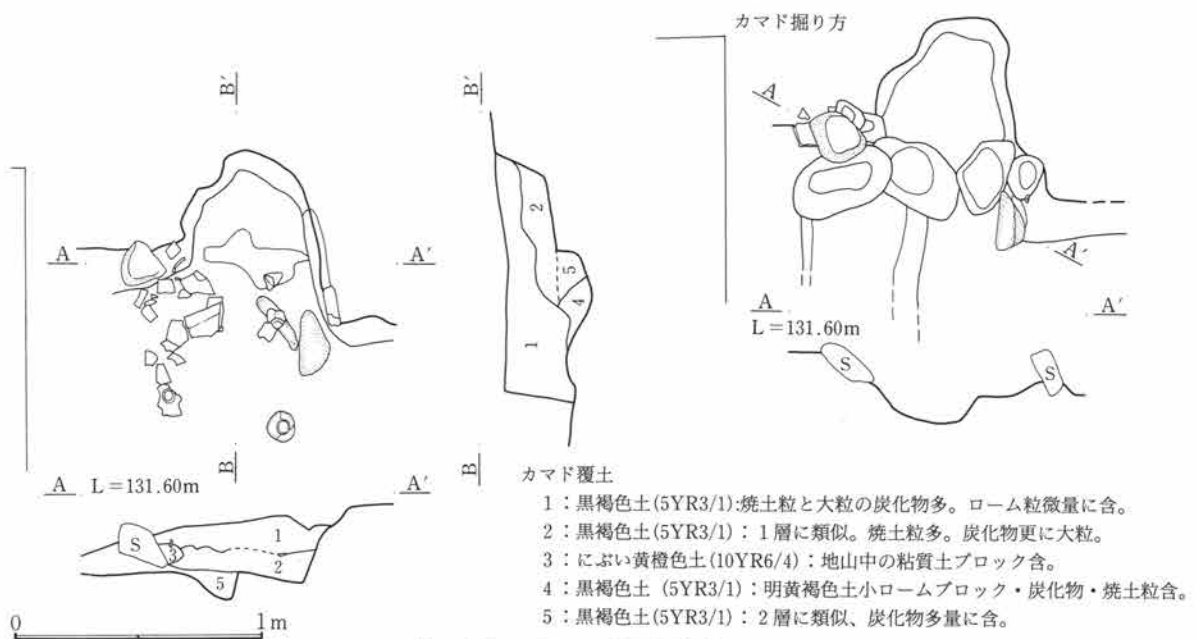
17 1区-3地区のピット群 (第119図)

概要 1区-3地区では西寄り一角に13基の小ピットを確認調査した。概ね暗い色調の覆土を持つが、建物等や時期を特定することはできなかった。



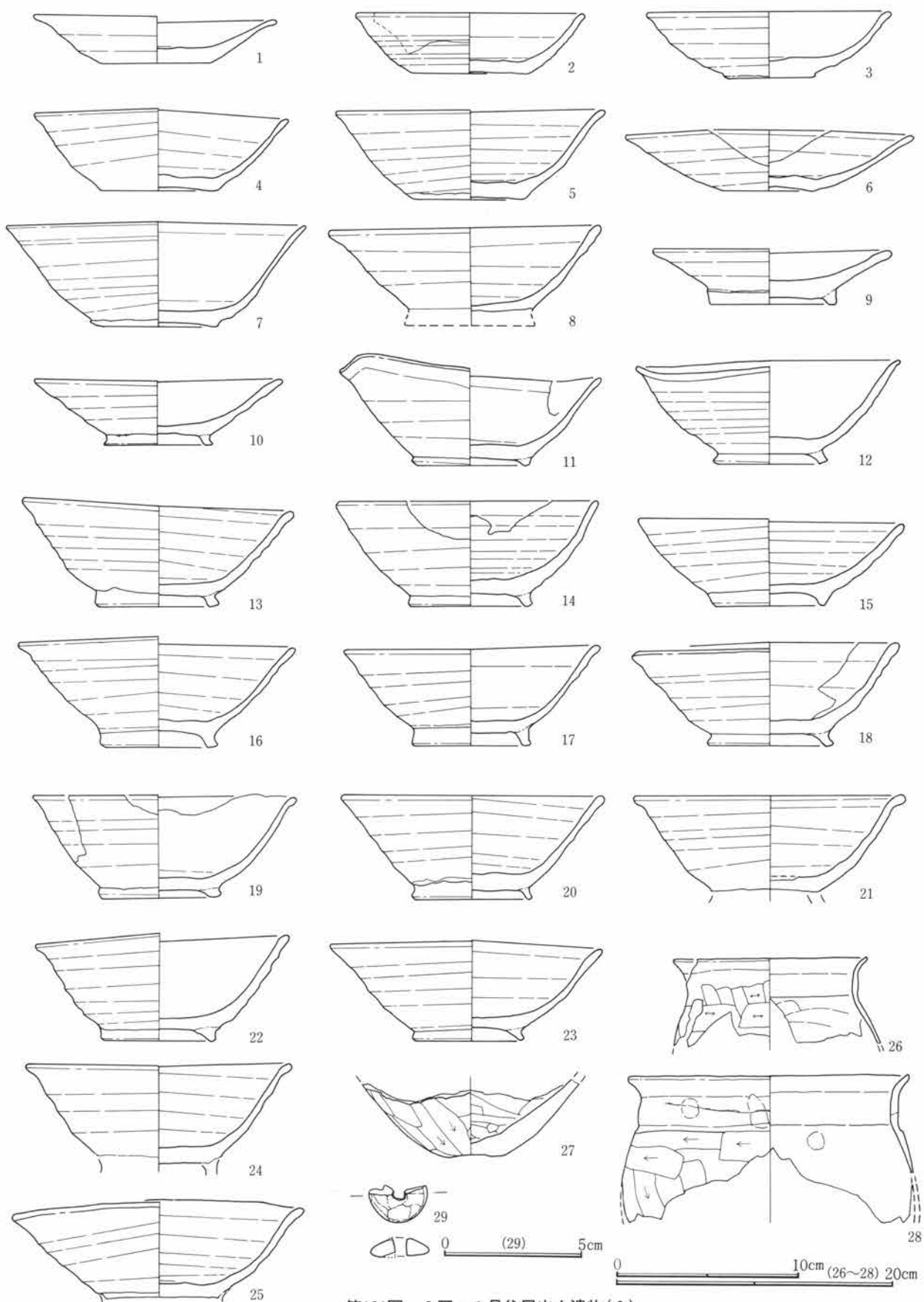
2区-1号住居覆土

- 1：黒褐色土(7.5YR3/1)：As-Aと思われる粒子多量に含。
- 2：黒褐色土(7.5YR3/2)：褐色細粒・焼土粒微量と炭化物比較的多く含。
- 3：黒褐色土(7.5YR3/2)：地山のローム粒・大粒の炭化物多く含。
- 4：黒褐色土(7.5YR3/2)：3層に類似するが、ローム粒多く含。

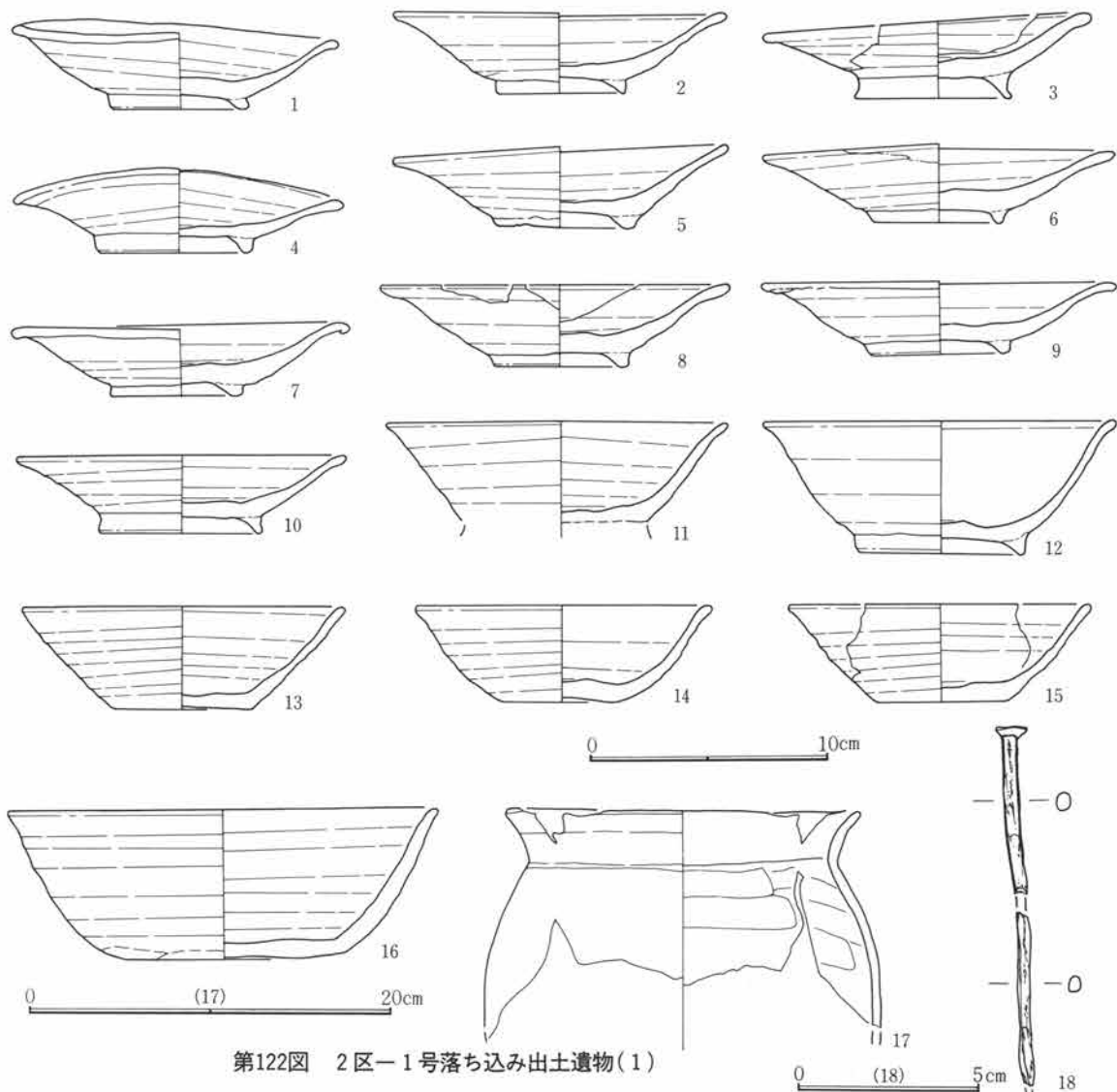


- 1：黒褐色土(5YR3/1)：焼土粒と大粒の炭化物多。ローム粒微量に含。
- 2：黒褐色土(5YR3/1)：1層に類似。焼土粒多。炭化物更に大粒。
- 3：にぶい黄橙色土(10YR6/4)：地山中の粘質土ブロック含。
- 4：黒褐色土(5YR3/1)：明黄褐色土小ロームブロック・炭化物・焼土粒含。
- 5：黒褐色土(5YR3/1)：2層に類似、炭化物多量に含。

第120図 2区-1号住居(1)



第121図 2区-1号住居出土遺物(2)



第122図 2区一1号落ち込み出土遺物(1)

18 2区一1号住居 (第120・121図、図版88・114・115・117)

概要 本住居は2区の南部に位置する小型の竪穴住居で、西半部は路線外のため調査を行えず、北半が2区一1号落ち込みに切られている。

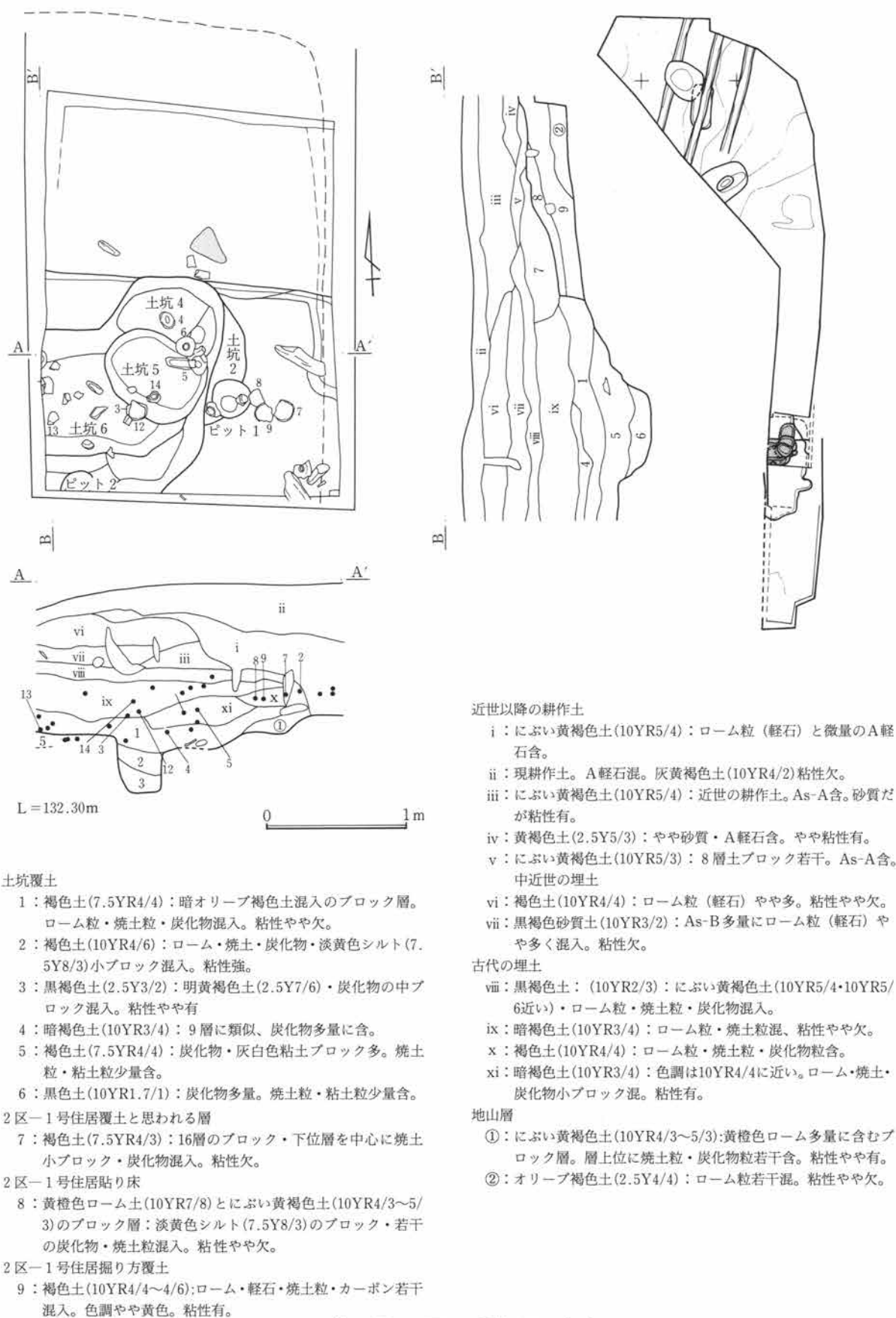
遺構そのものの遺存状態はあまり良好ではなく特徴の少ない住居であるが、住居の規模と調査範囲からして多量の遺物を出土している。9世紀後半と判断されるこれらの遺物は、カマド及びカマド右側手前の地点に多く見られ、回転ロクロ整形の皿(1・9・10)、坏(2・7)、碗(8・25・1号落ち込み-12)が出土し、他にコ字状口縁の土師器甕(26・27・28)、土師器の紡錘車(29)が出土している。また本住居が(第122図)1号落ち込みに切られ、その

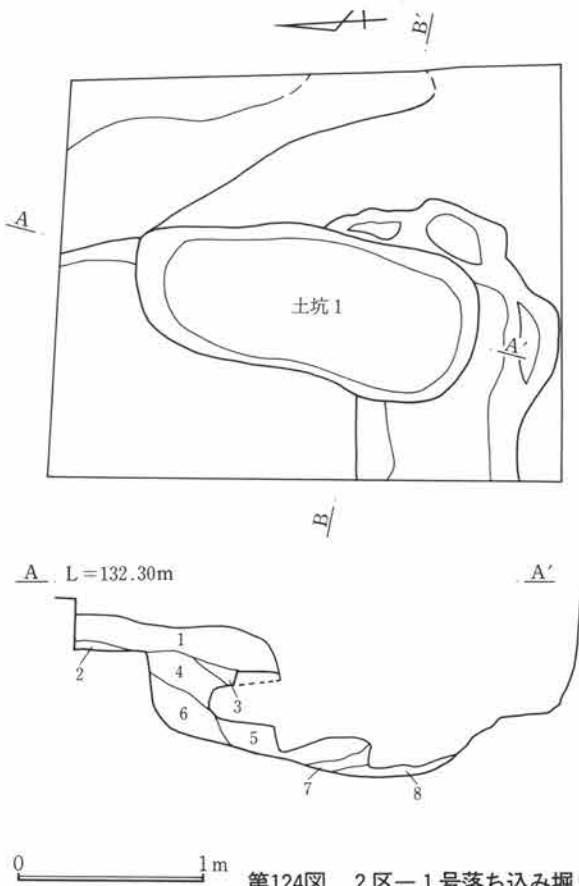
出土遺物と接合されるもの(1号落ち込み-12)があることから、1号落ち込み出土遺物のうち回転ロクロ整形の皿(1・9・10)、坏(13・15)、碗(11・12)、鉢(16)とコ字状口縁の土師器甕(17)も本住居のもの判断される。

規模 推定幅：280cm 残存長：160cm 深さ：38cm

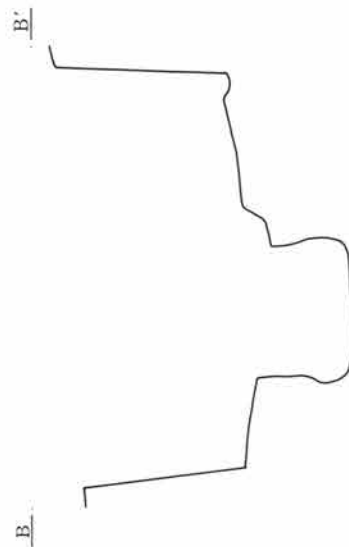
カマド 幅：91cm以上 奥行き：71cm

構造 全体の構造は不詳だが、方形又長方形のプランを呈すると想定される。住居は浅い掘り方をロームを含む黒褐色土で埋め戻して床を造るが、貯蔵穴と柱穴は無い。カマドは手前側に3連の土坑の掘り方を掘り、これを埋め戻してカマドを造り出している。袖材には川原石を使用している。





第124図 2区-1号落ち込み堀り方(3)



2区-1号落ち込み-土坑1覆土

- 1：黒褐色土(7.5YR3/1)：褐色細粒・炭化物・焼土粒少量含。粘性有。
- 2：褐色土(7.5YR4/3)：1層土とロームブロックの混土層。
- 3：褐色土(7.5YR4/3)：2層土に類似。ロームブロック大。
- 4：黒褐色土(7.5YR3/1)：1層土に類似。ローム粒均一に含。
- 5：褐色土(7.5YR4/3)：3層土に類似。
- 6：黒褐色土(7.5YR3/1)：4層土に類似。ローム粒多量含。
- 7：黒色土(7.5YR2/1)：6層土に炭化物多量含。
- 8：にぶい黄橙色土(10YR7/2)：地山の粘土主体。僅かに黒褐色土と炭化物含。

19 2区-1号落ち込み(第123～125図、図版89・115・116・117)

概要 本落ち込みは2区-1号住居を切り、これに伴うと思われる遺物を多く含む。落ち込みとしたが、6基以上の土坑・小ピットが切り合う遺構群である。

本落ち込み中最も古いのは、第124図に示した横穴状の土坑(以下『土坑1』とする)である。土坑1に関しては2区-1号住居との新旧関係は特定できない。天井の落下と思われる粘質土層の上層などに多くの炭化物を含み、壁体らしいものも見られたので、土師器の窯等の可能性も考慮される。

土坑1の南部には、第123図に示した小型の土坑5基(『土坑2』『土坑3』『土坑4』『土坑5』『土坑6』とする)と小ピット2基(『ピット1』『ピット2』とする)がある。中心の土坑5とその北の土坑4の新旧関係は不明だが、これらは東接する土坑2と南接の土坑3を切っている。土坑5は西側の東西に分割する可能性をもつ土坑6に切られる。また土坑2

に絡んでピット1、土坑3に絡んでピット2があるが、それぞれの新旧関係は不明である。

規模 開口部範囲 南北幅：152cm 東西幅：150cm

土坑1 長軸：371cm 短軸：164cm 天井高：95cm

土坑2 残存長：182cm 残存幅：46cm 深さ：6cm

土坑3 残存長：155cm 残存幅：77cm 深さ：10cm

土坑4 長軸：155cm 短軸：100cm以上 深さ：95cm

土坑5 長軸：149cm 短軸：120cm 深さ：57cm

土坑6 長軸：232cm 短軸：85cm 深さ：30cm

ピット1 径：55×54cm 深さ：17cm

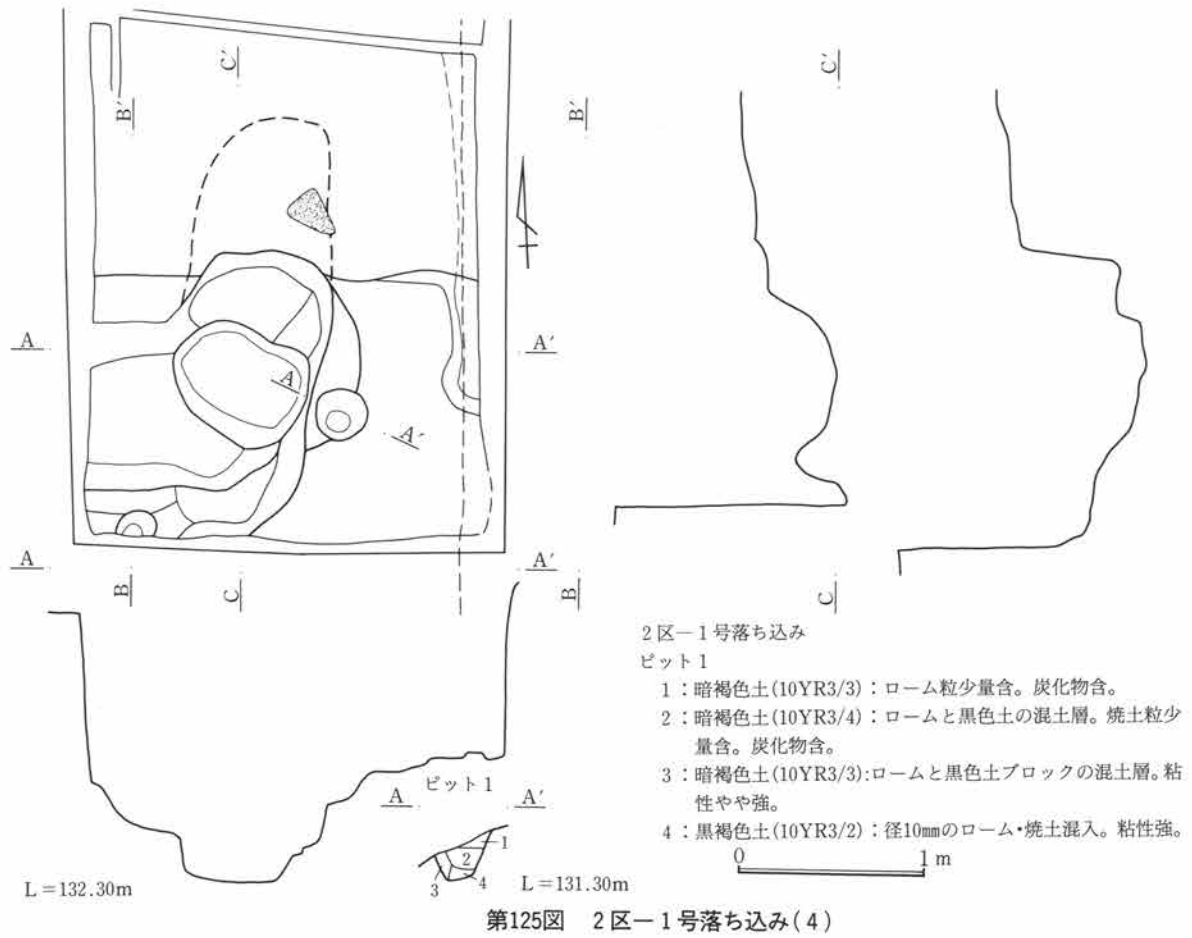
ピット2 径：40×27cm以上 深さ：28cm

構造 土坑1 長円形のプランで、南側に開口する横穴状の形態を呈する。底面南に向かって傾斜する。

土坑4 隅丸方形のプランを呈する。

土坑5 楕円形のプランで、多少丸底気味である。

ピット1・2 円形のプランを呈し、平底である。



20 2区-1号土坑(第127図、図版89)

概要 本土坑は2区の北部に在り、2区-2号土坑の上位を切っている。As-Aを含むが現代のサクに切られている。

規模 長軸:219cm 短軸:98cm 深さ:13cm

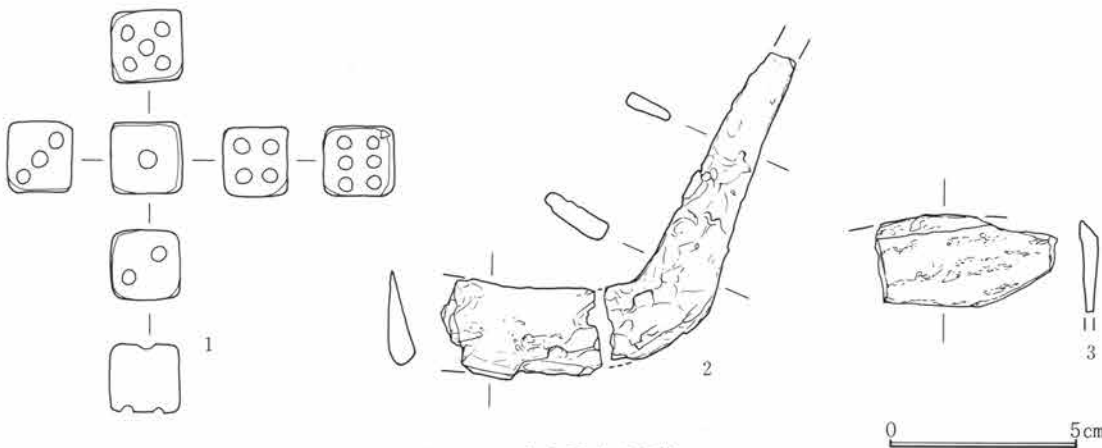
構造 長方形のプランを呈し浅い掘り込みである。

21 2区-2号土坑(第127図、図版89)

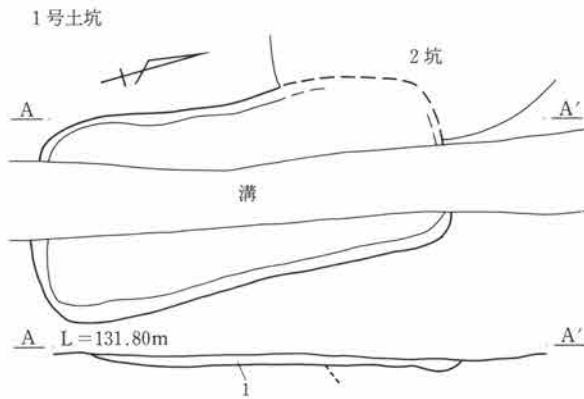
概要 本土坑は2区北部に位置する。上位を2区-1号土坑に切られるが、遺構の大半は確認できた。

As-Aを含み江戸時代後期以降の所産と判断される。

規模 長軸:230cm 短軸:117cm 深さ:88cm

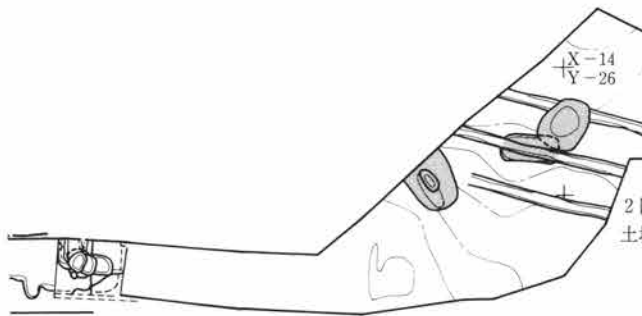


第126図 包含層出土遺物



2区-1号土坑覆土

1: 黒褐色土(10YR3/1): 白色細粒・褐色粒少量均一に含。



2区-4号土坑
土坑埋没後の土層

i: 現耕作土

1: にぶい黄褐色土(10YR5/3): As-A軽石混。粘性欠。

2: にぶい褐色土(7.5YR5/3): 色調暗。酸化鉄多量。粘性欠。

3: i-2層と2層土の混土層

ii: にぶい黄褐色土(10YR5/3): As-A含。粘性欠。

土坑覆土

1: 褐色土(10YR5/3): ローム・5層土等やや多。粘性やや欠。

2: にぶい黄褐色土(10YR4/3): ローム小塊入。粘性強。

3: にぶい黄褐色土(10YR5/4): 植物の根の痕跡。

4: にぶい黄褐色土(10YR5/4~5/6)からにぶい黄褐色土(10YR4/3)への漸移層。ローム粒混。粘性有。

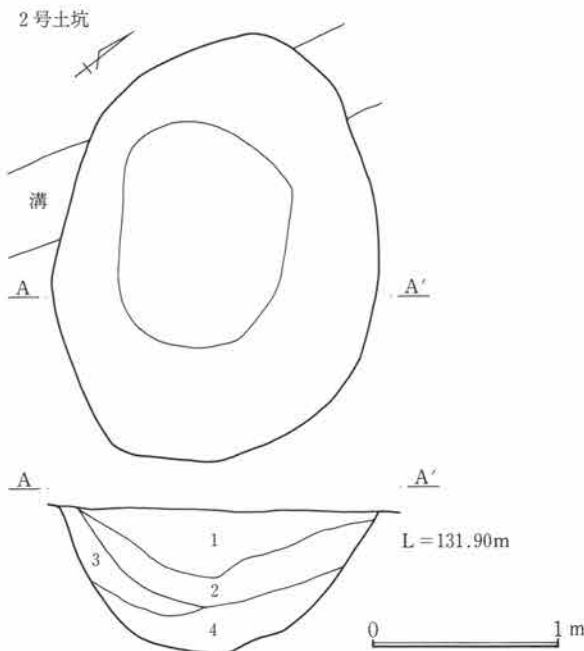
5: にぶい黄褐色土(2.5Y6/4): ローム小塊混入。粘性有。

6: にぶい黄褐色土(10YR4/3): ローム小ブロック混。粘性強。

7: 6層土とロームブロックの混土層。壁近く地山シルト含。

8: 黄褐色土(2.5Y5/3): ローム粒と若干のシルト入。粘性欠。

構造 楕円形のプラン呈する丸底の遺構である。



2区-2号土坑覆土

1: 黒褐色土(10YR3/1): 白色・褐色細粒、ローム小ブロック微量に含。

2: 黒褐色土(10YR3/1): 1層に近似。ロームブロックやや多。

3: 黄褐色土(10YR5/6): 壁からの崩落と思われるロームブロック多量に含。

4: 褐色土(10YR4/4): 3層と比しロームブロックやや少量。

第127図 2区-1・2・4号土坑

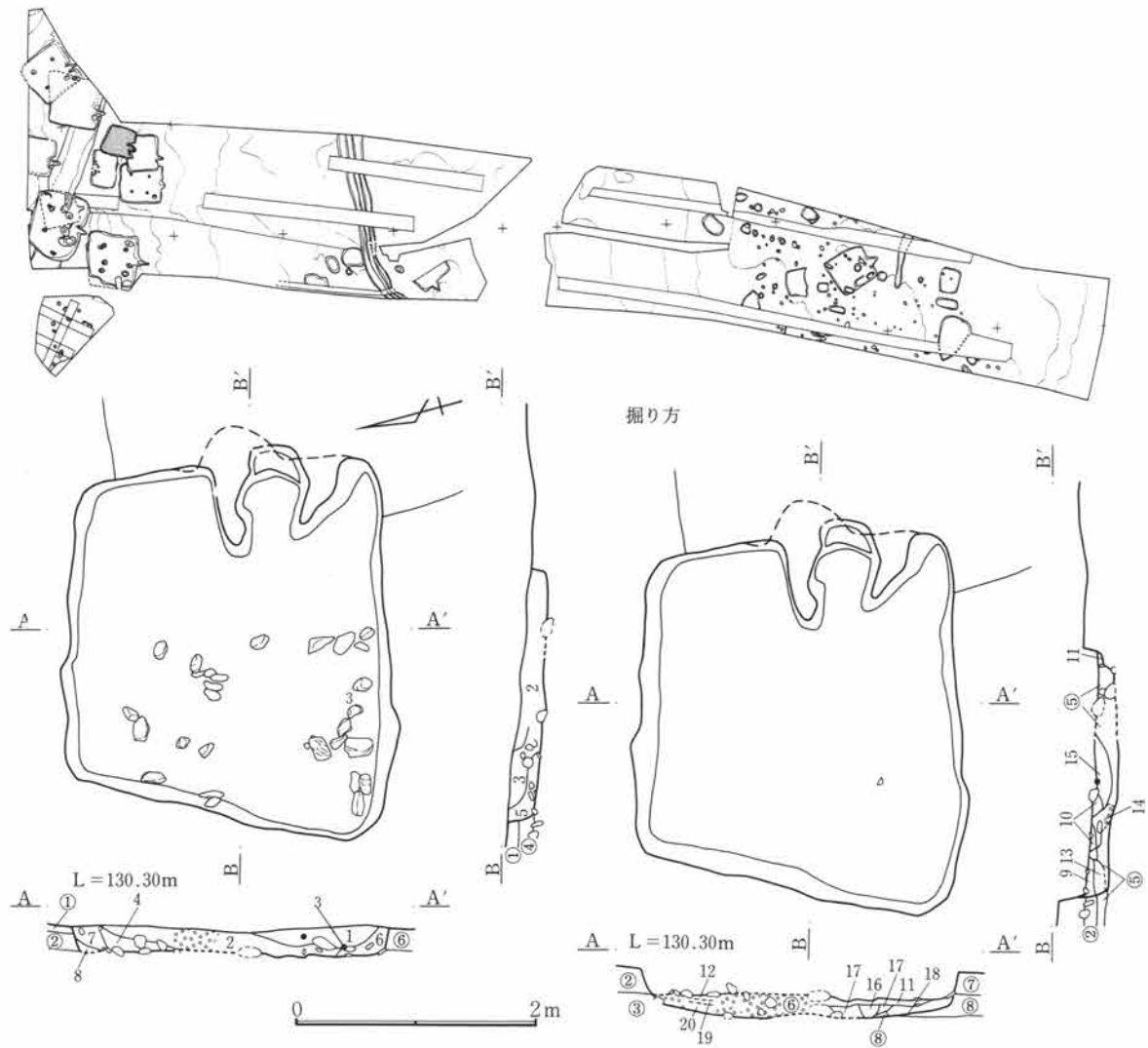
22 2区-4号土坑 (第127図、図版89)

概要 本土坑は2区の北部にあり、南側の一部が路線外にでるため全容は明らかではない。

覆土はローム質の土を中心としているが、時期等を特定することはできなかった。スラグが1点出土している。

規模 残存長軸: 190cm 短軸: 188cm 深さ: 151cm

構造 楕円形のプランを呈するものと判断される。壁面は東側及び北側は垂直に近く、西側は傾斜を持つ。底部はほぼ平底だが、一部が窪んでいる。



3区-1号住居覆土

- 1: 褐色土(10YR4/4): 中ブロック層。川砂・ローム粒・円礫や多く混入。粘性有。
- 2: 灰黄褐色土(10YR4/2): 円礫多く含。川砂・ローム粒若干混入。粘性有。
- 3: 褐色土(10YR4/6): 礫・川砂含む中ブロック層。粘性やや欠。
- 4: 暗褐色土(10YR3/3~3/4): ローム粒・川砂・円礫混入。粘性やや欠。
- 5: にぶい黄褐色土(10YR4/3): ローム粒・円礫含。粘性有。
- 6: 暗褐色粘質土(10YR3/4): ローム粒・川砂・円礫若干含。
- 7: 灰黄褐色粘質土(10YR4/2): 円礫・川砂混入。
- 8: にぶい黄褐色土(10YR4/3): やや明。川砂・円礫やや多量。

23 3区-1号住居 (第128~129図、図版91・118・132)

概要 本住居は3区-2地区西よりの旧河道中に発見調査された。3区-5・7号住居を切り8世紀後半と判断される土師器坏(1・2・3)、甕(4・5)を出土する。カマドの作り換えがある。

規模 縦: 265cm 横: 275cm 深さ: 18cm

貼り床

- 9: 黒褐色土(10YR2/2): 円礫・川砂・ローム粒含。粘性やや欠。
- 10: 黒褐色土(7.5YR3/1): 川砂多・小円礫混。砂質・粘性弱。
- 11: 褐色土(10YR4/4): 小円礫・軽石混。粘性有。
- 12: 暗褐色土(7.5, YR3/4): 小円礫層。

掘り方覆土

- 13: 灰黄褐色土(10YR4/3): 円礫・川砂・ローム粒含。粘性欠。
- 14: 暗褐色土(10YR3/4): 円礫混。粘性有。
- 15: 灰黄褐色砂質土(10YR4/2): 円礫・川砂多く混入。粘性欠。
- 16: 暗褐色土(10YR3/4): 小円礫・軽石混。粘質有。
- 17: 黒褐色土(10YR3/2): 小円礫・軽石混。粘質有。
- 18: 黒褐色土(10YR2/3): 川砂・円礫やや多く混。
- 19: 暗褐色土(10YR3/4): 円礫混。粘性やや有。
- 20: 黒褐色土(2.5Y3/2): 円礫含。粘性やや欠。

地山層

- ①: 褐色土(7.5YR4/3): 円礫・ローム粒含。粘性やや欠。
- ②: 黒褐色土(10YR2/3): 円礫多量に含。粘性やや欠。
- ③: にぶい黄褐色土(10YR5/4): 円礫含む粘質土。
- ④: にぶい黄褐色土(10YR4/3): 円礫・軽石含。粘性やや有。
- ⑤: 黄褐色砂質土(2.5Y3/3): 川砂・礫多量に含。粘性有。
- ⑥: 灰黄褐色土(10YR4/1): 円礫・ローム粒含。粘性欠。
- ⑦: 灰黄褐色土(10YR4/1): 円礫・ローム粒含。粘性欠。
- ⑧: 黒褐色土(10YR2/3): 円礫・ローム粒含。粘性やや欠。

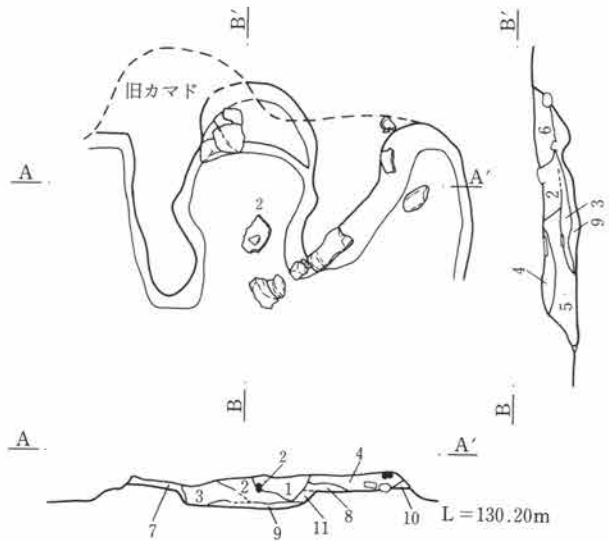
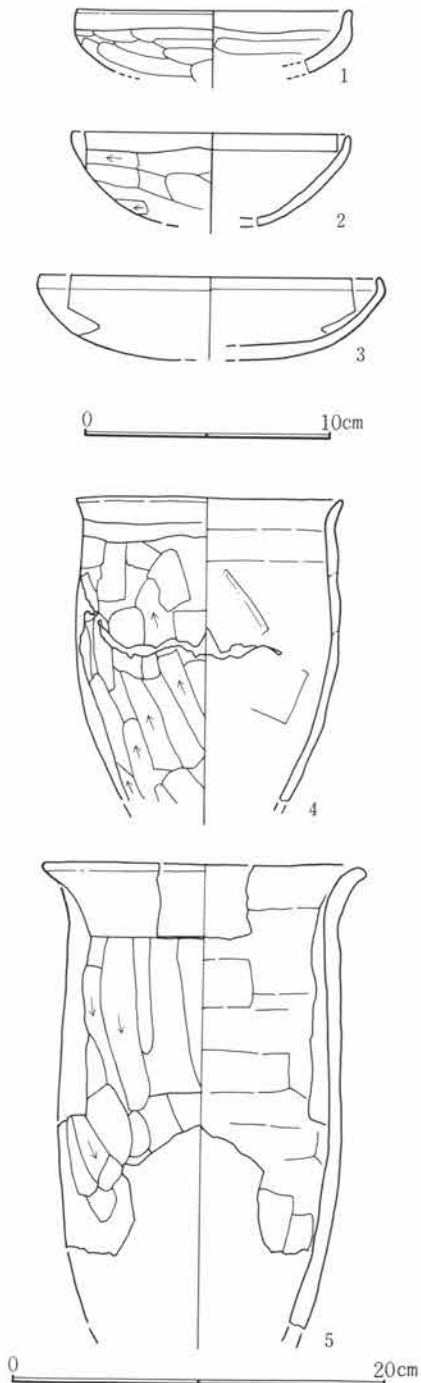
第128図 3区-1号住居

旧カマド 幅：58cm 奥行き：32cm

新カマド 幅：42cm 奥行き：60cm 右袖 幅：

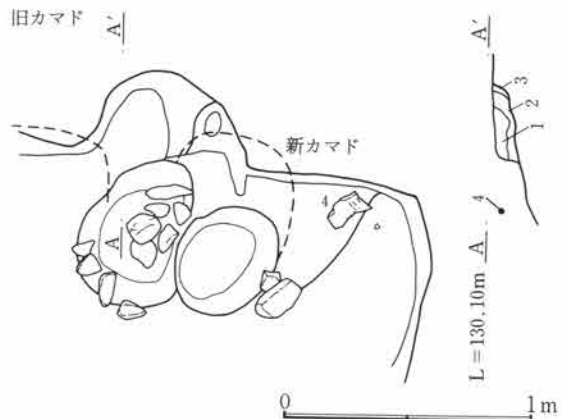
49cm 長さ：21cm 左袖 幅：34cm 長さ：34cm

構造 住居は方形に近いプランを呈し、掘り方を埋めて床面を貼る。カマドは燃烧部に浅い掘り方を持ち、袖は焼土を含む褐色・暗褐色土で造っている。



カマド覆土

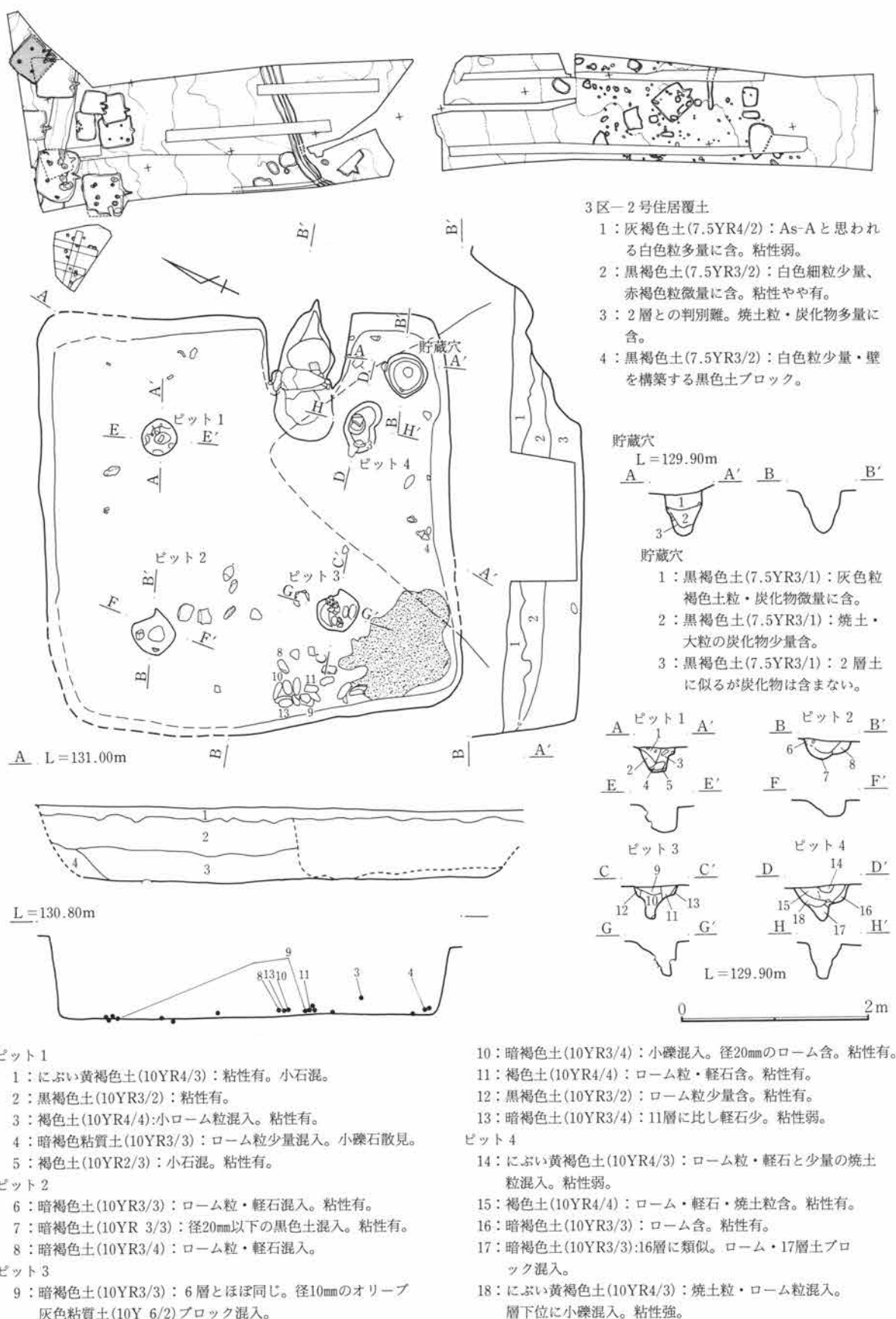
- 1：暗褐色土(10YR3/4)：焼土・ローム粒、砂礫含。やや粘性欠。
- 2：暗褐色土(10YR3/3)：ローム細粒・細礫含。やや粘性欠。
- 3：暗赤褐色土(5YR3/3)：ロームブロック・小礫・にぶい黄色土(2.5Y6/4)の小ブロック・焼土粒・炭化物含。粘性有。
- 4：暗褐色土(10YR3/4)：ローム粒・焼土粒・炭素・粘質小ブロック混。粘性やや欠。
- 5：暗褐色土(7.5YR3/4)：焼土粒・ローム粒・ローム質土の小ブロックやや混入。炭化物含。やや粘性欠。
- 6：黒褐色土(10YR2/2)：粘土小ブロック・礫含。粘性やや欠。
- 7：褐色土(10YR4/4)：やや焼土化見、赤み帯びる。小礫・ローム粒・焼土粒若干含。やや粘性。
- 8：褐色土(10YR4/4)：ローム粒・軽石混。粘性有。
- 9：黒褐色土(7.5YR3/2)：焼土粒・若干の軽石混。1部褐色土小ブロック混入。やや焼土化見られ、粘性やや有。
- 10：灰黄褐色土(10YR4/2)：川砂・若干の焼土粒混。粘性有。
- 11：灰褐色土(7.5YR4/2)：焼土化弱。川砂・微量の焼土粒・淡黄色粘質土(5Y8/4)ブロック混入。粘性有。



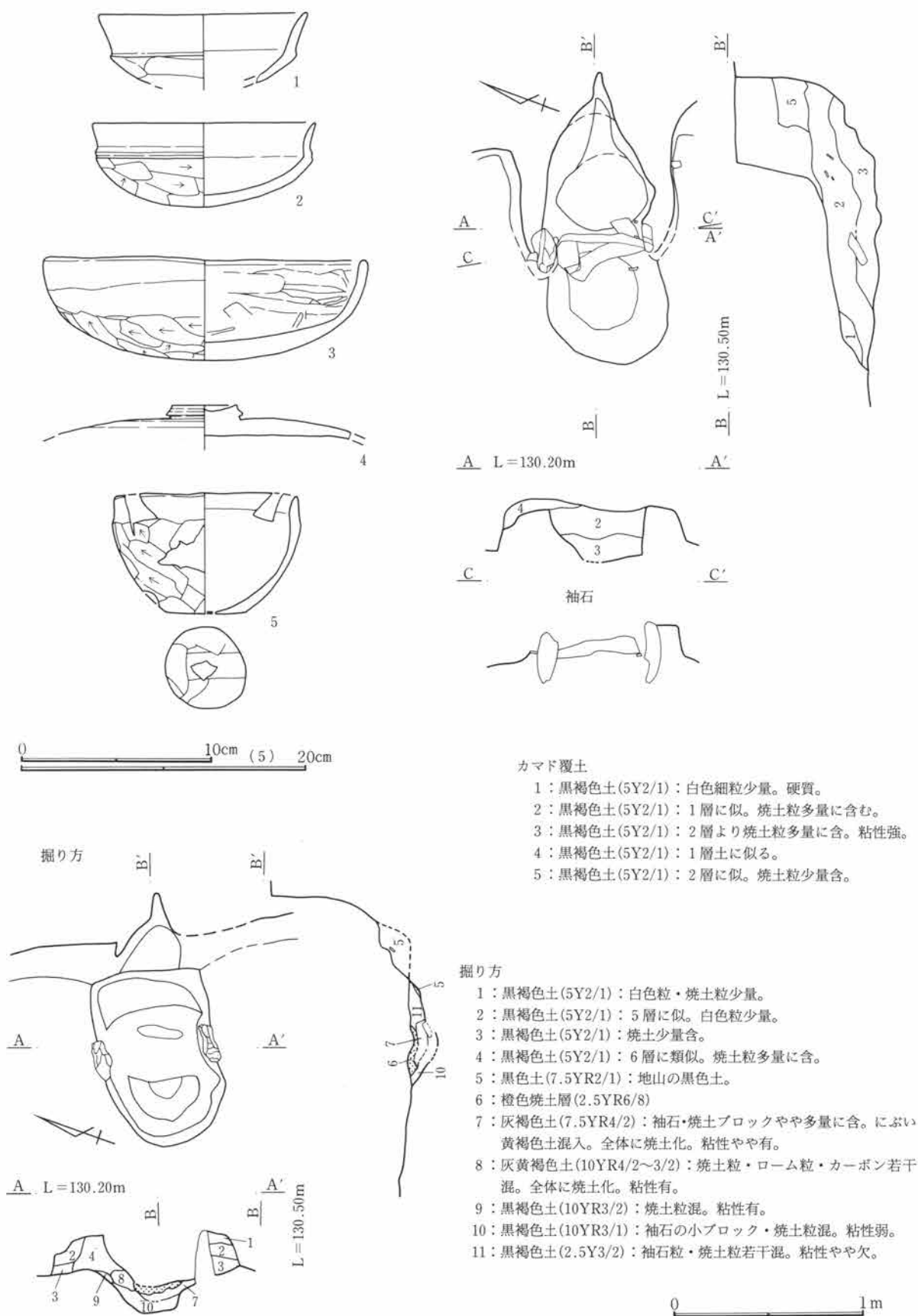
旧カマド

- 1：にぶい黄褐色土(10YR5/4)：軽石・細礫混。粘性やや欠。煙道
- 2：暗褐色土(10YR3/5)：少量の軽石・小礫混。粘性有。煙道
- 3：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：小礫と少量のローム粒含。粘性やや欠。地山

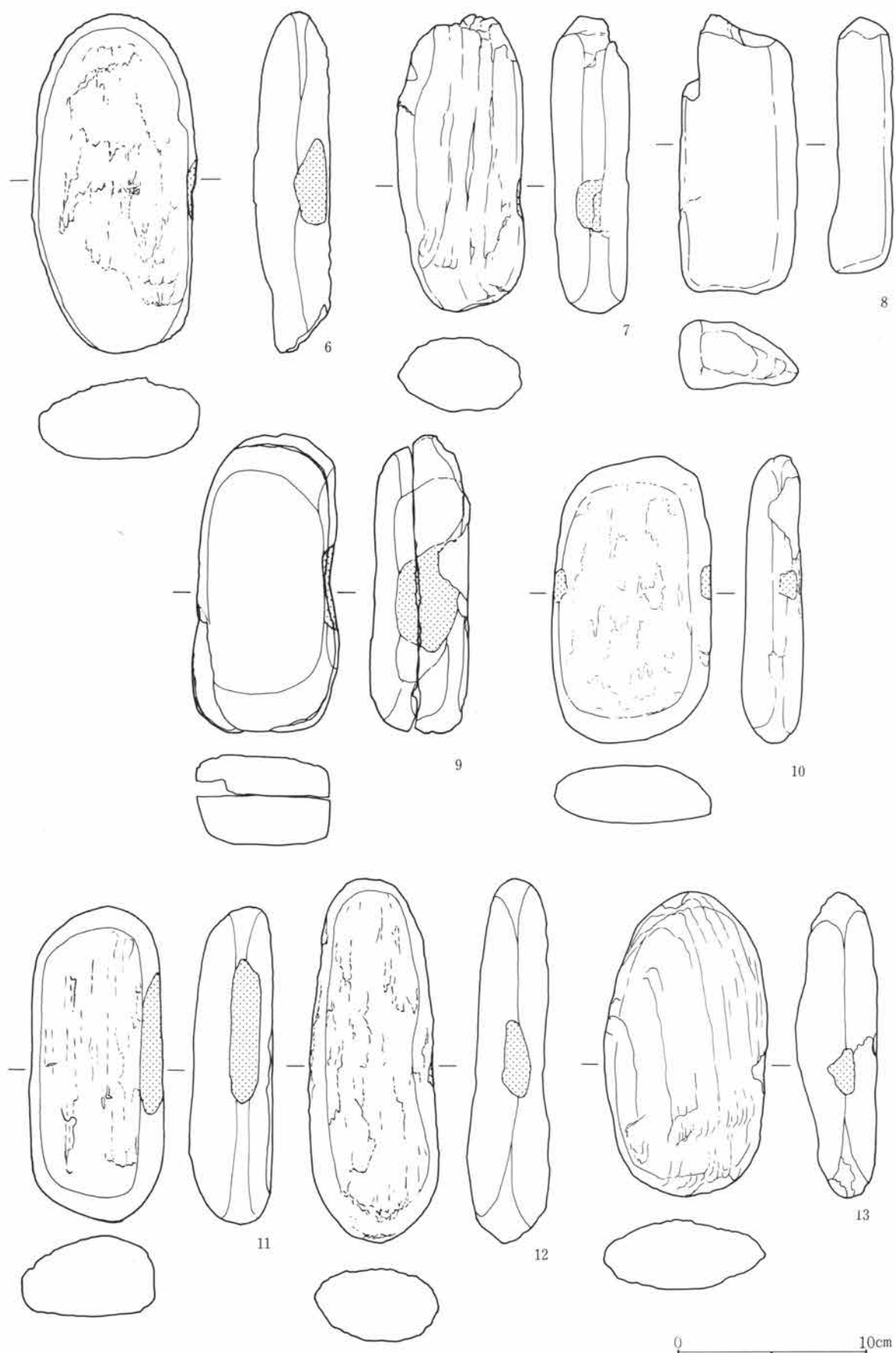
第129図 3区-1号住居カマド及び出土遺物



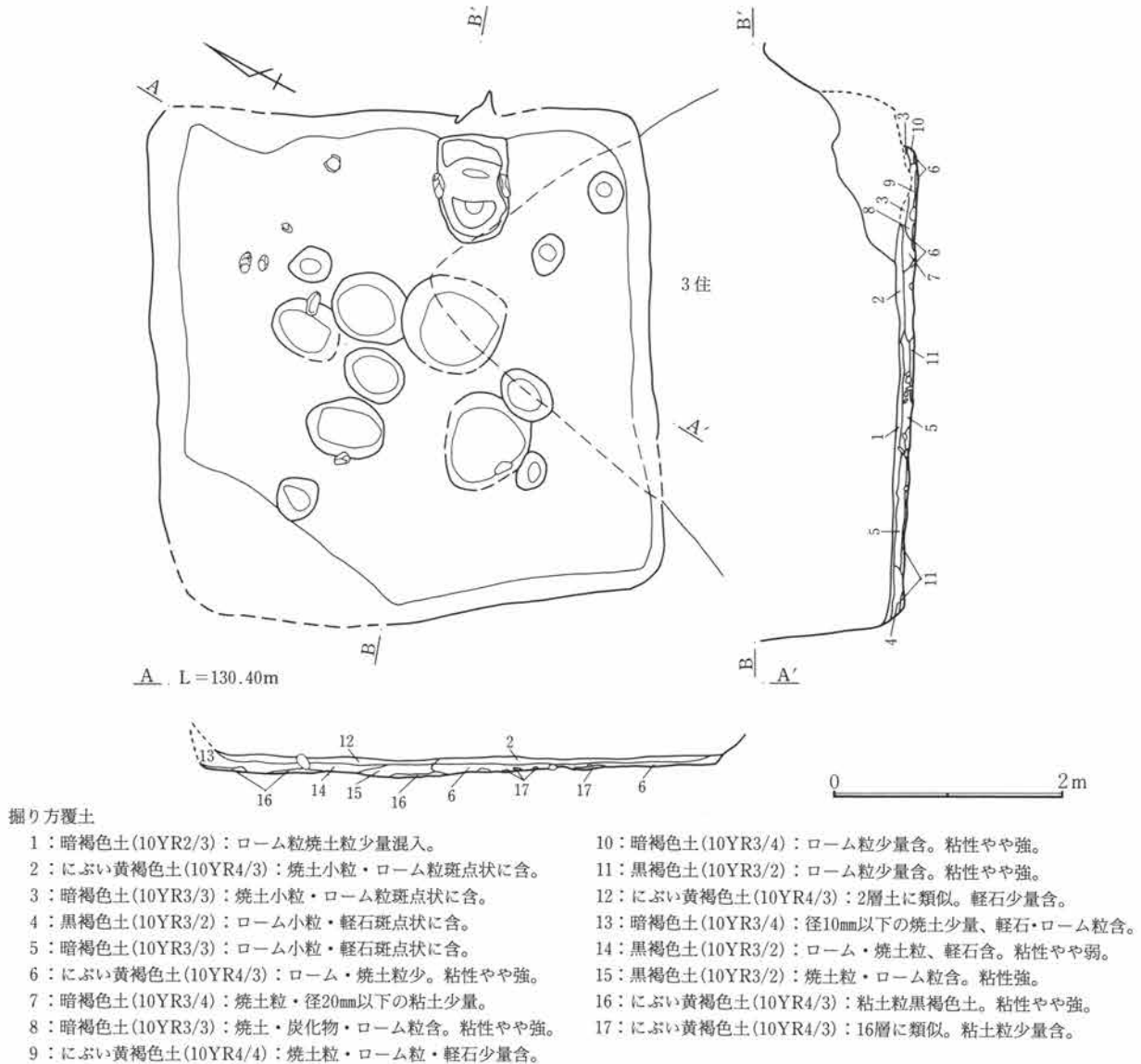
第130図 3区-2号住居(1)



第131図 3区-2号住居カマド及び出土遺物(2)



第132図 3区-2号住居出土遺物(3)



第133図 3区-2号住居掘り方(4)

24 3区-2号住居(第130~133図、図版92・118・119・132)

概要 本住居は、3区-2地区西部北端近くに位置する東カマドの竪穴住居である。上半を3区-3号住居に切られたが遺構の遺存状況は比較的良好である。

遺物はカマド付近を中心に6世紀後半頃のものとされる土師器坏(1・2・3)や須恵器蓋(4)、土師器鉢(5)を出土するほか、カマドに対する西側壁面近くには接合するものを含む9個のこもあみ石(6~13)を出土している。

規模 縦：420cm 横：472cm 深さ：74cm

カマド 幅：91cm 奥行：102cm 右袖 幅：

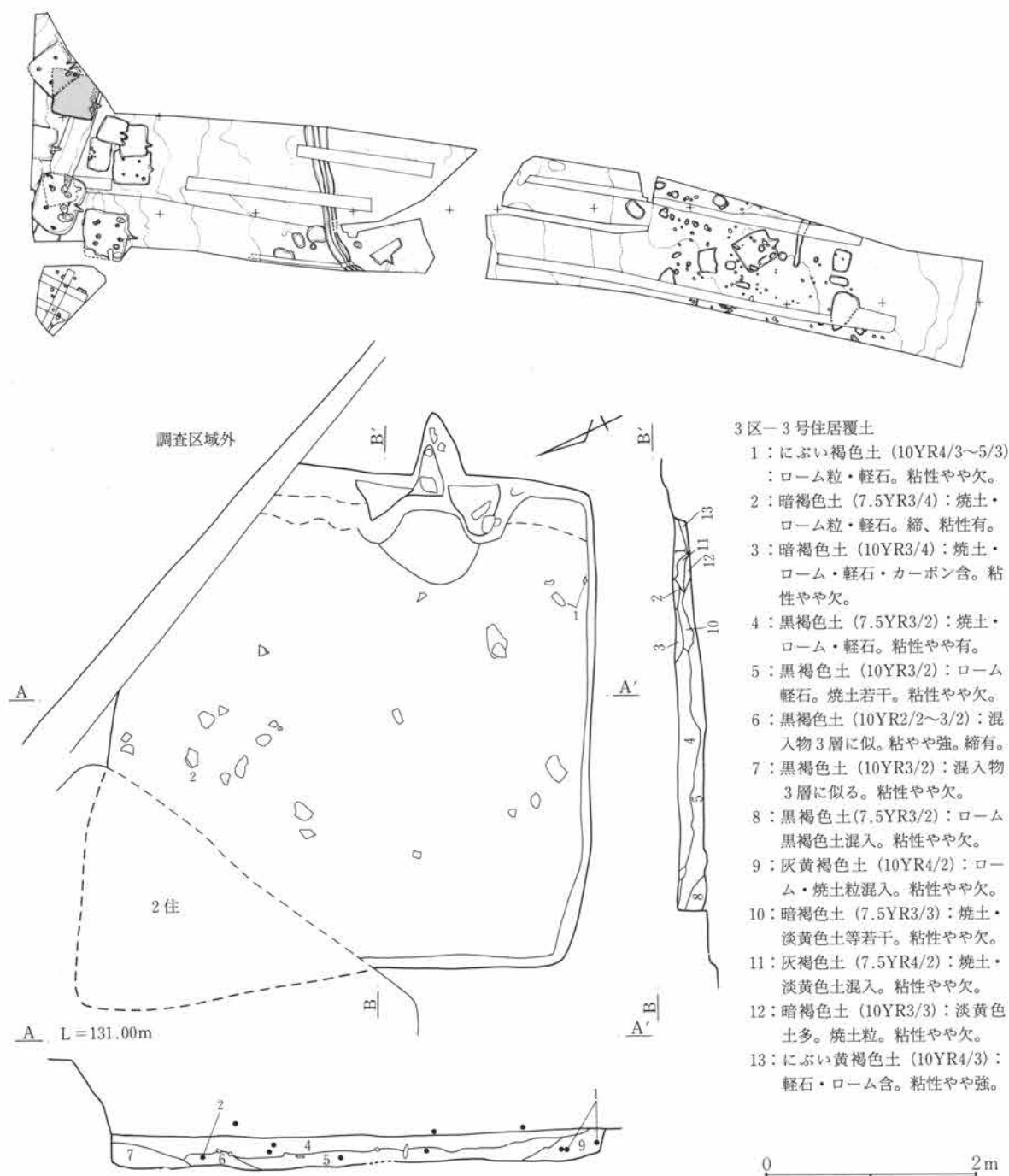
17cm 長さ：65cm 左袖 幅：28cm 長さ：68cm

燃烧部径：46×39cm 煙道長さ：42cm

柱穴1 径：37×37cm 深さ：25cm 柱穴2 径：49×45cm 深さ：21cm 柱穴3 径：45×43cm 深さ：34cm 柱穴4 径：49×45cm 深さ：34cm

貯蔵穴 径：49×37cm 深さ：34cm

構造 本住居は浅い土坑を伴う掘り方を持ち、これを埋め戻してロームを含む暗褐色土で床を貼っている。4本の柱穴のプランはほぼ円形で、スパンは103cm程である。貯蔵穴はカマド右側に有り、円形のプランを呈する。カマドは隅丸方形の浅い掘り方を埋め戻し、袖材と天井材に石を使用して構築している。



第134図 3区-3号住居(1)

25 3区-3号住居(第134・135図、図版93・119)

概要 本住居は、3区-2地区西部の3区-1号道路の下に在る東カマドの竪穴住居である。3区-2号住居を切るが、北東部コーナー付近の遺構面を確認することはできなかった。また床面に於いて確認することのできなかった柱穴及び貯蔵穴らしい掘り込みを、掘り方で確認している。

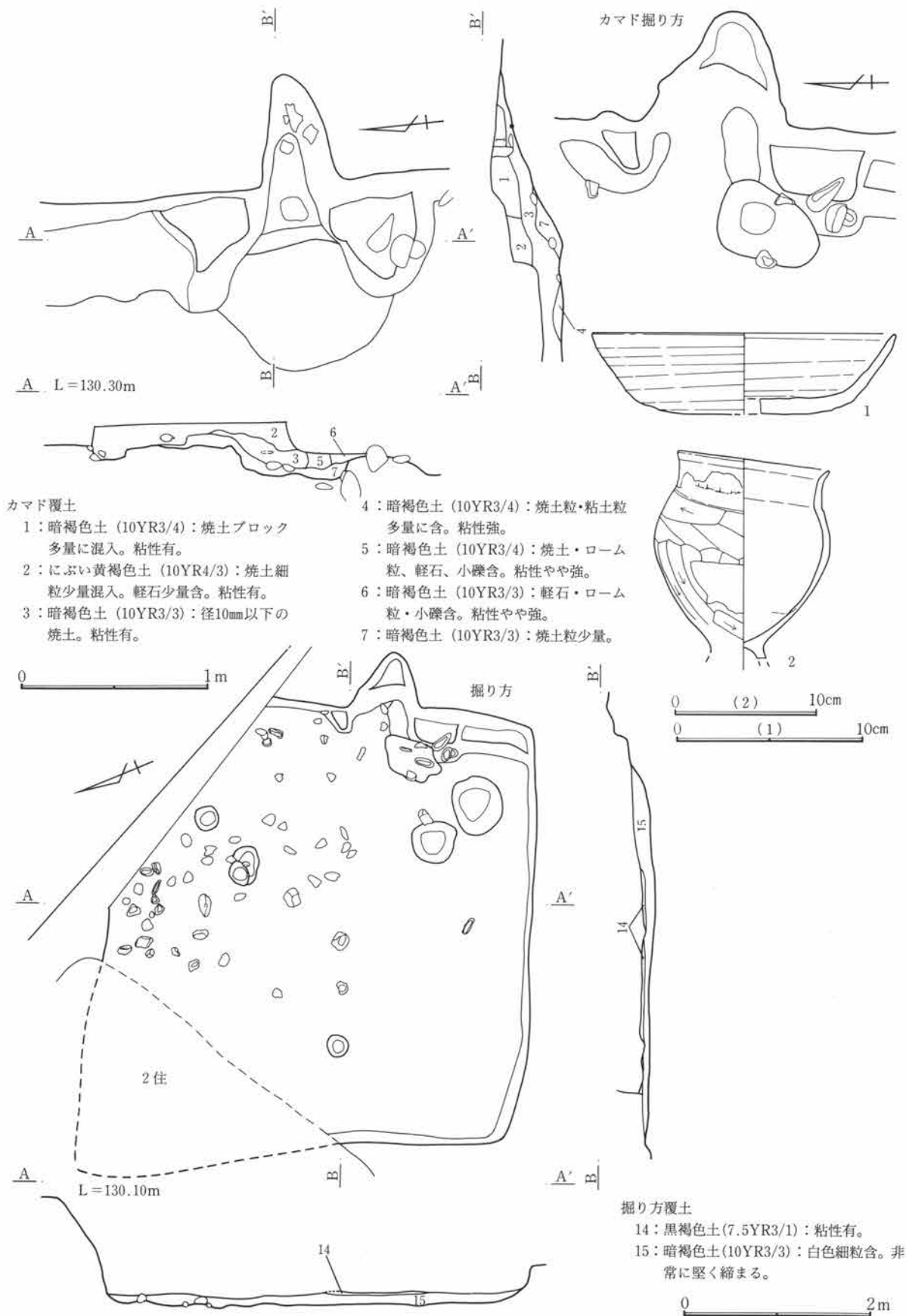
出土遺物は少なかったが、9世紀後半と判断され

る回転ロクロ整形の坏(1)と土師器の台付甕(2)を出土している。

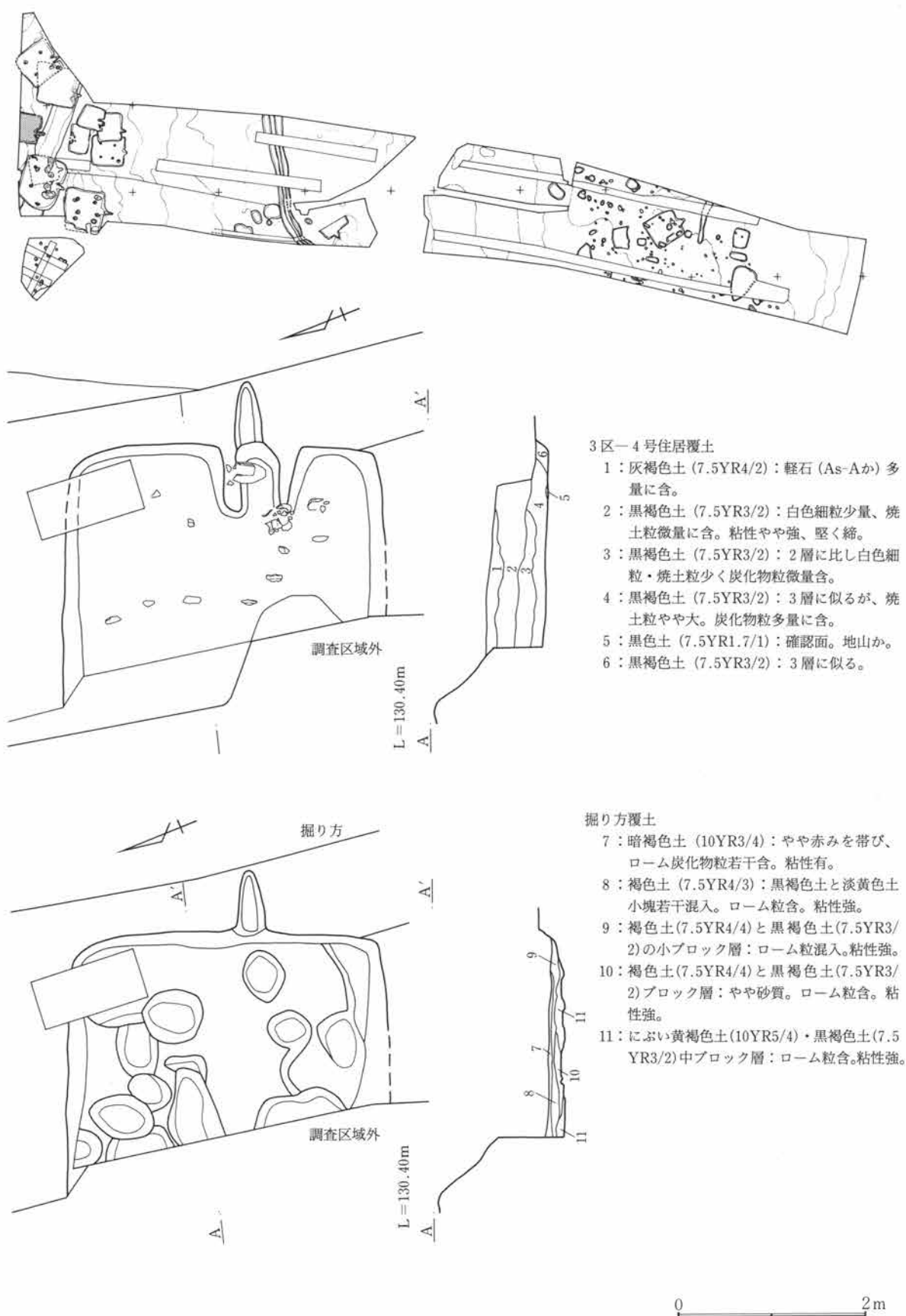
規模 縦:370cm 横:384cm 深さ:43cm

カマド 幅:148cm 長さ:113cm 右袖 幅:60cm 長さ:63cm 右袖 幅:60cm 長さ:62cm

構造 本住居は方形のプランを呈し、浅い掘り方を埋め戻して床を造っている。カマドは燃焼部手前に浅い掘り方を持ち、袖の基部は地山を掘り残してい

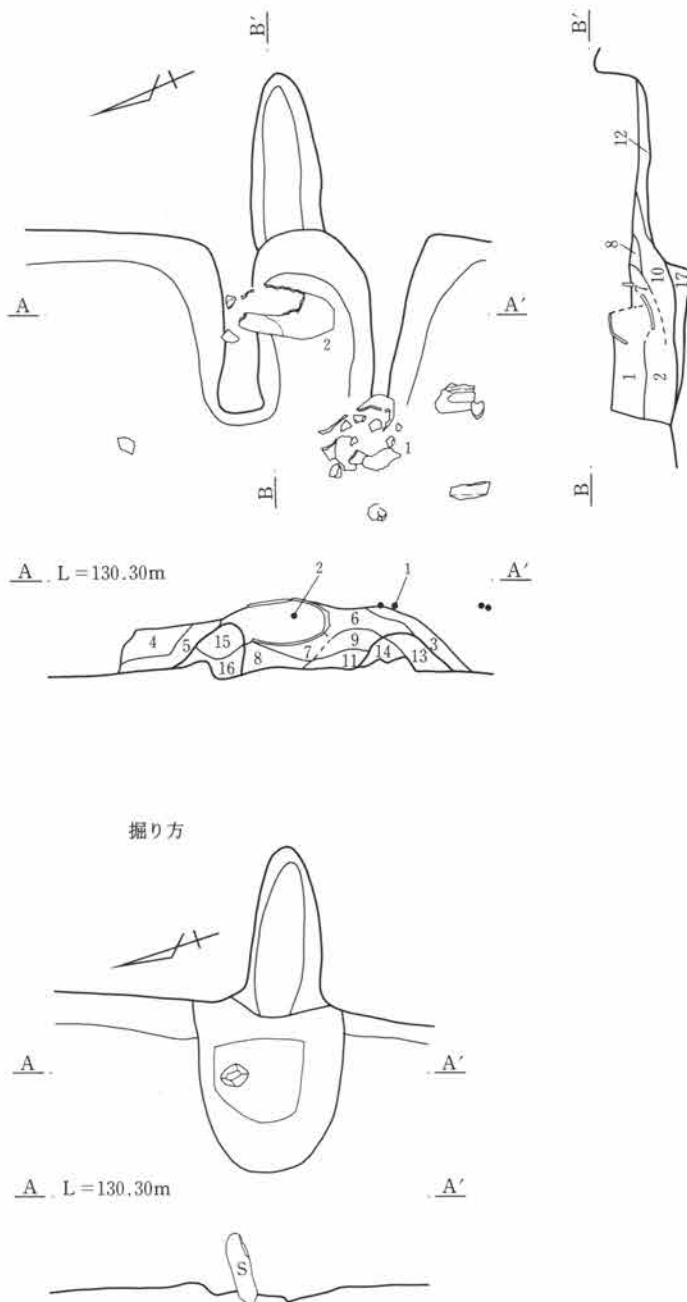


第135図 3区-3号住居及び出土遺物(2)



第136図 3区-4号住居(1)

第4節 発見された遺構と遺物



第137図 3区—4号住居カマド(2)

カマド覆土

- 1：黒褐色土 (10YR3/2)：軽石・焼土粒含。粘性有。
- 2：黒褐色土 (10YR2/2)：焼土粒1層に比し多。粘性有。
- 3：褐色土 (10YR4/4)：軽石含。粘性弱。
- 4：暗褐色土 (10YR3/4)：6層土に似る。軽石と径10mm以下の焼土含。
- 5：黒褐色土 (10YR2/3)：径20mm以下の焼土含。粘性4層土に比し強。
- 6：暗褐色土 (10YR3/4)：軽石・焼土粒含。粘性弱。
- 7：にぶい黄褐色土 (10YR5/4)：にぶい黄褐色土小ブロックと径10mm以下の焼土を斑点状に含。軽石混入。
- 8：暗褐色土 (10YR3/4)：焼土ブロック少量。
- 9：黒褐色土 (10YR3/2)：径10mm以下の焼土を斑点状に含。粘性3・6層に比し強。
- 10：暗褐色土 (7.5~10YR3/3)：径10mm以下の焼土斑点状に含。軽石混入。粘性有。
- 11：黒褐色土 (10YR2/2)：径10mm以下の焼土入。粘性強。
- 12：暗褐色土 (10YR3/4)：焼土少量。7・8・10層に比し粘性弱。

袖

- 13：暗褐色土 (10YR3/4)：軽石・焼土粒と径10mm以下の粘土含。3・6層より粘性強。
- 14：暗褐色土 (10YR3/3)：径20mm以下の粘土混入。粘性強。
- 15：にぶい黄褐色土 (10YR4/3)：径20mm以下の焼土斑点状に含。軽石混入。粘性有。
- 16：黒褐色土 (10YR3/2)：混入物は3層に同。粘性有。

掘り方覆土

- 17：褐色土 (10YR4/3)：径10mm以下の焼土混入。粘性やや弱。

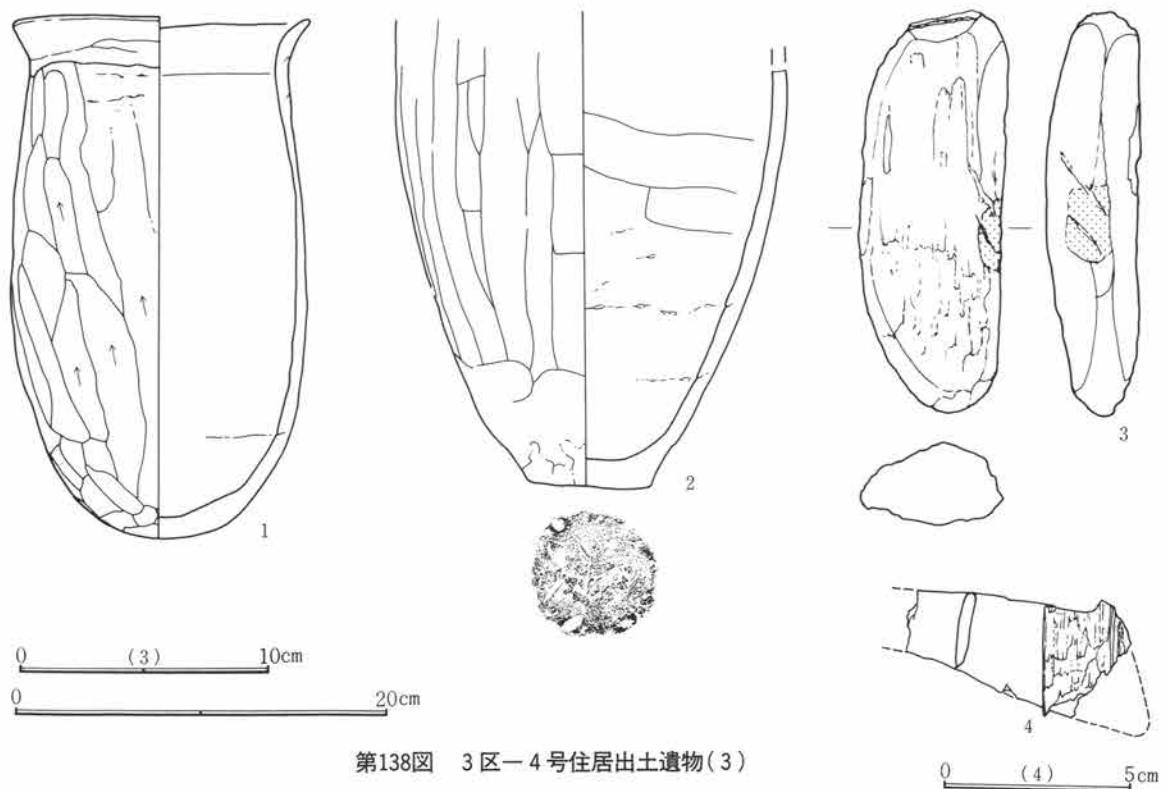
る。尚、柱穴・貯蔵穴は円形プランを呈する可能性を持っている。

26 3区—4号住居 (第136~138図、図版94・119・132)

概要 本住居は3区—2地区西端に位置する、2区2・3号住居と3区—8号住居の中間に確認された東カマドの竪穴住居である。西寄りの一角は県道下

に潜るため調査を実施することができなかった。カマドは比較的良好な状態であったが試掘トレンチに当たっており、煙道部を中心に上面が若干削平されている。尚、床面の確認に於いては、柱穴・貯蔵穴などを確認することはできなかった。

出土遺物は少いが、カマドの袖と燃焼部に古墳時代後期頃のものと思われる土師器甕 (1・2) が残されている。このほか、こもあみ石 (3) と鉄製品



第138図 3区-4号住居出土遺物(3)

(4) の出土を確認している。

規模 縦234cm 横：383cm 深さ：78cm

カマド 幅：102cm 奥行き135cm 右袖 幅30cm

長さ：80cm 左袖 幅：31cm 長さ：77cm

燃烧部 径：57×31cm 煙道部長：62cm

カマド掘り方 幅：57cm 長さ：60cm

構造 本住居の全体像は明らかにできなかったが、住居全体のプランは方形に近いものと想定される。住居は凹凸の激しい掘り方を埋め戻して床を貼っている。柱穴・貯蔵穴は有さない。

カマドは住居壁面手前側に設けられている燃烧部の位置に、壁面から手前側に長円を半裁したようなプランを呈する浅い掘り方を掘り、これを埋め戻して構築している。カマドの袖材については、右側袖には土師器甕を使用し、左側は礫を使用しているようである。これを、焼土を含む暗褐色・にぶい黄褐色・黒褐色土で補強して袖を造り出している。カマド燃烧部に土師器甕が転倒して出土していることから、土師器甕を天井材としても使用した可能性が考慮される。

27 3区-5号住居(第139・140図、図版95・120)

概要 本住居は3区-2地区西寄りの旧河道の砂礫面に確認された、東カマドの小型の竪穴住居である。本住居は西側に接する3区-1号住居に切られ、南接する3区-6号住居を切っている。(図版95参照)

住居の上面は削平が進み、また砂礫層中にあるため遺構確認等に苦慮した。細部に互り観察を行ったが、床面に柱穴・貯蔵穴等を確認することはできなかった。カマドの遺存状況も決して良好とは言えない状態であったが、一応のプラン等を把握することはできた。尚、本住居は掘り方を有するが、掘り方の面には柱穴の存在が想定される位置に浅い掘り込みが確認されている。

遺物の出土は多くないが、切り合い関係にある3区-1号住居及び3区-6号住居と同時期の、8世紀後半と判断される土師器坏5点(1~5)と土師器甕2点(6・7)の出土を見た。

規模 縦：285cm 横：319cm 深さ：15cm

カマド 幅：67cm 奥行き：92cm 右袖 幅：21cm 長さ：40cm 左袖 幅：23cm 長さ：37cm

- 1: 褐色土 (7.5YR4/4~4/6): 砂礫・ローム粒・軽石多。
- 2: 暗褐色土 (10YR3/4): 円礫・川砂やや多。粘性やや有。
- 3: 黒褐色土 (2.5Y3/2): 小礫含。粘性有。
- 4: 灰黄褐色土 (10YR4/2): 円礫・小礫多量に含。粘性強。
- 5: 褐色土 (10YR4/4): 円礫・軽石やや多量。粘性やや欠。
- 6: 黒褐色土 (10YR2/3): ローム粒・円礫混。粘性やや欠。
- 7: 褐色土 (7.5YR4/3): 小礫とローム・焼土粒入。粘性有。

1 : 1 において黄褐色土(10YR4/3) : 細礫・焼土粒・カー
ボン混入。粘性有。
1' : 1 層に類似。混入物少量。支脚又は植物痕か。
2 : 灰黄褐色土(10YR5/2) : 小礫・ローム入。粘性強。
3 : 1 において黄褐色土(10YR5/4) : 色調明。小礫・ロー
ム粒混。粘性有。黄色帯びる。

4：褐色土(10YR4/4)：ローム粒・円礫混。粘性欠。
袖
5：にぶい黄褐色土(10YR5/3)：円礫・焼土粒・カー
ボン混入。粘性やや強。締まり欠。
6：褐色粘質土(7.5YR4/3)：ローム粒・円礫入。

4: 灰黄褐色土 (10YR4/2): 円礫・小礫多量に含。粘性強。
5: 褐色土 (10YR4/4): 円礫・軽石やや多量。粘性やや欠。
6: 黒褐色土 (10YR2/3): ローム粒・円礫混。粘性やや欠。
7: 褐色土 (7.5YR4/3): 小礫とローム・焼土粒入。粘性有。

煙道
4: 褐色土 (10YR4/4): ローム粒・円礫混。粘性欠。
袖
5: にぶい黄褐色土 (10YR5/3): 円礫・焼土粒・カーボン混入。粘性やや強。締まり欠。
6: 褐色粘質土 (7.5YR4/3): ローム粒・円礫入。

掘り方

カマド掘り方

1 住

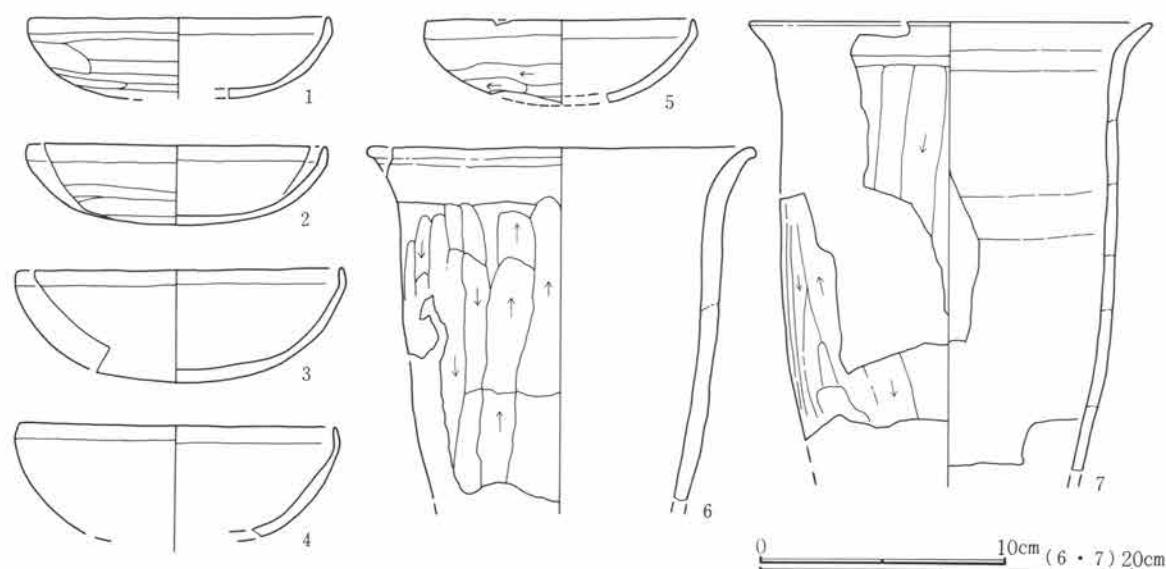
L=130.20m

L=130.10m

8: 暗褐色土(10YR3/3): 円礫・ローム粒混。粘性有。
9: 黒褐色土(10YR2/3): 1層に比し礫の径大。粒径の大きな粘土ブロック少量含。

7: 灰黄褐色土(10YR4/2): ローム粒・円礫若干混入。
8: オリーブ褐色土(2.5Y4/2~2.5Y4/3): ローム入。

181



第140図 3区—5号住居出土遺物(2)

燃焼部 径：31×29cm 煙道部長：61cm

構造 住居の遺存状況はあまり良好ではないので、その構造は詳かでないが、住居は隅丸方形のプランを呈し、凹凸の多い掘り方を褐色系統の土などで埋め戻して床面を造り出している。掘り方の中央付近には60×100cm程の浅い土坑があるが、この土坑には位置的に床下土坑の可能性を検討することができる。また、4方向の住居コーナーの中央よりにはピット様の浅い掘り込みがあり、これが柱穴であった可能性を有している。これらの掘り込みは43～65cmの径を測る。

カマドは壁面手前側に燃焼部を持つが、ここに壁面から方形に近いプランを持つ浅い掘り方をほり、この上に構築している。袖は粘質土等で造り出されている。

28 3区—6号住居(第141・142図、図版96・120)

概要 本住居も3区—5号住居同様、3区—2地区西寄りの旧河道の砂礫面に確認されたもので、3区—5号住居の南、3区—7号住居の東に位置する東カマドの竪穴住居であり、3区—5号住居に切られている。3区—1号住居と同様シルト質の天井石が見られたために住居の遺存が知られたのであるが、当該地が礫層中にあるため遺構確認は非常に難しく、

確認・掘削に拘わる作業には苦慮した。

遺構上面は近接する住居跡と同様、削平が進んでおり遺構全体の遺存状態は良好とはいえないものであった。覆土中には礫が多量に含まれていたが、これを除去した段階で柱穴・貯蔵穴を確認することができた。

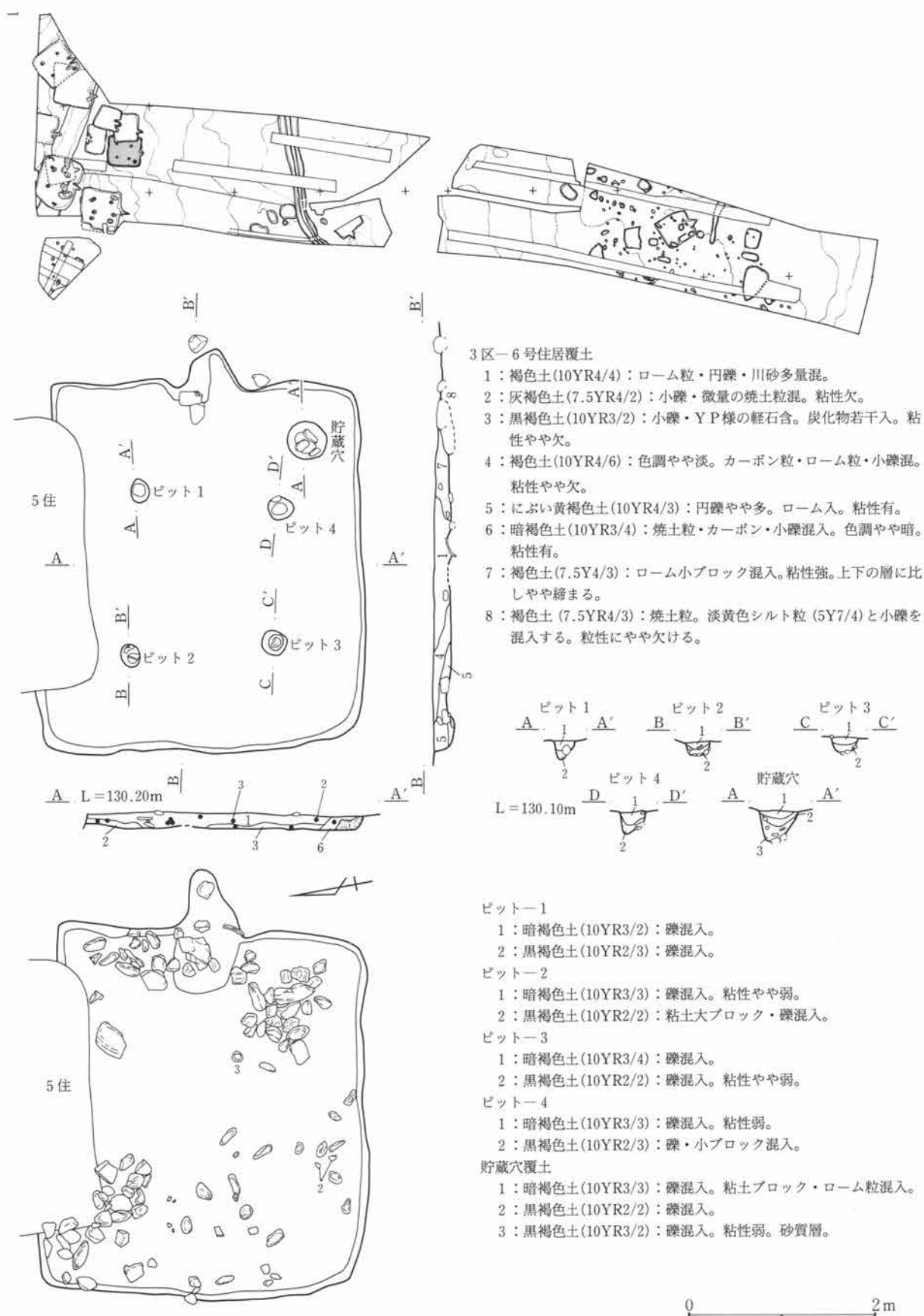
出土遺物は少ないが、3区—1号住居・3区—5号住居と同時期の8世紀後半と判断される土師器坏(1・2)と良好な遺存状態を示す須恵器蓋(3)などを出土している。

規模 縦：332cm 横：323cm 深さ：19cm

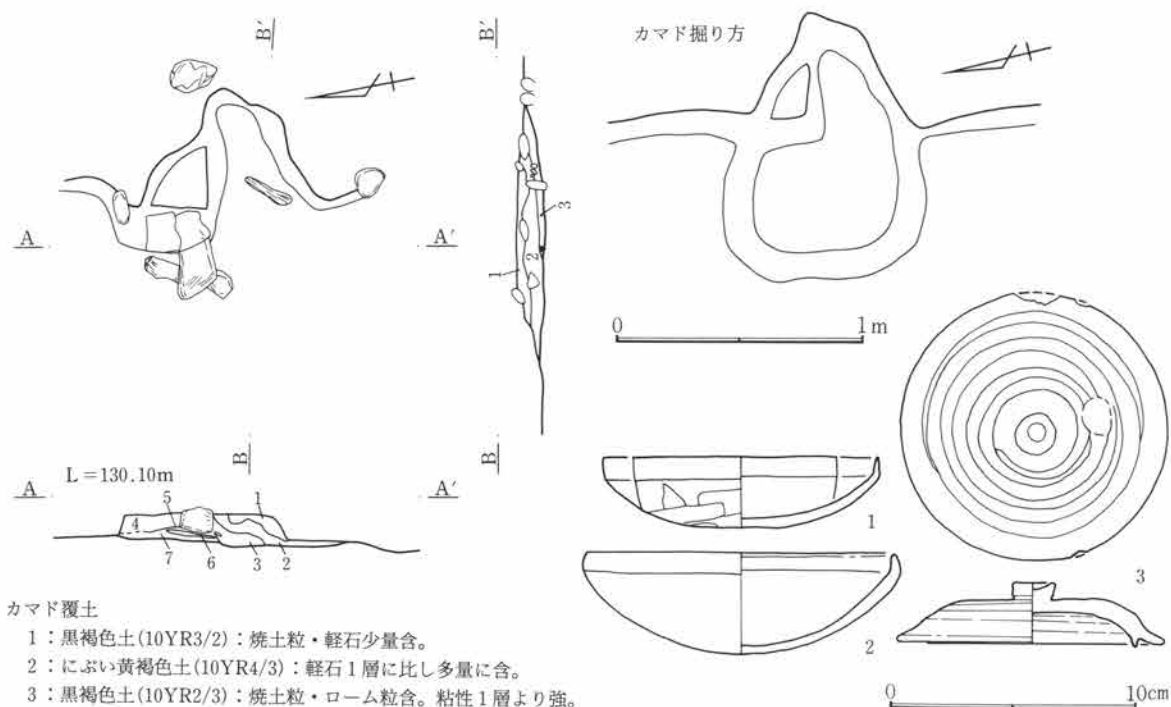
カマド 残存幅：80cm 奥行き：50cm 左袖幅：44cm 長さ：23cm 燃焼部 径：58×40cm
柱穴1 径：24×20cm 深さ：53cm 柱穴2 径：23×20cm 深さ：17cm 柱穴3 径：26×26cm 深さ：18cm 柱穴4 径：26×26cm 深さ：19cm
貯蔵穴 径：42×40cm 深さ：31cm

構造 本住居は隅丸方形を呈し、壁際に20～98cm幅のテラス状の堀残し部を持つ浅い掘り方を埋め戻して床を造っている。床面には円形の小さな柱穴及び貯蔵穴を持っている。

カマドはその手前側に81×54cmを測る隅丸方形の浅い掘り方を掘り、これを埋め戻して構築している。遺存状況が悪いので全体の状況は明らかではないが、



第141図 3区-6号住居(1)



カマド覆土

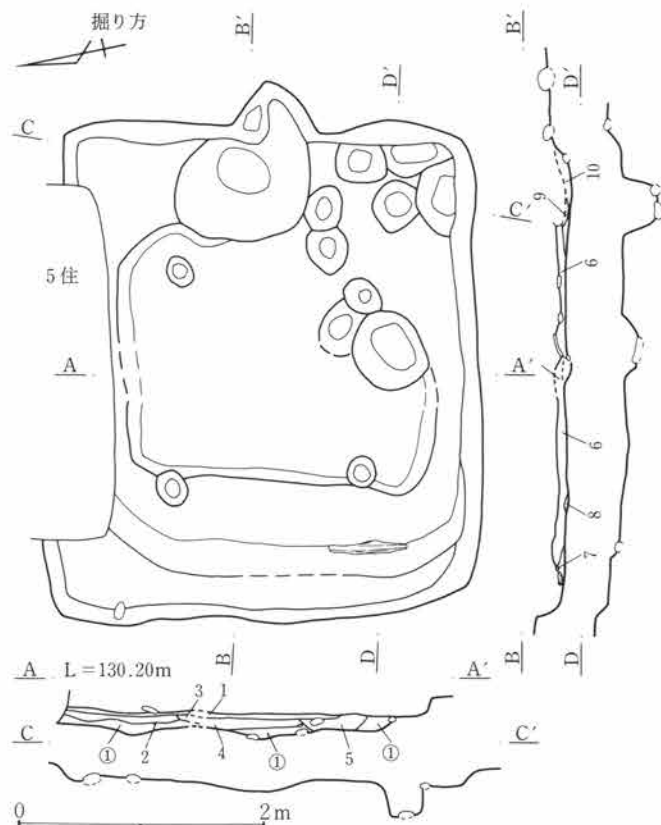
- 1：黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒・軽石少量含。
- 2：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：軽石1層に比し多量に含。
- 3：黒褐色土(10YR2/3)：焼土粒・ローム粒含。粘性1層より強。
- 4：黒褐色土(10YR3/2)：1層に類似。
- 5：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：2層に類似。
- 6：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：焼土大粒多量に含。
- 7：暗褐色土(10YR3/3)：白色細粒・焼土粒微粒に含。

掘り方覆土

- 1：暗褐色土(10YR3/4)：色調褐色に近い。ローム粒混。若干焼土粒含。粘性やや有。
- 2：黒褐色土(10YR3/2)：ローム粒・円礫入。粘性やや有。
- 3：黒褐色土(10YR2/3)：小礫・川砂多。粘性やや欠。
- 4：砂礫層：にぶい黄褐色土混入。粘性欠。
- 5：暗褐色土(10YR3/3)：ローム粒・焼土小塊・礫含。
- 6：暗褐色土(10YR3/3)：ローム小塊・小礫含。
- 7：黒褐色土(10YR3/2)：小礫含。
- 8：赤褐色土(5YR4/6)：焼土層。白色粘土粒少量。粘性やや強。
- 9：褐色土(10YR4/4)：焼土粒少量。小礫混入。粘性やや弱。
- 10：褐色土(10YR4/4)：焼土粒少量。小礫混入。粘性やや弱。

地山層

- ①：黒褐色土(10Y2/2)：小礫中心に円礫多量に混。粘性有。

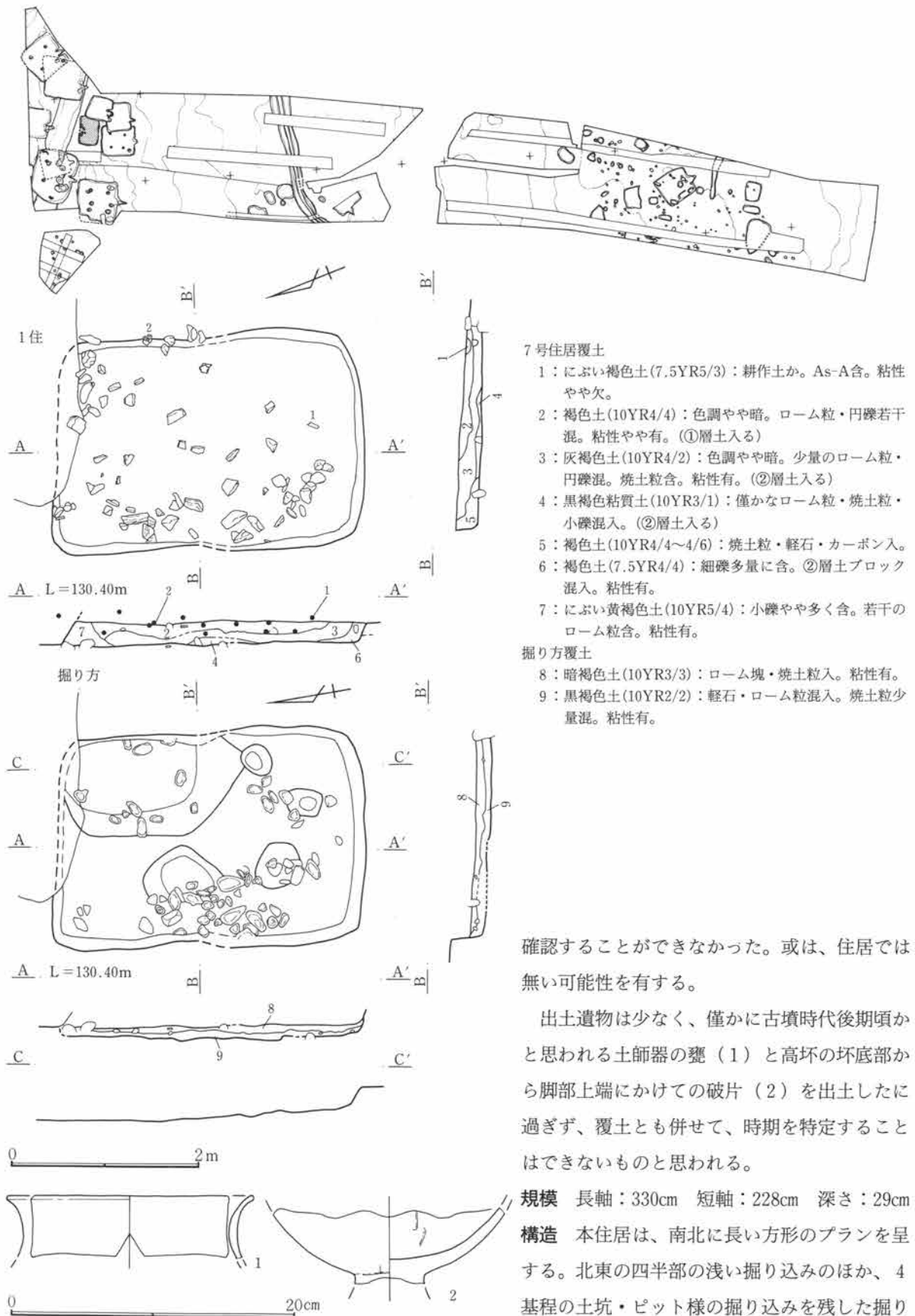


第142図 3区一6号住居及び出土遺物(2)

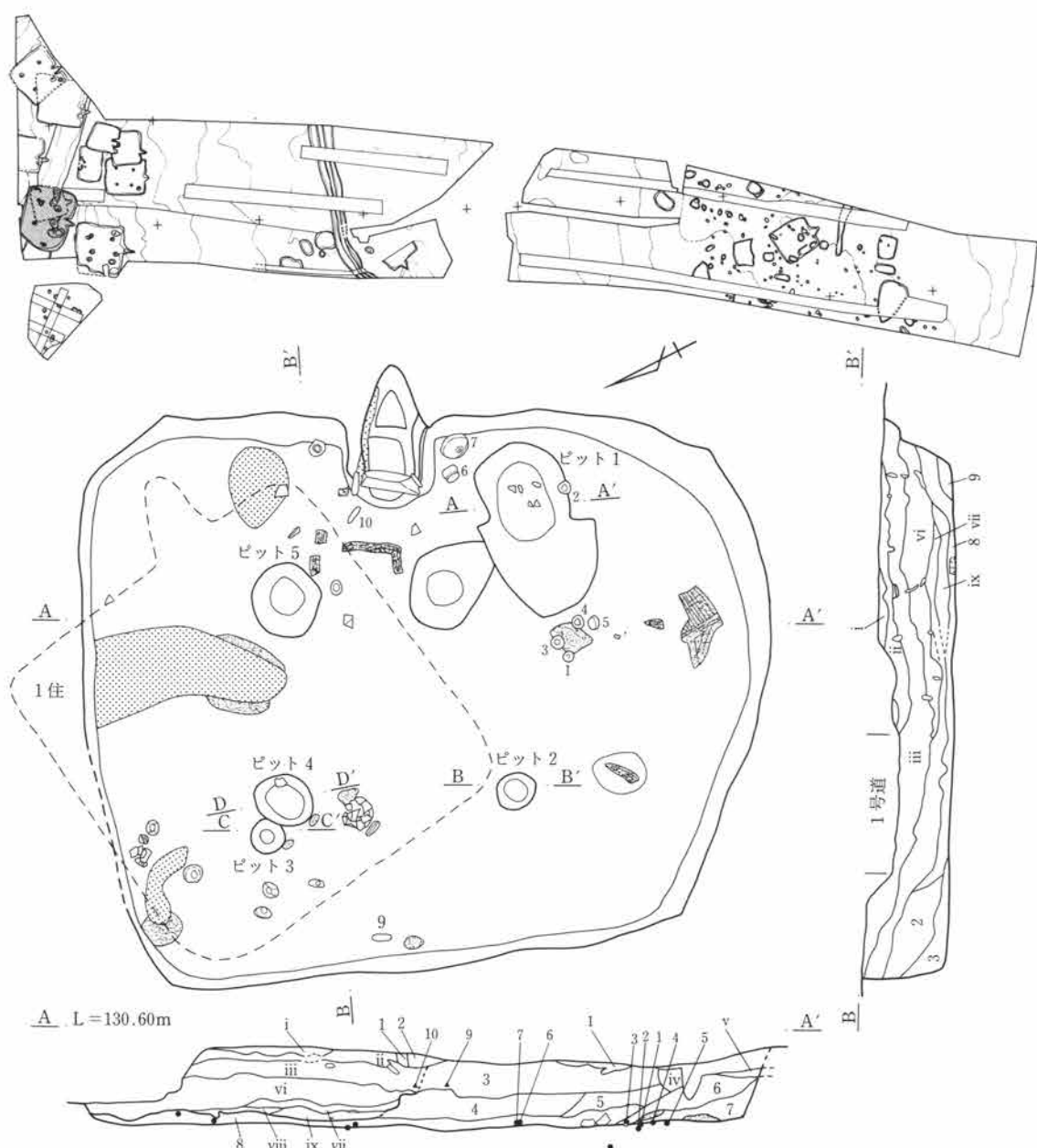
左袖の基部は黒褐色土で造られている。また、
 燃焼部はおおよそ壁面の内側に設けられていたもの
 と推定される。

29 3区一7号住居(第143図、図版97・120・132)

概要 本住居は、3区一1号住居と同様、3区
 一2地区西寄りの旧河道中に確認・調査された。
 西端部を除く北壁際を1区一1号住居に切られ、
 東に3区一6号住居が近接している。形態的に
 竪穴住居と判断して調査に入ったが、カマドを



第143図 3区-7号住居及び出土遺物



3区-8号住居覆土

- 1：暗褐色土 (7.5YR3/4)：5層に類似するが色調明るい。若干焼土・炭化物の小ブロック混入。粘性やや有。
- 2：褐色土 (10YR4/4)：焼土ブロック若干混入。ローム粒・炭化物少量混入。粘性有。焼土化。
- 3：にぶい黄褐色土 (10YR4/3)：黄色帯びる。炭化物ブロック・若干焼土小ブロック混入。粘性強。
- 4：褐色土 (7.5YR4/3~4/4)：焼土粒・焼土小ブロック・若干炭化物混入。粘性有。弱焼土化。
- 5：褐色土 (7.5YR4/4)：焼土化。若干焼土粒・黄褐色土粒の焼土化混入。粘性有。
- 6：褐色土 (7.5YR4/3)：焼土化。炭化物・焼土小ブロック多量混入。粘性やや強。
- 7：黄褐色土 (2.5YR5/3)：焼土化。赤み帯び

- る。炭化物層の下位中心に含。焼土粒・若干ローム粒含。粘性やや強。
- 8：オリブ褐色土 (2.5Y4/3~5/3)：焼土化。焼土の小ブロック若干・炭化物混入。粘性有。
 - 9：暗褐色土 (7.5YR3.3)：焼土の小ブロック多量含。焼土化。粘性有。

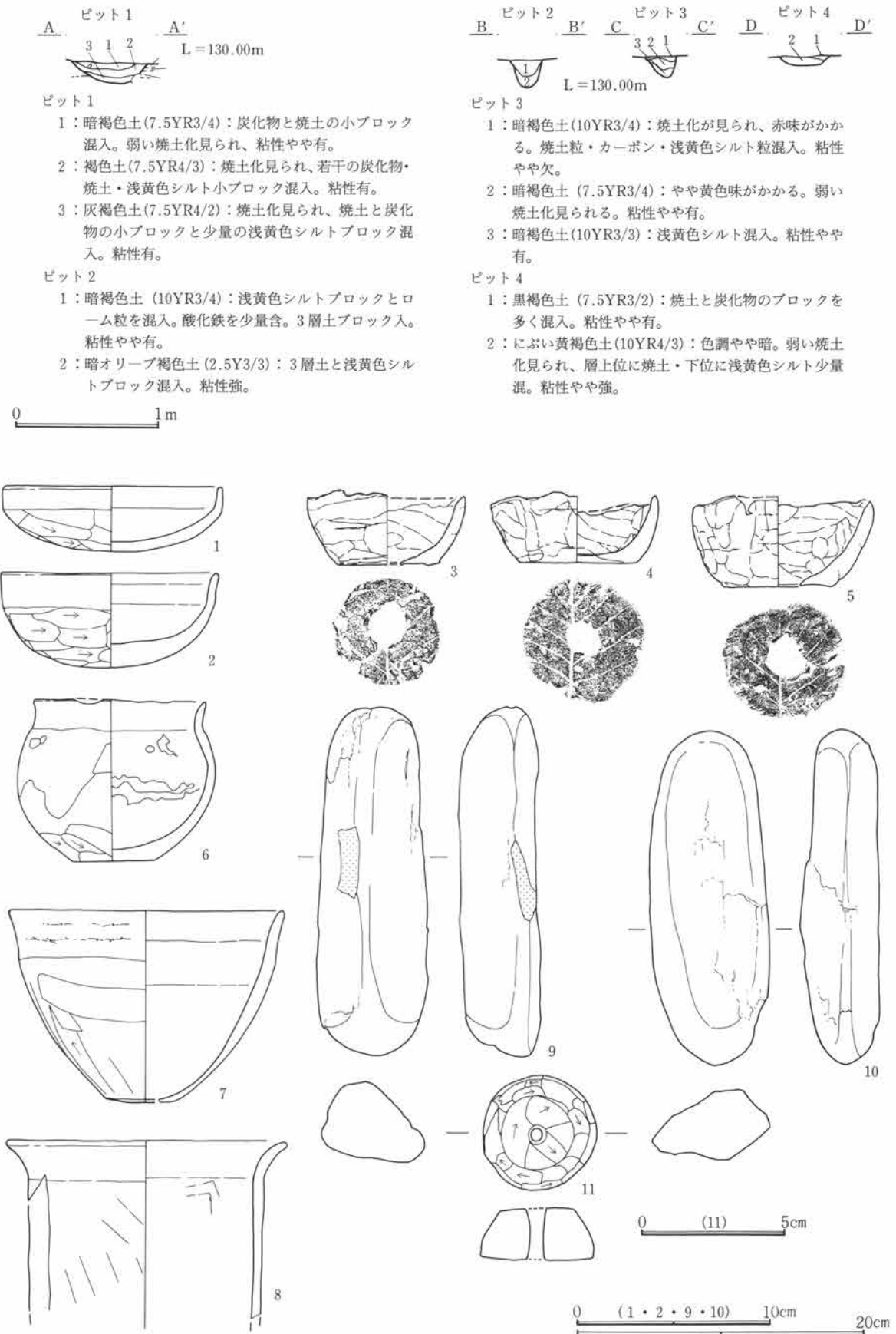
埋没後の土層

- i：暗灰黄色土 (2.5Y4/2)：As-A・2層のブロック混入。砂質土。
- ii：灰褐色土 (7.5YR4/2)：1部焼土化。軽石混入。若干焼土粒含。粘性欠。
- iii：暗褐色土 (7.5YR3/3)：軽石・焼土の小ブロック混入。弱い焼土化。粘性やや欠。
- iv：灰褐色土 (7.5YR4/2)：基本、1層の小ブロック・酸化鉄多量含。粘性やや欠。
- v：明褐色土 (2.5Y7/6)：中心とする砂層酸化鉄混入。1層のブロック混入。軽石混入。

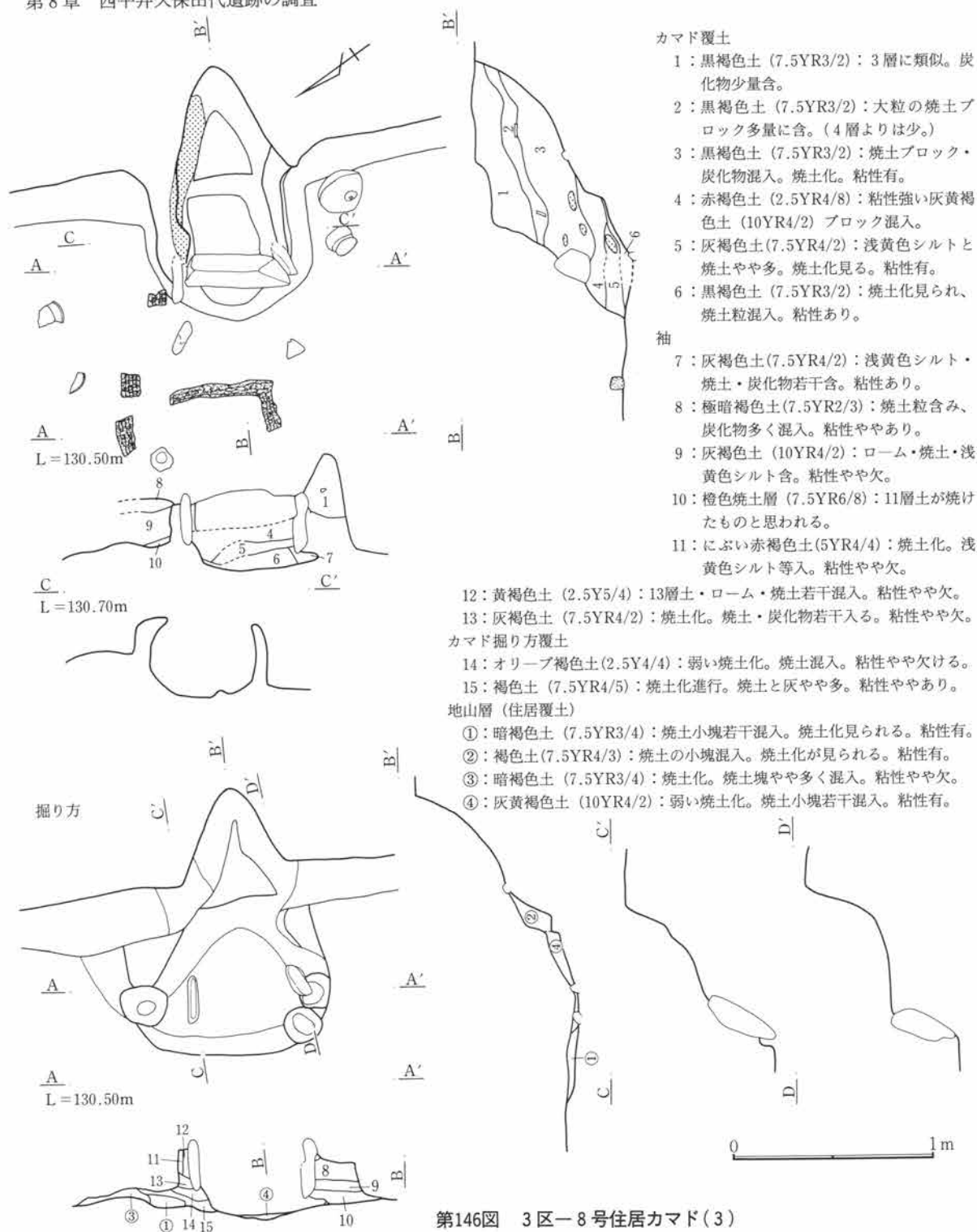
13号住居埋土

- vi：褐色土 (7.5YR4/3)
- vii：暗褐色土 (7.5YR3/4)
- viii：灰褐色土 (7.5YR4/2)
- ix：暗褐色土 (10YR3/4)

第144図 3区-8号住居(1)



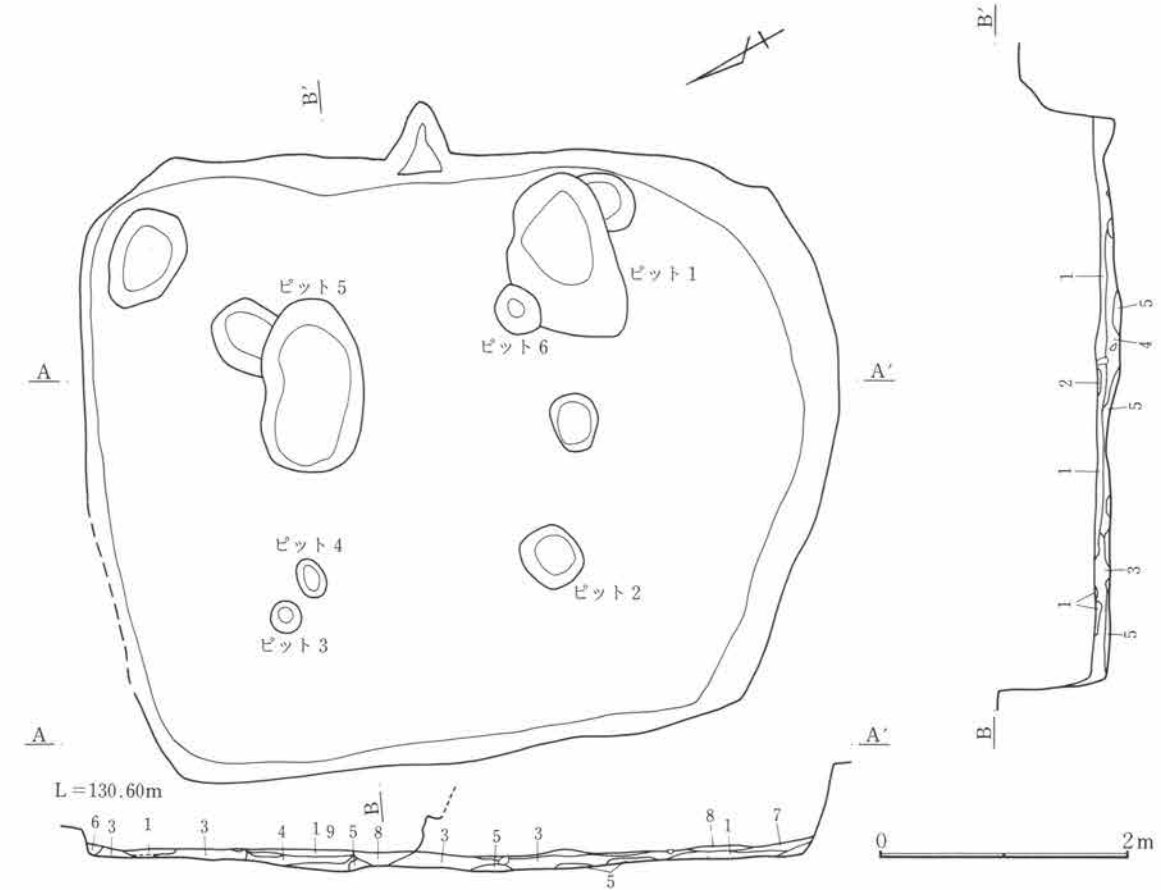
第145図 3区-8号住居出土遺物(2)



30 3区-8号住居跡 (第144~147図、図版98・99・121・133・134)

概要 本住居は3区-5地区の西端に在り、北半土中に3区-13号住居が作られる東カマドの竪穴住居跡である。南側に張り出しを持ち、床面に貯蔵穴(ピット1)と西側の柱穴(ピット2・3)、掘り方には東

側の柱穴位置に浅い掘り込み(ピット5・6)が確認された。尚、ピット2は掘り方のものが径が大きいため、床面のものは柱痕の可能性はある。カマドの遺存状態は良好で、特に左袖は内外の壁面がよく焼けた良好な状態で出土したためサンプリングした。



貼床

1：黒褐色土（10YR3/2）：白色細粒・焼土細粒を少量含。

掘り方覆土

2：黒褐色土（10YR3/2）：白色細粒・焼土細粒を少量と炭化材をわずかに含。

3：黒褐色土（10YR3/2）：白色細粒と焼土粒微量、地山にぶい黄橙色土ブロック少量含。

4：黒褐色土（10YR3/1）：白色細粒と焼土粒比較的多く含。

5：黒褐色土（10YR3/2）：地山・焼土粒・炭化物粒少量含。

6：暗褐色土（10YR3/3）：白色細粒少量。焼土粒多量に含む。

7：黒褐色土（10YR3/2）：白色細粒微量。焼土粒・炭化物少量含。

8：褐色土（10YR4/4）：白色細粒を微量。焼土粒を少量と地山小ブロックを比較的多く含。

9：褐色土（10YR4/4）：地山小ブロックは8層に比し多い。

第147図 3区-8号住居掘り方(4)

出土遺物には7世紀前半と思われる何れも土師器
 坏(1・2)や小型甕(6)、甑(7)、長胴甕(8)、こ
 もあみ石(9・10)、土師製の紡錘車(11)が出土し
 たが、特に手づくねで底部穿孔の異形の土師器(3
 ～5)の出土が目を引いた。

規模 縦：490cm 横：590cm 深さ：76cm

カマド 幅：45cm 奥行：124cm 右袖幅：20cm
 長さ：58cm 左袖 幅：17cm 長さ：65cm 燃
 焼部 径：31×61cm

ピット1 径：75×85cm以上 深さ：21cm

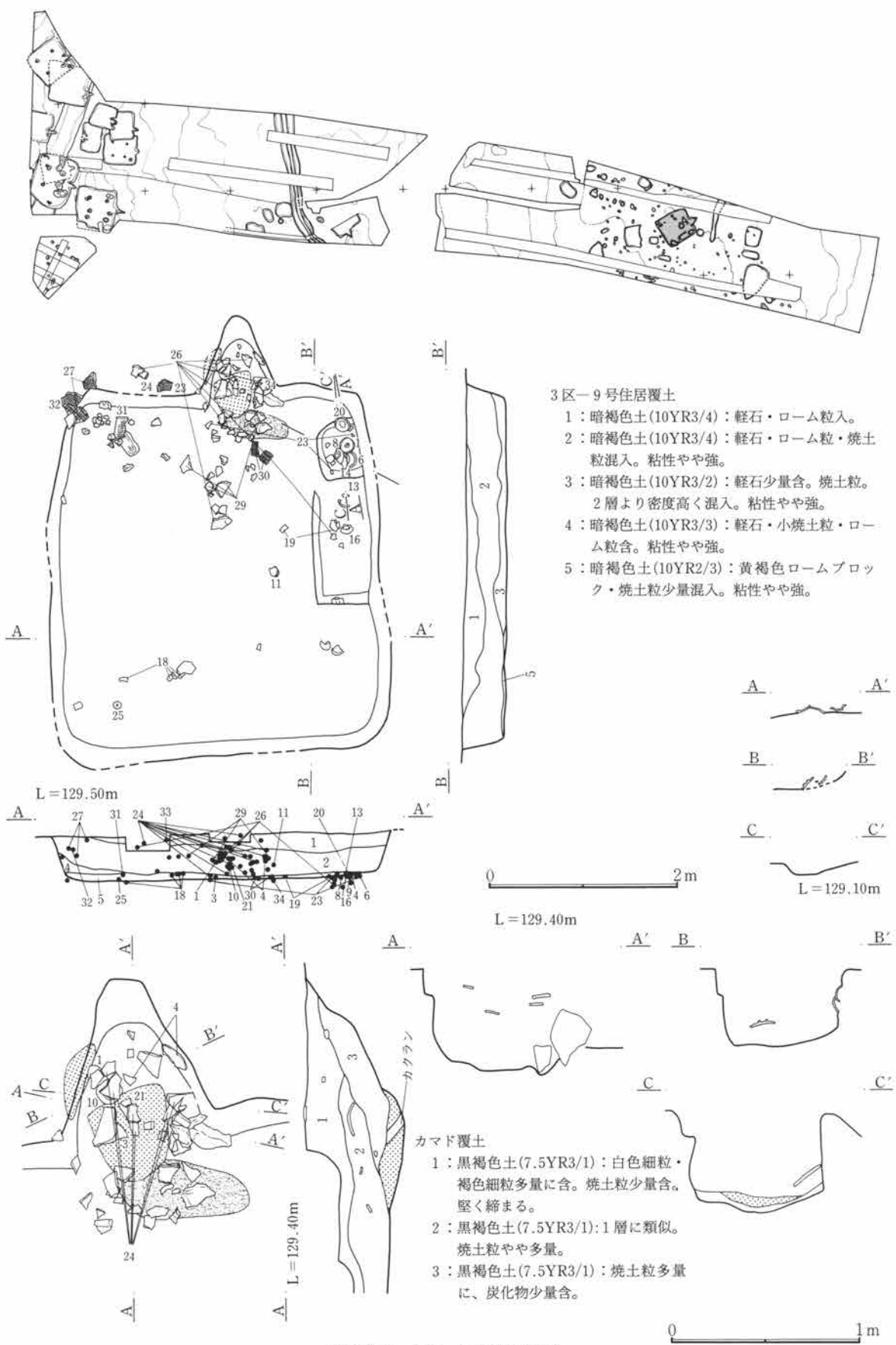
ピット2 径：(床面) 34×30cm (掘り方面) 49
 ×44cm 深さ：31cm

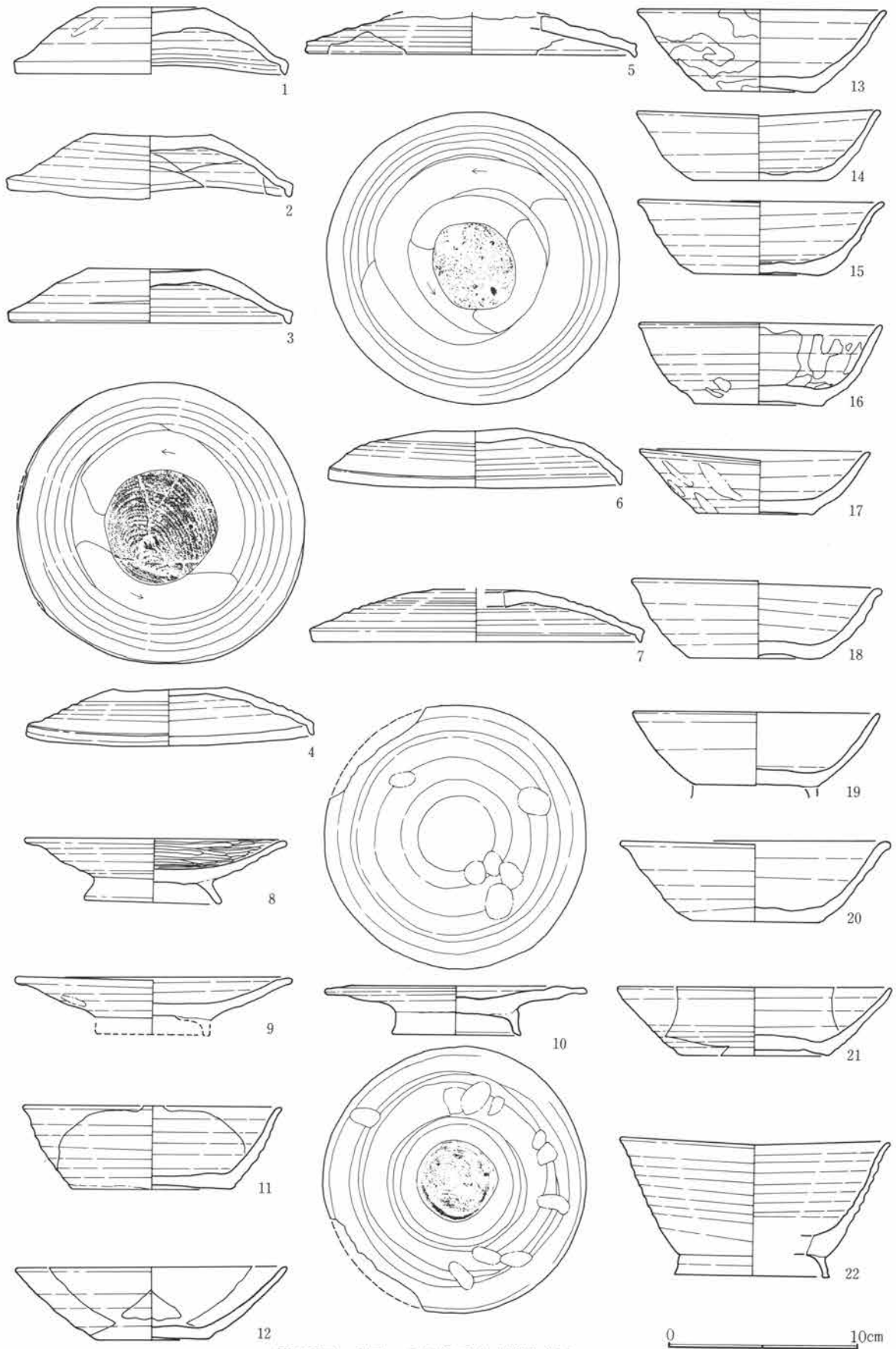
ピット3 径：25×25cm 深さ：26cm

ピット5 径：47×54cm以上

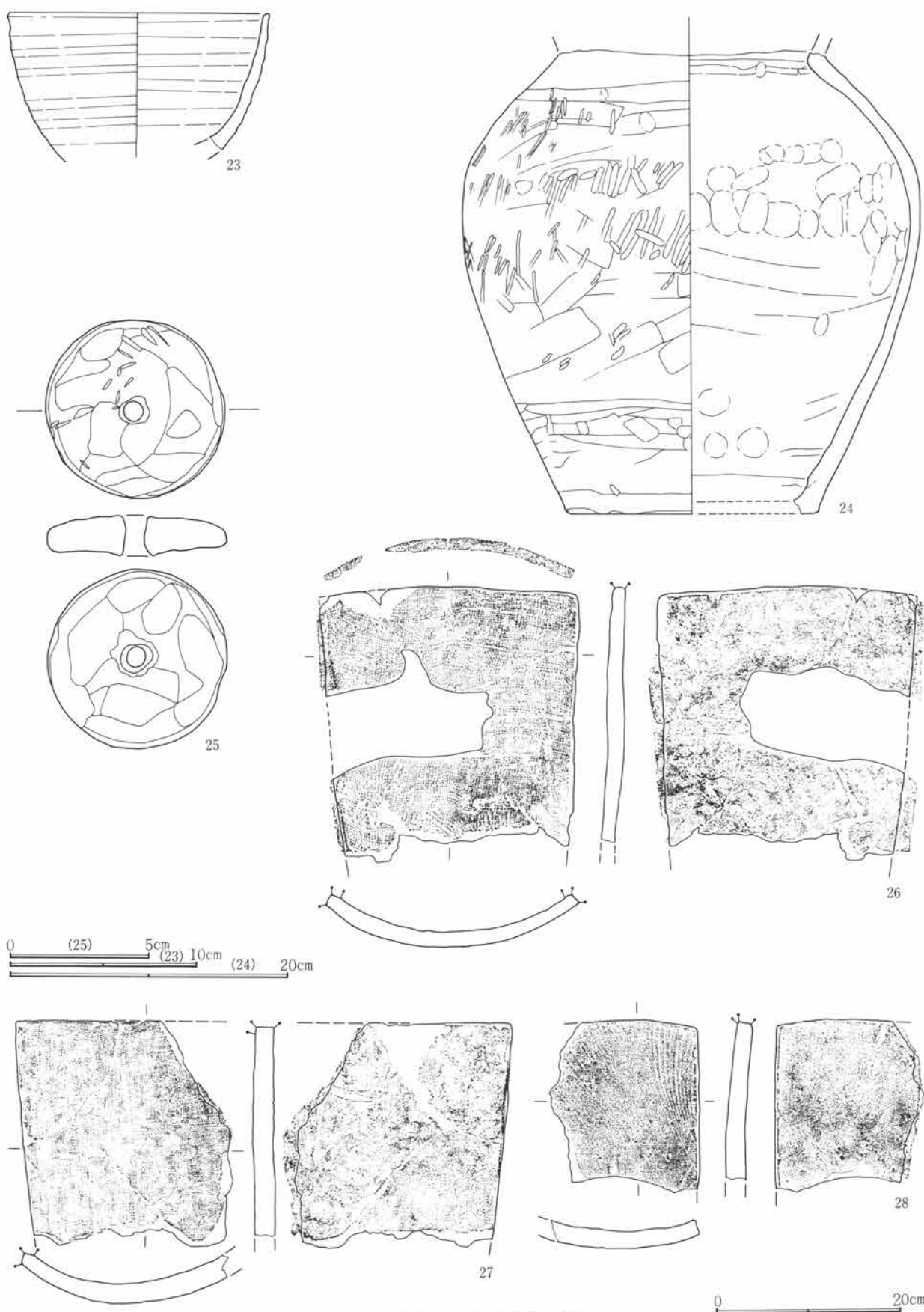
ピット6 径：41×35cm

構造 住居は方形プランを呈し、南側に弧状の張り
 出しを持つ。浅い掘り方を埋め戻して黒褐色土で床
 を張っている。柱穴は4基あったと推定され、床を
 貼る前に掘削し、柱を建てから床を貼ったものと判
 断される。カマド右側手前には楕円形プランの貯蔵
 穴が掘られている。カマドは壁面手前の燃焼部に浅
 い掘り方を持ち、これを埋め戻して造っている。袖
 材は無いが、天井材はデイスイト質凝灰岩の天井材
 を用い、袖・天井共に焼土を含む灰褐色または黄褐
 色の土で構築している。

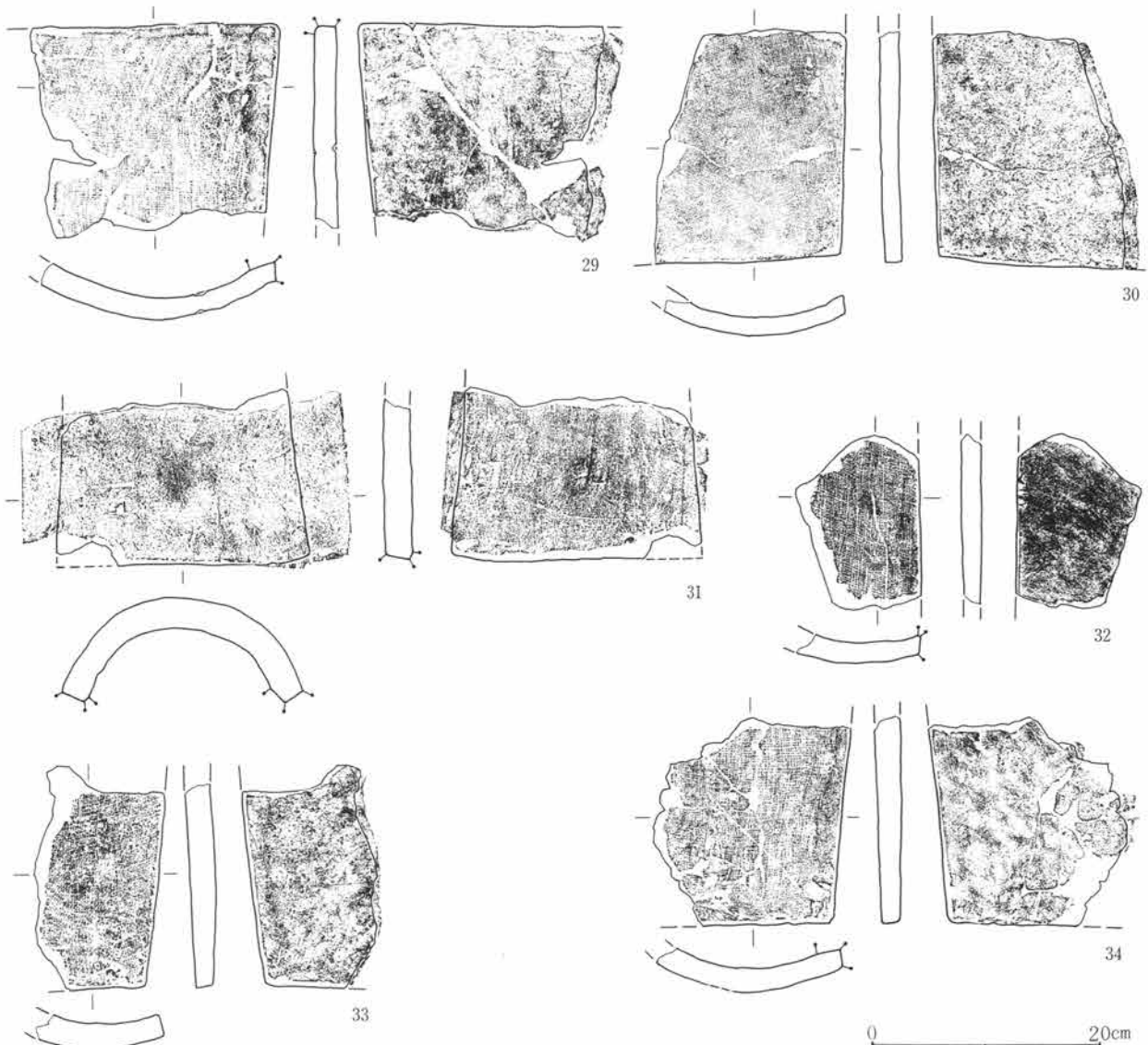




第149図 3区-9号住居出土遺物(2)



第150図 3区-9号住居出土遺物(3)



第151図 3区—9号住居出土遺物(4)

31 3区—9号住居 (第148～152図、図版100・122～124・133)

概要 本住居は3区—4地区中央やや北寄りに位置する、東カマドの良好な掘削状態を示す竪穴住居である。当該地区の土坑・ピット群の中に在り、本住居埋没土中に掘削されるものもある。

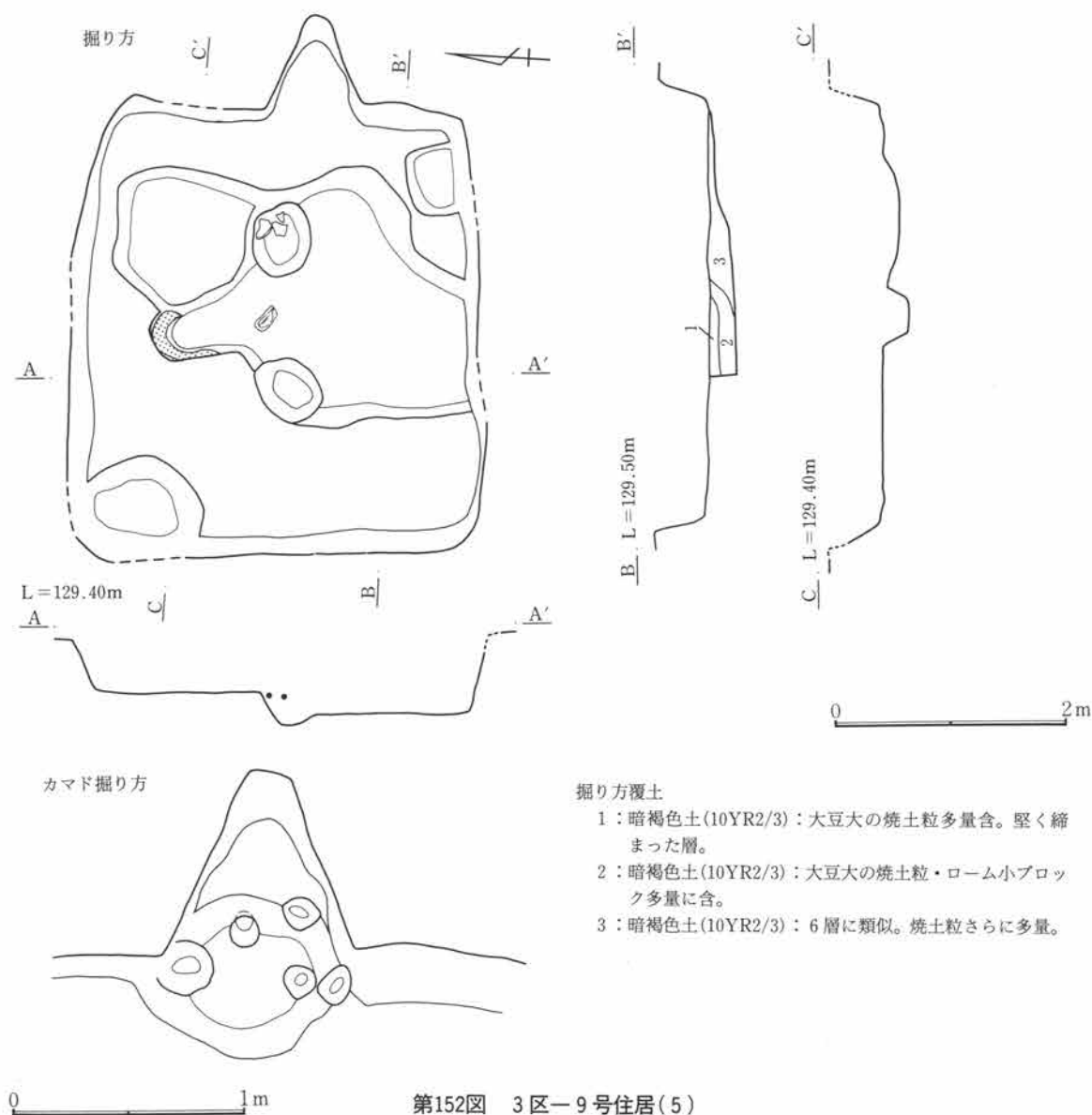
掘り方中央には不整形の浅い掘り込みが在るが、この北側には煙道様の突出部が在り、その先端部はカマドのような焼土化が認められる。或は北カマドの2mクラスの住居の立て替えられたものである可能性を持つ。カマドは袖・天井の遺存状況は悪いが、地山掘削面の残りは良好で燃焼部及び壁面にはつき

りした焼土化が認められる。柱穴は確認できなかったが、箱形に掘られた貯蔵穴が発見されている。

本住居はカマド及びその周辺と貯蔵穴付近を中心に、床の上下を問わず9世紀後半と思われるものを中心とする多量の遺物を出土している。この中には回転クロ整形と上部にヘラ調整が施される蓋(1～7)、皿(8・9)、托(10)、坏(11～21)、碗(22・23)が出土している他、須恵器甕(24)、土師器紡錘車(25)、布目瓦(26～34)などが出土しているが、特に瓦は覆土上層に多い。

規模 縦：378cm 横：354cm 深さ：45cm

カマド 掘削幅：75cm 奥行き：38cm



第152図 3区—9号住居(5)

貯蔵穴 縦:49cm 横:43cm 深さ:14cm

構造 住居は方形のプランを呈し、しっかりした掘り方を持っている。小型の住居の立て替えの可能性を持ち、中央にこれを示唆する凹みを持つ、掘り方を暗褐色土で埋め戻して床を造っている。カマド右側壁際に箱形に掘られた貯蔵穴を持つ。カマドの袖・天井部は破壊されその全容は明らかでないが、壁面ライン上を中心とする燃焼部に浅い掘り方を持ち、これを埋め戻して造られているようである。カマド地山掘削部の状況から天井部は燃焼面より50cm以上上位にあったことが推定される。

32 3区—10号住居(第153図、図版125・133)

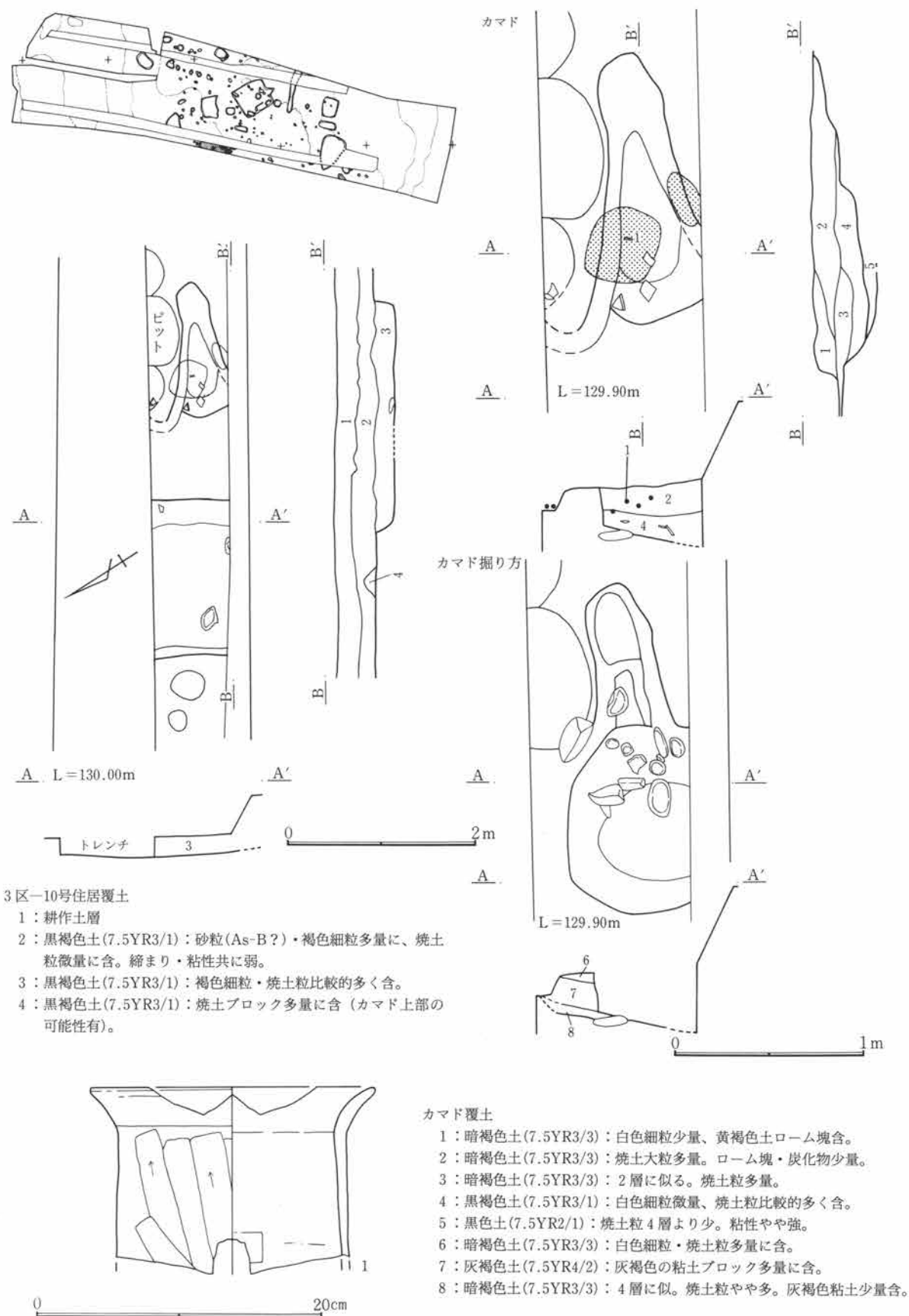
概要 本住居は小型の竪穴住居で、住居の南部は路線外に在り、北側は試掘トレンチに壊されて、僅か80cm 強の幅で調査できたに過ぎない。

出土遺物は少なく、僅かに7・8世紀と推定される土師器甕(1)などの出土を見る。

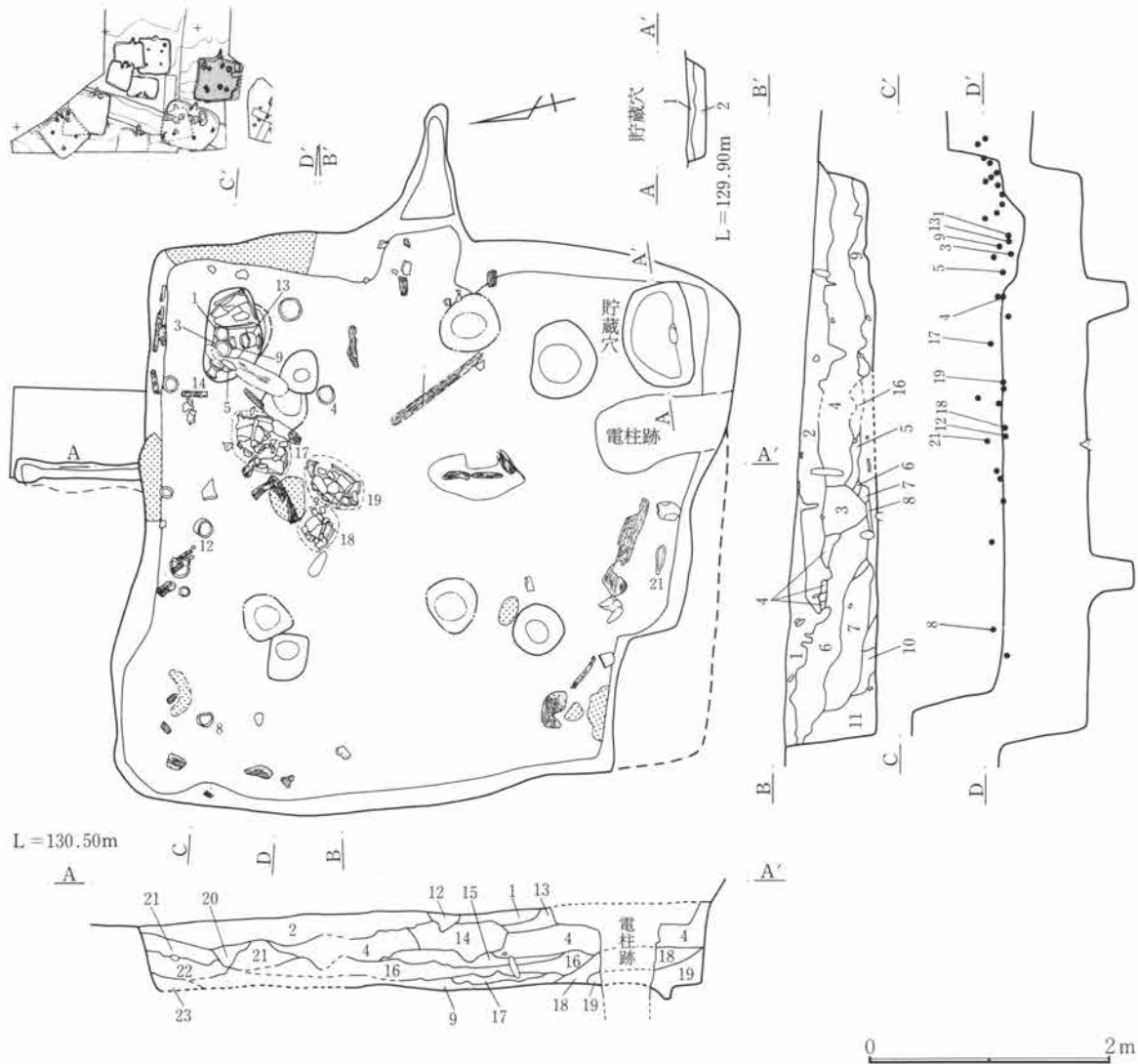
規模 縦:235cm 深さ:22cm

カマド 奥行き:128cm 左袖 幅:33cm 長さ:65cm

構造 遺構の形状などは明らかでないが、カマドの燃焼部は壁面より内側と推定され、この位置に浅い掘り方を持つ。袖は焼土の混じりの土で造られる。



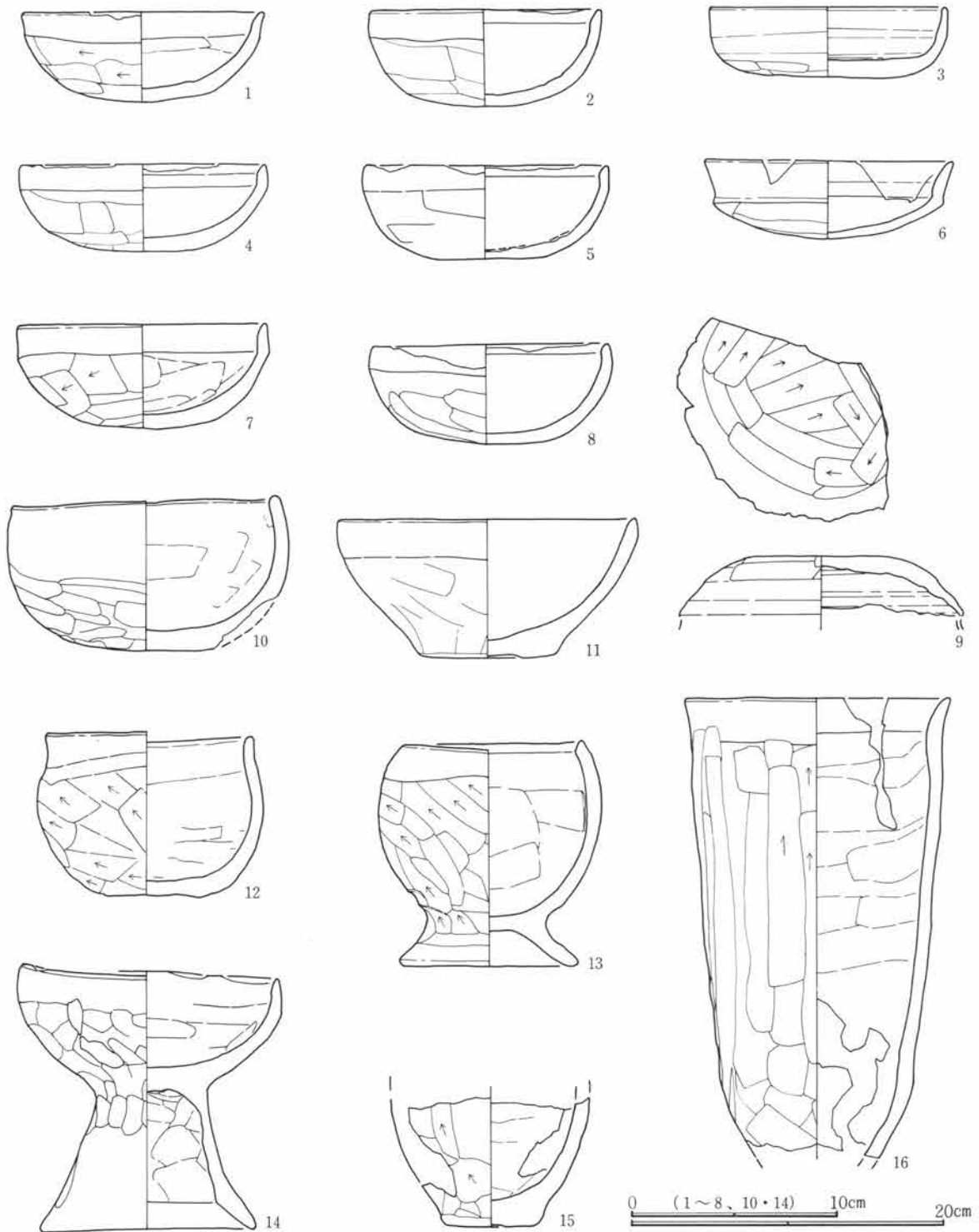
第153図 3区-10号住居及び出土遺物



3区-11号住居覆土

- 1：黄褐色土(2.5Y5/3)：As-A混入。粘性やや欠。
- 2：にぶい黄褐色土(10YR5/4)：焼土・ローム粒・カーボン混入。粘性やや欠。
- 3：4～7層土のブロック層
- 4：褐色土(7.5YR4/3)：ローム粒・焼土の小ブロック入。粘性有。
- 5：6層に黒褐色土(10YR2/2)混入するブロック層：ローム粒・少量焼土粒混入。粘性やや有。
- 6：褐色土(10YR4/4)：やや焼土化見られる。若干のローム粒・焼土の小ブロック混入。粘性やや有。
- 7：にぶい黄褐色土(10YR5/3)：やや焼土化見。若干ローム粒・焼土・カーボンの小ブロック混。粘性有。
- 8：にぶい黄褐色土(10YR5/4)：やや焼土化見られる。少量のローム粒・焼土粒混入。粘性やや強。
- 9：暗褐色土(10YR3/3)：やや焼土化見られる。焼土・カーボンの小ブロックやや多く混入。
- 10：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：カーボン小塊と少量のローム混入。
- 11：暗褐色土(7.5YR3/4)：焼土化見られる。焼土・カーボンのブロック・ローム小ブロックやや多く混入。
- 12：黄褐色土(2.5Y5/4)：As-A混入。締めり欠。
- 13：灰色砂土(7.5Y6/1)：酸化鉄含。細かい川砂層。
- 14：灰褐色土(7.5YR4/2)：荒いブロック層。ロームの小ブロック・焼土粒混入。粘性やや欠。
- 15：褐灰色土(7.5YR4/2)：やや焼土化見。若干ローム小ブロック・少量の焼土粒混入。粘性有。
- 16：褐色土(10YR4/4)：やや焼土化見。ロームブロック・若干の焼土小ブロック・カーボン混入。粘性有。
- 17：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：やや焼土化見。若干の焼土・カーボン混入。粘性やや強。
- 18：灰褐色土(7.5YR4/2)：若干のローム小ブロック・焼土粒混入。やや焼土化見られる。
- 19：灰黄褐色土(10YR4/2)：若干の焼土化認める。ローム・炭化物・焼土の小ブロック混入。
- 20：暗褐色土(7.5YR3/4)：弱い焼土化見。ローム粒・若干の焼土小ブロック混入。粘性やや欠。
- 21：暗褐色土(10YR3/4)：淡黄色ロームブロック・円礫と若干の焼土の小ブロック混。粘性やや欠。
- 22：褐灰色土(7.5YR4/2)：橙色の粘土(21層のロームブロックの焼土化したものと思われる)の入るブロック層。若干の淡黄色ロームブロック混入。炭化物含。粘性有。
- 23：灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土化見られる。焼土ブロック混入。粘性やや強。

第154図 3区-11号住居(1)



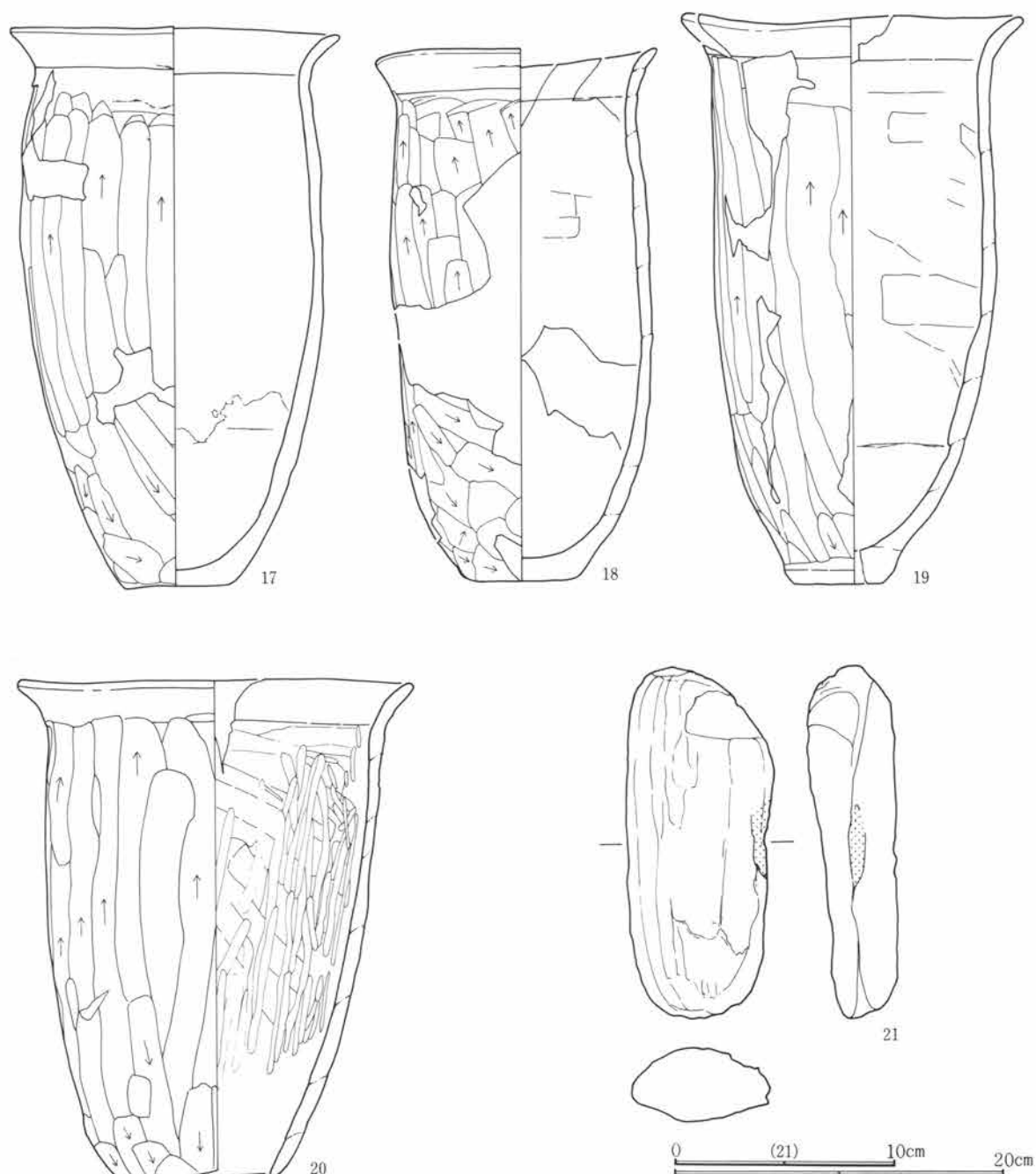
第155図 3区-11号住居出土遺物(2)

33 3区-11号住居 (第154~158図、図版102・125~127・133)

概要 本住居は3区-5地区に在る竪穴住居である。カマドは東カマドだが、北側壁面に古いカマドの煙

道が開口する。貯蔵穴・柱穴も2組つつ有るので立て替えが行われたと判断される。

出土遺物は多く、8世紀前半と判断される土師器
 坏(1~8)・椀(10)・小型甕(12)・鉢(11)・高



第156図 3区-11号住居出土遺物(3)

坏 (14)・脚付き小型甕 (13)・甕 (15~19)、須恵器の蓋 (9) 甑 (20) こもあみ石 (21) などがある。

規模 縦：435cm 横：475cm 深さ：73cm

カマド 幅：45cm 奥行き70cm 右袖 幅：33cm 長さ：38cm 左袖 幅：35cm 長さ：40cm

旧カマド 煙道径：20×22cm 煙道部長：104cm

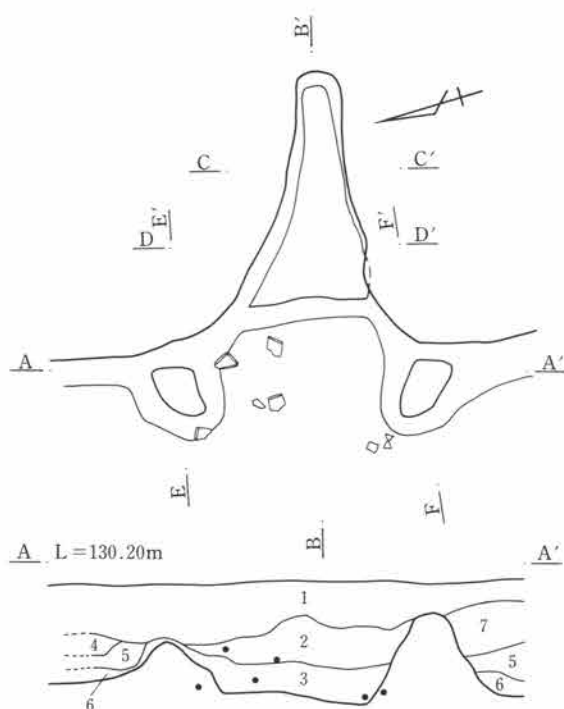
新貯蔵穴 長軸：86cm 短軸：55cm 深さ：30cm

旧貯蔵穴 長軸：72cm 短軸：45cm 深さ：15cm

ピット1 径：63×50cm 深さ：32cm ピット2

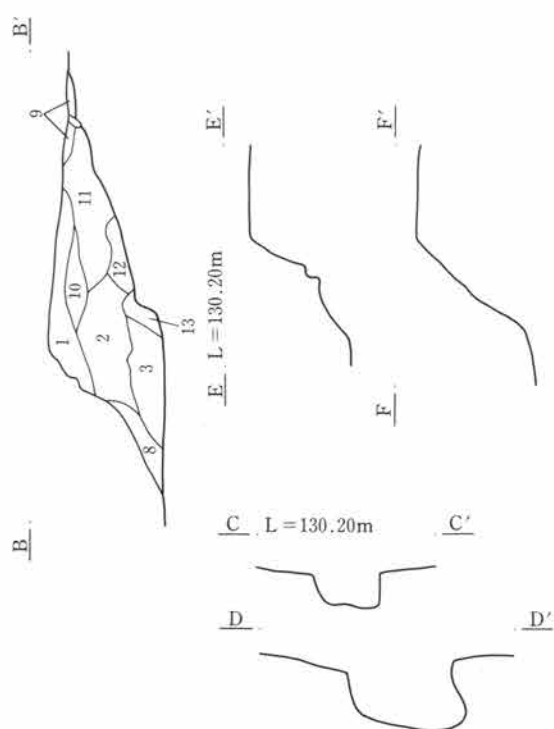
径：70×55cm 深さ：16cm ピット3 径：37×32cm 深さ：33cm ピット4 径：40×35cm 深さ：35cm

構造 方形のプランで、新旧のカマド使用時にはそれぞれ4本の柱穴とカマド右側壁近くに貯蔵穴がある。旧カマド煙道はトンネル状で先端で上方向に折れる。新カマドは浅い掘り方を持ち、焼土を含む土で短い袖を造る。燃烧部は壁面ライン上に在る。

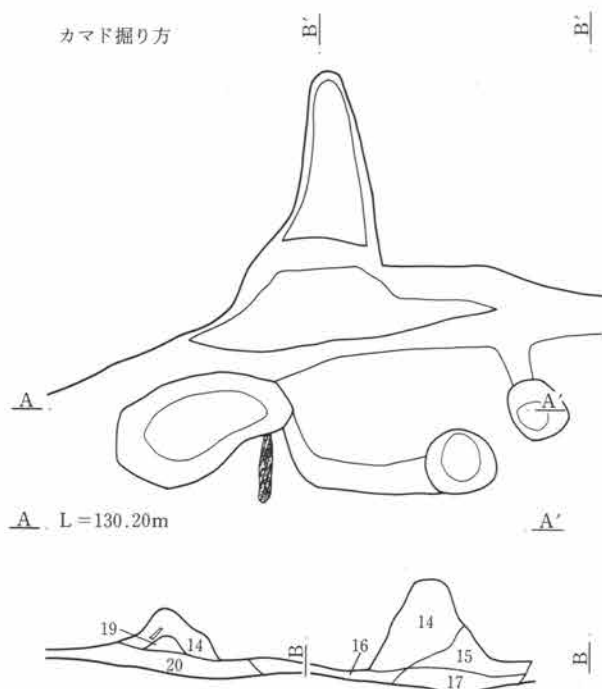


カマド覆土

- 1：暗褐色土(10YR3/4)：ローム粒・若干の焼土粒・カーボン混入。部分的に淡黄色シルトブロック・軽石混入。粘性やや欠。
- 2：灰褐色土(7.5YR4/2)：弱い焼土化見る。焼土粒・ローム粒混入。若干のカーボン含。粘性やや欠。
- 3：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：弱い焼土化見る。淡黄色シルトの小塊と若干の焼土・炭化物の小塊混入。粘性やや有。
- 4：褐色土(10YR4/4)：焼土粒・淡黄色シルトの小ブロックやや多量に混入。若干の焼土粒含。粘性有。
- 5：褐色土(7.5YR4/3)：弱い焼土化見る。ローム粒・淡黄色シルトの小ブロック含。若干の炭化物混入。粘性やや強。



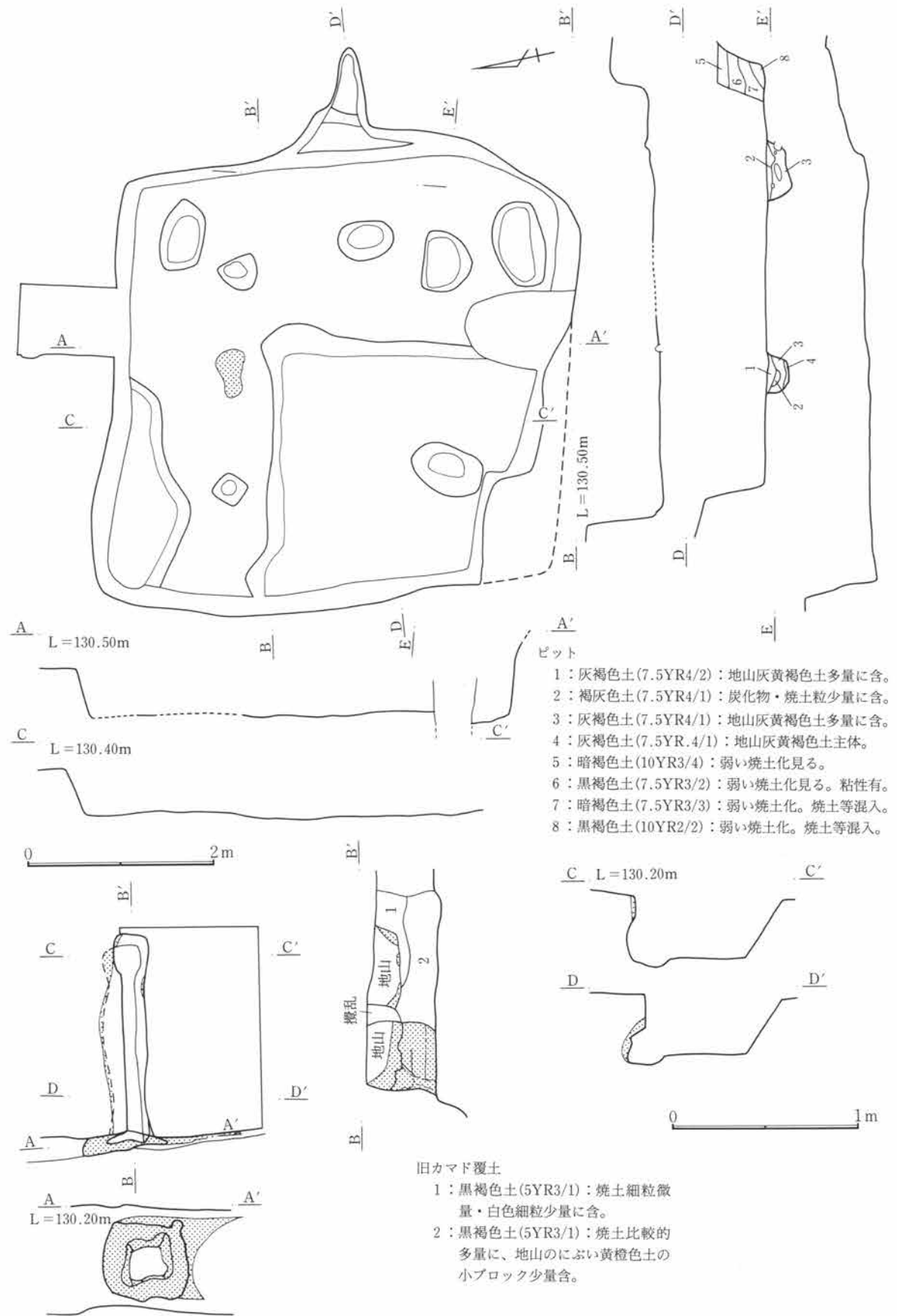
カマド掘り方



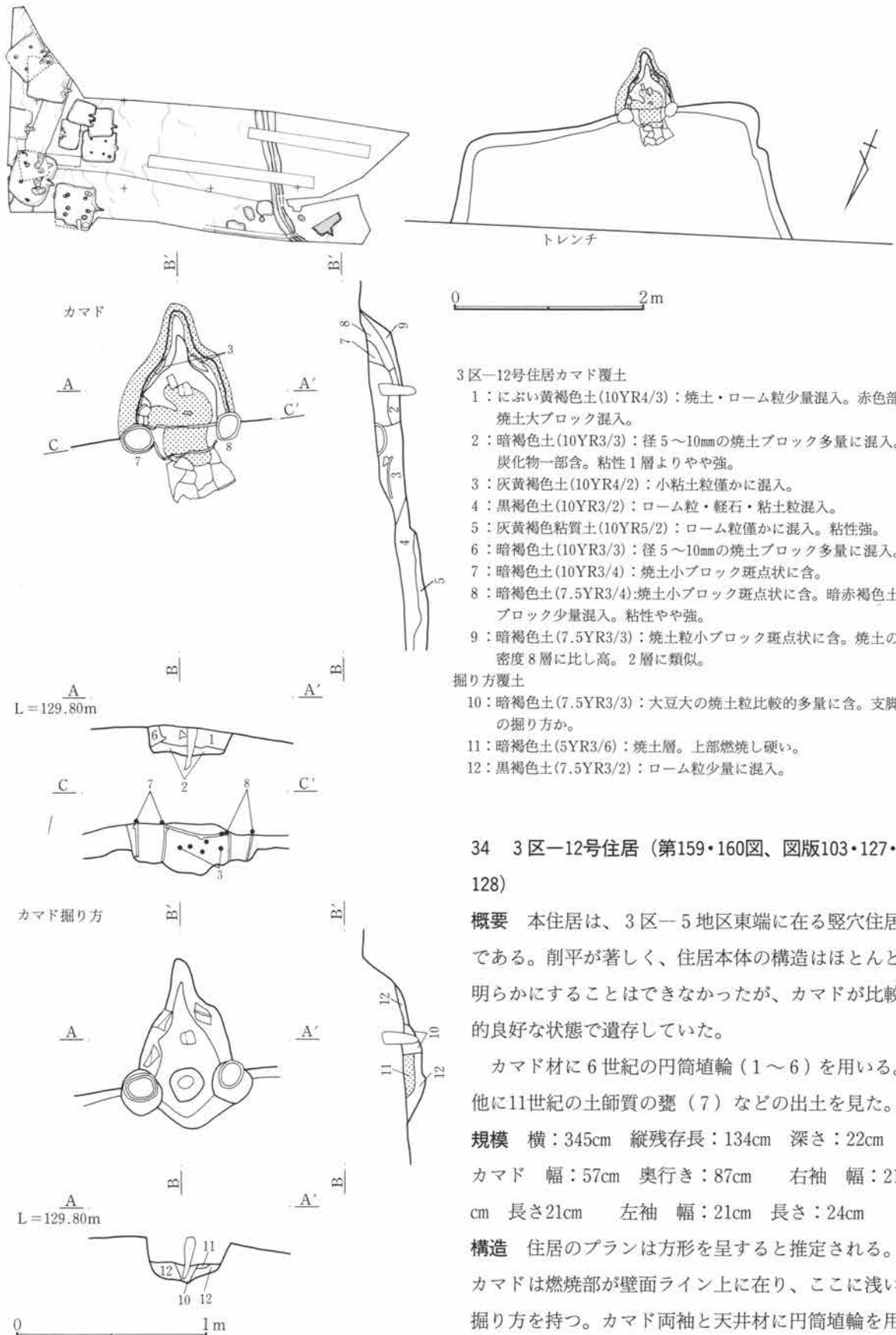
- 6：褐色土(10YR4/4)：弱い焼土化見る。ローム・淡黄色シルト・焼土の小ブロック多量に混入。粘性有。
- 7：暗褐色土(10YR3/4～7.5YR3/4)：弱い焼土化見る。若干の焼土粒・ローム粒混入。粘性やや欠。
- 8：褐色土(10YR4/4～4/6)：淡黄色シルトのブロック・焼土の小ブロック若干混入。ローム粒含。粘性やや欠。
- 9：灰褐色土(7.5YR4/2)：弱い焼土化見る。焼土ブロックやや多量に混入。粘性やや有。
- 10：灰黄褐色土(10YR4/2)：弱い焼土化見る。焼土ブロック・焼土粒多量に含。ローム粒含。粘性有。
- 11：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：弱い焼土化見る。やや多量の焼土と若干の炭化物の小ブロック含。粘性有。
- 12：暗灰黄色土(2.5Y4/2)：弱い焼土化が見られる。若干の焼土粒混入。粘性有。
- 13：黒褐色土(7.5YR3/2)：焼土化見る。焼土粒混入。粘性有。
- 14：黒褐色土(10YR3/2)：白色細粒微量・焼土粒・炭化物少量含。
- 15：黒褐色土(10YR3/2)：焼土粒微量・大粒の炭化物多量に含。
- 16：灰黄褐色土(10YR4/2)：焼土粒・炭化物微量に含。地山のにぶい黄橙色の小ブロック含。
- 17：灰黄褐色土(10YR4/2)：16層に類似。地山層土多量に含。
- 18：黒褐色土(10YR3/2)：炭化物・焼土粒多量に含。
- 19：灰黄褐色土(10YR4/2)：17層に類似。
- 20：灰黄褐色土(10YR4/2)：炭化物・焼土粒多量に含。

0 1 m

第157図 3区-11号住居カマド(4)



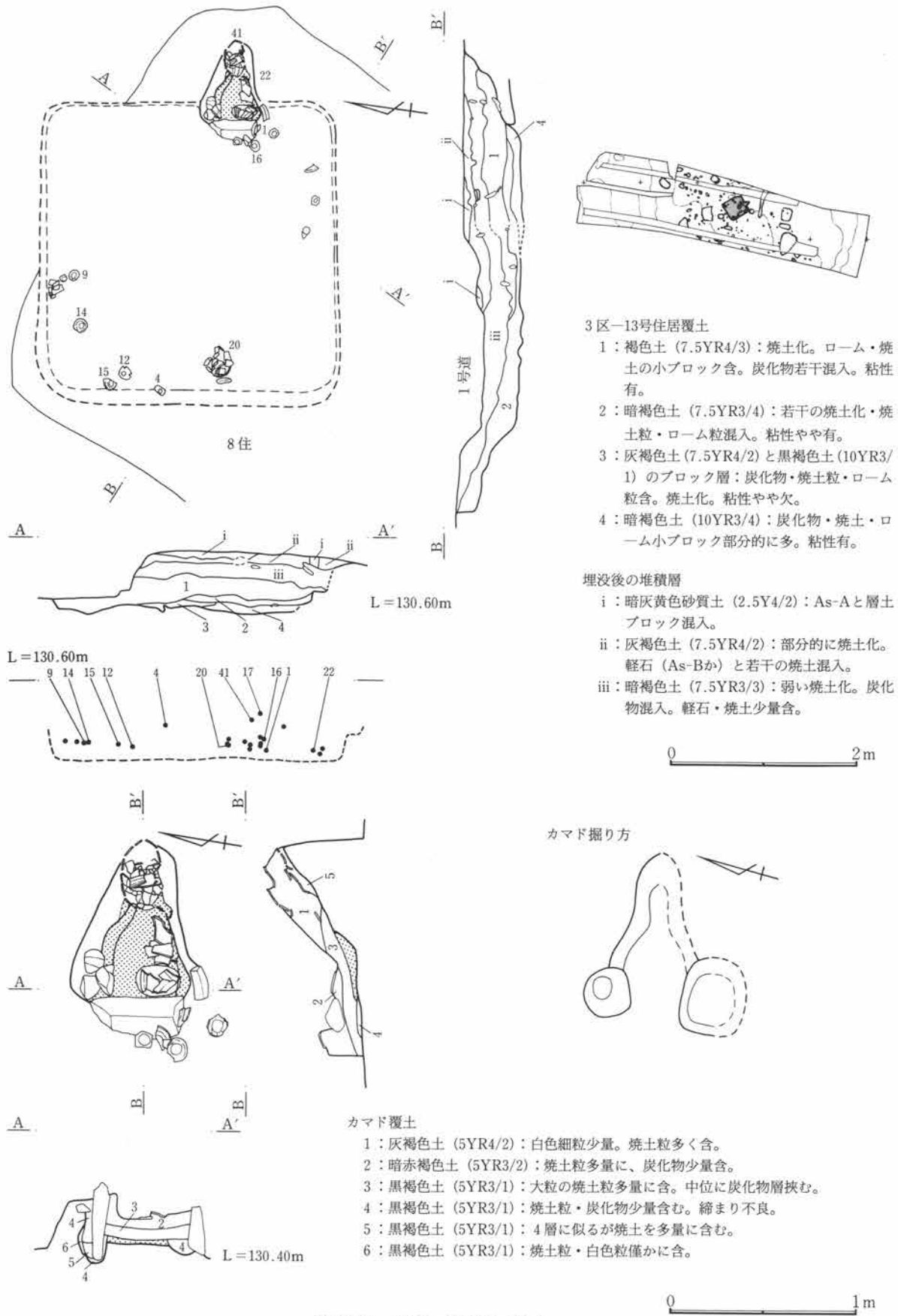
第158図 3区-11号住居堀り方(5)



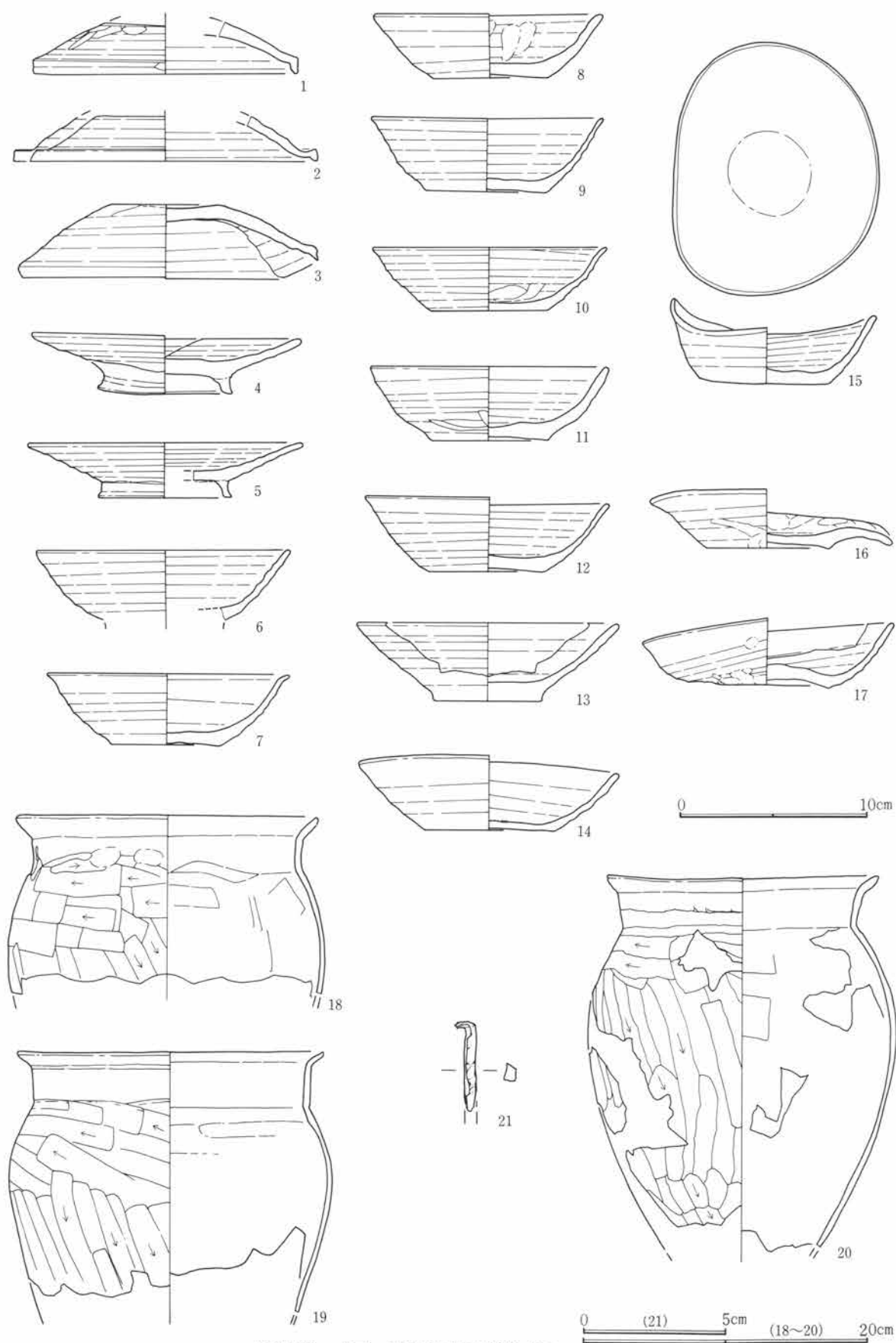
第159図 3区-12号住居(1)



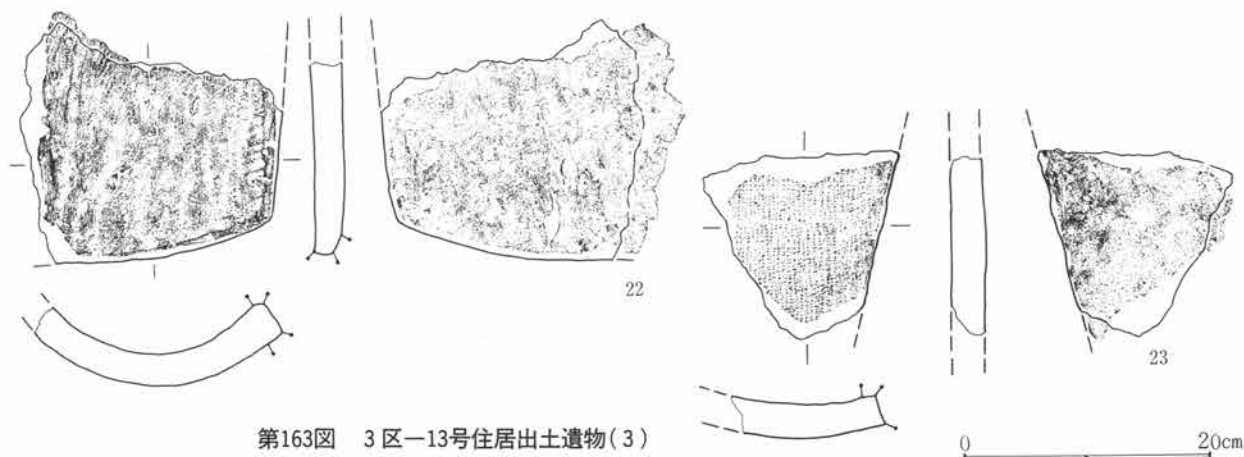
第160図 3区-12号住居出土遺物(2)



第161図 3区-13号住居(1)



第162図 3区-13号住居出土遺物(2)



第163図 3区-13号住居出土遺物(3)

35 3区-13号住居(第161~163図、図版98・99・129・130・133・134)

概要 本住居は3区-8号住居の覆土中に在り、住居全体の構造を知ることはできなかったが、カマドを確認調査することができた。8号住居覆土断面の観察等から、およそ320cm四方の小型の竪穴住居であったと判断される。

カマドは燃烧部と煙道のみを確認できたに過ぎなかったが、袖材・天井材が出土し、煙道上位にコ字状口縁の甕をつなげて設置したものが出土していた。燃烧部壁面は焼土化が見られた。

出土遺物は比較的多く、カマド内及びカマド手前の上位を中心に上述のものを含む土師器甕(18~20)のほか、9世紀後半と判断される回転クロ整形の蓋(1~3)、皿(4・5)、碗(6・7)、坏(8~17)、角釘(21)、布目瓦(22・23)などが出土している。

規模 カマド 掘削幅：57cm 奥行き：95cm 燃烧部径：40×36cm 煙道 長さ：60cm以上 落差：37cm以上、

構造 住居のプランは方形又は隅丸方形を呈していたと推定されるが、3区-8号住居中の黒色土を床面としている。尚、床が貼られたかどうかは特定できなかった。カマドの左右両袖の下にはピット様の掘り込みを掘って、ここに袖材として河原石を立て、焼土を含む黒褐色土で袖を造り出している。また、天井材には直方体様の河原石を用いている。煙道は斜めに上がり、その上位に土師器甕を縦位につないで設置している。

36 3区-1号土坑(第165図、図版106・130)

概要 本土坑は3区-3地区、東側の3区-4地区から続く遺構群の西端、礫の多い旧河道様のものを東側に位置する。土坑の掘り方はあまり明瞭ではなく、特に底面は礫が多いため掘削に苦慮した。

土坑の覆土には礫を多量に含んでおり、この中に縄文前期の縄文土器深鉢が転倒する状態で出土した。しかし、土器片は粗造化が著しく進んでいるため復元することはできなかった。

規模 長軸：215cm 短軸：140cm 深さ：25cm

構造 本土坑は南西の長辺が多少膨らむ、隅丸方形のプランを呈しており、底面はほぼ平底をなす。

37 3区-2号土坑(第165図、図版106)

概要 本土坑は3区-1地区南東隅に位置する。その南東半は路線外に出るため調査をすることができなかった。

遺物の出土もなく、覆土からも時期等を特定することができなかった。

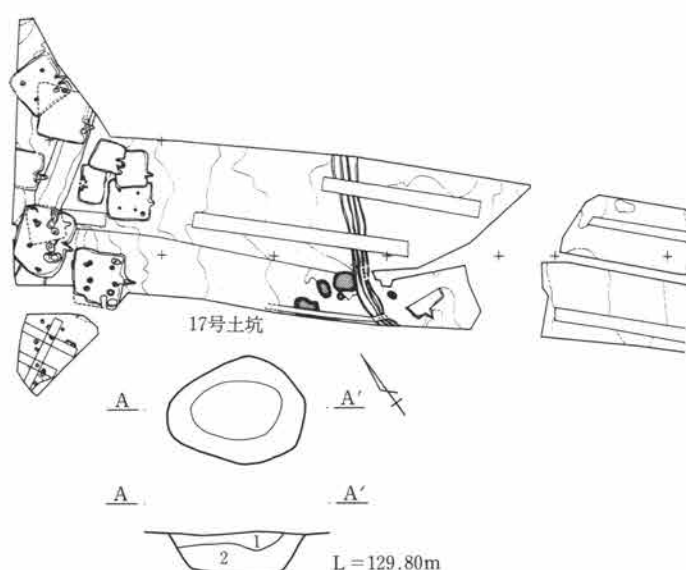
規模 確認範囲：214×68cm 深さ：55cm

構造 本土坑の形態等は詳かでないが、楕円形様のプランが想定される。床面はフラットであるが、北東に向かって傾斜する傾向にある。

38 3区-17号土坑(第164図、図版107)

概要 本土坑は3区-5地区東部に位置する土坑群の一つであり、3区-18号土坑の南に位置する。

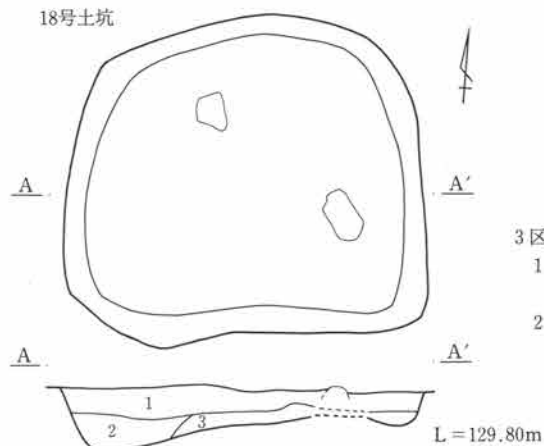
覆土等から時期を特定することはできなかった。



3区-17号土坑覆土

- 1: 暗褐色土(10YR3/3): 小軽石・ローム粒・焼土粒少量混入。粘性やや弱。
- 2: 黒褐色土(10YR2/3): 小ローム粒・軽石混。粘性1層より強。

18号土坑



3区-18号土坑覆土

- 1: 黒褐色土(10YR2/3): 径1~3mm粒の軽石・ローム粒混。粘性普通。
- 2: 黒褐色土(10YR2/3): 軽石・ローム粒1層より低い密度で混。粘性1層よりやや強。
- 3: 黒褐色土(10YR2/2): 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土ブロック混。小軽石・ローム粒含。粘性強。

第164図 3区-17~20号土坑

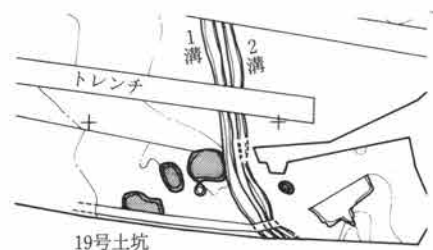
また、用途も特定することはできなかった。

規模 径: 109×84cm 深さ: 30cm

構造 本土坑は楕円形に近いプランを呈し、底面は平底を呈する。

39 3区-18号土坑 (第164図、図版107)

概要 本土坑も3区-5地区東部の土坑群を形成す

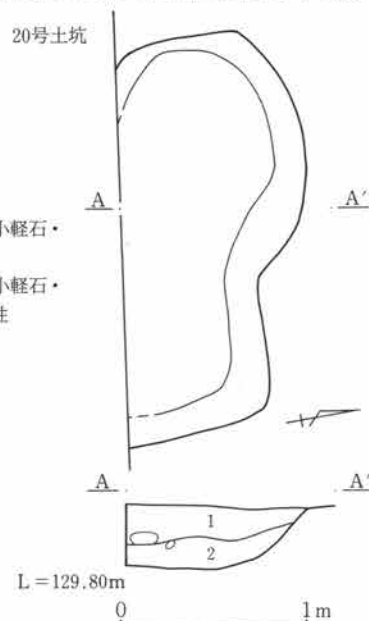


L=129.80m

3区-19号土坑覆土

- 1: 褐色土(7.5YR4/3): 軽石・ローム粒含。
- 2: 黒褐色土(10YR2/3): 1層に比しやや粒径の小さい軽石・ローム粒含。密度低く、粘性1層に比しやや強。

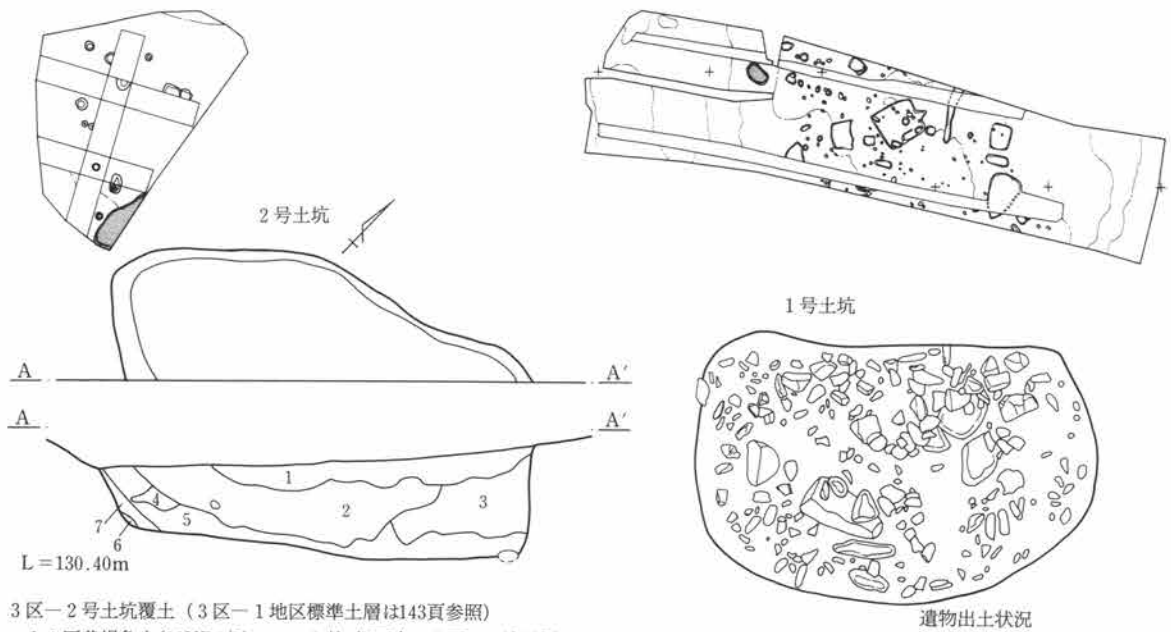
20号土坑



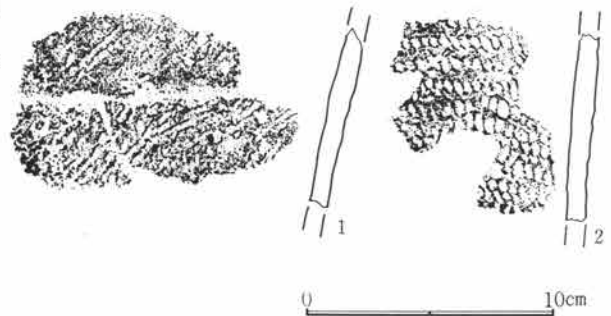
るものの一つで、3区-17号土坑の北3区-19号土坑の東に位置している。覆土等の所見から、用途・時期等を特定することはできなかった。

規模 径: 291×255cm 深さ: 48cm

構造 本土坑は北辺がやや膨らむ隅丸方形のプランを呈し、底面は比較的平らであるが西に向かって傾斜している。



- 3区-2号土坑覆土（3区-1地区標準土層は143頁参照）
- 1：灰黄褐色土(10YR4/2)：ローム粒・軽石含。3区-1地区標準土層III層土に類似。
 - 2：黒褐色土(10YR2/2)：3区-1地区標準土層IV層土に類似。
 - 3：暗褐色土(10YR3/4)：3区-1地区標準土層VI層土に類似。
 - 4：灰黄褐色土(10YR4/2)：3区-1地区標準土層VII層土に似。
 - 5：3区-1地区標準土層IV層土に2・3層土ブロック混入。
 - 6：酸化鉄混入の明褐色土(7.5Y5/6)：酸化鉄・ローム質土、黄褐色ローム質土と2・5層土ブロック混入。
 - 7：4・6層の混土。2層土粒混入。



40 3区-19号土坑（第164図、図版107）

概要 3区-19号土坑は3区-18号土坑の西に位置し、当該地域の土坑群を構成している。本土坑も土坑群の他の土坑と同様に、時期・用途等を特定することはできなかった。

規模 長軸：232cm 短軸：150cm 深さ：66cm

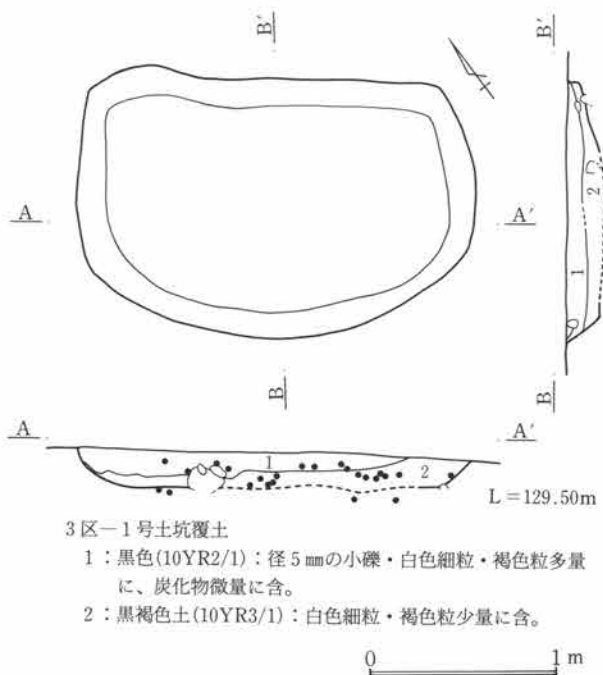
構造 本土坑は隅丸の長方形のプランを呈し、主軸は北々西を向く。底部は平底を呈する。

41 3区-20号土坑（第164図、図版107）

概要 本土坑は、3区-5地区東端部の土坑群のうち最も西に位置する。この土坑も覆土などに特に記すべき特徴は無く、時期・用途などを特定することはできなかった。

規模 長軸：315cm 短軸：156cm 深さ：51cm

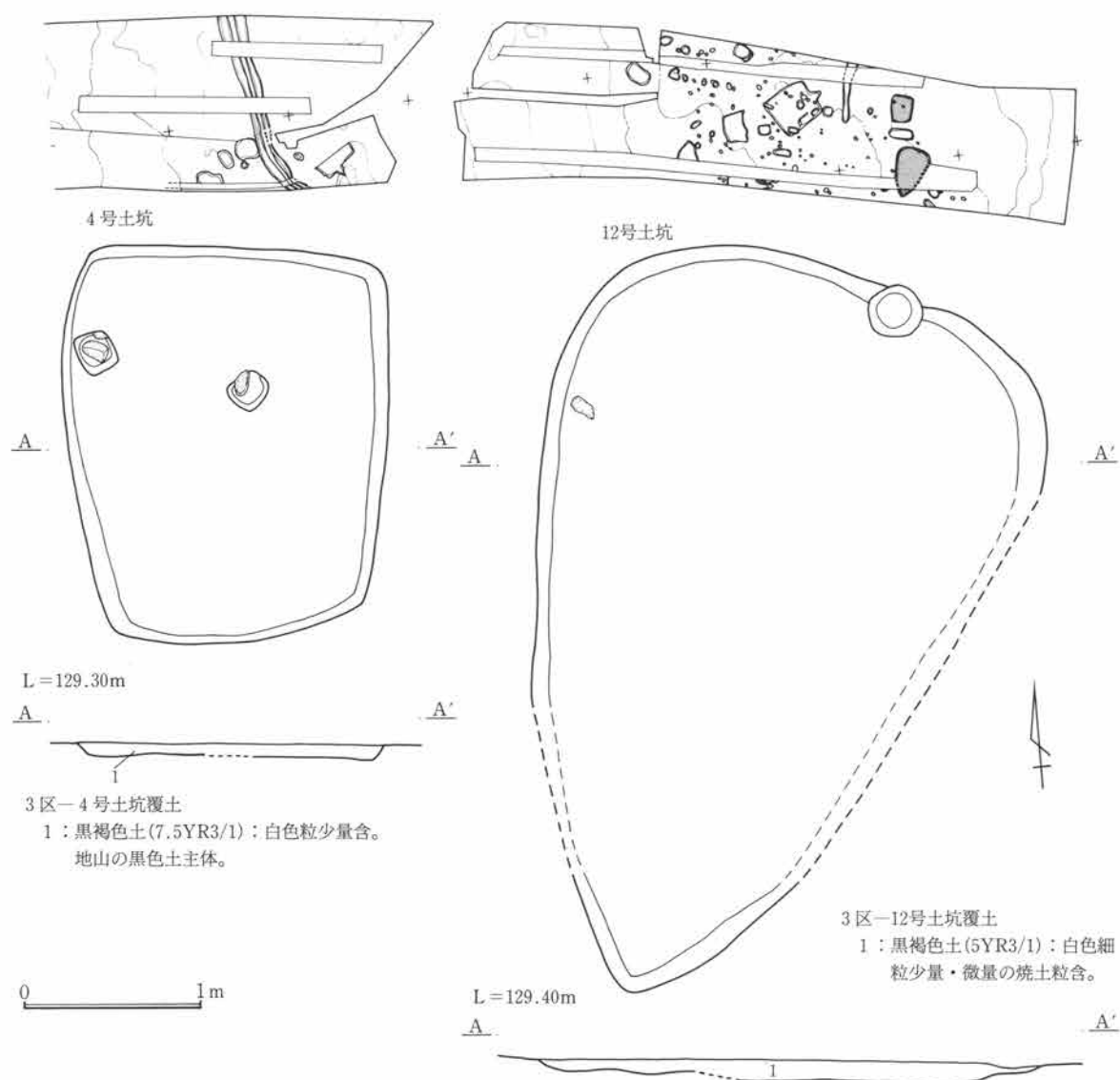
構造 本土坑は基本的には長方形のプランを呈すると思われるが、西半の北壁が張り出して弧を描いている。底部はやや丸底気味である。



3区-1号土坑覆土

- 1：黒色(10YR2/1)：径5mmの小礫・白色細粒・褐色粒多量に、炭化物微量に含。
- 2：黒褐色土(10YR3/1)：白色細粒・褐色粒少量に含。

第165図 3区-1・2号土坑



第166図 3区-4・12号土坑

42 3区-4号土坑 (第166図、図版106)

概要 本土坑は3区-4地区の土坑・ピット群の東端近くに在る浅い掘り方の土坑である。小ピット2基が絡むが本土坑には伴わないものと思われる。

時期・用途などは特定できなかった。

規模 長軸: 330cm 短軸: 273cm 深さ: 12cm

構造 方形のプランを呈し、平底である。

43 3区-12号土坑 (第166図、図版107)

概要 本土坑は3区-4号土坑の南に在り、南半部を試掘トレンチの通る浅いが大型の土坑である。

時期・用途は特定できなかった。

規模 長軸: 592cm 短軸: 424cm 深さ: 11cm

構造 水滴状のプランで、平底に近い。

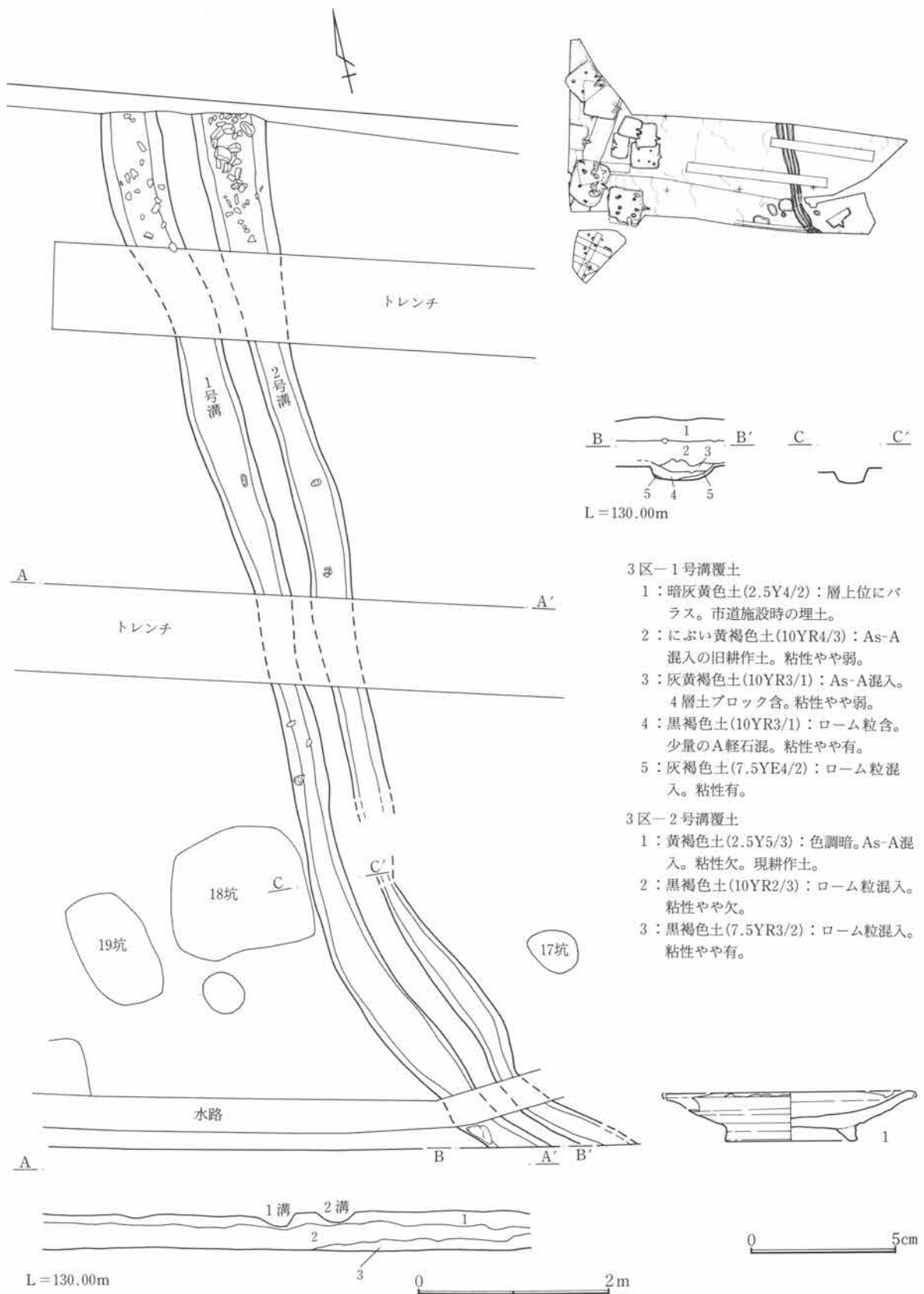
44 3区-1・2号溝 (第167図、図版106・130・133)

概要 3区-1・2号溝は3区-2・5地区に所在するが、平行に走行することから道路遺構に伴うものと考えられる。江戸時代後期以降の所産である。

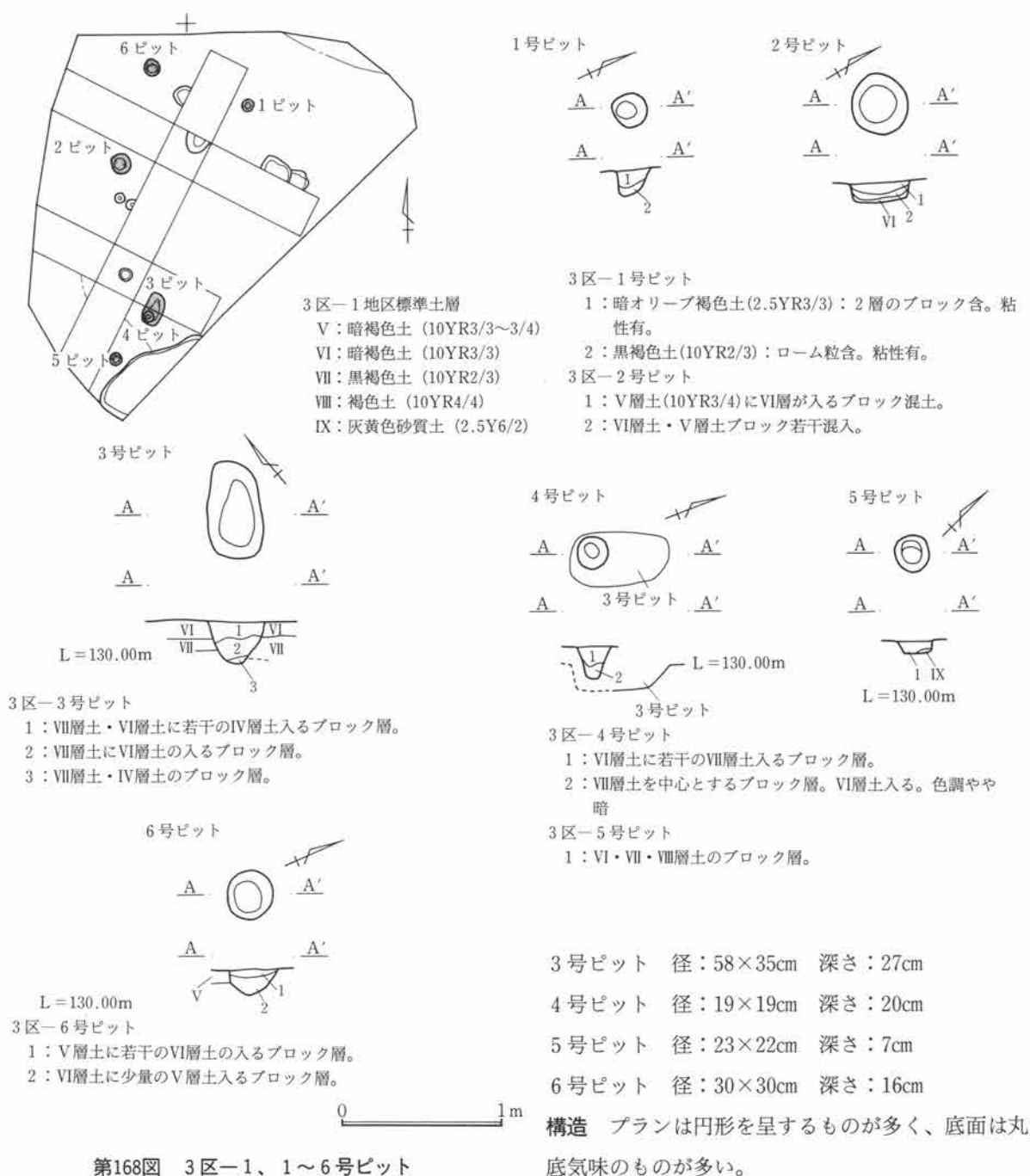
規模 1号溝 幅: 24~41cm 深さ: 18cm

2号溝 幅: 24~46cm 深さ: 15cm

構造 2条の溝は共に30~40cm程度の幅の丸底気味の溝であり、15~24cm程の隔たって走行する。北から入り、調査区の南部で東に走行を変える。



第167図 3区-1・2号溝及び出土遺物



第168図 3区-1、1～6号ピット

45 3区-1地区ピット群(第168図、図版90)

概要 本ピット群は3区-1号地区に発見調査されたもので、12基のピットで構成される。

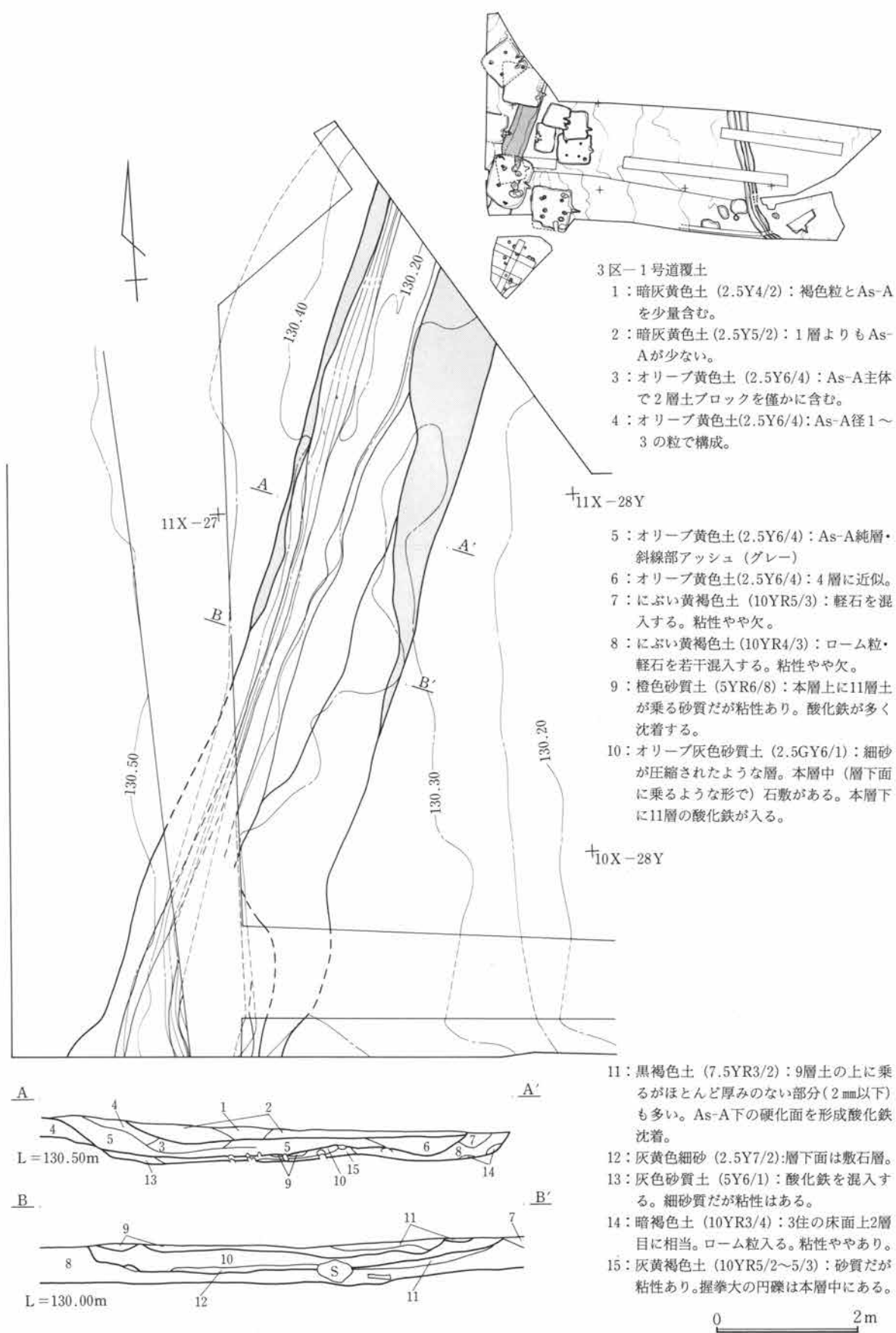
新しいものではないと思われるが時期は特定されず、小型のものは杭が打たれたことが想定されるが、構造物などを想定することもできなかった。

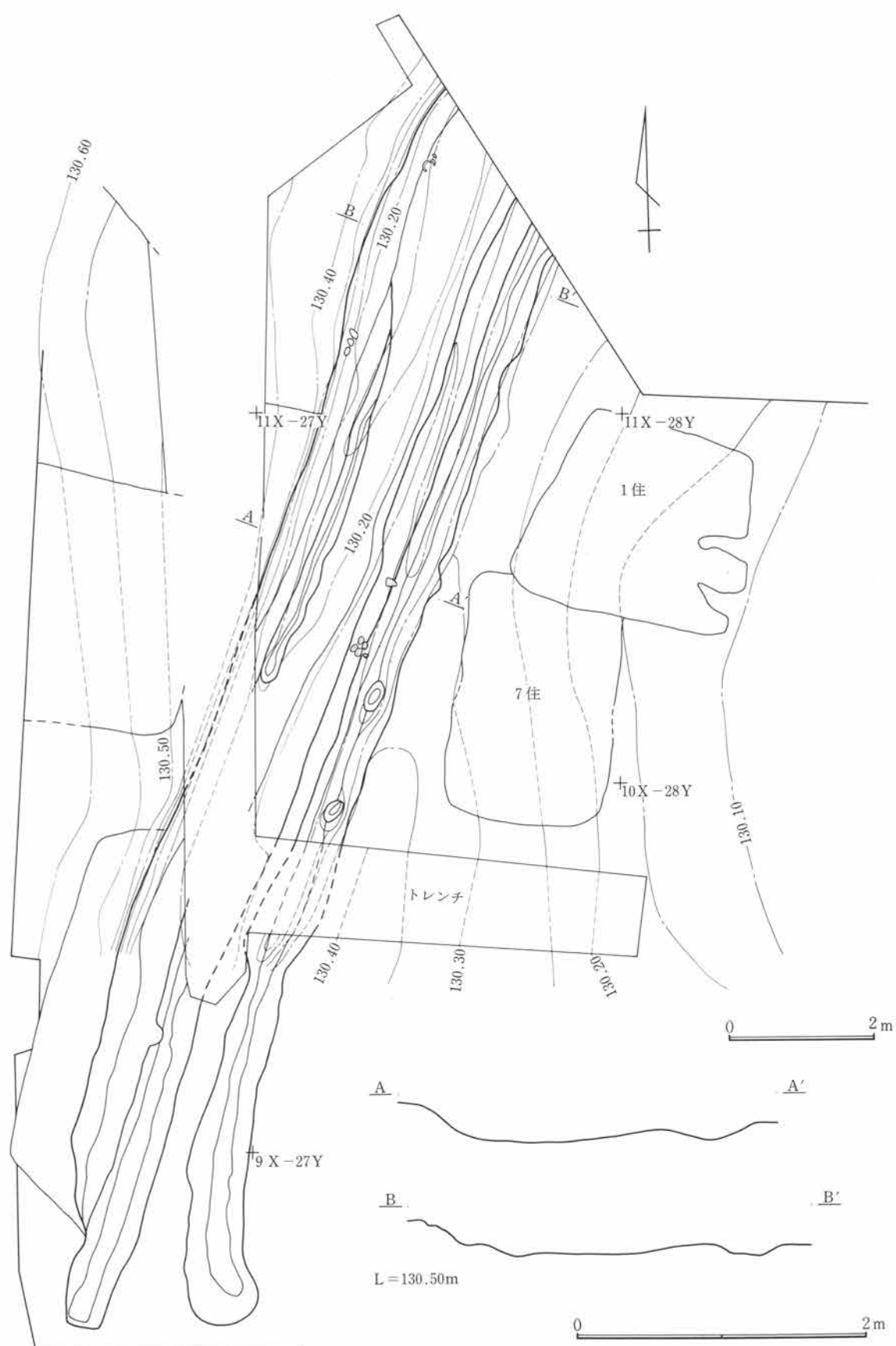
規模 1号ピット 径：21×20cm 深さ：16cm

2号ピット 径：37×35cm 深さ：12cm

46 3区-1号道路(第169～172図、図版104～105・130・133)

概要 本道路は3区の西端近くに位置し、3区-3号住居・3区-8・13号住居に乗っている。本道路は戦前に現在の県道金井・倉賀野停車場線が造られるまでは、北の緑埜地区と西平井地区を結ぶ主要道路の一つであった。約12m程の長さを3面の調査を行い、計4面の道路面が検出された。





第170図 3区-1号道(2面)



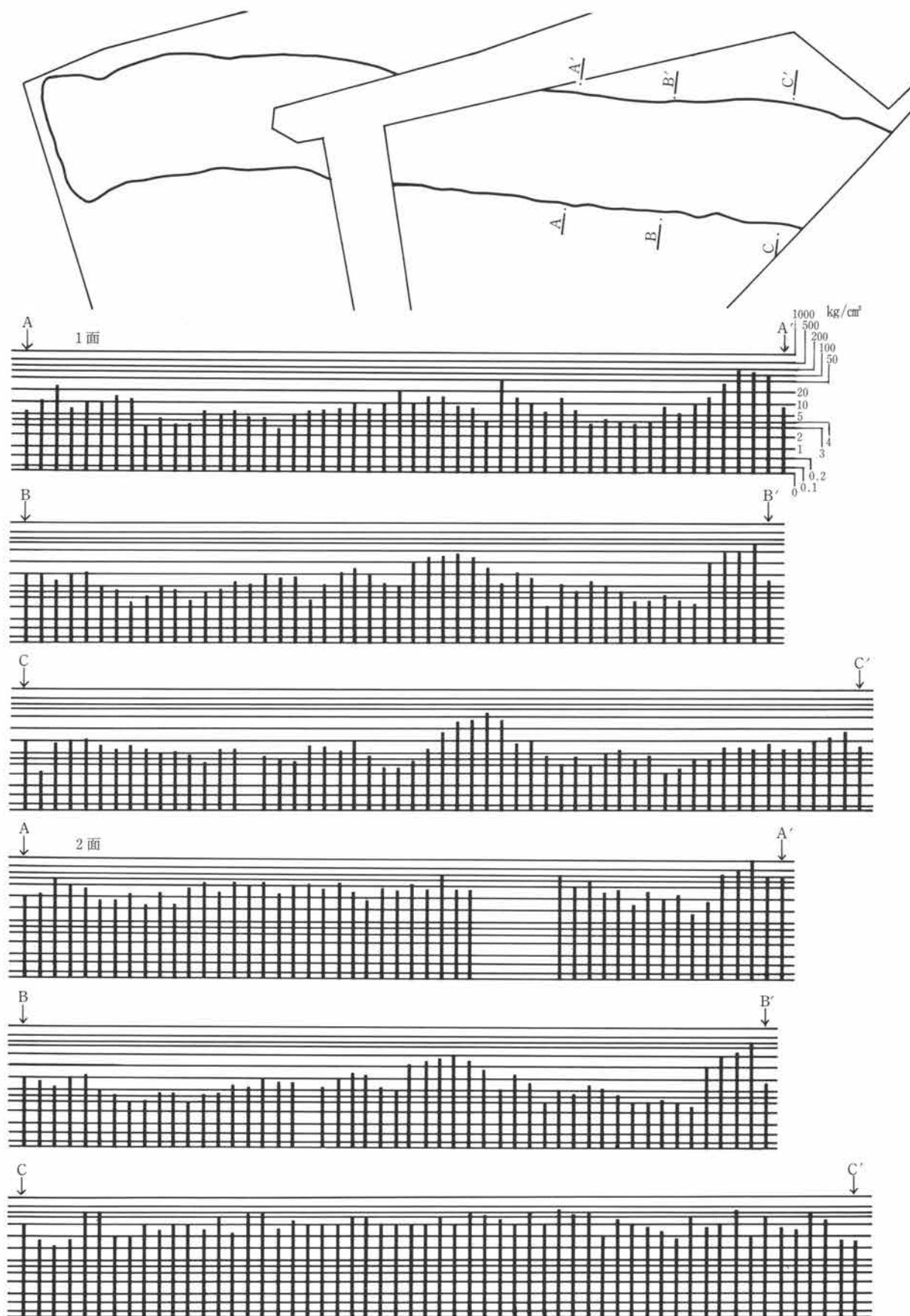
第171図 3区-1号道(3面)出土遺物

る。その西側の一段高い面には近代のものであろう硬化面を確認している。第2面はAs-Aに覆われた道路面で、両側に浅い溝を伴っている。第3面は第2面の硬化面の下に砂質土を挟んで発見された砂利道であった。この道路普請時のものと思われる遺物には18世紀以降のキセルや鉄の棒などがある。

規模 第1面(As-A上面) 幅:110cm 道路幅:90cm
第2面 道路幅:49cm 東側溝 幅:19~50cm 深さ:7cm 西側溝 幅:14~35cm 深さ:4cm
第3面 道路 幅:45cm以下 盛土部幅:30cm

構造 本道路は何れも道路幅は狭いが、第1面(As-A上面)は浅い溝状を呈する。第2面は両側に浅い溝を伴い、僅かに西に傾斜する。第3面は西寄りに細かい礫を敷き詰め、東側には径の大きい礫を並べて土を盛るという普請の跡が見られた。

第1面の中心をなすのはAs-A層の上面に形成された道路面であり、凹んだ硬化面が確認されているが(第169図)、As-A降下後間もなくのものと推定され



第172図 3区-1号道硬度グラフ

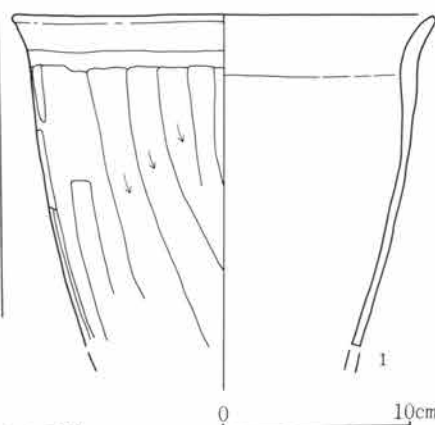
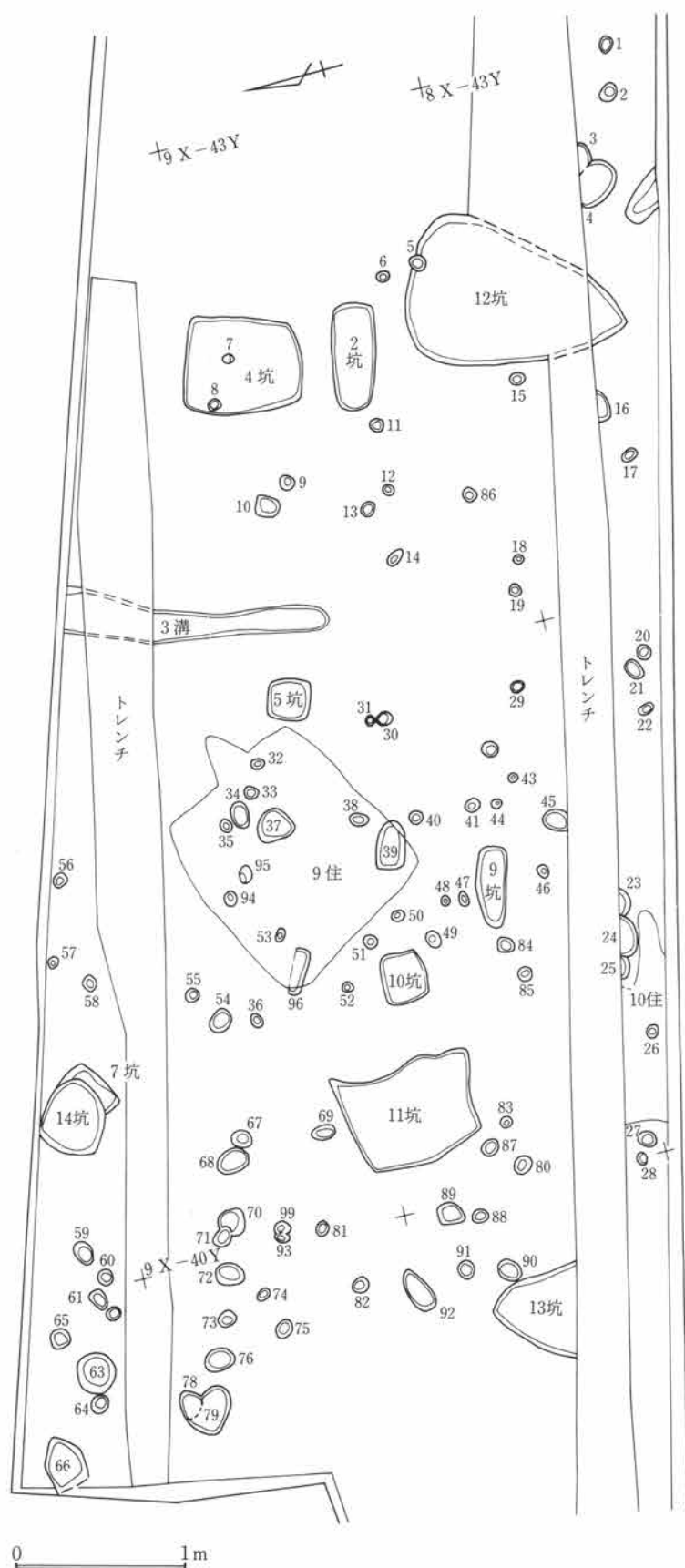
47 3区-4地区土坑・ピット群
(第173図、図版107・108)

概要 先に報告した3区-4・17号土坑を含め、3区-4地区では土坑・ピット合せて109基を発見・調査した。

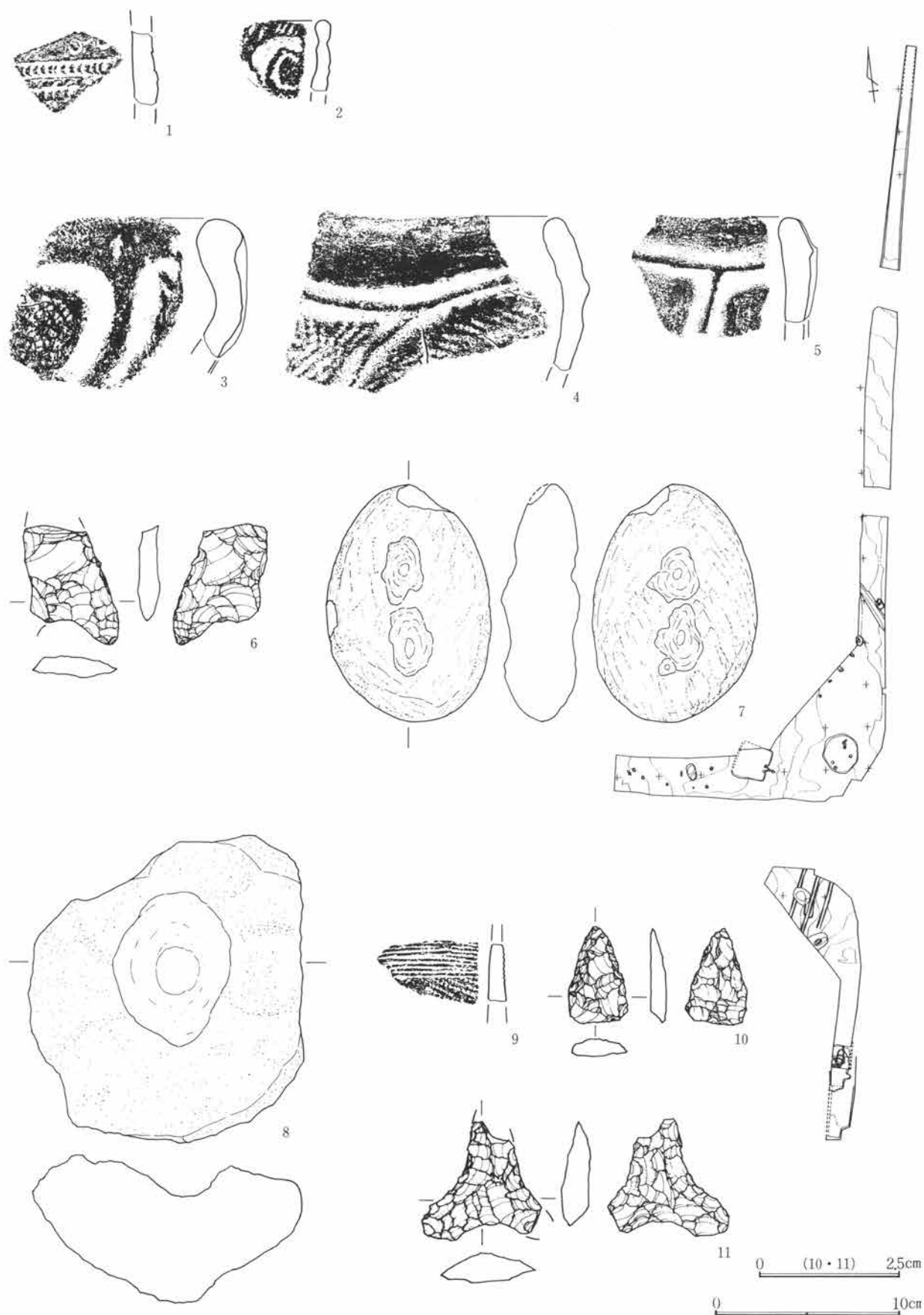
これらの土坑ピットの多くは掘り込みが浅いもので柱穴・杭跡であるものも含まれていると考えられたが、建物等の構造物や柵列に拘わる配列を特定することはできず、用途を特定することもできなかった。また、およそ大型のものは黒褐色系統の粘質土を覆土とするものが多く、As-Bを含まないことから古代の所産とすることができるとされる。小型のピットはAs-Bを含むものが多いことから、およそ中・近世の所産とすることができる。尚、13号土坑と91号ピットは焼土を含んでおり、竪穴住居の存在を想定したが、確認することはできなかった。

規模 (第3表参照)

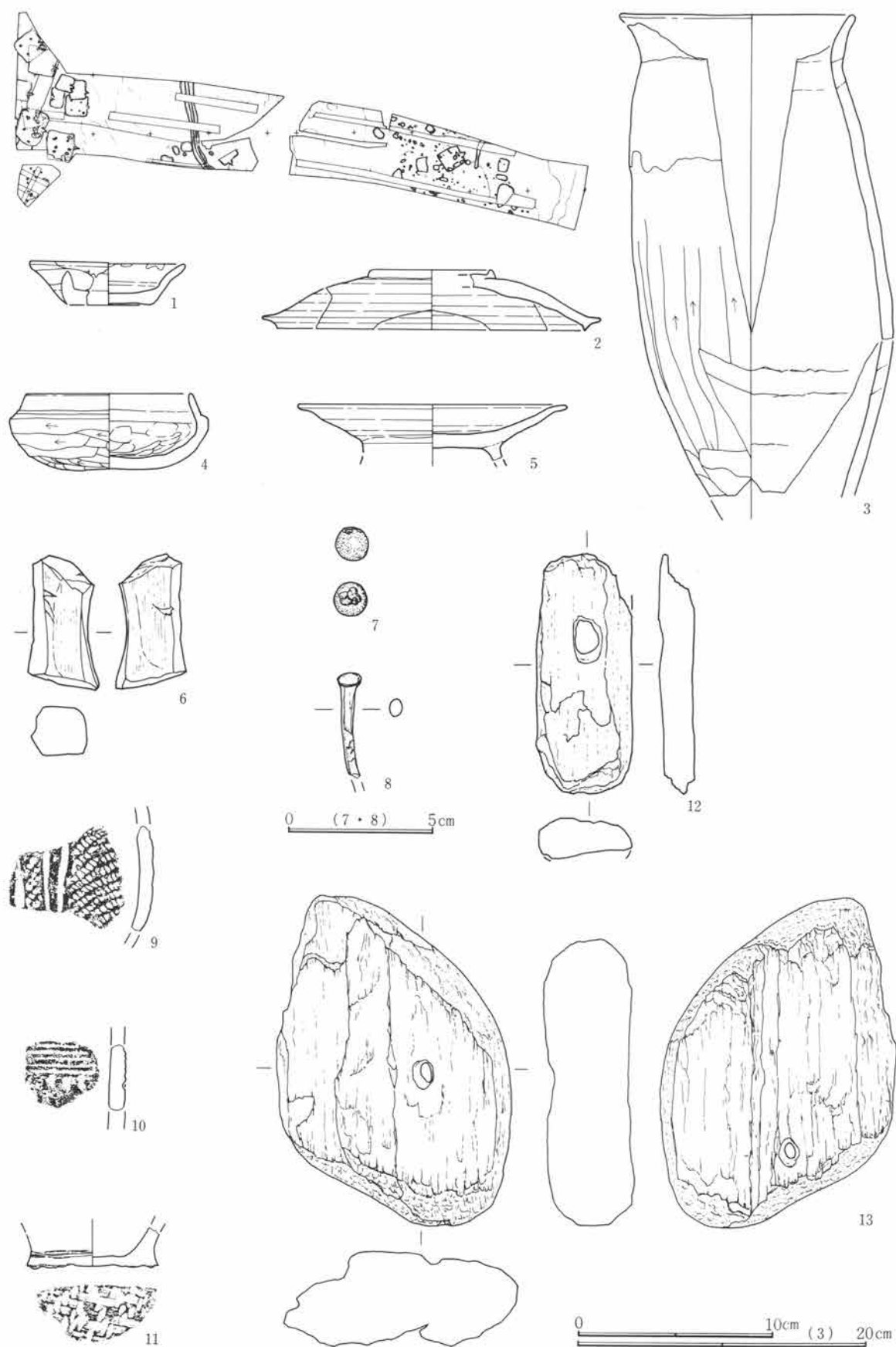
構造 大型のものは方形や隅丸長方形のプランを呈するものが多く、小型のものは円形のプランを呈するものが多い。



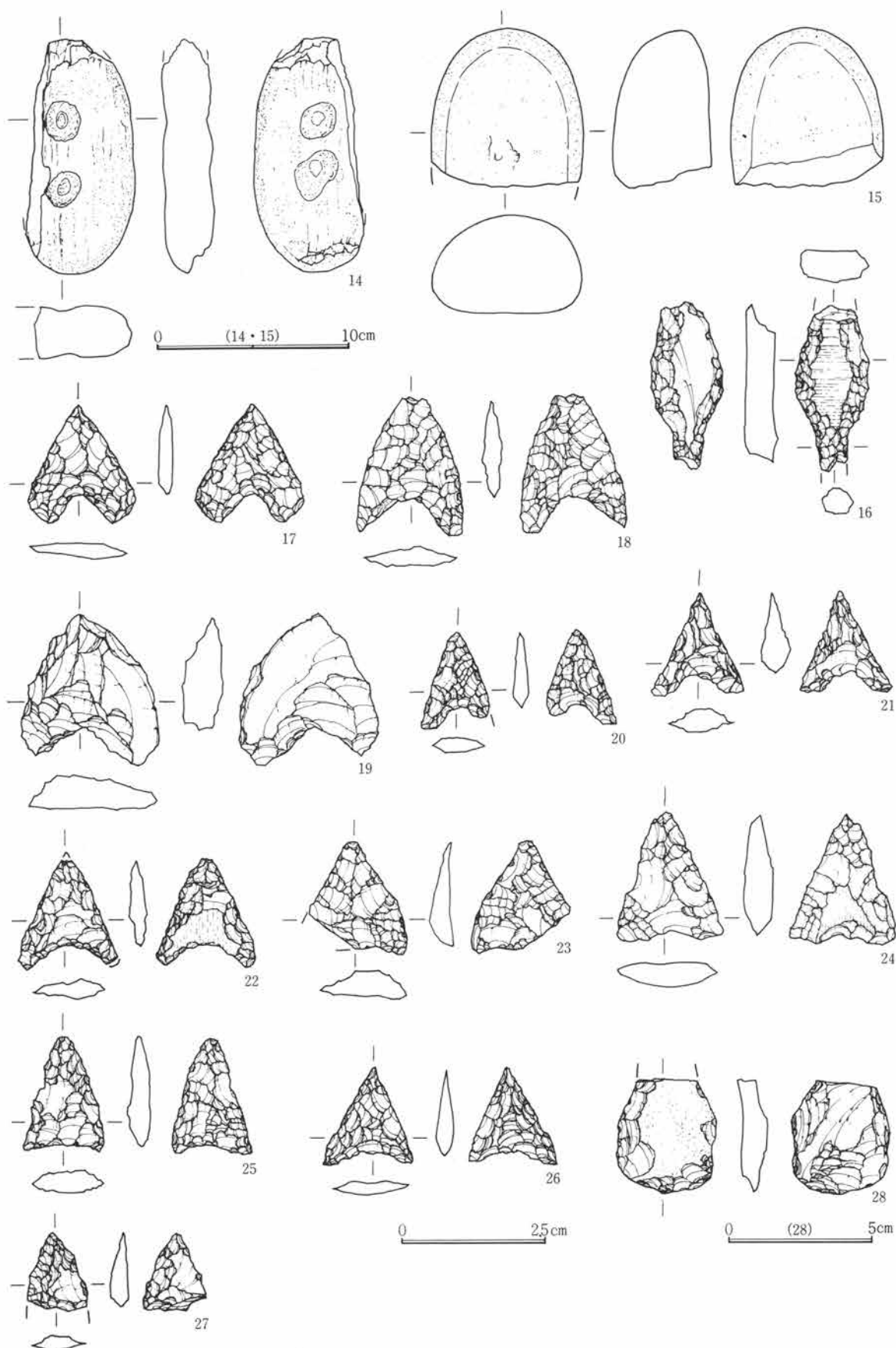
第173図 3区-4ピット群及び14号土坑出土遺物



第174図 1・2区包含層出土遺物



第175図 3区包含層出土遺物(1)



第176図 3区包含層出土遺物(2)

第5節 小 結

本遺跡はこの報告書に掲載した東平井の他の4遺跡に対して、微高地、谷地形、旧河道を示す礫層が交互に入るなど地形的にも細かい起伏が多く、また調査面積は六分の一であるのに対し竪穴住居は倍近い軒数を調査するなど、異なった様相を示している。

遺構・遺物は縄文時代前・中期と古墳時代後期以降のものが各種見られるが、このうち古墳時代後期から平安時代にかけては集落址として把握され、1区-2地区の谷地形西側にある西端の1区-1地区のローム台地、1区-2地区の谷地形と3区-1地区から県道金井・倉賀野停車場線下にかけて想定される谷地形に挟まれた1区-3地区と2区のローム台地、県道下に想定される谷地形の東側に位置する3区-3・5地区、そして本遺跡の東端の平林沢の右岸（西側）の3区-4地区の4カ所に分布域が区分される。中世後葉には平林沢を挟んで平井城の追手筋に対し乍ら、内耳鍋など若干の遺物が僅かに出土しただけで該期の遺構は特定できなかった。

以下、下記の3点について若干を述べ、本遺跡のまとめとしたいと思う。

① 2区-1号住居等出土の一括遺物について

小型の竪穴住居である2区-1号住居及び土坑群である2区-1号落ち込みからは、土師器甕など多量の遺物が出土している。これらの多くは2つの遺構の切り合い関係などから2区-1号住居の一括遺物であろうと判断されるが、出土遺物の中で特徴的だったのは完形・半完形の状態で出土した回転クロ口整形による皿、坏、碗等の遺物である。その数量は完形・半完形のもので皿13以上、坏10以上、碗19以上、鉢1であり、時期としては9世紀後半と判断されるものである。

この一括資料の胎土には鍋川水系の地域に特徴的な片岩質の細礫等が認められたのであるが、本遺跡南西の藤岡市から吉井町に至る丘陵地帯には藤岡・吉井窯址群が広く分布しているので、これらの遺物

はここで生産されたものと思慮される。当該窯址群の個々の窯や当該地域周辺の谷毎の粘土の含有鉱物の特性の把握は充分に行われていないため、将来的研究に資するデータの蓄積等を目的として胎土分析の実施を企画し委託したのである。使用した資料は一括資料中から器種を考慮した上で、出土遺構の別に拘わらず選択した下表の10点である。

資料番号	報告書番号	資料番号	器 種
西平井-1	1住居-1	10-000029	皿
西平井-2	1落込-8	10-000068	皿
西平井-3	1住居-9	10-000036	皿
西平井-4	1落込-3	10-000061	皿
西平井-5	1住居-2	10-000030	坏
西平井-6	1落込-14	10-000063	坏
西平井-7	1落込-13	10-000060	坏
西平井-8	1住居-15	10-000033	坏
西平井-9	1落込-12	10-000073	碗
西平井-10	1住居-19	10-000047	碗

（資料番号は分析委託時の番号）

胎土分析所見は第7部に掲載した報告書の通りであるが、それによればこの10点の遺物の胎土の状態は〔1住-2〕,〔1落-13〕,〔1住-9・15、1落-8〕,〔1住-1・19〕,〔1落-12〕,〔1落-3・14〕の6タイプに区分され、石英と斜長石の相関関係では①グループ〔1住-2・9、1落-3・14〕,②グループ〔1住-15・19、1落-13〕,③グループ〔1住-1、1落-8・12〕の3つのグループに分かれるということである。

前述したようにこれらは鍋川水系の土を使用しているものであり、恐らくは藤岡・吉井窯址群周辺の土を使用したと思われるのであるが、分析所見により少なくとも3～6種類以上の土を素材として使用していることが分かった。一方、3つに分けられたグループについては、①グループの器厚に対し②グループ・③グループは器肉が薄い傾向にあり、③グループに分類されたものは他のグループと異なって口縁部付近で外反気味に口唇を引き出すという整形上の癖があるように見受けられるのである。分析に供した資料が10点と少なく、従って分類されたグループ毎の個体数も少ないので断定はできないが、①・②・

③の各グループは藤岡・吉井窯址群の異なった窯の存在を示しているとも考えられ、今後留意していく必要があるものと思われる。

② 3区—1号道路について

地元の方の話によると3区—1号道路は、昭和11年頃に遺跡を南北に縦断する県道金井・倉賀野停車場線が開通するまでは北の緑埜地区と南の西平井地区を結ぶ道路として使用していたということである。昭和4年の2万5千分の1図⁽¹⁾を見るとこの道路は道幅2m以上(3m未満)の道路として記載され、西平井の集落北端付近のT字路で東平井に向かう道と分岐して北西に向かった後に平林沢を渡り、ここで西方の吉井町多比良へ向かう道路と分岐、更に沢沿いに僅かに東に戻って北に走行を変えている。この渡河点で西に膨らむのはやや不自然であるため、寧ろ多比良に向かう道を起点としてこの道路が設定されたと考えるのである。さて、走行を北に変じた直ぐの当たりが本遺跡で確認した部分に当たるが、道路はやがて現在の平井小学校の西側付近に至って、西平井と緑埜の中間付近で東に折れてから北上し緑埜の集落の東寄りに出る道路が分岐する。さて、この道路は全体として蛇行しており、所謂田圃道を継ぎ合わせたような印象を受けるのである。

明治8年の『緑埜郡村誌』⁽²⁾を見ると、周辺の主要道としては、「秩父往還」或は「秩父道」と呼ばれる道路がある。この道は白石から緑埜を通り鮎川から東平井を経て矢場方面に至る道であるが、道幅2間(3.6m)程と記され、昭和4年の2万5千分の1地形図にも3m以上の道路として記載されている。東平井からはこの道路の通過しない西平井や南の日野方面へ向かう道が分岐し、「秩父道」の通過する緑埜への道路も通っている。「秩父道」から分岐するこれらの道路は昭和4年の2万5千分の1地形図では、何れも幅員2m以上(3m未満)の道路として表記されている。また「秩父道」の通らない西平井からは、隣接する東の東平井、南の金井、北の緑埜に通じる道路があり、西へは丘陵部を隔てて吉井町多比

良へ通じる道路が出ている。西平井は旧緑埜郡に、多比良は旧多胡郡に属するのであり、後者の道路は単に隣接地域を結ぶだけではなく郡域を越える交通路の1つということができる。以上のように東平井・西平井とその周辺地域の道路は、¹⁾「秩父道」、²⁾秩父道の通過する集落から通過しない隣接集落への道路、³⁾郡域を越える道路、⁴⁾それ以外の隣接集落相互の交通路の4種類に分けられる。このうち第1者の「秩父道」は中世に遡ると考えられる2本の推定鎌倉街道が鮎川の集落を境として概ね重複し、中世以来の主要交通路であったことが推定される。基本的にはこの道路と第2者の道路によって旧緑埜郡内の近隣集落との交通路は確保されるのであり、これと第3者の隣接郡との間道によって周辺地域との交通は確保されるのである。

今回調査された3区—1号道路の幅員は最も古い第3面(18世紀)で75cm以下、路面幅45cm以下、浅間山のA軽石(天明3年)で覆われた第2面では側溝を含む道路幅134cm以下、路面幅49cm、A軽石降下後まもなくの第1面で道路幅110cm、路面幅90cm、明治8年段階は道路幅160cm程、そして昭和初年の頃で同じく200cmを越え、浅間山A軽石降下直後に排水性が高まったため側溝の復旧が行われなかった時点で幅員が減少することを除くと、総じて徐々にその道幅を広げていることが分かる。このことはこの道が交通路として整備された後、使用頻度や必要性が徐々に高まったことを示していると思われるのである。3区—1号道には恐らく原型となる農道があったと思われるのであるが、先に報告したように礫を大小に選別し、小さいものを路面に敷き大きいものは道路の東側に集めて土を盛ったものが最初の普請であった。その時期については土盛部から出土したキセルの吸い口から18世紀以降、特に浅間山のA軽石下の第2面との間に間層を持つことからA軽石降下の前、恐らく18世紀中葉以前であろうと推定されるのである。尚、これも道路に伴う側溝と推定されるA軽石降下後の3区—1・2号溝の北側の延長は3区—1号道路の延長線上に乗るため、緑埜からの道

から分岐したものと判断される。その南側は畑の地境を平林沢右岸沿いの小道に至り、平林沢の対岸では地境を通過して西平井の集落を縦貫する道路の北端付近に至るので、或は直線的に西平井の集落に入る道路の普請を企画した可能性が考えらる。

平井城の在る西平井と城下の存在が想定される東平井、及び山内上杉氏被官である多比良氏の居城、新堀城の在る多胡郡多比良を結ぶ道路は中世の名残であろうと推定される。従って西平井と緑埜を結ぶ中世以来の通路は、緑埜を通る主要道路「秩父道」（推定鎌倉街道）を東平井まで行き、東平井から西平井に入る道路であったと想定される。或は丘陵寄り緑埜地区の西側に出る小径がそうであった可能性もあるが、少なくとも西平井（平井城）と緑埜地区を直線的に結ぶ道路は整備されなかったと考えられるのである。それが整備されたのは18世紀に入ってからであり、換言すると18世紀以前の段階では寧ろ3区—1号道路に調査した里道敷設の意義が希薄であったことが窺われるのである。このことは、平井城の北側の地域との交通を阻害する効果を狙ったものとも考えられ、平井城の防御機能と揃めて今後の検討を要するものと思われるのである。

③ 鉄砲玉について

本遺跡に於いては、既に述べたように平林沢を挟んで山内上杉氏の居城である平井城の追手筋に対し乍ら、該期に特定できるような特段の遺構を確認することはできなかった。しかし、平林沢よりの3区—4地区に浅間山噴出のB軽石を含むピット群を調査しているので、これらのピットに該期の遺構の可能性を考慮することができる。但し、これらがどのような構造・性格を持つものかは特定できなかった。一方、遺物としては内耳鍋が僅かに出土する程度で、集落等の存在も確認することはできなかった。

この中で注目されたのは鉄砲玉である。これは3区—4地区の確認面から出土したもので、径などから2匁5分玉と判断された。当該地域は西平井の集落に近く耕作地であったと推定されるので、狩猟に

供されたとは考えにくい。戦国期の鉄砲玉としては2匁5分から4匁のものが中心であると想定される⁽³⁾ので、本遺跡出土の鉄砲玉も戦国期のものと思われる。この鉄砲玉には射撃痕があり、その出土地点は平林沢を挟んで平井城追手に当たるので、平井城内から追手前まで進出した攻城側を攻撃したものと思われる。

当該地域付近で戦闘があったのは天文19年(1550)11月頃の北条氏康の平井城攻略があり、続く天文21年(1552)4月頃の上杉憲政の平井退去に伴う氏康の平井制圧などが考えられるが、天文21年の氏康の出張の際は埼玉県神川村の御獄山城では激しい戦闘が行われているが、寧ろ憲政の平井退去は「御馬廻り衆ノ裏懸（裏切り）」で「取ノケ奉」られたことによるのであり、平井城周辺での組織的抵抗はできなかったと判断されることから、天文19年に行われた攻防戦によると考えるのが適当であると思われるのである。

註

- (1) 国土地理院『藤岡』、陸軍の測量による最も古い1/25,000図
- (2) 群馬県文化事業振興会『上野国郡村誌 7 多野郡』1981 東平井・西平井・緑埜・日野・鮎川村の道路の項
- (3) 佐藤元彦氏の教示による越前一乗谷朝倉遺跡出土の鉄砲玉の径よりの想定。(福井県教育委員会『一乗谷朝倉遺跡 VII』1976)
- (4) 『日叙筆「仁王教科註見聞私」奥書』の記事による。(『群馬県通史編3 中世』1989 552頁)

参考文献

- 山崎 一 『群馬古城址の研究(下巻)』1978
群馬県 『群馬県通史編3 中世』1989

西平井久保田代遺跡遺物一覧

1 1区-1号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第105図 図版109	10-000001	土師器坏 (破片)	口径 推定 10.4 器高 2.4	口縁横ナデ。底部左回転方 向の筥ケズリ。内面ナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい褐色 (7.5YR6/3) ③細砂粒(片岩)
2	第105図 図版109	10-000002	土師器坏 (1/5)	口径 10.6	口縁内傾横ナデ。体部外面 左横方向の筥ケズリ	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③粗砂粒
3	第105図 図版109	10-000003	土師器坏 (破片)	口径 11.1	内面摩耗。口縁やや内傾し 横ナデ。外面筥ケズリ	①酸化焰 ②にぶい赤褐色(5 YR5/4) ③細砂粒(片岩)
4	第105図 図版109	10-000004	土師器坏 (破片)	口径 推定12.0	口縁横ナデ。外面左方向の 筥ケズリ	①酸化焰・普通 ②橙色(2.5 YR6/6) ③細砂粒(片岩)
5	第105図 図版109	10-000005	土師器坏 (破片)	口径 推定13.1 器高 3.0	口縁横ナデ。体部外面左回 転の筥ケズリ。内面ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③細砂粒(片岩)
6	第105図 図版109	20-000001	こもあみ石	長さ 14.4 幅 6.3 厚さ 3.3 重量 450g	両側縁部一方寄りに挟れ有	石材：黒色片岩
7	第105図 図版109	20-000002	こもあみ石	長さ 12.4 幅6.7 厚さ 2.9 重量 410g	片側縁部中央附近にやや大 きく挟れ	石材：雲母石英片岩
8	— 図版112	10-000290	土師器甕 (口縁破片)	残存 6.7×5.1	口縁外反し、ヨコナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5 YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
9	— 図版112	10-000291	須恵器蓋 (蓋部破片)	残存 5.1×4.0	内面中央部指ナデ。外面ヘ ラ調整	①還元焰・硬 ②灰色(10Y 4/1) ③細砂粒(石英)
10	— 図版112	10-000292	土師器甕 (口縁部破片)	残存 6.8×7.2	口縁外反し、口唇に向い器 肉薄くなる	①酸化焰・やや硬 ②にぶい褐 色(7.5YR7/1) ③粗砂粒(片岩)
11	— 図版112	10-000293	土師器甕 (底部破片)	残存 8.2×6.7	内面ユビナデ痕。底面木葉 痕	①酸化焰・普通 ②にぶい橙 色(5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
12	11-000104	土師器坏	3	50g	
13	11-000105	土師器坏	3	10	奈良時代
14	11-000106	土師器坏	2	15	古墳後期
15	11-000107	土師器口縁	38	480	
16	11-000108	土師器底部	8	220	
17	11-000109	土師器甕	135	1000	
18	11-000110	土師器甕	27	1000	取上番号：1, 4, 711, 15, 16, 17, 19, 21, 24, 25, 26, 30, 42

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
19	11-000111	土師器甕	87	1200	
20	11-000112	土師器甕	9	160	カマド
21	11-000113	須恵器椀	11	80	
22	11-000114	須恵器甕	4	20	
23	11-000136	須恵器甕	10	260	

2 1区-2号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第107図 図版109	10-000014	縄文土器深鉢 (口縁～胴部)	器厚 0.5～1.1	内面荒。口唇部に突起。矢 羽状集合沈線。前期諸磯C 式	①やや良②にぶい赤褐色(5YR 5/3) ③細砂粒
2	第107図 図版109	10-000020	縄文土器深鉢 (胴部破片)	器厚 0.6	内面横方向の調整半裁竹管 よる集合沈線 前期諸磯C 式	①良 ②明褐色(7.5YR5/6) ③細砂粒
3	第107図 図版109	10-000015	縄文土器深鉢 (口縁破片)	器厚 1.0	内面横方向調整口唇部に刻 目横位矢羽状沈線 諸磯C 式	①やや良 ②明褐色(7.5YR 5/6) ③中粒砂混入
4	第107図 図版132	10-000017	縄文土器深鉢 (胴部破片)	器厚 0.8	内面横方向調整 横位斜位 の集合沈線 前期後半諸磯 C式	①良 ②褐灰色(10YR4/1) ③細砂粒
5	第107図 図版132	10-000018	縄文土器深鉢 (胴部破片)	器厚 0.8	内面横方向調整 外面縄文 前期黒浜式	①やや良 ②灰褐色(5YR4/2) ③繊維細砂粒
6	第107図 図版132	10-000016	縄文土器深鉢 (胴部破片)	器厚 0.6	内面丁寧な調整縄文式。補 修孔内外面から穿る	①やや良 ②褐色(7.5YR4/4) ③細砂粒
7	第107図 図版110	20-000043	多孔石	長 34.5 幅18.7 厚 8.1 重量 7.7kg	表面に14ヶ所の小孔	石材：黒色片岩

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
8	11-000117	縄文土器	142	960		11	11-000218	縄文土器	13	260	取上番号：1, 2, 4~6, 8
9	11-000142	縄文土器	15	90							
10	11-000143	縄文土器	5	300	取上番号：2, 4, 5, 6, 8~10, 11, 13, 15						

3 1区-3号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第110図 図版109	10-000021	土師器坏 (2/3)	口径 11.8 器高 4.0	器面荒れる。口縁僅かに外傾、横ナデ。頸部稜を持つ	①酸化焰・やや軟 ②明赤褐色(2.5YR5/6) ③粗砂粒(片岩)
2	第110図 図版110	10-000022	土師器蓋 (3/4)	推定口径 18.5 底径 4.1 器高 7.8	頂部木葉痕。端部横ナデ。天井部内面回転ナデ	①酸化焰普通 ②にぶい褐色(7.5R5/4) ③細砂粒(片岩)
3	第110図 図版109	20-000006	石製紡錘車 厚さ 1.8	径 4.5×4.25 厚1.8	上面放射状の研磨	石材：滑石
4	第110図 図版110	10-000023	土師器甕 (2/3)	口径 15.15×15.2 底径 5.0×5.3 器高 19.4	腰部～底部内面荒れる。口縁横ナデ。底部寛ケズリ	①酸化焰普通 ②にぶい黄橙～灰黄褐色(10YR6/4) ③粗砂粒
5	第110図 図版110	10-000024	土師器甕 (2/3)	口径 18.8×17.5 器高 24.0	口縁横ナデ。体部外面上方へ寛削り。内面左方寛ナデ	①酸化焰・やや硬 ②橙色(7.5YR6/4) ③粗砂粒
6	第110図 図版110	10-000025	土師器甕 (完形)	口径 21.2 底径 4.9 器高 36.3	口縁～頸部内横ナデ、外反頸部～腰部外面寛ケズリ	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5YR6/6) ③粗砂粒
7	第110図 図版111	10-000026	土師器甕 (完形)	口径 19.6×20.6 底径 5.2×4.9 器高 39.8	口縁横ナデ。体部上位上方へ、下位下方へ寛ケズリ	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色(7.5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)
8	— 図版112	10-000209	土師器甕 (破片)	底径 残存 4.2×4.0 残存高 6.3	外面下方向寛ケズリ。内面横位の寛ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい褐色(7.5YR5/4) ③粗砂粒
9	— 図版112	10-000210	土師器小型甕 (破片)	底径 残存高 7.3×6.2	全体器面荒れる。口縁～肩部外反する。横ナデ	①酸化焰普通 ②橙色(7.5YR7/6) ③粗砂粒(片岩)
10	— 図版112	10-000211	土師器甕 (破片)	残存 12.9×6.4	外面全体器面荒れる。外面横ナデ肩部右回転寛ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②にぶい黄橙色(10YR7/4) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
11	11-000118	土師器坏	1	5g		14	11-000121	土師器甕	91	900	
12	11-000119	土師器甕口縁	9	140		15	11-000123	土師器	33	40	
13	11-000120	土師器甕	24	360	取上番号：1, 2, 4, 6, 7, 15, 16, 18	16	11-000122	土師器	26	20	取上番号：6

4 1区-2地区遺物包含層

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第111図 図版111	10-000006	土師器甕	口径 18.0 底径 6.4 器高 21.0	胴下位に接合痕、口縁横ナデ外反、腰部外面指ナデ	①酸化焰・やや硬 ②明褐色(7.5YR5/8) ③細砂粒
2	第112図 図版111	10-000007	須恵器坏 (破片)	口径 4.2 底径 3.2	左回転クロコ整形。口縁外傾。腰部膨らむ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい赤褐色(5YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
3	第112図 図版111	10-000008	土師器坏 (破片)	口径 推定14.0	器面特に内面摩耗。口縁外反。内外面横ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
4	第112図 図版111	10-000009	須恵器蓋 (破片)	蓋部上面径 推定13.0	回転クロコ調整。天井部外面右回転方向の寛ケズリ	①還元焰・普通 ②灰白色(5Y7/1) ③細砂粒(片岩)
5	第112図 図版111	10-000010	須恵器蓋 (破片)	径 推定13.2	天井部外面寛調整。返し鏝	①還元焰・硬 ②オリーブ黒色(10Y3/1) ③細砂粒(片岩)
6	第112図 図版111	10-000011	須恵器甕 (口縁～肩部)	口径 24.0	口縁外反し帯湾曲して立つ	①還元焰・やや硬 ②褐灰色(10YR5/1) ③粗砂粒(長石)
7	第112図 図版111	10-000013	軟質陶器把手	残存 6.5×3.3	手づくね。縁部ナデ。下端に沈線。内から外へ穿孔	①還元焰・やや軟 ②褐灰色(5YR4/1) ③細砂粒
8	第112図 図版111	10-000012	平瓦 (破片)	残存 16.8×8.8	凸面ナデ調整。凹面細かい布目	①還元焰・やや軟質 ②橙色(7.5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
9	第112図 図版112	10-000313	陶製砥石 (破片)	長さ 6.0 幅 2.7 厚さ 1.6	甕口縁部を利用。口縁内面・外面・底部側を砥面に使用	①還元焰・やや軟 ②淡黄色(5YR8/3) ③細砂粒
10	第112図 図版132	40-000001	刀子 (破片)	長さ 2.25 幅 3.65 厚0.6	柄部と刃部境目付近のみの破片	

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
11	第113図 図版111	40-000002	刀子 (柄部先端欠損)	長さ 1.15 幅 10.7 厚さ 0.4	刃部長さ約6.6cm。やや細身で刃短い	
12	第113図 図版132	40-000003	鉄片	長さ 3.9 幅 2.85 厚さ 0.15	薄い鉄板片。用途・種別等不詳。	
13	第113図 図版112	40-000004	棒状鉄製品	長さ 3.85 幅 0.9 断面径 0.6×0.7	芯棒を薄い鉄板でラッパ状に巻く。芯棒欠損。用途不詳。	
14	第113図 図版132	40-000007	釘 (端部付近破片)	長さ 2.5 幅 0.45 断面径 0.3×0.35	角釘。	
15	— 図版113	10-000289	須恵器甕 (胴部片)	残存 8.3×7.1	内外面叩目	①還元焰・やや硬 ②灰色(10Y4/1) ③粗砂粒(石英・片岩)
16	— 図版117	10-000236	須恵器 (肩部破片)	残存 3.7×3.2	斜行線文帯2条巡る。下位のものは上下に沈線伴う	①還元焰・普通 ②灰白色(5Y7/2) ③細砂粒
17	— 図版117	10-000239	須恵器 (体部片)	残存 6.4×4.0	外面斜行文帯廻り、その上位2条、下位1条の沈線	①還元焰・やや硬 ②灰オリーブ色(5Y6/2) ③細砂粒(石英)
18	— 図版113	10-000272	陶器撞鉢 (底部片)	残存 5.0×3.4	7条1組の卸し目	①還元焰・軟 ②淡黄色(2.5YR7/3) ③細砂粒(石英)
19	— 図版113	10-000273	平瓦 (破片)	残存 10.0×17.7 厚さ 1.4	凸面ナデ調整。凹面粗い布目。縁部筥調整	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
20	— 図版113	10-000274	須恵器高台付椀 (腰部～高台部)	残存 11.0×10.0 高台径 9.5	右回転クロコ整形。回転糸切。高台貼り付け	①還元焰・やや硬 ②灰色(5Y6/1) ③細砂粒(片岩)
21	— 図版113	10-000275	須恵器高台付椀 (底部～高台部)	器高 残存 1.9 高台径 7.9×8.1	右回転クロコ整形。回転糸切。縁部高台貼付時のナデ	①還元焰・やや軟 ②灰白色(5Y7/1) ③細砂粒(片岩)
22	— 図版112	10-000279	土師器甕 (体部片)	残存 13.0×15.3	体部外面縦位方向筥ケズリ	①酸化焰・やや硬 ②橙色(7.5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
23	— 図版113	10-000285	須恵器蓋鈕 (鈕)	径 4.2	径小さく輪状を呈する	①還元焰・やや軟 ②にぶい黄橙色(10YR7/3) ③細砂粒
24	— 図版113	10-000286	須恵器甕 (口縁部片)	残存 10.8×6.0	口縁外反。端部平らで口唇両端に引き出される	①還元焰・やや硬 ②灰色(5Y5/1) ③細砂粒
25	— 図版113	10-000287	須恵器甕 (頸部片)	残存 7.1×4.2	波状紋	①還元焰・硬 ②灰色(5Y4/1) ③細砂粒
26	— 図版113	10-000288	須恵器蓋 (蓋部片)	残存 10.1×6.3	左回転方向の筥ケズリ。鈕欠損。鈕貼付時のナデ	①還元焰・普通 ②灰色(5Y4/1) ③粗砂粒(片岩)
27	— 図版113	20-	打製石斧 (欠損品)	長さ 残存 14.1 幅 残存 11.1 厚さ 4.0	残存側の長軸縁部と、短軸縁部のうち1カ所に剥離痕	石材：緑泥片岩

第2層群

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
27	11-000081	須恵器椀	8	230	取上番号：7, 9, 117, 148, 197
28	11-000082	須恵器杯	13	260	取上番号：12, 19, 34, 63, 74
29	11-000083	土師器高坏椀	3	140	
30	11-000084	須恵器蓋	5	100	取上番号：25, 26, 27, 35, 42, 50, 51, 63, 64, 69, 100, 128, 131, 133
31	11-000086	須恵器杯	3	400	取上番号：90, 111
32	11-000001	須恵器杯	1	10	
33	11-000002	土師器杯	3	10	
34	11-000003	土師器杯	2	10	
35	11-000004	須恵器坏椀	2	10	
36	11-000005	須恵器坏椀	1	10	
37	11-000008	土師器甕	1	10	
38	11-000011	須恵器杯	5	60	
39	11-000012	須恵器	6	40	
40	11-000006	須恵器口縁	1	10	サブトレンチ
41	11-000007	須恵器	1	10	サブトレンチ

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
42	11-000053	灰釉	1	5	サブトレンチ
43	11-000009	師器	16	60	サブトレンチ
44	11-000010	土師器甕	8	70	サブトレンチ
45	11-000030	土師器坏椀	28	10	
46	11-000043	土師器坏椀	23	140	
47	11-000044	土師器高坏	1	10g	
48	11-000045	須恵器杯	39	240	
49	11-000046	須恵器杯	53	200	
50	11-000047	須恵器底部	48	640	
51	11-000048	須恵器杯	18	80	
52	11-000049	須恵器椀底部	50	600	
53	11-000050	須恵器杯蓋	26	90	
54	11-000051	土師器蓋	1	5	

第3層群

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
55	11-000052	須恵器杯	4	50	
56	11-000054	土師器坏底部	18	180	
57	11-000055	土師器甕口縁	17	130	

第4層群

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
58	11-000056	須恵器甕口縁	10	130	
59	11-000057	土師器甕体部	230	2050	
60	11-000058	土師器甕	112	320	

1号トレンチ

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
61	11-000059	土師器甕底部	16	360	
62	11-000060	土師器	3	10	
63	11-000061	土師器甕	127	510	
64	11-000062	須恵器甕	1	60	
65	11-000063	須恵器	19	180	
66	11-000064	須恵器壺	7	120	
67	11-000065	須恵器甕	112	2620	
68	11-000066	須恵器甕	167	1140	
69	11-000067	須恵器甕	63	1200	

その他

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
70	11-000068	須恵器蓋	47	600	
71	11-000069	須恵器甕	8	40	
72	11-000070	内耳鍋	10	80	
73	11-000071	縄文土器鉢	33	460	
74	11-000072	弥生土器	5	40	
75	11-000073	瓦	8	300	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
76	11-000074	須恵器甕	1	40	
77	11-000075	土器か	7	60	
78	11-000076	土師器碗	2	120g	
79	11-000077	土師器高坏	1	60	
80	11-000078	土師器甕	24	880	
81	11-000079	須恵器甕	38	2100	
82	11-000080	土師器	3	10	
83	11-000085	須恵器甕	2	80	取上番号：127, 128
84	11-000087	須恵器甕	23	800	取上番号：13, 29, 81, 93, 95, 98, 112, 122, 211, 212, 213
85	11-000088	須恵器蓋	3	80	取上番号：51, 125, 127
86	11-000089	弥生土器	1	10g	取上番号：22
87	11-000090	縄文土器	3	40	取上番号：33, 35, 38
88	11-000091	瓦	6	360	取上番号：60, 96, 112, 123, 130, 144
89	11-000102	埴輪	3	110	
90	11-000103	瓦	27	1800	
91	11-000459	陶器	8	90	取上番号：149
92	11-000471	磁器	12	150	
93	11-000475	染付	4	40	

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
94	— 図版112	10-000278	須恵器甕 (口縁破片)	残存 9.0×8.5	口縁外反し、端部平で上方に引き出される	①還元焰・硬 ②灰色(10Y 4/1) ③細砂粒(石英)

5 1区—1号土坑

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	— 図版113	10-000281	須恵器大型甕 (破片)	残存 20.0×11.2	自然釉。内面叩目。	①還元焰・硬 ②灰黄色(2.5Y 7/2) ③粗砂粒(片岩)
2	— 図版113	10-000294	須恵器甕 (破片)	残存 6.2×4.1	自然釉。口縁に凸帯1条とその下位に篋描波状文	①還元焰・硬 ②灰黄色(2.5Y 6/2) ③細砂粒(石英)
3	— 図版113	10-000295	須恵器甕 (口縁～頸部)	残存 4.5×4.3	口縁強く外反。端部平で上下に引き出される。	①還元焰・やや硬 ②黄灰色(2.5Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
4	— 図版113	10-000296	須恵器甕 (口縁～頸部)	残存 7.6×6.9	口縁強く外反。端部やや凹み上下に多少引き出される	①還元焰・硬 ②灰白色(2.5Y 7/1) ③粗砂粒(片岩)
5	— 図版113	10-000297	須恵器大型甕 (頸部片)	残存 10.8×10.5	自然釉。肩部張り、口縁部外反。	①還元焰・硬 ②灰白色(5Y 7/1) ③粗砂粒(片岩)
6	— 図版113	10-000298	須恵器甕 破片 (口縁部片)	残存 8.3×4.2	口縁端部平で下端下方に、上端外方に引き出される。	①酸化焰・普通 ②灰黄褐色(10YR6/2) ③細砂粒(石英)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
7	11-000139	須恵器甕	24	1100g	取上番号：2, 4, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 29, 31, 33, 34

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
8	11-000140	土師器甕	13	100	
9	11-000141	須恵器甕	19	300	

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

6 1区-2号土坑

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第115図 図版112	10-000027	縄文土器深鉢 (口縁部片)	器厚 1.1~1.9	口唇部無文帯、一条の微隆起帯。中期加曾利E4式	①良 ②にぶい黄橙色(10YR 6/3) ③細砂粒
2	第115図 図版112	10-000028	縄文土器深鉢 (胴部片)	器厚 1.1~1.7	外面微隆起帯を垂下させ区画内に縄文。中期加曾利E4式	①良 ②にぶい黄橙色(10YR 6/3) ③細砂粒
3	第116図 図版112	20-000003	打製石斧	長さ 16.8 幅 8.1 厚さ 2.0 重量 340g	分銅型	石材：雲母石英片岩
4	第116図 図版112	20-000004	多孔石	長さ 14.5 幅 8.4 厚さ 6.2 重量835g	現状では片面に一個の凹み。凹み長・短径3cm深さ0.8cm	石材 黒色片岩
5	第116図 図版112	20-000005	くぼみ石	長さ 19.2 幅 13.4 厚さ 5.4 重量2.18kg	両面に7個の凹み。最大の凹みは長3cm短2.5cm深0.9cm	石材 緑色片岩
6	第116図 図版112	20-000042	多孔石	長さ 32.4 幅 19.6 厚 10.2 重量 10.2kg		石材 緑色片岩
7	— 図版112	10-000276	土師器坏 (口縁〜体部)	残存 4.5×2.7	内黒か。口縁横ナデ、やや外傾、口唇部尖る。体部寛削り。	①酸化焰・やや硬 ②にぶい褐色(7.5YR5/4) ③細砂粒(片岩)

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
8	11-000487	縄文土器	4	740g	取上番号：1, 3, 7, 8

7 1区-4号土坑

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
	11-000144	土師器甕	1	5g	

8 1区-7号土坑

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	— 図版112	10-000277	土師器小型甕 (口縁部〜腰部)	残存 8.5×7.3	口縁部短く外反。体部外面縦位の寛削り、内面指ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい褐色(7.5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)
2	— 図版112	10-000280	土師器甕 (腰部〜底部)	底径 6.1 残存高さ 4.5	腰部外面上位方向へのヘラケズリ	①酸化焰・やや硬 ②黒褐色(7.5YR3/2) ③粗砂粒

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000137	縄文土器	8	660g	取上番号：4, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 13

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000138	縄文土器	2	620g	

9 1区-9号土坑 (旧1区-2地区7号土坑)

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000145	土師器	5	20g	
2	11-000146	須恵器甕	3	10	
3	11-000147	土師器	1	5	古墳後期

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000148	土師器	3	40g	取上番号：3
5	11-000149	須恵器蓋	1	20	取上番号：2

10 1区-3号溝

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000133	土師器甕	3	20g	

11 1区-6号溝

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000134	須恵器	2	10g	

12 1区-7号溝

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	— 図版113	10-000283	須恵器甕 (破片)	残存 8.0×4.2	頸部外面波状紋が施してある。内外面自然釉。	①還元焰・硬 ②明赤褐色(5YR5/6)③ 細砂粒
2	— 図版113	10-000284	須恵器甕 (破片)	残存 15.2×7.0 厚さ 0.7	器肉薄い。体部内外叩目	①酸化焰・硬 ②黄灰色(2.5Y5/1) ③細砂粒
3	— 図版113	10-000282	土師器小型甕 (肩部片)	—	—	①酸化焰 ②明赤褐色(5YR5/6) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000135	土師器甕	9	40g	

13 1区-1地区

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1区-1号住居					
1	11-000115	縄文土器	1	10g	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000116	陶磁器	4	20g	
3	11-000458	陶器	4	10	

14 1区-3地区

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
7号溝					
1	11-000150	縄文土器	12	20g	
その他					
2	11-000013	土師器	30	320	坏・甕 他
3	11-000014	須恵器甕	3	60	
4	11-000015	須恵器	9	160	
5	11-000016	内耳鍋	3	10	
6	11-000017	縄文土器	6	100	前期
7	11-000018	縄文土器	29	500	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
8	11-000019	瓦	2	120g	
9	11-000020	瓦(現代)	1	20	
10	11-000021	中世	1	5	
11	11-000124	須恵器坏	1	5	
12	11-000125	縄文土器	1	10	
13	11-000126	陶器	1	5	
14	11-000127	瓦	1	20	
15	11-000460	陶器	6	30	
16	11-000472	磁器	3	20	

15 1区-5地区

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000026	弥生土器	2	20g	
2	11-000027	須恵器甕	1	40	
3	11-000028	縄文土器	1	5	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000023	瓦?	18	100g	
5	11-000024	縄文土器	20	280	
6	11-000025	埴輪	1	20	

16 1区その他

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	— —	10-000237	須恵器甕 (腰部～底部片)	残存 6.7×6.2	底面平。腰部に径9mmの貫通孔	①還元焰・普通 ②灰色(5Y6/1) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000029	瓦	1	5g	
2	11-000092	土師器坏	5	20	
3	11-000093	土師器甕	399	1500	
4	11-000094	須恵器坏碗	80	420	
5	11-000095	須恵器蓋	13	150	
6	11-000096	土師器蓋	3	20	
7	11-000097	須恵器坏甕	135	1900	
8	11-000098	土師器	1	5	一部スラグ付着

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
9	11-000099	弥生土器	3	10	
10	11-000100	縄文土器鉢	19	280	
11	11-000101	内耳鍋	4	80	
12	11-000457	陶器	4	60	
13	11-000464	鉢	1	10	
14	11-000468	軟質陶器	8	110	
15	11-000470	磁器	2	3	
16	11-000480	土師器甕坏	5	20	

17 2区-1号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第121図 図版114	10-000029	須恵器皿 (3/4)	口径13.0×13.3底径5.8 ×5.7 器高2.6×2.15	右回転クロコ整形。口縁外反。回転糸切痕	①酸化焰・硬 ②橙色(7.5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
2	第121図 図版114	10-000030	須恵器坏 (1/4)	口径 推定 12.4 底径 6.4 器高 3.25	右回転クロコ整形。器面荒る。回転糸切り	①還元焰・普通 ②灰褐色(7.5YR6/2) ③細砂粒
3	第121図 図版114	10-000031	須恵器高台付坏 (完形)	口径13.2×13.1 底径 4.8×4.8器高3.7×3.45	右回転クロコ整形。器面荒れる。回転糸切痕	①還元焰 ②にぶい黄橙・灰黄褐色 ③細砂粒(片岩)

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
4	第121図 図版114	10-000032	須恵器 環 (2/3)	口径推定13.0 底径6.3 ×6.5 器高4.35	右回転クロコ整形。体部～ 腰部やや膨らむ。回転糸切	①還元焰・やや硬 ②にぶい黄 色(2.5Y6/4) ③粗砂粒(片岩)
5	第121図 図版114	10-000033	須恵器 環 (3/4)	口径 14.5×14.3 底径 5.9×5.9 器高 4.85	回転クロコ整形。口唇やや 外反。回転糸切。高台欠損	①還元焰・普通 ②灰色(10Y 4/1) ③粗砂粒(片岩)
6	第121図 図版114	10-000034	須恵器 環 (1/2)	口径 推定15.6 底径 5.0 器高 3.2	右回転クロコ整形。回転糸 切痕。口縁外反	①還元焰・普通 ②灰褐色(5 YR5/2) ③粗砂粒(片岩)
7	第121図 図版114	10-000037	須恵器 碗 (3/4)	口径 15.6 底径 6.0 器高 5.4	右回転クロコ整形。器肉や や薄い。回転糸切痕。	①酸化焰・普 ②灰色(5Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
8	第121図 図版114	10-000038	須恵器高台付碗 (3/4)	口径 14.7	(左)回転クロコ整形。口縁 外反。腰部やや膨らむ	①還元焰・普通 ②灰白色(5Y 7/1) ③粗砂粒(片岩)
9	第121図 図版114	10-000036	須恵器高台付皿 (完形)	口径 12.8 底径 6.9 器高 3.0	(左?)回転クロコ整形。器 面かなり荒れる。	①還元焰・やや硬 ②灰オリ ブ色(5Y6/2) ③粗砂粒(片岩)
10	第121図 図版114	10-000035	須恵器高台付環 (3/4)	口径 13.0 底径 6.05 器高 3.6	回転クロコ整形。	①還元焰・やや軟 ②灰オリ ブ色(Y6/2) ③細砂粒(片岩)
11	第121図 図版114	10-000039	須恵器高台付碗 (2/3)	口径 14.1×13.7 底径 6.5 器高 5.95×4.7	右回転クロコ整形。器面荒 れる。一部圧平。口縁外反	①還元焰・普通 ②灰白色(5 Y8/1) ③粗砂粒(長石)
12	第121図 図版114	10-000040	須恵器高台付碗 (完形)	口径 14.2 底径 6.2 器高 5.55	右回転クロコ整形。器面荒 れる。回転糸切痕	①還元焰 ②灰白色 (2.5Y 7/1) ③粗砂粒(長石)
13	第121図 図版114	10-000041	須恵器高台付碗 (完形)	口径 14.6 底径 6.8 器高 5.0×5.9	右回転クロコ整形。回転糸 切後底全面高台貼付時ナデ	①還元焰・普通 ②灰色(5YR 5/1) ③粗砂粒(片岩)
14	第121図 図版114	10-000042	須恵器高台付碗 (4/5)	口径 14.1 底径 6.8 ×6.5 器高 5.6	右回転クロコ整形。回転糸 切後底全面高台貼付時ナデ	①還元焰・普通 ②にぶい黄色 (2.5YR6/3) ③細砂粒(片岩)
15	第121図 図版114	10-000043	須恵器高台付碗 (完形)	口径 13.7×14.0 底径 6.0 器高 4.75	右回転クロコ整形。回転糸 切後高台張付時のナデ。	①還元焰・普通 ②灰オリ ブ色(5Y6/2) ③粗砂粒(片岩)
16	第121図 図版114	10-000044	須恵器高台付碗 (完形)	口径 14.2×15.0 底径 6.4 器高 5.5	右回転クロコ整形。回転糸 切後高台縁部指ナデ	①還元焰・やや硬 ②黄褐色 (2.5Y5/3) ③粗砂粒(片岩)
17	第121図 図版114	10-000045	須恵器高台付碗 (3/4)	口径 推定13.8 底径 3.3 器高 5.4	右回転クロコ整形。口唇外 反。回転糸切。底部内面剝離	①還元焰・やや軟 ②灰オリ ブ色(5Y6/2)③粗砂粒(片岩)
18	第121図 図版114	10-000046	須恵器高台付碗 (3/4)	口径 14.5 底径 6.9 器高 5.6	右回転クロコ整形。回転糸 切後高台縁部の指ナデ	①還元焰・やや硬 ②灰白色 (7.5Y8/1) ③細砂粒(片岩)
19	第121図 図版114	10-000047	須恵器高台付碗 (4/5)	口径推定14.4 底径6.7 ×6.7 器高 5.3×5.6	(右回転?)クロコ整形。器 面やや荒れる。回転糸切。	①還元焰・普通 ②灰黄褐色 (10YR6/2) ③粗砂粒(片岩)
20	第121図 図版114	10-000048	須恵器高台付碗 (完形)	口径推定 14.2 底径 6.6 器高 5.6	右回転クロコ整形。回転糸切 後底全面高台貼付時指ナデ	①還元焰・普通 ②灰白色(5Y 7/1) ③粗砂粒(片岩)
21	第121図 図版114	10-000049	須恵器高台付碗 (坏部)	口径 推定14.6	右回転クロコ整形。口唇外 反。回転糸切。底部内面剝離	①還元焰・やや軟 ②浅黄色 (7.5Y7/3) ③粗砂粒(片岩)
22	第121図 図版115	10-000050	須恵器高台付碗 (ほぼ完形)	口径 13.8 底径 6.0 器高 5.8	右回転クロコ整形。器面荒 れる。回転糸切痕跡	①還元焰・やや軟 ②灰白色(5 Y7/1) ③粗砂粒(長石)
23	第121図 図版115	10-000051	須恵器高台付碗 (ほぼ完形)	口径 13.7×14.7 底径 5.9×6.2 器高 5.4	(左回転)クロコ整形。回転糸 切後底全面高台貼付時ナデ	①還元焰・普通 ②黄灰色(2.5 Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
24	第121図 図版115	10-000052	須恵器高台付碗 (2/3)	口径 推定14.3 底径 推定5.4 器高 5.7	両側からやや圧平。右回転 クロコ整形。底部回転糸切	①還元焰・普通 ②黄灰色(2.5 Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
25	第121図 図版115	10-000053	須恵器高台杯碗 (杯部3/4)	口径 14.6 底径 6.2 器高5.3	左回転クロコ整形。内面荒 れる。回転糸切痕。	①還元焰・普通 ②灰白色(5 Y8/2) ③粗砂粒(片岩)
26	第121図 図版115	10-000054	土師器 小型甕 (1/3)	口径 13.7×13.5 器高 残存6.1	コ字口縁横ナデ。肩部外面 横位篋ケズリ	①酸化焰 ②橙色(7.5YR6/6) ③細砂粒(雲母)
27	第121図 図版115	10-000055	土師器 甕 (底部片)	底径 4.5×3.0 残存高 5.0	内面ナデ調整。面一方向へ の篋ケズリ。底面に糸切痕	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙 色(5YR6/4) ③細砂粒(片岩)
28	第121図 図版115	10-000056	土師器 甕 (破片)	口径 推定20.2 器高 推定12.0	器肉薄。コ字状口縁。体部 外面篋ケズリ	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (5YR7/4) ③細砂粒(片岩)
29	第121図 図版115	10-000057	紡錘車 (1/2)	径 31.5 厚 1.0	器面荒れる。手づくね	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (5YR6/3) ③細砂粒
30	— 図版117	10-000212	須恵器 碗 (口縁部～腰部)	残存 6.0×10.4	回転クロコ整形。直線的に 体部立ち上がる。	①酸化焰・やや硬 ②灰色(5 Y5/1) ③細砂粒
31	— 図版117	10-000213	須恵器 碗 (口縁部～腰部)	残存 9.9×6.2	回転クロコ整形。口縁外反 腰部やや膨らみを持つ	①酸化焰・やや硬 ②浅黄色(5 Y7/3) ③細砂粒
32	— 図版117	10-000214	須恵器 碗 (口縁部片)	[外面] 残存 4.0×2.0 [内面] 残存 3.7×3.7	2個体が重なった状態で残 る。双方共回転クロコ整形	①還元焰・硬 ②灰色(5Y4/1) ③細砂粒(片岩)
33	— 図版117	10-000215	須恵器 皿 (口縁部)	残存 3.2×2.8	回転クロコ整形。かなり開 く	①還元焰・やや硬 ②灰色(7.5 Y5/1) ③細砂粒(片岩)

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
34	— 図版117	10-000216	須恵器甕 (口縁部片)	残存 8.4×8.3	口縁強く外反。口唇端部上下に尖。篋描き波状紋	①酸化焰・硬 ②灰白色(10Y7/1) ③細砂粒(片岩)
35	— 図版117	10-000217	土師器甕 (口縁部～肩部)	残存 4.7×8.3	コ字状口縁。肩部横位のヘラの篋ケズリ	①酸化焰・普通 ②にぶい赤褐色(5YR5/4) ③細砂粒(片岩)
36	— 図版117	10-000218	須恵器高台付碗 (底部片)	残存 6.7×4.5	回転ロクロ整形。回転糸切後高台貼付時のナデ	①還元焰・やや軟 ②にぶい橙黄色(10YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
37	— 図版117	10-000219	土師器蓋 (縁部破片)	残存 3.0×2.7	蓋部直線的。端部下方に引き出される。	①酸化焰・普通 ②にぶい赤褐色(5YR5/3) ③細砂粒(片岩)
38	— 図版117	10-000220	須恵器坏 (底部片)	底径 5.9×5.7	左回転ロクロ整形。回転糸切り痕	①還元焰・普通 ②灰白色(5Y7/1) ③粗砂粒(片岩)
39	— 図版117	10-000221	須恵器坏 (腰部～底部)	残存 8.0×5.8	右回転ロクロ整形。底部回転糸切・指頭・編物圧痕残	①還元焰・やや軟 ②灰白色(5Y7/2) ③粗砂粒(片岩)
40	— 図版117	10-000222	須恵器高台付碗 (腰部～高台部)	残存 4.9×9.4	回転ロクロ整形。高台貼付時のナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい黄色(2.5YR6/3) ③粗砂粒(片岩)
41	— 図版117	10-000223	須恵器坏 (腰部～底部)	残存 7.6×6.5 底径 5.2×5.2	右回転ロクロ整形。回転糸切り痕	①還元焰・普通 ②灰オリーブ色(5Y6/2) ③粗砂粒(片岩)
42	— 図版117	10-000224	須恵器坏 (腰部～底部)	残存 7.5×5.9 底径 5.2	右回転ロクロ整形。回転糸切り痕	①還元焰・やや硬 ②灰色(7.5Y5/1) ③粗砂粒
43	— 図版117	10-000225	須恵器高台付碗 (腰部～高台部)	残存 9.8×8.3 底径 6.5×6.4	回転ロクロ整形。回転糸切後高台貼付時のナデ	①還元焰・やや軟 ②灰白色(7.5Y7/2) ③細砂粒(片岩)
44	— 図版117	10-000226	土師器甕 (体部)	残存 19.4×9.1 厚 1.1	外面に焼土付着。外面篋ケズリ。内面横位の篋ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙褐色(7.5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)
45	— 図版117	10-000227	土師器甕 (体部～腰部)	残存 15.3×12.2	体部外面焼土付着。外面篋ケズリ。内面左への篋ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙褐色(7.5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)
46	— 図版116	10-000228	須恵器碗 (口縁部～体部)	残存 14.8×4.4	口縁部外反する	①還元焰・やや軟 ②浅黄色(2.5Y7/3) ③粗砂粒(片岩)
47	— 図版116	10-000229	須恵器碗 (口縁部～体部)	残存 13.7×2.9	回転ロクロ整形。膨らみを持ち、口縁部外反する	①還元焰・やや軟 ②灰黄色(2.5YR7/3) ③粗砂粒(片岩)
48	— 図版116	10-000230	須恵器碗 (口縁～体部3)	残存 13.7×4.8	回転ロクロ整形。口縁部外反する。	①酸化焰・普通 ②灰褐色(7.5YR5/2) ③細砂粒(片岩)
49	— 図版116	10-000231	須恵器碗 (口縁部～体部)	残存 15.5×3.4	回転ロクロ整形。口縁部外反。	①還元焰・普通 ②黄灰色(2.5Y4/1) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
50	11-000128	須恵器坏碗	45	240g	
51	11-000129	須恵器坏	2	10	取上番号：3,9
52	11-000130	須恵器坏碗	274	1560	
53	11-000131	土師器甕	204	1340	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
54	11-000132	須恵器甕	21	940g	
55	11-000163	土師器甕	10	20	
56	11-000164	須恵器高坏	1	5	

18 2区-1号落ち込み

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第122図 図版115	10-000058	須恵器高台付皿 (完形)	口径 13.1×13.4 底径 5.7 器高 3.6×2.8	右回転ロクロ整形。回転糸切後指ナデ	①還元焰・やや硬 ②浅黄色(5Y7/3) ③細砂粒(片岩)
2	第122図 図版115	10-000059	須恵器高台付皿 (2/3)	口径 13.7 底径 推定 5.3 器高 推定3.4	左回転ロクロ整形。回転糸切。高台欠損	①還元焰・普通 ②橙色(7.5YR6/6) ③細砂粒(片岩)
3	第122図 図版115	10-000061	須恵器高台付皿 (1/3)	口径 13.5 底径 6.5 ×6.5 器高 3.5	右回転ロクロ整形。回転糸切後高台貼付時底全面ナデ	①還元焰・やや硬 ②灰色(10Y5/1) ③細砂粒(片岩)
4	第122図 図版115	10-000062	須恵器高台付皿 (完形)	口径 13.4 底径 6.1 器高 3.7	(右回転)ロクロ整形。両側若干圧平。付高台	①還元焰・普通 ②灰白色(5Y7/1) ③粗砂粒(片岩)
5	第122図 図版115	10-000064	須恵器高台付皿 (完形)	口径 14.2×13.8 底径 5.8×6.0 器高 3.5	左回転ロクロ整形。回転糸切痕。高台に棒状圧痕あり	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙褐色(7.5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)
6	第122図 図版115	10-000065	須恵器高台付皿 (完形)	口径 14.4 底径 5.5 器高 3.6	左回転ロクロ整形。回転糸切り後指ナデ	①酸化焰・やや硬 ②橙色(5YR6/6) ③細砂粒(片岩)
7	第122図 図版115	10-000067	須恵器高台付皿 (3/4)	口径 13.8 底径 5.4 器高 2.8	回転ロクロ整形。回転糸切後底全面高台張付時指ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい褐色(7.5YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
8	第122図 図版115	10-000068	須恵器高台付皿 (1/2)	口径 14.4 底径 5.6 ×5.6 器高3.4	回転ロクロ整形。回転糸切後一部高台貼付時の指ナデ	①酸化焰・やや硬 ②灰オリーブ色(5Y5/2) ③粗砂粒(片岩)
9	第122図 図版116	10-000072	須恵器高台付皿 (1/3)	口径 14.6 底径 5.4 器高 3.2	左回転ロクロ整形。回転糸切後高台貼付時の指ナデ	①還元焰 ②橙色(5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
10	第122図 図版115	10-000070	須恵器高台付皿 (完形)	口径 13.6 底径 6.7 器高 3.3	回転ロクロ整形。回転糸切 後縁部高台貼付時のナデ	①還元焰・硬 ②黄灰色(2.5 Y5/1) ③細砂粒(片岩)
11	第122図 図版116	10-000069	須恵器高台付椀 (1/2)	口径 14.0×14.1 器高 4.0	右回転ロクロ整形。器面荒 る。高台欠損。	①還元焰・普通 ②灰白色(5 Y7/1) ③粗砂粒(片岩)
12	第122図 図版116	10-000073	須恵器高台付椀 (4/5)	口径 14.8×14.5 底径 7.0 器高 5.4	左回転ロクロ整形。器面荒 る。回転糸切。付け高台	①還元焰・普通 ②明黄褐色 (10YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
13	第122図 図版116	10-000060	須恵器坏 (3/4)	口径 13.2 底径 5.7 器高 4.2	右回転ロクロ整形。回転糸 切痕	①還元焰・やや硬 ②灰白色(5 R7/1) ③片岩
14	第122図 図版116	10-000063	須恵器坏 (1/3)	口径 推定12.7 底径 5.4×5.2 器高4.0	右回転ロクロ整形。回転糸 切痕	①還元焰・やや硬 ②灰色(N 5/) ③細砂粒(片岩)
15	第122図 図版116	10-000066	須恵器坏 (1/2)	口径 推定12.4 底径 5.6 器高 3.9	右回転ロクロ整形。回転糸 切痕	①還元焰・普通 ②灰色(5Y 6/1) ③粗砂粒(片岩)
16	第122図 図版116	10-000071	須恵器鉢 (1/2)	口径 23.8 底径 12.5 器高 8.15	右回転ロクロ整形。回転糸 切り後寛ケズリ	①還元焰・やや硬 ②灰白色 (2.5Y8/2) ③粗砂粒(片岩)
17	第122図 図版116	10-000074	土師器甕 (破片)	口径 19.5	コ字状口縁。外面荒れる。 体部内面寛ナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい赤褐 色(5YR5/4) ③細砂粒
18	第122図 図版116	40-000005	鉄釘	長さ 推定9.8 幅 0.85 太さ 0.5×0.4	角釘	時期は特定できない
19	— 図版117	10-000232	須恵器碗 (口縁部～体部)	残存 7.1×3.5	回転ロクロ整形。口縁部外 反	①還元焰・やや軟 ②にぶい黄 色(2.5Y6/3) ③細砂粒(片岩)
20	— 図版117	10-000233	須恵器 (口縁部～頸部)	残存 4.0×3.0	口縁外反し、端部凹んで上 方へ引き出される。	①還元焰・硬 ②灰色(5Y4/1) ③細砂粒(片岩)
21	— 図版117	10-000234	須恵器甕 (口縁部～頸部)	残存 11.5×5.0	口端部平で凹線1条廻る。 頸部に篋描き波状文	①酸化焰・やや硬 ②灰オリ ブ色(5Y4/2) ③細砂粒(石英)
22	— 図版117	10-000238	須恵器坏 (底部片)	残存 6.9×5.0	(左?)回転ロクロ整形。回 転糸切後ナデ調整。	①還元焰・やや軟 ②灰オリ ブ色(5Y6/2) ③細砂粒(片岩)
23	— 図版117	10-000240	須恵器高台付椀 (底部～高台部)	残存 7.0×6.5 高台径 6.6×6.5	(左?)回転ロクロ整形。回 転糸切後高台貼付時のナデ	①還元焰・やや軟 ②浅黄色(5 Y7/3) ③細砂粒(片岩)
24	— 図版117	10-000241	土師器甕 (口縁部～頸部)	残存 6.3×6.1	手づくね様の成形。頸部外 面下方への篋調整あり。	①酸化焰 ②橙色(5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
25	— 図版117	10-000242	土師器甕 (口縁部～体部)	残存 10.3×9.2	コ字状口縁。体部外面横位 の篋削、内面横位の篋ナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい橙 色(5YR6/4) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
26	11-000170	土師器坏碗	132	820g	
27	11-000171	土師器甕	203	1200	
28	11-000172	須恵器碗	11	90	
29	11-000173	須恵器坏	13	530	取上番号:1,2, 3,6,13,14,22, 24,26,38,39,40
30	11-000174	須恵器坏碗	571	2220	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
31	11-000175	須恵器蓋	2	5g	
32	11-000176	須恵器坏底部	80	1420	
33	11-000177	須恵器高台	51	400	
34	11-000178	須恵器坏碗	415	1200	
35	11-000179	須恵器甕	41	1200	取上番号:28,29
36	11-000180	縄文土器	33	220	

19 2区-2号土坑

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	11-000169	縄文土器	2	5g	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000488	縄文土器	3	90	

20 2区その他

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
2区-1号落ち込み						
1	第126図 図版116	20-000007	石製サイコロ (完形)	長さ 1.85 幅 1.9 厚さ 1.85 重量 13g	立方体をなし半球形に目を 掘り込む	石材:珪質変質岩 時期不明
2	第126図 図版132	40-000014	鎌 (1/2)	長さ 10.9 幅 2.5 厚さ 0.7	刃部過半欠損	
3	第126図 図版132	40-000006	鉄器 (破片)	長さ 2.4 幅 4.8 厚さ 0.4	—	時期・用途不祥

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
溝						15	11-000160	土師器高坏脚	1	180g	
4	11-000167	土師器	1	5g		16	11-000161	須恵器甕	43	480	
5	11-000168	縄文土器	1	10		17	11-000162	弥生土器	1	5	
そ の 他						18	11-000448	陶器	13	95	
6	11-000151	土師器坏	9	60	サブトレンチ	19	11-000449	播鉢	2	20	
7	11-000152	土師器甕	48	220	サブトレンチ	20	11-000450	天目	5	10	
8	11-000153	須恵器坏	20	40	サブトレンチ	21	11-000451	火鉢	1	10	
9	11-000154	須恵器甕	14	180	サブトレンチ	22	11-000452	染付	14	40	
10	11-000155	縄文土器	6	20	サブトレンチ	23	11-000453	磁器	7	10	
11	11-000156	土師器甕片	141	460		24	11-000454	青・白磁	2	5	
12	11-000157	土師器坏碗	7	20		25	11-000455	磁器 (印版)	4	5	
13	11-000158	須恵器坏碗	2	5		26	11-000456	現代播鉢	1	30	
14	11-000159	縄文土器	18	140							

21 3区-1号住居

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第129図 図版118	10-000076	土師器坏 (破片)	口径 推定11.0 器高 推定3.05	口縁直立横ナデ。肩部～体部 寛ケズリ	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5YR 6/6) ③細砂粒(長石(片岩?))
2	第129図 図版118	10-000077	土師器坏 (破片)	口径 推定11.0 器高 3.8	口縁横ナデ。体～底部外面 寛ケズリ、底部内面寛ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③細砂粒(雲母)
3	第129図 図版118	10-000078	土師器坏 (3/5)	口径 推定13.9 器高 3.3	器面荒れる。口縁横ナデ。 体部～底部外面寛ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②橙色 (5YR6/6) ③細砂粒(雲母)
4	第129図 図版118	10-000079	土師器甕 (破片)	口径 推定14.2 器高 残存16.0	口縁外反し横ナデ。頸部～体 部外面上方への寛ケズリ	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5YR 7/6) ③粗砂粒(片岩・長石)
5	第129図 図版118	10-000080	土師器甕 (破片)	口径 推定17.4	体部外面下方への寛削り、 内面左方への寛ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5 YR6/8) ③粗砂粒(片岩)
6	— 図版132	10-000243	土師器甕 (口縁部～体部)	残存 6.6×13.2	口縁短く外傾。体部外面上 へ寛削り、内面左へ寛ナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (7.5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
7	11-000481	土師器坏	8	20g	取上番号：6	8	11-000482	土師器甕	28	260g	
9	11-000483	須恵器坏	1	2g							

22 3区-2号住居

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第131図 図版118	10-000081	土師器坏 (破片)	口径 推定11.0	口縁横ナデ。頸部に陵。体 部外面左方への寛ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②橙色(7.5 YR6/6) ③細砂粒(片岩)
2	第131図 図版118	10-000082	土師器坏 (3/4)	口径 11.6 器高 4.3	口縁やや外反。頸部陵有り (2段)。底部やや丸底	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/8) ③粗砂粒(片岩)
3	第131図 図版118	10-000083	土師器坏 (1/2)	口径 推定16.9 器高 5.3	内面は当初内黒か。口縁多 少内湾する。粒(片岩)	①酸化焰・やや軟 ②黒褐色 (10YR2/2) ③粗砂粒(片岩)
4	第131図 図版118	10-000084	須恵器蓋 (破片)	鈕径 4.1	蓋部左回転方向の寛ケズ リ。鈕貼付時の指ナデ	①還元焰・やや硬 ②灰色(5Y 5/1) ③粗砂粒(片岩)
5	第131図 図版118	10-000085	土師器小型鉢 (1/2)	口径 推定13.2 底径 5.6 器高 推定8.4	器面荒れる。口縁部横ナデ 体部外面上方への寛ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙 色(5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)
6	第132図 図版118	20-000008	こもあみ石	長さ 17.5 幅 8.5 厚さ 3.9 重量 880g	側面中央に凹部造られる	石材：黒色片岩
7	第132図 図版118	20-000009	こもあみ石	長さ 15.3 幅 6.7 厚さ 4.1 重量 600g	側面中央より偏った位置に 凹部造られる	石材：黒色片岩
8	第132図 図版118	20-000010	こもあみ石	長さ 14.4 幅 6.0 厚さ 3.5 重量 440g	上面及び端部一面を砥石と して使用の痕跡あり	石材：黒色片岩
9	第132図 図版119	20-000011	こもあみ石	長さ 15.3 幅 7.7 厚さ 5.1 重量 945g	側面中央に凹部造られる。	石材：黒色片岩。表裏で割れ たそれぞれを単体として使用
10	第132図 図版119	20-000012 (-001,002)	こもあみ石	長さ 14.8 幅 8.8 厚さ 3.1 重量 680g	側面中央に小さい抉り込み	石材：雲母石英片岩
11	第132図 図版119	20-000013	こもあみ石	長さ 19.0 幅 6.9 厚さ 4.3 重量 800g	側面中央部広く平滑面造ら れる	石材：黒色片岩
12	第132図 図版119	20-000014	こもあみ石	長さ 18.8 幅 6.8 厚さ 4.3 重量 780g	側面中央部寄りに凹面造ら れる	石材：黒色片岩

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測定値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備考 ①焼成 ②色調 ③胎土
13	第132図 図版119	20-000015	こもあみ石	長さ 15.8 幅8.5 厚さ 4.2 重量770g	側面中央に小さい抉り込み	石材：黒色片岩
14	— 図版132	10-000244	土師器甕 (体部片)	残存 17.5×18.9	外面縦位の篋削り。内面横 位のナデ調整	①酸化焰・やや硬 ②にぶい黄 褐色(10YR5/4) ③粗砂粒
15	— 図版132	10-000245	土師器坏 (口縁部～底部)	残存 5.0×4.7	器肉薄く、器面風化。体部丸 味もち口縁部外傾気味に立。	①酸化焰・軟 ②橙色(5YR 7/6) ③細砂粒
16	— 図版132	10-000246	須恵器高台付碗 (底部～高台)	高台径 6.6×(6.7)	右回転クロコ整形。回転糸 切後高台貼り付時のナデ	①還元焰・やや軟 ②灰白色 (2.5Y8/1) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
17	11-000211	土師器	182	1340g		25	11-000224	土師器甕	274	1880g	
18	11-000212	土師器甕	7	160	取上番号：2,7, 15,16,26,49	26	11-000225	須恵器碗	14	150	
19	11-000214	須恵器碗	51	300		27	11-000226	須恵器甕	40	980	
20	11-000219	土師器	11	80	古墳時代後期	28	11-000230	土師器甕	126	460	
21	11-000220	土師器坏	3	20	取上番号：1,6,11	29	11-000231	土師器甕	3	80	取上番号：10,76
22	11-000221	土師器碗	1	5		30	11-000232	須恵器甕	5	40	
23	11-000222	土師器甕	2	100	取上番号：6,12	31	11-000229	土師器甕	4	20	カマド
24	11-000223	土師器鉢	1	5		32	11-000236	土師器甕	25	180	貯蔵穴
						33	11-000210	土師器坏	8	20	奈良時代

23 3区—3号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測定値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第135図 図版119	10-000086	須恵器坏 (1/2)	口径 推定16.0 底径 4.3	底面左回転篋ケズリ、中央 篋ナデ	①還元焰・普通 ②灰白色(5Y 8/1) ③細砂粒(片岩)
2	第135図 図版119	10-000087	土師器小型台付甕 (3/4)	口径 推定11.8 器高 17.5	コ字状に近い。肩部横位、 体部右斜下への篋ケズリ	①酸化焰・普通 ②にぶい赤褐 色(5YR5/3) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
3	11-000239	土師器坏	20	60g		6	11-000242	土師器甕	6	80g	取上番号：1, 11,23,27
4	11-000240	土師器坏甕	85	420		7	11-000243	須恵器甕	1	120	取上番号：17
5	11-000241	土師器甕	2	110	取上番号：24,27						

24 3区—4号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測定値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第138図 図版119	10-000088	土師器甕 (完形)	口径 15.9 器高 27.5	体部外面上方への篋削り、 内面左方への篋ナデ	①酸化焰・やや軟 ②明褐色 (7.5YR5/6) ③粗砂粒(片岩)
2	第138図 図版119	10-000089	土師器甕 (体部～底部)	底径 6.5 器高 25.0	体部外面篋ケズリ、内面篋 ナデ。底部外面木葉痕	①酸化焰・やや軟 ②橙色(7.5 YR6/6) ③粗砂粒
3	第138図 図版119	20-000016	こもあみ石	長さ 15.9 幅 5.9 厚さ 3.7 重量470g	両側縁部中央に凹部造る	石材：黒色片岩
4	第138図 図版119	40-000015	鎌 (1/3)	長さ 2.8 幅 5.8 厚さ 0.4	刃部欠損	木部(柄)残る
5	— 図版132	10-000247	土師器小型甕 (底部片)	残存 4.6×2.5	底面に網代痕	①酸化焰・やや軟 ②橙色(7.5 YR7/8) ③細砂粒(石英・雲母)
6	— 図版132	40-000016	スラッグ	長さ 6.6 幅 4.8 厚さ 2.3 重量 80g	—	鉄含有量多

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
7	11-000247	土師器坏	4	20		10	11-000250	須恵器坏	7	40g	
8	11-000248	土師器甕	203	1470		11	11-000251	須恵器甕	6	170	
9	11-000249	土師器甕	6	200	取上番号：2,3,18	12	11-000253	土師質塊	41	120	摩滅

25 3区—5号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測定値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第140図 図版120	10-000090	土師器坏 (1/3)	口径 12.0 器高 3.2	口縁横ナデ。体部～底部篋 ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②にぶい黄 褐色(10YR5/4) ③細砂粒(雲母)
2	第140図 図版120	10-000091	土師器坏 (破片)	口径 推定12.0 器高 3.2	口縁横ナデ。体部～底部外 面左回転方向篋ケズリ	①酸化焰・普通 ②にぶい黄橙 色(10YR7/4) ③細砂粒(雲母)

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
3	第140図 図版120	10-000092	土師器坏 (2/3)	口径 推定13.1 器高 推定4.4	内面荒れる。体部～底部外 面寛ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②橙色(5 YR6/8) ③細砂粒(片岩)
4	第140図 図版120	10-000093	土師器坏 (破片)	口径 推定12.8	器面荒れる。口縁横ナデ。 体部左回転寛ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②橙色(5 YR6/6) ③細砂粒(片岩)
5	第140図 図版120	10-000094	土師器坏 (3/4)	口径 11.2×10.9 器高 3.4	口縁内傾。横ナデ。体部外 面左廻りの寛ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②橙色(7.5 YR7/6) ③細砂粒(片岩)
6	第140図 図版120	10-000095	土師器甕 (1/3)	口径 21.1×19.8 器高 18.7	器面荒れる。口縁横ナデ。 体部縦位方向の寛ケズリ	①酸化焰・やや軟 ②橙色(5 YR7/6) ③粗砂粒(片岩含)
7	第140図 図版120	10-000096	土師器甕 (1/4)	口径 推定18.5×21.0 器高 23.7	器面荒。口縁部横ナデ。体部 下へ寛削り内面横位寛ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
8	11-000254	土師器坏	8	40g		10	11-000256	土師質塊	6	20g	
9	11-000255	土師器甕	34	260							

26 3区－6号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第142図 図版120	10-000097	土師器坏 (破片)	口径 推定12.0 器高 3.0	口縁横ナデ。体部～底部外 面寛ケズリ	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5 YR7/6) ③細砂粒(片岩)
2	第142図 図版120	10-000098	土師器坏 (1/2)	口径 推定12.5 器高 推定3.9	口縁横ナデ。体部外面寛ケ ズリか	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙 色(7.5YR7/4) ③細砂粒
3	第142図 図版120	10-000099	須恵器蓋 (完形)	口径 11.7×11.6 鈕 1.7×1.65 器高 2.45	右回転クロコ整形。鈕頂部 凹。鈕周開鈕貼付時のナデ	①還元焰・硬 ②灰色(5Y6/1) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000258	土師器坏・碗	13	40g		8	11-000262	土師器	2	60g	
5	11-000259	土師器甕	104	700		9	11-000264	土師質塊	21	20	
6	11-000260	土師器甕	2	140	取上番号：3,11	10	11-000265	土師器甕	7	180	取上番号：3,4, 5,6,7,9,96
7	11-000261	須恵器碗	2	20							

27 3区－7号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第143図 図版120	10-000100	土師器甕 (破片)	口径 推定17.4	器面荒れる。口縁横ナデ	①酸化焰・やや軟②にぶい黄橙 色(10YR7/3) ③粗砂粒(片岩)
2	第143図 図版120	10-000101	土師器高坏 (体部～脚部)	残存高 3.9	器面荒れる。体部外面恐ら く左回転方向のケズリ	①酸化焰・普通 ②にぶい赤褐 色(5YR5/4) ③ 細 砂 粒 (片 岩)
3	— 図版132	10-000248	土師器小型甕 (口縁部～肩部)	残存 7.0×5.0	口縁部外反。肩部内傾し外 面ケズリ、内面横位のナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5 YR7/6) ③粗砂粒(片岩)
4	— 図版132	10-000249	土師器小型甕 (底部片)	残存 8.7×6.4	外面へラ調整。内面ナデ調 整	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③粗砂粒(片岩)
5	— 図版133	10-000251	土師器坏 (口縁部～体部)	残存 10.0×7.0	大型。器面荒れる。口縁外 反する	①酸化焰・やや硬 ②橙色(7.5 YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
6	— 図版134	20-000045	こもあみ石	長さ 22.2 幅 7.6 厚さ 4.5 重量955g	一方の縁部中央に小さい凹 部造る	石材：黒色片岩
7	— 図版134	20-000046	こもあみ石	長さ 20.0 幅 3.9 厚さ 3.3 重量 440g	加工痕等なし	石材：緑色片岩
8	— 図版134	20-000047	こもあみ石	長さ 16.35 幅 8.4 厚さ 3.25 重量640g	両縁部の偏った位置に挟れ	石材：緑色片岩
9	— 図版134	20-000048	こもあみ石	長さ 15.95 幅 6.8 厚さ 3.0 重量 490g	両縁部に浅い凹部造る	石材：黒色片岩
10	— 図版134	20-000049	こもあみ石	長さ 14.4 幅 6.6 厚さ 4.55 重量490g	長い方の縁中央と、反対側 縁先端よりに摩耗痕	石材：黒色片岩
11	— 図版134	20-000050	こもあみ石	長さ 13.85 幅 5.5 厚さ 5.95 重量620g	両側縁下寄りに摩耗痕	石材：黒色片岩
12	— 図版134	20-000051	こもあみ石	長さ 13.2 幅 4.8 厚さ 3.6 重量 310g	縁中央に浅い挟れ	石材：黒色片岩
13	— 図版134	20-000052	こもあみ石	長さ 13.1 幅 5.35 厚さ 3.5 重量 305g	一方の縁中央、反対側縁下 方寄りに浅い凹部を造る	石材：緑色片岩

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
14	— 図版134	20-000053	こもあみ石	長さ 9.5 幅 5.5 厚さ 2.75 重量 220g	一方の縁中央に小さい抉れ	石材：流紋岩質凝灰岩
15	— 図版134	20-000054	こもあみ石	長さ 12.25 幅 5.6 厚さ 3.1 重量 320g	加工痕等なし	石材：黒色片岩
16	— 図版134	20-000055	こもあみ石	長さ 13.55 幅 6.55 厚さ 2.7 重量 320g	一方の縁部を中よりに小さい抉れ	石材：黒色片岩
17	— 図版134	20-000056	こもあみ石	長さ 13.0 幅 6.45 厚さ 2.7 重量 420g	両側縁部中央に小さい凹部を持つ	石材：緑色片岩
18	— 図版134	20-000057	こもあみ石	長さ 11.75 幅 6.25 厚さ 2.4 重量 260g	一方の縁部中央に小さい凹部を持つ	石材：緑色片岩
19	— 図版134	20-000058	こもあみ石	長さ 13.9 幅 7.2 厚さ 3.2 重量 430g	両側縁部下端近くに浅い凹部あり	石材：緑色片岩
20	— 図版134	20-000059	こもあみ石	長さ 14.5 幅 6.85 厚さ 4.5 重量 770g	特に加工痕なし	石材：流紋岩質凝灰岩

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
21	11-000266	土師器坏	2	5g		24	11-000269	土師器塊	27	80g	
22	11-000267	土師器甕体部	70	480		25	11-000270	須恵器碗	4	20	
23	11-000268	土師器甕	7	280	取上番号：7, 8, 9, 11, 13	26	11-000271	土師器鉢	2	20	

28 3区—8号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第145図 図版121	10-000102	土師器坏 (4/5)	口径 11.5 器高 3.4	器面やや荒。口縁やや内傾 体部外面右回りの篋ケズリ	①酸化焰・普通 ②明褐色(7.5 YR5/6) ③細砂粒(片岩)
2	第145図 図版121	10-000103	土師器坏 (完形)	口径 11.4 器高 5.0	器面荒。口縁やや外反し横ナデ。 腰部～底部丸味をもつ	①酸化焰・やや硬 ②橙色(5 Y6/6) ③粗砂粒(片岩)
3	第145図 図版121	10-000104	土師器手捏底部 穿孔土器(完形)	口径 11.0 底径 7.0 器高 5.4 穿孔 2.7	手捏ね。底面に木葉痕。底 部に不正方形の穿孔。	①酸化焰・普 ②明褐色(7.5 YR5/6) ③粗砂粒(片岩)
4	第145図 図版121	10-000105	土師器手捏底部穿 孔土器(ほぼ完形)	口径11.7 底径8.5×7.8 器高4.75 穿孔2.0×2.3	手捏ね。内面弧状の指ナデ 底面木葉痕と不定形穿孔	①酸化焰・やや硬 ②暗赤灰色 (7.5R3/1) ③粗砂粒(片岩)
5	第145図 図版121	10-000106	土師器手捏底部穿 孔土器(完形)	口径 12.3 底径 7.5 器 高 6.3 穿孔 2.7×2.5	手捏ね。底面に木葉痕。底 部に不正台形の穿孔。	①酸化焰・やや硬 ②にぶい黄 橙色(10YR7/3) ③粗砂粒(長石)
6	第145図 図版121	10-000107	土師器小型甕 (完形)	口径 12.1 底径 5.6 器高 11.3	外面荒れる。体部外面左へ の篋削り。内面左へ篋ナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)
7	第145図 図版121	10-000108	土師器甕 (完形)	口径19.5×20.3 底径 5.4 器高 13.3 穿孔1.9×1.6	外面荒れる。体部篋削り。 底部篋削後不整円形の穿孔	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (5YR7/4) ③粗砂粒(片岩)
8	第145図 図版121	10-000109	土師器甕 (破片)	口径 18.6 器高 12.0	器面荒れる。体部外面上へ 篋ケズリ。内面横へ篋ナデ	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙 色(7.5YR7/4) ③粗砂粒(片岩)
9	第145図 図版121	20-000017	こもあみ石	長さ 17.7 幅 5.6 厚さ 4.2 重量 660g	両端に叩き痕。中央縁部に 凹部造られる。	石材：黒色片岩
10	第145図 図版121	20-000018	こもあみ石	長さ 17.2 幅 6.2 厚さ 4.1 重量 610g	両端に叩き痕。中央縁部に 凹部造られる。	石材：黒色片岩
11	第145図 図版121	20-000019	土師器紡錘車	直径 3.95×3.95 厚さ 1.8	ナデ調整	①酸化焰・硬 ②にぶい橙色 (5YR6/4) ③粗砂粒(片岩)
12	— 図版133	10-000250	土師器甕 (口縁部～肩部)	残存 9.1×9.6	器面荒れる。口縁外反し横 ナデ。肩部左上方向へ篋削り	①酸化焰・やや硬 ②橙色(7.5 YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
13	— 図版133	10-000252	土師器坏 (口縁部～腰部)	残存	器肉薄い。口縁直立に近く 体部との境に陵を持つ	①酸化焰・やや軟 ②橙色(5 YR6/6) ③細砂粒(雲母)
14	— 図版133	10-000253	須恵器蓋 (蓋部片)	残存 13.9×4.6	回転クロコ整形。縁部手前 で陥没。端部下方に引出す	①還元焰・やや軟 ②灰色(5 Y5/1) ③細砂粒(片岩)
15	— 図版133	10-000254	土師器坏 (口縁部～体部)	残存 8.1×3.2	口縁短く外反。体部丸み を持つ	①酸化焰・普通 ②橙色(5 YR6/6) ③細砂粒(雲母)
16	— 図版133	10-000255	須恵器碗 (口縁部～体部)	残存 7.5×5.5	回転クロコ整形。口唇部外 反	①還元焰・やや軟 ②浅黄色 (2.5YR7/3) ③細砂粒(片岩)
17	— 図版133	10-000256	須恵器坏 (1/4)	器高 3.9	(右)回転クロコ整形。体部 直線に近く口縁外反	①還元焰・やや硬 ②灰黄色 (2.5YR6/2) ③粗砂粒(片岩)
18	— 図版133	10-000257	須恵器坏 (1/4)	底径 6.4×6.4	右回転クロコ整形。	①還元焰・普通 ②黄灰色(2.5 YR6/1) ③細砂粒(片岩)

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
19	— 図版134	10-000264	須恵器高台付椀 (1/6)	残存 11.0×8.6	大型。回転ロクロ整形。回転糸切後高台貼付時のナデ	①還元焰・普通 ②黄灰色(2.5Y5/1) ③細砂粒(片岩)
20	— 図版134	10-000266	須恵器坏 (1/6)	残存 10.2×8.9 底径 6.3×6.2	右回転ロクロ整形。回転糸切	①還元焰・やや軟 ②灰黄色(2.5Y6/2) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
21	11-000276	土師器坏	13	40g		29	11-000284	須恵器坏碗高台	7	70g	
22	11-000277	土師器坏・椀	16	100		30	11-000285	須恵器坏碗	23	120	
23	11-000278	土師器	17	90	古墳時代後期	31	11-000286	須恵器坏	12	80	
24	11-000279	土師器高坏	3	40		32	11-000287	須恵器甕	16	740	
25	11-000280	土師器	10	50	奈良時代	33	11-000288	土師器	3	5	取上番号：16,21
26	11-000281	土師器甕	300	2080		34	11-000289	須恵器坏碗	22	140	
27	11-000282	土師器甕	9	200	取上番号：2,3,13	35	11-000292	土師質塊	39	180	
28	11-000283	土師器	48	100		36	11-000293	女瓦	2	410	

29 3区-9号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第149図 図版122	10-000110	須恵器蓋 (1/3)	径 14.4 底径 5.6 器高 3.8	右回転ロクロ整形。蓋部回転糸切痕、内面盛り上る	①還元焰・硬 ②灰色(5Y6/1) ③細砂粒(片岩)
2	第149図 図版122	10-000113	須恵器蓋 (ほぼ完形)	径 14.6 器高(3.8)	右回転ロクロ整形。回転糸切。端部平で口唇下に尖る	①還元焰・硬 ②灰色(5Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
3	第149図 図版122	10-000114	須恵器蓋 (1/4)	径 推定14.6 天井径 推定6.4 器高2.8	(右)回転ロクロ整形。蓋部回転糸切痕。端部平	①還元焰・普通 ②赤灰・にぶい赤褐色(2.5YR4/1・5/3) ③細砂粒
4	第149図 図版122	10-000119	須恵器蓋 (完形)	径 14.9 天井径 5.9 器高 3.0	右回転ロクロ整形。天井回転糸切後隣接蓋部篋ケズリ	①還元焰・やや硬 ②灰黄色(2.5Y6/2) ③細砂粒(片岩)
5	第149図 図版122	10-000111	須恵器蓋 (破片)	径 推定8.7	(右回転)ロクロ整形。蓋部～端部平、下方に尖る	①酸化焰・やや硬 ②橙色(5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
6	第149図 図版122	10-000115	須恵器蓋 (完形)	径 15.2 天井径 4.4 器高 2.9	右回転ロクロ整形。天井部回転糸切後周囲回転篋削り	①還元焰・硬 ②灰色(5Y5/1) ③粗砂粒(片岩・長石)
7	第149図 図版122	10-000120	須恵器蓋 (1/3)	径 推定17.1 天井径 4.3 器高 2.7	(右回転)ロクロ整形。口縁端部平で下方に鋭く尖る。	①酸化焰・やや軟 ②黄褐～黄褐色(10YR5/6・7/3) ③細砂粒
8	第149図 図版122	10-000122	須恵器高台付皿 (完形)	口径 13.4 底径 7.5 器高 3.5	内墨。内面横位の篋磨き。底面回転糸切。付高台	①還元焰・やや硬 ②橙色(7.5YR6/6) ③細砂粒(片岩)
9	第149図 図版122	10-000132	須恵器高台付皿 (4/5)	口径 14.4	回転ロクロ整形。回転糸切り後高台貼付時の指ナデ	①還元焰・やや硬 ②灰色(5Y5/1) ③細砂粒(片岩)
10	第149図 図版122	10-000124	須恵器高台付皿 (完形)	口径 13.8 底径 6.7 器高 2.7	右回転ロクロ整形。回転糸切後、高台貼付時のナデ	①酸化焰・硬 ②灰色(5Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
11	第149図 図版122	10-000123	須恵器坏 (1/4)	口径 推定13.4 底径 推定8.3 器高 4.2	右回転ロクロ整形。回転糸切後篋調整か	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
12	第149図 図版122	10-000128	須恵器坏 (破片)	口径 14.2 底径 推定 5.8 器高 3.7	右回転ロクロ整形。器面荒れる。底部回転糸切。	①酸化焰・やや軟 ②にぶい赤褐色(5YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
13	第149図 図版122	10-000112	須恵器坏 (3/4)	口径 13.0×12.8 底径 6.1×5.8 器高 4.2	器面荒れる。右回転ロクロ整形	①酸化焰・普通 ②にぶい褐色(7.5YR5/4) ③粗砂粒(片岩)
14	第149図 図版122	10-000116	須恵器坏 (完形)	口径 12.8 底径 6.9 器高 3.0	右回転ロクロ整形。器面荒回転糸切	①還元焰・普通 ②にぶい黄色(2.5Y6/3) ③細砂粒(片岩)
15	第149図 図版122	10-000117	須恵器坏 (3/4)	口径 12.9 底径7.0×6.5 器高 3.8	右回転ロクロ整形。回転糸切痕	①還元焰・普通 ②黒褐色(5YR3/1) ③細砂粒(片岩)
16	第149図 図版122	10-000118	須恵器高台付坏 (高台欠損)	口径 12.6×12.6 底径 6.8×6.8 器高 4.25	右回転ロクロ整形。体部内面炭化物付着。回転糸切	①酸化焰・やや硬 ②にぶい褐色(7.5YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
17	第149図 図版122	10-000121	須恵器坏 (完形)	口径 12.0 底径 6.2 器高 3.3	右回転ロクロ整形。体部内外一面に指頭、指ナデ	①還元焰・硬 ②灰色(5Y5/1) ③細砂粒(長石)
18	第149図 図版122	10-000125	須恵器坏 (完形)	口径 12.9 底径 6.8 器高 4.0	右回転ロクロ整形。回転糸切り	①還元焰・普通 ②灰色(5Y5/1・5Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
19	第149図 図版123	10-000126	須恵器高台付坏 (1/4)	口径 推定12.8 底径 推定6.4 器高 3.8	回転ロクロ整形。器面やや荒。回転糸切後全面ナデ	①酸化焰・やや硬 ②橙色(7.5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
20	第149図 図版123	10-000127	須恵器高台付坏 (完形)	口径 14.0×14.1 底径 6.8×6.9 器高 4.0	右回転ロクロ整形。内面荒れる。回転糸切。高台欠損	①還元焰・やや硬 ②灰黄色(2.5YR7/2) ③細砂粒(片岩)

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測定値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備考 ①焼成 ②色調 ③胎土
21	第149図 図版123	10-000130	須恵器坏 (1/4)	口径 推定13.6 底径 7.75 器高 3.5	右回転ロクロ整形。回転糸切	①還元焰・普通 ②にぶい赤褐色(5YR5/4) ③細砂粒(片岩)
22	第149図 図版123	10-000129	須恵器碗 (1/4)	口径 推定14.0 底径 8.0 器高 7.05	右回転ロクロ整形。	①還元焰・やや硬 ②灰色(7.5Y6/1) ③細砂粒
23	第150図 図版123	10-000131	須恵器碗 (破片)	口径 推定14.0	右回転ロクロ整形。	①還元焰・硬 ②灰色(7.5Y4/1) ③粗砂粒(片岩)
24	第150図 図版123	10-000133	須恵器甕 (1/4)	底径 推定18.1	平底。頸部横ナデ。外面肩寛磨き。腰部と内面寛ナデ	①酸化焰・やや硬 ②赤灰色(2.5YR6/1) ③粗砂粒(片岩)
25	第150図 図版123	10-000134	土師器紡錘車 (完形)	直径 6.5×6.3 厚さ 1.42 穿孔径 0.7	裏面を指で押え、表面から側面に向け左回転方向指ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR7/6) ③細砂粒(長石・片岩か)
26	第150図 図版123	10-000135	平瓦(女瓦) (4/5)	厚さ 1.8	凸面ナデ調整。凹面粗い布目痕。縁部ヘラ調整。	①還元焰・やや硬 ②灰色(7.5YR4/1) ③粗砂粒(片岩)
27	第150図 図版124	10-000136	平瓦(女瓦) (1/2)	厚さ 2.3	凸面ナデ調整。凹面布目痕。縁部ヘラ調整。	①還元焰・普通 ②明褐色(7.5YR5/8) ③粗砂粒(石英)
28	第150図 図版124	10-000137	平瓦(女瓦) (1/3)	厚さ 1.8	凸面ナデ調整。凹面細い布目痕。縁部ヘラ調整。	①還元焰・硬 ②灰色(5Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
29	第151図 図版124	10-000138	平瓦(女瓦) (破片)	厚さ 1.9	凸面ナデ調整。凹面布目痕。縁部ヘラ調整。縁部ヘラ調整。	①酸化焰・やや硬 ②褐色(7.5YR4/4) ③粗砂粒(片岩)
30	第151図 図版124	10-000139	平瓦(女瓦) (破片)	厚さ 1.5	凸面ナデ調整。凹面細い布目痕。縁部ヘラ調整。	①還元焰・やや硬 ②褐灰色(7.5YR5/1) ③粗砂粒(片岩)
31	第151図 図版124	10-000140	丸瓦(男瓦) (1/3)	厚さ 2.7	凸面ナデ調整。凹面布目痕。縁部ヘラ調整。	①酸化焰・やや硬い ②にぶい褐色(7.5YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
32	第151図 図版124	10-000142	平瓦(女瓦) (破片)	厚さ 2.1	凸面ナデ調整。凹面布目痕。辺ヘラ調整。縁部ヘラ調整。	①還元焰・硬 ②赤褐色(5YR4/3) ③粗砂粒(片岩)
33	第151図 図版124	10-000143	平瓦(女瓦) (破片)	厚さ 2.3	凸面丁寧なナデ。凹面布目痕。縁部ナデ調整。	①酸化焰・やや硬 ②にぶい黄褐色(10YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
34	第151図 図版124	10-000141	平瓦(女瓦) (破片)	厚さ 2.15	凸面ナデ調整。凹面粗い布目痕。縁部ヘラ調整。	①酸化焰・普通 ②褐色(7.5YR4/4) ③粗砂粒(片岩)
35	— 図版133	10-000259	須恵器坏 (1/6)	残存 6.1×6.5	回転ロクロ整形。器面荒れる。内湾気味に立ち上がる	①還元焰・やや軟弱 ②淡黄色(5Y8/3) ③細砂粒(石英)
36	— 図版133	10-000258	須恵器碗 (1/4)	残存 6.7×7.8	回転ロクロ整形。体部内湾し、口縁部外反する	①還元焰・やや軟弱 ②にぶい黄褐色(10YR6/3) ③細砂粒(片岩)
37	— 図版133	10-000260	須恵器碗 (高台欠損、1/3)	残存 10.2×8.6	右回転ロクロ整形。回転糸切後高台貼付け時のナデ	①酸化焰・普通 ②黄灰色(2.5YR6/1) ③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
38	11-000295	土師器坏	2	5g	
39	11-000296	土師器碗高台	3	20	
40	11-000297	土師器碗	18	70	
41	11-000298	土師器甕	412	1850	
42	11-000299	土師器甕	22	350	取上番号：5,6,18,15,18,20,22,41,52,53,55,56,57,61,64,76,79,82,107,108,

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考
43	11-000300	土師器	25	40g	
44	11-000301	須恵器碗	53	360	
45	11-000302	須恵器甕	18	240	
46	11-000303	須恵器蓋他	11	60	
47	11-000304	須恵器甕	3	85	取上番号：10,21,62,
48	11-000307	瓦	19	300	
49	11-000308	土師質塊	20	80	

30 3区—10号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測定値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第153図 図版125	10-000144	土師器甕 (破片)	口径 推定19.0	口縁横ナデ。肩部上方へ寛削り。内面左方へ寛ナデ	①酸化焰・普通 ②明褐色(7.5YR5/6) ③粗砂粒(片岩)
2	— 図版133	10-000261	土師器甕 (底部片)	残存 5.5×6.0	底面に木葉痕跡底部木葉痕	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(2.5YR4/6) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000309	土師器蓋	2	10		6	11-000312	土師甕	6	100g	取上番号：2,3,4,5
4	11-000310	土師坏	2	5		7	11-000313	須恵器甕	1	20	取上番号：4
5	11-000311	土師器甕体部	18	490							

31 3区-11号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値 (cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第155図 図版125	10-000145	土師器坏 (完形)	口径 11.0 器高 4.5	器面荒れる。口縁横ナデ。 体部外面篋削り、内面ナデ	①酸化焰・やや軟 ②にぶい褐色(7.5YR6/3) ③粗砂粒(片岩)
2	第155図 図版125	10-000146	土師器坏 (完形)	口径 11.3×11.6 器高 4.7×4.5	口縁横ナデ。体部外面左廻りの篋削り、内面横位のナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色(5YR6/3) ③粗砂粒(片岩)
3	第155図 図版125	10-000147	須恵器坏 (完形)	口径 11.4×11.4 器高 3.4×3.15	回転クロコ整形。回転糸切後体部外面左廻りの篋削り	①還元焰・硬 ②紫灰色(5P6/1) ③粗砂粒(片岩)
4	第155図 図版125	10-000148	土師器坏 (完形)	口径 11.5 底径4.2	外面やや荒れる。口縁横ナデ。体部左廻りの篋削り	①酸化焰・普通 ②灰褐色(YR5/2) ③粗砂粒(片岩)
5	第155図 図版125	10-000149	土師器坏 (ほぼ完形)	口径 11.8 器高4.5	器面荒れる。口縁横ナデ。体部外面篋削り、内面篋ナデ	①酸化焰・軟 ②にぶい橙色(7.5YR7/3) ③粗砂粒(片岩)
6	第155図 図版125	10-000150	土師器杯 (1/2)	口径 11.8 器高3.8	口縁横ナデ。体部外面篋削り、内面ナデ	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙色(7.5YR7/4) ③細砂粒
7	第155図 図版125	10-000151	土師器坏 (3/4)	口径 推定12.0 器高 4.95	口縁横ナデ。体部外面篋削り、内面篋ナデ。やや平底	①酸化焰・普通 ②にぶい赤褐色(5YR5/4) ③粗砂粒(片岩)
8	第155図 図版125	10-000152	土師器坏 (完形)	口径 11.4 器高 5.0	口縁横ナデ。体部外面篋削り、内面篋ナデ。やや平底	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙色(YR6/4) ③粗砂粒(片岩)
9	第155図 図版125	10-000153	須恵器蓋 (2/3)	径 13.5 天井径 6.3	右回転クロコ整形。天井一方へ、外周左廻りの篋削り	①還元焰・硬 ②灰色(10Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
10	第155図 図版125	10-000155	土師器椀 (完形)	口径 17.4×16.8 器高 10.0×9.2	内面黒色処理。口縁横ナデ。体部外篋削り、内面篋ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙色(7.5YR7/4) ③粗砂粒(片岩)
11	第155図 図版125	10-000159	土師器鉢 (1/2)	口径 19.8 器高 8.9 底径 8.7×8.6	器面荒。口縁横ナデ。体部外横位の篋削り。やや上げ底	①酸化焰・普通 ②にぶい赤褐色(5YR5/4) ③粗砂粒(片岩)
12	第155図 図版125	10-000154	土師器小型甕 (完形)	口径13.0 底径6.0 器高10.5	器面やや荒。口縁横ナデ。体部外面篋削り、内面篋ナデ	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5YR5/6) ③粗砂粒(片岩)
13	第155図 図版126	10-000157	土師器台付甕 (完形)	口径12.0 底径11.0 器高14.3	器面荒。口縁横ナデ。外面体部篋削り、脚貼付時のナデ	①酸化焰・普通 ②赤褐色(10R4/6) ③粗砂粒(片岩)
14	第155図 図版126	10-000158	土師器高坏 (3/4)	口径 12.4 底径 10.3 器高 12.8	器面荒。口縁横ナデ。外面上下の篋削り。内面指ナデ	①酸化焰 ②橙色(5YR7/6) ③粗砂粒
15	第155図 図版125	10-000156	土師器甕 (腰部～底部)	底径 推定5.8	外面やや荒れる。外面削り。内面左廻り篋ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(7.5YR6/6) ③細砂粒(長石)
16	第155図 図版126	10-000163	土師器甕 (3/4)	口径 7.0 底径 7.8 器高 29.0	器面荒れる。外面上方へ篋削り。内面右方への篋ナデ	①酸化焰 ②明赤褐色(7.5YR5/6) ③粗砂粒
17	第156図 図版126	10-000160	土師器甕 (3/4)	口径 20.0 底径 6.2 器高 33.7	内側下に炭化物。体部外面上へ篋削り、内面左へ篋ナデ	①酸化焰・普通 ②黄褐色(7.5YR7/8) ③粗砂粒(片岩)
18	第156図 図版127	10-000161	土師器甕 (1/2)	口径 18.0×17.8 底径 7.3×7.0 器高 32.0	口縁横ナデ。体部外面上へ篋削り、内面左へ粗い横ナデ	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙色(5YR7/4) ③粗砂粒(片岩)
19	第156図 図版126	10-000162	土師器甕 (4/5)	口径 20.6 底径 5.2 器高 34.5×33.0	外面荒。口縁横ナデ。体部外面上へ篋削り、内面左へ篋ナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色(5YR7/4) ③粗砂粒(片岩)
20	第156図 図版127	10-000164	土師器甕 (完形)	口径 24.2 器高 29.6	外面体部上へ腰部下へ篋削り。内面左上へ篋ナデ後上下磨	①酸化焰・やや硬 ②浅黄褐色(10YR8/3) ③粗砂粒(片岩)
21	第156図 図版127	20-000020	こもあみ石	長さ 15.8 幅 6.6 厚さ 4.0 重量 530g	中央縁部に凹部造る。	石材：黒色片岩
22	— 図版133	10-000268	土師器甕 (口縁部～体部)	残存 15.4×16.2	口縁外反し横ナデ。口唇強く反る。肩部に上へ篋削り	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
23	— 図版133	10-000269	土師器甕 (腰部～底部)	残存 12.1×15.6	腰部外面篋削り、内面横位の篋ナデ。	①酸化焰・やや軟 ②にぶい褐色(7.5YR5/3) ③粗砂粒(片岩)
24	— 図版133	10-000270	土師器甕 (体部片)	残存 12.7×16.8	外面縦位の篋削り	①酸化焰・普通 ②黄褐色(7.5YR7/8) ③粗砂粒(片岩)
25	— 図版133	10-000271	土師器甕 (口縁部～体部)	残存 14.8×9.0	口縁短く外反。体部外面縦へ削り。内面横位のナデ	①酸化焰・普通 ②黄褐色(7.5YR7/8) ③粗砂粒
26	— 図版133	10-000299	土師器甕 (底部片)	底径 6.5×6.5 残存 11.5×7.7	器面やや荒れる。底部篋調整	①酸化焰・普通 ②橙色(2.5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
27	— 図版133	10-000300	土師器甕 (腰部～底部)	底径 6.9×6.5 残存 12.2×12.2	内外面指頭圧痕残る。篋調整	①酸化焰・やや硬 ②にぶい黄褐色(10YR6/3) ③粗砂粒

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
	11-000315	土師器坏	11	80g							5,6,7,8,11,12,19,27,29,31,71
	11-000316	土師器高坏	1	60							
	11-000317	土師器坏	24	160	古墳時代後期		11-000323	須恵器坏	6	80	
	11-000318	土師器蓋鈕	1	5			11-000324	須恵器碗	2	10	
	11-000319	土師甕	266	2500			11-000325	須恵器蓋	2	5	
	11-000320	土師器甕	300	2400			11-000326	須恵器甕	24	420	
	11-000321	土師器小型甕	10	220			11-000327	須恵器甕	1	110	取上番号:2
	11-000322	土師器甕	20	700	取上番号:1,3,4,		11-000330	土師質塊	8	38	

32 3区-12号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第160図 図版128	10-000165	円筒埴輪 (1/3)	底径 推定14.0 残存 14.4×42.2	籬下縁ナデ。内外面縦位のハケメ、内面は後指ナデ	①酸化焰・硬 ②明赤褐色(5YR 5/8) ③粗砂粒(長石・片岩)
2	第160図 図版127	10-000166	円筒埴輪 (1/3)	底径 推定11.4 器高 21.5	内外面縦位のハケメ。外面下端部下へ笈削り	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③細砂粒(片岩)
3	第160図 図版127	10-000167	円筒埴輪 (破片)	口径 20.6 残存 17.5×19.5	内面荒。口縁と籬上下除きハケメ。粘土粒2カ所付着	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③粗砂粒(長石)
4	第160図 図版127	10-000168	円筒埴輪 (破片)	残存 16.6×21.8	縦一次ハケ。内外面荒い	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 7/8) ③粗砂粒(片岩)
5	第160図 図版128	10-000169	円筒埴輪 (破片)	口径 推定22.5 残存 20.0×30.0	縦一次の粗いハケ。透穴円孔	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5YR 5/8) ③粗砂粒(片岩)
6	第160図 図版128	10-000170	円筒埴輪 (破片)	残存 16.0×18.0	籬とその上下除き縦位のハケメ。内面右下りのハケメ	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5YR 5/8) ③粗砂粒(長石)
7	第160図 図版128	10-000171	土釜 (1/4)	口径 推定32.0 器高 24.8	口縁横ナデ。肩部～体部ミガキ、体部笈ナデ。内面笈ナデ	①酸化焰・硬 ②にぶい赤褐色(7.5R4/3) ③粗砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考	No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
8	11-000334	埴輪	40	840		10	11-000336	土師器甕	2	20	
9	11-000334	土師器甕	9	120		11	11-000339	土師質塊	11	40	

33 3区-13号住居

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第162図 図版129	10-000172	須恵器蓋 (蓋部片)	口径 推定14.0	回転クロコ整形。端部下方引き出。外面に指頭痕残	①還元焰・硬 ②暗灰色(N3/) ③細砂粒(片岩)
2	第162図 図版129	10-000176	須恵器蓋 (1/3)	口径 15.6 底径 推定 2.8 器高 3.8	右回転クロコ整形。天井部回転糸切痕。	①還元焰・硬 ②灰色(7.5Y5/1) ③細砂粒(片岩)
3	第162図 図版129	10-000174	須恵器蓋 (蓋部片)	口径 推定16.0	回転クロコ整形。口縁部押広がり、端部下方へ引き出	①還元焰・普通 ②オリーブ黄色(5Y6/3) ③細砂粒
4	第162図 図版129	10-000179	須恵器高台付皿 (1/4)	口径 推定14.1 底径 7.2 器高 推定3.1	右回転クロコ整形 底部回転糸切 高台貼付時のナデ	①還元焰やや硬 ②暗いオリーブ灰色(2.5GY4/1) ③粗砂粒
5	第162図 図版129	10-000182	須恵器高台付皿 (1/3)	口径 推定14.5 底径 7.0 器高 2.9	器面やや荒れる。回転クロコ整形。回転糸切	①還元焰・やや硬 ②灰色(5Y 6/1) ③細砂粒
6	第162図 図版129	10-000185	須恵器碗 (3/4)	口径 13.0×13.3	右回転クロコ整形。底部欠損	①還元焰・やや硬 ②灰白色(5Y7/2) ③細砂粒(片岩)
7	第162図 図版129	10-000188	須恵器坏 (2/3)	口径 13.0 底径 5.8 器高 3.6	右回転クロコ整形。肉厚薄い。回転糸切痕	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR6/6) ③粗砂粒(片岩)
8	第162図 図版129	10-000173	須恵器坏 (完形)	口径 12.0×12.0 底径6.1×6.2 器高 3.4	右回転クロコ整形。内面に指頭痕。底面回転糸切痕	①還元焰・やや硬 ②灰色(10Y5/1) ③粗砂粒(片岩)
9	第162図 図版129	10-000175	須恵器坏 (3/4)	口径 12.2 底径 6.4 器高 3.8	右回転クロコ整形。肉厚薄。内面腰部指頭痕。回転糸切	①還元焰・やや硬 ②灰色(7.5Y5/1) ③細砂粒(片岩)
10	第162図 図版129	10-000177	須恵器坏 (1/2)	口径 12.25 底径 6.2 器高 3.3	右回転クロコ整形。内面指頭痕。底面回転糸切痕	①還元焰・やや硬 ②灰色(7.5Y4/1) ③粗砂粒(片岩)
11	第162図 図版129	10-000180	須恵器坏 (1/2)	口径 推定13.4 底径 推定6.2 器高 3.6	左回転クロコ整形。器面やや荒れる。底面回転糸切痕	①還元焰・硬 ②灰色(7.5Y5/1) ③粗砂粒(片岩)
12	第162図 図版129	10-000183	須恵器坏 (完形)	口径 12.8×13.0 底径6.2 器高 3.4×3.8	右回転クロコ整形。器肉薄い。底面回転糸切痕	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色(5YR6/3) ③細砂粒(片岩)
13	第162図 図版129	10-000186	須恵器碗 (1/4)	口径 推定13.7 器高 4.1 底径 5.7×5.6	右回転クロコ整形。底面回転糸切痕	①還元焰 ②灰白色(2.5Y 8/1) ③粗砂粒(片岩)

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
14	第162図 図版129	10-000187	須恵器坏 (完形)	口径 13.6×12.8 底径 7.1×6.85 器高 3.85	右回転クロコ整形。内面腰 部指ナデ1。回転糸切り	①酸化焰・普通 ②にぶい褐色 (7.5YR5/4) ③細砂粒(片岩)
15	第162図 図版129	10-000178	須恵器坏 (完形)	口径 13.2×10.8 器高 2.6~4.3	側面が圧平される。右回転 クロコ整形。回転糸切	①還元焰・硬 ②灰色(5Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
16	第162図 図版129	10-000181	須恵器坏 (完形)	底径 6.3×6.2 口径 12.7 器高 3.2	一側垂下。右回転クロコ整 形。内面指頭痕多。回転糸切	①還元焰・硬 ②灰色(7.5Y 4/1) ③細砂粒(片岩)
17	第162図 図版129	10-000184	須恵器坏 (3/4)	口径 13.1 底径2.5 器高 3.7	一側腰部より潰れる。右回 転クロコ整形。回転糸切	①還元焰・硬 ②灰色(5Y6/1) ③粗砂粒(片岩)
18	第162図 図版130	10-000189	土師器甕 (1/3)	口径 推定21.1 残存 12.1	コ字状口縁、横ナデ。体部 外面篋削り、内面篋ナデ	①酸化焰・普 ②橙色(5YR6/6) ③粗砂粒(雲母・長石・片岩)
19	第162図 図版129	10-000191	土師器甕 (2/3)	口径 21.4	コ字状口縁。体部外面篋削 り。内面左に篋ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③ 細砂粒(長石・片岩)
20	第162図 図版130	10-000190	土師器甕 (3/4)	口径 19.0	コ字状口縁。体部外面篋削 り。内面篋ナデ	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5 Y5/6) ③細砂粒(片岩)
21	第162図 図版130	40-000008	鉄釘	長さ 3.15 幅 0.4 厚さ 0.6	頭部折れ曲がる。	角釘と思われる
22	第163図 図版130	10-000192	平瓦 (女瓦) (破片)	残存 20.9×20.2 厚さ 2.4	凸面ナデ調整。凹面細い布 目痕。縁部篋調整	①還元焰・硬 ②灰色(5Y4/1) ③粗砂粒(片岩)
23	第163図 図版130	10-000193	平瓦 (女瓦) (破片)	残存 10.4×10.0 厚さ 1.75	凸面ナデ調整。凹面粗い布 目痕	①酸化焰・やや硬 ②橙色(7.5 YR7/6) ③粗砂粒(片岩)
24	— 図版134	10-000262	須恵器碗 (口縁部~体部)	残存 5.7×6.7	(右)回転クロコ整形。口縁 僅かに外反し内面に煤付着	①酸化焰・普通 ②にぶい褐色 (7.5YR6/3) ③粗砂粒(片岩)
25	— 図版134	10-000263	土師器甕 (破片)	残存 11.5×10.5	コ字状口縁。体部外面横位 位の篋削り、内面篋ナデ	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(5 YR5/6) ③細砂粒(片岩)
26	— 図版134	10-000265	須恵器碗 (腰部~底部)	残存 9.7×8.0	(右)回転クロコ整形。回転糸 切後底全面高台貼付のナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙 色(7.5YR7/4) ③細砂粒(片岩)
27	— 図版134	10-000267	須恵器坏 (体部~底部)	残存 10.2×9.7	右回転クロコ整形。器内薄 い。底面回転糸切痕	①還元焰・やや硬 ②灰白色 (2.5Y7/1) ③細砂粒(片岩)
28	— 図版133	10-000301	土師器甕 (口縁部~肩部)	残存 20.0×9.3	コ字状口縁。口縁横ナデで 指頭痕残る。	①酸化焰・普通 ②明赤褐色(2.5 YR5/6) ③ 細砂粒(片岩)
29	— 図版133	10-000302	土師器坏 (口縁部~体部)	残存 7.2×4.2	口縁横ナデ。体部外面篋削 り	①酸化焰・やや軟 ②にぶい黄 橙色(10YR7/3) ③細砂粒

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
30	11-000340	土師器坏	5	10g	
31	11-000341	土師器坏	6	10	
32	11-000342	土師器碗	7	60	
33	11-000343	土師器甕	433	3180	
34	11-000344	土師器甕頸部	1	80	取上番号:19
35	11-000345	土師器坏碗	33	200	
36	11-000346	土師器甕	24	200	カマド出土取上 番号:3,21

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
37	11-000347	須恵器坏碗	11	90g	
38	11-000348	須恵器坏	29	120	
39	11-000349	須恵器甕体部	41	1340	
40	11-000350	須恵器蓋	3	30	
41	11-000353	瓦	2	200	取上番号:5,21
42	11-000354	瓦	6	500	
43	11-000356	土師質塊	8	40	

34 3区-1号土坑

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第165図 図版130	10-000206	縄文土器深鉢 (胴部片)	器厚0.6	内外面荒れる。縄文L { R。 前期黒浜式	①不良 ②褐色(7.5YR4/4) ③繊維を含む中粒砂混入
2	第165図 図版130	10-000207	縄文土器深鉢 (胴部片)	器厚0.6~0.8	内面は丁寧な調整が行われ ている	①良 ②褐色(7.5YR4/4) ③細砂粒

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3	11-000485	縄文土器	26	480g	取上番号:2, 5~7,9~11, 15~19,21,24, 27

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

35 3区-8・9・21号土坑

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
3区-8号土坑						
1	— 図版133	10-000305	土師器小型甕 (口縁部～肩部)	残存6.9×8.0	口縁緩かなく字状、横ナデ。 肩部外面篋削り、内面ナデ	①酸化焰・やや硬 ②にぶい橙 色(7.5YR7/3) ③細砂粒(片岩)

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3区-8号土坑					
2	11-000430	土師器甕	11	50g	

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
3区-8・9・21号土坑					
3	11-000434	縄文土器	20	170g	

36 3区-14号土坑

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第173図 図版130	10-000311	土師器甕 (1/4)	口径 推定22.4	内面やや荒。口縁横ナデ。体 部外面篋削り、内面篋ナデ	①酸化焰・普通 ②にぶい褐色 (7.5YR5/4) ③粗砂粒(片岩)

37 3区-1溝

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	— 図版133	10-000303	須恵器蓋 (破片)	残存 5.0×3.5	回転クロコ整形。天井部外 面篋調整	①還元焰・やや軟 ②灰白色(5 Y7/1) ③細砂粒(石英)
2	— 図版133	10-000304	須恵器碗 (口縁部～腰部)	残存 4.7×5.1	回転クロコ整形	①還元焰・やや軟 ②にぶい橙 色(5YR6/3) ③細砂粒(雲母)
3	— 図版133	10-000306	須恵器高台付椀 (腰部～台脚)	残存 9.8×10.0 底径 8.0	右回転クロコ整形。回転糸 切後高台貼付時のナデ	①還元焰・やや軟 ②にぶい黄 橙色(10YR7/2) ③細砂粒 (片岩)

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
4	11-000357	土師器甕	6	40g	
5	11-000358	土師器甕	9	10	薄手。コ字状口 縁段階か

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
6	11-000359	須恵器坏碗	2	5g	
7	11-000360	須恵器甕	10	100	
8	11-000361	須恵器甕	3	60	

38 3区-2号溝

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第167図 図版130	10-000194	土師器高台付皿 (2/5)	口径 12.9 底径 6.8 器高 2.5	右回転クロコ整形。口端部 欠損	①酸化焰・普通 ②にぶい黄橙 色(10YR7/4) ③細砂粒(片 岩)

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-00363	土師器	24	50g	薄手。コ字状口縁 段階か
3	11-000364	須恵器坏碗	14	40g	
4	11-000365	須恵器甕	24	80	
5	11-000366	弥生土器	2	5	
6	11-000367	縄文土器	15	110	

No.	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
7g	11-000368	須恵器	1	5	取上番号：8
8	11-000369	縄文土器	1	50	取上番号：1
9	11-000380	土師器坏碗	3	10	
10	11-000381	土師器甕	16	380	
11	11-000382	須恵器坏碗	10	60	

39 3区-1号道

No.	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第171図 図版130	10-000195	手捏ね高坏 (台脚欠損)	口径 15.0×10.0 底径 5.3 器高 3.2	器面荒れる。手捏ね様。口 縁不整形。外面指押え痕	①酸化焰・やや軟 ②にぶい橙 色(5YR7/4) ③細砂粒(片岩)
2	第171図 図版130	40-000009	キセル (吸い口)	長さ 4.8 径 1.1と0.5	銅整。裏寄り欠損。なで 肩	3面構築時埋没。小泉(1985) IV類以降(18世紀以降)
3	第171図 図版130	40-000010	鉄 (欠損品)	長さ 5.3 幅0.5 厚さ 0.5	断面方形。角釘か。	3面調査中出土
4	第171図 図版130	40-000011	鉄棒 (欠損品)	長さ 15.9 幅 0.9 断面径 0.9×0.95	断面ほぼ円形。両端が対に 斜めに切られる。	しっかりしているが、用途不 詳。3面出土
5	— 図版133	10-000310	陶器皿 (底部～高台)	残存 3.1×2.8	施釉陶器。重ね焼き。	①還元焰・硬 ②灰白色(7.5 Y7/2) ③精製砂
6	— 図版133	10-000309	陶器(播鉢) (体部片)	残存 3.1×2.4	施釉陶器。卸目2組分確認	①還元焰 ②褐色(7.5YR 4/4) ③細砂粒(石英)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
7	11-000463	陶器	2	30g	3面
8	11-000465	火鉢	1	5	3面
9	11-000467	陶器	3	20	3面、瀬戸
10	11-000469	磁器染付	4	10	3面
11	11-000386	土師器甕体部	26	130	3面

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
12	11-000477	天目	2	20g	3面(市道下)
13	11-000478	青磁	2	20	3面(市道下)
14	11-000392	瓦	3	60	3面(市道下)
15	11-000466	陶器	2	40	
16	11-000474	磁器	3	10	(市道下)

40 3区-4地区ピット群

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
ピット6・22・34					
1	11-000431	須恵器坏碗	9	70g	
ピット7・24・45・54・58					
2	11-000433	縄文土器	8	80	
ピット21					
3	11-000437	土師器甕	25	160	
ピット25					
4	11-000418	土師器甕	1	2	
5	11-000419	土師器甕	1	5	
ピット27					
6	11-000420	土師器甕	1	2	
ピット34					
7	11-000421	土師器甕	3	5	
ピット37					
8	11-000422	土師器甕	11	40	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
ピット39					
9	11-000423	土師器甕	2	5g	
ピット42					
10	11-000425	土師器甕	1	5	
ピット58					
11	11-000424	土師器甕	1	1	
ピット80					
12	11-000426	土師器甕	1	2	
ピット95					
13	11-000427	土師器甕	27	65	
ピット96					
14	11-000417	土師器坏	1	30	
15	11-000428	土師器甕	3	20	

41 1区・2区出土縄文時代遺物(実測図掲載分)

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第174図 図版132	10-000019	縄文土器深鉢 (胴部破片)	器厚1.2	半載竹管による平行沈線。 C字爪形文円形竹管文	①良 ②明赤褐色(5YR4/8) ③細砂粒
2	第174図 図版132	10-000196	縄文土器深鉢 (口縁破片)	器厚0.8	刻みのある隆帯による隋円 区画、沈線と竹管中期前半	①良 ②暗赤褐色(5YR4/3) ③細砂粒混入
3	第174図 図版132	10-000197	縄文土器深鉢 (口縁破片)	器厚1.3~1.8	隆帯による隋円区画文。区画 内縄文R { $\frac{L}{L_0}$ }。加曾利E 3式	①やや良 ②明黄褐色(10YR 7/6) ③中粒砂混入
4	第174図 図版132	10-000198	縄文土器深鉢 (口縁破片)	器厚1.0~1.4	口唇部に無文帯をおき、一条 の微隆起帯。R { $\frac{L}{L_0}$ }。加曾利 E 4式	①やや良 ②にぶい黄橙色(10 YR7/4) ③細砂粒
5	第174図 図版132	10-000199	縄文土器深鉢 (口縁破片)	器厚1.1	口唇部に無文帯をおき、 一条の微隆起帯。加曾利E 4式	①やや良 ②浅黄橙色(10YR 8/4) ③細砂粒
6	第174図 図版131	20-000021	石鏃	長さ 2.1 幅1.5 厚さ 0.35 重量 1.1g		石材：黒耀石
7	第174図 図版131	20-000022	凹石	長さ 12.55 幅 8.8 厚さ 4.2 重量 640g	両面に4個の凹み、部分的に 磨耗している。	石材：雲母石英片岩
8	第174図 図版131	20-000044	凹石	長さ 16.3 幅 14.3 厚さ 7.75 重量 1.97 Kg		石材：砂岩
9	第174図 図版132	10-000075	縄文土器深鉢 (胴部破片)	器厚0.9	半載竹管による集合沈線、 縄文R { $\frac{L}{L_0}$ }。中期前半	①良 ②暗赤色(2.5YR3/4) ③中粒砂混入
10	第174図 図版131	20-000024	石鏃	長さ 1.7 幅 1.0 厚さ 0.32 重量 0.4g	側縁は直線をなし、基部の 挟りは逆U字形	石材：黒耀石
11	第174図 図版131	20-000023	石鏃	長さ 2.05 幅 2.2 厚さ 0.5 重量 1.5g	側縁、基部ほぼ直線	石材：チャート

42 3区全体

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
1	第175図 図版131	10-000201	かわらけ (3/4)	口径 8.4×8.4 底径 4.6 器高 22.5~18.5	回転クロコ整形。口縁部3 カ所に煤付着。底面削り	①酸化焰・普通 ②にぶい橙色 (7.5YR6/4) ③細砂粒(片岩)
2	第175図 図版131	10-000200	須恵器蓋 (破片)	口径 推定17.5 天井径 推定6.2	(左回転)クロコ整形。天井 部外面上半回転調整	①還元焰・普通 ②灰黄色(2.5 Y7/2) ③粗砂粒(長石)

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
3	第175図 図版131	10-000203	土師器長胴甕 (破片)	口径 推定16.4	器面荒れ焼土付。体部外面 上へ篋削り。内面左へ篋ナデ	①酸化焰 ②明褐色(7.5YR 5/6) ③粗砂粒(片岩)
4	第175図 図版131	10-000204	須恵器坏 (1/2)	口径 推定8.6 器高 3.9	体部～底部外面右廻りの篋 ケズリ。内面指ナデ	①還元焰・普通 ②灰白色(5Y 7/2) ③粗砂粒(長石)
5	第175図 図版131	10-000202	須恵器高台付皿 (1/4、高台欠損)	口径 推定14.0 器高 2.8	右回転クロコ整形。回転糸 切後外周高台貼付時のナデ	①還元焰 ②灰色(5Y5/1) ③粗砂粒
6	第175図 図版131	10-000314	陶質砥石 (端部一部欠損)	長さ 4.6 幅 2.3 厚さ 1.7 重量 20g	陶器片使用。両端面及び周 囲4方のうち5面の砥面	①還元焰・やや軟 ②灰白色(5 Y7/2) ③細砂粒
7	第175図 図版131	40-000012	鉄砲玉 (完形品)	直径 1.195 重量 9.13g	使用痕有り	三匁五分玉。戦国期か。
8	第175図 図版131	40-000013	釘 (欠損品)	長さ 3.6 幅 0.8 断面径 0.62×0.45	角釘と思われる	ピット23出土
9	第175図 図版132	10-000208	縄文土器 (胴部破片)	器厚0.5	縄文R { L。内面は隆帯垂 下。丁寧な調整。中期後半	①良 ②にぶい橙色(7.5YR 7/4) ③細砂粒
10	第175図 図版132	10-000312	縄文土器 (胴部破片)	器厚0.6	内面荒れ、半載竹管による 集合沈線。刺突	①やや良 ②にぶい黄橙色(10 YR6/4) ③細粒の砂混入
11	第175図 図版132	10-000205	縄文土器 (底部破片)	底径6.8	網底。内面丁寧な調整が行 われている。	①良 ②にぶい褐色(7.5YR 6/3) ③細砂粒
12	第175図 図版131	20-000026	凹石	長さ 12.2 幅 4.8 厚さ 1.8 重量 175g	凹みの大きさは長径2.4、短 径1.5、深さ0.3	石材：黒色片岩
13	第175図 図版131	20-000025	多孔石	長さ 17.0 幅 12.15 厚さ 4.75 重量 1,230g	2個の凹み。長径1.5、短径 1.1、深さ0.4	石材：雲母石英片岩
14	第176図 図版132	20-000027	多孔石	長さ12.0 幅5.4 厚2.6 重量320g	両面に4個の凹み。最大の 凹み径2.7×1.6、深さ0.2	石材：緑色片岩
15	第176図 図版131	20-000028	磨石	長さ 8.1 幅 7.95 厚さ 5.05 重量 450g	全面に磨耗痕がみられる	石材：粗粒安山岩
16	第176図 図版131	20-000031	石鏃	長さ 2.95 幅 1.25 厚さ 0.55 重量 1.9g		石材：黒耀石
17	第176図 図版131	20-000029	石鏃	長さ 2.05 幅 1.4 厚さ 2.5 重量 1.6g	側縁は直線的で、基部の挟 りは逆U字形	石材：黒耀石
18	第176図 図版132	20-000030	石鏃	長さ 2.4 幅 1.35 厚さ 0.35 重量 1.2g	側縁は中央部で外側に湾曲 し、基部の挟りはU字形	石材：チャート
19	第176図 図版132	20-000032	石鏃	長さ 2.6 幅 2.4 厚さ 0.7 重量	側縁は中央部で外側に湾曲 し、基部の挟りは逆U字形	石材：黒耀石
20	第176図 図版132	20-000033	石鏃	長さ 1.6 幅 1.2 厚さ 0.25 重量 0.5g	側縁はほぼ直線をなし、基 部の挟りは逆U字形	石材：黒耀石
21	第176図 図版132	20-000034	石鏃	長さ 1.75 幅 1.6 厚さ 0.4 重量 0.6g	側縁はほぼ直線をなし、基 部の挟りは逆V字形	石材：チャート
22	第176図 図版132	20-000035	石鏃	長さ 1.8 幅 1.7 厚さ 0.3 重量 0.7g	側縁は中央部で内側に湾曲 し、基部の挟りは逆U字形	石材：珪質頁岩
23	第176図 図版132	20-000036	石鏃	長さ 2.0 幅 1.6 厚さ 0.4 重量 0.7	側縁は中央部で外側に湾曲 し、基部の挟りは逆U字形	石材：黒耀石
24	第176図 図版132	20-000037	石鏃	長さ 2.25 幅 1.85 厚さ 0.5 重量 1.3g	側縁はほぼ直線をなし、基 部の挟りは逆V字形	石材：黒耀石
25	第176図 図版132	20-000040	石鏃	長さ 2.0 幅 1.4 厚さ 0.4 重量 0.7g	側縁は中央部で外側に湾曲 し、基部の挟りは逆U字形	石材：黒耀石
26	第176図 図版132	20-000041	石鏃	長さ 1.65 幅 1.5 厚さ 0.3 重量 0.4g	側縁はほぼ直線をなし、基 部の挟りは逆U字形	石材：黒耀石
27	第176図 図版132	20-000038	石鏃	長さ 1.34 幅 1.05 厚さ 0.32 重量 0.3g	側縁部はほぼ直線をなし、 基部は欠損	石材：黒耀石
28	第176図 図版132	20-000039	打製石斧	長さ 5.85 幅 5.7 厚さ 1.55 重量 40g	基部欠損	石材：硬質泥岩
29	— 図版134	10-000307	土師器甕 (腰部～底部)	底径 5.8×5.8 器高 残存9.2	内面篋などで、外面多少荒れ 焼土付着。篋ケズリ後ナデ	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 6/6) ③粗砂粒(片岩)
30	— 図版134	10-000308	土師器坏 (口縁部～腰部)	残存6.8×4.7	下半煤付着。口縁横ナデ。 体部篋ケズリ	①酸化焰・普通 ②橙色(5YR 7/8) ③細砂粒(片岩)

第5節 小 結

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備考	
3区-2号住居						
31	11-000215	縄文土器	221	2020g	取上番号：1,3,9	
32	11-000217	縄文土器	4	40		
33	11-000235	縄文土器	88	820		
34	11-000237	縄文土器	11	60		
35	11-000216	弥生土器か	8	60		
36	11-000227	弥生土器	4	20	取上番号：2,7,9,12	
37	11-000228	瓦	5	100		
38	11-000233	陶器	13	120		
39	11-000238	磁器	1	10		
3区-3号住居						
40	11-000245	縄文土器	4	350	取上番号：2,7,9,12	
41	11-000246	縄文土器	34	210		
3区-4号住居						
42	11-000252	縄文土器	108	1060		
3区-5号住居						
43	11-000257	縄文土器	4	18		
3区-6号住居						
44	11-000263	縄文土器	9	40		
3区-7号住居						
45	11-000274	縄文土器	24	210	取上番号：3,6,10,12	
46	11-000275	縄文土器	4	100		
47	11-000273	弥生土器	2	40		
48	11-000272	陶器	1	20		
3区-8号住居						
49	11-000291	縄文土器	60	720	取上番号：42	
50	11-000290	弥生土器	2	20		
51	11-000294	陶器	3	20		
3区-9号住居						
52	11-000305	縄文土器	3	10	取上番号：42	
53	11-000306	縄文土器	57	530		
3区-10号住居						
54	11-000314	縄文土器	2	20		
3区-11号住居						
55	11-000329	縄文土器	62	780	3面(市道下)。取上番号：3,4,8,7~11,15~17,21,25	
56	11-000328	弥生土器	17	200		
57	11-000333	土器塊か	24	300		
58	11-000331	瓦	2	30		
59	41-000001	鉄	2	5		
60	41-000002	鉄	1	5		
3区-12号住居						
61	11-000337	縄文土器	2	10g		
62	11-000338	陶器	1	12		
3区-13号住居						
63	11-000351	縄文土器	31	320	3面市道下。取上番号：3,4,8,7~11,15~17,21,25	
64	11-000352	弥生土器	5	40		
65	11-000355	陶器	12	160		
3区-1号溝						
66	11-000362	縄文土器	4	80		
3区-1号道						
67	11-000391	縄文土器	21	260	3面(市道下)	
68	11-000385	縄文土器	9	40		
69	11-000384	弥生土器	3	10		
70	11-000383	須恵器甕	3	30		
71	11-000387	須恵器甕	13	300		
72	11-000388	須恵器甕	34	780	(市道下)	
73	11-000389	弥生土器	1	40	(市道下)	

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
74	11-000390	弥生土器	4	10	(市道下)
12トレンチ (字町下地区)					
75	11-000183	土師器坏	1	10	古墳時代後期
76	11-000185	土師器甕	5	40	
20トレンチ					
77	11-000206	縄文土器	78	880	
78	11-000190	弥生土器	18	100	
79	11-000182	土師器坏碗	3	20	
80	11-000184	土師器甕	4	40	
81	11-000186	土師器	120	870	
82	11-000187	須恵器坏	13	120	
83	11-000188	須恵器蓋	2	10	
84	11-000189	須恵器甕	15	580	
85	11-000191	瓦	2	100	
86	11-000192	陶器	2	100	
87	11-000193	磁器	5	10	
22トレンチ					
88	11-000208	弥生土器	4	10	
89	11-000207	須恵器坏碗	4	10	
24トレンチ					
90	11-000198	弥生土器	3	15	奈良時代
91	11-000181	土師器坏	4	20	
92	11-000194	土師器坏	6	20	
93	11-000195	土師器甕	55	220	
94	11-000202	土師器坏碗	6	80	
95	11-000203	土師器甕	90	700	
96	11-000196	須恵器碗	2	8	
97	11-000197	須恵器甕	13	300	
98	11-000205	須恵器甕	14	160	
99	11-000199	女瓦	2	350	
3区-1地区					
100	11-000399	縄文土器	32	500	
101	11-000394	土師器坏碗甕	133	520	
102	11-000393	須恵器碗高台	3	20	
103	11-000395	須恵器坏碗	45	240	
104	11-000396	須恵器甕	6	60	
105	11-000397	須恵器甕	10	45	
106	11-000398	須恵器蓋	5	80	
107	11-000415	須恵器甕	1	50	土坑周辺
108	11-000400	土師質塊	3	5	
109	11-000401	瓦	1	5	
3区-2地区					
110	11-000412	縄文土器	50	480	
111	11-000411	弥生土器	18	80	
112	11-000402	土師器坏	14	40	
113	11-000403	土師器高坏	2	40	
114	11-000404	土師器	3	5	古墳時代後期
115	11-000405	土師器甕	78	500	
116	11-000406	須恵器坏碗	6	60	
117	11-000407	須恵器高坏碗	4	80	
118	11-000408	須恵器蓋	3	40	
119	11-000409	須恵器	9	40	
120	11-000410	須恵器甕	23	560	
121	11-000413	女瓦	1	14	
122	11-000461	陶器	10	60	
123	11-000414	土器塊	8	70	
3区-4地区					
124	11-000443	縄文土器	30	240	確認面
125	11-000447	縄文土器	2	10	サブトレンチ
126	11-000432	弥生土器	3	20	取上番号：8
127	11-000429	土師器甕	26	30	

第8章 西平井久保田代遺跡の調査

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
128	11-000434	土師質塊	4	10	
129	11-000438	土師器甕	37	480	確認面
130	11-000439	土師器甕	56	140	
131	11-000440	土師器坏	3	10	確認面
132	11-000442	弥生土器	5	40	確認面
133	11-000445	土師器甕	3	20	サブトレンチ
134	11-000441	須恵碗・甕	10	140	確認面
135	11-000446	須恵器甕	1	5	サブトレンチ
136	11-000436	瓦	1	2	
137	11-000444	瓦	1	30	確認面

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
そ の 他					
138	11-000201	縄文土器	4	100	トレンチ
139	11-000486	縄文土器	37	280	
140	11-000371	弥生土器	2	10	
141	11-000200	土師器甕	3	100	トレンチ
142	11-000370	土師器甕	2	20	
143	11-000204	土師質塊	27	60	
144	11-000213	土師質塊	114	260	
145	11-000476	磁器（染付）	2	10	
146	11-000209	磁器	3	30	確認面

43 西平井久保田代遺跡全域

No	図面番号 図版番号	資料番号	名 称 (残存部位・状況)	測 定 値(cm)	形態・成形・調整等の特徴	備 考 ①焼成 ②色調 ③胎土
32 (1)	— —	10-000235 (破片)	須恵器皿	残存 6.5×4.0	回転クロ整形。口縁部外反する	①酸化焰・普通 ②灰色(5Y4/1)③細砂粒(片岩)

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
2	11-000244	須恵器坏	5	80g	表採
3	11-000372	土師器坏	2	5	表採
4	11-000373	土師器甕	9	100	表採
5	11-000374	須恵器坏碗	9	80	表採
6	11-000375	須恵器甕	14	380	表採
7	11-000376	須恵器坏・碗 高台	2	60	表採
8	11-000377	須恵器蓋	1	5	表採

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
9	11-000378	須恵器長頸壺	1	5g	表採
10	11-000379	縄文土器	6	140	表採
11	11-000234	縄文土器	1	3	
12	11-000416	縄文土器か	3	2	
13	11-000462	陶器	12	40	
14	11-000473	磁器	9	20	
15	11-000484	土師質塊	9	20	

44 石器・石製品

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
1	21-000001	フレーク		450g	
2	21-000002	フレーク	3	150	2区
3	21-000003	フレーク	32	1250	3区
4	21-000004	こもあみ石	2	680	1区
5	21-000005	こもあみ石	1	490	2区
6	21-000006	こもあみ石	18	8720	3区
7	21-000007	石斧か	3	1140	
8	21-000008	磨石	3	2300	1区
9	21-000009	台石	3	1040	1区
10	21-000010	台石	1	1890	3区

No	資料番号	資料名称等	数量	重量	備 考
11	21-000011	板碑	2	1210	1区
12	21-000012	チャート	1	10	1区
13	21-000013	チャート	1	10	2区
14	21-000014	チャート	5	200	3区
15	21-000015	黒曜石	1	128	1区
16	21-000016	黒曜石	19	22.5	2区
17	21-000017	黒曜石	291	293	3区
18	21-000018	板碑	12	3550	
19	21-000019	凹石	1	300	
20	21-000020	板碑片か	3	1100	片岩

表－3 西平井地区3区 土坑・ピット一覧表

(3区-1のピット除く)

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
1号土坑	215cm	140cm	25cm	隅丸長方形	
2号土坑	(165cm)	(81cm)	(12cm)	隅丸長方形	
3号土坑	40cm	30cm	31cm		
4号土坑	216cm	182cm	12cm	隅丸方形	
5号土坑	81cm	68cm	23cm	不整形	☆
6号土坑	198cm	81cm	12cm	隅丸長方形	
7号土坑	103cm	(50)cm	23cm	長方形	☆
8号土坑	14土坑に変わる				
9号土坑	146cm	43cm	15cm	隅丸長方形	
10号土坑	108cm	63cm	14cm	隅丸方形	
11号土坑	280cm	156cm	25cm	長方形	
12号土坑	(290cm)	(278cm)	(12cm)		
13号土坑	(159)cm	(70)cm	(11)cm		
14号土坑	134cm	45cm	22cm	楕円形	☆
1号ピット	32cm	22cm	12cm	円形	
2号ピット	34cm	25cm	10cm	〃	
3号ピット	(60)cm	(22)cm	5cm		☆
4号ピット	(94)cm	46cm	6cm		
5号ピット	31cm	27cm	16cm	円形	☆
6号ピット	23cm	17cm	8cm	〃	☆
7号ピット	23cm	16cm	21cm	隅丸方形	☆
8号ピット	27cm	21cm	20cm	不整形	
9号ピット	30cm	25cm	16cm	円形	☆
10号ピット	50cm	32cm	9cm	隅丸方形	
11号ピット	28cm	25cm	14cm	円形	
12号ピット	22cm	15cm	9cm	楕円形	☆
13号ピット	28cm	23cm	11cm	円形	☆
14号ピット	35cm	19cm	10cm	楕円形	☆
15号ピット	25cm	22cm	11cm	円形	☆
16号ピット	(57)cm	(15)cm	10cm		☆
17号ピット	29cm	17cm	5cm	楕円形	☆
18号ピット	20cm	17cm	11cm	円形	☆
19号ピット	24cm	19cm	16cm	〃	☆
20号ピット	29cm	22cm	25cm	楕円形	
21号ピット	38cm	23cm	33cm	〃	
22号ピット	30cm	19cm	24cm	〃	
23号ピット	(44)cm	(16)cm	(10)cm		☆
24号ピット	(80)cm	(40)cm	(13)cm		☆
25号ピット	(40)cm	(19)cm	(14)cm		☆
26号ピット	25cm	20cm	18cm	円形	☆
27号ピット	35cm	25cm	26cm	〃	☆
28号ピット	23cm	18cm	23cm	〃	☆
29号ピット	26cm	17cm	6cm	楕円形	
30号ピット	29cm	23cm	18cm	円形	☆
31号ピット	19cm	17cm	23cm	〃	☆
32号ピット	28cm	18cm	20cm	楕円形	☆
33号ピット	28cm	21cm	15cm	円形	☆
34号ピット	48cm	18cm	19cm	楕円形	
35号ピット	24cm	19cm	12cm	円形	
36号ピット	27cm	18cm	14cm	楕円形	
37号ピット	70cm	35cm	35cm	〃	
38号ピット	35cm	22cm	14cm	楕円形	☆
39号ピット	90cm	38cm	46cm	隅丸長方形	
40号ピット	28cm	23cm	21cm	円形	☆
41号ピット	29cm	20cm	14cm	〃	☆

遺構番号	長 軸	短 軸	深 さ	平面形態	備 考
42号ピット	32cm	25cm	16cm	円形	☆
43号ピット	17cm	11cm	14cm	〃	☆
44号ピット	18cm	15cm	8cm	〃	☆
45号ピット	54cm	30cm	30cm	楕円形	☆
46号ピット	24cm	21cm	17cm	円形	☆
47号ピット	38cm	17cm	12cm	楕円形	☆
48号ピット	19cm	16cm	9cm	円形	☆
49号ピット	33cm	27cm	18cm	〃	☆
50号ピット	23cm	18cm	23cm	楕円形	☆
51号ピット	28cm	24cm	22cm	円形	☆
52号ピット	19cm	17cm	21cm	〃	☆
53号ピット	25cm	17cm	24cm	楕円形	☆
54号ピット	56cm	31cm	18cm	〃	
55号ピット	28cm	22cm	27cm	円形	☆
56号ピット	21cm	18cm	21cm	不整形	☆
57号ピット	22cm	19cm	12cm	円形	☆
58号ピット	30cm	23cm	20cm	〃	☆
59号ピット	54cm	26cm	26cm	楕円形	☆
60号ピット	30cm	24cm	16cm	円形	☆
61号ピット	40cm	23cm	27cm	楕円形	☆
62号ピット	29cm	19cm	21cm	円形	☆
63号ピット	77cm	56cm	27cm	〃	☆
64号ピット	33cm	27cm	18cm	〃	☆
65号ピット	43cm	31cm	19cm	不整形	☆
66号ピット	(110)cm	(40)cm	36cm		☆
67号ピット	40cm	28cm	33cm	楕円形	☆
68号ピット	63cm	27cm	25cm	〃	☆
69号ピット	46cm	22cm	20cm	〃	☆
70号ピット	(56)cm	(39)cm	18cm	不整形	☆
71号ピット	(29)cm	(26)cm	16cm		☆
72号ピット	57cm	32cm	16cm	楕円形	☆
73号ピット	34cm	25cm	23cm	円形	☆
74号ピット	27cm	19cm	9cm	〃	☆
75号ピット	37cm	25cm	14cm	〃	☆
76号ピット	56cm	30cm	18cm	楕円形	☆
77号ピット	99cm	37cm	15cm	不整形	☆
78号ピット	(57)cm	(28)cm	13cm		☆
79号ピット	(31)cm	(21)cm	7cm	円形	☆
80号ピット	38cm	27cm	25cm	楕円形	
81号ピット	28cm	22cm	17cm	〃	☆
82号ピット	34cm	21cm	12cm	〃	☆
83号ピット	23cm	18cm	23cm	円形	☆
84号ピット	32cm	23cm	12cm	隅丸方形	☆
85号ピット	27cm	23cm	14cm	円形	☆
86号ピット	25cm	21cm	9cm	〃	☆
87号ピット	35cm	24cm	25cm	楕円形	
88号ピット	30cm	22cm	22cm	円形	☆
89号ピット	53cm	39cm	11cm	不整形	☆
90号ピット	46cm	26cm	12cm	楕円形	☆
91号ピット	33cm	28cm	16cm	円形	
92号ピット	86cm	24cm	25cm	楕円形	☆
93号ピット	(26)cm	(17)cm	6cm	〃	☆
94号ピット	26cm	19cm	21cm	円形	
95号ピット	32cm	18cm	24cm	〃	
96号ピット	(89)cm	(21)cm	(20)cm		

☆印はB軽石含む



10-04-13 西平井久保田代遺跡上空 南から



10-04-07 1区全景上空 北から



10-920019-10 1区-1全景 東から



01-920027-36 1区-1全景 西から



01-920003-25 1号住遺物全景 北から



10-920003-07 1号住全景 西から



01-920003-04 1号住南北セクション 西から



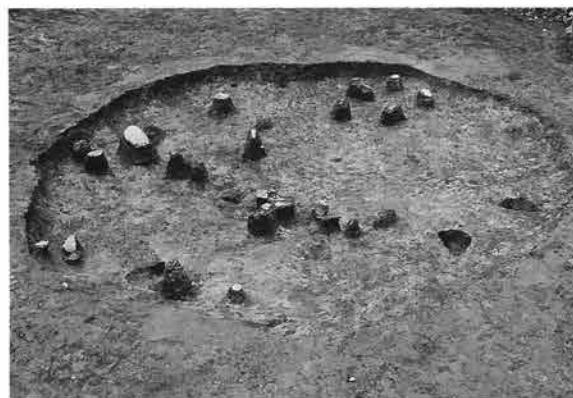
10-920045-03 1号住カマド掘り方全景 西から



10-920050-03 1号住掘り方全景 西から



10-920018-09 2号住全景 西から



01-920020-19 2号住遺物全景 西から



01-920021-02 2号住炉



01-920021-06 2号住遺物出土状態



01-920014-29 2号住東西セクション 南から



10-920037-06 3号住全景 西から



10-920043-01 3号住カマド全景 西から



10-920036-03 3号住カマド遺物出土状態 南から



10-920035-07 3号住カマド掘り方全景 東から



01-920057-29 3号住掘り方全景 西から



01-920046-33 1区-1 7号溝 北西から



01-920012-33 1区-1 7号溝遺物出土状態 北西から



01-920028-34 1区-1 1号土坑 南から



01-920008-26 1区-1 2号土坑 東から



01-920010-10 1区-1 3号土坑 南東から



01-920010-19 1区-1 4号土坑 南東から



01-920009-34 1区-1 5号土坑セクション 東から



01-920009-18 1区-1 6号土坑 西から



01-920015-06 1区-1 5号土坑 東から



01-920002-07 1区-2全景 西から



01-920002-03 1区-2遺物全景 東から



10-920046-03 1区 9号土坑 東から



01-920002-03 1区-2包含層遺物出土状態 北から



01-920028-20 1区-3全景 西から



10-920008-09 1区-3 1号落ち込み全景 南から



01-920028-18 1区-3 1号落ち込み 北から



01-920011-14 1区-3 1号落ち込み南北セクション 東から



01-920011-17 1区-3号 1号落ち込み東西セクション 北から



01-920020-34 1区-3 調査風景 西から



01-920067-15 1区-4 全景 北から



01-920067-18 1区-5 全景 南から



10-04-31 2区上空



01-920019-36 2区遠景 南から



01-920028-03 2区遠景 南東から



10-920020-09 2区遠景 北西から



01-920071-35 2区調査風景 北から



01-920062-14 1号住全景 西から



01-920062-23 1号住遺物出土状態 北から



01-920062-17 1号住カマド遺物出土状態 西から



10-920055-06 1号住カマド掘り方 西から



10-920057-09 1号住掘り方全景 西から



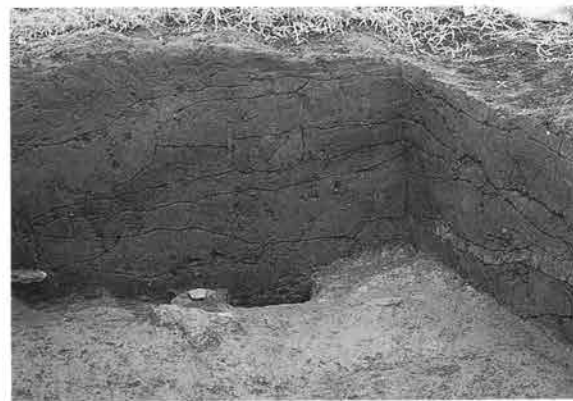
01-920015-29 2区1号土坑 北から



01-920015-22 2区2号土坑 北西から



01-920072-04 2区4号土坑(風倒木) 北から



01-920019-34 2区南・西壁セクション 北から



01-920038-14 2区1号落ち込み 西から



01-920040-06 2区1号落ち込み 東から



10-04-40 3区全景上空



01-920018-35 3区-1全景 北から



01-920023-34 3区-2全景 西から



01-920023-21 3区-3全景 東から



10-920042-10 3区-4全景 西から



10-920009-08 1号住全景 西から



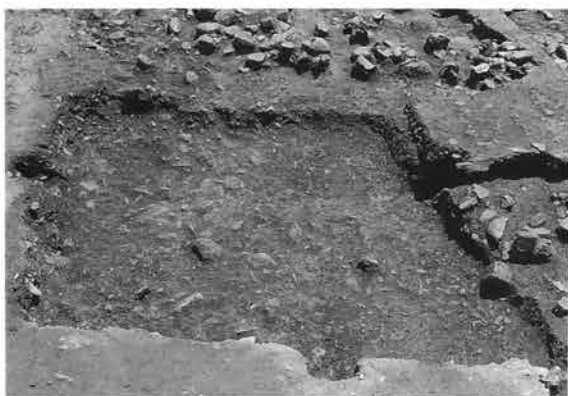
01-920018-27 1号住カマド全景 西から



01-920015-19 1号住カマド遺物出土状態 西から



01-920022-12 1号住旧カマド煙道セクション 南から



01-920030-30 1号住掘り方全景 西から



10-920024-03 2号住全景 西から



10-920007-07 2号住カマド全景 西から



01-920016-34 2号住貯蔵穴 西から



10-920030-03 2号住カマド掘り方全景 西から



01-920046-05 2号住掘り方全景 西から



01-920053-20 3号住全景 北から



01-920035-09 3号住南北セクション 西から



01-920053-03 3号住カマド南北セクション 西から



01-920055-09 3号住カマド掘り方全景 西から



01-920057-13 3号住掘り方全景 西から



10-920011-06 4号住全景 西から



01-920016-29 4号住遺物出土状態 北から



01-920015-33 4号住カマド全景 西から



01-920019-08 4号住カマド掘り方全景 西から



01-920033-05 4号住掘り方全景 西から



10-920027-03 5号住全景 西から



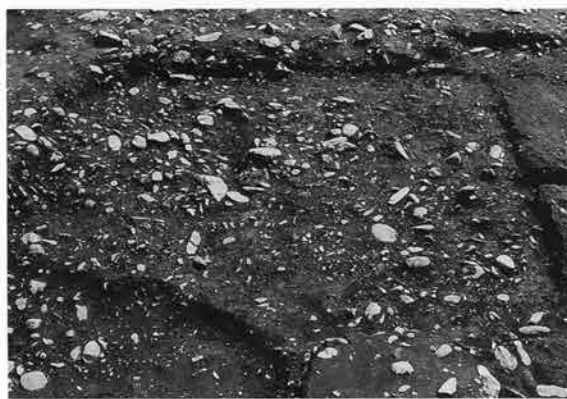
01-920025-12 5・6号住切り合いセクション 東から



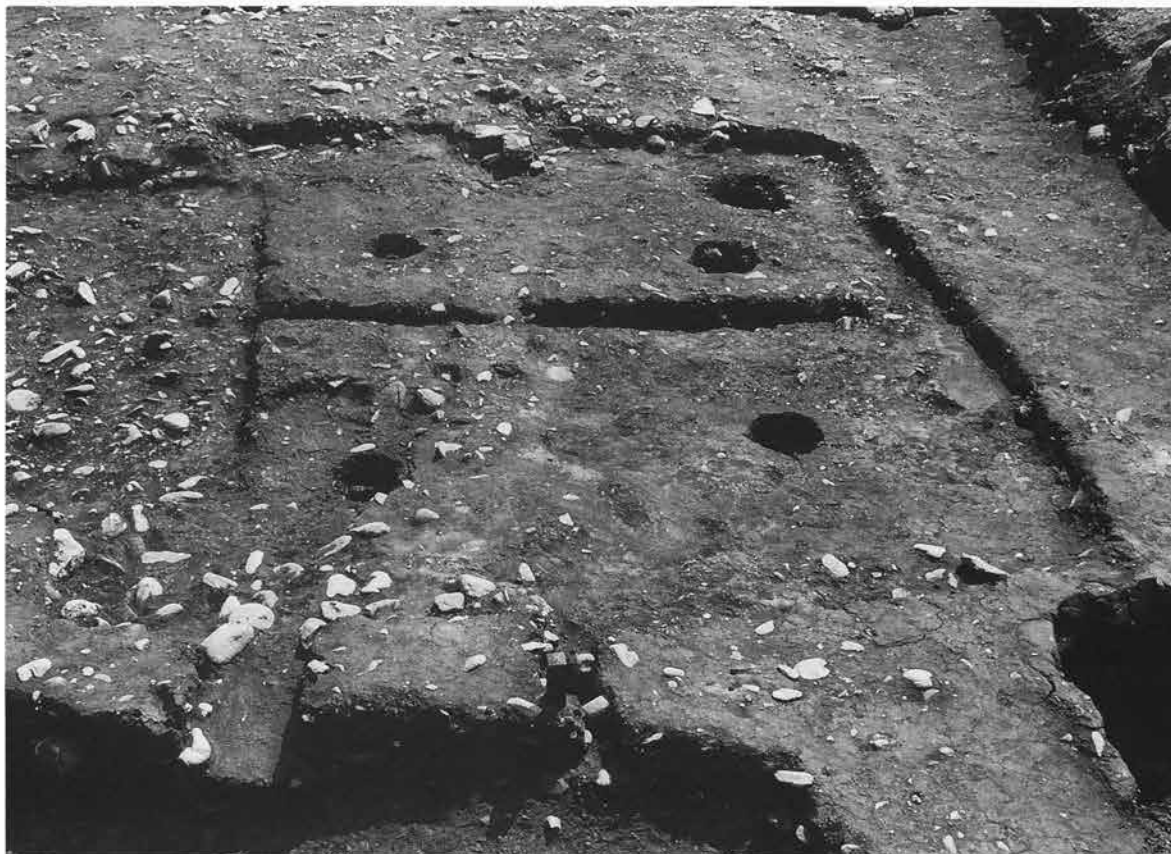
10-920030-35 5号住遺物出土状態 西から



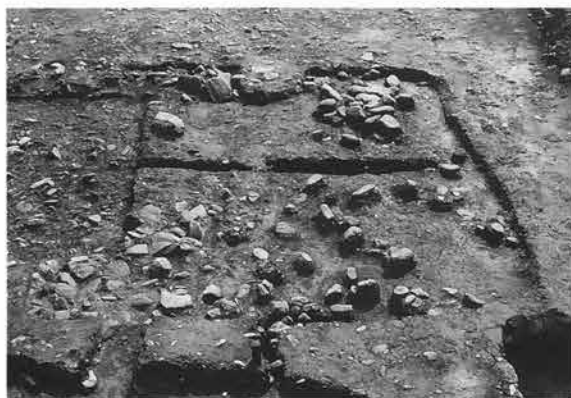
01-920033-24 5号住カマド掘り方全景 西から



01-920046-26 5号住掘り方全景 西から



01-920046-18 6号住全景 西から



01-920037-23 6号住遺物出土状態 西から



01-920044-36 6号住貯蔵穴セクション



01-920046-22 6号住カマド全景 西から



01-920048-10 6号住カマド掘り方 西から



10-920031-06 7号住全景 西から



10-920039-03 7号住掘り方全景 西から



10-920065-09 8・13号住全景 南から



10-920060-04 8・13号住遺物出土状態 南から



01-920068-01 8号住遺物出土状態



10-920060-04 8・13号住カマド(手前8号住 奥13号住)



10-920062-07 8号住カマド全景 西から



01-920075-23 8号住カマド壁体 南から



01-920067-06 8号住カマド袖石 南から



01-920068-19 13号住カマド全景 西南から



01-920073-08 13号住カマド東南上部



01-920074-27 13号住甕を使用した煙道 西南から



01-920076-03 13号住煙道に使用した甕 東南から



10-920068-09 8・13号住掘り方全景 西から



10-920053-09 9号住全景 西から



01-920061-32 9号住遺物出土状態 北から



01-920060-27 9号住出土遺物 西から



10-920053-10 9号住カマド全景 西から



01-920065-05 9号住掘り方全景 西から



01-920060-06 10号住全景 西から



10-920051-03 10号住カマド全景 西から



10-920054-03 10号住カマド掘り方 西から



01-920060-03 10号住掘り方全景 北から



01-920072-27 11号住全景 西から



01-920066-29 11号住遺物出土状態 西から



01-920067-05 11号住遺物出土状態近景 北東から



10-920058-09 11号住遺物出土状態



01-920070-21 11号住カマド全景 西から



10-920067-03 11号住カマド掘り方 西から



01-920078-13 11号住旧北カマド 南から



10-920068-06 11号住旧北カマド側面 東から



10-920060-03 11号住掘り方全景 西から



10-920056-06 12号住カマド全景 北から



10-920063-09 12号住カマド掘り方 北から



01-920070-34 12号住カマドセクション 北から



01-920071-14 12号住カマド掘り方セクション 西から



01-920001-09 3区1道1面全景 北から



10-920048-08 3区1道2面全景 南から



10-920001-01 3区1道1面遠景 南から



10-920003-09 3区1道2面遠景 南から



01-920001-04 3区1道1面セクション 北から



01-920003-16 3区1道2面セクション 北から



10-920029-07 3区1道3面全景 北から



01-920034-35 3区1道3面近景 北西から



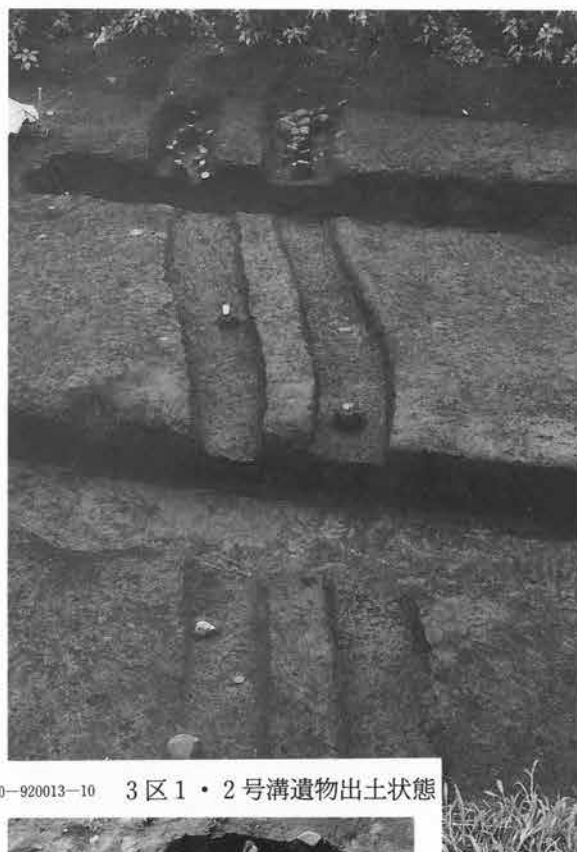
01-920029-30 3区1道3面近景セクション 北から



01-920034-31 3区1道3面近景 東から



01-920034-34 3区1道3面近景



10-920013-10 3区1・2号溝遺物出土状態



南から

10-920025-10 3区1・2号溝全景 南から



01-920017-14 3区1号土坑 東から



10-920052-06 3区2号土坑 西から



10-920052-03 3区4号土坑 西から



10-920051-06 3区11号土坑 西から



10-920052-08 3区12号土坑 西から



10-920051-09 3区13号土坑 西から



10-920056-02 3区15・16号土坑 北から



10-920061-04 3区17号土坑 東から



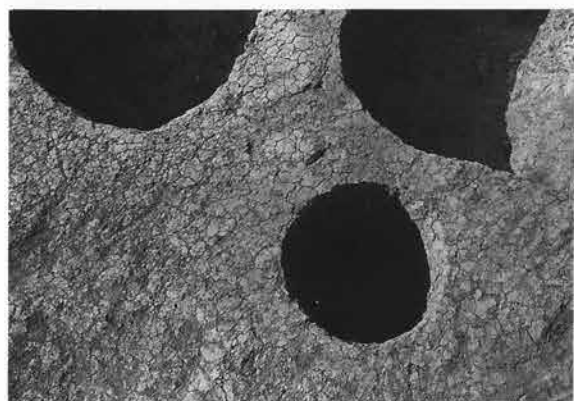
10-920061-05 3区18号土坑 南から



10-920061-06 3区19号土坑 南西から



10-920061-08 3区20号土坑 東から



10-920061-07 3区21号土坑 東から



01-920052-26 3区ピット群 西から



01-920052-27 3区ピット群 西から



01-920052-28 3区ピット群 南東から



01-920052-29 3区ピット群 東から



01-920052-30 3区ピット群 西から



01-920052-31 3区ピット群 東から



1区1号住-1



1区1号住-2



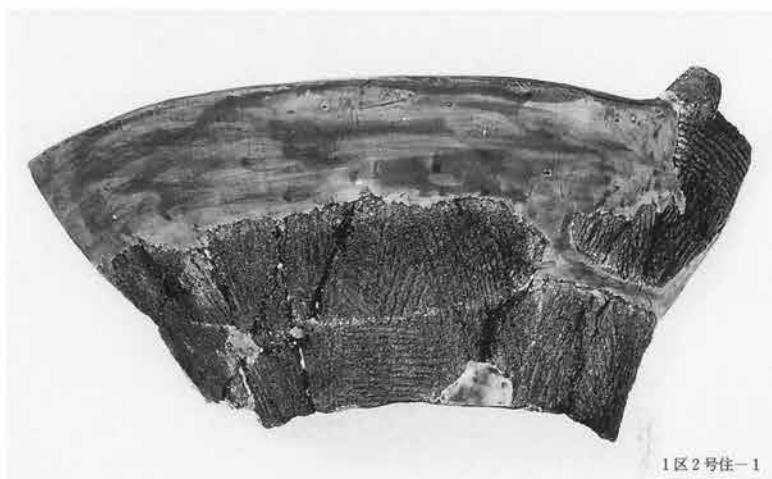
1区1号住-3



1区1号住-4



1区1号住-5



1区2号住-1



1区1号住-6



1区1号住-7



1区2号住-3



1区2号住-2

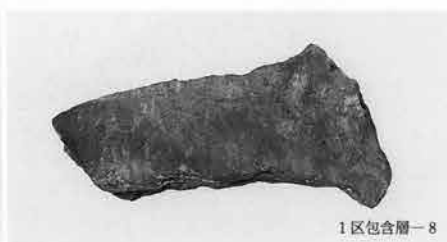
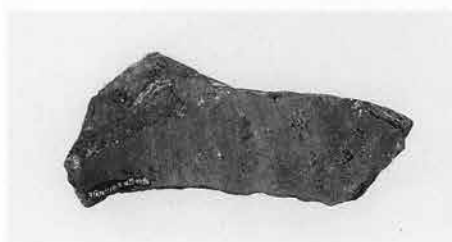


1区3号住-1



1区3号住-3



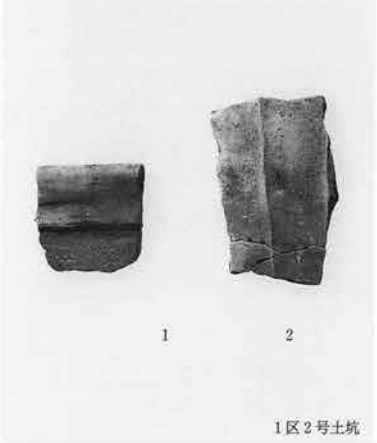




1区包含层-9



1区包含层-13



1

2

1区2号土坑



1区2号土坑-5



1区2号土坑-3



1区2号土坑-4



1区2号土坑-6



1区包含层-22



1区3号住-8



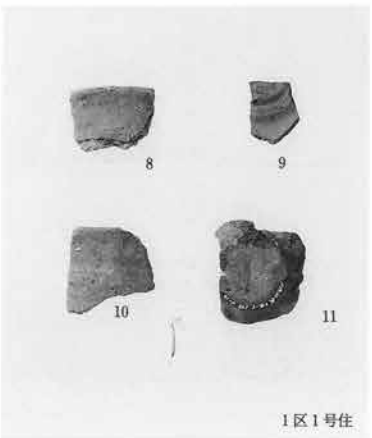
1区7号土坑-2



1区2号土坑-7

1区-2包含层-94

1区7号土坑-1



8

9

10

11

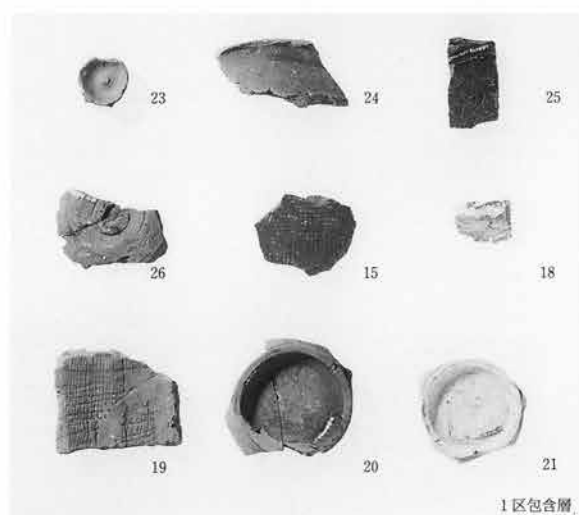
1区1号住



9

10

1区3号住







2区1号住-22



2区1号住-23



2区1号住-24



2区1号住-25



2区1号住-27



2区1号住-29



2区1号住-26



2区1号住-28



2区1号落-1



2区1号落-2



2区1号落-3



2区1号落-4



2区1号落-5



2区1号落-6



2区1号落-7



2区1号落-8



2区1号落-10



2区1号落-13



2区1号落-14



2区1号落-15



2区1号落-9



2区1号落-16



2区1号落-11



2区1号落-12



2区1号落-17



2区1号落-18



2区1号住-46



2区1号住-47



2区1号住-48

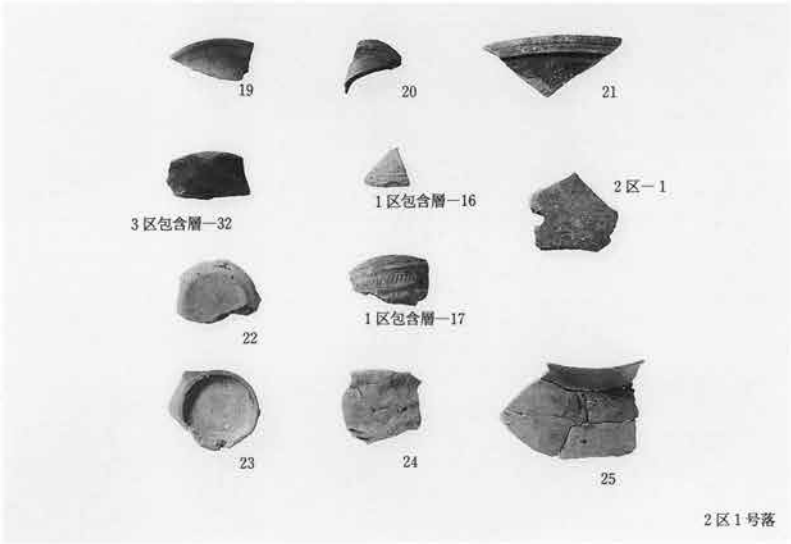
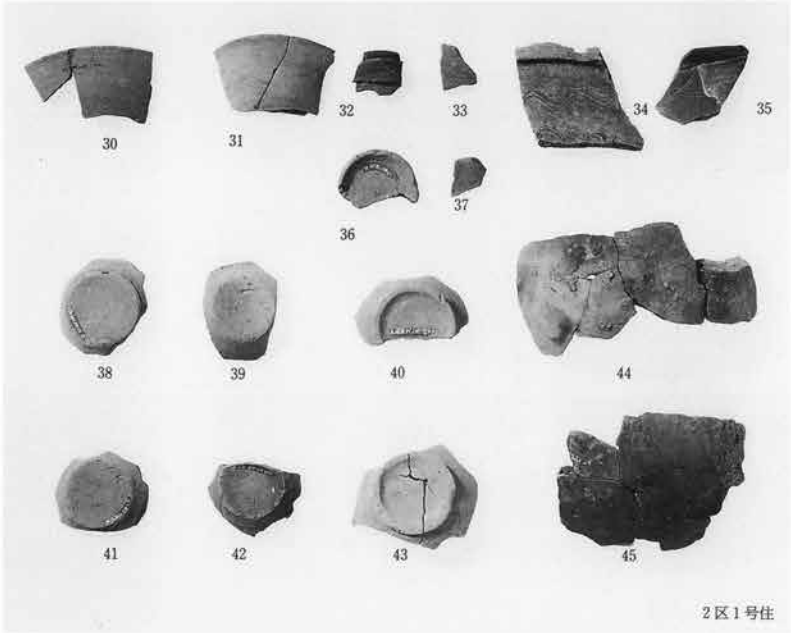


2区包含層-1



2区1号住-49







3区1号住-1



3区1号住-2



3区1号住-3



3区1号住-4



3区2号住-6



3区1号住-5



3区2号住-1



3区2号住-2



3区2号住-3



3区2号住-4



3区2号住-5



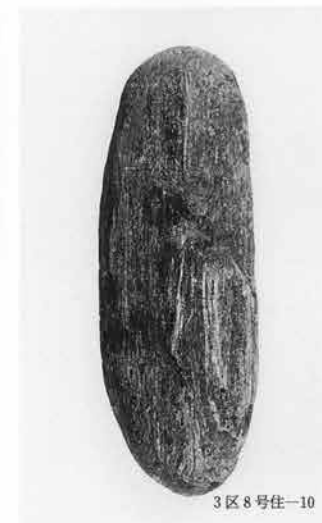
3区2号住-7

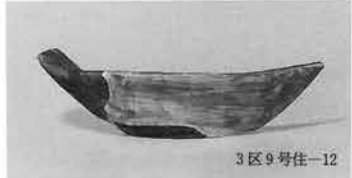
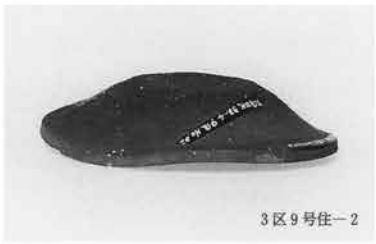


3区2号住-8











3区9号住-19



3区9号住-21



3区9号住-20



3区9号住-24



3区9号住-22



3区9号住-23



3区9号住-25



3区9号住-26



3区9号住-27



3区9号住-29



3区9号住-28



3区9号住-34



3区9号住-31



3区9号住-32



3区9号住-30



3区9号住-33



3区10号住-1



3区11号住-1



3区11号住-2



3区11号住-3



3区11号住-4



3区11号住-5



3区11号住-6



3区11号住-12



3区11号住-15



3区11号住-7



3区11号住-10



3区11号住-8



3区11号住-9



3区11号住-11



3区11号住-13



3区11号住-14



3区11号住-17



3区11号住-16

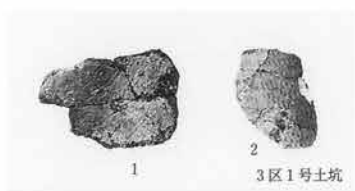
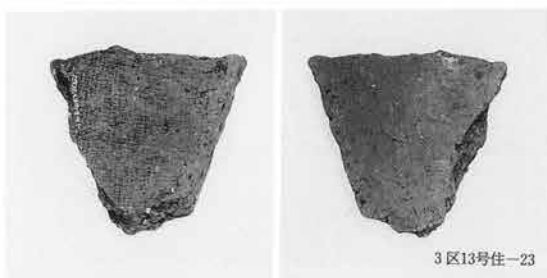


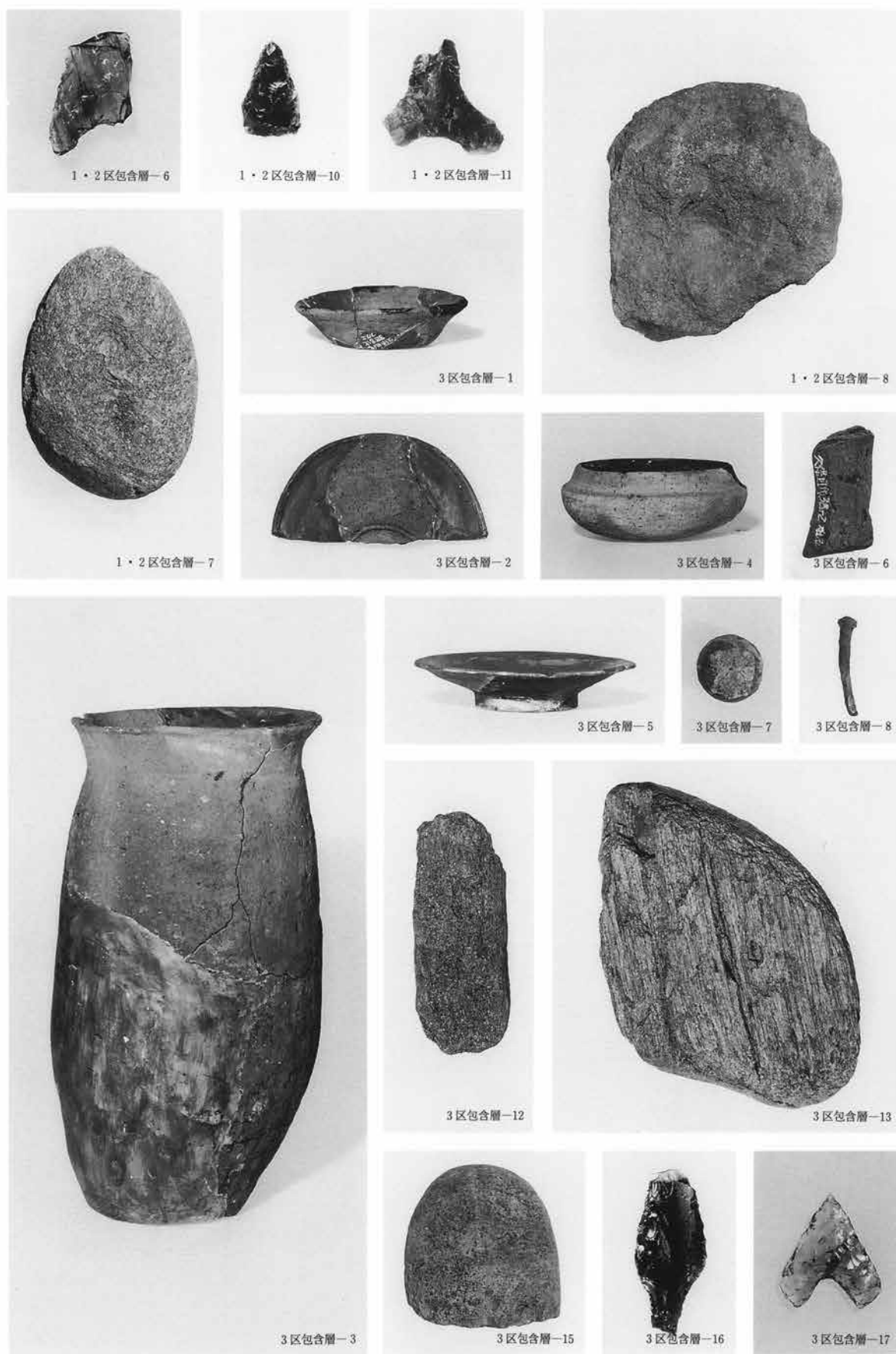
3区11号住-19



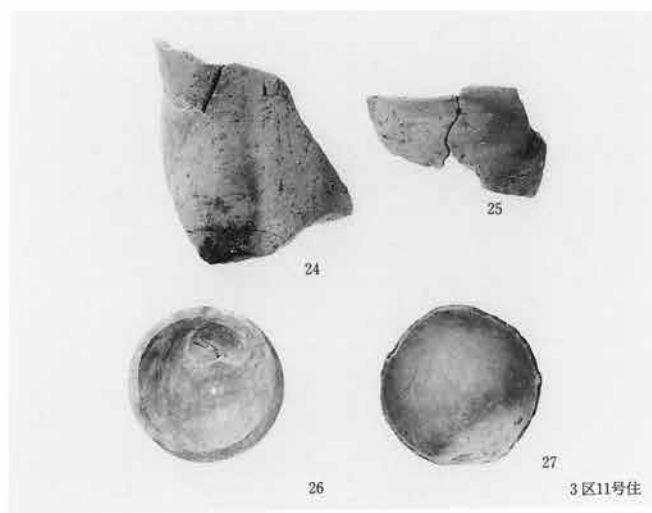
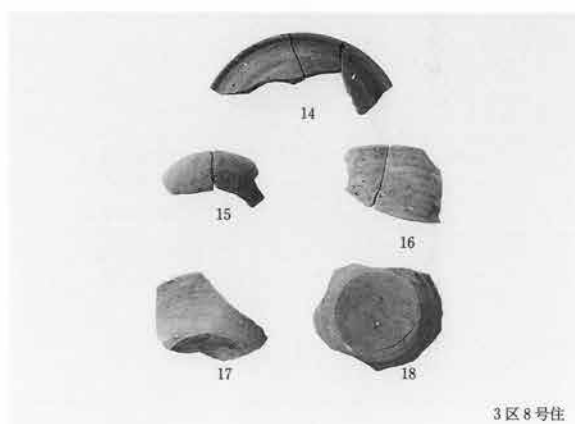


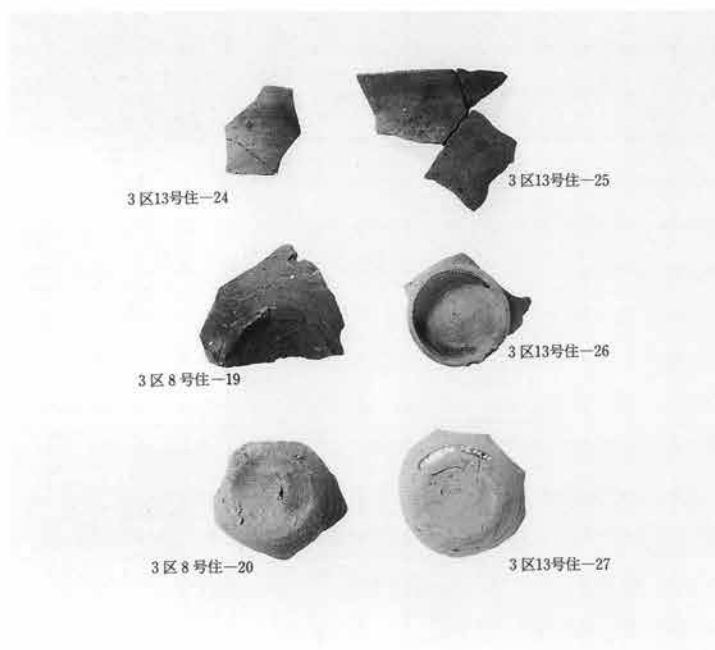












第7部 調査のまとめと自然科学分析の調査報告

第9章 調査のまとめと自然科学

地質調査及び火山灰同定報告書 西平井久保田代遺跡

古環境研究所

1 はじめに

西平井久保田代遺跡において野外地質調査を行い、主要な土層断面の記載と土壌試料の採取を行った。又採取された土壌試料についてテフラ検出分析を行い、地層の堆積年代や遺構の構築年代を明らかにした。本報告はその分析結果を報告するものである。

2 地質層序

1) 3-4区

ここでは厚さ50cm以上の亜円礫層の上位に黄灰色砂層（層厚35cm）の堆積が認められた（図1）。この砂層は、礫混じり作土（層厚130mm）により覆われている。ここでは砂層の堆積年代を明らかにするためにテフラ検出分析を行った。

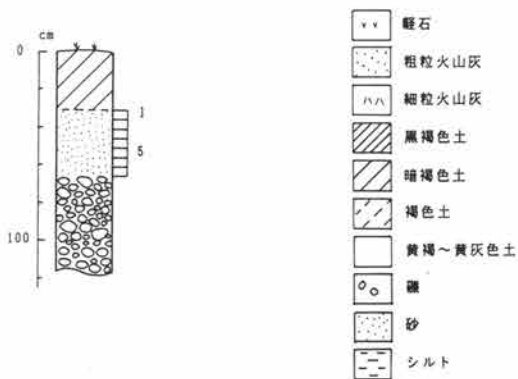


図1 西平井久保田代遺跡3-4区の土層柱状図

2) 3区1号道北

ここでは道路遺構の敷石の上位に、灰色土と黄褐色土を挟んで成層した降下テフラ層が認められた（図2）。このテフラ層は、下位より逆級化構造が認められる桃白色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径は6mm）、白色細粒火山灰混じり細粒軽石層（層厚0.8cm）、灰白色細粒火山灰層（層厚0.8cm）の連続から

構成される。本地点では道路遺構の構築年代を求めするためにテフラ検出分析を行った。

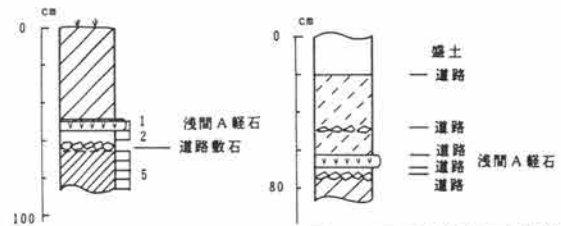


図2 西平井久保田代遺跡

3区1号道北の土層柱状図

図3 西平井久保田代遺跡

3区1号溝南の土層柱状図

3) 3区1号道南

本地点では、5層準から道路遺構が検出された（図3）。これらのうち下位より2層準目の道路遺構は、3区1号道北で認められた成層した降下テフラ層により覆われている。

4) 2区1号落ち込み

この落ち込み遺構の覆土中には、炭化物混じりの暗褐色土の上位に粗粒火山灰に富む暗褐色土（層厚8cm）が認められた（図4）。ここでは落ち込み遺構の構築年代を明らかにするために、粗粒火山灰に富む暗褐色土を中心にテフラ検出分析を試みた。

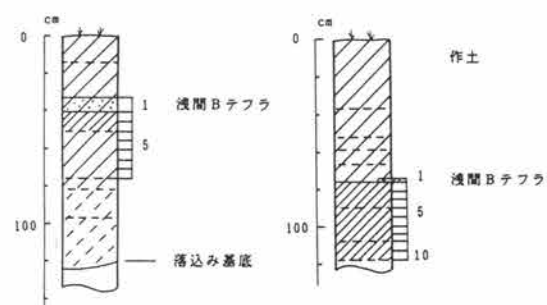


図4 西平井久保田代遺跡2区

1号落ち込み覆土の土層柱状図

図5 西平井久保田代

遺跡3-2区西地点の土層柱状図

5) 3-2区西地点

本地点では、ローム層の上位に黒褐色土（層厚42cm）と暗褐色土（層厚39cm）の堆積認められた（図

5)。暗褐色土の最下部2cmには、細粒軽石が多く認められた。この軽石は次に述べる3-2区東地点の褐色粗粒火山灰層に相当するものと考えられる。

6) 3-2区東地点

ここでは暗褐色土中に層厚6cmの褐色粗粒火山灰層が認められた(図6)。本地点では土層の堆積年代を求めるために、このテフラ層についてテフラ検出分析を行った。

7) 3-1区

本地点では、下位より暗褐色灰色砂質シルト層(層厚5cm以上)、黒褐色シルト質土(層厚17cm)、黒褐色土(層厚16cm)、暗褐色土(層厚15cm)、黒褐色土(層厚18cm)、暗褐色土(層厚72cm)の連続が認められた(図7)。

8) 1区1号落ち込み

本地点では最下位で認められた黄白色シルト層(層厚8cm以上)の上位に黒褐色土(層厚15cm)の堆積が認められた(図8)。ここでは黄白色シルト層の起源を明らかにするために、テフラ検出分析を行うことにした。

3 テフラ検出分析

(1) 分析方法

分析には合計24点の試料を用いた。分析は次の手順で行われた。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

1) 3-4区

試料番号5に最大径1.7mmの淡褐色がごく少量認められた(表1)。軽石の特徴から、この軽石は1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、新井、1979)に由来すると考えられる。検出された軽石の量が非常に少ないため明確には断言できないが、砂層の堆積年代については1108(天仁元)年以降の可能性も考えられる。

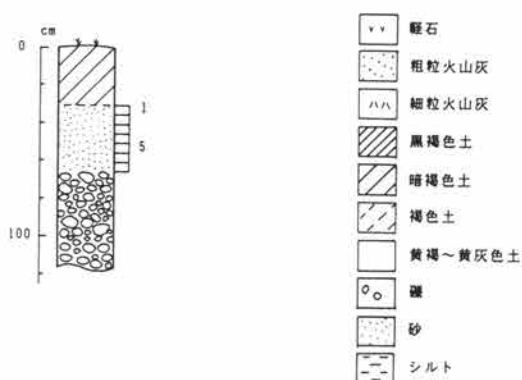


図1 西平井久保田代遺跡3-4区の土層柱状図

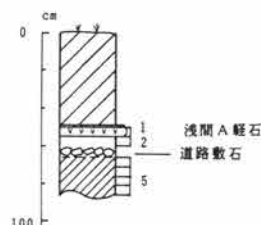


図2 西平井久保田代遺跡3区1号道北の土層柱状図

2) 3区1号道北

成層した降下テフラ層には、最大径5.8mmの白色軽石が認められた。軽石は比較的発泡がよいことから、このテフラ層は、1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A)に同定される。その下位の試料番号2には、ごく少量のAs-Bに由来する軽石が認められる。一方、道路遺構の下位の土層中に軽石は認められない。しかし試料番号2に含まれる軽石がとくに少ないことから、As-Bの降灰層準が道路遺構の上位にあるとは断定できない。道路構築以前に自然のあるいは人為的な削削のあったことも考えられるためである。

3) 2区1号落ち込み

粗粒火山灰に富む暗褐色土(試料番号1)には、淡褐色軽石が多く認められた。軽石の最大径は4.4mmである。この軽石はAs-Bに由来していると考えられる。このことから、落ち込み遺構年代は1108(天仁元)年以前と推定される。その下位の試料中には、攪乱作用により下位の土層中に混入したAs-Bを除いて軽石は認められなかった。

4) 3-2区東地点

褐色粗粒火山灰層（試料番号1）には、最大径7.1mmの淡褐色軽石が多く含まれている。この軽石はAs-Bに由来するものと考えられる。下位の試料番号9には最大径1.1mmの細粒の白色軽石がごく少量認められた。この軽石はスポンジ状によく発泡しており4世紀中葉朝熊火山から噴出した浅間C軽石（As-C、新井、1979、石川ほか、1979）、又は約1.3~1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石（As-YP、新井、1962、町田ほか、1984）に由来している可能性が考えられる。ただし軽石の量が非常に少ないために、この軽石を層位的に詳細に検討する材料に利用することはできない。

5) 3-1区

ここでは最上位の試料番号1に比較的多くの淡褐色軽石が認められた。軽石の最大径は3.1mmである。この軽石はAs-Bに由来していると考えられる。すなわち、ここでは遺構確認面の直下にAs-Bの降灰層準がある。

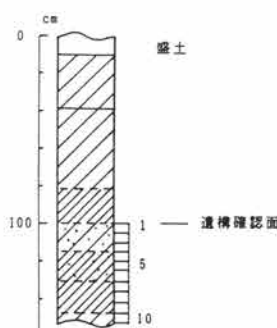


図7 西平井久保田代遺跡3-1区の土層柱状図

6) 1区1号落込み

黄白色シルトに相当する試料番号1からは淡褐色軽石がごく少量認められる。軽石の最大径は2.8mmで、As-Bに相当する。ただしこの軽石については、

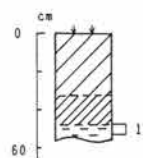


図8 西平井久保田代遺跡1区1号落込みの土層柱状図

その量が少ないために攪乱作用により上位の土層から混入した可能性も考えられる。

4 ま と め

西平井久保田代遺跡において野外地質とテフラ検出分析を行った結果、下位より浅間一板鼻黄色軽石（As-YP）または浅間C軽石（As-C）に由来する可能性がある軽石、浅間Bテフラ（As-B）に由来する軽石、浅間A軽石（As-A）が検出された。これらの示標テフラ層との層位関係から、3区1号道北で認められた道路遺構はAs-Aの下位にあることが明らかになった。また3区1号南で検出された5層準の道路遺構のうち、最下位の道路遺構はAs-Aの下位、下位より2層準目の道路遺構はAs-A直下、下位より3層準目の道路遺構はAs-A直上、さらに上位2層準の道路遺構はAs-Aの上位にあることが明らかになった。さらに2区1号落込みの構築年代はAs-Bの降灰以前であることも判明した。

文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部の第四紀編年、群馬大学紀要自然科学編、10、p.1-79。
 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降のテフラ層、考古学ジャーナル、no.157、p.3-40。
 石川正之助・井上唯男・梅沢重昭・松本浩一（1979）火山堆積物と遺跡I。考古学ジャーナル、no.157、p.3-40。
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」p.865-928。

自然科学分析報告書 東平井土井下遺跡

古環境研究所

1 調査の目的

後期更新世に形成されたと考えられる藤岡扇状地の扇頂部に位置する東平井土井下遺跡の発掘調査では、扇状地を構成する地層の良好な地質断面が作成された。そこで野外地質調査を行い、地層の堆積状況を明らかにすることを試みた。なお、野外地質調査により検出されたテフラ試料（10点）についてテフラ検出分析を行い、示標テフラとの同定を試みた。

2 テフラ検出分析の方法

テフラ検出分析は、以下の手順で行われた。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の特徴を観察。

3 地質層序

(1) 台地部

台地部の地質層序を示す柱状図を、図1～3に示した。これらの地点では、野外観察により5層準にテフラ粒子が認められた。第1地点で認められた最上位のテフラ（図1、試料番号1）は、灰色土中に混在する白色軽石である。軽石はよく発泡しており、その最大径は4.9mmである。（表1）。このテフラは、軽石の特徴から1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A、新井、1979）に同定される。

その下位にあるテフラ（図2、試料番号2）は、暗灰色土の中に濃集する淡褐色軽石である。軽石の発泡は比較的良く、その最大径は3mmである。軽石は、その特徴から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、新井、1979）に同定される。

As-Bの下位の3試料には、白色の細粒がごく僅かに認められた。これらのうち、最下位の試料番号5付近に白色軽石の降灰層準があるものと思われる。軽石はよく発泡しており、その最大径は1.2mmである。この軽石は、その特徴から4世紀中葉に浅間

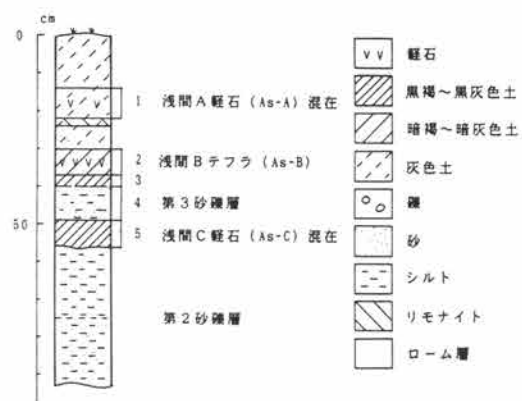


図1 東平井土井下遺跡第1地点の地質層序

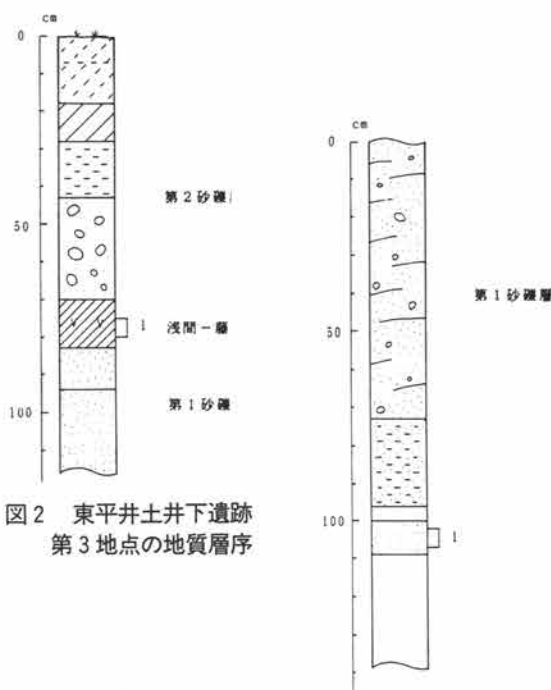


図2 東平井土井下遺跡第3地点の地質層序

図3 東平井土井下遺跡調査事務所西地点の地質層序

火山から噴出した浅間C軽石(As-C、新井、1979、石川ほか、1979)に同定される可能性がある。

第3地点では、第1地点の最下位に認められた礫まじり砂層の下位の黒褐色土の中に、最大径2.0mの灰色軽石が認められた(図2、試料番号1)。軽石の発泡の程度は、よくない。軽石は、その特徴から浅間火山から噴出した浅間-藤岡軽石(As-Fo、早田、1991)に同定される可能性が大きい。藤岡市寺前遺跡では、As-Fo直下の黒ボク土から、 $8,190 \pm 170$ y. B.Z. (GaK-14945)の14C年代が得られている(群馬県埋蔵文化財調査事業団、未公表資料)。なお、この地点では、As-Foの上位の砂礫層上部から縄文時代中期および弥生時代の土器が検出されている。

発掘調査事務所の西の工事現場では、第3地点の最下位の砂層の下位にいわゆるローム層が認められた。ローム層中に挟まれる砂層(図3、試料番号1)について分析を行ったところ、円磨された結晶片岩に混じって、火山ガラスが付着した自形の斜方輝石や単斜輝石や斜長石などが認められた。このことから、この砂層は約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間-板鼻黄色軽石(As-YP、新井、1962、町田ほか、1984)の二次堆積物と考えられる。テフラ起源の粒子が比較的多いことから、As-YPの降灰層準にかなり近いと考えてよいものとおもわれる。

以上のように、台地部では3層準に砂礫層の堆積が認められた。下位より順に、第1～第3砂礫層と呼ぶことにする。

(2) 埋没谷部

東平井土井下遺跡第15区では、埋没谷の断面が作成された。以下、西より順にA～F地点の層序を述べる。A地点では埋没谷の基盤にあたる地層が観察された。ここでは、軽石を含む黒褐色土(図4、試料番号1)と、その下位のAs-YP上位にある砂礫層の堆積が認められた。黒色土に含まれる軽石の最大径は2.6mmで、発泡はよくない。この軽石は、As-Foに由来するものと思われる。B地点(図5)では、このAs-Foを切って形成された埋没谷の基底が認められる。

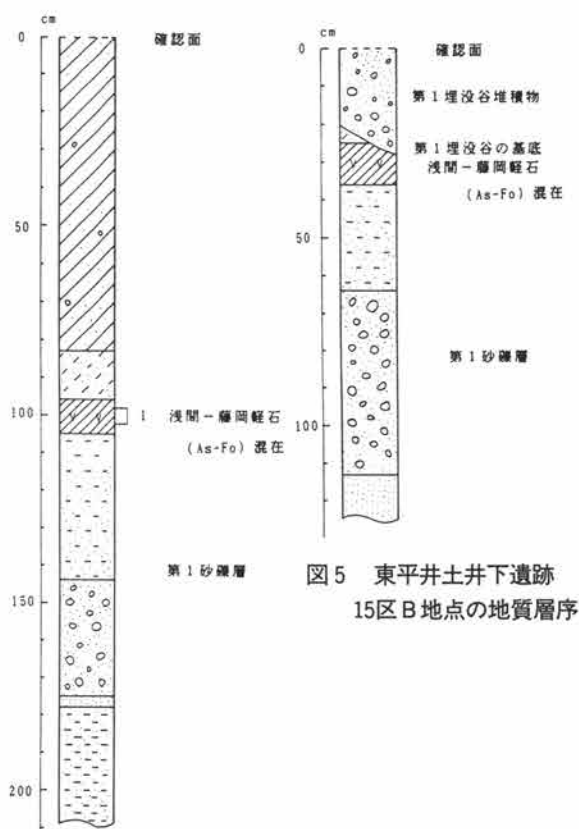


図4 東平井土井下遺跡
15区A地点の地質層序

C地点では、B地点の谷を埋めた砂礫層の上位に、軽石を混在する暗灰色土(図6、試料番号1)の堆積が認められる。軽石は白色で発泡がよく、その最大径は0.9mmである。この軽石は、As-Cに由来するものと考えられる。なお、この土層からは古墳時代後期の遺物が検出されている。これらのことから、B地点およびC地点で観察された埋没谷の形成は、As-Fo降灰(約8,200年前)以降で、As-C(4世紀中葉)降灰以前と考えられる。

またD地点では、埋没谷の離水時期の河道が検出された。この河道の覆土の中にも、白色軽石の濃集層(図7、試料番号1)が認められた。軽石は白色で発泡がよく、その最大径は1.2mmである。この軽石も、As-Cに由来するものと考えられる。これらの事実は、前述の埋没谷の形成時期を支持している。

E地点(図8)では、B地点およびC地点で確認された埋没谷の堆積物を切る、より新しい谷を埋めた堆積物(礫まじり砂層)が認められた。この堆積

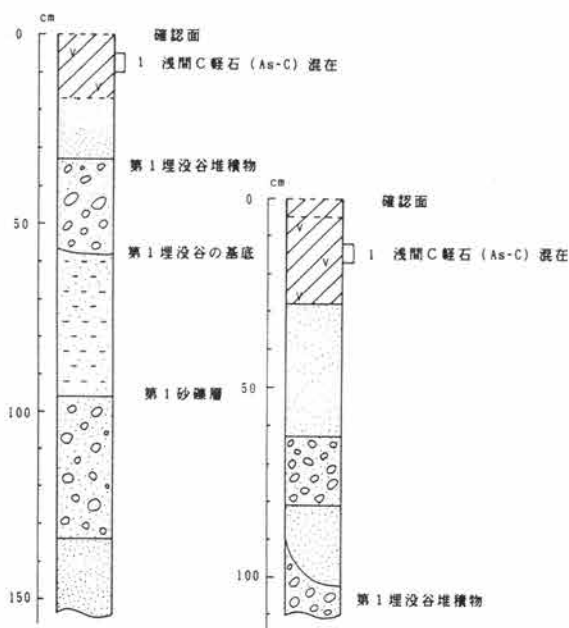


図6 東平井土井下遺跡 15区C地点の地質層序 図7 東平井土井下遺跡 15区D地点の地質層序

物を切って溝遺構が構築されている。さらにF地点（図9）では、E地点で認められた谷を埋めた堆積物をさらに切る新しい谷の堆積物（砂層）が認められた。この砂層からは弥生～奈良・平安時代の土器が検出されており、遺物の年代からその離水が奈良・平安時代以降であることがわかる。なお、ここでの遺構確認面はAs-B降灰層準と考えられていることから、離水は1108（天仁元）年以前である可能性が大きい。すなわち、離水は奈良～1108（天仁元）年の時期と推定される。

以上のように埋没谷部では、3つの埋没谷の基底が認められた。これらの谷を下位より順に第1～3埋没谷と呼ぶことにする。またそれぞれの谷を埋めた砂礫層を、下位より第1～3埋没谷堆積物と呼ぶことにする。

4 小 結

東平井土井下遺跡において野外地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った結果、下位より浅間～藤岡軽石（As-Fo、約8,200年前）、浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）、浅間A軽石（As-A、1783年）の4層のテフラの降灰が認

められた。また浅間～板鼻黄色軽石（As-YP、約1.3～1.4万年前）のおおよその降灰層準も明らかにされた。

台地部では、As-YPとAs-Foの間（第1砂礫層）、As-FoとAs-C（遺物からは弥生時代以前）の間（第2砂礫層）、さらにAs-CとAs-Bの間（第3砂礫層）の3層準に砂礫層が認められることになる。一方、埋没谷部では、As-Fo降灰以降でAs-C降灰以前の時期に大規模な谷（第1埋没谷）の形成・埋積が行われ、その後、奈良～平安時代までに少なくとも2回の谷（第2埋没谷、第3埋没谷）の形成・埋積が行われたことが明らかになった。

東平井土井下遺跡台地部の平坦な地形は、第1砂礫層、あるいはそれ以前の砂礫の堆積によって形成されているものと考えられる。また第2砂礫層の堆積は第1埋没谷の埋積時期に、第3砂礫層の堆積は第2あるいは第3埋没谷の埋積時期に各々行われた可能性が大きいと考えられる。

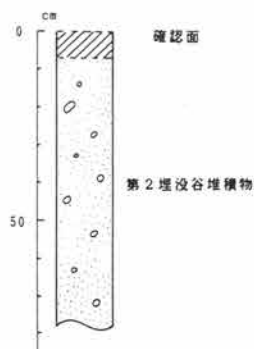


図8 東平井土井下遺跡 15区E地点の地質層序

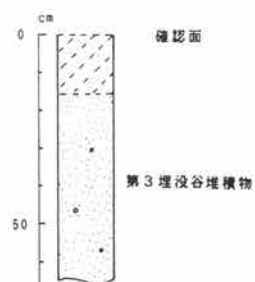


図9 東平井土井下遺跡 15区F地点の地質層序

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編、10、p.1-79。
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、no.157、p.41-52。
- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一(1979)火山堆積物と遺跡I。考古学ジャーナル、no.157、p.3-40。
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカatalogー。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」p.865-928。
- 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち。佐久考古通信、no.53、p.2-7。

II 東平井遺跡のプラント・オパール分析

1 はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、東平井土井下遺跡における稲作跡の探査を試みたものである。

2 試料

1991年12月18日に現地調査をおこなった。調査地点は第1地点～第4地点の4地点である。このうち、第3地点では浅間Aテフラ（As-A）が、その他の地点出は浅間Bテフラ（As-B）が検出されていた。試料は、これらのテフラ混層およびその下層を中心に、各層ごとに5～10cm間隔で採取した。採取用具は、容量50cm³の採土管およびポリ袋等を用いた。図1に各地点の土層断面図（模式図）と分析試料の採取箇所を示す。

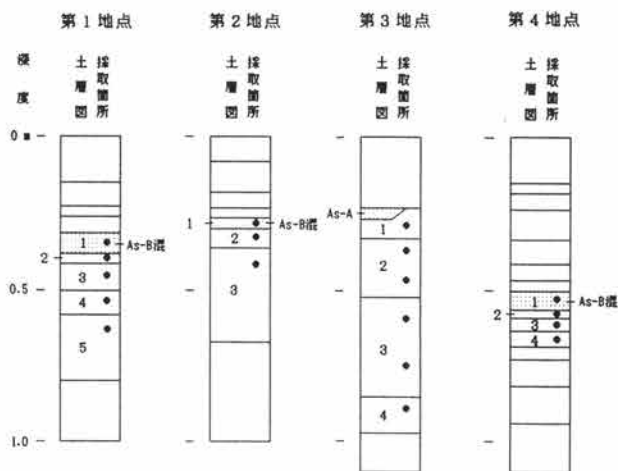


図1 土層柱状図と分析試料の採取箇所

3 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で

秤量

- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である。

（杉山・藤原、1987）。

4 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図2、図3に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ属（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5 考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピー

第1地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1	31	7	1.33	5,900	5.62	1,700	18,700	4,200	0
2	38	3	1.27	2,800	1.08	2,800	48,900	1,800	0
3	41	9	1.39	2,800	3.52	5,600	29,300	8,500	0
4	50	8	1.33	900	0.91	2,900	48,600	7,900	0
5	58	10	1.40	0	0.00	8,700	42,900	13,600	0

第2地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1	26	4	1.32	7,400	4.00	900	27,800	6,500	0
2	30	6	1.34	5,700	4.70	2,800	26,800	4,800	0
3	36	10	1.33	0	0.00	800	30,700	3,300	0

第3地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1	23	10	1.41	2,500	3.61	1,600	37,800	5,800	0
2-1	33	10	1.45	800	1.13	800	27,900	3,400	0
2-2	43	9	1.40	0	0.00	800	4,900	1,600	0
3-1	52	17	1.34	1,700	3.85	1,700	21,200	4,400	0
3-2	69	16	1.30	0	0.00	900	16,400	3,800	0
4	85	12	1.20	0	0.00	0	6,800	1,500	0

第4地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1	50	6	1.30	1,800	1.42	1,800	9,000	1,800	0
2	56	3	1.30	5,900	2.35	900	13,800	1,900	0
3	59	4	1.30	3,700	1.98	1,800	13,000	1,800	0
4	63	5	1.30	900	0.57	2,900	25,500	3,900	0

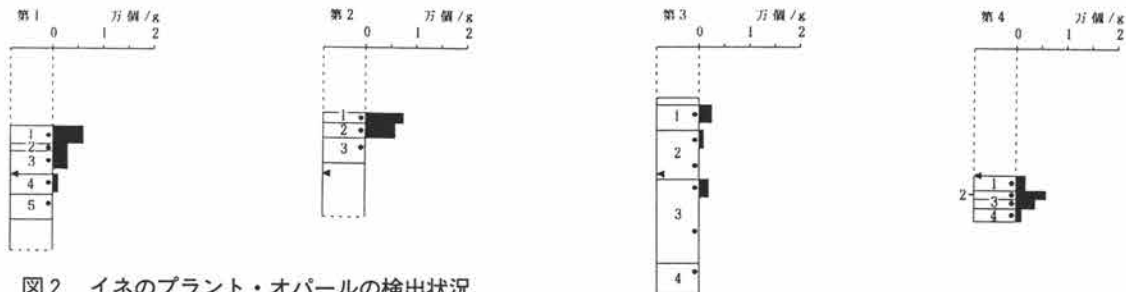


図2 イネのプラント・オパールの検出状況

(注) ◀印は50cmごとのスケール，●印は分析試料の採取箇所

クが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

第1地点では、1層(As-B混)～5層について分析を行った。その結果、5層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、1層ではプラント・オパール密度が5,900個/gと高い値である。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。2層～4層では、密度が

900～2,800個/gと比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

第2地点では、1層(As-B混)～3層について分析を行った。その結果、1層および2層(As-B直下層)からイネのプラント・オパールが検出された。密度は7,400個/gおよび5,700個/gといずれも高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

第3地点では、1層(As-A直下層)～4層について分析を行った。その結果、1層、2層上部、およ

び3層上部からイネのプラント・オパールが検出された。密度は800～2,500個/gと比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

第4地点では、1層(As-B混)～4層について分析を行った。その結果、これらの各層からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、2層(As-B直下層)では密度が5,900個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。1層、3層、4層では、密度が900～3,700個/gと比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

6 まとめ

以上の結果から、As-B混層および直下層では、調査区の比較的広い範囲で稲作が行われていたものと推定される。

【参考文献】

杉山真二・藤原宏志。1987。川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山—古環境編—。川口市遺跡調査会報告、第10集、281—298。

藤原宏志。1976。プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学、9：15—29。

藤原宏志。1979。プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)

藤原宏志・杉山真二。1984。プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探索—。考古学と自然科学、17：73—85。

新井房夫(1962)関東盆地北西部の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編、10、p.1—79。

新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、no.157、p.41—52。

石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一(1979)火山堆積物と遺跡I。考古学ジャーナル、no.157、p.3—40。

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、p.865—928。

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編、10、p.1—79。

新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、no.157、p.41—52。

石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一(1979)火山堆積物と遺跡I。考古学ジャーナル、no.157、p.3—40。

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、p.865—928。

早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち。佐久考古通信、no.53、p.2—7。

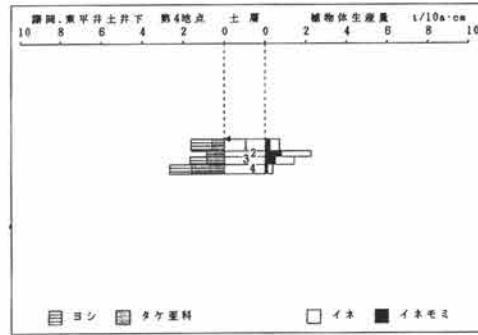
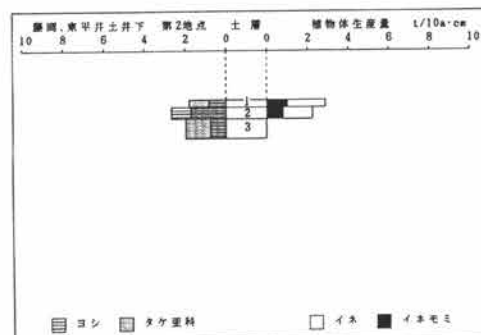
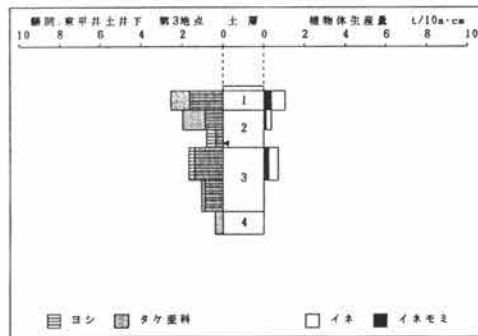
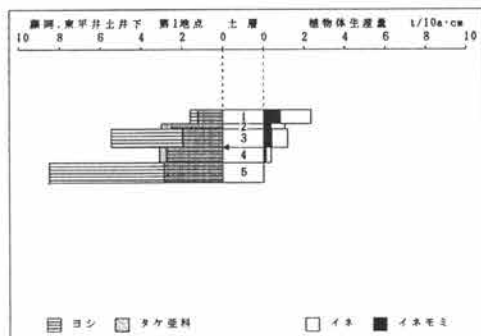


図3 おもな植物の推定生産量と変遷

(注) ◀印は50cmごとのスケール

西平井遺跡出土土器胎土分析

(株) 第四紀 地質研究所 井上 巖

X線回析試験及び電子顕微鏡観察

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{mm}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製TNX-8020 X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu, Filter : Ni, Voltage : 40Kv,
Current : 30mA, ステップ角度 : 0.02°

計数時間 : 0.5ESC。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真を撮影した。35～350倍は胎土の組織、750～5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示しており、左側には、各胎土

に対する分類を行った結果を示している。X線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)を m/m 単位で測定したものである。電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回析試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

MO、Mi、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回析試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。モンモリロナイトは $\text{Mo}/(\text{Mo}+\text{Mi}+\text{Hb}) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。三角ダイアグラム内の1～4はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2) Mo-Ch、Mi-Hb 菱形ダイアグラム

第2図に示すように菱形ダイアグラムを1～9に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、chの2成分が含まれない、c) Mi、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムは Mont-Ch、Mica-Hb の組合せを表示するものである。Mont-Ch、Mica-Hb のそれぞれのX線回析試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mo/Mo+Ch×100と計算し、Mi、Hb、Ch も各々同様に計算し、記載する。菱形ダイアグラム内にある1～7はMo、Mi、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示す通りである。

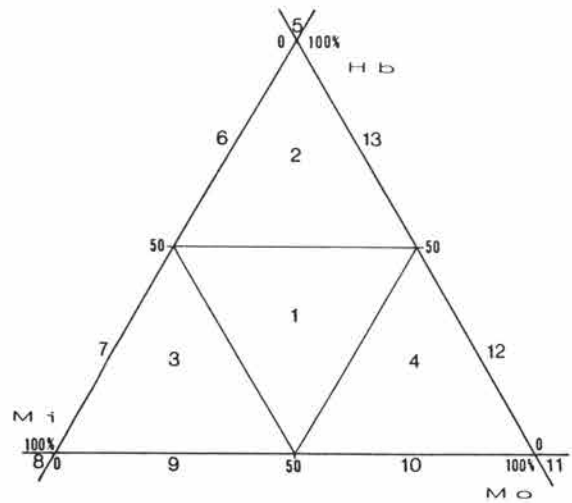
2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回析試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストパーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストパーライトより更に低い温度で生成する。

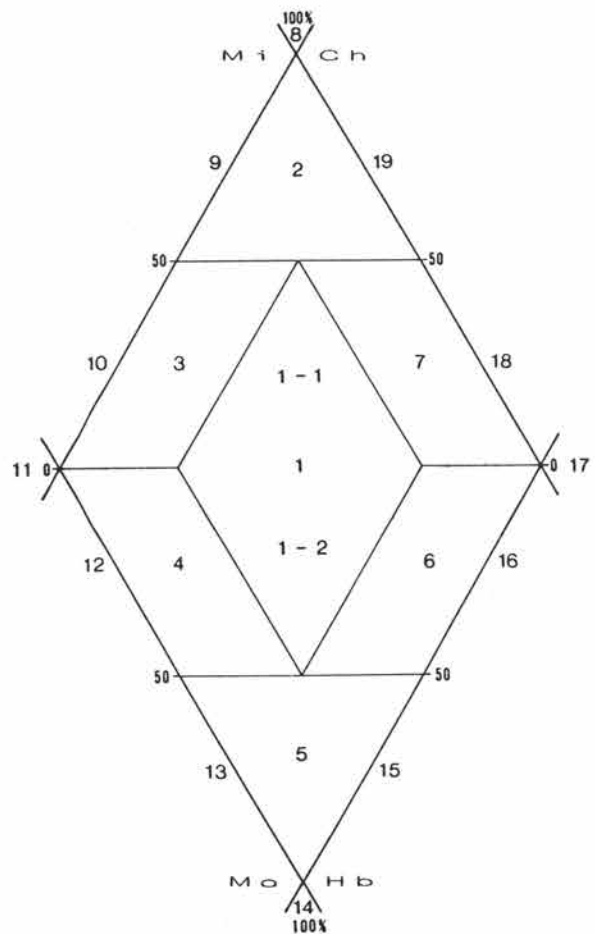
これらの事実に基づき、X線回析試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発砲している。
- 焼成ランクII：ムライトとクリストパーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- 焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストパーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大き



第1図 三角ダイアグラム位置分類図



第2図 菱形ダイアグラム位置分類図

な比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3 分析結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は第1表胎土性状表に示すように、第3図三角ダイヤグラム、第4図菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいて、A～Fの6タイプに分類された。分析数は10個に体して6タイプというのは多すぎる。最も多いタイプはCタイプの3個で、次いでDとFタイプの2個、あとは各1個である。

電子顕微鏡によるガラスの分析では、西平井-4と6の須恵器の坏が焼成ランクIと高く、次いで3と7の焼成ランクII、あとは中粒のガラスが生成した焼成ランクIIIである。

Aタイプ：西平井-5

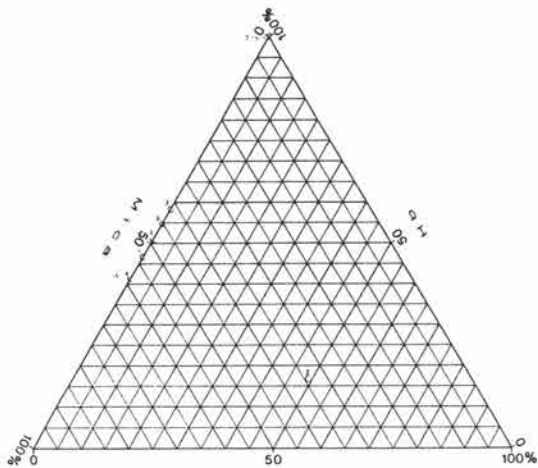
Mont、Mica、Hbの3成分を含み、Ch 1成分に欠ける。固体数は1個である。

Bタイプ：西平井-7

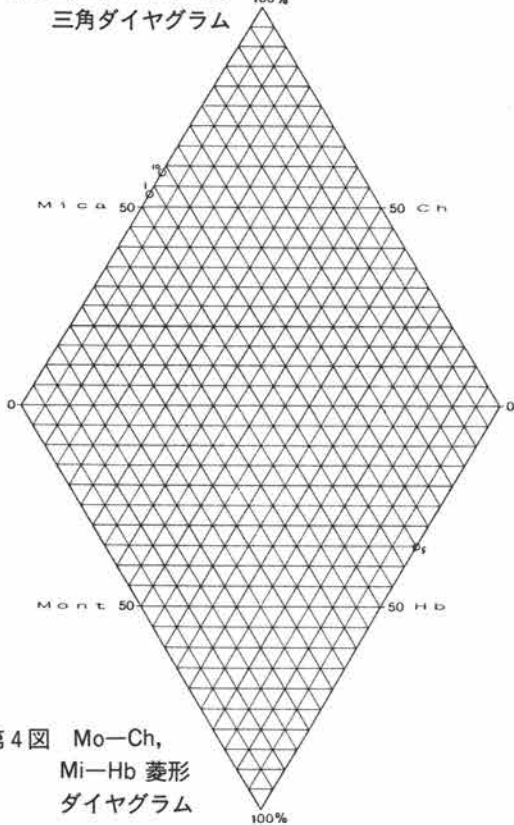
Hb 1成分を含み、Mont、Mica、Chの3成分に欠ける。固体数は1個である。

Cタイプ：西平井-2、3、8

Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。固体数は3個と最も多い。



第3図 Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム



第4図 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

第1表 胎土性状表

試料 No.	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														ガラス	備考
		Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	CH(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au		
西平井-1	D III	7	9		280	245	184		2,172	1,531	109							中粒	坏9 C
西平井-2	C III	6	20		192	202			2,068	1,232	106							中粒	坏9 C
西平井-3	C II	6	20		87	118			1,718	623	189	53						中～粗粒	坏9 C
西平井-4	F I	14	20						1,302	327	147	54						粗粒	坏9 C
西平井-5	A III	1	16	659	459	251			1,583	538	81			82				中粒	坏9 C
西平井-6	F I	14	20						1,634	374	183							粗粒	坏9 C
西平井-7	B II	5	20			97			2,125	809	99							中～粗粒	坏9 C
西平井-8	C III	6	20		118	139			2,077	935	147							中粒	坏9 C
西平井-9	E III	7	20		284	205			2,330	1,235	104							中粒	坏9 C
西平井-10	D III	7	9		224	163	281		1,974	742	141							中粒	坏9 C

Dタイプ：西平井—1、10

Mica、Hb、Chの3成分を含み、Mont
1成分に欠ける。固体数は2個である。

Eタイプ：西平井—9

Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Ch
の2成分に欠ける。組成的にはCタイ
プに近い。固体数は1個である。

Fタイプ：西平井—4、6

Mont、Mica、Hb、Chの4成分に欠け
る。高温で焼成されたために鉱物が分
解してガラスに変質し、4成分が検出
されなかった。

以上の結果から明らかな様に、土器胎土は6タイプ
に分類され、多種にわたっていることがわかる。

3—2石英 (Qt) —斜長石 (Pl) の相関について土
器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土
の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土
器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合
して素地土を作るといことは個々の集団が持つ土
器制作上の固有の技術であると考えられる。自然の
状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有
している。この比は後背地の地質条件によって各々
異なってくるものであり、言い換えれば、各地のお
ける砂はおのこの固有の石英と斜長石比を有してい
ると言える。この固有の比率を有する砂をどの程度
粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技
術の一端と考えられる。

第5図 Qt—Pl 相関図に示すように、土器は①
～③の3グループに分類された。

①グループ：西平井—3、4、5、6

4と6はFタイプ、3はCタイプ、5
はAタイプで、石英の強度が1300～
1750、斜長石の強度が300～600の範囲
にあり、固体数は4個と多い。

②グループ：西平井—7、8、10

石英は1900～2200、斜長石は700～1000
の範囲にあり、固体数は3個で、集中
度も高い。7はBタイプ、8はCタイ

プ、10はDタイプと各々タイプが異な
る。

③グループ：西平井—1、2、9

石英は2000～2300、斜長石は1200～
1600の範囲にあり、固体数は3個であ
る。1はDタイプ、2はCタイプ、9
はEタイプと各々タイプが異なる。

以上の結果から明らかな様に、②と③の両グルー
プは斜長石の強度が高く異質である。

また、各グループは集中度が高く、関連性が高い
様に見受けられる。須恵器の坏は4と6であるがと
もに①グループに属し、関連性が認められる。

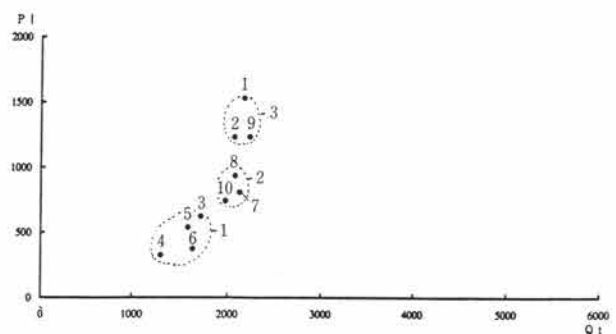
4 化学分析結果

化学分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡と
2001型エネルギー分散型X線分析装置 (EDS) で
行った。実験条件は加速電圧：15KV、分析時間：
200秒、倍率：200倍、分析方法：スプリント法、分
析元素は第2表に示すように10元素について行っ
た。

4—1 SiO_2 — Al_2O_3 の相関について

第6図 SiO_2 — Al_2O_3 図に示すように、下記の3グ
ループに分類された。

①グループ：西平井—5、6、7 ②グループ：
西平井—1、2、8、9、 ③グループ：西平井—
3、4、10で、これらはともに Qt—Pl の相関で認め
られたグループとも関連性が認められる。特に、5
と6の2個、1、2、9の3個、3と4の2個は Qt
—Pl 図と同じように1つのグループに属している。



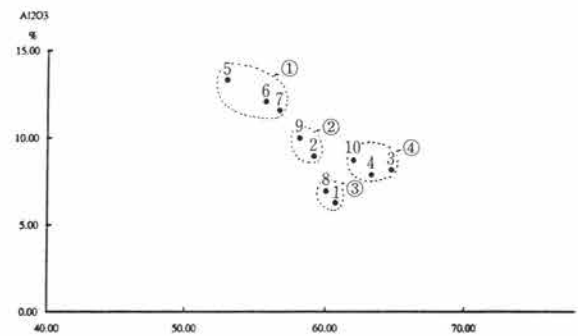
第5図 Qt—Pl 相関図

第2表 化学分析表

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	備 考
西平井-1	1.33	2.96	22.76	60.71	2.20	1.67	1.41	0.37	6.28	0.31	100.00	坏9 C
西平井-2	1.01	2.86	22.70	59.17	1.99	1.85	1.46	0.00	8.96	0.00	100.00	坏9 C
西平井-3	0.87	2.56	19.09	64.74	2.06	1.10	0.94	0.30	8.17	0.16	99.99	坏9 C
西平井-4	1.70	2.73	18.78	63.32	2.53	1.31	1.35	0.39	7.89	0.00	100.00	坏9 C
西平井-5	0.86	3.71	21.71	52.99	3.45	1.92	1.80	0.23	13.33	0.00	100.00	坏9 C
西平井-6	2.17	3.21	21.46	55.75	2.72	1.15	1.07	0.38	12.09	0.00	100.00	坏9 C
西平井-7	0.94	3.02	21.14	56.72	2.55	1.80	1.84	0.07	11.59	0.34	100.01	坏9 C
西平井-8	1.16	2.08	24.80	60.03	1.83	1.24	1.49	0.28	6.95	0.15	100.01	坏9 C
西平井-9	1.38	2.53	22.87	58.18	2.33	1.40	1.31	0.00	10.00	0.00	100.00	坏9 C
西平井-10	0.94	2.73	21.30	61.99	2.18	1.15	0.99	0.00	8.72	0.00	100.0	坏9 C

4-2 SiO₂-Fe₂O₃ の相関について

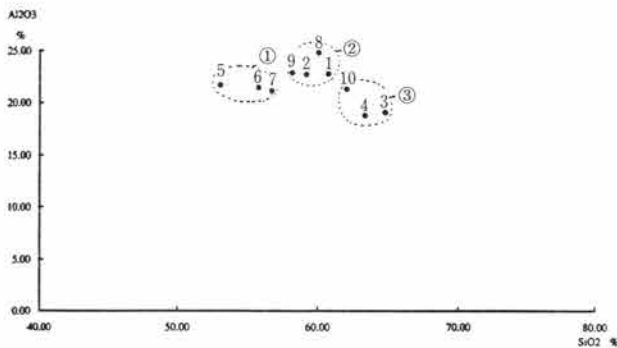
第7図 SiO₂-Fe₂O₃ 図に示すように、下記の4グループに分類された。①グループは西平井-5、6、7の3個、②グループは西平井-2、9、の2個、③グループは西平井-1、8の2個、④グループは3、4、10の3個である。①と④グループはSiO₂-Al₂O₃と同じ土器で構成され、①と③はSiO₂-Al₂O₃の2グループが2つに分れたものであり、両者は同じ傾向を示す。



第7図 SiO₂-Fe₂O₃図

は粗粒のガラスが生成し、焼成ランクは高い型は中粒のガラスが生成した焼成ランクが主体であることが判明した。

- c) 石英と斜長石の相関では①～③の3グループに分類され、これらのグループのうち②と③の2グループは斜長石の強度が高く異質である。
- d) 化学分析結果では石英と斜長石の相関と同じ傾向が得られた。特に西平井-5、6、西平井-3、4、西平井-1、2、9は石英と斜長石の相関と同じグループを形成し、関連性が明かとなった。



第6図 SiO₂-Al₂O₃図

5 まとめ

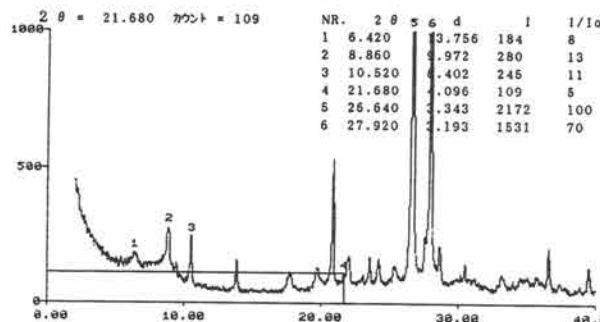
- a) 土器は10個の分析に対してA～Fの6タイプに分類された。これは高温で焼成された須恵器や土師器など異質なものが多いためである。
- b) 電子顕微鏡によるガラスの分析では須恵器の坏

西平井遺跡出土土器胎土分析

試料名: Nisihirai-1

測定日時: 94年01月07日 10時40分56秒

分析日時: 94年01月07日 10時43分15秒



--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 127.39 秒 有効時間 : 100.00 秒

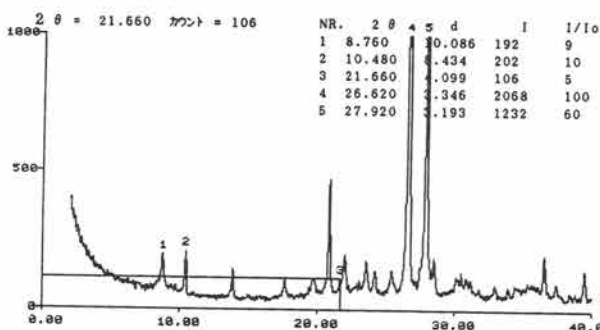
--- 分析 結果 ---

元素	分析値	重量%	原子量%	化合物	重量%	ドレシオ
Na	K	0.98	0.90	Na2O	1.33	0.0025
Mg	K	1.79	1.55	MgO	2.96	0.0064
Al	K	12.04	9.39	Al2O3	22.76	0.0508
Si	K	26.38	21.24	SiO2	60.71	0.1248
K	K	1.83	0.98	K2O	2.20	0.0102
Ca	K	1.19	0.63	CaO	1.67	0.0070
Ti	K	0.85	0.37	TiO2	1.41	0.0048
Mn	K	0.29	0.11	MnO	0.37	0.0016
Fe	K	4.39	1.65	Fe2O3	6.28	0.0254
Ni	K	0.24	0.09	NiO	0.31	0.0014
O	-	18.02	63.10			
合計		100.00	100.00		100.00	

試料名: Nisihirai-2

測定日時: 94年01月07日 10時46分22秒

分析日時: 94年01月07日 10時48分58秒



--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 126.26 秒 有効時間 : 100.00 秒

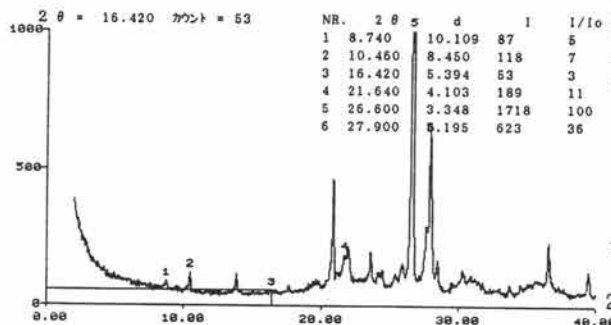
--- 分析 結果 ---

元素	分析値	重量%	原子量%	化合物	重量%	ドレシオ
Na	K	0.75	0.69	Na2O	1.01	0.0018
Mg	K	1.72	1.50	MgO	2.86	0.0060
Al	K	12.01	9.43	Al2O3	22.70	0.0497
Si	K	27.66	20.85	SiO2	59.17	0.1197
K	K	1.65	0.89	K2O	1.99	0.0091
Ca	K	1.32	0.70	CaO	1.85	0.0078
Ti	K	0.88	0.39	TiO2	1.46	0.0049
Mn	K	0.00	0.00	MnO	0.00	0.0000
Fe	K	6.27	2.38	Fe2O3	8.96	0.0359
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	17.74	63.18			
合計		100.00	100.00		100.00	

試料名: Nisihirai-3

測定日時: 94年01月07日 10時51分28秒

分析日時: 94年01月07日 10時53分48秒



--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 127.75 秒 有効時間 : 100.00 秒

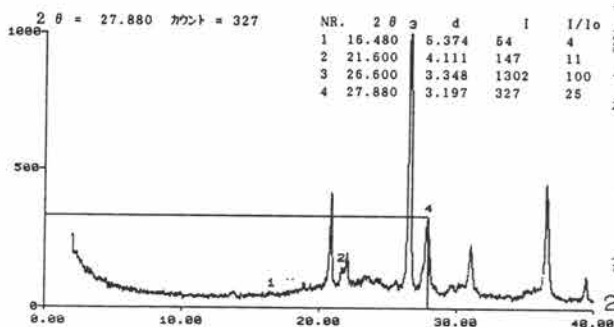
--- 分析 結果 ---

元素	分析値	重量%	原子量%	化合物	重量%	ドレシオ
Na	K	0.65	0.59	Na2O	0.87	0.0016
Mg	K	1.54	1.34	MgO	2.56	0.0055
Al	K	10.10	7.89	Al2O3	19.09	0.0433
Si	K	30.26	22.70	SiO2	64.74	0.1385
K	K	1.71	0.92	K2O	2.06	0.0097
Ca	K	0.79	0.41	CaO	1.10	0.0047
Ti	K	0.56	0.25	TiO2	0.94	0.0032
Mn	K	0.23	0.09	MnO	0.30	0.0013
Fe	K	5.72	2.16	Fe2O3	8.17	0.0337
Ni	K	0.13	0.05	NiO	0.16	0.0008
O	-	18.31	63.61			
合計		100.00	100.00		100.00	

試料名: Nisihirai-4

測定日時: 94年01月07日 10時56分52秒

分析日時: 94年01月07日 10時59分32秒



--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 125.39 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析値	重量%	原子量%	化合物	重量%	ドレシオ
Na	K	1.26	1.13	Na2O	1.70	0.0029
Mg	K	1.65	1.43	MgO	2.73	0.0053
Al	K	9.94	7.78	Al2O3	19.78	0.0384
Si	K	29.60	22.25	SiO2	63.32	0.1227
K	K	2.10	1.13	K2O	2.53	0.0108
Ca	K	0.94	0.49	CaO	1.31	0.0051
Ti	K	0.81	0.36	TiO2	1.35	0.0042
Mn	K	0.30	0.12	MnO	0.39	0.0016
Fe	K	5.52	2.09	Fe2O3	7.89	0.0255
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	17.89	63.20			
合計		100.00	100.00		100.00	

試料名: Nishihira-5

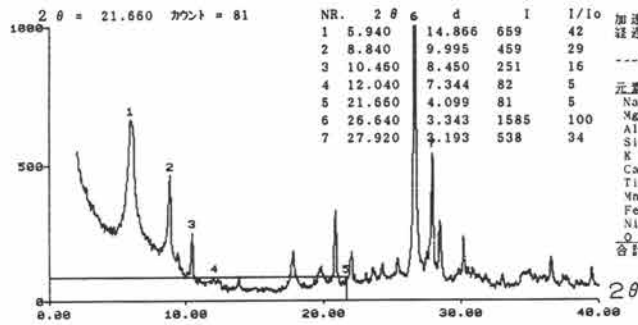
測定日時: 94年01月07日 11時04分35秒
分析日時: 94年01月07日 11時06分52秒

--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 125.95 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	0.64	0.60	Na2O	0.86	0.0013
Mg	K	2.24	2.00	MgO	3.71	0.0068
Al	K	11.49	9.25	Al2O3	21.71	0.0419
Si	K	24.77	19.15	SiO2	52.99	0.0967
K	K	2.86	1.59	K2O	3.45	0.0147
Ca	K	1.37	0.74	CaO	1.92	0.0074
Ti	K	1.08	0.49	TiO2	1.80	0.0056
Mn	K	0.18	0.07	MnO	0.23	0.0009
Fe	K	9.32	3.62	Fe2O3	13.32	0.0493
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	46.05	62.42			-----
合計		100.00	100.00		100.00	



試料名: Nishihira-6

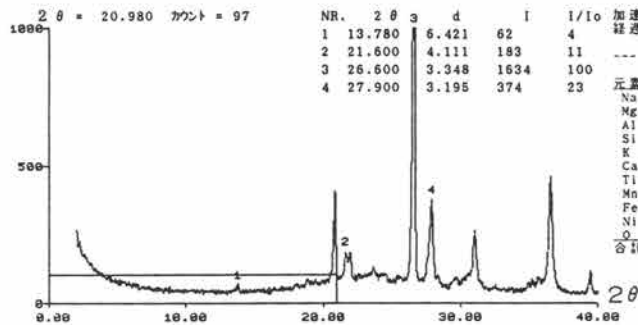
測定日時: 94年01月07日 11時09分12秒
分析日時: 94年01月07日 11時11分31秒

--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 127.98 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	1.61	1.50	Na2O	2.17	0.0039
Mg	K	1.94	1.71	MgO	3.21	0.0066
Al	K	11.36	9.04	Al2O3	21.46	0.0467
Si	K	26.06	19.92	SiO2	55.75	0.1146
K	K	2.26	1.24	K2O	2.72	0.0129
Ca	K	0.82	0.44	CaO	1.15	0.0050
Ti	K	0.64	0.29	TiO2	1.07	0.0037
Mn	K	0.30	0.12	MnO	0.38	0.0017
Fe	K	8.45	3.25	Fe2O3	12.09	0.0501
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	46.37	62.42			-----
合計		100.00	100.00		100.00	



試料名: Nishihira-7

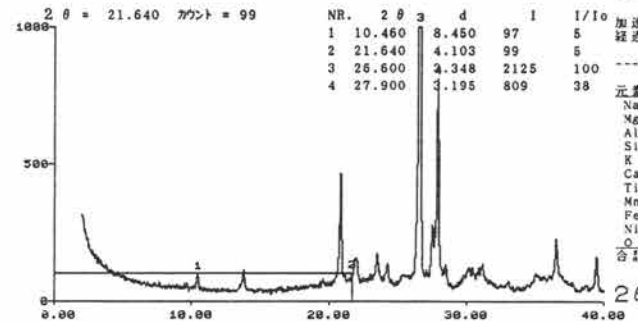
測定日時: 94年01月07日 11時14分44秒
分析日時: 94年01月07日 11時17分00秒

--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 125.19 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	0.69	0.65	Na2O	0.94	0.0015
Mg	K	1.82	1.61	MgO	3.02	0.0057
Al	K	11.19	8.92	Al2O3	21.14	0.0420
Si	K	26.51	20.29	SiO2	56.72	0.1062
K	K	2.11	1.16	K2O	2.55	0.0110
Ca	K	1.29	0.69	CaO	1.80	0.0071
Ti	K	1.10	0.49	TiO2	1.84	0.0058
Mn	K	0.06	0.02	MnO	0.07	0.0003
Fe	K	8.11	3.12	Fe2O3	11.59	0.0434
Ni	K	0.26	0.10	NiO	0.34	0.0014
O	-	46.85	62.95			-----
合計		100.00	100.00		100.00	



試料名: Nishihirai-8

測定日時: 94年01月07日 11時19分08秒

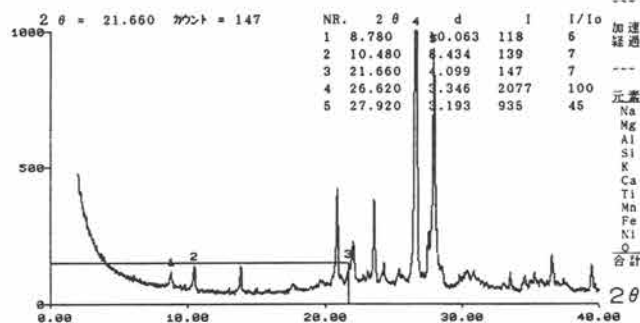
分析日時: 94年01月07日 11時21分56秒

--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 127.54 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	0.86	0.78	Na ₂ O	1.16	0.0022
Mg	K	1.25	1.08	MgO	2.08	0.0046
Al	K	13.13	10.22	Al ₂ O ₃	24.80	0.0579
Si	K	28.08	20.99	SiO ₂	60.03	0.1268
K	K	1.52	0.82	K ₂ O	1.83	0.0088
Ca	K	0.88	0.46	CaO	1.24	0.0054
Ti	K	0.89	0.39	TiO ₂	1.49	0.0052
Mn	K	0.21	0.08	MnO	0.28	0.0013
Fe	K	4.86	1.83	Fe ₂ O ₃	6.95	0.0291
Ni	K	0.11	0.04	NiO	0.15	0.0007
O	-	48.21	63.30			
合計		100.00	100.00		100.00	



試料名: Nishihirai-9

測定日時: 94年01月07日 11時26分36秒

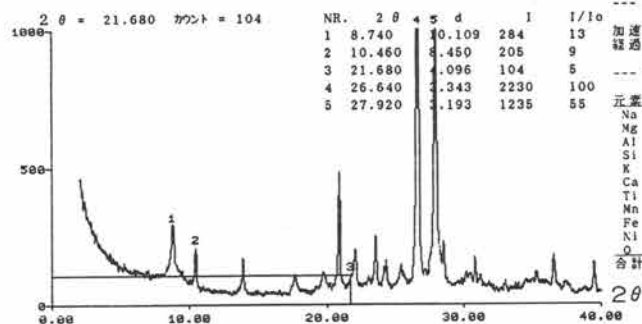
分析日時: 94年01月07日 11時29分01秒

--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 128.24 秒 有効時間 : 100.00 秒

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	1.02	0.94	Na ₂ O	1.38	0.0026
Mg	K	1.53	1.33	MgO	2.53	0.0055
Al	K	12.10	9.53	Al ₂ O ₃	22.87	0.0520
Si	K	27.20	20.58	SiO ₂	58.18	0.1225
K	K	1.94	1.05	K ₂ O	2.33	0.0112
Ca	K	1.00	0.53	CaO	1.40	0.0061
Ti	K	0.79	0.35	TiO ₂	1.31	0.0046
Mn	K	0.00	0.00	MnO	0.00	0.0000
Fe	K	7.00	2.66	Fe ₂ O ₃	10.00	0.0420
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	47.44	63.01			
合計		100.00	100.00		100.00	



試料名: Nishihirai-10

測定日時: 94年01月07日 11時32分50秒

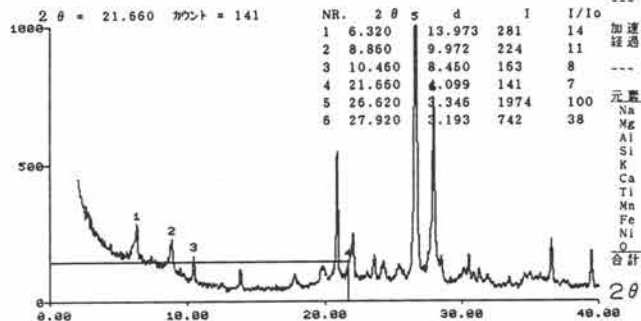
分析日時: 94年01月07日 11時35分40秒

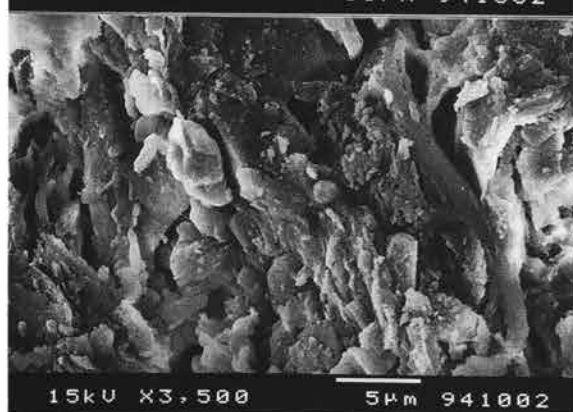
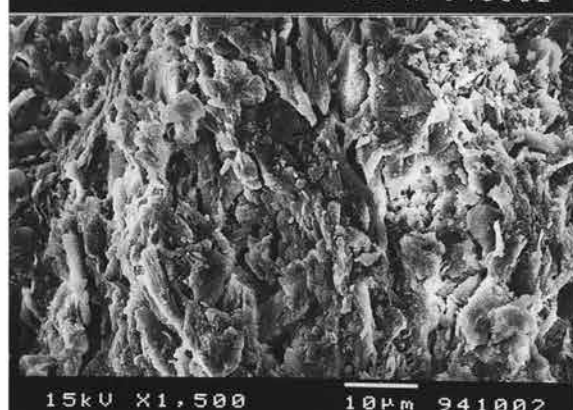
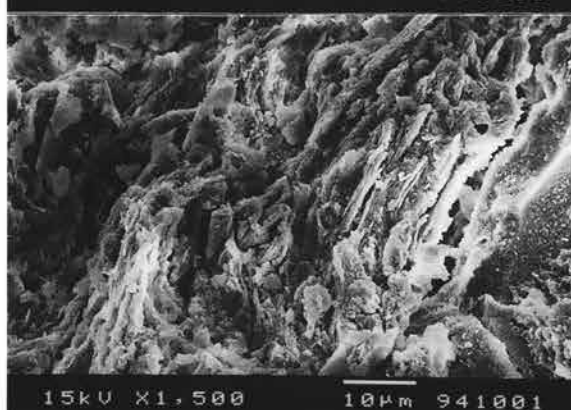
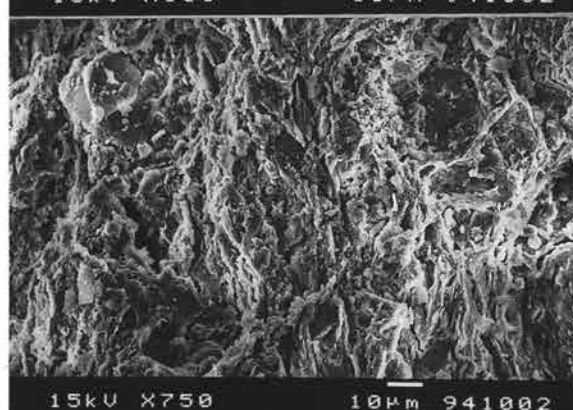
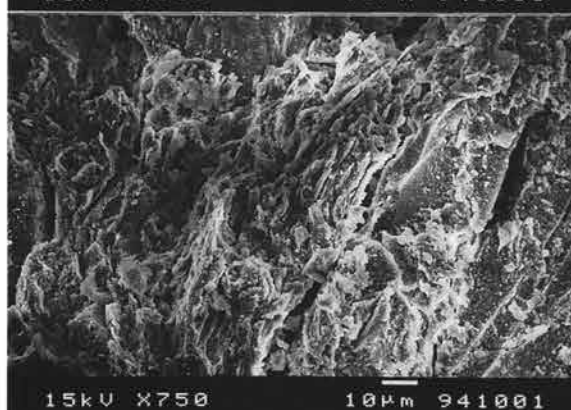
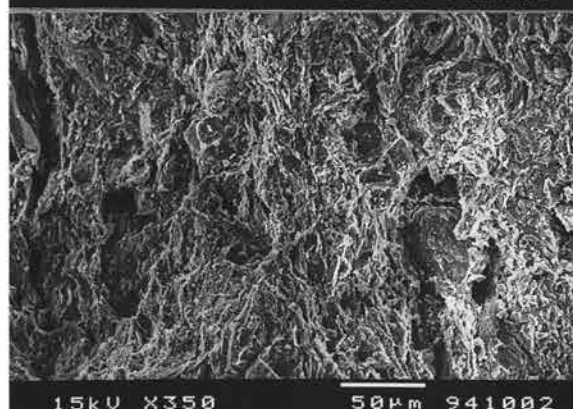
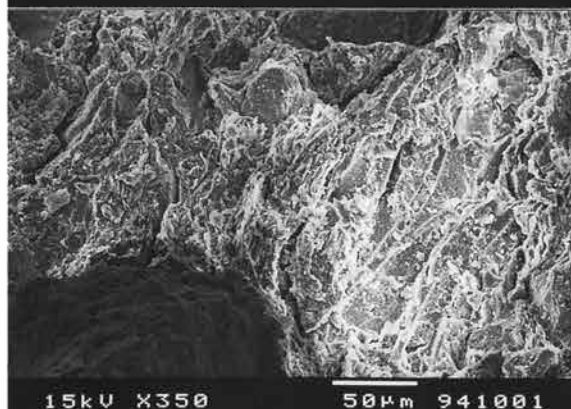
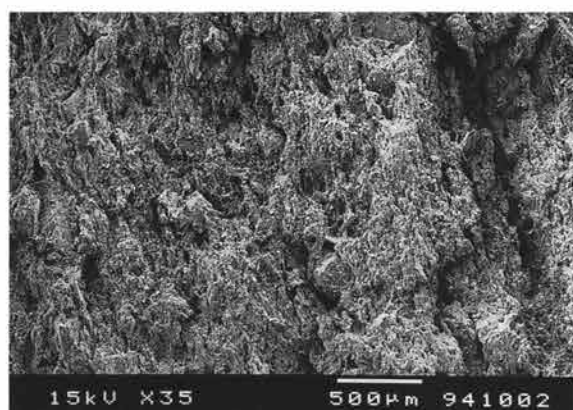
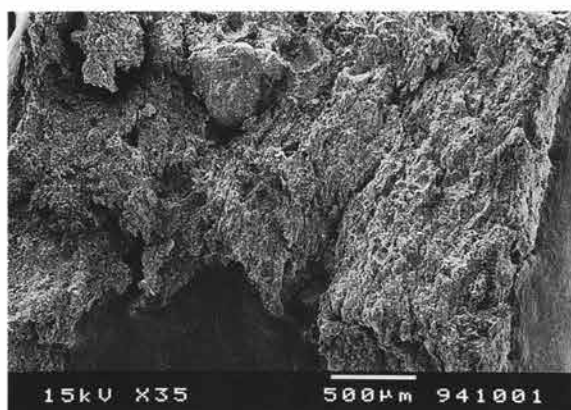
--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

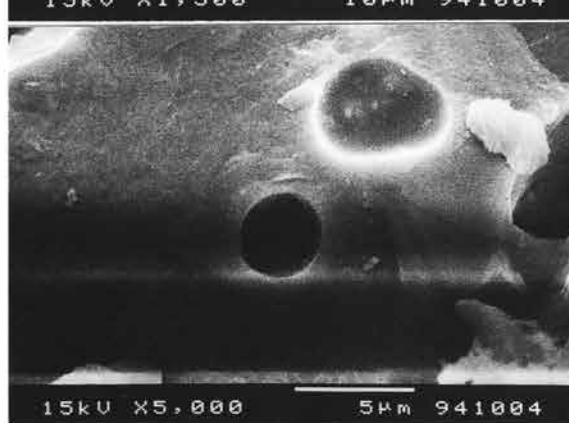
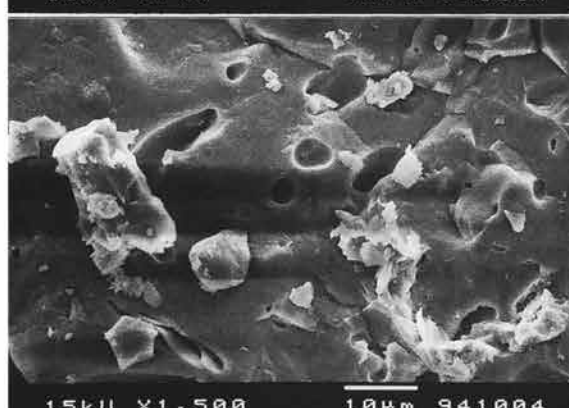
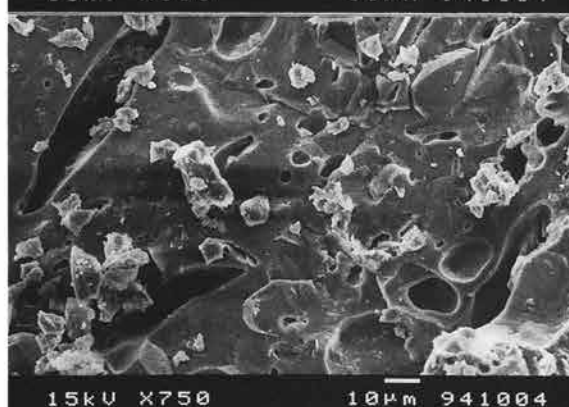
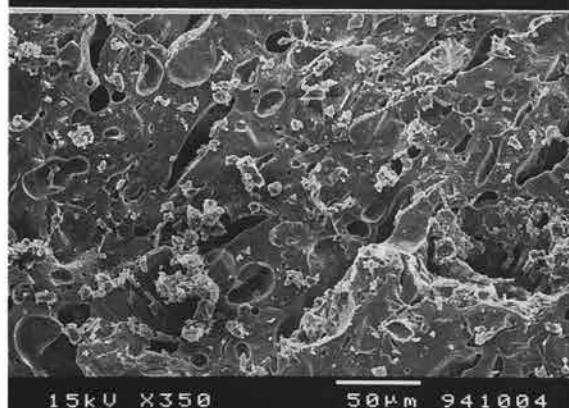
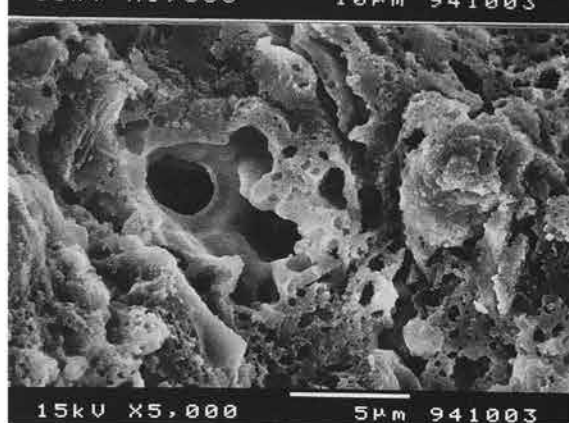
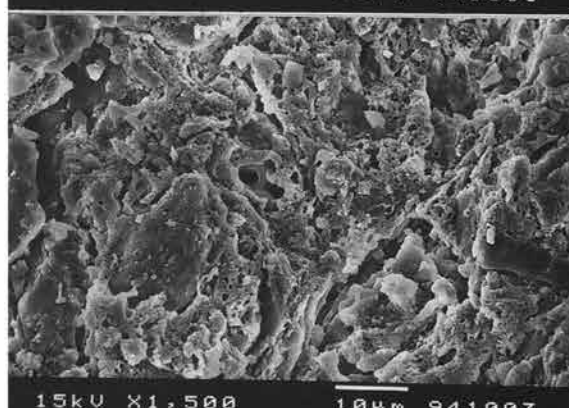
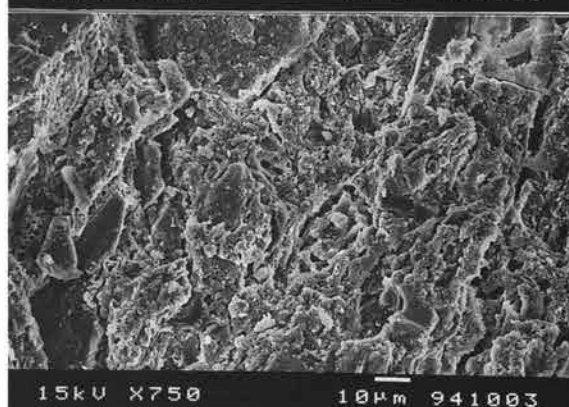
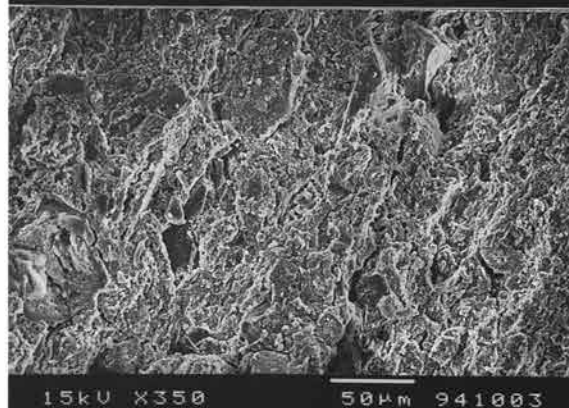
加速電圧 : 15.00 kV 取り出し角度 : 20.32 °
経過時間 : 129.85 秒 有効時間 : 100.00 秒

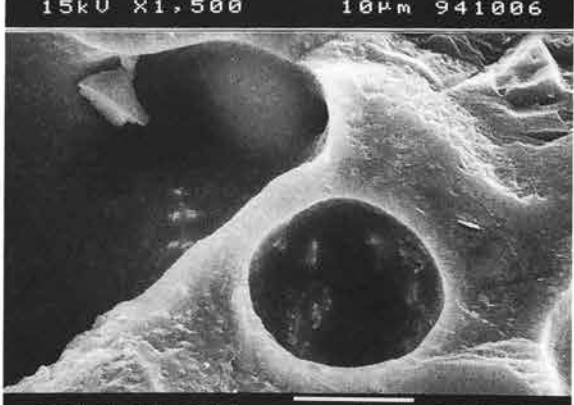
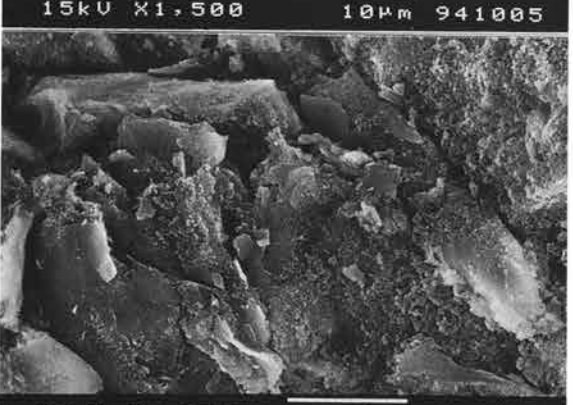
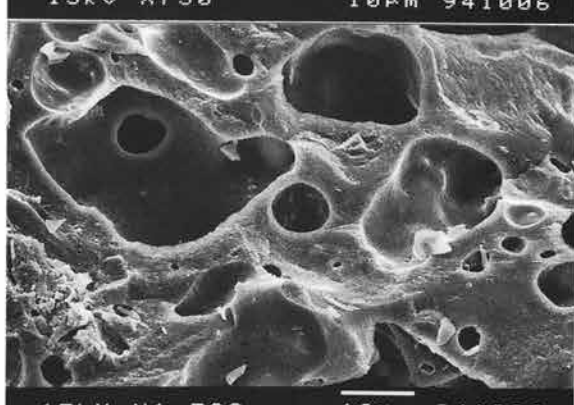
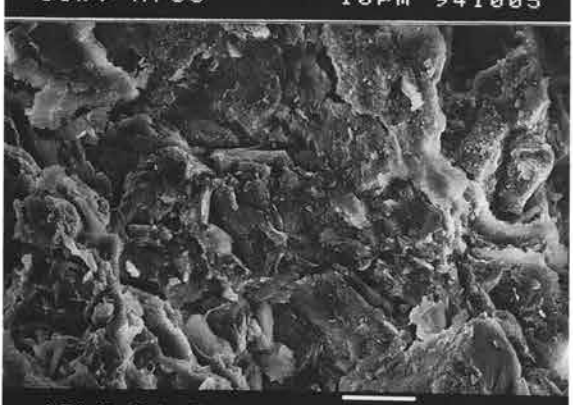
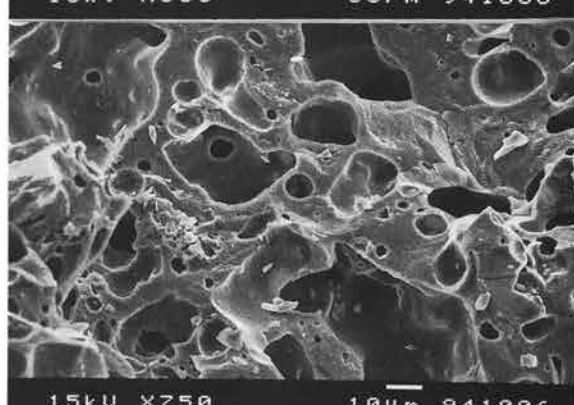
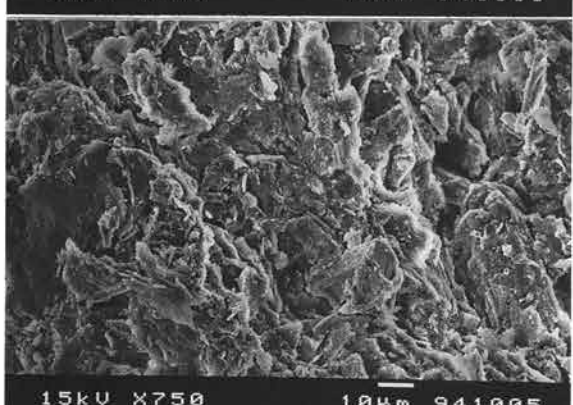
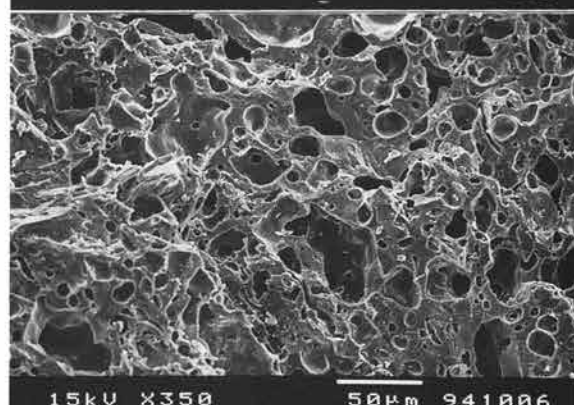
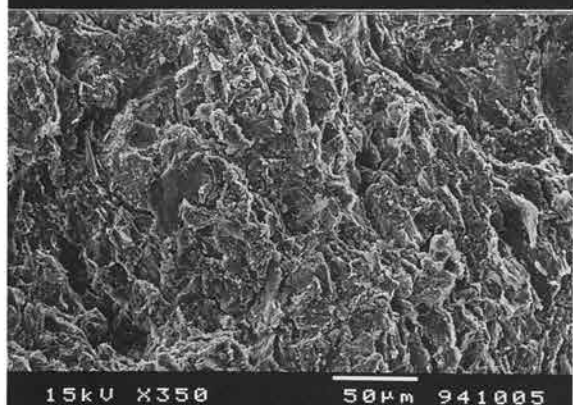
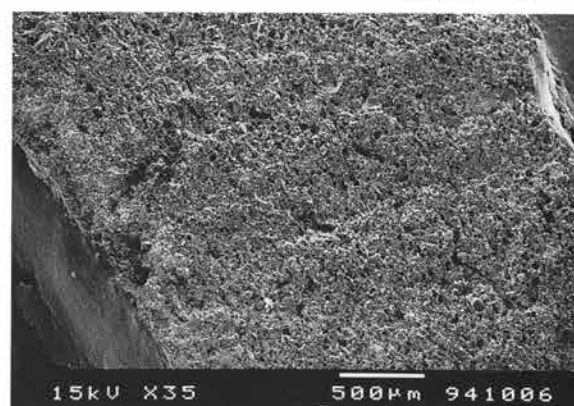
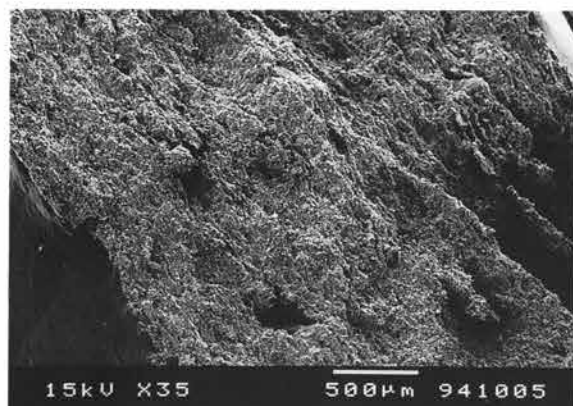
--- 分析 結果 ---

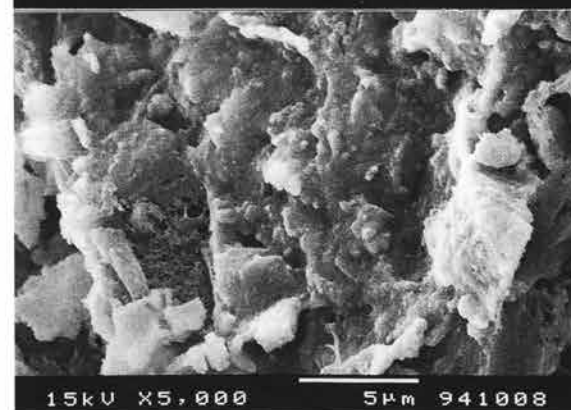
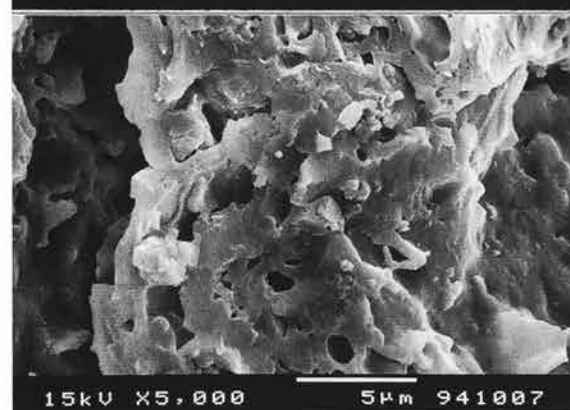
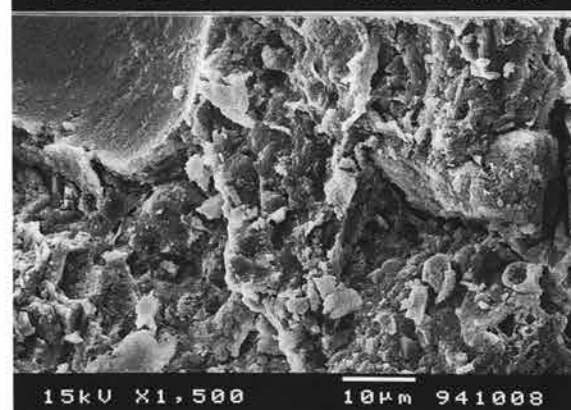
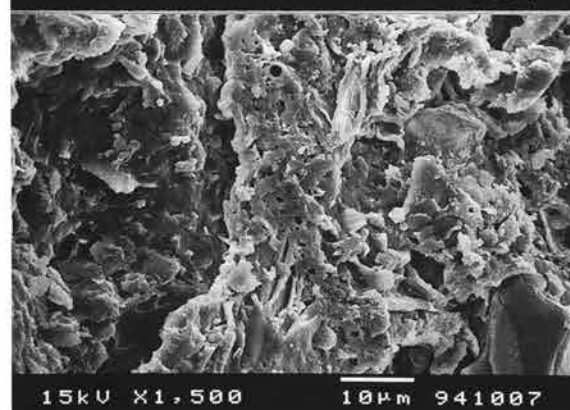
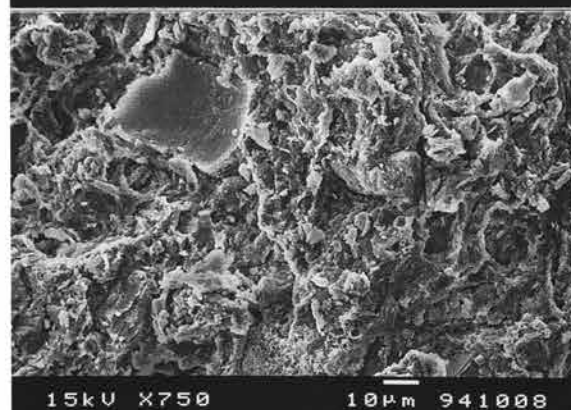
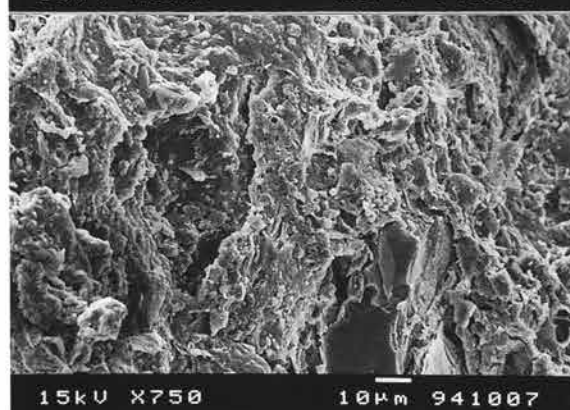
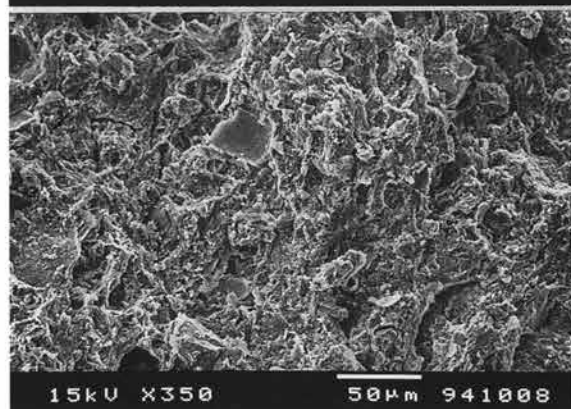
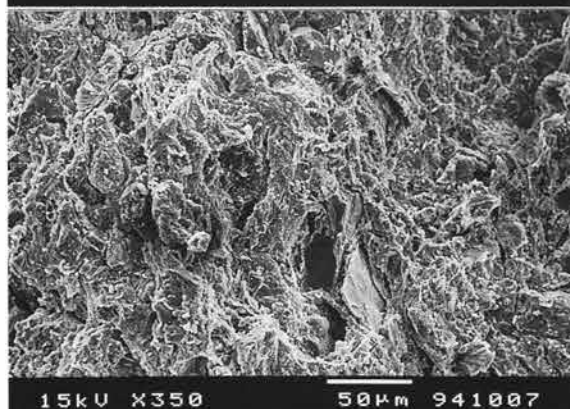
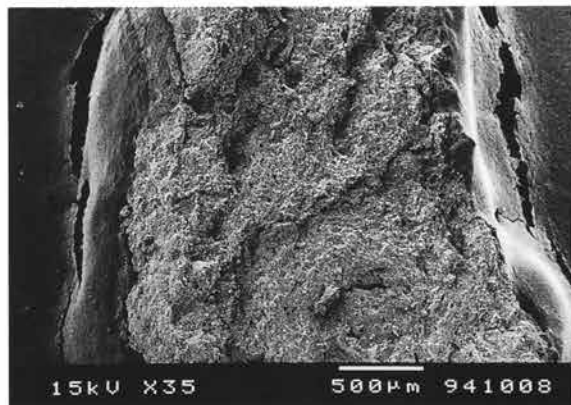
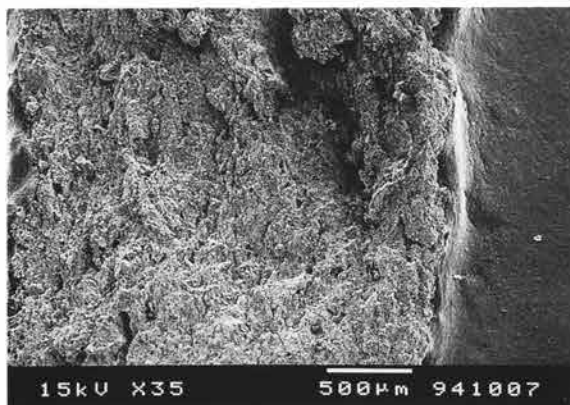
元素	分析線	重量%	原子量%	化合物	重量%	Kレシオ
Na	K	0.69	0.64	Na ₂ O	0.94	0.0018
Mg	K	1.65	1.43	MgO	2.73	0.0063
Al	K	11.27	8.81	Al ₂ O ₃	21.30	0.0511
Si	K	28.98	21.76	SiO ₂	61.99	0.1384
K	K	1.81	0.98	K ₂ O	2.18	0.0109
Ca	K	0.82	0.43	CaO	1.15	0.0052
Ti	K	0.59	0.26	TiO ₂	0.99	0.0026
Mn	K	0.00	0.00	MnO	0.00	0.0000
Fe	K	6.10	2.30	Fe ₂ O ₃	8.72	0.0381
Ni	K	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
O	-	48.08	63.39			
合計		100.00	100.00		100.00	

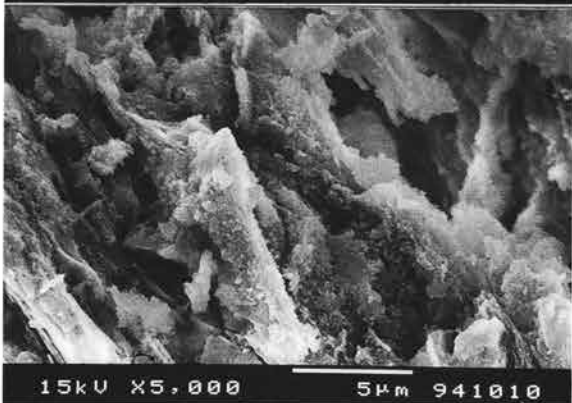
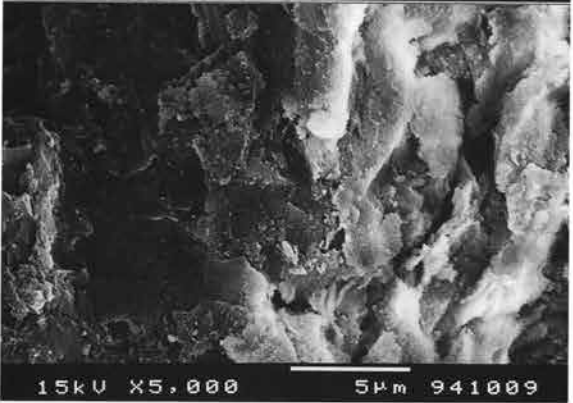
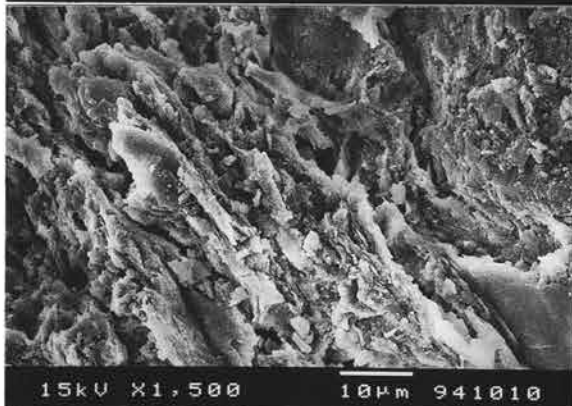
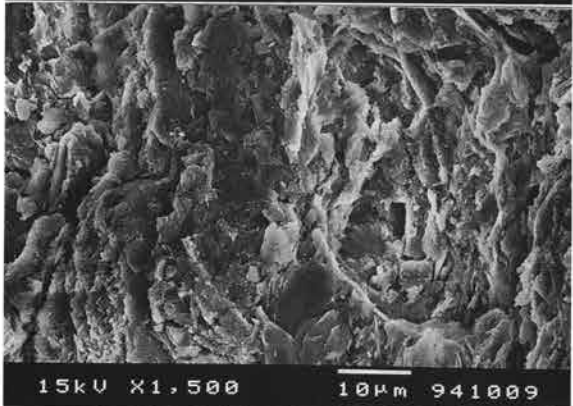
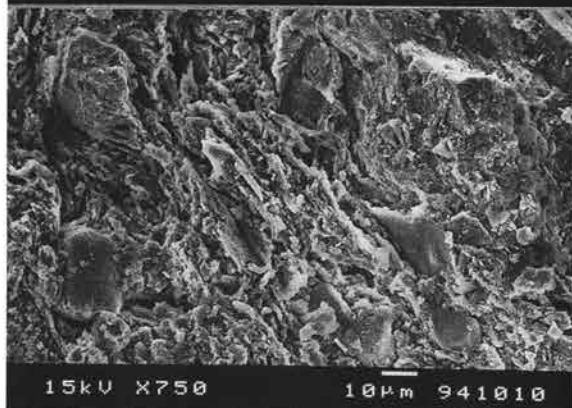
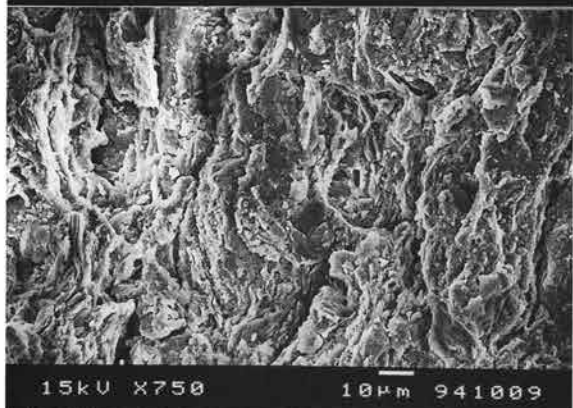
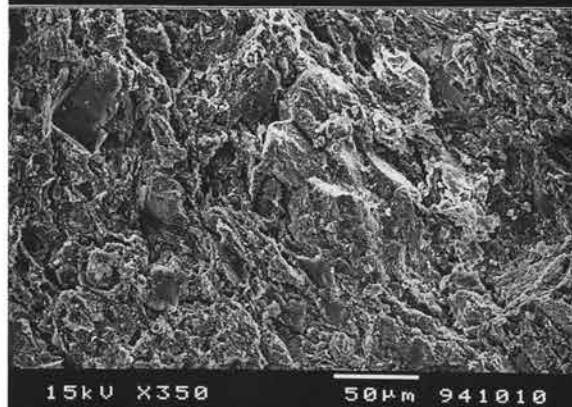
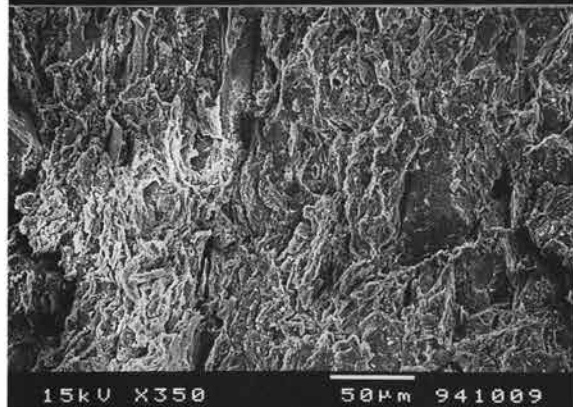
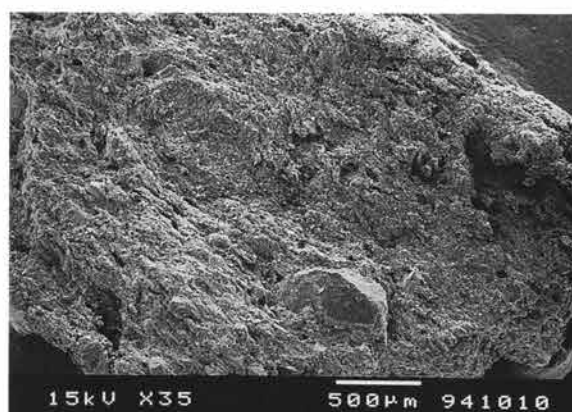
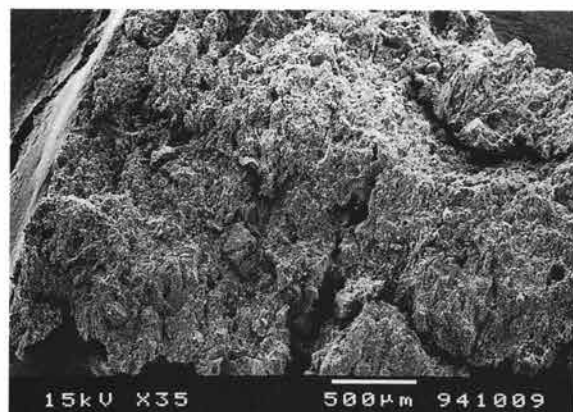














ま と め

1 県道神田・吉井停車場線道路改良工事に伴う一連の埋蔵文化財調査

県道神田・吉井停車場線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査では、飛石の砦跡、東平井塚間遺跡、東平井官正前遺跡、東平井土井下遺跡、西平井久保田代遺跡の発掘調査を行い、以上述べてきたような種々の調査成果を得たのである。しかし、試掘調査を含めた一連の調査は、ある意味で藤岡市平地部の西南に位置する東平井と西平井地区の過半を横断する大きなトレンチ調査であった。その所見の概要を述べると、大字東平井の字官正前の西半、同猿川の西半、同三目川原と大字西平井の字町下に遺構は確認されず、また発見できた遺構も概ね東平井地区の分布状況は西平井のそれに比べ薄い傾向が見られた。個々の遺構の記載は繰り返さないが、縄文時代の遺構は鮎川両岸に見られ、古墳時代後期から平安時代にかけては集落が東平井官正前遺跡の東半、東平井土井下遺跡の猿川地区東半と土井下地区の微高地、そして西平井久保田代遺跡に見られ、東平井土井下遺跡の土井下地区の低地部には平安時代末の水田も確認された。溝や道路を中心とする中・近世の遺構は各遺跡で調査したが、多くは現代に至る土地区画に合致するものであった。また、平井城の出城と考えられる飛石の砦の一部の調査も実施した。

2 平井城と平井城下について

さて、以上のように県道神田・吉井停車場線改良工事に伴う一連の調査の成果は種々あったが、当該地域が山内上杉氏の居城、平井城の城下に位置することから、以下、平井城及び平井城下に関する若干の考察を試みて本書のまとめとしたいと思う。

① 平井城の城域

平井城は鮎川の左岸、西平井と一部金井の集落に立地する城郭で、詰城は南に位置する平井金山城で

ある。前ページの写真に示したように平井城は東は鮎川の断崖、南は鮎川支流の谷地、西と北は荒神堀（以下、郭等の呼称は山崎⁽¹⁾《1978》による）等の堀で画され、本丸は東南角の断崖上にある。当初の遺構は本丸と西の二の丸、二の丸に南接する笹曲輪と考えられている。上杉顕定による改修で本丸の北に2本の堀を隔てて三の丸が設けられ、更にその北に總曲輪が設けられたと考えられている。更に三の丸の西にも郭（新曲輪）の存在が想定されている。

さて、平井金山城を描いた浅野文庫蔵『諸国古城の図』⁽²⁾によると南北2郭の『御屋敷』（平井城）の西に『縦八町（872m）程、横方向二町（218m）程』の南北に長い町並らしい区画が描かれている。町並の規模は西平井の集落全域より大きいため、距離に誤りがあると思われる。一方『御屋敷』については本丸とその北側2条の堀に挟まれた区画が描かれている可能性もあるが、二の丸の土塁などの遺構を無視したとは考えられないので二の丸と笹曲輪を表すものと判断される。町並の可能性を持つ区画には二の丸等に西接する南北走行の道路東沿いの南北168m（約92間）、東西幅34m（約19間）程の規模を持つ長方形区画群（写真一①）が考えられる。従来二の丸の北端から西に張り出す形に推定されていた新曲輪の西辺は、以上の点から80m程北に伸びてから西折し庚申堀南端に至ったものと推定される。尚この区画群は城外にあるが主要な郭に近く、短冊形ではない長方形のプランを持つことなどから上杉氏被官の屋敷地を示すのではないかと考えられるのである。

② 堰止めについて

平井城の特徴の一つとして鮎川に施された堰止がある。堰止は飛石の砦跡の小結でも述べたように総社長尾氏の築城法の特徴であるが、⁽³⁾『上州故城壘記』には「東に年魚川（鮎川）ありて、懸崖数仞河水を

堰留めて水を湛へし後三所あり」という記載がある。この堰止は字川破の西（写真—i）と「仕止め」の地名の残る県道神田・吉井停車場線平井橋の直ぐ南（写真—ii）の、何れも鮎川兩岸の河幅の狭くなる部分に想定されている。（山崎《1978》）

『故城壘記』の記事が正しければもう一カ所堰止があることになるが、その位置は想定される2カ所の堰止めと同様、川幅が狭まり且つ兩岸とも傾斜のきつい位置と考えられる。平井城の上・下流域を含め地形的に該当する箇所を検討したが、三の丸の中程と字川破北辺を結ぶ位置（写真—iii）が尤も適しているように思われる。尚、写真中のドットによる網掛け部分は堰止を高さ4匁（約6.3m）として現地形で堰止めた場合の氾濫の範囲である。

ところで、平井城の北及び西の堀への堰止敷設は堀幅が河川に比べ狭いことや、その効果があまり期待できないと考えられることから施されなかったものと思われるのである。

③ 追手について

金井北端と西平井を縦貫する道路は、南側では本丸と二の丸・笹曲輪間の堀の位置であり、或は三の丸と想定される新曲輪を画する堀の位置に当たる可能性もある。また、北半の惣郭では道路の両側に短冊形に近いプランの区画が見られる（写真—②）ので、惣郭の中心街路であったと想定される。

さて惣曲輪の北側は堀を挟んで追手になるが、そこは平井城の堀と平林沢、鮎川に挟まれた独立した区画で昭和初年頃までは上述の中心街路が堀付近でT字路となり、追手西端から吉井町多比良へ通じる道路が、東端南寄りには飛石砦跡の小結で述べた東平井側への道が出ていた。東平井へは昭和期には平井橋を通っているが、明治期には橋の北側に渡河点と推定される地点があった。（写真—ホ）。この渡河点は「仕止め」の堰止の下流、堰止に近い地点にあり、仮に下流に第3の堰止が存在したとしても付近で最も水量が少ない地点になるので、渡河点として適当であろう。追手のこの区画は平林沢の外側から

も見通せるが、東に傾斜するため、特に道路部分は平井城内（惣曲輪）や飛石の砦から見通しがきき、ある種、馬出的な機能を持った区画ではなかったかと推定されるのである。

④ 道路について

西平井久保田代遺跡等の小結で述べたように、中世に遡る可能性を持つ付近の道路には推定鎌倉街道（写真—イ・ロ）があり、このうち写真—イの道は位置的に平井城への通行を意識していたと思われる。南の三本木の集落から来ると、現在三名湖貯水池の在る丘陵を左手に見乍ら東平井の平地部に入って視野が開け、すぐに西側に平井城が見える地点に至る。

ここからは弧状ではあるが比較的スムーズに平井城追手の渡河点（写真—ホ）に通じる道（写真—ハ）が分岐している。この道は字猿川を除き、以西は官正前など9つの字境を通り、古くから東平井地区を区画した道路であったことが窺われる。また、この道沿いには長方形区画の並びが見られるところもあり、北に分岐する道路沿いにも東平井塚間遺跡や東平井官正前遺跡の小結で述べた方形区画の見られる箇所（写真—③・④）がある。

また、県道神田・吉井停車場線に殆ど重なる道路（写真—ニ）があり、道沿いに短冊形の区画（写真—⑤）が見られ、区画東半には「本宿」・「中宿」の地名が残る。この道は飛石の砦手前で南に鍵形に曲がり、飛石の砦に至っている。また写真—ニの道路から北に分岐し、推定鎌倉街道（写真—イ）の西に平行する道路があるが、その沿道の字「新町」にも短冊形の区画が認められる（写真—⑥）。

⑤ 城下町の可能性について

写真—⑤の区画の西寄り部分は区画が大きく長方形になり、特に写真—ニの道路の北側ではかなり大きな区画となる。尚、その東端の高源寺は天正14年（1586）建立、西端の円満寺は明治5年に現在地へ移っている。この写真—⑤の区画と写真—⑥の区画は航空写真で見ると、周辺の集落に比べて際立って

規格化されている。両者は昭和期の地籍図によると併せて115筆程に分筆されている。近世の主要道である中山道の、城下町を除く江戸末期の宿の軒数は坂本宿の162軒から新町宿の407軒(平均286軒)⁽⁵⁾であり、東平井のものが町並であるとすれば、その規模が小さくないことが分かる。

近世に於ける藤岡市付近の主要道は、中山道の脇往還である下仁田道とやはり信濃に抜ける十石街道である。前者はほぼ現在の国道254号線の位置を東平井の集落の北2.1km程を通過して吉井方面に、後者は東平井の集落の東2.7km程の地点を通過して神流川沿を鬼石方面に抜けている。両者は何れも宿場町に相当する藤岡市の旧市街地を通るが、その位置は東平井の集落から直線距離で4km程と比較的近い。従って東平井の集落に宿場に相当する機能の必要性は考えられないのである。

⑥ 小 結

以上の点から、写真一⑤・⑥に示した区画は近世に入って作られたものではなく、平井城の城下町としての市街の区画を表すものと思慮されるのである。当初、平井の城下は写真一ハの道路を軸に生まれ、城下の拡大と機能整備に伴い写真一ニの道路と写真一⑤の区画を普請し、後に写真⑥の区画を拡張したものと推定される。東平井官正前遺跡の1号井戸の遺物投棄は、こうした城下整備の流れの中で行われたものと推測される。また写真一⑤の区画のプランが東半に対し西半、特に西北部で大きくなるのは、平井城に近い側に家臣等を居住させたからではないかと考えられ、飛石の砦もこうした中で城下の押さえとなっていたのではないかとと思われるのである。

註

- (1) 山崎 一 『群馬古城址の研究(下巻)』 1978 86～94頁(解説)、317頁(付図)
- (2) 群馬県『群馬県史 通史編3 中世』 1989 550頁
- (3) 群馬県文化事業振興会 『県史料集別巻(1) 古城誌篇』 1970 146頁
- (4) 多野郡教育会 『多野郡誌』 1910 文献出版社による復刻版(1978)の108頁

(5) 群馬県『群馬県史 通史編5 近世2』 1991* 669頁

(6) (5)に同じ。774～747頁

3 終わりに

東平井地区では圃場整備に伴うより広域な「F12・13・14藤岡平地区遺跡群」の発掘調査が藤岡市教育委員会によって行われている。今後その成果が報告されれば当該地区のより適確な状況が明らかになるだろうが、本書が東平井・西平井地区の埋蔵文化財調査の目安となれば幸いである。

また、諸般の事情から報告書に掲載できなかったが、西平井久保田代遺跡の3区—8・11号住居等の建築材などの炭化材を樹種鑑定に付している。現在中間報告として、6世紀段階に付近が照葉樹林帯で覆われていた可能性が出て来ている。今後、当該報告書は公開できる状態で保管することとなる。

最後になるが、関連5遺跡の発掘調査には関連機関の様々な御支援があり、発掘作業員の猛暑或いは寒風を推しての努力によって完遂されたのである。しかし、例えば西平井久保田代遺跡の調査では夏季にも拘わらず不手際から水道の敷設が遅れ苦慮していた時に平井和午氏から無償で飲料水の提供があり、炎天下休憩していた我々に平井彦三郎氏はガレージを休憩所として解放して下さい。どれだけ助かったか分からない。こうした地元の方々の様々な援助があつて調査を円滑に進めることができたことを記し、感謝の意を述べて本報告書を結びたいと思う。

本書執筆に関する引用・参考文献

多野郡教育会 『多野郡誌』 1910 (文献出版社による復刻版(1978))

藤岡町 『藤岡町史』 1957

群馬県文化事業振興会 『県史料集別巻(1) 古城誌篇』 1970

福井県教育委員会 『特別史跡 一乗谷朝倉遺跡 VII』 1976

多野藤岡地方誌編集委員会 『多野藤岡地方誌』 1976

山崎 一 『群馬古城址の研究(下巻)』 1978

群馬県教育委員会 『東平井古墳群』 1980

群馬県文化事業振興会 『上野国郡村誌 7 多野郡』 1981

藤岡市教育委員会 『A1堀ノ内遺跡群』 1982

群馬県教育委員会 『歴史の道調査報告書 十石街道』 1982

国史大辞典編纂委員会 『国史大辞典』 吉川弘文館 1983

藤岡市教育遺跡会 『藤岡市遺跡詳細分布調査(II) 美土里地区』 1983

群馬県教育委員会 『歴史の道調査報告書 鎌倉街道』 1983

ま と め

- 藤岡市教育遺跡会 『藤岡市遺跡詳細分布調査（Ⅲ）平井地区』
1984
- 藤岡市教育委員会 『B 4 株木遺跡』 1984
- 諸橋徹次著 鎌田正・米山寅太郎 改定 『大漢和辞典』 大修館
書店 1984 第3巻
- 群馬県 『群馬県史 資料編 7 中世 3』 1986
- 坂口 一、三浦京子 『奈良・平安時代の土器の編年』 『群馬県史
研究24』 1986
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域
（2）』 1987
- 吉井町教育委員会 『東沢遺跡・折茂遺跡一図版編』 1987
- 群馬県教育委員会 『群馬県中世城館跡』 1988
- 角川地名大辞典編纂委員会 『角川地名大辞典 10 群馬県』
1988
- 群馬県 『群馬県史 通史編 3 中世』 1989
- 坂井隆 『東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特
徴』 『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要—6—』 1989
- 藤岡市教育委員会 『F12藤岡平遺跡群Ⅰ』 1990
- 群馬県 『群馬県史 通史編 5 近世 2』 1991
- 藤岡市教育委員会 『F14藤岡平遺跡群Ⅱ』 1992
- 藤岡市史編纂委員会 『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』
1993
- 藤岡市教育委員会 『F15藤岡平遺跡群Ⅲ』 1993

飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡 県道神田・吉井停車場線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡

平成6年3月20日 印刷

平成6年3月25日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橘村大字下箱田784-2

電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橘村大字下箱田784-2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社